

ISSN 2435-1970

語学研究所論集

第25号

2020年

東京外国語大学
語学研究所

ISSN 2435-1970

語学研究所論集

第25号

2020年

東京外国語大学
語学研究所

語学研究所論集

第25号

2020

論文

- 自発発話音声から見た日本語音調の動態
佐藤大和 1
- アラビア語における名詞の内容節：
日本語との対照研究に向けて
モハンマド・ファトヒー 19

研究ノート

- Acquisition of L2 English intonation by Japanese learners
Hiroko Saito 41
- モンゴル語文法研究ノート(1)
風間伸次郎 47
- 代名詞代用・呼びかけ表現研究の現状：
タイ語，ビルマ語，マレー語，インドネシア語，
ジャワ語，朝鮮語
野元裕樹，スニサー ウィッタヤーパンヤーノン(齋藤)，
岡野賢二，トゥザ ライン，南 潤珍，
スリ・ブディ・レスタリ 63

翻訳

- 談話における情報構造：語用論の統合形式理論をめざして
クレイグ・ロバーツ著／大久保 弥，野元裕樹 共訳 79

特集補遺：データ

- 特集補遺：まえがき
風間伸次郎 135

英語

- 英語：特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」
「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾
複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定、形
容詞と連体修飾複文」
風間伸次郎 139

ドイツ語

- ドイツ語における他動性
成田 節 173

<u>ポーランド語</u>			
ポーランド語におけるモダリティ		森田耕司	189
<u>チェコ語</u>			
情報構造と名詞述語文：チェコ語		浅岡健志朗	197
<u>ウルドゥー語</u>			
ウルドゥー語の情報標示の諸要素		萬宮健策	201
<u>朝鮮語</u>			
朝鮮語・韓国語の受動表現		長渡陽一	207
<u>ダグール語</u>			
ダグール語のAspect、モダリティ、ヴォイス		山田洋平, 風間伸次郎	215
<u>タイ語</u>			
タイ語のモダリティ		スニサー ウィッタヤーパンヤーノン(齋藤)	239
<u>インドネシア語</u>			
インドネシア語のヴォイスとその周辺		佐近優太	253
インドネシア語の他動性		佐近優太	265
インドネシア語の連用修飾的複文		佐近優太	281
<u>タガログ語</u>			
タガログ語の他動性		林 真衣	293
タガログ語の連用修飾的複文		林 真衣	301
フィリピン語の情報構造と名詞述語構文		細羽洸希	309
フィリピン語の情報標示の諸要素		細羽洸希	313
<u>フィジー語</u>			
ヴォイスとその周辺：フィジー語		岡本 進	319
所有・存在表現：フィジー語		岡本 進	325
<u>グイ語</u>			
グイ語資料：受動表現		加藤幹治, 大野仁美, 中川 裕	335
グイ語資料：Aspect		加藤幹治, 大野仁美, 中川 裕	343

グイ語資料：モダリティ	加藤幹治, 大野仁美, 中川 裕	353
グイ語資料：ヴォイスとその周辺	加藤幹治, 大野仁美, 中川 裕	361
グイ語資料：所有・存在表現	木村公彦, 中川 裕, 大野仁美	371
グイ語資料：他動性	木村公彦, 中川 裕, 大野仁美	389
グイ語資料：[連用修飾的]複文	木村公彦, 中川 裕, 大野仁美	399
グイ語資料：情報標示の諸要素	木村公彦, 中川 裕, 大野仁美	409
<u>パピアメント語</u>		
パピアメント語におけるヴォイスとその周辺	パトリシオ・バレラ・アルミロン	419
パピアメント語における他動性	パトリシオ・バレラ・アルミロン	429

執筆者一覧

Journal of the Institute of Language Research

No. 25

2020

Articles

- Dynamic tone characteristics of Japanese observed
in spontaneous utterances
Hirokazu Sato 1
- Noun content clause in Arabic:
Towards a contrastive study with Japanese
Mohamed Fathy 19

Notes

- Acquisition of L2 English intonation by Japanese learners
Hiroko Saito 41
- Some notes on Mongolian grammar (1)
Shinjiro Kazama 47
- Current state of studies on pronoun substitutes and address terms:
Thai, Burmese, Malay, Indonesian, Javanese and Korean
Hiroki Nomoto, Sunisa Wittayapanyanon (Saito),
Kenji Okano, Thuzar Hlaing,
Yunjin Nam, Sri Budi Lestari 63

Translation

- Craige Roberts
Information structure in discourse: Towards an integrated formal theory of pragmatics
translated by Wataru Okubo, Hiroki Nomoto 79

Special Issue: Supplement Data

- Special Issue: Foreword
Shinjiro Kazama 135

English

- English: 'Passive expression', 'Aspect', 'Modality', 'Voice and related expressions',
'Expressions of possession and existence', 'Transitivity', 'Complex sentences
of adverbial modification', 'Information structure and nominal predicate sentences',
'Markers of information structure' and 'Negation, adjectives, and complex
sentences of adnominal modification'
Shinjiro Kazama 139

German

- Transitivity in German
Takashi Narita 173

<u>Polish</u>			
Modality in Polish		Koji Morita	189
<u>Czech</u>			
Information structure and nominal predicate sentences: Czech		Kenshiro Asaoka	197
<u>Urdu</u>			
Markers of informational structure of Urdu		Kensaku Mamiya	201
<u>Korean</u>			
Passive expression in Korean		Youichi Nagato	207
<u>Dagur</u>			
Aspect, modality, and voice of Dagur		Yohei Yamada, Shinjiro Kazama	215
<u>Thai</u>			
Modality in Thai		Sunisa Wittayapanyanon (Saito)	239
<u>Indonesian</u>			
Voice and related matters in Indonesian		Yuta Sakon	253
Transitivity in Indonesian		Yuta Sakon	265
Clause combining in Indonesian		Yuta Sakon	281
<u>Tagalog</u>			
Transitivity in Tagalog		Mai Hayashi	293
Clause combining in Tagalog		Mai Hayashi	301
Information structure and nominal predicate sentences in Tagalog		Hiroki Hosoba	309
Markers of informational structure in Tagalog		Hiroki Hosoba	313
<u>Fijian</u>			
Voice and related matters: Fijian		Susumu Okamoto	319
Possessive and existential expressions: Fijian		Susumu Okamoto	325
<u>G ui</u>			
G ui data: passive		Kanji Kato, Hitomi Ono, Hiroshi Nakagawa	335
G ui data: aspect		Kanji Kato, Hitomi Ono, Hiroshi Nakagawa	343

G ui data: modality	Kanji Kato, Hitomi Ono, Hirosi Nakagawa	353
G ui data: voice	Kanji Kato, Hitomi Ono, Hirosi Nakagawa	361
G ui data: possessive and existential expressions	Kimihiko Kimura, Hirosi Nakagawa, Hitomi Ono	371
G ui data: transitivity	Kimihiko Kimura, Hirosi Nakagawa, Hitomi Ono	389
G ui data: subordination (adverbial clause)	Kimihiko Kimura, Hirosi Nakagawa, Hitomi Ono	399
G ui data: information structure markers	Kimihiko Kimura, Hirosi Nakagawa, Hitomi Ono	409
<u>Papiamentu</u>		
Voice and related expressions in Papiamentu	Patricio Varela Almiron	419
Transitivity in Papiamentu	Patricio Varela Almiron	429

List of Authors

<論文>

自発発話音声から見た日本語音調の動態

Dynamic tone characteristics of Japanese observed in spontaneous utterances

佐藤 大和
Hirokazu Sato

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本論文は、自由に発話された音声資料の音調分析を行い、自発発話における日本語音声の句音調の特性、また規範的な日本語アクセントの型が連続音声の中でどのような動的形態として実現されているか等について分析した結果の報告である。分析資料は、「日本語話し言葉コーパス(CSJ)」から選択された東京方言話者3名による独話資料である。自発発話における句音調には、アクセント句が際立つように発話された卓立型音調様式と単調な発話の非卓立型発話様式があり、必ずしも朗読音声に見られるようなピッチの漸近的下降特性が見られないことを示す。また、アクセント句の音調に関しては、アクセントが知覚される拍(アクセント拍)における“上昇”“下降”“平坦”等の音調形式、これらアクセント音調制御と調音制御の関連、アクセント位置が後続拍にくる「遅下がり」現象の成因等について記述する。これらの分析結果から、アクセント句の音調構造モデルを議論する。

Abstract: This paper describes several analyzed results of phrase intonation characteristics and tonal dynamics of Japanese accents in spontaneously uttered Japanese. Speech materials for the analysis are monologue talks by three speakers of Tokyo dialect accent selected from “The Corpus of Spontaneous Japanese”. Two intonation styles observed in spontaneous utterances are firstly shown. One is prominent-type intonation including saliently uttered accentual phrases, and the other is monotonously spoken non-prominent-type intonation. The asymptotically declined intonation, which is typical in read speech of arranged text, is little observed in both intonation styles. Secondly, the paper reports dynamic tone forms of accented syllables such as “rising”, “falling” and “level” tones, the relationship between tonal control and articulatory timing, and causes of the delayed pitch-falling phenomena that the accent position shifts from an accented syllable onto a succeeding syllable. And moreover, a structural model of pitch frequency contour in the accentual phrase of Japanese is discussed.

キーワード: 自発発話, 日本語アクセント, 音調動態, 遅下がり, 句音調

Keywords: Spontaneous utterance, Japanese accent, Dynamic tone form, Delayed pitch falling, Phrase intonation

1. はじめに

日本語(共通語)のアクセントの型は、単語を構成する拍の「高」「低」の配置、もしくは音調が「高」から「低」へ変化する際の「高」の拍の位置(アクセント核)によって記述される。これらの型は、拍を意識した比較的丁寧な発音もしくはその内省によって把握される。一方、実際の発話における音調の動的特性を観測すると、こうした規範的なアクセントの高低の型がそのまま音調特性上で実現されているわけではなく、アクセントの「遅下がり」現象(杉藤1980)のように、アクセントが認知される拍と音響特性上で観測されるアクセント位置との間に乖離があることも知られている。この研究は、日本語アクセントの型が、実際の連続音声のなかでどのような動態形式として実現されているか、また逆に、特定のアクセント型をもたらす音調の動的特徴は何かを明らかにすることを目的としている。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

また一方、アクセントやイントネーションなどを担う言語の超分節的特徴あるいは韻律的特徴は、主に音節、語、句等の発話音声の音調特性（ピッチ周波数の時間特性）の観点から研究が行われてきたが、日本語をはじめとしてこれまでの研究は、研究目的に合致するように選択・構成された語や文のリストに基づいて発話された音声資料によってなされてきたように思われる。つまり「テキストの読み上げ音声」や「指示に基づく発話音声」の分析が主体であり、日常の言語生活における自発的かつ自由に発話された音声の音調特性の研究は不十分であった。本論は、日本語の音調特性を自発発話という発話様式上から明らかにすることも一つの目的であるが、特に日本語アクセントに関して、発話の仕方を規定しない自由な発話の方がより多様で顕著な音調動態形式をもたらすのではないかと考え、自発発話音声によってアクセントの音調実現形態を探ることとした。また、複数のアクセントを含み音調的なまとまりのある発話単位についても、自発発話音声特有のイントネーション様式のあることを見出したので併せて報告する。

2. 分析資料と分析方法

(1) 音声資料

分析資料として、国立国語研究所「日本語話し言葉コーパス(CSJ)」の中の東京方言話者3名の独話資料を用いた。これらは、女性2名：話者：FA, FB, 男性1名：話者：MAによる模擬講演音声であり、祖母の思い出、犬の話、趣味の映画などについて自由に語る内容である。各人7～10分程度の時間長の音声である。

これらの音声のピッチ周波数(F0)とともに、各話者の発話段落末の最低ピッチ周波数を基準値とするSemitone(ST)を求め、F0とSTの双方から音調特性と音韻区分、アクセント部分、音調句区分等との関係を分析した。Semitoneは、話者ごとの音域の違いを正規化して比較できる利点があり、本論文ではSTの分析結果を主に示す。Semitoneは以下の式で求められる。

$$\text{Semitone (ST)} = 12 * \log_2 (F0/F0b)$$

ここで、F0bは各話者の発話段落末の基底ピッチ周波数であり、発話全体の音調特性を観測して決められた。F0bの値は、女性話者FAでは135 Hz、話者FBでは140 Hz、男性話者MAでは80 Hzとした。Semitoneは、1オクターブの音域を12段階で表現するスケールとなっており、各発話者ともピッチの変動範囲はおおよそ2オクターブ、すなわち24 ST程度である。

アクセントに関しては、音声データの聞き取りによってアクセント型の判断を行うとともに、ピッチ周波数特性の形に基づいてアクセント位置を定めた。聞き取りによってアクセントがあると定められた拍を「アクセント拍」、音響特性（ピッチ周波数）から定められたアクセントの時間軸上の位置を「アクセント位置」、アクセント句の高さのピーク値を「アクセント句のプロミネンス」と呼ぶことにする。アクセント位置は必ずしもアクセント拍上にはなく、特にアクセント位置がアクセント拍の後続拍上にくる現象は、いわゆるアクセントの「遅下がり」である。

アクセント位置は、CJSのドキュメント（五十嵐・菊池・前川 2006）の記載に準じており、アクセント拍とこれに後続する拍のピッチ周波数パターンに基づいて以下の手法で定められた。

- (a) 上昇ののち下降するピッチ特性の場合はそのピーク時点
- (b) 平坦もしくは緩やかな変化から急峻なピッチ下降がある場合は下降の開始点
- (c) ピッチが下降する特性のみの場合はその開始時点

(2) 分析の音声区分

分析資料の独話音声は、比較的長いポーズで区切られた発話段落 (Utterance Group) から構成されるが、その段落をまず発話単位 (Utterance Unit: UU) の系列として区分化する。UU は、発話連続を構成するまとまりのある発話区分であって、その音声上の区分設定としては、一定長のポーズ、句末における上昇や上昇・下降の境界音調の存在、フィラーの存在、句末母音の引き延ばし等を参照し、さらに一定の意味的まとまりも考慮して決められた。ひとつの UU には、1 から 4 程度のアクセント句が含まれる。自発発話においては、言いよどみ、発話の未完やそれに続く次への展開などが多く、書き言葉における文法的な句や文の境界のように必ずしも明確に区分化されるものではないが、表現と伝達のため一定の発話のまとまりというものは認められる。こうした発話単位の音調特性を自発発話の「句音調」と呼ぶことにする。話者 FA と MA の場合の、発話段落の発話単位への区分化の例を以下に示す。

話者 FA : ((アノ) はフィラー)

(であたしはもう) UU1, (大きくなるまで) UU2, (というか本当に大人になるまで幸いなことに) UU3, (身近な人との) UU4, ((アノ) 別れというものが無くて) UU5

話者 MA :

(年齢的にも) UU1, (みんな映画をちょこちょこ見だす年齢だと例えば) UU2, (言えるんですけども) UU3

発話単位 UU は、さらに複数のアクセント句から構成される。通常のアクセント句の定義では、たかだか 1 個のアクセントを有する音声単位をいうが、アクセントのある語に付属語や形式名詞などが付随して、これら要素のアクセントも音調上に現れる場合がある。このような副次的アクセントが付いて複数アクセントからなる句もここではアクセント句と呼ぶことにする。例えば、上記の話者 FA の発話単位 UU2 において、「大きくなるまで」(o]okikuna]rumade)のように二つのアクセントで発話される場合があり、このような場合も一つのアクセント句とした。

3. 句音調の特性

これまでのイントネーションパタンの研究では、句または文全体に渡ってピッチ周波数が徐々に降下する特性のフレーズ成分 (基底成分等とも言われる) 上に、アクセントを担う語や文節の音調成分 (アクセント成分) が重畳するモデルで記述されてきた。しかし、このようなイントネーションの記述は、朗読など「紙に書かれたテキストを読む」音声 (Read speech) の分析による影響があるのではないかと考えている。自発発話音声の句音調においては、こうした漸次的にピッチが下降する特性は必ずしも見られない (佐藤 2018A)。図 1 図 2 に、男性話者 : MA と女性話者 : FA の句音調の一例を示す。図中、母音、撥音部のピッチは 10 msec 毎の○印で、子音のうち接近音、鼻子音等はグレーの塗りつぶしで示した。発話内容を示す母音・子音記号中の記号] はアクセント記号であり、図 2 中の記号 [はアクセントではなく句内の現れる上昇音調を示す。

二つの図が示すように、自発発話においてはアクセントのある音調区分ごとにピッチの上昇→アクセント核近傍でのピーク→安定な終結部に向けての下降、で示されるような (上昇-下降) パタンの連続するケースが多く観測された。朗読等の音声ではイントネーションを制御しつつ、複数のアクセント句から成る比較的長い区分をまとめて発話するのに対して、自発発話では、短い音声区分毎に発話が完成され、その区分の連続によって発話単位が構成されているように見受けられる。図 1 の話者 MA の場合、フィラー的発話「そう」と発話単位末の上昇境界音調の要素「ものね」を除くと、「みんなに」「夢を与

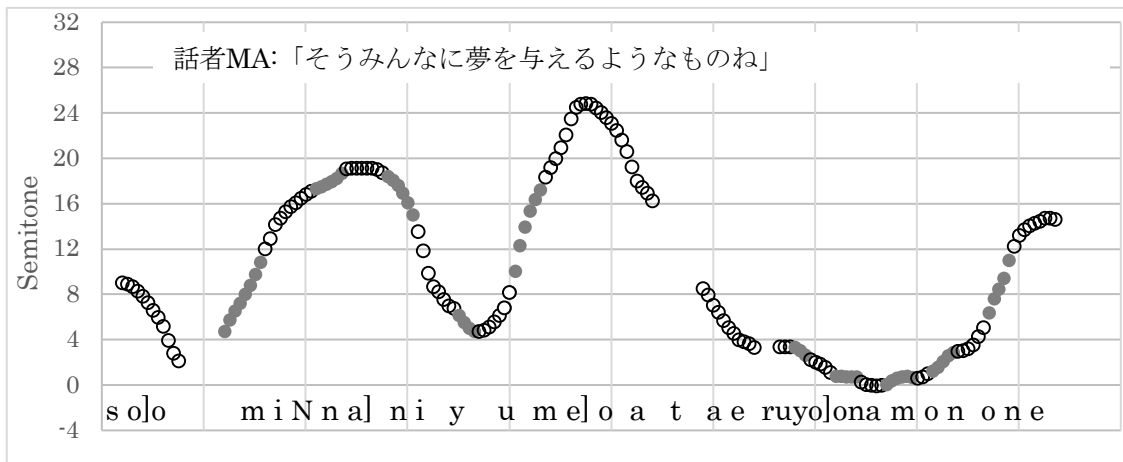


図1 句音調の分析例—卓立型音調様式の場合1 (話者：MA)

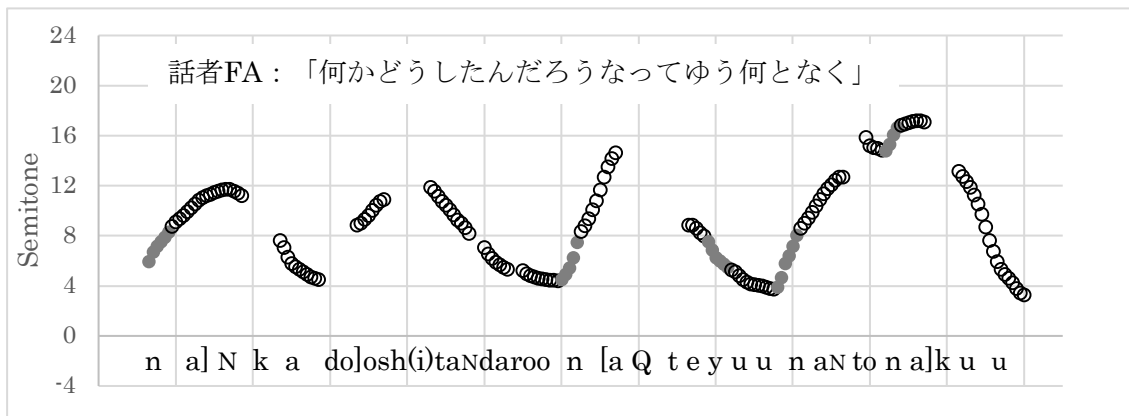


図2 句音調の分析例—卓立型音調様式の場合2 (話者：FA) ((i)は無性化母音を示す)

えるような」の二つのアクセント句から成り立っている。「みんなに」は、4 ST ほどの高さから上昇開始があり、開始と同じ4 ST の高さに戻る。「夢を与えるような」も同様に4 ST から再び上昇し、「与える」で4 ST に戻ったのち「ような」で終結音調の0 ST に降下したあと句末上昇に転ずる。図2の話者FAでは、話者MAと同様にアクセント句の上昇開始は4~6 ST 程度であり、上昇ののち4 ST ほどに降下するパタンが連続となっている。話者MAのように0 ST ほどまで降下していないのは、まだ発話終結には至らず後続の発話単位につながっていくためと考えられる。このように大きなピッチの上昇と降下による際立ったアクセント句が連続する句音調特性を、ここでは卓立型音調様式と呼ぶことにする。自発発話における典型的な句音調の形式である。

卓立型音調様式では、句の始まりの高さは、強調の度合いや、アクセント句の句頭音調が低く始まるかどうかなどによって様々であるが、多くは4~6 ST 程度の高さで始まり、これより高い音調領域で(上昇—降下)の連続する句音調パタンが展開される。これより低い4 ST 以下の領域は発話単位を終結へ導く音調降領域となっている。句が開始されて再び降下するおおよそ4 ST の高さは、発話努力の要しない楽に発声できるレベルであるが、発話単位や発話段落の終わりの0 ST 程度へと向かう音調降下では、声を低める一定の発話努力が必要なのではないかと考えている。ちなみに0 ST を音階の「ド」とすると4 ST の高さは「ミ」の音階に相当する。

一方、自発発話においては、卓立型音調様式とは異なりメリハリのない単調な発話様式も見られる。



図3 句音調の分析例—非卓立型音調様式の場合 (話者: MA)

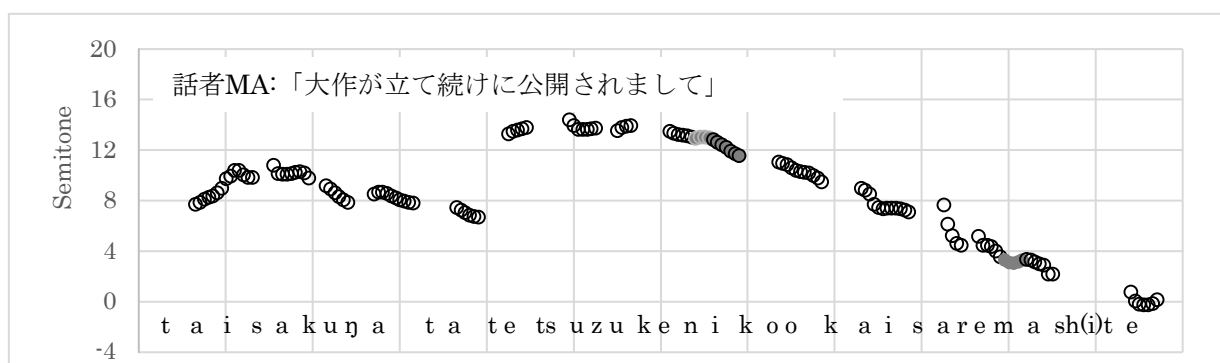


図4 平板型アクセントが連続する場合の句音調の例—漸次降下型音調様式 (話者: MA)

図3はその例であり (話者: MA), アクセント句を際立たせるような発話ではなく, 4ST程度を中心に, 音調の小さい上下を繰り返しつつピッチの終結音調に達する発話である. 印象としては, 独り言のような発話, 前置きの発話, ぼそぼそと呟くような発話であり, 主要句のあとに続く従属句の音調などにも見られる. このような句音調を非卓立型音調様式と呼ぶことにする. 卓立型, 非卓立型いずれの音調においても明確な漸次的下降特性は必ずしも認められない.

卓立型音調の場合, アクセント句の音調にはアクセント感を実現する下降と句音調の終結感に寄与する下降が見られる. 両者ははっきりと分離されているとは限らないが, アクセント核に伴う下降音調が契機となって, つまりアクセント核があってはじめて句や発話単位の終結下降も実現されている. それでは, アクセントがない句の発話の場合はどうなるであろうか? 実現例は少ないが図4がその一例である. 「大作が」と「立て続けに公開されました」の二つの句はともに平板型アクセントであり, アクセントに伴う音調の急峻な下降はない. そのため, 特に後者の句「立て続けに公開されました」では終結音調0STに向けて漸次的に音調が降下する. このように明瞭にアクセント核が存在しない句の場合には, 従来からイントネーションモデルで示されてきたような終結音調に向けての右下がりに漸次的に降下する音調特性が観測される.

4. アクセント拍の音調形式とアクセント位置

次に発話単位(UU)を構成するアクセント句の音調形式を見ていく. 例えば, 前節の図1におけるアクセント句「ゆめ]をあたえるよ]うな」では, まず2拍目にアクセントがあり, これは2型であってアクセント拍は上昇調で実現されているが, 「うな」は1型でありピッチ下降量は少ないが下降調で実現さ

れている。また同図中、3型である「みんな」にはアクセント拍内音調は平坦な音調で実現されている。このようにアクセントがあるとされる拍の音調は様々な形式で実現されることが予想される。アクセント感覚は、アクセント拍と後続拍との間の高さの相互関係で決まると考えられるが、まずアクセント拍内の音調の形式とアクセント位置との関係を調べた。具体的には、アクセント拍の拍内のピッチ周波数を直線近似し、以下の音調形式に分類した (佐藤 2018A)。

- ・ 下降音調(Falling Pitch: FP) : 下降ピッチの音調形式
- ・ 平坦音調(Level Pitch: LP) : 拍内ピッチの傾きの絶対値が 0.1 ST/フレーム 未満の場合を平坦のピッチとした。
- ・ 上昇音調(Rising Pitch: RP) : 上昇ピッチの音調形式
- ・ その他, 上昇・下降音調(Rising+Falling Pitch: R&FP), 平坦・下降音調(Level+Falling Pitch: L&FP)なども設定したが、これらは数が少ない。

図5は1型(頭高)アクセントの「猫」という語を含む種々の句における音調パターンである(話者: FB)。アクセントのある第1拍目の音調形式は、左図の2例では下降音調(FP)と平坦音調(LP)であり、右図の2例はともに上昇音調(RP)で、そのうちの一つ「猫も」では後述するアクセントの遅下がり現象を示す音調パターンとなっている。すなわち、アクセントのある1拍目の/ne/よりも2拍目の/ko/のピッチの方が高く、見かけ上2拍目にアクセントがあるような特性となっている。このようにアクセントのある第1拍は同一語でも様々な音調形式で実現されている。なお、右図のようにアクセント拍の音調が上昇となる場合は、左図の下降音調や平坦音調の場合に比べてアクセントのプロミネンスが大きくなる傾向のあることを指摘しておきたい。

アクセント位置(いわゆるアクセント核の位置)は、アクセント拍内の音調形式によって著しく影響される。図6は図5と同一話者(FB)の場合の結果であり、1型アクセントにおけるアクセント位置がアクセント句のどの位置に生起するか、その生起度数を示したものである。

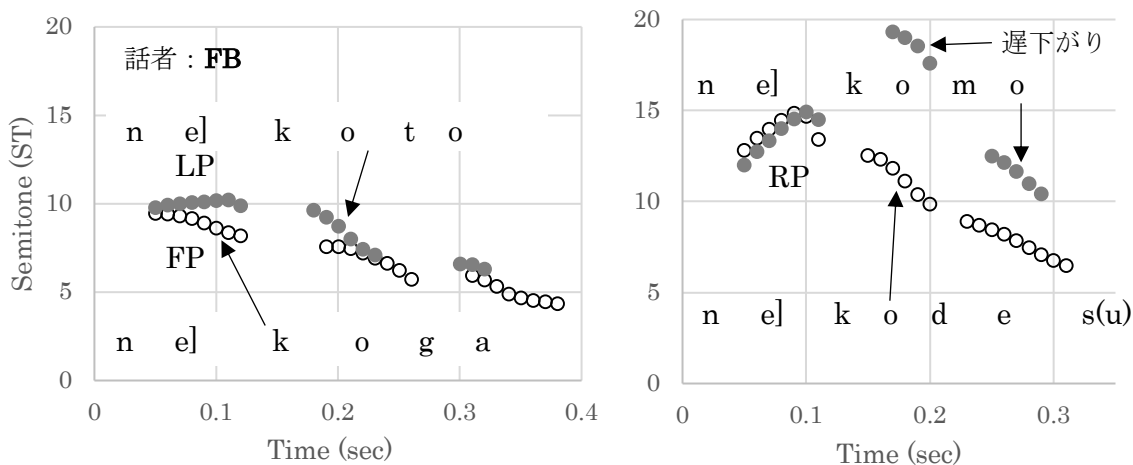


図5 アクセント拍の各種音調形式

(「猫」を含む各種アクセント句の音調, 白丸とグレーの塗りつぶしのパターンで示す)

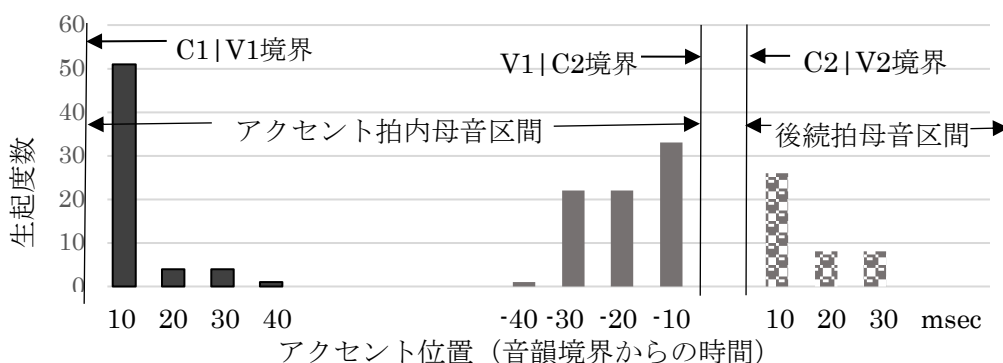


図6 アクセント位置の生起位置とその生起度数 (1型アクセントの場合 話者:FB)

横軸は音韻境界から測ったアクセント位置を 10 msec 毎のフレーム単位で示している。境界に隣接する直近フレームは±10 msec となる。アクセントのある第 1 拍を C1V1 (C:子音, V:母音), 後続拍を C2V2 とし, さらに C1|V1 をアクセント拍の子音と母音の拍内境界, V1|C2 をアクセント拍末の拍間境界すなわちアクセント核のある母音と後続子音の拍間境界, また C2|V2 を後続拍の子音と母音の拍内境界とする。図から明らかなように, アクセントはアクセント拍の中心付近に置かれるのではなく, アクセント拍母音の開始付近, 後続子音との境界付近, そしてアクセント拍に後続する拍の母音の開始付近に多く生起していることが分かる。

C1|V1 境界近傍にアクセント位置が分布する音声は, その 90% が下降音調であり, V1|C2 境界近傍にアクセント位置がある音声のうち, その 72% が上昇音調で 27% が平坦音調であった。C2|V2 境界の右側すなわち V2 に分布するアクセントは所謂「遅下がり」のものであり, その 72% は上昇音調であった。2 型アクセント, 3 型以上のアクセントにおいてもほぼ同様の結果が得られた。3 型以上のアクセント拍では, その殆どが下降と平坦の音調であり上昇調のものは少ないが, 後接要素が付いた複合形の場合, その要素が強調されると上昇調となる (例:「思いま]して」, 「そんなこ]と」における「ま]して」「こ]と」が強調発声された場合など)。

以上示したように, アクセント拍の音調形に関して, それが下降調の場合, アクセント位置は当該拍の母音の開始点近傍に分布し, 上昇調の場合は当該拍の母音の末尾近傍に分布するか, もしくは後続拍の母音部にまで達する。平坦調の場合は, 当該拍末尾近傍にアクセントのくる場合が比較的多いことが明らかになった。特に平坦調や上昇調の場合, 後続拍内のピッチ下降がアクセント感の生成に必要であると考えられ, アクセントの音調単位は後続下降拍を含む 2 拍のまとまりで考える必要があるのではないかとと思われる。またピッチの下降時点が音韻境界近傍に集中することは, 音調変化の制御と音韻に関わる調音制御が同期的に行われていることを窺わせる。これらについては後続の諸節でまた触れることにする。

5. アクセントの「遅下がり」現象の生起傾向と生起要因

前節でアクセントの「遅下がり」現象の一例を示したが, 本節ではこの現象に焦点を当ててその生起傾向と生起の要因に関して述べる (佐藤 2018B)。

表 1 は発話者:FB の場合の遅下がりの生起数をアクセント型毎に示したものである。この発話者の場合, 合計 81 例の遅下がり確認されたが, これは発話の全アクセント単位の 15.6% に当たる。なお, アクセント型は先頭から数えたアクセント拍の位置で示した (1 型ア, など)。表 1 から「遅下がり」は 1 型アクセントで著しく多く (72.8%), また 1 型アクセントの全抽出例のうちその 1/4 が「遅下がり」であった。2 型アクセントがこれに続き多く, 3 型以上ではその生起数は減少する傾向がある。

表1 アクセントの「遅下がり」生起数（アクセント型別，話者：FB）

	1型ア	2型ア	3型ア以上	計
遅下がり生起数	59 (72.8%)	11 (13.6%)	11 (13.6%)	81

表2 アクセント拍の音調形と「遅下がり」の生起数の関係（話者：FB）

アクセント拍音調形	1型アクセント			2型アクセント		
	F	L	R & RF	F	L	R & RF
遅下がり生起数	3	7	47	0	2	9
割合	5.1%	11.9%	79.7%	0%	18.2%	81.8%

表2は、同一話者におけるアクセント拍での音調形と遅下がり数との関係をまとめたものである。ここで(R&RF)の欄は上昇に関わる二つの音調（上昇および上昇・下降）の生起数である。1型および2型アクセントとも、上昇に関わる音調(R&RF)の生起数が全体の約8割を占め、アクセント拍での上昇関連音調と遅下がり現象との間に強い相関のあることが分かる。つまり、アクセントの遅下がりとは、アクセントが1型か2型であって、かつアクセント拍が上昇音調に関係する場合により多く生起するということになる。1型アクセントでは句頭の最初の拍で「高」のトーンが要請され、2型アクセントでは1拍目が「低」く始まるが、後続のアクセント拍で「高」音調を実現しなければならない。両者とも句の最初に現れるアクセント拍が「高」であり、この「高」を上昇音調で達成することと「遅下がり」が関わっていると考えることができる。次にアクセントの「遅下がり」現象がどのような条件で生起するか、以下具体的にその諸要因に関して述べていく。

(1) 調音制御と遅下がりの関係

はじめに遅下がりに関わる音調制御と音韻生成に関わる調音制御との関連を見ていく。図7は女性話者FAの発話例である。発話段落は三つのアクセント句「かなり」「その検査が」「長くて」から成っているが、発話のまとまり（韻律句）としては「かなりその」「検査が」「長くて」のような音調区分で発話されている。アクセントのある語は1型であるが、いずれもアクセント拍の後続拍にアクセント位置が観測される「遅下がり」の現象を示す。図中↑印はアクセント位置を、点線の矢印はアクセントのある語頭拍と後続拍におけるピッチ変化を示しており、いずれも上昇調ののち下降する。「かなり」では、音調がアクセント拍の語頭母音/aから後続子音/nに至るまで上昇しており、第2音節母音に至って音調降下の契機（アクセント位置）が認められる。同様にして「検査が」では第2拍の撥音/N上に、「長くて」

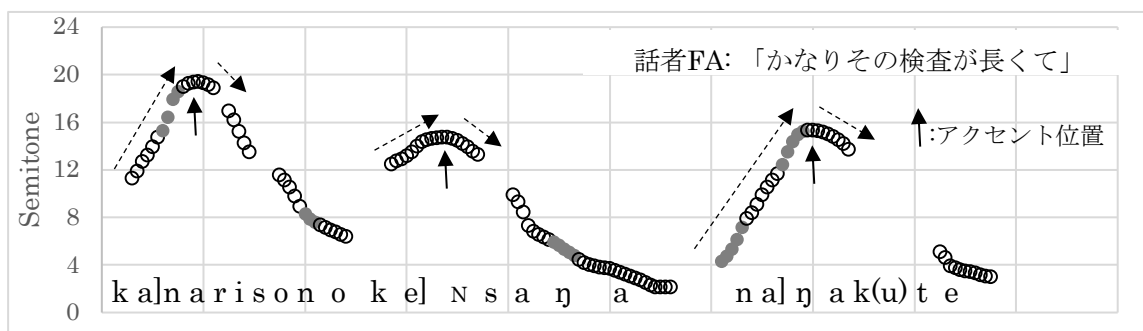


図7 1型アクセントにおける音調の上昇・下降パターンと「遅下がり」

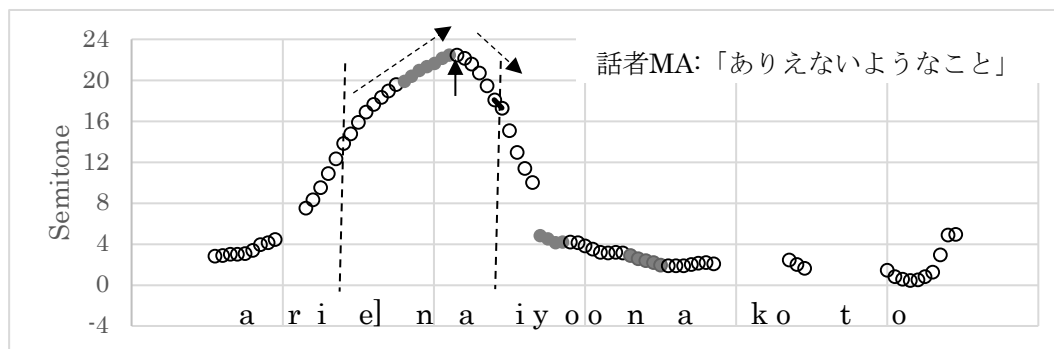


図8 3型アクセントの発話における「遅下がり」

では[na]jaの第2音節の母音開始部にアクセント位置がくる。つまり音調が音節の開始点ではなく音節内母音や撥音の onset 近傍に同期して制御され、加えて下降音調に向かう音調の変曲点がアクセント拍内ではなく後続母音内（あるいは撥音内）に現れることが多く、それが「遅下がり」をもたらす。日本語の音節の基本は（子音－母音）の CV 構造であるが、発話のタイミングは音節の頭である子音の開始点というよりは、後続母音の開始を契機としていることと関係していると考えられる。

以上、1型アクセントの発話における「遅下がり」をみてきたが、それ以外のアクセント型でも同様の現象が見られる。図8は、男性話者 MA による3型アクセントの語を含む例「ありえないようなこと」の音調パターンである。/arie]nai/における3拍目の/e/にアクセントがあるが、/e/ではアクセントに伴う音調が上昇し、その上昇が後続子音の/n/まで持続する。ピッチが反転下降する変曲点（アクセント位置）は後続母音/a/の onset 近傍でありアクセントの「遅下がり」になることが分かる。

以上二つのアクセント型の発話データは、アクセントの「遅下がり」現象がアクセント実現のための下降音調制御と母音音高が同期的に制御されていることと密接に関連しているのではないかということを示している。

(2) アクセント拍の上昇調との関係

(1)において「遅下がり」現象を音調制御と調音制御の観点から記述したが、これと関連してアクセント拍における上昇音調との関係を述べる。特に「遅下がり」は1型アクセントで多く、さらにアクセント拍が上昇調の場合に多いことはすでに触れた。1型アクセントでかつ上昇拍の場合の例を図9に示す。図中2例とも同一話者 FB の「我が家の」という発話である。(a)は卓立型発話でプロミネンスが大きく、「遅下がり」が観測される。(b)はプロミネンスが小さい非卓立型発話であり、この場合「遅下がり」が見られない。アクセント拍が同じ上昇調であっても、プロミネンスが小さい場合、アクセント位置は当該拍末近傍に止まるが、アクセント位置が後続拍に移動する「遅下がり」が見られる場合は一定以上の急峻な上昇音調を伴うと考えられる。この場合「遅下がり」は音調上昇制御の overshoot 現象と捉えることも可能である。

1型アクセントが上昇調となるのは、句頭の最初の拍における「高」の音調感を上昇音調で作りに出しているからであろう。2型アクセントの場合は、1拍目は「低」、2拍目で「高」のトーンが要請されるため、1型アクセントと同様にアクセント拍が上昇調で実現され「遅下がり」が観測される。なお、2型では1拍目から緩やかな上昇が見られることがあり、1型アクセントほど急峻な特性にはならないことがある。

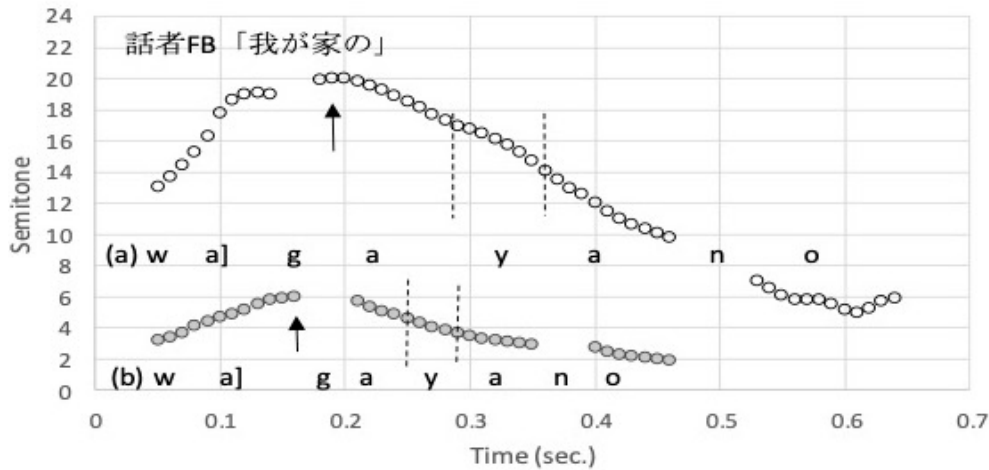


図9 1型アクセントの語頭上昇音調と「遅下がり」

1拍目で上昇調となる1型アクセント語のアクセント知覚に関する実験では、1拍目で十分急峻な音調の上昇がある場合、後続拍の許容される音調下降には大きな幅があり、わずかな下降でも1型アクセントの知覚が得られること、また比較的緩やかな上昇特性の場合、後続拍に一定以上の下降特性が求められることが分かっている(佐藤 2016, 2017). このことは、1拍目の急峻な音調の上昇があれば、それがアクセント知覚の Cue として役立つので、後続拍が「遅下がり」に伴う音調下降は緩やかであってもかまわないということを示している. 従来から、アクセント感覚に関しては音調の「下降」に着目して論じられてきたが、「上昇」特性のアクセント感覚生成に果たす役割についても今後更に目を向ける必要があるものと思われる.

(3) フット単位の発話との関係

東京方言アクセントの特徴として、長音、撥音等を含む長音節にアクセントがある場合は、これらの従属拍にアクセントが置かれることはなく、前部拍がアクセント拍となる. しかし、実際の発話の際には、この2拍の音節は一体となって発音されるため、音響特性から見たアクセントはしばしば後部従属拍に位置することがある. これもひとつの「遅下がり」であると考えられる. 図10は、2型アクセントの発話「デパートの」の音調パターンである. 音調は第2拍の母音 onset から長音部まで上昇を続け、アクセント位置は長音節/pa] a/の音節末近傍にある. 音節内では音調下

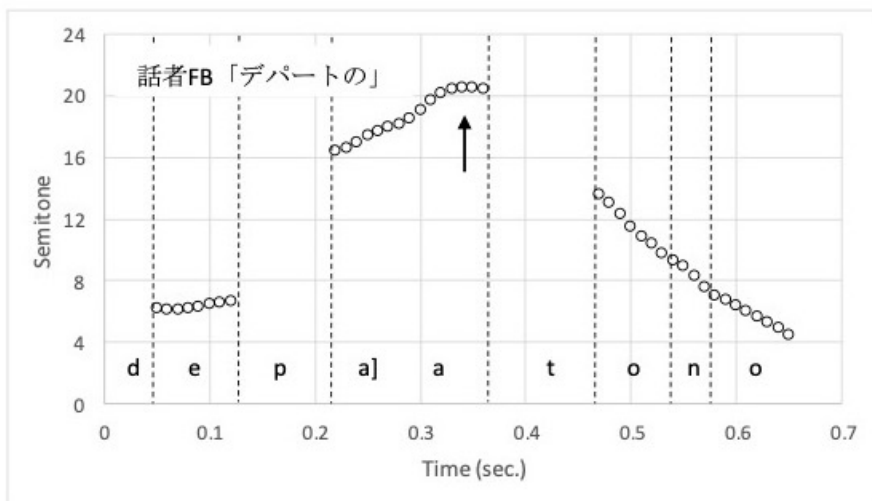


図10 長音節にアクセントがある場合の「遅下がり」例

降である. 音節内では音調下

降はほとんどなく, 急峻な音調降下はアクセント拍より2拍遅れた拍/to/に見られる. このようにアクセントのある2拍の長音節が上昇調で発話される場合には, 「遅下がり」的現象がしばしば観測される.

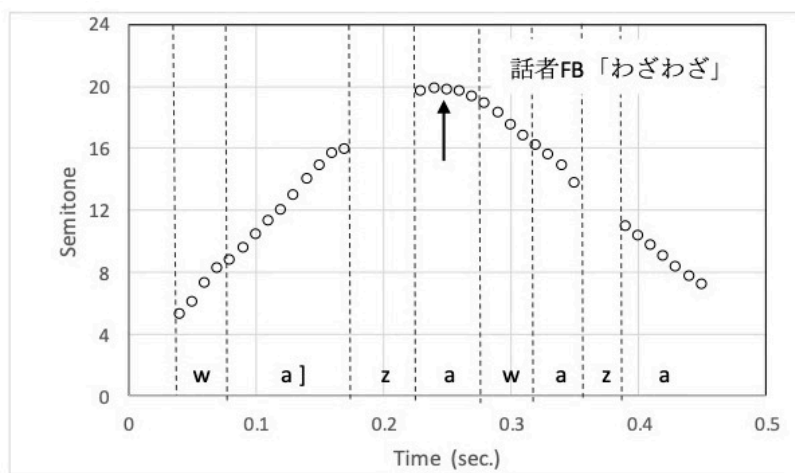


図11 フットリズムの発話と「遅下がり」(1)

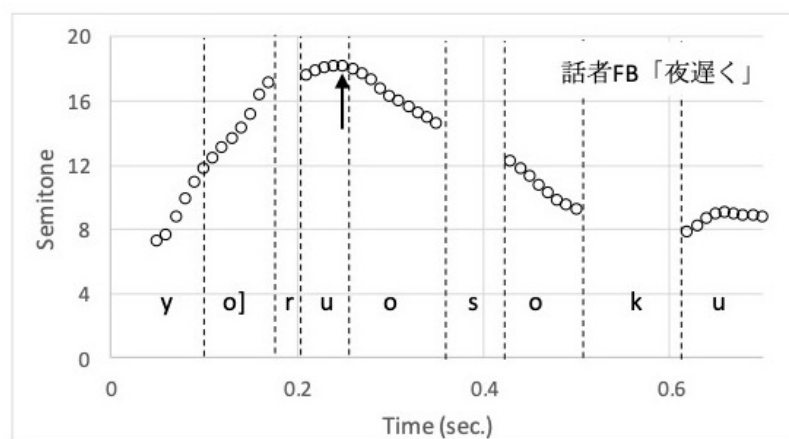


図12 フットリズムの発話と「遅下がり」(2)

上記で述べた従属拍を含む長音節での「遅下がり」ばかりでなく, 通常の単音節が2拍ずつまとまって発話される場合にも同様の現象が見られる. 日本語のリズムは, 拍の等時性に基づく拍リズムがその基底にあると考えられるが, 実際には2拍まとまってリズム単位となる発話がなされやすい. これがフット(脚)リズムである. 図11と図12にフットリズム発話の場合の音調と「遅下がり」の例を示す.

図11は「わざわざ」と発話された例であり, (わ)ざ(わざ)のような2拍毎のフット単位で発話されている. 音調は最初のフット/wa]za/内で上昇を続け, 2拍目の/za/の途中で下降の契機を示すものの下降量は少なく, 音調下降は後続フットの/waza/で生ずる. アクセント位置は2拍目の/za/にあり「遅下がり」である. 図12は「夜遅く」の発話例であるが, (よ)る(おそ)(く)のようなフットリズムで発話されて

いる. 句頭のフット/yo]ru/では, アクセント拍の/yo/で急峻な音調上昇があり, 後続拍/ru/においても緩やかな上昇が続き音調下降はない. 下降は後続するフット/oso/内で生ずる. これら二つの発話例から, アクセントに伴う音調の上昇→下降の制御は, 拍単位というよりも2拍まとまったフット単位で行われることが原因で「遅下がり」という現象をもたらしているのではないかと考えられる.

(4) 強調的発話との関係

(1) 項で卓立型発話の場合に上昇音調アクセントで「遅下がり」が生じやすいことを述べた. 卓立型は句の音調パターンを際立つように発話する様式であるが, 特定の句を意図的あるいは対比的にいっそう強調して発話する場合, アクセントの大きさ(プロミネンス)はさらに高まる. アクセント句のピークの高さが20 STを超えると強調の印象が強く感じられる. 音調の上昇幅や下降幅が1オクターブまたはそれ以上(12 ST以上)になるとその動態特性の影響は後続拍にまで及び, ほとんどの場合「遅下がり」現象を呈した. 一例として, 「私の枕を使って」における「枕を」の部分で強調的に発話した場合を図13に示す.

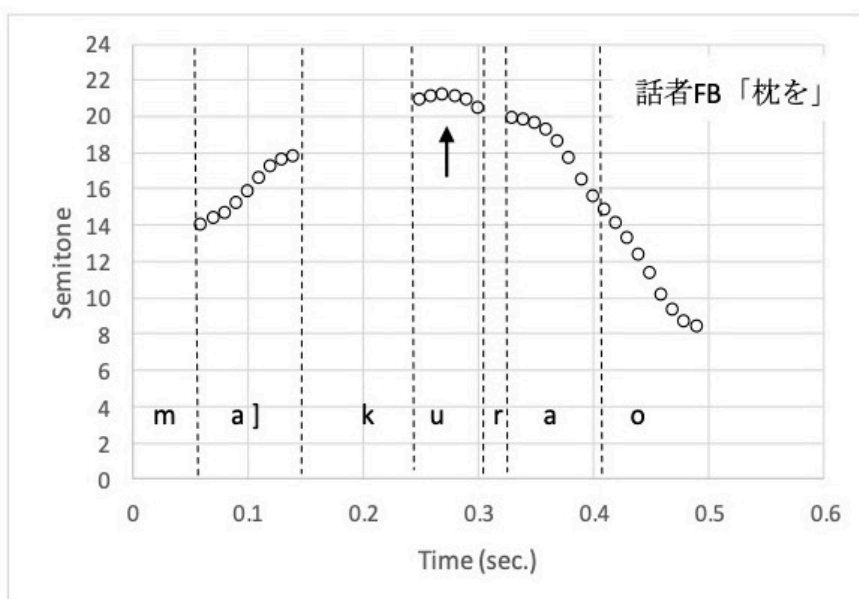


図13 強調的発話における「遅下がり」例

アクセント拍の/ma/は上昇調で発話され、後続拍/ku/でいっそう高いプロミネンス値となり、アクセントの「遅下がり」現象を示す。

既に例示した図1における発話における「夢を与える」の部分、および図8における「ありえないようなこと」等もプロミネンス度が22 ST程度あり、強調的発話として「遅下がり」が観測される例である。

(5) アクセント拍での音調上昇がない場合の「遅下がり」

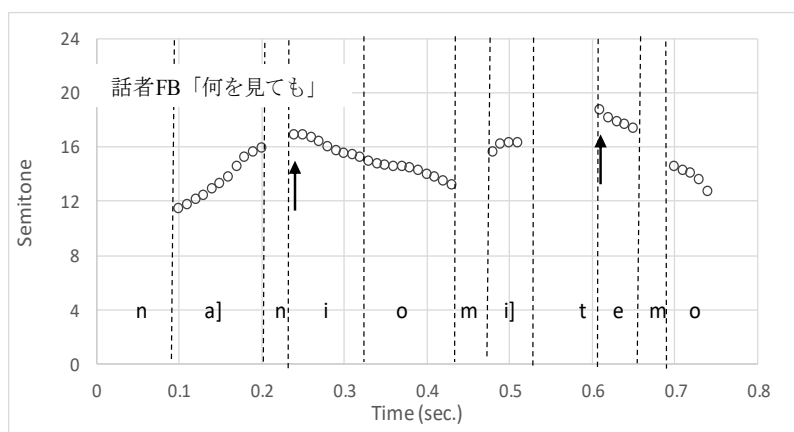


図14 アクセント拍が上昇調でない場合の「遅下がり」(1)

これまで示してきた「遅下がり」の実例では、アクセント拍が上昇音調を示す場合のみであった。表2で示されているように、80%は上昇音調であるが、下降調(FP)、平坦調(LP)の場合も存在する。ここでは、上昇音調以外の場合に「遅下がり」現象が生起する実例を見ていく。図14は、「何を見ても」の例であり、音声区分「何を」と「見ても」のいずれも「遅下がり」である。

後者の「見ても」では、アクセントのある/mi]/の母音部で音調上昇が

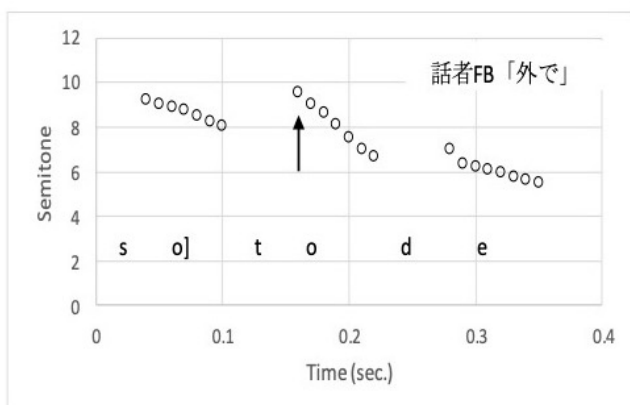


図15 アクセント拍が上昇調でない場合の「遅下がり」(2)

ないため、後続拍においてアクセント生成のため高いピッチからの降下が必要となる。これが後続拍頭にアクセント位置が見られる原因となっている。アクセント拍が上昇音調のときは、後続拍で顕著なピッチ降下の認められない場合もあるが、明瞭な上昇音調がない場合は後続拍での音調下降特性が必要となる例である。

図15は、非卓立型発話の「外で」の例である。この場合は、アクセントに後続する母音onsetのピッチが高くなって「遅下がり」的現象を呈する。これは、無声閉鎖音では開放後の

母音のピッチが高まるという *micro prosody* の事例となっているが、後続拍でのこのような高いピッチからの音調降下はアクセント感の生成にも寄与しているであろう。

アクセント拍自体が下降音調の場合は、その下降がアクセント感の生成に役割を果たしていると考えられるが、ここで示したようなアクセント拍が緩やかな下降調や平坦調の場合には、後続拍における音調降下がアクセント生成のために必須となると考えられる。

6. アクセント位置以降の下降音調

すでに触れたように、日本語アクセントの型は、拍の「高」と「低」のトーンの配置、あるいは「高」から「低」に遷移する際の「高」の位置（アクセント核）等によって表現されるが、いずれにせよ「高」の拍から「低」の拍への音調降下が語のアクセントと深く結びついていると考えられている。それでは、いったいどの程度の音調の降下がアクセント実現のために必要なのであろうか。ここではアクセント位置以降の音調の下降について見ていきたい。

前節で述べた「遅下がり」現象の一例である図7を見てみると、音調パターン上のアクセント位置から次の拍末への音調降下量は3つのアクセント句とも2 ST 以下であり非常に小さい。図16と図17は、同じ話者FAの発話例であり、アクセント位置と後続拍の音調降下の例を示したものであるが、同様の性質が見られる（↑：アクセント位置，↓：後続拍末）。

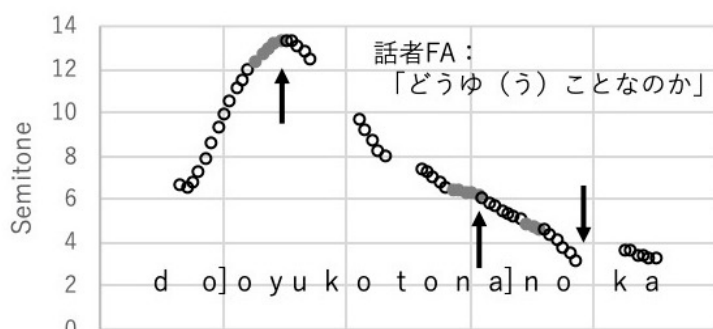


図16 アクセント位置と後続拍への音調降下例(1)

図16の最初のアクセント句「どうゆ(う) /do]oyu/ は1型アクセントであるが、最初の2拍の長音節/do]o/は一体となって上昇音調で発音され、音節末まで上昇が続く。第3拍の母音/u/に至って音調降下が生じる。その降下量は2 ST 以下である。

図17では最初のアクセント句「お箸が /oha] shiŋa/ もまた「遅下がり」であり、アクセント位置の母音内音調降下は3 ST 程度であるが、アクセント句末までは11 ST 程度と大きく降下している。

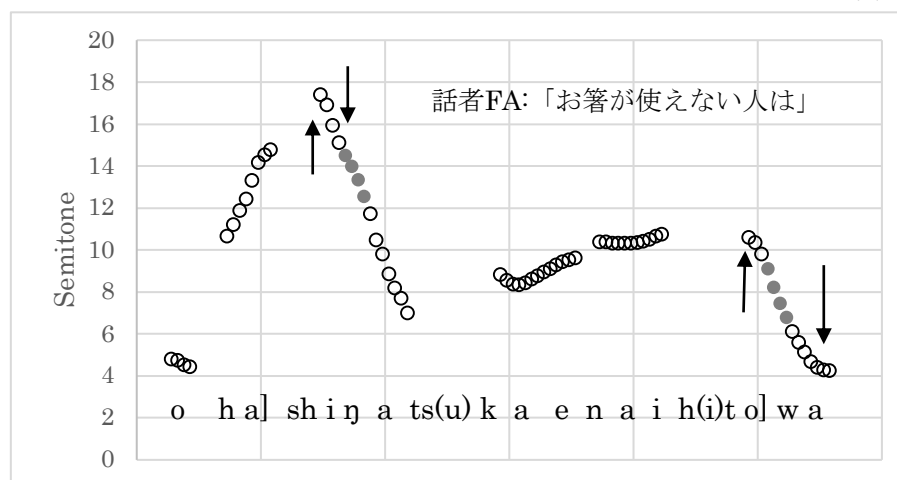


図17 アクセント位置と後続拍への音調降下例(2)

次のアクセント句「人は /h(i)to] wa/ では、アクセント拍/to/の拍内音調は下降音調でその降下量は小さく、後続拍/wa/末までの降下量は7 ST 程度と大きい。

以上のように、音調上のアクセント位置から後続拍への音調降下の大きさは様々である。図17の「人は」において音調降下が大きいのは、ア

アクセント感覚生成のための音調下降と句末の終結のための音調下降が一体となったためであると考えられる。アクセントの役割は (a) 語の弁別, (b) 語や句に纏まりを与える, の二つがあると考えられているが, このうち後者の役割は, 単にアクセントそのものが纏まりという機能を果たしているのではなく, 実際には音調パターン上でアクセント句としての「纏まり感」や句の「終結感」をもたらす音調下降特性, もしくは終結値への到達があつてはじめて実現される機能であると考えられる。従つてアクセント核以降の音調降下には, アクセント弁別に直接関わる降下とアクセント句として終結させる降下とがあり, 両者を区別して考える必要がある。その上で前述の「人は」で見られた例のように, アクセント位置以降の音調降下を両音調降下の融合として捉えるべき例も多い。

アクセント位置からの後続拍末への音調の下降量 (拍間下降量) は, アクセント拍が上昇音調あるいは平坦音調の場合 2~3 ST であり, 下降音調の場合のアクセント拍内下降量は 1.4 ST 程度であることを報告した (佐藤 2018A)。図 16, 図 17 の例を含めて, このようなアクセントを生成する音調下降の量は, アクセント句の終結下降量と比べて小さい。アクセント感覚には, 音調下降量よりも音調パターンが下降に向かう契機 (音調変曲点) の役割が重要なのではないかと考えられる。音調下降に関して僅かな変化の契機しか示さない例ばかりでなく, 全く示さない例もある。これらはアクセント拍における音調の上昇調がアクセント感覚形成に一定の役割を果たしているとも考えられ, 今後のアクセント知覚研究の面からも更なる検討が必要である。

7. アクセント句の句頭音調

これまで主にアクセント位置を音調パターンの変曲点との関わりから述べてきた。音調の変曲点は, アクセント句が複数連続する場合, 句頭の音調上昇や句末の終結下降に関わる現象としても観測される。図 18 は「気持ちはよく分かる」(話者 MB) という発話の例である。/kimochiwa/ から /yo]ku/へ変わるところで, /yo]ku/の /y/からピッチが上昇するのではなく, /y/は先行発話の終結下降の一部として融合下降し, 次のアクセント核の /o/で上昇に転ずる。この場合も母音 onset と音調制御時点が同期している (図中, 下降-上昇の点線矢印で示す)。さらに, /yo]ku/から /waka]ru/への連続では, 後者の第 1 拍の /wa/が先行する /yo]ku/と融合し, そのアクセント句の終結下降の役割を担っていると同時に, その下降が /waka]ru/の第 1 拍目の「低」の音調感の実現にも寄与していると思われる (図では下降矢印で示した)。

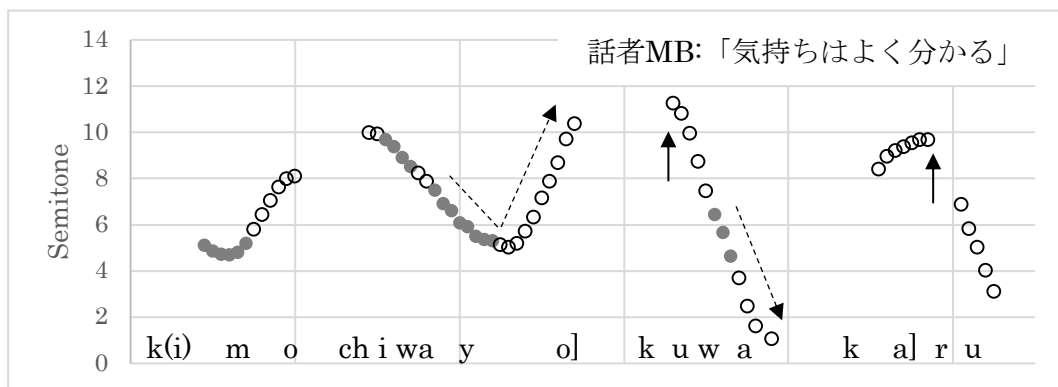


図 18 アクセント句連続の場合の第 1 拍目の音調特性例

図 19 は「みんなに」「夢を」「与えるような」という発話の例であり, 図 1 の発話の主要部分を再掲したものである。この中で「夢を」が主要なアクセント単位であり, 「与えるような」は従属的な要素である。/me]o/における上昇・下降音調に続いて /ataeru/が下降音調として接続し終結下降の役割を果たしてい

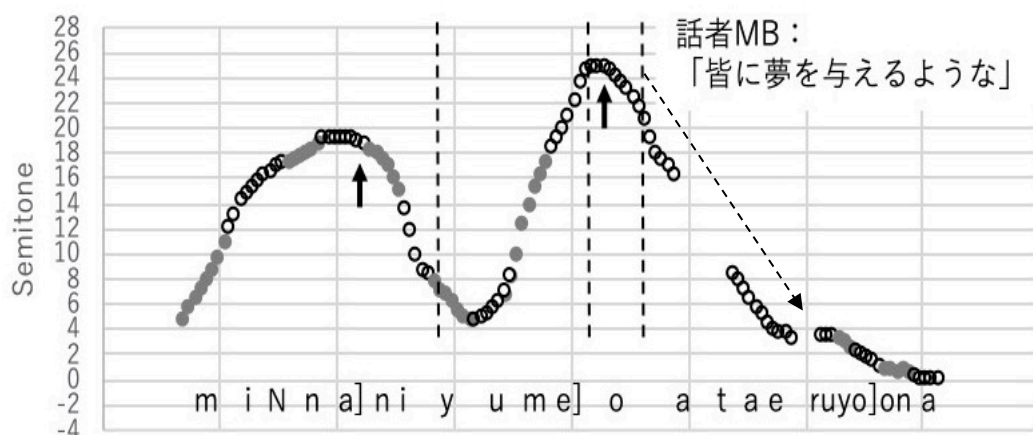


図 19 主要アクセント句に従属する句の音調パターン例 (図 1 の一部再掲)

る (点線下降矢印で示す). /ataeru/は平板アクセントであり, 1 拍目/a/は「低」であるが, 実際には 22 ST と基底値の 2 オクターブ程度の高い音調で接続している. このように, 1 型アクセント以外の語の語頭の「低」は, 丁寧な発音あるいは句頭等の場合にはその「低」が音響的に実現されるが, 自発発話のような連続音声では先行句の音調に依存して様々な高さとなり, 従属的, 不定的なトーンとしての振る舞いを示す (佐藤 2019).

なお, 同図で最初のアクセント句/miNna]ni/と次の/yume]oataeru/の境界における後続句頭拍/yo/の音調では, 図 16 の例と同じように子音/y/は先行音調に融合して下降音調となり, 母音/u/からアクセント句の上昇音調に転じている. アクセント生成に関わる下降音調の場合ばかりでなく, 音調が「高」へと上昇に転ずる場合においても音調制御と母音 onset の同期が見られることを指摘しておきたい.

8. アクセント句の構造モデル

アクセント句の音調を調べるうえで, アクセント句の構造を想定し, それを手掛かりに音調パターンを見ていくことが有効ではないかと考える. これまで述べてきたアクセント句の音調の諸特性の結果をまとめて記述するうえでも有用であろう. アクセント句を想定するポイントは以下である.

- ・アクセントの生成は (上昇-下降), (平坦-下降) など 2 拍に渡る高さの変化によるとの考えから, アクセントが生成される単位は原則 2 拍からなる単位とし, これをアクセントの動態核と呼ぶ.
- ・動態核に続く音調下降を二種類とし, アクセント単位の音調上のまとまりに関わる音調下降とこれを含む句としての終結感を与える音調下降とに分ける.
- ・2 型以上のアクセントの場合上昇調を伴うのが一般的であるが, 1 型アクセントの場合, 特に卓立的発話では句頭が上昇調で開始されることが多く観測されるので, 句頭に音調の上昇部分を設定する.

上記を配慮すると, アクセント句の基本的構造は以下ようになる (佐藤 2019). これは, アクセント音調と句音調が融合した形式である. 図 20 に, 実際の音調パターン上でのアクセント句の区分化 (構造) を示しているが, アクセント句が一定の卓立性を有する場合の音調形式を想定している.

開始(Onset)－上昇部(Rising)－動態核(Dynamic kernel)－
 アクセント終結部(Accent coda)－句終結部(Phrase ending)

アクセントの動態核は、現在のところ原則 2 拍と考えておく。その 2 拍の動態核の音調パターンは、(a) 下降-下降 (b) 平坦-下降 (c) 上昇-下降 (d) 上昇-上昇、等のパターンが観測される。(a) と (b) は、非卓立型様式の発話、3 型以上のアクセントの話、平板型アクセント要素に後続する語などに見られることが多い。(c) と (d) は句頭の 1 型・2 型アクセントに見られるほか、句中で特にアクセントが強調された要素で観測される。アクセントを 2 拍間の音調変化を包含する動態単位で捉えることにより、拍単位のアクセント把握からくる「遅下がり」現象の概念は、特異な音声現象としてではなく、発話様式の自然な形式として理解がしやすくなるのではないかと考える。

またアクセント句構造化のパターンは典型的形式であって、どのような発話においてもこの構造モデルのまま実現するわけではない。例えば 2 型アクセントの場合、語頭の onset としての「低」の拍が上昇調で始まり、アクセント動態核の前部の上昇調と一体化することがある。また尾高型アクセントのようにアクセント拍の後続拍がない場合などで動態核が 2 拍とならないことがある。さらにアクセント終結や句終結を担う要素がない場合、動態核の後部要素の下降音調の終結機能をも担わなければならないことがあり、この場合アクセント位置からの大きな音調下降がある。アクセント単位の終結下降と句の終結下降は必ずしも分離せず、一体化して両者の機能を担っていると思われる場合も多く観測される。句の音節構造、後部につく従属的要素の有無などによって現れる音調実態は様々であるが、ここで提案したアクセント構造を手掛かりにすると日本語アクセント理解に有用であろうと思われる。

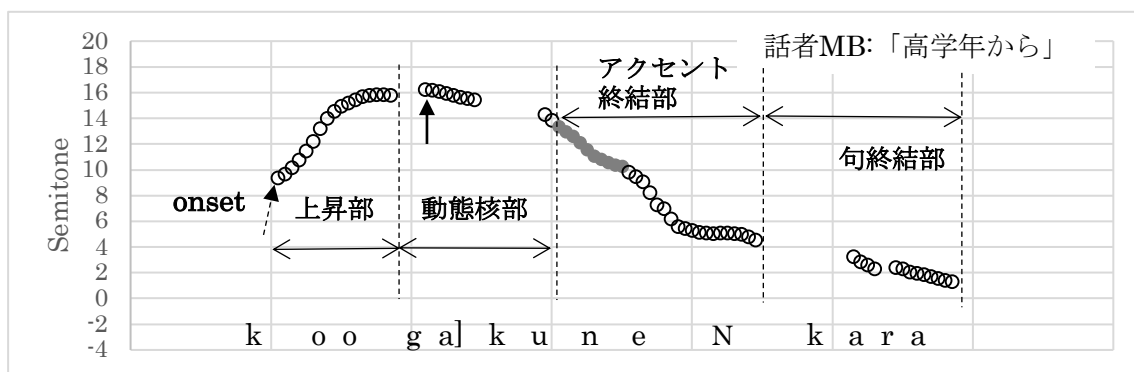


図 20 アクセント句の構造モデルとその音調パターン

9. アクセント句のその他の音調特性

最後に今回の分析で観測された音調特性における他の事象について紹介したい (佐藤 2018A)。音声を聞き取るとアクセントの可能性が二つあり、どちらか一つに決めかねた例である。アクセント句でアクセントが複数ある場合は、通常先行アクセントにおいて「高」から「低」への音調下降がいったんあり、そのあと後続アクセントへと続くためそれぞれのアクセントが認められるが、ここでの例はアクセント拍が「低」のトーンを介さず連続して連なる場合である。

図 21 に、「先日のことなんです」の音調パターンを示す。ここで、まず「ことなんです」は、/koto]naNdes/ のように/to/にアクセントがあるように聞こえるが、/kotona]Ndesu/のように/na/にアクセントがあるようにも聞こえる。筆者にとっては二つのアクセントが隣り合うため、同時に二つが知覚されることはなく、どちらか一方のアクセントとして聞こえる。従って一つのアクセントを定めることができない音調パターンである。これを仮に継起ダブルアクセント(Sequential double accents)と呼んでおく。

音響特性を見ると/to/から/na/にかけて一定の急峻な下降 (傾き: -0.44 ST/FR, FR: フレーム 10 msec) があり、かつ撥音/N部ではさらに急峻な下降となる。このため、二つのうちのどちらのアクセントとしても判断することが可能となると考えられる。

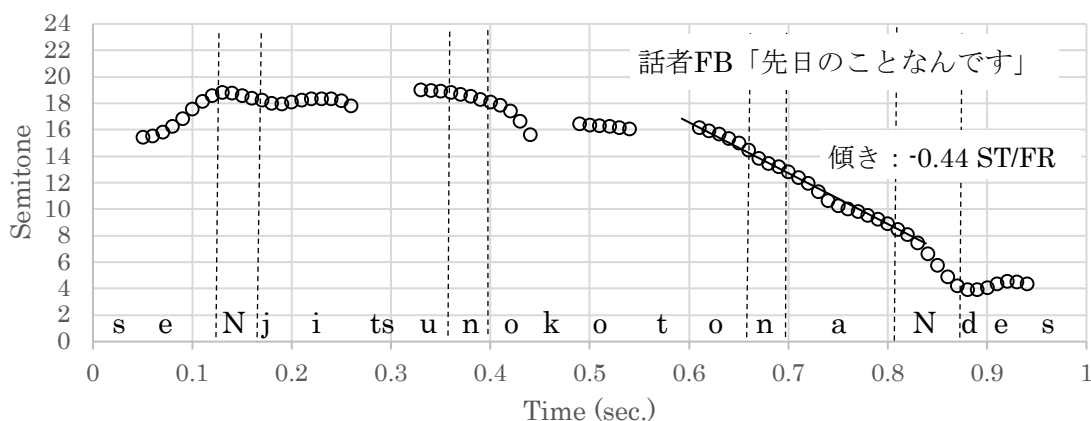


図 21 継起ダブルアクセントとその音調パターン

「～なんです」という後接要素は単独発話では「な」にアクセントがあるが、ゆっくりとした丁寧な発音では、前部に平板型アクセントの語がくる場合に「なんです」のアクセントが実現する（鼻+なんです→/hanana]Ndesu/）。一方、アクセントのある語がくると前部要素のアクセントが優先され、後部要素のアクセントは抑圧されてしまう（花+なんです→/hana]naNdesu/）。連続発声や自由発話になると、必ずしも抑圧されずにもともとあるアクセント核の性質が顕在化するため生ずる現象ではないかと推測される。

10. 議論とまとめ

自発的に発話された独話音声进行分析資料として、発話単位の句音調と句音調を構成するアクセント音調の諸特性に関して報告した。句音調に関しては、読み上げ音声とは異なる自発発話音声特有の二様の発話様式、すなわち卓立型と非卓立型の発話様式があることを示した。アクセント音調に関しては、連続発話音声における日本語アクセントの実現形式を音調特性の面から検討した。アクセント拍における音調形式を分析するとともに、アクセント位置がアクセント拍より後部の拍に見いだされる所謂「遅下がり」現象の生起条件を分析し、「遅下がり」は、発話の音調が母音調音の onset と同期的に制御されること、アクセント音調実現のためのピッチの上昇特性、2 拍を 1 纏りとするフット単位の発話、ならびに無声子音に伴う母音の micro prosody 効果、等々と密接に関連することを明らかにした。これらの結果からアクセント句の音調構造の要素として、アクセントを生成する単位を 2 拍の動態核として捉えるモデルを提案した。しかし、動態核内前部の上昇調および動態核全体に渡る上昇調がなぜアクセント感覚をもたらすのかは未だ未解決の問題であり、アクセントの知覚実験などを含めた更なる研究が必要である。また、「遅下がり」は非常にゆっくりとした丁寧な発音では起こらないと考えられるので、「遅下がり」現象の発話速度との関連も今後の課題である。

アクセント句音調に関しては、上記の外、アクセントの動態核以降の音調の降下特性に関してアクセント単位のまとめり・終結に関わる音調下降と句終結に向かう音調下降とを区別する必要性のあることを論じた。また、日本語の 1 型アクセント以外アクセントは語頭のトーンは「低」で記述されるが、この語頭トーンは連続音声中では先行句に融合されるなど *dangling tone* として振る舞う性質があること、アクセント核が直接隣接して存在するアクセント句では、二つのアクセント型のうちどちらの型も認めることが可能である音調特性が存在することなどを報告した。

また、これらの日本語アクセント句の音調分析の結果から、アクセント動態核を含む日本語アクセン

ト句における音調パタンの構造的モデルを提案した。これによりアクセント位置（核）の移動，アクセント生成における上昇調の役割，アクセント核以降の音調降下の役割区分などにおいて，理解のし易さと検討の枠組みを提供したと考えている。

今後更に分析例を増やすとともに，統計的データの集積，音声合成手法を援用したアクセント知覚実験などによって日本語のアクセントを音調の動的振舞の面から検討を進める予定である。

謝辞 本研究は，科学研究費助成金（基盤 C）「音調動態形式に基づく日本語アクセントの研究」（19K00598）の助成を受けたものである。また，研究にあたって国立国語研究所より「日本語話し言葉コーパス」の提供を受けるとともに，同研究所のコーパス開発センター共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」の一環としても実施したものである。お世話になった関係各位に厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 五十嵐陽介・菊池英明・前川喜久雄(2006). 「報告書 日本語話し言葉コーパスの構築法 『第7章 韻律情報』」, URL: pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/document.html
- 佐藤大和(2016). 「共通語における動的音調形式とアクセント知覚」, 日本音声学会 第334回研究例会, 2016.12, 於: 十文字学園女子大学
- 佐藤大和(2017). 「アクセント核のあとピッチの急峻な降下はあるか? —ピッチの動態特性とアクセント知覚—」, 3-8-4, 日本音響学会 2017 春季研究発表会講演論文集
- 佐藤大和(2018A). 「アクセント音調の諸相とその動態形式」, 「言語資源活用ワークショップ 2018」論文集, 国立国語研究所, pp.592-599
- 佐藤大和(2018B). 「自発発話データから見たアクセントの遅下がり現象」, 第32回日本音声学会全国大会予稿集, pp.66-71
- 佐藤大和(2019). 「自然発話におけるアクセント音調の動態分析」, 「言語資源活用ワークショップ 2019」論文集, 国立国語研究所, pp.30-37
- 杉藤美代子(1980). 「“おそ下がり”考 —動態測定による日本語アクセントの研究」, pp.201-229, 徳川宗賢編「論集日本語研究2 アクセント」, 有精堂出版

執筆者連絡先: sato.hirokazu@tufs.ac.jp

原稿受理: 2020年12月14日

<論文>

アラビア語における名詞の内容節：
日本語との対照研究に向けて
**Noun content clause in Arabic:
Towards a contrastive study with Japanese**

モハンマド・ファトヒー
Mohamed Fathy

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨：本稿では、アラビア語の名詞の内容節（例えば、*ḥaqi:qatu ʔanna …/～*という事実）について考察する。先行研究では、名詞の内容節が考察対象とされず、その用法などに関する記述を欠いており、アラビア語学習者に予期しがたいものである。本稿では、どの名詞が内容節を取るかを調べ、名詞のリストを作った。そして、日本語及び英語の先行研究に見られる分析の視点や捉え方を参考に、アラビア語における内容節を取る名詞について、一考察を行い、内容節を取る動詞等との関連性を検討した。

Abstract: This paper deals with the noun content clause in Arabic e.g., the phrase *ḥaqi:qatu ʔanna*, or “the fact that...”. In previous studies, the noun content clause in Arabic was not investigated nor described, and therefore unpredictable for Arabic learners. In this paper, nouns that take content clauses were investigated and a list of these nouns was made. Then, with reference to the aspects of the analysis found in previous studies in Japanese or English, content clause taking nouns in Arabic were further analyzed and the relationship to content clause taking verbs was examined.

キーワード：内容節，補文，名詞補文化，アラビア語

Keywords: content clause, complement clause, noun complementation, Arabic

1. はじめに

本稿では、次の(1)のような表現を対象とする。

(1) حَقِيقَةٌ أَنَّ فَيْرُوسَ كَوْرُونَا أَثَّرَ عَلَيَّ حَيَاتِنَا

ḥaqi:qatu	ʔanna	vajrus	korona	ʔaθθara	ʕala:	ḥaja:tina:
fact.SG.NOM	COMP	virus.SG.ACC	corona.SG.GEN	Affect.PST.3SG	on	Life.SG.GEN-our

(コロナウイルスが私たちの生活に影響を及ぼした(という)事実)

(1)では、ʔanna(補文標識)に導かれる節「コロナウイルスが私たちの生活に影響を及ぼした」は、先行する名詞 *ḥaqi:qatu*(事実)という名詞にかかり、その意味を補充する形でその内容、すなわち事実の内容を表している。ここでは、*ḥaqi:qatu*(事実)のような名詞を主名詞、それにかかりその内容を表す節を内容節と呼び、本稿の考察対象とする。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

名詞の内容節は、どんな名詞とでも結びつき、その内容を補充できるというわけではない。また、名詞の内容を補充する表現形式には、上の (1) 節だけではなく、後述するように、先行研究において等価表現として扱われる、次の (2a) に示される名詞の名詞による表現形式や次の (2b) ~ (2d) に示される諸表現形式なども挙げられる。なお、(2a) と (2b) に見られる、補文標識の ?anna に前節する前置詞の bi は、日本語の助詞「で」のように、道具及び手段や場所などの用法があるが、本稿の第 5 節の (27) 及び (28) で見ると、それらの用法の他に、日本語の助詞「と」のように、内容を表す用法が見られるため、下記のグロスでは、意味を割り当てずに、bi と表記する。

(2)

a	bi-?anna ?amala-hu bi-COMP work.ACC-his	بِأَنَّ عَمَلَهُ إِنْتَهَى intaha: finish.PST.3S (彼の仕事が終わった)	رِسَالَةٌ risa:latun (メッセージ)
b	bi- intaha:? bi-finishing.GEN	بِإِنْتِهَاءِ عَمَلِهِ ?amali-hi work.GEN-his (彼の仕事の終了)	
c	fi:-ha: ?anna ?amala-hu in-it COMP work.ACC-his	فِيهَا أَنَّ عَمَلَهُ إِنْتَهَى intaha: finish.PST.3S (その中に彼の仕事が終わったこと (が書かれている))	
d	taqu:l ?inna ?amala-hu say.PRS.3SG COMP work.ACC-his	تَقُولُ إِنَّ عَمَلَهُ إِنْتَهَى intaha: finish.PST.3S (彼の仕事が終わったと言う)	
	.		
	.		
	.		

(2a) ~ (2d) に示される諸表現形式は、Dixon (2006) の用語を借りて言えば、(2a) は、Complement clause (補文節)、補文節と同様な機能を果たすとされる (2b) ~ (2d) の表現形式は Complementation strategies (補文化ストラテジー)¹になる。

本稿では、(2a) ~ (2d) に示される諸表現形式のうち、(2a) における節による内容補充のみを考察対象とする。ただし、内容節をとりうる一連の名詞が、(2b) のような動名詞 (名詞化のストラテジー) を用いた内容節をとるかどうかなについては別途確認する必要がある。というのは、(2b) は (動) 名詞

¹ 具体的に言えば、(2b) は、Nominalization strategy (名詞化のストラテジー)、(2c) は、Relative clause strategy (関係詞節のストラテジー) になる。(2d) に関しては、該当するストラテジーがないが、関係文のような名詞修飾の表現が用いられているため、Relative clause strategy (関係詞節のストラテジー) と見てもよいだろう。

intaha:? (終了) と名詞 ʕamali (仕事) という二つの名詞の結びつきによる表現形式であり、先行研究においては、このような名詞による名詞の修飾表現は、本稿でいう内容節の等価表現として扱われるからである。

どの名詞が内容補充を受けることができるのか、またはどのような表現形式による内容補充なのかという情報を先行研究や学習書で調べると、記述が見当たらず、また、Badawi et al. (2016) を除き、用例の掲載も見られない。辞書に関しても、節による内容補充の用例が見られるものの、少数の名詞にしか見られず、情報が十分であると言えない。このように、名詞の内容節は、アラビア語学習者にとって予期しがたいものであり、しばしば誤りをおかす。次の (3) は、大学4年間アラビア語を専攻にした学習者による訳文である。

(3) عِنْدَمَا تَنْظُرُ لِلرَّسْمِ ٢، تَعْرِفُ عِلَاقَةَ أَنَّ نِسْبَةَ تَأْيِيدِ الْحِزْبِ الْإِسْتِرَاقِيِّ تَرْتَفِعُ إِذَا انْخَفَضَتْ نِسْبَةُ تَأْيِيدِ الْحِزْبِ
 اللِّبْرَالِيِّ

ʕindama:	nandʕuru	li-rrasm	2	naʕrifu	ʕalaaqata	?anna	nisbata	ta?yyi:di
when	look.PRS.1PL	to-ART-chart.GEN	2	know.PRS.1PL	relationship.ACC	COMP	ratio.ACC	support.GEN
l-hizbi	l-iftira:kiyyi	tartafi?u	?iða:	inxafadʕat	nisbatu	ta?yi:di	l-hizbi	
ART-party.GEN	ART-socialist.GEN	rise.PRS.3SG	if	decrease.PST.3SG	ratio.NOM	support.GEN	ART-party.GEN	

l-libra:liyyi

ART-liberal.GEN

(図2を見ると、1960～70年代は自民党の支持率が下がれば社会党の支持率が上がるという関係だったが、…) 「ニッポンドットコムより?」

(3) では、(1) と同様に、名詞 ʕalaaqatu (関係) がそれに後続する?anna に導かれる名詞節による内容補充を受ける構造になっている。しかし、名詞 ʕalaaqatu (関係) は ?anna に導かれる名詞節による内容補充を受ける名詞ではなく、(2) におけるような意味関係が成立しない。なお、(3) の訳文を訂正すると、名詞修飾表現以外の表現形式を使うことになる。

このように、アラビア語の研究では、名詞の節による内容補充に関する研究及び記述が欠いており、名詞の視点から名詞の内容補充を研究する必要がある。本稿では、アラビア語における内容節による内容補充を受けられる名詞を調べることを目的とする。具体的に、どの名詞が内容補充を受けられるのか、また、どの名詞が内容補充を受けられないのかということ調べ、今アラビア語を第2言語として習得もしくは使用する者が必要とすると考えられる最低限の情報を調べ、提供する。

本稿の構成は次の通りである。第2節では、日本語及び英語の先行研究を参考に、「内容補充」という概念を整理し、内容補充を受ける名詞の捉え方に関する記述を概観する。第3節では、筆者が調べた先行研究の中で唯一名詞の内容節の用例を掲載した Badawi et al. (2016) による内容節の用法記述をまとめる。第4節では、本稿の調査内容を述べる。まず、データ収集及び分析を説明し、調査結果を提示する。第5節では、日本語及び英語の先行研究に見られる捉え方を参考に、アラビア語における内容節を取る名詞について一考察を行う。

² <https://www.nippon.com/ja/in-depth/a01104/>

2. 「内容補充」概念と内容補充を受ける名詞について

これまで適切に説明もせず「内容補充」という言葉を使ってきたが、いったい「内容補充」とはどのような概念であろうか。また、内容補充を受ける名詞には、どのようなものがあるのか。ここでは、この2点について日本語及び英語の先行研究に見られる記述を概観する。

次に、まず (1) の英訳を挙げ、英語の先行研究の記述から見て行く。

(1) The fact that Covid-19 affected our life

(1') における下線部の **that** 節は、先行する名詞 **fact** (事実) に対して **complement clause** (補文節) として意味的に補足 (**complement**) する。Quirk et al. (1985) は、この名詞と補文節との間の関係、いわゆる **complementation** (補文化) を次のように定義する。

“... a part of a phrase or clause which follows a word, and completes the specification of a meaning relationship which that word implies”

Quirk et al. (1985:1150)

「ある語に後続する句及び節の一部で、その語が含意する意味的關係の明細を補足する」
(和訳は筆者による。以降も同様.)

「事実」という意味のこの名詞、いわば抽象名詞は、それ単独で意味的に充足しておらず、通常どういふ事実なのかという意味的限定、すなわち事実とされる事柄がなければ、談話の場に持ち出すことができない。補語を要求する動詞のように、この種の名詞が持つ内容もしくはその中身には意味的空所のようなものがあると考えられ、この意味的空所を補う必要がある。なお、名詞の内容を補う働きの **that** 節は、補文節の他に、Jespersen (1927), Zandvoort (1965), Huddleston (1984), Huddleston & Pullum (2002) などでは、**content clause** (内容節) と呼ばれている。この命名からも窺えるように、名詞の内容を表す節として捉えられている。Zandvoort (1965) は次のように述べている。

“... they (=content clauses) express the 'contents' of the noun on which they depend, ...”

Zandvoort (1965:222)

「内容節は、それが従属する名詞の「内容」を表し…」

英語では、どのような名詞が内容節を取るかについては従来から様々な考察がなされてきたが、三省堂『現代英文法辞典』において「情報内容の存在を前提とする抽象名詞」と定義されるように、また、Quirk et al. (1985:1260) が **general abstract noun** としているように、一般的な抽象名詞が内容節を取るとされている。更に、内容節を取る抽象名詞には、次の3通りがあるとされている。

- (4) a. 本来名詞の形でしかないもの : **fact** (事実), **idea** (考え) など
- b. 動詞から派生されたものや同じつづりで動詞として使われるもの : **belief** (信仰), **knowledge** (知識) ; **answer** (答え), **report** (報告) など
- c. 形容詞から派生されたもの : **certainty** (必然性), **possibility** (可能性) など

そして，(4b) や (4c) の名詞は，その基体となる動詞や形容詞が *that* 節などを目的語として取るものが多い。次に，例を挙げる。

(5) a. The police reported that the drugs had been found.

(警察は麻薬が見つかったと報告した。)

b. The police report that the drugs had been found (appeared in the press today)

(麻薬が見つかったという警察報告 (は今日報道された))

Quirk et al. (1985:1261)

どのような名詞が内容節を取るかについては，考察視点としては上記の他に，名詞の意味という観点からも考察がなされており，同じ範疇的な意味に属する名詞がどういう構文的もしくは意味的特徴を持つかなどに関する記述が行われているが，本稿の調査目的とは直接的に関係がないことから，ここでは内容節を取る名詞の意味的な分類に触れないことにする。

以上，英語の先行研究に見られる「内容補充」及び内容補充を受ける名詞の捉え方について述べた。

次に，日本語の先行研究に見られる記述をまとめる。

名詞の内容補充は，「外関係」の連体節の意味的機能とする記述が寺村 (1993) に見られ，ここでは，寺村 (1993) に見られる記述を取り上げるが，その記述を取り上げる前に，まず，「外の関係」の連体節について簡潔に説明する。

(6) 川に着陸した飛行機

cf. 飛行機が川に着陸した。

(7) 川に飛行機が着陸したという話

cf. 飛行機が話 {*が，*を，*に，*で，…} 川に着陸した。

(6) では，「飛行機が川に着陸した」という書き換えで示されるように，下線部の節内に主名詞「飛行機」を復元できる。言い換えると，主名詞が節の「内」にある。それに対して，(7) では，「飛行機が話 {*が，*を，*に，*で，…} 川に着陸した」に示されるように，主名詞は節内に復元できない。つまり，主名詞が節の「外」にあると言える。寺村 (1993) は，(6) のタイプを「内の関係」，(7) のタイプを「外の関係」と呼んでいる。

「内の関係」と「外の関係」との違いは上記のような構文的なものだけではない。寺村 (1993:197) は主名詞に対して付加的な修飾をする「内の関係」に対して，「外の関係」の節が「底の名詞を『内容補充的』に修飾している」と指摘し，「外の関係」の主名詞に対する働きを「内容補充」としている。

(1') の名詞 *fact* と同様に，〈話されたこともしくは話されていること〉を意味する日本語の「話」は，それだけでは，何が話されたか，話された内容が分からない。すなわち，話された内容，すなわち「話」の中身が意味的な空所になっていると考えられ，それを補う必要がある。この意味的な空所は，(7) の下線部のような内容節による情報で埋められている。

どのような名詞が「外の関係」の連体節の主名詞になるかについては，主に内容節による補充の仕方と名詞の意味という2つの観点から考察が行われている。次に，寺村 (1993) が挙げている名詞タイプに沿って，寺村 (1993) の記述をまとめる。

寺村 (1993) は「外の関係」の連体節の主名詞となる名詞を意味的に次の4種類に分類している。

- ア. 「発話・思考」名詞: 「手紙」「申し出」「誘い」「命令」 / 「思い」「考え」「想像」「意見」
- イ. 「コト」を表す名詞: 「事実」「運命」「習慣」「可能性」「仕事」「方法」「準備」
- ウ. 「感覚」の名詞: 「姿」「形」「音」「匂い」「味」「感触」「絵」
- エ. 「相対性」の名詞: 「前」「前日」「上」「下」「理由」

寺村 (1993) は主名詞と、節によって表される内容との間の意味関係に着目し、「ふつうの内容補充」と「相対的内容補充」という二つのタイプを立てている。上のア～ウの名詞は、「ふつうの内容補充」を受ける名詞であり、上のエの「相対性」の名詞は、主に「相対的内容補充」を受けるとしている。「ふつうの内容補充」では、節が主名詞の内容をそのまま補充しているタイプであるが、「相対的内容補充」は、補充部が主名詞の内容をそのまま補充しているとは言えないタイプである。例えば、

(8) 火事が広がった原因は空気が乾燥していたことだ。 寺村 (1993:199)

(8) の「火事が広がった」は主名詞「原因」の内容ではなく、「空気が乾燥していた」という「原因」による結果であり、「原因」の内容を表しているのは、主節である。このように、上のア～エの名詞のうち、エの「相対性」の名詞は、異なった振る舞いを見せていることが分かる。

前記の名詞の意味的分類のア～ウのうち、アの「発話・思考」名詞と「感覚」の名詞に関しては、寺村 (1993) は、名詞の内容補充表現は、ある内容が文に近い形で表される点において、「言う」、「思う」、「見る」などの動詞の内容を補充する「ト」の引用節や、「ノ・コト」の名詞節と共通していると捉え、上の (4) や (5) で見た英語における捉え方のように、「ト」の引用節や「ノ・コト」の名詞節を取る動詞と、名詞の内容補充表現の主名詞となる名詞との間の意味的な対応関係に注目している。更に、前記のア～ウの名詞の中には「手紙」や「絵」などのような表現作品を表す名詞があることから、寺村 (1993) が考える動詞と名詞との間の対応関係は形態的なものの他に、意味的なものも含まれていると言える。

「コト」を表す名詞に関しては、寺村 (1993) は、「発話・思考」名詞や「感覚」の名詞と異なり、「言う」や「思う」や「見る」などといった、発話・思考や感覚による認識を表す動詞に関係づけることはできないが、その内容を文の形で表すことができるとしている。

以上、英語と日本語の先行研究に見られる「内容補充」及び内容補充を受ける名詞の捉え方を概観した。次の第3節では、Badawi et al. (2016) に見られる名詞の内容節を取り上げ、内容節の捉え方を見て行く。

3. Badawi et al. (2016³) における記述

第1節で述べたように、アラビア語の先行研究や学習書で調べると、名詞の内容補充に関する記述が見当たらず、用例の掲載が見られたのは、Badawi et al. (2016) のみである。ここでは、本稿の考察対象に該当するに見られる例を引用し、Badawi et al. (2016) に見られる記述をまとめる。なお、用例の掲載は、補文標識?an と?anna の記述に見られ、先に、?an の例を引用する。

³ 初版は2004年。

(9) اِحْتِمَالٌ أَنْ تَكُونَ الْكَنِيسَةُ قَدْ أُفِيْمَتَ فَوْقَ مَعْبَدِ رُومَانِيٍّ⁴

ihtima:lu ?an taku:na l-kani:satu qad ?uqi:mat fawqa maʕbadin ru:ma:niyyin
possibility.NOM COMP be.PRS.3SG ART-church.NOM PTL.erec.PST.PASS.3SG over temple.GEN roman.GEN

the possibility of the church having been erected over a Roman temple

(教会が古代ローマ神殿の上に建てられた可能性) (和訳は筆者による。以下も同様。)

(Badawi et al. 2016:663)

(10) وَقَالَ إِنَّ الْوِزَارَةَ تَدْرُسُ إِمْكَانِيَّةَ أَنْ تُصَيِّحَ الْمُسْتَشْفِيَّاتِ التَّخْصُصِيَّةُ ... شِبْهَ خَاصَّةٍ

wa qa:la ?inna l-wiza:rata tadrusu ?imka:niyyata ?an tusʕbiha
and say.PST.3SG COMP ART-ministry.GEN study.PRS.3SG possibility.ACC COMP become.PRS.3SG

l-mustaffaya:tu t-taxasʕusʕiyyatu ... ʕibha xa:sʕatin
ART-hospitals.NOM ART-private.NOM semi.GEN private.GEN

and he said that the Ministry is studying **the possibility of** the private hospitals... **becoming** semi-private

(そして彼は，省は民間病院が…準民間になるという可能性を検討していると言った)

(Badawi et al. 2016:663)

(11) قَالَ إِنَّهُ يَمْجَرِدُ أَنْ عَلِمَ جَاءَ عَلَى الْقَوْرِ

qa:la ?inna-hu bi-muzarradi ?an ʕalima za:?a ʕala: l-fawri
say.PST.3SG COMP-PRON.3SG at-abstract.PASSPTCP COMP know.SGPST.3 come.PST.3SG immediately

he said that **as soon as he found out** he came immediately

(彼はそれを知った直後にすぐに来たと言った)

(Badawi et al. 2016:664)

(9) ~ (11) は，Badawi et al. (2016) が *complementizer* (補文標識) としている ?an の例として挙げている。(9)における名詞 ihtima:l (蓋然性/可能性) や (10)における名詞 ?imka:niyyata (可能性) は，実質的な意味で用いられるのに対して，(11)の名詞 muzarradi は，本来，「抽象されたもの」を意味する，いわゆる受動分詞であり，アラブ伝統文法においては，名詞として扱われるものであるが，(11)に示されるように，受動分詞及び名詞から「~あと」という意味の接続詞へと転成し，文法化したと考えられる。

主名詞と節との間の構造的な関係については，Badawi et al. (2016) は，*annexation* (付加) の結びつきを成しているとしている。付加の結びつきとは，アラビア語の文法学の用語である「イダーファ」の訳語であろうと考えられ，日本語の「~の~」でいうような名詞による名詞修飾の結びつきのことである。日本語の文献には，「属格関係」と訳されることが多い。先行する名詞とそれに後続する ?an 節の関係を「付加の結びつき」とする理由は，下記の引用にあるように，?an 節が名詞に置き換えることができるとされるからである。

Badawi et al. (2016:657) は補文標識の ?an については，下記のように説明している。

'an أَنْ is known as 'an al-maʕdariyya أَنْ المصدرية 'the verbal noun 'an أَنْ' owing to the general substitutability of its verbal clause with the verbal noun. In theory, any

⁴ 母音記号及びグロスは筆者による。英訳は Badawi et al. (2016) により引用している。転写は，本稿の転写方法に従う。以降も同様。

'an أَنْ clause can be replaced by a verbal noun. 'an أَنْ clauses can function as subject, object, predicate, or in any other nominal function.

(Badawi et al. 2016:663)

(('an (アン) は, 'an al-mašdariyya (アン・アルマスダリーヤ)「動(詞的)名詞の 'an (アン)」と呼ばれる。それは、動詞を含む'an (アン) 節を動名詞に置き換えられるからである。理論上は、どの'an (アン) 節でも動名詞に置き換えることができる。'an (アン) 節は、主語、目的語、述語、またはその他の名詞的な機能を担うことができる。)

名詞句に置き換えられるため、名詞(句)に後続する'an 節及び後述する'anma 節と先行する名詞との統語的關係を「イダーファ」、すなわち *annexation* (付加) とするという Badawi et al. (2016) の扱いに対して疑問が残る。というのは、*annexation* (付加)、いわば名詞による名詞修飾の結びつきにおいては、名詞の意味に限定を加えるような定冠詞の al が先行する名詞ではなく、原則として *annexation* (付加) として働く後続する名詞に付くからである。しかし、本稿の (23) などに見られるように、先行する名詞、本稿でいう主名詞に定冠詞の al が付くことがあり、後続する内容節が *annexation* (付加) として働くと考えにくい。それに、Cantarino (1974:92-119) の記述からも窺えるように、アラビア語の名詞句において *adjunct* (付加部) と *complement* (補部) の区別が認められることが分かり、*annexation* (付加) は、*complement* (補部) と同様の振る舞いをするのに対して、名詞の内容節は、*adjunct* (付加部) と同様の振る舞いを見せることがある。次に、まず、Radford (1988:187-191) の例を使ってアラビア語の名詞句における *adjunct* (付加部) と *complement* (補部) の振る舞いの違いを示す。

(12) جَاءَ طَالِبٌ فِيْزِيَاءٍ بِشَعْرٍ طَوِيْلٍ لِمُقَابَلَتِيْ أَمْسٍ.
 za:ʔa t'a:libu fizija:ʔi bi-ʃaʃrin t'awi:lin li-muqa:balati: ʔamsi
 come.PST.3SG student.NOM physics.GEN with-hair.GEN long.GEN to-meeting-my yesterday

A student of physics with long hair came to see me yesterday.

(12a) جَاءَ طَالِبٌ لِمُقَابَلَتِيْ أَمْسٍ فِيْزِيَاءٍ.*
 *za:ʔa t'a:libu li-muqa:balati: ʔamsi fizija:ʔi
 come.PST.3SG student.NOM to-meeting-me yesterday physics.GEN

A student came to see me yesterday of physics.

(12b) جَاءَ طَالِبٌ لِمُقَابَلَتِيْ أَمْسٍ بِشَعْرٍ طَوِيْلٍ.
 za:ʔa t'a:libu li-muqa:balati: ʔamsi bi-ʃaʃrin t'awi:lin
 come.PST.3SG student.NOM to-meeting-my yesterday with-hair.GEN long.GEN

A student came to see me yesterday with long hair.

(12) に示されるように、(12a) における *annexation* (付加) の外置が許されないのに対して、(12b) における前置詞句の外置が可能である。このように、外置の許されない *annexation* (付加) は、*complement* (補部) の振る舞いをする事が分かる。アラビア語の *annexation* (付加) では、原則として修飾する名詞、先行する名詞に後続し、両者の間に他の修飾要素などの介在が許されない。一方、次の (13) で示されるように、名詞の内容節の場合、その主名詞との間にときの副詞などの介在が許されることがあ

る。

(13) جَاءَتْ تَعْلِيمَاتٌ أَمْسَ مِنَ الْوَزَارَةِ إِلَّا تَتَكَلَّمُ مَعَ الصَّحَافَةِ.

ʒa:ʔat	taʕli:ma:tun	ʔamsi	mina-l-wiza:rati	ʔa-lla:	<u>natakallamu</u>	<u>maʕa-sʕaħa:fati</u>
come.PST.3SG	instructions.NOM	yesterday	from-ART-ministry	COMP-NEG	speak.PRS.1PL	with-ART-media.GEN

(私たちのところに，昨日省よりメディアに話してはいけないという指示が来た.)

(13) に見られるように，太字の名詞 *taʕli:ma:tun* (指示) と下線部の内容節との間には，時の規定を表す *ʔamsi* (昨日) と 出処を表す *mina-l-wiza:rati* (省から) が介在しており，内容節が外置されている。それに，名詞 *taʕli:ma:tun* の語尾に非限定を表す *-n*，いわゆるタンウィーン⁵をとっていることから窺えるように，名詞 *taʕli:ma:tun* と内容節の関係は，*annexation* (付加) の関係ではない。というのも，「A の B」という名詞句が非限定されている場合，非限定を表す *-n* が前者の名詞 (上の (13) でいう名詞 *taʕli:ma:tun*) ではなく，後者の名詞に付くからである。

このように，名詞の内容節は *annexation* (付加) と異なる振る舞いを見せており，*annexation* (付加) としての捉え方を再検討する必要がある。

本稿の考察対象に該当するに見られる例は，他に，*compound prepositional phrases* (複合前置詞句) として働く *ʔan* 節の例の中にも見られる。次に例を引用する。

(14) بِمُجَرَّدٍ أَنْ تَتَكَوَّنَ تَبْقَى فِي الْبَيْتَةِ

bi-muzarradi	ʔan	tatakawwana	tabqa:	fi:	l-bi:ʔati
at-abstract.PASSPTCP	COMP	form.PRS.3SG	remain.PRS.3SG	in	ART-environment.GEN

as soon as they are formed they remain in the environment

(それらは形成された直後に，環境に残る)

(15) بِشَرْطِ أَنْ تَقُومَ الْفِرْقَةُ بِالْمُسَاهَمَةِ فِي تَأْتِيهِ وَتَجْهِيهِ الْمَسْرَحِ

bi-fartʕi	ʔan	taqu:ma	l-firqatu	bi-l-musa:hamati	fi:	taʔθi:θi
on-condition.GEN	COMP	carry.PRS.3SG	ART-company	out-ART-paticipation.GEN	in	furnishing.GEN

wa	taħhi:zi	l-masrahi
and	equipping.GEN	ART- theatre.GEN

on condition that the company [of actors] **takes a share in** furnishing and equipping the theatre

(劇団が劇場の備品 (の調達) や設備に貢献するという条件で)

(Badawi et al. 2016:672)

(14) や (15) における名詞の *muzarradi* (直後) 及び *fartʕi* (条件) は，前置詞の *bi* (～で) と組み合わせることで，前置詞と名詞が全体として「～した直後」や及び「～という条件の下で」という意味で慣用的に用いられている。なお，(14) の *muzarradi* (直後) は，上の (11) と同様の用法で，Badawi et al. (2016:672)

⁵ アラビア語には，英語の *a/an* に相当する不定冠詞がないが，名詞の語尾に *-n* を付け加えることで，名詞に非限定の意味を付加する。

は、複合前置詞句の場合でも、ʔan 節と名詞の間には、「付加の結びつき」、すなわち名詞による名詞の修飾関係が認められるとしている。

上記のʔan 節の他に、Badawi et al. (2016) では、(1) におけるʔanna も同様に扱われている。Badawi et al. (2016) によると、ʔanna も nominalizer (名詞化辞) という機能を持つ補文標識であり、ʔan と同様に、それによって導かれる名詞節が文において名詞の担うあらゆる機能を担うことができる。

'anna أَنْ 'that' clauses

'anna أَنْ is a nominalizer and the resulting noun phrase has various functions. 'anna أَنْ is followed by complete sentences of either nominal or topic comment type, the resulting clause becoming a noun phrase and assuming all the functions of a noun phrase.

(Badawi et al. 2016:674)

(ʔanna (アンナ) 「that 節」)

'anna (アンナ) は、名詞化辞であり、それに導かれる名詞句は多様な機能を担う。

'anna (アンナ) に後続するのは、名詞文⁶もしくは主題題述タイプの完全な文である。

'anna (アンナ) 節は、名詞句として文中の名詞句のあらゆる機能を担う。

Badawi et al. (2016) では、ʔanna 節が名詞の内容補充するような例としては、上の (1) のような典型例とも思われる例ではなく、次の (10) と (11) のように、慣用的に使われている名詞の例を挙げられている。

(16) **إِنْتَقَدَ بوشَ إِقْتِرَاحَ كلنتونَ عَلىَ أَساسِ أَنَّهُ سَيُؤَدِّي إِلىَ فُقدانِ مَليونِ شَخْصٍ لِوِطائِفِهِم**
 intaqada buʃ iqtira:ħa klintun ʔala: ʔasa:si ʔanna-hu sa-yuʔaddi:
 criticize.PST.3SG Bush proposal.ACC Clinton.GEN on basis.GEN COMP-his FUT.lead.PRS.3SG

ʔila: fuqda:ni malyu:ni ʃaxsʕin li-waðʕ: ʔifihim
 to losing.GEN million.GEN person.GEN of-jobs.GEN-their

Bush criticized Clinton's proposal **on the basis that it** would lead to a million people losing their jobs
 (ブッシュは、100 万人が職を失うことにつながるという根拠でクリントンの提案を批判した。)

(17) **عَلىَ إِعتبارِ أَنَّ الوِحدةَ هِيَ أَهمُّ أَسْئِساتِ النَّاصِرِيَّةِ**
 ʔala: iʕtiba:ri ʔanna l-wihdata hiya ʔahammu
 on consideration.GEN COMP ART-unity.GEN PRON.3SG[COP] most important.NOM

ʔususi n-na:siriyyati
 foundation.GEN ART-Nasserism.GEN

considering that unity is the most important foundation of Nasserism
 (その団結がナーセル主義の最も重要な基盤であると考えれば)

(Badawi et al. 2016:680)

⁶ アラビア語の文法用語で、名詞で始まる文のことを指す。

(14) や (15) と同様に，(16) や (17) における名詞のʔasa:si (基礎／根拠) 及び iʕtiba:ri (考慮) は，前置詞の ʕala: (～の上に) と組み合わせさせて慣用的に用いられると考えられる．というのは，ʔasa:si (基礎／根拠) 及び iʕtiba:ri (考慮) は，上記の用法以外，すなわち単独で前置詞の ʕala: (～の上に) なしでは，基本的にʔan 節を取らない．名詞のʔasa:si (基礎／根拠) に関して言えば，前置詞の ʕala: (～の上に) があって初めて「根拠」という意味を表す．

本稿では，(11) や (14) ～ (17) に見られるような名詞の扱いについて検討する余地があると考えられる．とりわけ，文法化したと考えられる (11) 及び (14) の muzarradi のような名詞や上の (16) のʔasa:si のような，一定の環境の下でしか内容節を従えないと考えられるような名詞の場合，内容節を従える他の名詞と同様に扱っていかどうか考える必要がある．

なお，Badawi et al. (2016:680) はʔanna 節についてもʔan 節と同様に，節と名詞の間には，*annexation* (付加)，すなわち名詞による名詞の修飾関係が認められるとしている．本稿の立場としては，前記の(12) と (13) で検討した構造的な関係の違いが見られるため，内容節とその主名詞との間の構造的な関係を再考する必要があると考えている．それに加え，下記の例で示すように，そもそも(動)名詞句と内容節が置き換え可能な対関係にあるとして，両者の表現の間には，意味の違いがあると考えられる．次に，上の (1) のʔanna を動名詞に置き換えてみる．

(1') حَقِيقَةُ تَأْتِيرِ فَيْرُوسِ كُورُونَا عَلَي حَيَاتِنَا

haqi:qatu	taʔθi:ri	vajrus	korona	ʕala:	ħaja:tina:
fact.SG.NOM	effect.GEN	virus.SG.ACC	corona.SG.GEN	on	Life.SG.GEN-our

(1') にも示されるように，ʔanna 節を動名詞に置き換えることができるが，動名詞が使われると，「コロナウイルスによる私たちの生活への影響の事実／真相」という解釈もできるようになり，多少の意味の変化が生じたと考えられる．筆者の意見では，この解釈の方が優先され，ʔanna 節が使われている．「コロナウイルスが私たちの生活に影響を及ぼしたのは事実だ」という解釈は，かなりの程度に文脈の支えが必要になる．

以上，Badawi et al. (2016) の記述を概観した．従来の文法書に見られない名詞の内容節に触れ，その用例を掲載しているものの，どの名詞が内容節を取るかについての言及や内容節を取る名詞のリストなどが見られない．英語や日本語の先行研究に比べて，アラビア語における名詞の内容節の記述が不十分であり，次のような疑問が残る．

- 1) 内容節とその主名詞との関係をアラビア語でいう「イダーファ (付加)」とする根拠はいったいどこにあるのか．両者の構造的な関係はどう捉えるのか
- 2) ʔan 節及びʔanna 節が動名詞と常に置き換え可能なのか．両者の表現形式にはニュアンスの違いなどがあるのか
- 3) どの名詞がʔan 節を取るのか，どの名詞がʔanna 節を取るのか

上の 1) と 2) は今後の研究課題とし，本稿では，次節で取り上げる名詞の調査に基づき，3) のどのような名詞が内容節を取るのかを検討する．

4. 本稿の調査について

4.1. データ収集及び分析

ここでは，データ収集の具体的な手順を説明する前に，アラビア語の特性とアラビア語のデータを収

集する際の留意点について述べる。

アラビア語圏では、「ダイグロシア」(diglossia) の状況が存在し、アラビア語は、事実上公的機関など文書で使用される H 変種 (high variety) である標準語 (「フスハー」と呼ばれる) を指す。一方、会話では主に各地の方言 (「アーンミイヤ」と呼ばれる) が用いられており、L 変種 (low variety) とされている。この H 変種標準語は、古典アラビア語 (Classic Arabic) またはコーランのアラビア語を基としており、何世紀にもわたって変化を遂げ、現在、現代標準アラビア語 (Modern Standard Arabic) として広く使われており、アラビア語を扱う研究の主な対象となっている。しかしながら、この現代標準アラビア語でも、Ratcliffe (2002:163) で述べられているように、「だれかの母語というわけではなく、アラビア語母語話者でも学校で学ぶしかないものである」。

本稿では、現代標準アラビア語を対象とするが、前述したアラビア語の特徴や使用状況を考慮に入れ、データの収集にあたって次の 2 点を注意する。

- 1) 古典アラビア語を重視し書かれる宗教関連などのものに関しては、現代標準語の用法を反映していると考えられないため、その用例を収集しないことにする。
- 2) 新聞記事や文学作品などのように、現代標準語を中心に、正確なアラビア語で書かれたと考えられるものから用例を収集することにする。

上の 2) でいう正確なアラビア語とは、表現が書かれる現代標準語として自然で違和感のないものとして認識できるもののことを言う。前述したアラビア語の使用状況等により、書かれる現代標準語の表現や語の用いられ方などには、口語や外国語などの影響により変化が見られる。例えば、

(18) وَصَعْتُ فِي رَأْسِي هَدَفَ أَنْ أَلْعَبَ فِي الْبَرِيمِيرَلِيغِ مَرَّةً أُخْرَى

wad'aʃtu fi: raʔs-i: hadafa ʔan ʔalʕaba fi-l-brimi:ri:gi marratan ʔuxra:
put.PST.1SG in head.GEN-my goal.ACC COMP play.PRS.1SG in-ART-PremierLeague.GEN time.ACC another.GEN

(私はまたプレミアリーグでプレーするという目標を(念)頭に置いた。)

「<https://www.shorouknews.com/>より。(2020年7月1日)」

(18) における名詞 *hadafa* (目的/目標) は、後続する *ʔan* 節による内容補充を受け、「目標」の具体的な内容及び中身が表されている。名詞 *hadafa* (目的/目標) は、本稿の調査対象の名詞であり、4.2 の (20) に示される調査結果では、内容節による内容補充が受けられない名詞となっているが、(18) に示されるように、書かれる現代標準語として内容節を取る実例がある。このような用いられ方は、ふつうは書かれる現代標準語として見られないため、本稿では、正確なアラビア語と見なさず考察対象外とする。なお、名詞 *hadafa* (目的/目標) に見られるこの統語的振る舞いの変化は、口語において内容節による内容補充が受けられることから口語による転移、もしくは 4.2 でも触れるように、動名詞による内容補充が受けられることから、「動名詞から内容節へ」という推移⁷⁾によるものとも考えられる。口語による転移なのか、表現の推移なのかという問題は、今後の研究課題とする。

次に、本調査のデータ収集方法を説明する。

アラビア語の先行研究における名詞の内容補充に関する記述は、前節で見たように、かなり限定的であり、筆者が調べた限り、内容節を受ける名詞を扱う名詞の一覧表などのようなものを掲載している研

⁷ Rohdenburg (2006) は、英語における時代によって変化する補文の用いられ方に着目し、このような変化を「大補文推移 (Great Complement Shift)」と呼んでいる。

究がない。したがって、名詞の収集作業から始める必要がある。内容節の主名詞となる名詞を収集するにあたっては、まず、日本語（寺村（1993）のいう「外の関係」の連体修飾節）及び英語（that 節及び to 不定詞句をとる名詞）に関する先行研究に挙げられる主な名詞を元に、それに対応すると考えられるアラビア語の名詞のリストアップから始めた。その結果、次のページの通り、計 183 名詞のリストができた。

すべての名詞の用例を収集し、各々の名詞が内容節による内容補充を受けられることができるかどうかなどを調べるのが困難であるため、まず、内容補充を受けられるかどうかという判断をアラビア語母語話者である筆者の内省に基いて分析を行った。ただし、母語話者でも迷う場合があったため、ブリガムヤング大学のオンラインコーパス (<http://arabiccorpus.byu.edu/index.php>) を使って、内省判断を確かめる形で用例を探すことにした。なお、用例がなく、内省判断の確認ができなかった名詞は、一つだけある。日本語の「性質」に相当すると考えられる *tʕabʕ* と *tʕibaaʕ* である。

ブリガムヤング大学のオンラインコーパスは、エジプト、ヨルダン、クウェートなど数ヶ国の新聞及び小説を収録しており、調査結果に一ヶ国のアラビア語への偏りが出してしまうという心配がない。また、名詞に接続する前置詞、定冠詞、人称代名詞などは基本検索で検索結果に表示され、一回の検索で、様々な形での名詞の実例が確認できる。更に、主名詞とそれに後続する内容節の導入詞、例えば、(1) の *haqi:qatu ʔanna* で検索すると、基本検索でキーワードの語順のままに完全に一致する用例が検索できる⁸。

なお、主名詞+導入詞という語順で検索できても、内容節が主名詞にかかり、その内容を補充するという働きをしているかどうかを確認する必要があった。例えば、上の (1) の主名詞に定冠詞をつけるだけで、次の (1'') のような意味を表すことになる。

(1'') الْحَقِيقَةُ أَنَّ فَيْرُوسَ كُورُونَا أَثَّرَ عَلَيَّ حَيَاتِنَا

al-haqi:qatu	ʔanna	vajrus	korona	ʔaθθara	ʕala:	haja:tina:
ART-fact.SG.NOM	COMP	virus.SG	corona.SG	Affect.PST.3SG	on	Life.SG.GEN-our

(コロナウイルスが私たちの生活に影響を及ぼしたのは事実だ。)

(1'') では、名詞 *al-haqi:qatu* が主語であり、その述語は、それに後続する *ʔanna* 節である。両者の間には、主題題述の関係が成り立っており、本稿の考察対象外である。本稿で考察対象としているのは、*ʔanna* 節などが名詞（句）に従属し、全体として文中に一つの名詞句として機能するものに限る。

次に、名詞の調査結果を提示する。

4.2. 調査結果

本稿の調査では、4.1 で述べた手順を踏まえ、リストアップした 183 名詞のうち、114 名詞が内容節を取ることが分かった。これらの名詞を次に挙げる。

(19) ʔan 及び ʔanna 節になる内容補充が受けられる名詞 (下線部は動名詞による内容補充が受けられない名詞)

協定	اتفاقية	予測	توقع/توقعات (ب)	保障	ضمان
言いがかり	اتهام ب	自信	ثقة في	要求	طلب (ب)
証明	اثبات	大胆さ	جرأة	野心	طموح

⁸ この検索の仕方では、後に置かれ、主名詞を修飾する形容詞がある場合の用例が検索できない。

確率	احتمال	返事, 手紙	جواب ب	習慣	عادة
必然性	احتمالية	場合, 状態	حالة	申し出	عرض
主張	ادعاء (ب)	自由	حرية	慣習	عرف
告白	اعتراف (ب)	権利	حق في	目的	غرض
信念	اعتقاد (ب)	事実	حقيقة	好奇心	فضول
仮定	افتراض	話, ストーリー	حكاية	アイディア	فكرة
提案	اقترح	夢	حلم (ب)	物語	قصة
発見	اكتشاف	特徴	خاصية	決断	قرار (ب)
感じ	إحساس (ب)	迷信	خرافة	事件	قضية
許可	إذن (ب)	スピーチ	خطاب ب	心配	قلق من
意志	إرادة	計画	خطة	話	كلام
サイン	إشارة ب	危険	خطر	主義	مبدأ
うわさ	إشاعة	危険性	خطورة	試み	محاولة
発表	إعلان	背景	خلفية	気分	مزاج
可能性	إمكانية	恐れ	خوف (من)	問題	مسألة
信仰	إيمان ب	動機	دافع إلى	責任	مسؤولية
ニュース	أخبار	誘い	دعوة (إلى)	感情	مشاعر
命令	أمر ب	証拠	دليل على/ب	問題 (トラブル)	مشكلة
希望	أمل (في)	罪	ذنب	罰 (罰すること)	معاقبة ب
願望	أمنية	意見	رأي (ب)	知識	معرفة
重要性	أهمية	返信	رد ب	情報	معلومات
声明	بيان	メッセージ	رسالة ب	意味	معنى
影響	تأثير	満足	رضا ب	格言	مقولة ب
確認	تأكيد	恐怖	رعب من	注釈	ملاحظة ب
警告	تحذير من	欲望	رغبة في	トピック	موضوع
推測	تخمين	拒否	رفض ل	予言	نبوءة ب
想像	تخيل (ب)	理由	سبب	結果	نتيجة
許可 (書)	تصريح (ب)	幸せ	سعادة (ب)	意志	نية
予想	تصور (ب)	権限	سلطة	見方	وجهة نظر
期待	تطلع إلى	勇氣	شجاعة	狀況	وضع
指示	تعليمات ب	条件	شرط	約束	وعد ب
説明	تفسير ب	気持ち	شعور (ب)	保障	ضمان
考え	تفكير في	苦情	شكوى ب/من	要求	طلب (ب)
報告書	تقرير	熱望	شوق إلى	野心	طموح
予言	تنبؤ ب	ショック	صدمة	習慣	عادة
忠告	تنبيه (ب/إلى)	困難, 難しさ	صعوبة	申し出	عرض
脅迫	تهديد ب	必要性	ضرورة	慣習	عرف

なお、第1節で述べたように、本稿では、動名詞を置き換え可能な表現として扱う先行研究のこの捉え方を検証する目的で、内容節の共起の可否と合わせて動名詞の共起の可否も検討することになっている。筆者の内省によるもののみになるが、動名詞の共起の可否を検討した結果、上記の名詞のうち、和訳に下線を引いてある6の名詞を除き、みな動名詞による内容補充が受けられることが分かった。

次に，内容節を取らない残りの 69 の名詞を挙げる．

(20) ?an 及び?anna 節になる内容補充が受けられない名詞 (*は動名詞による内容補充が受けられる名詞)

例外	استثناء	*経験	خبرة	*畏	فخ
業績	انجاز	*トリック	خدعة	*運命	قدر
*選択	اختيار	誤り	خطأ	*力	قوة ل
*準備	استعداد ل	教訓	درس/عظة	*過去	ماضي (من)
*メカニズム	آلية	*役割	دور	*例え	مثال
電報	برقية	*知性	ذكاء ل	ことわざ	مثل
*プログラム	برنامج	*記憶	ذكرى	冗談	مزحة
*歴史	تاريخ (من)	匂い	رائحة	*企画	مشروع
*商売	تجارة	秘密	سر	*シーン	مشهد
*体験	تجربة	*態度	سلوك	*様子	مظهر
*用意	تحضير ل	*政策	سياسة	*冒険	مغامرة
*訓練	تدريب	性格	شخصية	*利益	مكسب ل
*構造	تركيب ل	形	شكل	*きっかけ	مناسبة
行動	تصرف	声，音	صوت	*景色，ながめ	منظر
区別	تفرقة	絵，イメージ	صورة	*任務	مهمة
*伝統	تقليد	*プレッシャー	ضغط	*職業	مهنة
*練習	تمرين	*人の性質	طَبَع	*資格	مؤهل/مؤهلات ل
*議論	جدل حول	*方法	طريقة	*システム，体制	نظام ل
*努力	جهد/جهود ل	*事情	ظرف/ظروف	*才能	هبة
*事件	حادثة	*仕事，作業	عَمَل	*目的	هدف
*出来事	حدث	関係	علاقة	*義務	واجب
*知恵	حكمة ل	*過程	عملية	*機能	وظيفة
熱意	حماسة ل	*本能	غريزة		

動名詞の共起の可否に関しては，上記の名詞の中に，アスタリスクの付いた和訳の 51 の名詞は，動名詞による内容補充が受けられる．アスタリスクの付いていないものは，動名詞による内容補充が受けられない．

5. 考察

ここでは，第 2 節で取り上げた日本語及び英語の先行研究に見られる主な捉え方などを参考に，内容節を取る名詞について一考察を行う．

まず，内容節を取る動詞や形容詞との関連付けという観点に着目し，上の (19) の名詞の中には，内容節を取る動詞や形容詞から派生されたものがあるのかを見て行く．このような関連付けは，外国語教育の観点から実用的であると考えられる．というのも，似たような持つ語や表現は似たような統語構造に用いられる傾向があると考えれば，学習者はすでに学習した語で新しく学習する語の統語的振る舞いを予測しやすいと考えられるからである．この点については，Dixon (1992) は次のように述べている．

“Once a learner knows the meaning and grammatical behaviour of most of the words in a language, then from the meaning of a new word he can infer its likely grammatical possibilities; ...”

Dixon (1992:6)

「学習者は、ある言語のたいていの語の意味と文法的振る舞いを知ったら、新しい語の意味から、その語の可能な文法的な用いられ方を推測することができる、…」

内容節を取る動詞から派生されて名詞の有無を調べると、次の (21) に示される 56 の名詞があることが分かった。

(21) 動詞から派生された名詞

言いがかり	اتهام ب	推測	تخمين	満足	رضا ب
証明	اثبات	想像	تخيل (ب)	恐怖	رعب من
主張	ادعاء (ب)	許可 (書)	تصريح (ب)	欲望	رغبة في
告白	اعتراف (ب)	予想	تصور (ب)	拒否	رفض ل
信念	اعتقاد (ب)	期待	تطلع إلى	幸せ	سعادة (ب)
仮定	افتراض	考え	تفكير في	気持ち	شعور (ب)
提案	اقتراح	報告書	تقرير	苦情	شكوى ب/من
発見	اكتشاف	予言	تنبؤ ب	保障	ضمان
感じ	إحساس (ب)	忠告	تنبيه (ب/إلى)	要求	طلب (ب)
許可	إذن (ب)	脅迫	تهديد ب	野心	طموح
意志	إرادة	予測	توقع/توقعات (ب)	申し出	عرض
うわさ	إشاعة	話, ストーリー	حكاية	物語	قصة
発表	إعلان	夢	حلم (ب)	決断	قرار (ب)
信仰	إيمان ب	恐れ	خوف (من)	心配	قلق من
命令	أمر ب	動機	دافع إلى	試み	محاولة
希望	أمل (في)	誘い	دعوة (إلى)	罰 (罰すること)	معاقبة ب
影響	تأثير	証拠	دليل على/ب	意志	نية
確認	تأكيد	罪	ذنب	約束	وعد ب
警告	تحذير من	意見	رأي (ب)		

次に例を挙げる.

(22) ما دَفَعَ الْجَيْشَ الْمِصْرِيَّ لِإِعْلَانِ أَنْ مِصْرَ لَنْ تُصِيحَ دَوْلَةً دِينِيَّةً عَلَى غِرَارِ إِيْرَانِ

ma:	dafaʕa	l-zayʕa	l-misʕriyya	li-ʔiʕla:ni	ʔanna	misʕra	lan
RELPRN	force.PST.3SG	ART-army.ACC	ART-egyptian.ACC	to-announcement.GEN	COMP	Egypt.ACC	NEG
tusʕbiha	dawlatan	di:niyyatan	ʕala:	yira:ri	ʔira:n		
become.PRS.3SG	country.ACC	religious.ACC	on	model.GEN	iran.GEN		

(これは，エジプト軍を駆り立てて，エジプトがイランのような宗教国家にならないという
発表をさせた.)

「アルガド紙 2011 年 3 月 4 日」

(22') **أَعْلَنَ الْجَيْشُ الْمِصْرِيُّ أَنَّ مِصْرَ لَنْ تُصِيحَ دَوْلَةً دِينِيَّةً عَلَى غِرَارِ إِيْرَانِ**

ʔaʕlana	l-zayfu	l-misʕriyyu	ʔanna	misʕra	lan
announce.PST.3SG	ART-army.NOM	ART-egyptian.NOM	COMP	Egypt.ACC	NEG
tusʕbiha	dawlatan	di:niyyatan	ʕala:	yira:ri	ʔira:n
become.PRS.3SG	country.ACC	religious.ACC	on	model.GEN	iran.GEN

(エジプト軍はエジプトがイランのような宗教国家にならないと発表した.)

(23) **وَالْإِدِّعَاءُ أَنَّ فِي إِسْرَائِيلَ حُكُومَةً تَتَحَرَّكُ سِيَاسِيًّا، هُوَ إِدْعَاءٌ زَائِفٌ.**

wa	l-iddiʕa:ʔu	ʔanna	fi:	ʔisra:ʔi:la	ħuku:matan	tataħarraka	siya:siyyan
and	ART-claim.NOM	COMP	in	Israel.GEN	government.GEN	move.PRS.3SG	politically.GEN
huwa	d-diʕa:ʔun	za:ʔifun					
PRON.3SG[COP]	ART-claim.NOM	false.NOM					

(イスラエルに政治的に動く政府があるという主張は虚偽の主張である.)

「アルガド紙 2011 年 3 月 28 日」

(23') **إِدِّعَى أَنَّ فِي إِسْرَائِيلَ حُكُومَةً تَتَحَرَّكُ سِيَاسِيًّا**

iddiʕa:ʔu	ʔanna	fi:	ʔisra:ʔi:la	ħuku:matan	tataħarraka	siya:siyyan
claim.PST.3SG	COMP	in	Israel.GEN	government.ACC	move.PRS.3SG	politically.ACC

(彼はイスラエルに政治的に動く政府があると主張した.)

(22) では，主名詞ʔiʕla:n (発表) の内容はそれに後続するʔanna によって表されている．名詞のʔiʕla:n は，(22') に示されるように内容節を取る動詞ʔaʕlana (発表する／公表する) から派生されており，基体の動詞が補語としてʔanna 節を取ることを引き継いでいると考えられる．(23) の iddaʕa:ʔ (主張) も同様に，(23') に示されるように内容節を取る動詞の iddaʕa: (主張する) から派生した名詞で，基体の動詞と同様に，ʔanna 節を取る．

動詞から派生されたと考えられる名詞のうち，基体の動詞が前置詞を要求する場合，それも引き継ぐものがある．次に例を挙げる．

(24) **وَيَحْتِمُ رَائِشُ شَهَادَتَهُ بِالْتَّحْذِيرِ مِنْ أَنَّ الْأَزْمَةَ الْمَالِيَّةَ مازالت قائمةً**

wa	yaxtimu	rayf	ʕaha:data-hu	bi-t-tahði:ri	min	ʔanna	l-ʔazmata
and	conclude.PRS.3SG	Reich	testimony.ACC-his	with-warning-GEN	from	COMP	ART-crisis.ACC
l-ma:liyyata	ma:za:lat	qa:ʔimatan					
ART-financial.ACC	still	existing.GEN					

(ライシュは，金融危機がまだ続いているという警告で証言を締めくくる.)

「アッシュルーク紙 2010 年 1 月 21 日」

(24') رايش حَذَّرَ مِنْ أَنَّ الْأَزْمَةَ الْمَالِيَّةَ مازالت قائمةً

rayʃ	haððara	min	ʔanna	l-ʔazmata	l-ma:liyyata	ma:za:lat	qa:ʔimatan
Reich	warn.PST.3SG	from	COMP	ART-crisis.ACC	ART-financial.ACC	still	existing.ACC

(ライシュは、金融危機がまだ続いていると警告をした.)

(24) における主名詞 tahði:r (警告) は、動詞の haððara から派生した名詞で、基体の動詞と同様に、前置詞 min (~から) を要求する。(24) で見られるように、主名詞 tahði:r (警告) の内容を補う ʔanna 節の前に、前置詞の min が置かれている。なお、上の (19) 及び (21) の名詞一覧表では、名詞が取る前置詞が名詞の後に掲載されており、必須でない前置詞には括弧がついている。

英語の先行研究では、内容節を取る形容詞から派生された名詞に関する記述も見られるように、アラビア語にもこうした名詞の有無を調べると、形容詞から派生されたと考えられる名詞が見られないが、形容詞に類似する意味を持つ ʔimka:niyyah (可能性) や ʔahammiyyah (重要性) のような少数の名詞が見られる。アラビア語では基本的に、英語の It is ...that (ということは~である) に相当すると考えられる、min ...ʔan で使われる形容詞 (実質的に名詞として扱われる) 以外、本稿で扱っている名詞のように、形容詞が内容節を従えることがほとんどないので、形容詞から派生した名詞も内容節を従えることがないと言えるだろう。

このように、英語や日本語の先行研究に見られる捉え方の一つのアラビア語における内容節を取る名詞への応用を試み、その捉え方がある程度有効であると言えるが、内容節を従える動詞から派生したと考えられない名詞の数が少ないため、内容節を取る名詞自体の意味などに着目したアプローチが必要だと考えられる。今後は、データを増やし、先行研究に見られるように名詞の意味的な分類を行った上、同じ範疇的な意味に属する名詞の用いられ方に見られる意味的及び構文的特点を明らかにしたい。

最後に、内容節を取る名詞について触れておきたいことが2点ある。一つ目は、内容節を取る名詞に数えられるかどうかという判断に迷う名詞があったことである。二つ目は、名詞の中には、動名詞による内容補充を受けない名詞があることである。

まず、内容節を取る名詞に数えられるかどうかという判断に迷う名詞について述べる。

内容節を取る名詞の中には、動詞などと慣用的に連鎖として用いられている次の (25) に挙げる名詞がある。

(25) 慣用的に用いられる名詞

ニュース	أخبار	権限	سلطة	気分	مزاج
大胆さ	جرأة	条件	شرط	知識	معرفة
場合、状態	حالة	習慣	عادة	情報	معلومات
計画	خطة	慣習	عرف	意味	معنى
背景	خلفية	目的	غرض		
理由	سبب	好奇心	فضول		

(25) の名詞は、決まった動詞や前置詞などと共起した場合に限って、内容節を取ると考えられる。例えば、

(26) لَقَدْ كَانَتْ تَصْلِيْنِي اَخْبَارًا اَنَّ بَعْضَ اللّٰعِيْبِيْنَ كَانُوْا يَنْتَقِدُوْنِيْ
 laqad ka:nat tas'iluni: ?axba:run ?anna baʕd'a l-la:ʕibi:na ka:nu: yantaqidu:nani:
 PTL-be.PST.3SG reach.PST.3SG-me news.NOM COMP some ART-players.GEN be.PST.3SG criticize.PRS.3PL-me

(一部の選手が私を批判しているという噂を聞いていた.)

「サウラ紙」⁹

(26') *سَمِعْتُ/عَرَفْتُ اَخْبَارًا اَنَّ بَعْضَ اللّٰعِيْبِيْنَ كَانُوْا يَنْتَقِدُوْنِيْ
 samiʕtu/ʕaraftu ?axba:run ?anna baʕd'a l-la:ʕibi:na ka:nu: yantaqidu:nani:
 hear/listen.PST.1SG news.NOM COMP some ART-players.GEN be.PST.3SG criticize.PRS.3PL-me

(一部の選手が私を批判していると聞いた／知った.)

(26) の主名詞 ?axba:r (ニュース／噂) は、主語として動詞の tas'il (来る) と用いられる場合、内容節を取るが、(26') に示されるように、動詞の tas'il (来る) と共起しない場合、内容節との親和性が低くなり、非文になる。(26) の主名詞 ?axba:r (ニュース／噂) は、機能動詞¹⁰と考えられる動詞と共起し主名詞と動詞の tas'il (来る) という全体が、「聞く」という動詞に相当する意味を表していると言える。名詞 ?axba:r (ニュース／噂) のような名詞は、コーパスによる内容節が出現する用例を見る限り、決まった動詞などと共起し、名詞と動詞などから成る定型表現及び慣用句として用いられていることが分かる。なお、動詞の他に、(11) や (14) ~ (17) に見られる Badawi et al. (2016) のいう複合前置詞句のものもある。本稿では、(25) の名詞の扱いに関しては、収集した用例が少ないことなどから、判断材料が不十分であるため、内容節を取る名詞に数えることにした。今後、用例を増やすとともに、このような種の名詞の用法を検討したい。

次に、名詞の中には、動名詞による内容補充を受けない名詞があることについて述べる。

第3節で見たように、Badawi et al. (2016) では、動名詞が内容節、とりわけ ?an 節と置き換え可能であるとしているが、本調査では、?an 及び ?anna 節を取る名詞の中には、動名詞による内容補充を受けない名詞があることが分かった。これらの名詞は、次の (27) に挙げる。

(27) ?an 及び ?anna 節のみによる内容補充が受けられる名詞

説明	تفسير ب	スピーチ	خطاب ب	格言	مقولة ب
返事、手紙	جواب ب	返信	رد ب	注釈	ملاحظة ب

(27) の名詞は、みな言語活動による言語作品を表し、また ?an 及び ?anna 節による内容補充を受ける際

⁹ コーパスには、具体的な発行日付が示されていない。

¹⁰ 機能動詞は、村木 (1991:203) では、「実質的な意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的機能をはたす動詞」と定義されており、「する」を典型的な機能動詞と見なすほか、「誘いを受ける」の「受ける」のようなヴォイス的な意味、「実施に移す」の「移す」のようなアスペクト的な意味、「譲歩を示す」の「示す」のようなムード的な意味を特徴づける動詞をも幅広く機能動詞のカテゴリに取り入れている。

に、前置詞の bi の介在を必要とするという点において共通している。次に例を挙げる。

(28) **الْبَعْضُ لَدَيْهِ تَفْسِيرٌ بِأَنَّ أُوْبَامَا خَدَعَنَا، وَغَيْرَ مَوْعِدٍ وَوُضُولِهِ**

al-baʕdʰu ladaiy-hi tafsi:run bi-ʔanna ʔubama xadaʕa-na: wa
ART-some.NOM with-his explanation.NOM bi-COMP Obama.GEN deceive.PST.3SG-us and

yayyara mawʕida wusʕu:li-hi
change.PST.3SG time.ACC arrival.GEN-his

(オバマが私たちを騙し、到着時間を変更したという説明 (考え) を持っている人が何人かいる.)
「アッシュルーク紙 2009 年 6 月 5 日」

(28) に示されるように、前置詞 bi のついた ʔanna 節が主名詞 tafsi:r の内容を補充している。このタイプの名詞が必要とする前置詞 bi のこの用法が非常に興味深い。というのは、ここまで見てきた名詞の中には、一律に同じ前置詞を取るという名詞のグループがなかったからである。前置詞 bi の内容を表すという意味的機能についての記述を参考文献で見ると、Badawi et al. (2016), Ryding (2005), Wright (1991) では、言及されていないが、Fischer (1972:136) では、内容を表す前置詞 bi の例として、ʔmara bi-qatlihi (彼が彼の殺害を命じた) というように、「命令する」という動詞の目的語、いわば命令の内容を表す前置詞 bi が挙げられている。ここまで見てきた名詞を振り返ってみると、動詞から派生されたものを含み、前置詞 bi と共起する名詞は、比較的多いことが分かる。そして、そのほとんどが上の (27) と同様に、言語活動に関係する名詞であることが分かる。前置詞 bi は、どんな名詞と共起し、具体的にどのような働きをするのか検討する必要がある、今後の課題にしたい。

6. おわりに

アラビア語における名詞の内容補充の研究は、英語や日本語に比べて、十分に進んでいると言えない。Badawi et al. (2016) で見たように、名詞の「イダーファ (付加)」として扱われる ʔan 節及び ʔanna 節の文中の働きに沿っての記述しか見られず、未だ ʔan 節及び ʔanna 節を従える名詞の振る舞い及び性質などが考察対象されていない。本稿では、内容節を取る名詞の調査を行い、名詞の特性や名詞と内容節の間の意味関係に着目した研究及び記述の必要性に光を当てることができた。本稿の調査では、先行研究や教科書などに見られない内容節を取る名詞のリストを作り、英語及び日本語の先行研究に見られる名詞の捉え方などを参考に、アラビア語における内容節を取る名詞について一考察を行った。本稿では、アラビア語を第 2 言語として習得もしくは使用する者が必要とすると考えられる最低限の情報を提供することができた。今後の研究課題は、名詞の特性及び名詞と内容節の間の意味関係という視点から、アラビア語における名詞の内容補充の研究を進め、日本語と対照し名詞の内容補充の実態を解明することである。

【記号一覧】

1	first person	PASS	passive
2	second person	PASSPTCP	passive participle
3	third person	PL	plural
ACC	accusative	PREP	preposition

ART	article	PRS	present
COMP	complementizer	PST	past
COP	copula	PTCP	participle
FUT	future	PTL	particle
GEN	genitive	RELPRN	relative pronoun
NEG	negation	SG	singular
NOM	nominative		

参考文献

- 寺村秀夫.1975-1978.「連体修飾のシンタクスと意味－その1～4－」,『日本語・日本文化』4～7号,大阪外国語大学研究留学生別科(寺村秀夫(1993:157-320)に再録)
- 寺村秀夫.1993.『寺村秀夫論文集I－日本文法編－』くろしお出版
- 村木新次郎.1991.『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- Badawi, E. Carter, M. G. and Gully, A. 2016. *Modern Written Arabic: A Comprehensive Grammar. London and New York: Routledge.*
- Cantarino, V. 1974. *Syntax of Modern Arabic Prose II.* Indiana: University Press.
- Dixon, R. 1992. *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles.* Oxford: Clarendon Paperbacks.
- Dixon, R. 2006. Complement clauses and complementation strategies in typological perspective. In Dixon R. & Aikhenvald Y. (eds), *Complementation: A cross-linguistic typology*, 1-48. Oxford: Oxford University Press.
- Fischer, W. 1972. *Grammatik des klassischen Arabisch.* Wiesbaden: Harrassowitz.
- Huddleston, Rodney. 1984. *Introduction to the grammar of English*, Cambridge etc.: Cambridge University Press.
- Huddleston, R. and Pullum, G. K. 2002. *The Cambridge grammar of the English language.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Jespersen, Otto. 1927. *A Modern English grammar on historical principles III.* Heidelberg: Carl Winters Universitätsbuchhandlung.
- Karin, C. Ryding. 2005. *A Reference Grammar of Modern Standard Arabic.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and Svartvik, J. 1985. *A comprehensive grammar of the English language.* Harlow: Longman.
- Radford, A. 1988. *Transformational Grammar.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Ratcliffe, R.2002. 「アラビア語の二重言語性からみる規範と教育」,『語学研究所論集』7, pp.163-168.
- Rohdenburg, G. 2006. The Role of Functional Constraints in the Evolution of the English Complementation System. In: Christiane Dalton-Puffer, Dieter Kastovsky, Nikolaus Ritt and Herbert Schendl (eds), *Syntax, Style and Grammatical Norms*, 143-166. Bern: Peter Lang.
- Wright, W. 1991. *A Grammar of the Arabic Language.* Cambridge University Press.
- Zandvoort, Reinard W. 1965. *A Handbook of English Grammar.* 3rd ed. London: Longman.

執筆者連絡先 : moh.fathy.mah@gmail.com

原稿受理 : 2020年12月16日

<研究ノート>

Acquisition of L2 English intonation by Japanese learners¹

Hiroko Saito

Tokyo University of Foreign Studies

要旨：英語イントネーションの中で、適切な音調の選択とその実現、あるいは正しい核強勢の配置は、情報の新旧や様々な「意味」を示すのであるから、学習者であっても身につけるべき重要な方策であると言われている。しかし、そのようなスキルはいつ、どのように習得されていくのか、そもそも日本人英語学習者が授業を通じて身につけることができるものなのかということを探るべく、これまでにいくつもの研究が行われている。本研究では、44人の英語を専攻している大学生を対象に、学習者が苦手とするイントネーションの音調や核強勢を含む文を読んでもらい録音したデータを分析した。その結果、音調の種類別に習得率に明らかな差が見られることが分かった。また、イントネーションに関する授業の前と後とで習得された音調や、反対に身につけにくいものがあることもわかった。今後、効果的な教授法に結びつけられることが期待される。

Keywords: L2 English, acquisition, intonation

Introduction

Since Saito (2006), which looked at certain patterns of deviation from native-speakers' norm of nuclear-stress placement of English intonation commonly found among Japanese Learners of English, the author has been attempting to ascertain the process of acquisition of L2 English prosody.

Ueda and Saito (2010) and (2012) were such studies, which observed how students' production of tonicity (nuclear-stress placement) and knowledge of the placement rules changed over a period of time, but not necessarily in any neat and orderly fashion, and that without formal instruction, progress could not be hoped for. Not only pronunciation practice, but also formal instruction, proved to be important for L2 acquisition of intonation.

The latter study was a longitudinal one where the observation lasted for one year. However, the students had remained in a Japanese university throughout this time, carrying out studies which was not necessarily on phonetics or production skills of English, and given the difficulties of L2 intonation acquisition as observed by Jenkins (2000: 154) or Mennen (2015), it seemed essential to take a closer look at how that time was spent.

With this in mind, Saito (2018) compared two groups of students, those who remained in Japan but were given formal instruction on English intonation, and another group who spent one academic year abroad where English was spoken around them. It was found that even after spending up to ten months in an English-speaking environment, the study-abroad students' intonation was far from native-speaker-like and had not made much progress as regards placement of the nuclear stress in a sentence. The level of acquisition of tonicity, at least, was not very different from their fellow students who had remained in Japan.



The copyright for this paper is held by the author(s) and is offered under a Creative Commons Attribution 4.0 International license (CC-BY). <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.en>

¹ This study was supported by MEXT KAKENHI Grant Number 19K00757.

However, in the 2018 research the number of students who contributed the data was small—only five in each group—and also, light was not shed on the types of sentences or on the different tones required by a certain type of sentence. Therefore, the present study is another longitudinal research but this time focusing on the types of intonational phrase and the degree of difficulty of acquiring such prosodic features of English.²

Methodology: The Subjects

A total of 44 students, mainly aged between 19 and 21, who attended one of the compulsory English courses for students majoring in English (but not necessarily in phonetics or linguistics) at the Tokyo University of Foreign Studies, took part in this experiment. Nineteen students (13 females and 6 males) were taking the author's English phonetics course in the Spring Term, and 25 students (16 females and 9 males) in the Fall Term, both in the year 2019. The two classes, which were one 90-minute lessons a week for 13 weeks, covered such areas of English phonetics as connected speech, rhythm, and intonation, and the syllabus for the course was exactly the same for the two classes, except for the short reading material distributed in class.

The first recordings were conducted in June 2019 for the Spring-term class, and in November for the Fall-term class, in a quiet, empty classroom where students went in one by one to read the sentences for the TA to record. This was just before the topic of the lecture moved on to English intonation, which covered explanation on types of tone and tonicity and on different sentence types. The students were notified beforehand that they would be making a recording, but no further details were given, and so the first recording was made without prior knowledge or training of intonation. The lectures on intonation were stretched over a period of three to four weeks with a within-class exam at the end of the course. The second, after-lesson recordings were conducted at the end of the course, within the time set for the written exam—again, the students went to the classroom next-door to make their recordings, but this time they were told that it would constitute a part of their final exam. The sentences they read out and recorded were exactly the same as those used for the first recording and were shown only at the recording session: no prior practice or training using the same sentences was possible.

The Data

As was for Saito (2018), the data was collected by recording students' pronunciation of English before and after they participated in a lecture on English intonation. The subjects were given the same set of eleven sentences to read, which were printed on separate cards that they could flip through. The subjects were able to take their time looking at what they had to read and repeat as many times as they wished. The sentences were so designed that each contained items of intonation—especially tonicity and tone—regarded as causing difficulty to Japanese learners of English.

After the second recordings were made, the two sets of eleven sentences were compared for each subject, focusing on tone-type and tonicity. This was done by ear by a postgraduate student specializing in phonetics,³ and later checked by the author. It is remarkable how little the two recordings by the same subject differed. In most cases, the same speaker would produce the same type of tone and place the nuclear stress on exactly the same

² At the outset, this study had intended to compare the progress of acquisition of intonation of different sentence types by those who were given formal instruction in the classroom, in Japan, and those who had lived in an English-speaking country for a certain period of time. However, the spread of the Covid-19 pandemic and the consequent situation where almost all study-abroad programs were stopped, has made it difficult, if not impossible, to carry out the original plan.

³ I would like to thank Kimihiko Kimura, who has carried out the two sets of before- and after-lesson recordings as well as transcribed and edited the data.

syllable, whether correctly or incorrectly. However, for particular sentences, changes could be seen, for the better, as to the way the prosody was realized. The number of subjects who showed some kind of progress, by giving a more appropriate tone or tonicity in the second round, is shown with a plus sign (+) alongside the sentences in the tabulation below.

Results and Discussion

Here, the sentences have been grouped according to the number of correct readers, focusing on tone-type (fall, rise, fall-rise) and tonicity (placement of the nuclear stress). In descending order of the number of subjects who produced the correct combination of tone and tonicity for both before- and after-lesson recordings—given in [] brackets—the sentences show the type of tone by arrows, and placement of the nuclear stress in bold letters. The +numbers in parentheses show the number of students who made some kind of improvement, either of tone or tonicity, after around four 90-minute lessons on English intonation.

Group 1		【98% of cases correct on average】
1. I think you're ↘ right .		【44 correct both times】
2. (Haven't you been in touch with John yet?) No, I thought I'd be able to meet him on the ↘ bus .		【43 correct both times】
3. (Do you have something to write with?) Here, you can use my ↘ pen .		【42 correct both times】
Group 2		【76% of cases correct on average】
4. Which book did you buy at the ↘ bookshop ?		【36 correct both times】 (+3 after lessons)
5. (Would you like to come over to our house for dinner this evening?) I'd love to, but I can't. I haven't finished my ↘ homework yet.		【31 correct both times】 (+8 after lessons)
Group 3		【39% of cases correct on average】
6. In the picture, I can see a pencil and a red book on a large ↘ desk .		【19 correct cases both times】 (+9 after lessons)
7. (How was the new restaurant?) Well, ... the ↘ waiters were nice		【15 correct cases both times】 (+20 after lessons)
Group 4		【14% of cases correct on average】
8. (What's up? Why do you look so upset?) My ↘ wallet 's gone!		【9 correct cases both times】 (+6 after lessons)
9. Draw a small circle inside a ↘ larger circle.		【7 correct cases both times】 (+5 after lessons)
10. (In Japanese: 'Knowing him, I was certain that he would come to the party!') I ↘ knew John would come to the party!		【5 correct cases both times】 (+3 after lessons)
11. (I'm going to Kalamazoo this summer.) What? ↗ Where did you say you were going to!?		【3 correct cases both times】 (+8 after lessons)

The sentences in each group do indeed have common features among themselves, which point to the ease or difficulty with which the type of prosody can be acquired by Japanese learners of English. Let us look more closely at what the sentences in each group have in common.

Group 1:

Forty-two to 44 subjects, that is almost all the subjects, read the sentences in the first group with both correct tone and tonicity, before and after formal instructions on English intonation. The three sentences in this group are declarative sentences with broad focus, thus requiring a falling tone and a nuclear stress on the last content word, which in our case all happened to be monosyllabic: *right, bus, pen*. Beginning Japanese learners of English tend to place the nucleus on the last word of any sentence, and when this coincides with the nuclear-stress placement rules, the outcome is the correct answer. It could be said that the sentences in this group—declarative sentences requiring the falling tone on the last lexical item—are the easiest to acquire, coinciding with Japanese learners' pronunciation tendencies.

Group 2:

The number of subjects giving the correct pronunciation at all times decreases somewhat, when the last content word happens to be a compound: beginner- and even intermediate-level learners can be found putting incorrect compound-word stress on the last element instead of the first, for words like *bookshop* and *homework*. This seems to be what a part of the students in the second group, who ended up with an “incorrect” reading, were doing: five said *bookshop* and two put a stronger stress on the second syllable of *homework*. Moreover, Sentence 5 (*I haven't finished my homework yet.*) contains the adverb *yet* which is usually de-accented unless it receives emphatic stress, but 11 subjects seemed not to be aware of this fact and placed the nuclear stress on this last item of the sentence.

Saito (2006) looked at how and why Japanese learners of English showed a tendency to pronounce certain categories of words with a high pitch which sometimes made it sound as if the item was given a contrastive, or even the nuclear, stress. The pronoun *I* and the interrogative *which*, as well as adjectives in front of a noun (*red* book, *large* desk) are such examples. As many as 18 students were found to be applying this high pitch to some or all instances of *I* and/or *which* in the present study. However, the high-pitch phenomenon will not be taken up in this paper, as long as there was a true nuclear stress appearing later in the sentence. Indeed, those who did say *I* with a high pitch very often seemed not to have any trouble with nuclear-stress placement or with choosing the right tone for the same sentence, a fact that leads us to think that this particular category of negative transfer from Japanese stays with learners even after they progress to become intermediate learners who show improvement in other aspects of prosody production.

Group 3:

However, the Japanese English learners' tendency to pronounce prenominal adjectives with a high pitch in a sentence like 6, results in the nuclear stress being placed on *large*, thus giving the word an inappropriate contrastive accent. The 25 subjects did just that for Sentence 6 and as a result, only 19 produced the sentence correctly.

In this third group is Sentence 7, one that has the fall-rise tone, not found in Japanese, and where the tone stretches over three words or four syllables. Naturally, the nuclear stress is not on the sentence-final word, *nice*. Considering the strenuous efforts that many students exhibit in my practical phonetics courses when trying to produce this particular type of tone, I find it rather surprising that as many as 15 students out of 44 were actually able to produce the correct tone and tonicity for the recording. Moreover, as many as 20 students, who at first had no idea of how to pronounce a fall-rise tone, showed improvement in the production of this sentence by the end of

the term. Even those realizations judged to be “incorrect” showed attempts by the students to somehow produce a fall-rise tone at least, usually on the last word, *nice*.

This fall-rise tone is used for implication, and students struggle to reproduce it in class, but perhaps the very experience leaves a strong impression on the learners and that is why we are witnessing a considerably high score compared to other special intonation patterns, which all belong to the next group.

Group 4:

Although the contrastive stress on *large*, and the de-accenting of *desk* as a consequence, for Sentence 6 must have been unintentional, de-accenting of old information in Sentence 9 (the word *circle* for the second time in the same sentence) appears to pose difficulty even for intermediate students, because only seven subjects correctly pronounced this sentence for both before- and after-lecture recordings.

This and the remaining three sentences in the last group are all pronounced with a special kind of tone or tonicity by native speakers; are often presented in the latter half of an intonation textbook; and are not used very often in non-native speaker situations: “event sentences” (*My ↘wallet’s gone!*); de-accenting old or shared information (*I ↘knew John would come to the party!*); and echoing what the other person has said to express disbelief, using the rising tone for an otherwise falling, interrogative question (*↗Where did you say you were going to?*). For this last sentence, all the subjects employed the falling tone instead of the rise, except for three students, who had lived in an English-speaking environment for a certain period of time and whose English was native-speaker-like.

Concluding Remarks

Two recordings of the same set of 11 sentences were made for each of 44 intermediate- to advanced-level students of English, and their realizations of tone-type and placement of nuclear stress were analyzed. The results point to the existence of different levels of ease or difficulty with which learners of English acquire English intonation, depending on the different tone-types and tonicity required by different sentence types.

Moreover, the results of the present experiment show that explicit instruction is indeed helpful in improving the L2 learners’ acquisition of English intonation, and that there seems to be a certain order among intonation types that could be presented to the learner for efficient training leading to effective results.

References

- Jenkins, Jennifer. 2000. *The Phonology of English as an International Language: New Models, New Norms, New Goals*, Oxford University Press, Oxford.
- Mennen, Ineke. 2015. “Beyond Segments: Towards a L2 Intonation Learning Theory,” *Prosody and Language in Contact*, ed. by Elisabeth Delais-Roussarie, Mathieu Avanzi, and Sophie Herment, 171-188, Springer-Verlag Berlin Heidelberg.
- Saito, Hiroko. 2006. “Nuclear-Stress Placement by Japanese Learners of English: Transfer from Japanese,” *Prosody and Syntax*, ed. by Yuji Kawaguchi, Ivan Fonagy and Tsunekazu Moriguchi, John Benjamins, Amsterdam. pp.125-139.
- Saito, Hiroko. 2018 “A Longitudinal Study of L2 English Intonation—Does Studying Abroad Make Any Difference?” 西岡宣明・福田稔・松瀬憲司・長谷信夫・緒方隆文・橋本美喜男編『ことばを編む』

開拓社. pp.27-37.

Shibata, Yusuke., Masaki Taniguchi, and Tamikazu Date. 2015. “Teachability and Learnability of English Tonicity for Japanese Junior High School Students” *Proceedings of the Phonetics Teaching and Learning Conference 2015*. pp.83-86

Ueda, Isao and Hiroko Saito. 2010. “The Interface between Phonology, Pragmatics and Syntax,” *Proceedings of the 2009 Mind/Context Divide Workshop*, ed. by Michael Iverson, Ivan Ivanov, Tiffany Judy, Jason Rothman, Roumyana Slabakova, and Marta Tryzna, Cascadilla Press, Somerville, MA, USA. pp.116-122.

Ueda, Isao and Hiroko Saito. 2012 “Tonic Misplacement by Japanese Learners of English,” *Exploring English Phonetics*, ed. by Tatjana Paunović and Biljana Čubrović, Cambridge Scholars Publishing, Newcastle upon Tyne. pp.73-83.

執筆者連絡先: saito.hiroko@tufs.ac.jp

原稿受理: 2020年12月16日

<研究ノート>

モンゴル語文法研究ノート(1) Some notes on Mongolian grammar (1)

風間 伸次郎
Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿は主に Kullmann and Tserenpil (1996) と岡田・向井 (2006) の記述や例文をコンサルタントと検討する中で見いだされたいくつかの問題点や、その問題に関するコンサルタントの内省を記しておこうとするものである。必要に応じて若干のコーパス調査や他のアルタイ諸言語、日本語との対照言語学的考察も行う。

Abstract: This paper mainly describes the problems found while discussing the descriptions and example sentences of Kullmann and Tserenpil (1996) and Okada and Mukai (2006) with the native consultants, and the introspection of the consultants regarding the problems. If necessary, some surveys and contrastive considerations with other 'Altaic languages' and Japanese will be conducted.

キーワード: ハルハ・モンゴル語, 内省, コーパス, アルタイ諸言語, 聞き出し

Keywords: Khalkha Mongolian, introspection, corpus, Altaic languages, elicitation

1. はじめに

本稿はハルハ・モンゴル語(以下では単に「モンゴル語」とする)の文法に関して、主に Kullmann and Tserenpil (1996) と岡田・向井 (2006) の記述や例文をコンサルタントと検討する中で見出した問題点や、その問題に関するコンサルタントの内省を研究ノートとして記録しておこうとするものである。必要に応じて若干のコーパス調査や、他のアルタイ諸言語および日本語との対照言語学的考察を行う。協力して下さったコンサルタントの方の生年や出身地の情報は下記のとおりである。内モンゴル出身の話者の方には、もし内モンゴルで当該の文法形式の使用(頻度)や機能に違いがある時には、その点について御教示をいただいた。査読者のお一人の方は内モンゴルのモンゴル語に堪能な方であるらしく、内モンゴルでの状況に関するコメントをたくさん下さった。ただ覆面の査読者の方に情報元の話者の詳細を何う訳にもいかず、内モンゴルでの状況に関する情報の確認はもっぱら H 氏にお願いした。

表1: コンサルタントの情報

	コンサルタント	生年	出身地
モンゴル国	O 氏	1987	Ulaanbaatar
	J 氏	1989	Övörxangaj
内モンゴル	H 氏	1985	Bajannuur



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

なお本稿の一部については、2018年12月15日に行われた東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「モンゴル諸語における言語変容—外的要因と内的要因—」の2018年度第2回研究会で発表し、そこでモンゴル語を専門とする研究者の方々から貴重なコメントを多く賜った。ここではその個々のお名前を挙げることはしないが、記してお礼申し上げたい。そのコメントを参考にさせていただき、情報を追加し、また推敲を行ったが、なお不十分な点も多くあると思われる。研究ノートとしての性格上、考察がまだ十分にできていないと思われる問題についても広く浅く取り上げることにしたが、筆者の先行研究の無知からくる不十分な記述や、調査・検討の不十分な点等もあると思われる。今後、御批判・御指導いただければ幸いである。さらに本稿では、時間的制約その他の原因から、例文にグロスをつけることができなかった。研究ノートの段階の論考として、御容赦いただければ幸いである。

モンゴル語の文例等はキリル文字による正書法からローマ字に翻字して記した。その翻字は次のような方式に拠っている： a = a, б = b, в = v, г = g, д = d, е = je, ё = jo, ж = ž, з = z, и = i, й = j, к = k, л = l, м = m, н = n, о = o, ө = ö, п = p, р = r, с = s, т = t, у = u, ү = ü, ф = f, х = x, ц = c, ч = č, ш = š, ш = šč, ь = ’, ы = y, ь = ’, э = e, ю = ju, я = ja。特にことわらない限り、先行研究における表記も基本的に本稿による方式に統一していることに注意されたい。文例の文頭には大文字を用いたが、語や句の例の頭には大文字を用いていない。なお形態素内の母音が大文字で記されているものは、母音調和による異形態があることを示している。モンゴル文字の翻字による文語表記での大文字の子音 K は k~q の異形態のあることを示している。

2. 文法的な諸問題とそれに対するコンサルタントの内省による分析

以下では12の文法的諸問題を扱う。取り上げた問題点は良く言えば多岐にわたっているが、相互にあまり関連性のないバラバラなものとなっている。この点、御了承いただければ幸いである。2.1.~2.4. では名詞や代名詞に関連する文法的問題、2.5.~2.8. では動詞に関連する文法的問題、2.9.~2.12. では複文に関連する文法的問題を扱っている。

2.1. 「指小辞」-xAn

一般に指小辞というものはもっぱら名詞を中心とした語につくものであるが、モンゴル語におけるこの接辞は（少なくとも共時的には）基本的に名詞につかないものであるようだ。本節では主にこの点を問題にする。

Janhunen (2012: 97) は、-xAn を「名詞からの」(denominal) 派生接辞とし、「小さい物もしくは女性」(‘small objects’ or ‘female being’) を示す形式であるとしている。例には xüü 「少年」に対する xüü-xen 「少女」¹ を挙げている。さらに Janhunen (2012: 119) では、この「名詞からの」(denominal) な接辞は形容詞が中位の程度であることを示す (moderative adjective) 機能にも用いられるとし、serüün 「涼しい」 — serüü-xen 「やや涼しい」、amar 「穏やかだ」 — amar-xan 「やや穏やかだ (rather peaceful)」(ただし小沢 (1983: 18) は「簡単な：(挨拶用語として) 元気な」としている、コンサルタントの考える意味も同様で

¹ コンサルタントによれば、現在のウランバートルにおいて xüüxen は、主に25~30歳ぐらいの女性を指し示すのに使うため（さらに50歳ぐらいでも容姿のきれいな女性には使う）、16歳（~22歳）ぐらいの年齢の女性を xüüxen と言うと、失礼な感じを与えることがあるという。本来「成人しても結婚していない女」の意であると思われるが（小沢 (1983: 510) にもそうある）、現在では結婚した女性にも使うことがあるという。高校生ぐらいまでの女の子には一般に oxin を使うという。年輩の人には広く xüüxen を使う人もいるという。「(親にとっての) 娘」の意味もあり、呼びかけの時には、田舎などでは年配の人が名前のわからない子供を呼ぶ時に使うことがあるという（この場合、その子供は男の子でもよいという）。この意味は xüüxed の単数形に近い意味の語として捉えられているものと考えられる。

ある)の例を示している。岡田・向井 (2006) 〈形容詞・副詞のさまざまな表現〉² は「よく使われる形容詞・副詞の中には、むしろこの接辞が接続した形のほうが頻繁に使われるようになった結果、接辞がない場合と同じ意味に戻っているものも少なくありません」と述べ、次のような例を挙げている(訳や説明も岡田・向井 (2006) による、以下も特にことわらない限り、岡田・向井 (2006) の例文の訳や説明は岡田・向井 (2006) によるものである、太字・下線・例文番号は筆者による、以下でも同様)。

- (1) *zižig* 「小さい」 = *zižigxen* 「小さい」(語幹と同じ意味で使われる)
- (2) *bogino* 「短い」 = *boginoxon* 「短い」(同)
- (3) *ojr* 「近い」 = *ojrxon* 「近い」(同)
- (4) *cever* 「清潔な」 = *ceverxen* 「清潔な」(同)

Janhunen (2012: 129) では、この「名詞からの」(denominal) な接辞は基数詞および概数詞形につき、限界的機能 (delimitative function ‘only’) を示すとし、*arav-xan* 「10 だけ」、*arv-aad-xan* 「約 10 だけ」の例を挙げている。

たしかに *-xAn* は指小性を示す要素と言ってもよいと考えるが、この接辞は(少なくとも共時的には)基本的に名詞につかないものであるようだ。他方、上記のように形容詞、数詞につき、さらに下記のように指示詞、副詞などにもつくようだ。この点で Janhunen (2012) が ‘denominal’ 「名詞からの」派生接辞であるとしている点には問題があると考えられる。コンサルタントの内省によれば、モンゴル語の時の副詞では、*odooxon* 「ほんの今しがた」、*sajaxan* 「たった今、最近」、*önöōxön* 「最近、近頃、今しがた」、*xurdxan* 「速い、速く」(コンサルタントによれば、*xurdan* とあまり程度は変わらない感じであるという)、*önöödörxön* 「ほんの今日のことで」、*ertxen* 「幾分早く、かなり早めに、かなり以前に、前もって」などのような *-xAn* のついた形が使われ、場所の副詞では、*tijšxen* 「あそこらへん、あっちだけに」が、程度の副詞でも *ödiixön* 「これだけ (少ない)」、*tijmxen* 「まあまあな」などが使われるという。

名詞につく例外的な例としては、*narxan* 「お日様」(子供の本などに見られる)、*gacuurxan* 「小さいクリスマスツリー」(<*gacuur* 「針縦 (はりもみ)、子供向けの有名な歌に出て来る) などが挙げられる。どちらも内モンゴルでは使わないという。したがってこれはロシア語からの翻訳借用である可能性が考えられる。他方、人名などにはロシア語の影響はないようで、人名などでは *-čik(a)* (ロシア語の指小接辞) をつけるなどして、指小辞のついた形式全体をそのままロシア語から借用しているようだ。*mor'xon* 「小さい、かわいい馬」という形式も聞くことはあるが、それほど使われないという。その他、小説や詩に *xongorxon* 「かわいい恋人」、*janagxan* 「かわいい恋人」という語が出てくるといふ。ただし *xongor* は小沢 (1983: 474) では「[形・名] 清浄無垢の [人]; 恋しい [人], 愛する [人]」であり、*janag* は同じく小沢 (1983: 610) では「[形] 愛らしい, 可愛い etc.」となっているため、派生元は共に形容詞であるとみることもできる。なおコンサルタントによれば、*xongorxon*, *janagxan* のいずれも男から女を呼ぶのに用いる頻度の方が高いが、女から男に対しても使えるという。したがって Janhunen (2012) がこの接辞の機能として ‘female being’ を挙げている点も問題である。コンサルタントによれば、Janhunen (2012) の示している例である *xüü-xen* 「少女」に対して、現在、指小辞として分析されるような意識は全く感じられないという。なお小沢 (1997: 90) ではモンゴル文語における *-KAn* (*-xAn* の文語表記) について、これを基本数詞に接尾し「指小数詞」を形成するものとし、他方で「若干の実詞に接尾されて、愛称的・指小的意味を表す語を作ることもある」としている。そこで示されているのは *keü* 「男の子」> *keüken* 「可愛い男の子→女の子、乙女」、*noyan* 「貴族」> *noyaqaṅ* 「貴族の娘、一般に身分のある娘」の2例であり(訳と説明も小沢 (1997) による、順に *xüü*, *xüüxen*, *nojon*, *nojoxon* の文語表記であ

² 岡田・向井 (2006) については、〈〉内に「ステップ名」を記した。

る), いずれも女性の名詞を派生する例となっている。さらに岡田・向井 (2006) 〈形容詞・副詞のさまざまな表現〉が -xAn について次のように記述している点が注意を惹く。すなわち, (-xAn は) 「文脈や形容詞・副詞の種類によっては, その形容詞・副詞そのものではなく, 被修飾名詞のほうに対する指小を表す場合があります。日本語に訳す方法はありますが, 指小されているのがあくまでも名詞であることに注意が必要です」とし, 次のような例を示し, 次のような訳と説明を与えている。

(5) cagaan bajšin 「白い建物」 > cagaaxan bajšin 「白くかわいい建物 (『少し白い建物』ではない)」

(6) amttaj xool 「おいしい料理」 > amttajxan xool 「おいしくて素敵な料理 (『少しおいしい料理』ではない)」

モンゴル国の話者2名によれば, やはりこのような意味になるという。しかし内モンゴルでは (5) の cagaaxan は「白っぽい (色)」, (6) の amttajxan は「まあまあおいしい (料理)」を意味するという。すなわち, 内モンゴルにおいては形容詞に付いた指小辞に程度を弱める働きがあるということになる。

もし名詞の方に指小辞がつけられるのなら, 上記のような例では名詞に指小辞をつければよい, と考えられるが, 実際にはそうなるはずで, 形容詞の方に -xAn がつく形となっている。したがってこのこともモンゴル語の -xAn が名詞にはつきにくいということの間接的に示唆しているものと考えられる。

よく知られているように, モンゴル語において, 形態的には名詞と形容詞と数詞と副詞の間には明確に線を引くことができない。したがって, 指小辞が形容詞や数詞, 副詞につくとしても何も問題がないわけであるが, 他方, 名詞の方にほとんどつかない, という点については説明が難しいと考える。

なお他のアルタイ諸言語での状況を見ると, まずツングース諸語では (名詞はもちろんだが) 形容詞や数詞などにつく (筆者調査による)。トルコ語では名詞の他に形容詞にもつき, 数詞については少なくとも bir 「1」, iki 「2」についての例が確認できる (Göksel and Kerslake (2005: 60), TS CORPUS による)。まれに「急いで」を意味する副詞 çabuk に対する çabucak 「とても急いで」も使われるという (Göksel and Kerslake (2005: 60))。

2.2. 1人称複数代名詞の包括的用法

1人称単数の「私」と2人称単数の「おまえ」からなる1人称複数を表現するのに, 日本語であれば「私とおまえの二人」と表現する。これに対し, ロシア語には *my s toboj* 式の表現, すなわち「lit. 私たちとおまえ」のような表現があるが, モンゴル語にもこれと同様の表現がある。

(7) Düü bid xojoyryg xašgirmagc aav <Čimeegüj> gež xelev. 「弟/妹と私 (lit. 弟/妹(と) 私たち) の二人が叫ぶと父は『静かに』と言った。」 (Kullmann and Tserenpil (1996: 164))

内モンゴルでもこのように言うという。このような場合には, *Düü bi xojoyryg* 「lit. 弟/妹(と) 私二人を」とはモンゴル国でも内モンゴルでも言わないという。なおロシア語では *ja i ty* 「lit. 私とおまえ」のように表現することができる。

2.3. 無生の疑問代名詞 juu「何」の対格形

モンゴル語では目的語が動詞直前の位置にあり特定できない場合, 目的語は対格接辞をとらず, 何もつかない形で現れる (いわゆる不定対格形)。他方, 特定できる対象で主語に関係するものではない場合, (定)対格をとる。対格には異形態があり, 長母音, 二重母音で終わる語と *n* で終わる語の一部には -g, ž, č, g で終わる語には -ijg, i, ' で終わる語では i, ' をとって -ijg がつき, それ以外の語では母音調和にしたがって -yg / -ijg がつく (以上の記述に関しては例えば山越 (2012: 62-64) を参照されたい)。

こうした状況において, juu「何」という語は対格の取り方に下記のような不規則な面を示す。これ

は、特に他動詞文で無生物主語を嫌う³モンゴル語において *juu* 「何」という語は基本的に斜格、特に目的語で現れ、それが示す意味からいって基本的に不定の性格を持っているためであると考えられる。本節ではこの問題を扱う。

Janhunen (2012: 207-208) は、+human の疑問代名詞 *xen* 「誰」が対格形になるのに対し、non-personal な疑問代名詞 *juu* (Janhunen (2012) の表記は *yuu/n*) はふつう無語尾 (unmarked) で目的語として用いられる (ただし対格形 *yuu/n-ii.g* も確認されている) としている。そこではさらに *xen ol-son be?* 「誰が (それを) 見つけた?」と *xen-ijg ol-son be?* 「(おまえは) 誰を見つけた?」のように最小対的な対立を示す例文を挙げ、他方で *juu baj-na ve?* 「何がある?」と *juu xij-ž baj-na ve?* 「(おまえは) 何をしている?」の例文を示している (Janhunen (2012: 208))。Kullmann and Tserenpil (1996: 271) には *juu* 「何」の諸格変化形を例文によって示しているが、目的語となっている例には無語尾の *juu* の例 (*Ter juu asuusan be?* 「彼は何を訊いたのか?」) が 1 例あがっているのみである。これに対し、岡田・向井 (2006) 〈対格と不定格〉では、諸代名詞の対格形についての一覧表を示しているが、そこでは *juu* 「何」の対格形を *juug* としている (塩谷・中嶋 (2011: 197) も同じく *juug* としている)。一方で岡田・向井 (2006) 〈対格と不定格〉は、「疑問代名詞の *juu* (まれに *xen* 「誰」も) はそのままの形で対格の意味を表すことがあります。これはあくまでも一種の省略であり、不定格とは異なります」と記述し、次の例文を示している。

(8) *Či saja juu avav?* 「さっき何買った? (定)」

コンサルタントに訊いてみると、まず上の文に対格をつけて言うことはできないという。

(9) **Či saja juug avav?*

さらに目的語を全く不定のものにした次のような文でもやはり対格をつけて言うことはできないという。

(10) **Či juug avax gež bajгаа yum be?*

(11) *Či juu avax gež bajгаа yum be?* 「おまえは何を買うつもりなのか?」(コンサルタントによる作例)

したがって岡田・向井 (2006) 〈対格と不定格〉は「一種の省略」としているが、少なくとも単なる「省略」とはみなせない目的語の *juu* がある、ということになる。一方、3 人称小辞を後続させれば対格形を使うことができるという。

(12) *Či saja juug(ij) n' avav?* 「おまえは (さっきあったあの物の中から) 何を買ったのか?」(コンサルタントによる作例)

ただしコンサルタントによって微妙にその判断は異なり、書く時には *juug n'* と書く者と *juugij n'* と書く者がある。しかし話し言葉では *juugij n'* と言う方がより自然であるという。しかし 1 名はさらにこの *juugij n'* の *ij* の部分は発音されない感じがするという。なお 2 名とも *juugijg n'* とは言えないという。ただし上記の文が意図する意味を言うもっとも自然な文は *Či saja alyg n' avav?* 「おまえは (さっきあったあの物の中から) どれを買ったのか?」であるという。

岡田・向井 (2006) 〈人称関係助詞〉では、*n'* などの人称小辞が対格語尾の後ろに置かれる時、「長母音・二重母音で終わる語幹に接続された対格語尾のあとに *ij* が挿入されることもある」としており (例えば *xüü-g-ij n'*, *noxoj-g-ij čin'*, *xüü* 「子供」, *noxoj* 「犬」), 上記の要素 (*ij*) はこれであると考えられよう。

岡田・向井 (2006) 〈疑問代名詞の特殊な用法〉はさらに「事物をたずねる疑問代名詞 *juu* 「何」は、

³ 風間 (2016: 87) を参照されたい。

直接目的語として対格をとる場合でも対格語尾を省略することがありますが、助詞 *č* を後続するときにはその省略が顕著になります」と述べ、次の例を示している。

(13) *Bi odoo juu č uuxgüj.* 「私はもう何も飲みません。」

コンサルタントによれば、少なくともこの文で *juu* に対格をつけることはできないという。

(14) **Bi odoo juug č uuxgüj.*

これに対し、目的語の後ろに3人称の人称小辞を置き、*Bi odoo juug ni č uuxgüj.* とすれば、モンゴル国でも内モンゴルでも言えるという。これはその発話場面に選択肢としての具体的な飲み物が存在する場合にのみ発話可能であるという。(14) は内モンゴルでも言えなくはないが少し変であるという。査読者の方は、「内モンゴルでは発話可能であり、強い意志を表す」というコメントを下したが、この文の適格性及び解釈に関しては内モンゴル内部でもさらに方言差のあることが考えられる。なおモンゴル国でも、書き言葉としては(14)のような文が存在している可能性があるという。

Juu l avav gež. 「何も買うわけがないだろう。」のような文は反語（もしくは修辭疑問文）の例であるが、このような場合にも対格は現れることができないという。

(15) **Juug l avav gež.*

コーパス (Mongolian Corpus) を検索してみると、*juug* は49例、*juugij n'* は14例、*juug n'* は2例、*juu* は3,129例、*juu č* は573例であった。したがってやはり対格を伴った *juu* の頻度は非常に低いことがわかる（なお *juu* や *juu č* の例には自動詞主語なども多く含まれている点に注意する必要がある）。*juug* の49例の中には、*juug č* となるものが多く、23例あった。したがって *č* の前に対格形 *juug* は現れないわけではないということがわかる。その中にはさらに否定が後続する例もあるが、必ずしも多くない。なぜ *juug č* となるものが多いかについては、現時点では適切な説明をすることができていない。なお Janhunen (2012: 207) は、*yuu/n-ii.g* も確認されているとしていたが、コーパスからは1例も検索されなかった（コンサルタントによれば、キリル文字で書くとしたら *yuunyg* (翻字による) となるはずだが、やはりこのような形式は見覚え／聞き覚えがないという)。

コーパスから得られた *juug* の例は例えば次のようなものであるが、この例における *juug* の対格を落として *juu* としても特に問題はないという。

(16) *Bi üünees öör juu(g) xelex ve?* 「これ以上私は何を言うことがあろうか？」

なお、コンサルタントによれば *xen* 「誰」を対格なしで目的語として用いている例は全く思いつかない、という。

2.4. *n'* を伴って、聞き手から見た話し手の立場を示す名詞

岡田・向井 (2006) 〈人称関係助詞〉によれば、次のような文における *Eež n'* は話し手が自分のことを指すのに用いるという。つまり「聞き手から見た自分の立場」であるが、人称小辞 (岡田・向井 (2006) の用語は「人称関係助詞」) には2人称ではなく、3人称のもの (*n'*) が使われるという。

(17) *Eež n' udaxgüj očloo.* 「お母さんはもうすぐ着くよ。」

なお3人称の人物のお母さんである場合には、動詞が伝聞の形になるという。話し手 (1人称の人物) 自身の母親と解釈することはできないが、2人称の人物の母親とする解釈も可能であるという。

(18) *Eež n' irne gene.* 「(あの人の／あなたの) お母さんが来るそうだよ。」(コンサルタントによる作例)

岡田・向井 (2006) 〈人称関係助詞〉によれば、この用法でよく使われる名詞は、「家族・親族関係を表すもの (övöö「おじいさん」, emee「おばあさん」, aav「お父さん」, eež「お母さん」, ax「お兄さん」, egč「お姉さん」, düü「弟/妹」, nöxör「夫」, exner「妻」, xüü「息子」, oxin「娘」など) や、社会的関係を表すもの (bagš「先生」, najz「友人」, xögšin「友人」, ax「年上の男性」, egč「年上の女性」, düü「年下の男女」など) であるという (訳も岡田・向井 (2006) による、なおこれらは基本的に呼びかけに用いることができる語であるようだ)。ただし、「使われる名詞の範囲には個人差もある」という。

しかしコンサルタントによれば、まず nöxör n'「夫」と exner n'「妻」は全く使われない、聞いたことがないという。言えば冗談になるのではないかとのことである。

さらに xüü「息子」, oxin「娘」のように年下の家族である名詞では使用にやや制限があるという。すなわち、毎日一緒に住んでいる息子などであればやや使いにくい。

(19) **Xüü n'** udaxgüj očloo. 「(あなたの) 息子 (である私) はもうすぐ着くよ。」 (コンサルタントによる作例)

例えば上記のような文であれば、しばらく会っていなかった、というニュアンスが感じられるという。例えば何年も留学している息子が自分の母に、もうすぐ帰ることを留学先から伝えるような場合などに使う感じがするという。ただその使用は人によって異なり、よく使う人もあまり使わない人もいう。離れている時間を長く感じるかどうかについても、もちろん個人差は大きいだろうという。一般にこのような言い方は、話し相手の人物に対して優しい気持ちを込めた表現になるという。

日本語では人称代名詞の使用範囲が狭く、使えばよそよそしい感じを与えるため、特に小さい子供に対して年上の親族が話し手である自分のことを親族名詞を用いて言うことがある (例えば「おじいちゃんがやってあげようか?」, 「お父さんが持ってあげようね。」のように)。しかし年下の親族を指す親族名称にはこのような用法がない。モンゴル語でも年下の親族を指す親族名称の使用の方により制限があるのではないだろうか。ただし年下や同年配でも、親族以外を指す名詞、すなわち najz「友人」, xögšin「友人」, düü「年下の男女」などでは普通に毎日会っている関係でもこうした用法で用いることができるという (上記の名詞の各語の訳も岡田・向井 (2006) 〈人称関係助詞〉による)。

(20) **Düü n'** udaxgüj očloo. 「(あなたの) 弟/妹 (である私) はもうすぐ着くよ。」 (コンサルタントによる作例)

2.5. 授受動詞による補助動詞的表現における求心的方向の授与表現

Kullmann and Tserenpil (1996) は次のような例を挙げている。

(21) Či bosongoo ajagy min' **avaad al'**! 「おまえ、立って行くついでに私の茶碗を取ってくれ！」 (Kullmann and Tserenpil (1996: 172))

ここで al' は不変化詞であり、小沢 (1983: 18) はこの語の意味を「下さい、～して下さい」としている。この形式は、家族内など親しい間柄で年上からの命令に使われるという。この文では al' の代わりに ög (ög-「与える」の語幹命令形) を使っても意味はあまり変わらないという。しかし、次の例のように日本語の「やる」と「くれる」に当たる対立を生む場合がある。

(22) Či bosongoo ajagy n' **avaad al'**! 「おまえ、立って行くついでにあの人の茶碗を取ってくれ (私に) !」 (コンサルタントによる作例)

(23) Či bosongoo ajagy n' **avaad ög'**! 「おまえ、立って行くついでにあの人の茶碗を取ってやれ (あの人に) !」 (コンサルタントによる作例)

ただし内モンゴルでは文脈によっては(23)の文を「あの人の茶碗を（私に）取ってくれ」という意味に解釈することが可能であるという。

このように *al'* は副動詞形 V-AA_d に続けて恩恵を示す補助動詞的に用いられるのであるが、その恩恵はあくまで話者に向かう求心的なものとなる。他方、*ög-*「与える」の方は中立的であり、ここでは非求心的（もしくは遠心的）、つまり話者以外の人物へその恩恵が向かうものと考えることができる。現代日本語における「やる」は話し手から遠ざかる方向の授与（遠心的方向の授与）に用いられ、「くれる」は話し手に向かって来る方向の授与（求心的方向授与）に用いられる（日高 (2006: 186)）。両言語とも述語に人称変化を持たないが、このように授受を表す形式における対立が補助動詞もしくは補助動詞的に他の動詞に後続する形で用いられることによって、文中に主語が明示されていない状況において人称変化の不在を補って働いている面があると考えられる。なおモンゴル語におけるこの *al'* はかつて動詞語幹であったものようで、(モンゴル語と系統関係にある) 契丹語には *aliv* という形があるという（大竹 p.c.）。同じくモンゴル語族の言語であるダグール語には「受け取る」などの意味を示す *alibei* がある（恩和巴图 (1983: 4)）。なお Tsintsius i dr. (1975: 26-27) によれば、「取る」「(手を) 差し出す」などの意で全ツングースに同源語があり、モンゴル文語の語形も比較されている。チュルク諸語にも一般に *al-*「取る、買う etc.」のあることが注意される。

2.6. 移動動詞の有生性に関する主語の制限(日本語等との対照意味論)

Kullmann and Tserenpil (1996) は次のような例を挙げている。

(24) *Margaas ene tanximd tögöldör xuur **bajx bolno.*** 「明日このホールにピアノが来る。(lit. 明日にはこのホールにピアノがあるようになる)」(Kullmann and Tserenpil (1996: 192))

日本語では上記のように「来る」を用いた表現が可能であるが（筆者の内省による、なお筆者は1965年東京生まれの日本語母語話者である）、コンサルタントによれば例文(24)のような意味を表現する場合にモンゴル語で *ir-*「来る」を使うことはできないという（なおこの文自体、教科書的で硬い文体の文であり、話し言葉で言うのは変であるという）。したがってモンゴル語では無生物主語の行為として *ir-*「来る」を用いることはできないのではないかと考えた。ふつうの口語では *avčra-*「(人が) 持って来る」を使わなければならないという。*or-*「入る」を使うこともできないが、使役形にした *or-uul-* を用いて表現することはできる。ただし、人が持って来ることがわかっていれば、*ir-*も使えると判断された。

さらに、日本語では「私の本がどこかへ行ってしまった。」と言うことができるが、モンゴル語でやはり下記のような文を *jav-*「行く」を用いて言うことはできず、*dald or-*「隠れた。(lit. 見えないところに入った)」を用いて言うという。

(25) *Minij nom **alga bolčixžee.*** 「私の本がなくなりました。」(Kullmann and Tserenpil (1996: 198))

ir-「来る」よりも *jav-*「行く」の方が、このような有生性に関する制限（おそらく、さらに正確には主語が人間でなければならないという制限）は厳しいようだ。コンサルタントによれば、*Xavar iržee/irlee.* 「春が来た」は言えるが、「春が去った」という意味に対しては、**Xavar javčičee/javčilaa/javlaa/javžee.* などと言うことはできず、*Xavar duuslaa.* 「lit. 春は終わった」と表現するという。*Xavar javlaa.* と言うと、「春になったら(誰か人間が) 行った」の意味に解釈されるだろうという。ただ小沢 (1983: 605) には *Cag zöv javž bajna.* 「時計は正確に作動している」の例があるので、その動きが視覚的に捉えられるものには *jav-* 用いることができるのかもしれない。なおトルコ語では *Yaz gitti.* 「夏が去った」の例がある（竹内 (1989: 149) による）。このような移動動詞の意味論に関しては、対照的観点のみならず、今後大規模コ

ーパスから大量の例を得てその主語を分類してみるなど、多角的にかつ深く掘り下げていく必要があると考える。

2.7. 近未来を意味する過去終止形の使い分け

Janhunen (2012: 158) や Kullmann and Tserenpil (1996: 187) をはじめとする多くの先行研究では -IAA に近未来の用法があることを指摘している。他方、岡田・向井 (2006) 〈テンス(4) 非過去〉では「(近未来)の用法では、とくに -laa がよく使われますが、-žee による近未来テンスも見かけることがあります」とし、次のような例文を挙げている。

(26) Odooxon očloo. 「今すぐに行きます。」

(27) Bi ingeed⁴ üxžee. 「私はもうすぐ死にます。」

コンサルタントにこの下の文 (27) が使用される状況／文脈について訊くと、例えば父親の車を無断で使ったのだが、事故でその車を大破してしまったような場合で、「父親にひどく叱られる、困ったなあ」と感じた時に発話するのだという。なおそのような場合に **Bi ingeed üxlee.** とは言わないという。他方、もし火事や強盗などの災難で本当に生命の危機に晒された場合に直接的・主観的な判断を表現するのは **Bi ingeed üxlee.** であると言う。

他方、上記の **Odooxon očloo.** の代わりに -žee を用いて言うことはできないという (***Odooxon očžee.**)。「(私はお腹が空いて)死にそうだ」のように主観的な感情を表現する場合にも、(bi ölsöz) **üxlee.** と言い、**Üxžee.** と言うことはできないという。こうした近未来を示す -žee について、コンサルタントにはさらに次のような使用例を示してくださった。

(28) **Bi ingeed aluulžee.** 「私は今にも殺される、殺されそうだ。」(コンサルタントによる作例)

(29) **Bi ingeed duusčee.** 「私は今にも終わりそうだ。」(コンサルタントによる作例)

査読者からも指摘をいただいたが、文の主語は1人称に限られるわけではなく、モンゴル国でも内モンゴルでも2人称や3人称が主語の文も可能であるという。ひどく叱られるというような状況で使う場合もあれば、危険な状況であることを感知して話す場合もあるという。

今後のさらなる研究を必要とするが、本稿において現時点では、「主語にとって困った状況が生じるということ」をより話し手が客観的に判断した場合に、このような -žee による近未来が用いられるものと分析しておく。

2.8. 副動詞形と補助動詞の接続などについて

岡田・向井 (2006) 〈補助動詞〉は -njad- 「【V】することができない, 【V】しきれない」とし、以下の例文を挙げている(日本語訳も岡田・向井 (2006) による)。

(30) **Tesen jadan xüleene.** 「待ちきれずに待つ。」

(31) **Tüünijg üzen jadaž bajna.** 「彼を見ることができないでいます。(嫌っているの意)」

岡田・向井 (2006) 〈補助動詞〉は補助動詞のうち「よく使われるもの」の1つとしてこの形を挙げている。そこにあがっている他の補助動詞は先行する副動詞形に -ž を取るものばかりであるのに対し、jad- については -njad という形のみが掲載され -žjad- という形は挙げられていない。

⁴ 査読者の方より「ingeed の代わりに odoo をよく使う」というコメントをいただいたが、本稿のコンサルタントによれば内モンゴルにおいてそのどちらも使われるという。ただし、たしかに odooの方が使用頻度は高いと思われるという。

しかしコンサルタントによれば、-ž jad- も高頻度で使われるという。コーパスで検索すると、-n jad- は 187 例、-ž jad- は 382 例であったので、むしろ -ž jad- の方が多いという結果になった（これはやや荒っぽい検索の仕方であるので、いわゆる「ゴミ」も混じっている点で注意が必要だが、全体的な傾向をみるためには十分な数字であると考えられる）。小沢 (1983: 606) でも -n jad- が 1 例、-AAd jad- が 1 例しかあがっていないのに対し、-ž jad- の用例は 4 例あがっている。コンサルタントによれば、常に両方とも使えるわけではなく、動詞やその他の文脈要素によっておおよそどちらを使うかは決まっているという。したがって今後その条件を明らかにしていく必要がある。

岡田・向井 (2006) 〈補助動詞〉は -x gež baj- 「【V】するところだ」、-x geed baj- 「【V】しようとしている」、-xaar zavd- / -xyg zavd- 「【V】しようとする」という表現形式を示し、それぞれに下記のような例を挙げている。

(32) Garax gež bajna. 「出かけるところだ。」

(33) Tamxi tatax geed bajna. 「煙草を吸おうとしています。」

(34) Zugtaxaar zavdaž bajsan. 「逃げようとしていた。」

なお (32) の文には主語がないが、1 人称でも 3 人称でも、誰が主語でもこの文は成立するという。

-xAAr zavd- / -xYg zavd- に関してはさらに「動作主がモノやコトである無意思動詞には接続しません」とし、次の例が非文であることを示している。

(35) *boroo oroxoor zavd- (意図した意味) 「雨が降ろうとしていた。」

以上の記述を読む限りでは、上記の 3 形式 (-x gež baj-, -x geed baj-, -xAAr zavd- / -xYg zavd-) は互いにほとんど同じような意味を実現するものであるかのように見える。そこでコンサルタントにこの 3 形式の間における機能の違いを尋ねたところ、次のような違いがあることが明らかになった。Garax gež bajna. を Garax geed bajna. に変えてみると、これは次のような意味になるという。

(36) Garax geed bajna. 「(出かけてはいけないと言っておいたのに) 出かけようとしている。」(コンサルタントによる作例)

(36) の文はモンゴル国では上記の訳のような意味だが、査読者と本稿のコンサルタントによれば、内モンゴルでは出かけようとする行動を「頻繁に」行うという意味を表すという。他方モンゴル国においては、その行為が行われる時間は頻繁であっても、今まさに行われようとしている将然のものであっても、どちらでもよいという。モンゴル国ではこの文において重要な含意は「出かけてはいけないと言っておいたのに」という部分にあるという。なおこの文は 1 人称が主語でも言えるという。すなわち、例えば話者の家族がカギを忘れたのででかけないでくれと電話で連絡して来たのに対して、「(私は大事な用事があって) 出かけねばならず、(今) 出かけるところである」ということを伝えるような場合にも発話することが可能であるという。すなわち聞き手に対して何らかの不満や、不本意に感ずることがあれば言えるのだという。

岡田・向井 (2006) が挙げている上記の文も実際には次のようなニュアンスを持つという。

(37) Tamxi tatax geed bajna. 「(禁煙すると約束していたのに) 煙草を吸おうとしている。」

したがって -x geed baj- はその行為を行ってはならない、というような前提などがある状況で、その行為を行おうとしているのを目撃した場合に用いるということがわかる。なお自分でコントロールできない行為であれば、話し手自身の行為についても言うことができるという。

(38) **Untax geed bajna.** 「寝てしまいそうだ。／眠くてもうダメだ。」(コンサルタントによる作例)

ただし、この場合にも何らかの前提が必要であるという。例えば「今夜は起きていてレポートを書く
と決めていた」などのような前提がある状況でこそ使えるのだという。

これに対して、**-x gež baj-** を用いた **Garax gež bajna.** 「出かけるところだ。」や **Tamxi tatax gež bajna.** 「煙草を吸うところだ。」は単なる観察の報告であり、**-x geed baj-** が持つ上記のようなニュアンスはないという。

なお **-x gež baj-** は無生物主語による無意志的な行為でも、そのことが確実に起きることがわかっている場合であれば、使うことができるという。

(39) **Ter mod unax gež bajna.** 「あの木が倒れるところだ。」(コンサルタントによる作例)

コンサルタントによれば、上記の2形式に対し **-xAAr zavd-** は文語の形式で、もっぱら文学作品などで使われる形式であり、口語ではふつう **-x gež baj-** を使うという。

岡田・向井 (2006) 〈補助動詞〉は **-AAd üz-/ž üz-** を「～してみる」のような意味を示すものとして記述し、次のような例文を挙げている。

(40) **Idež üzlee.** 「食べてみた。」

しかしコンサルタントによれば、どちらの副動詞形に接続するかによって、主語の人称に関する違いがあるという。

まず1人称が主語である場合とした場合であるが、その場合にこの文 ((41)) を聞けば、意味はわかるが、基本的にこのような言い方はしないという。しかしかなり苦勞してやっとのことで実現した場合などには、「(私は) 食べてみたよ!」という意味を込めて次のように言うことができるという。

(41) **Ideed üzčixlee.** 「食べてみたよ!」(コンサルタントによる作例)

これに対し、内モンゴルではこの文に対して次のような二通りの解釈ができるという。

- ① なかなか食べられないものを食べられて満足していること。
- ② 我慢できず食べてみてしてしまった。

さらに内モンゴルでは **Idečixlee.** だけでもこの二つの解釈ができるという。他方、モンゴル国では **tesexgüj / tevčixgüj** 「我慢できず」のような表現を前に加えないと、②の解釈は難しいという。なお①の解釈に関して言えば、モンゴル国でも文脈によっては「満足している」のニュアンスがでるといえる。渡辺 (1997) によれば、北米インディアンのセイリッシュ語族のコモックス語では、「苦勞の末に達成した行為」も制御不能の接辞が実現する意味であるという。したがって①と②の両方の意味を広い意味での制御不能とみることが可能であると考えられる。

アスペクトの語幹拡張接辞 **-čix-** 「～て しまう」を用いたこのような場合には逆に **-ž üz-** を用いることはできないという。

(42) ***Idež üzčixlee.**

したがって **-ž üz-** は逆に制御可能なことについてしか使えないものと考えられる。2人称主語の場合には、両方の形式を使うことが可能で、両者のニュアンスの違いはないという。

(43) **Idež üz dee! / Ideed üz dee!** 「食べてみてね。」(コンサルタントによる作例)

3人称主語の場合には、**-ž üz-** を使うのがふつうで、**-AAd üz-** はやや不自然であるという。コーパス

で検索してみると、-ž üz- が 844 例であるのに対し、-AAd üz- は 89 例（-aad üz-: 39 例、-eed üz-: 21 例、-ood üz-: 20 例、-ööd üz-: 9 例）であった（ここでもゴミがないわけではないが、目視した限りそれほどゴミは存在しなかった）。したがって使用頻度には 10 倍ほどの差があり、上記のように意味的に有標で使用に制限がある -AAd üz- はあまり使われていないということがわかる。

2.9. 否定の形動詞形 -sAngüj による連体修飾の可否

否定の形動詞形 -sAngüj による連体修飾に関して、岡田・向井 (2006) 〈連体節と形動詞形, 形動詞形 (1)〉は -aagüj と同様に「主文の述語のテンスよりも前に完了していないことを表しますが、「完了するはずの出来事が最終的に完了しなかった」というある種の価値判断を含んだ否定を表します」とし、次のような例を挙げている。

(44) cagtaa **irsengüj** ojuutan / cagtaa **ireegüj** ojuutan 「時間どおりに来なかった学生」

しかしコンサルタントによれば、-sAngüj による連体修飾に対する許容度は低く、次のように文に入れてみても、-sAngüj による連体修飾は変に感じられるという。

(45) *Cagtaa irsengüj ojuutan olon bajsan. (意図した意味)「時間どおりに来なかった学生がたくさんいた。」

実際に例えば -sAngüj の形式でコーパス (Mongolian Corpus) を検索しても、文末の例ばかりであり、連体修飾している例は見つからない。

これに対し、査読者の方は「この文は内モンゴルでは不自然ではない」というコメントを下したが、本稿の内モンゴルのコンサルタントもやはり自然であると判断した。しかも上記の意味はこの文で表現する方が自然であるという。したがって形動詞 -sAn および -AA の使用には方言差があることが確認できる。

2.10. 目的語節内における主語の人称制限

モンゴル語の形動詞形もしくは形動詞形の否定形がその後ろに格を直接とり、名詞項として機能することは広く知られている。岡田・向井 (2006) 〈名詞節(1)〉では以下のような例を示している（訳も岡田・向井 (2006) による）。

(46) cagtaa **irsengüjg** 「時間どおりに来なかったコトを (対格)」

(47) margaaš javax**güjg** 「明日行かないコトを (対格)」

(48) üxrijn max id**deggüjd** 「牛肉を (ふだん) 食べないコトを (与位格)」

このうち、形動詞形 -sAn の否定形による句を用いた文例をコンサルタントに作例していただいた。

(49) Cagtaa **irsengüjg** n' medsengüj. 「(彼が) 時間どおりに来なかったことを (私は) 知らなかった。」

(50) Margaaš javax**güjg** n' medsengüj. 「(彼が) 明日行かないことを (私は) 知らなかった。」

(51) Üxrijn max id**deggüjd** n' gaixsan. 「(彼が) 牛肉を (ふだん) 食べないことに (私は) 驚いた。」

これらの文をみるとわかるように、3 人称の人称小辞を用いた文ばかりである。しかも -sAngüjg の場合、3 人称の人称小辞がないと言えないという。

(52) *Cagtaa **irsengüjg** medsengüj.

これに対し、内モンゴルでは下記のように 1 人称や 2 人称を従属節の意味上の主語とした文や 3 人称を主節の主語とした文が言えるという。

- (53) Ciniј Cagtaa irsengüј medсengüј. 「(おまえが) 時間どおりに来なかったことを(私は) 知らなかった。」
(54) Minij Cagtaa irsengüј ter medсengüј. (私が) 時間どおりに来なかったことを彼は知らなかった。」

一方、モンゴル国において -AAgüј なら 3 人称人称小辞なしで、話し手についてのことを言うことができるという。

- (55) Minij oĉoogüј ter sonsson bol uu? 「私が行かなかったことをあの人は聞いたかなあ？」(コンサルタントによる作例)
(56) *Minij oĉsongüј (n') ter sonsson bol uu?

これは完了の形動詞形 -sAn による否定形 -sAngüј が、観察による事実を報告するという意味特徴を持っているためではないかと考える。ただし今後のさらなる研究を必要とする。

なお岡田・向井 (2006) 〈名詞節(1)〉では「モンゴル語の名詞節の意味が、日本語の「コト」・「ノ」・「モノ」のどれに相当するかは、文脈で判断することになります」と述べている。しかしコンサルタントは「人間」を指すこともできるという(ただし岡田・向井 (2006) が「モノ」という語を「人間」を含んだ意味で使っているのかどうかは明らかではない)。

- (57) Cagtaa irsengüј n' oruulaagüј. 「時間通りに来なかった人を入らせなかった。」(コンサルタントによる作例)

2.11. xojno による原因・理由の連用節における終止形の使用

岡田・向井 (2006) 〈連用節(2) 原因・理由〉は原因・理由の連用節を形成する形式の一つとして xojno 「後」を取り上げ、次のように記述している。すなわち、「xojno はくだけたスタイルでのみ使われます。このうち、xojno は判断の根拠を表す「～以上」に相当します」としている。次のような例を示し、さらに「xojno による形式の節の述語は、まれに終止形になることがあります」とし、終止形にした例も挙げている。

- (58) Namajг xamt javax xojno ta juund ĉ bitgij sanaa zovooroј. 「私が一緒に行く以上、あなたは何も心配しないでください。」
(59) Namajг xamt javna xojno ta juund ĉ bitgij sanaa zovooroј. 同

しかしコンサルタントによると終止形にした上の文は言えないという。コーパスで -na/-ne/-no/-nö xojno で検索してみると、終止形が bajna であるものが 2 例のみ見出された。しかし、コンサルタントによればこれらの文でも bajna を形動詞形である bajгаа などにした方が適格な文になるという。

さらに上記の形動詞形の文では、従属節中の対格主語を主格主語にしても適格な文であり、むしろ対格主語の文の方が変に感じられるという。xojno を jum ĉin' にした方が、さらに主格主語で言いやすい文になるという。

- (60) Bi xamt javax xojno ta juund ĉ bitgij sanaa zovooroј. 「私が一緒に行く以上、あなたは何も心配しないでください。」(コンサルタントによる作例、javax はやはり形動詞形である)

ただし査読者によればこの文は内モンゴルではあまり耳にしない表現であるという。本稿の内モンゴルのコンサルタントもやはり同様の判断をした。内モンゴルでは次のように言うのが自然であるという(モンゴル文字からの翻字による、下線と太字は筆者による)。なお同様の表現はモンゴル国でも特に口語においてよく用いられるという。

- (61) Bi qamtu yabuqu yum ĉini ta yayun-du ĉu bitegei sanay_a jöbajarai.

2.12. 目的を示す連用節 V-xYn tuld における主語

岡田・向井 (2006) 〈連用節(3) 目的〉は「目的を表す連用節は、動詞の副動詞形ではなく、次のような接続形式によって表されます」とし、次のような4種類の一連の諸形式 (V-xAAr, V-x gež, V-x geed, V-xYn tuld) を示している。さらに「事物などが主語となる無意志的な動詞の場合 (『～するように』) は、-xYn tuld 以外には接続しにくくなります」と記述し、次のような例を示している。

(62) Us xurdan buclaxyn tuld galaa čanga deer tavilaa. 「水が早く沸くように強火にしました。」

しかしコンサルタントによればこの文は不自然であり、buclax 「沸く」を他動詞 bucalgax 「沸かす」にして次のように言わなければならないという。

(63) Us xurdan bucalgaxyn tuld galaa čanga deer tavilaa. 「水を早く沸かすように強火にしました。」(コンサルタントによる作例)

岡田・向井 (2006) 〈連用節(3) 目的〉は -xYn tuld に関してさらに次のような例を挙げている。

(64) Margaaš öglöö xožigdoxgüjn tuld serüülegee tavilaa. 「明日の朝遅刻しないように目覚ましをかけました。」

この文の従属節の主語と主節の主語が異なるように書き換えると、やはりそれも非文になるという。

(65) *Margaaš bi öglöö xožigdoxgüjn tuld minij eež serüüleg tavilaa. (意図した意味) 「明日の朝私が遅刻しないように私の母が目覚ましをかけました。」

したがって -xYn tuld はそれが形成する従属節と主節の間で異主語となることを許容しない、言い換えれば同主語の節どうししか接続できないものと考えられる。

3. おわりに

昨年からのコロナ禍により現地調査による言語研究の実施の難しい状況が続いている。こうした状況下にあって、幸い身近にコンサルタントの方がいらっしゃるの、今後もモンゴル語について研究しつつ、可能であれば今後もこのようなモンゴル語文法研究ノートを書き続けて行きたいと考えている。本研究ノートのタイトルを「モンゴル語文法研究ノート (1)」としたのはそのような理由による。モンゴル語研究者としては全く駆け出しであるが、他の言語からの対照的な視点から気づくこともあるのではないかと考えている。特にモンゴル (諸) 語を専門とされる研究者の方々から少しでも御批判・御叱正をいただければ幸いである。

時間を割いて例文の適格性を判断し、作例をしてくださるとともに貴重なコメントを下されたコンサルタントの方々に深くお礼申し上げたい。貴重なコメントを下された匿名の2名の査読者の先生方にも深くお礼申し上げたい。ただし本稿における一切の誤謬は筆者の責に帰するものである。

参考文献

恩和巴图. 1983. 『达汉小词典』呼和浩特：内蒙古人民出版社

Göksel, A. and C. Kerslake. 2005. Turkish A Comprehensive Grammar, New York: Routledge.

日高水穂. 2006. 「第5章 文法化」小林隆 (編) 『シリーズ方言学2 方言の文法』181-219. 東京：岩波書店

Janhunen, J. 2012. *Mongolian*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.

風間伸次郎 (2016) 「地域的・類型論的観点からみた無生物主語について」北海道大学大学院文学研究科
北方言語ネットワーク(編)『北方言語研究』6: 81-110.

Kullmann, Rita and D. Tserenpil. 1996. [2006 (第 4 版)] *Mongolian Grammar*. Hong Kong. Jenso.
Ltd. (第 4 版は Ulaanbaatar: Admon Co., Ltd.)

岡田和行・向井晋一. 2006. [2016 改訂]. 「東外大言語モジュール：モンゴル語文法モジュール」
<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn/gmod/steplist.html> (最終閲覧日 2020/12/20)

小沢重男. 1983. 『現代モンゴル語辞典』東京：大学書林

小沢重男. 1997. 『蒙古語文語文法講義』東京：大学書林

塩谷茂樹・中嶋善輝 2011. 『世界の言語シリーズ 3 モンゴル語』大阪：大阪大学出版会

竹内和夫 1989. 『トルコ語辞典』東京：大学書林

Tsintsius, V. I. i dr. 1975. [tom 1]. *Sravnitel'nyj slovar' tunguso-man'chzhurskikh jazykov, Materialy k etimologicheskomu slovarju*, Nauka, Leningrad.

渡辺己 1997. 「本土コモックス語における他動性とアスペクトにかんする一考察」環北太平洋の危機
に瀕した原住民言語の類型と歴史に関する国際共同研究研究会レジュメ

山越康裕 2012. 『詳しくわかるモンゴル語文法』東京：白水社

研究資料

Mongolian Corpus: <http://web-corpora.net/MongolianCorpus/search/> (最終閲覧日 2020/12/20)

TS CORPUS: <http://tscorpus.com> (最終閲覧日 2020/12/20)

執筆者連絡先 : kazamas@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2020 年 12 月 23 日

<研究ノート>

代名詞代用・呼びかけ表現研究の現状：

タイ語, ビルマ語, マレー語, インドネシア語, ジャワ語, 朝鮮語

**Current state of studies on pronoun substitutes and address terms:
Thai, Burmese, Malay, Indonesian, Javanese and Korean**

野元 裕樹¹, スニサー ウィッタヤーパンヤーノン (齋藤)², 岡野 賢二¹,
トゥザ ライン², 南 潤珍¹, スリ・ブディ・レスタリ³

**Hiroki Nomoto, Sunisa Wittayapanyanon (Saito), Kenji Okano, Thuzar Hlaing,
Yunjin Nam, Sri Budi Lestari**

¹ 東京外国語大学大学院総合国際学研究院
School of Language and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies

² 東京外国語大学世界言語社会教育センター
World Language and Society Education Center, Tokyo University of Foreign Studies

³ 立命館アジア太平洋大学言語教育センター
Center for Language Education, Ritsumeikan Asia Pacific University

要旨：多くの東アジア・東南アジアの言語では、親族名称など、人称名詞ではないものの人称代名詞のように話し手や聞き手を指示する代名詞代用表現が一般的に用いられる。代名詞代用表現は呼びかけ表現と分布がかなり重なる。本稿では、タイ語、ビルマ語、マレー語、インドネシア語、ジャワ語、朝鮮語における代名詞代用・呼びかけ表現に関する先行研究を統括する。2つの現象が区別されているか、用いられている名称、形式的・意味的特徴、人称代名詞との関係、英語の「なりすまし」(Collins & Postal 2012)との違いの問題を中心に取り上げる。

Abstract: Many languages in East and Southeast Asia exhibit an intensive use of pronoun substitutes, such as kinship terms, that refer to speakers and addressees in the way that personal pronouns do although they are not considered personal pronouns. The distribution of pronoun substitutes overlaps substantially with that of address terms. This study thus provides an overview of previous studies on pronoun substitutes and address terms in Thai, Burmese, Malay, Indonesian, Javanese and Korean and covers the following issues: whether the two phenomena are distinguished, the terminology used for them, their formal and semantic characteristics, their relation to personal pronouns and how pronoun substitutes differ from the so-called “imposters” (Collins & Postal 2012) in English.

キーワード：代名詞代用, 呼びかけ, 人称代名詞, 人称詞, なりすまし

Keywords: pronoun substitutes, address terms, personal pronouns, person terms, imposters

1. はじめに*

たいていの言語には、話し手・聞き手を指示する専用の語が存在する。日本語の「私」、「あなた」や、英語の I, you がそれにあたる。そのような語を本稿では議論の便宜上、人称代名詞と呼ぶこと



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

* 本研究は JSPS 科研費 JP20H01255 の助成を受けたものである。本稿で用いる略号のうちライブツイヒグロス規則にないものは、以下の通りである。HON: honorific; PART: particle

にする¹。話し手・聞き手の指示は人称代名詞以外によっても可能である。Sneddon et al. (2010) に従い、人称代名詞以外の話し手・聞き手指示表現を「代名詞代用表現 (pronoun substitute)」と呼ぶ。代名詞代用表現として最も一般的なものは、親族名称である。(1) でゴシックで示した語が代名詞代用表現である。同じ語でも太字で示したものは代名詞代用表現ではなく、母／兄であるという特性を持つ話し手・聞き手以外の人物を指示する。

- (1) a. [兄が妹に] (「お兄ちゃん」＝話し手)
お兄ちゃんの言うこと聞かなかったら、お母さんに言いつけるよ。
b. [娘が母親に] (「お母さん」＝聞き手)
お母さんのお兄ちゃんの名前、何だっけ？

代名詞代用表現として用いられる要素はしばしば、同時に聞き手を同定するためにも用いられる²。そのような表現を呼びかけ表現 (address term) と呼ぶ。例えば、(1b) は、呼びかけ表現としての「お母さん」を加え、(2) のように言うこともできる。

- (2) お母さん、お母さんのお兄ちゃんの名前、何だっけ？

このように、代名詞代用表現と呼びかけ表現の間には、ある程度重複が見られる。しかし、両者の分布は完全には重ならない。そのため、両者は区別して扱わなければならない。(3) に示したように、「店員」は呼びかけとしては可能だが、代名詞代用には使えない。代名詞代用表現としては、「店員さん」のように敬称「さん」が必要になる。

- (3) おい、店員、{お前/*店員} の計算、違うじゃないか。

おそらく、代名詞代用表現のような現象はほぼすべての言語に存在する。しかし、英語や華語諸語をはじめとする多くの言語では、代名詞代用表現は幼児語 (例: mummy) やごく一部の使用域 (例: 学術領域における the author) に限定される。その一方で、日本語のように代名詞代用表現が広範に用いられる言語もある。筆者らは後者のタイプの言語における代名詞代用・呼びかけ表現を研究する通言語プロジェクトに取り組み始めた³。本稿はその第一段階として、筆者が専門とする言語 (表 1 参照) の先行研究における代名詞代用・呼びかけ表現の扱いを整理することを目的とするものである。また、その過程で得られた若干の知見についても報告する。まず、2 節で先行研究を調査するにあたり注目した点についてまとめ、その後の 3-7 節で各点について詳しく触れる。そして、最後に 8 節でそれを踏まえた今後の研究の展望について論じる。なお、タイ語についてはスニサー (2020) でさらに詳細に論じているので、参照されたい。

¹ ある言語の文法において人称代名詞という範疇を認定すべきか否かという問題は別に存在する。

² 意図される聞き手の注意が対話に向いていない場合には、聞き手の同定は聞き手の注意を喚起し、対話に関与させる効果を持つ。すでに聞き手が同定され、対話に積極的に関与している場合には、聞き手の再同定により、ポライトネス等の対人的・社会的効果が生じる。

³ 科研費基盤研究 (B) 「代名詞代用・呼びかけ表現の通言語学的研究」 (研究代表者: スニサー・ウィッターヤーンパンヤーン)

表 1. 本稿の対象言語

言語	主な使用地域	系統	基本語順	形態類型
タイ語	タイ	タイ・カダイ語族	SVO	孤立的
ビルマ語	ミャンマー	シナ・チベット語族	SOV	膠着的
マレー語	マレーシア, シンガポール, ブルネイ	オーストロネシア語族	SVO	膠着的
インドネシア語	インドネシア	オーストロネシア語族	SVO	膠着的
ジャワ語	インドネシア	オーストロネシア語族	SVO	膠着的
朝鮮語	韓国, 北朝鮮	朝鮮語族	SOV	膠着的

2. 問題の所在

各言語における先行研究調査にあたり共通して着目した点は以下の通りである。

1. 代名詞代用と呼びかけが区別されているか？
2. 当該の表現が何と呼ばれているか？
3. 代名詞代用・呼びかけ表現となり得る要素の形式的特徴
4. 代名詞代用・呼びかけ表現となり得る要素の意味的特徴
5. 人称代名詞との関係
6. その他の一般化

代名詞代用と呼びかけが区別されているか？ 前節で述べたように、代名詞代用表現と呼びかけ表現はその分布が大きく重なる。そのため、先行研究では両者の区別が十分になされていない可能性がある。

当該の表現が何と呼ばれているか？ 本稿では「代名詞代用表現」、「呼びかけ表現」という用語を用いているが、これらは特定の分析が入り込んだ名称である。「代名詞代用表現」という名称は、当該の表現が本来は人称代名詞で出現すべき要素の代用であるという分析が前提にある。「呼びかけ表現」という名称は、聞き手の同定と「呼ぶ」という行為を同一視する分析が前提にある。対象言語の先行研究のすべてがこのような立場に立っているとは限らない。さらに、代名詞代用表現と呼びかけ表現が区別されている場合、それらを含む上位概念が何と呼ばれているかも調べた。用語名を把握することにより、その背景にある考え方を知ることができるほか、他の文献を見つけるための足掛かりを築くこともできる。

代名詞代用・呼びかけ表現となり得る要素の形式的特徴 代名詞代用・呼びかけ表現は、言語形式の形態統語的分類、すなわち品詞・統語範疇ではなく、言語形式が担う意味の範疇、すなわち用法・機能である。修飾という意味機能が名詞句、形容詞句、動詞句、側置詞句などさまざまな統語範疇に存在するのと同様に、代名詞代用・呼びかけもさまざまな統語範疇により実現され得る。ゆえに、代名詞代用・呼びかけ表現研究の主要な目標の一つは、それらの意味機能がどのような統語範疇に存在するのかを明らかにすることである。また、代名詞代用・呼びかけ表現は、単一の語とは限らず、複数

の語や形態素から構成されることもあり（例：「店員さん」、「お隣のお客様」）、それは形態統語論的な特徴である。

代名詞代用・呼びかけ表現となり得る要素の意味的特徴 代名詞代用・呼びかけ表現となり得る要素は形態統語論的特徴のみでは規定できない。「お母さん」、「お兄ちゃん」はともに普通名詞であるが、すべての普通名詞が代名詞代用・呼びかけ表現として容認されるわけではない。そこには「親族名称」のような意味的特徴も関与する。

人称代名詞との関係 人称代名詞と代名詞代用表現は、どちらも話し手・聞き手を指示する表現である点で共通し、前者のみがそのための専用の表現であるという点で異なる。両者には、その他の点ではどのような相違点があるのか？ 現代日本語では、英語の人称代名詞のような、共通の文法的特性を示す閉じたクラスの人称代名詞体系は認められないとされる（田窪 1997）。しかし、そのことと代名詞代用表現の広範な使用が直接関係するのかは、日本語だけを見ても分からない。

3. 代名詞代用と呼びかけの区別およびその名称

代名詞代用表現と呼びかけ表現には重複が見られ、いずれも人の指示に関するものであるため、インドネシア語以外の言語では、調べた文献の大半で両者の区別はきちんとなされていなかった。例えば、マレー語の先行研究 Nor Hashimah et al. (2005) は、家族に関する代名詞代用・呼びかけ表現を含む 71 ページもの会話データを収録するものであるが、それに基づいた記述ではどちらの表現も *kata panggilan*（呼びかけ語）と呼び、明確な区別をしていない。

表 2 は、代名詞代用、呼びかけに特化した用語として見つかったものをまとめたものである。参考として、日本語の代名詞代用・呼びかけ表現についての先駆的研究である鈴木 (1973) の用語も表に入れた。鈴木は、代名詞代用・呼びかけ表現をまとめる上位範疇を「人称詞」と呼ぶ。鈴木の人称詞に相当する上位範疇は、Connors, Brugman & Adams (2016) が *people referring expression*, Ewing & Djenaar (2019) が *person term* と呼んでいる。しかし、その他の文献には上位概念への言及は見出せなかった。

タイ語の先行研究 Navavan (2016) が代名詞代用表現に対して用いる *kham-naam*（名詞）という用語は、*kham-bòk-bu-rùt*（人称表現）という範疇の下位範疇である。後者には代名詞代用表現と人称代名詞が含まれる。Angkab (1972) も同様に、代名詞の下位範疇として、厳密な意味での人称代名詞 (*pronoun proper*) と親族名称などの代名詞代用表現を立てている。Navavan は、人称代名詞にも *kham-bòk-bu-rùt* という用語を用いている。つまり、この用語はその指すところが曖昧である。このような曖昧性を排除するために、スニサー (2020) は代名詞代用表現に対して *kham theen bu-rùt sàp-pha-naam* というタイ語の用語を提案している。

ビルマ語の先行研究 Okell (1969: 99) は、代名詞代用表現を *personal referent* と呼ぶ。岡野 (2019) はこれを「人物指示詞」と訳している。人物指示詞は、名詞の下位分類でそこには人称代名詞も含まれる。従って、人物指示詞は代名詞代用表現に特化した用語ではない。

本稿における「代名詞代用表現」という用語は、インドネシア語の先行研究 Sneddon et al. (2010) の *pronoun substitute* の訳であり、当該の表現が本来ならば人称代名詞が生起する位置に代わりに生起しているという分析が前提にある。このような「代用」という見方は、インドネシア語学に限られるものではない。表 2 には、代用という見方を窺わせる用語が言語を超えて見られる。 *pronoun/pronominal*

表 2. 先行文献における用語

言語	代名詞代用	呼びかけ	文献
タイ語	kham-naam (名詞)	kham-rîak (呼びかけ語)	Navavan (2016)
	–	kham-rîak-khăan (呼びかけ語)	M. R. Kalaya & Amara (1986)
ビルマ語	言及 (reference), 代名詞的用法	呼びかけ (address)	藪 (1992)
マレー語	pronoun substitute	–	Radiah (2007)
	–	seruan vokatif (呼格感嘆文)	Asmah (2009)
インドネシア語	呼称	呼びかけ	小野沢 (1996)
	pronoun substitute	vocative	McGinn (1991); Sneddon et al. (2010)
	pengganti pronomina (代名詞代用表現)	sapaan (vokatif) (呼びかけ [呼格])	Alwi et al. (1998)
	imposter use	vocative use	Conners, Brugman & Adams (2016)
朝鮮語	referring	addressing, address term	Ewing & Djenar (2019)
	pronominal substitute	–	Martin (1992)
日本語	imposter	–	Kim (2015)
	代名詞的用法	呼格的用法	鈴木 (1973)

substitute (マレー語, 朝鮮語), 代名詞的用法 (ビルマ語, 日本語) がそれである. タイ語の先行研究 Angkab (1972) は, 代名詞代用表現という範疇は設けていないが, 代名詞代用・呼びかけ表現の低位分類に際して, foreign loan words as pronouns, titles as pronouns のような表現をしている. 以下は, 代用という見方が反映された記述の抜粋である (強調は筆者が追加).

The original set of pronouns has been expanded in Burmese by a rather big, probably open, class of kinship, professional, and social terms that are *used in the place of pronouns*. (ビルマ語, Jenny & San San Hnin Tun 2016: 52)

[...] the use of second-person pronoun is a complicated matter. Because of this, kinship terms, and titles are often *used as substitutes* (マレー語, Liaw 1999: 40)

Sebutan pangkat atau gelaran biasanya *berfungsi sebagai ganti nama*. (位や称号を述べると普通, 代名詞として機能する.) (マレー語, Asmah 2009: 88)

Certain sets of nouns are *pronominally used* to fill in the empty slots where “common” personal pronouns are found unsuitable to express various delicate differences of reverence

in terms of age and social status. (インドネシア語, [Kaswanti Purwo 1984: 62](#))

代用という見方を西欧語文法の研究に影響された結果であると批判する向きもあるかもしれない(例: [Alves 1997](#); [Flannery 2009](#)). しかし, 少なくともタイ祖語, オーストロネシア祖語には西欧語式の人称代名詞体系が再建されており, 現代のタイ語, マレー語, インドネシア語, ジャワ語にもそれは引き継がれている. そのため, 人称代名詞が文法の基層に確固として存在し, それを覆うように登場したさまざまな表現は, 人称代名詞に代わるものとして捉えられているのだとも考えられる. 人称代名詞との関係については, 6 節でさらに論じる.

4. 形式的特徴

4.1 統語範疇

代名詞代用・呼びかけ表現になり得る形式は, 意味的特徴により記述されることが多く, 統語範疇への言及はあまりない. 親族名称や固有名は名詞であることが自明のこととされるのだろう. 名詞の他に代名詞代用表現になり得る統語範疇として, インドネシア語で指示代名詞 (4), 場所代名詞 (5) ([Conners, Brugman & Adams 2016](#)), 朝鮮語で現場指示詞 (6) ([パク 2007](#)) が指摘されている.

- (4) a. *Ini udah mau bobo!*
this already want sleep
「これ (=私) はもう寝たい!」
- b. *Tuh mau pergi kan?*
that want go PART
「それ (=あなた) は行くよね?」 ([Conners, Brugman & Adams 2016: 78](#))
- (5) a. *Sini dah kasi dech.*
here already give PART
「こっち (=私) はもうやったよ。」
- b. *Sono ikut ga?*
there follow not
「そっち (=あなた) は来る?」 ([Conners, Brugman & Adams 2016: 78](#))
- (6) a. 話し手指示: *iccok* 「こちら」
b. 聞き手指示: *kuccok* 「そちら」, *kutay* 「そなた」

呼びかけ表現になり得る統語範疇についての明示的記述はほとんど見つからなかった. 代名詞代用表現と分布が重なるためだろう. 代名詞代用表現には定義上なり得ないものの, 呼びかけ表現にはなる統語範疇としては二人称の人称代名詞が挙げられる ([Navavan 2016](#)).

4.2 内部構成

代名詞代用・呼びかけ表現は複数の要素から構成され得る. 代名詞代用表現については, 固有名に敬称, 肩書, 親族名称が付いた形式がビルマ語 ([Okell 1969: 99–101](#)) とインドネシア語 ([Conners, Brugman & Adams 2016](#)) で指摘されている. ビルマ語の例 (7) は職業上の肩書+親族名称に由来す

る敬称+固有名から成る.

- (7) shǎyà ?ú ?àunhlâ
teacher uncle (Mr.) Aung Hla

代名詞代用表現と呼びかけ表現の区別をしない形では, マレー語でも同様の記述がある (Asmah 2009: 50–51). (8) は政府が与える称号+学位+親族名称+宗教上の資格+固有名から成る.

- (8) Tan Sri Prof. Abang Haji Ali
Tan Sri Prof. brother haji Ali

M. R. Kalaya & Amara (1986) はタイ語の呼びかけ表現について, 代名詞・敬称, 親族名称, 階級 (rank), 職業上の肩書 (title), 名前, 愛情表現のうち最低 1 つをこの順で含め, さらに khá?, kháp などの終結小辞 (final particle) を付けることが可能であると一般化している. (9) は敬称+親族名称+職業上の肩書から成る.

- (9) khun p̄aa ?aa-caan
TITLE aunt teacher

上のような組み合わせはおそらく複合であろう. 統語的句については, 代名詞代用表現と呼びかけ表現の間に差があるようである. 呼びかけ表現の内部構造はかなり複雑になることがある. TUFUS アジア言語パラレルコーパス (TALPCo; Nomoto et al. 2018) に (10) のようなインドネシア語の例がある. このコーパスは, 日本語文をアジアの諸言語に翻訳したものである.

- (10) Orang nomor satu sampai nomor sepuluh, silakan masuk.
person number one till number ten please enter
「一番の人から十番の人まで入ってください。」 (TALPCo #1647)

このような複雑な名詞句は代名詞代用表現としては容認されない.

- (11) [1 番から 10 番の番号札の人に対して]
*Saya sudah panggil nama orang nomor satu sampai nomor sepuluh tadi.
1SG already call name person number one till number ten just.now
(「私は一番から十番までの人 (=あなたたち) の名前をもう呼びました。」の意で)

4.3 短縮形の振舞い

マレー語, インドネシア語, ジャワ語の代名詞代用・呼びかけ表現には, 完全形とその短縮形の対を持つものが多く存在する. (12) はインドネシア語の例である.

- (12) ibu – bu「母」, bapak – pak「父」, adik – dik「弟・妹」, kakak – kak「姉(・兄)」, abang – bang「兄」, profesor – Prof「教授」, dokter – Dok「医者」

インドネシア語について、[Alwi et al. \(1998: 259\)](#) と [Sneddon et al. \(2010: 167\)](#) は、完全形は単独で単独で代名詞代用表現になるが、短縮形にはならないと述べている^{4, 5}。

- (13) *Tadi pagi Pak pergi ke mana?
this morning father go to where
〔今朝、あなたはどこに行きましたか?〕の意で

一方、短縮形は呼びかけとしてなら単独で用いることができる ([Alwi et al. 1998: 260](#); [Sneddon et al. 2010: 167](#)).

- (14) Tadi pagi pergi ke mana, Pak?
this morning go to where father
〔今朝、(あなたは) どこに行きましたか、お父さん?〕

マレー語とジャワ語については、完全形と短縮形間の振舞いの違いについての記述は見当たらなかった。今後の研究で明らかにすべきことの一つである。

4.4 ゼロ代名詞／項の省略

代名詞代用表現との関係で対象言語すべてに記述が見つかったのが、ゼロ代名詞あるいは項の省略の頻繁な使用である ([Cooke 1968](#); [Theeraporn & Uehara 2012](#); [Okell & Allott 2001: xv](#); [Mintz 2002: 92](#); [Conners, Brugman & Adams 2016](#); [ソ 1990](#))。この現象は代名詞代用表現とは直接の関係はない。当該の現象がゼロ代名詞の使用だとすれば、それは人称代名詞の体系の問題であるし、項の省略であれば、それは省略という統語現象の問題であるからだ。

しかし、ゼロ代名詞／項の省略に観察される規則性が代名詞代用表現と呼びかけ表現の区別の手がかりとなることがある。タイ語の先行研究 [Cooke \(1968: 16\)](#) は、呼びかけ表現の後の聞き手を表す名詞句は頻繁に省略されるという一般化をしている。(15) では省略された名詞句を *pro* で示してある。

- (15) khun bun-líaj khráp *pro* pay nǎy maa
TITLE Boonliang PART go where come
〔ブンリアンさん、どこに行ってきたの?〕 ([Cooke 1968: 16](#))

⁴ ただし、東インドネシアには短縮形が代名詞代用表現になる地域もある ([Alwi et al. 1998: 260](#))。

⁵ [Conners, Brugman & Adams \(2016\)](#) は、以下のような例を挙げて、短縮形が代名詞代用表現として普通に用いられるとしている。しかし、この例の *Pak* は呼びかけである可能性が高い。4.4 節で述べるように、*ya* のような小辞の存在は呼びかけを文頭の主語から区別する手がかりとなるためである。

- (i) Pak ya makan olahan sini mah ya?
father yes eat menu here PART yes
‘You are eating (off) the menu here ya.’ ([Conners, Brugman & Adams 2016](#))

この文で *pro* を復元できるのは, 小辞 *kh ráp* があるおかげで *khun bun-líaj* が文頭の主語ではなく, 呼びかけであることがはっきりするためである⁶. 逆に, 小辞がないと文頭の要素が呼びかけなのか代名詞代用なのか曖昧になる.

5. 意味的特徴

3節で述べたように, ほとんどの先行研究において代名詞代用と呼びかけの区別が明確になされていない. そのため, 本稿でも先行研究に言及がない限りは, 2つをまとめて扱う. 提示された例が代名詞代用と呼びかけの両方に使えるとは限らないことに注意されたい.

代名詞代用・呼びかけ表現の意味的特徴としてどの言語でも指摘されているのは, 親族名称, 固有名, 「先生」のような職業などにおける役割名である. 親族名称には, 親族に対する使用に加え, 親族関係にない人々にまで類似の関係を拡大して適用する, 虚構的用法も含まれる. 日本語では「お母さん」, 「お兄ちゃん」は代名詞代用・呼びかけに使えても, 「子」や「弟」は普通使えないといった具合に, 非対称性が見られる. しかし, 対象言語のいずれでもそのような非対称性は指摘されていない.

親族名称と固有名以外の例を表3に示す. 上述のもの以外に, マレー語の *Dato'/Datuk* 「ダト (称号)」のような称号やインドネシア語の *sayang* 「愛しい人」のような愛情表現 (cf. 英 *honey*) もある. マレー語の *encik* は人名の前に付く「～さん」がそのまま代名詞代用・呼びかけ表現になるものである⁷. ジャワ語の例は筆者がインドネシアの小・中・高等学校で用いられているジャワ語の教科書から採ったものである.

6. 人称代名詞との関係

本稿の対象言語はいずれも西欧語などに比べると人称代名詞の数が多い. 表4は, 藪 (1992) がビルマ語の人称代名詞体系を整理したものである. 藪も Okell (1969: 99–101) もこの表にはない相当数の人称代名詞を代名詞代用表現とは別に列挙している. これらは話し手の性別や丁寧さの度合いなどにより使い分けられる. このような人称代名詞体系は, Thomason & Everett (2005) の言う「開いた代名詞体系 (open pronoun system)」にあてはまる. 開いた代名詞体系では, 他言語からの借用も含め, 自称や対称にさまざまな形式が存在する.

人称代名詞の数は多いものの, ビルマ語とは異なる様相を呈するのがジャワ語である. ジャワ語の人称代名詞体系を表5に示す. ジャワ語の場合, 人称代名詞は表にあるものと1人称包括複数の *awake dheweo* およびインドネシア語からの借用と考えられる *kita* に限られる. 人称代名詞の数が多いのは, 敬語体系に合わせて独自の形式が発達したことによる. 自称や対称にさまざまな形式が存在するという定義的には Thomason & Everett (2005) の「開いた代名詞体系」に分類できるものの, ジャワ語の人称代名詞が開いたクラスであるとは考えにくい. また, マラヨ・ポリネシア祖語では存在していた単複の区別がほとんど失われている点でも, 人称代名詞の総数を少なくしようという力が働いているのではないか.

従って, 閉じたクラスとしての人称代名詞体系を持たないことは, 代名詞代用表現の一般的使用の

⁶ 注5のインドネシア語の例も参照されたい.

⁷ 日本語では敬称は代名詞代用表現にはならない (野元 2019). だが, 例外として, オタクの世界では対称として「氏」を用いる (加藤重弘氏私信).

表 3. 親族名称・固有名以外の代名詞代用・呼びかけ表現の例

言語	例	文献
タイ語	【代名詞代用】 khruu 「先生」, nák-rian 「生徒」, naay 「主人」, bàaw 「召使い」, mǎo 「医者」, mǎe-kháa 「女性の物売り」 【呼びかけ】 fɛɛn 「恋人」, khon-khàp-rót 「運転手」	Navavan (2016) Angkab (1972)
ビルマ語	shǎyà 「先生」, shǎyàwùn 「医者」, kòdò 「僧侶, 王族」, p ^h óundzí 「僧侶」, wùndzí 「大臣」, hlés ^h ǎyà 「荷車運転手」	Okell (1969)
マレー語	cikgu 「先生」, Dr. 「医者, 博士」, Dato'/Datuk 「ダト (称号)」, Haji 「メッカ巡礼者 (男性)」, Yang Arif 「博学な方 (裁判官に用いる)」	野元 (2020)
インドネシア語	【代名詞代用】 dokter 「医者」, profesor 「教授」, lurah 「村長」, kapten 「大尉」 【呼びかけ】 sayang 「愛しい人」, manis 「甘い人」, Tuan Dokter 「医者様」, Pak Hakim 「裁判官様」, Ketua 「長」	Alwi et al. (1998)
ジャワ語	profesor 「教授」, dokter 「医者」, suster 「看護師」, prabu 「王様」, sultan 「スルタン」, kyai 「イスラーム教長老」, raden 「王族・貴族の子孫」	
朝鮮語	sensayngnim 「先生」, ponkica 「本記者」, phansanim 「裁判官」	Kim (2015)

表 4. ビルマ語の人称代名詞体系 (藪 1992)

人称	単数	複数
1 (男性用語)	tɕǎnò	tɕǎnò-dò
(女性用語)	tɕǎmâ	tɕǎmâ-dò
2 (男性用語)	k ^h ìnmjá	k ^h ìnmjá-dô
(女性用語)	ɕìn	ɕìn-dô
3	tù	tù-dô

前提条件にはならない。ビルマ語タイプとジャワ語タイプの両方を考慮に入れると、代名詞代用表現は人称代名詞体系の拡大の延長線上にあると考えられる⁸。これはまさに Jenny & San San Hnin Tun (2016) が 67 ページの引用で述べていることである。拡大の結果、人称代名詞はビルマ語のように開いたクラスとなることもあれば、ジャワ語のようにそうはならないこともあるということだろう。こ

⁸ 4.4 節で取り上げた、ゼロ代名詞も同様にして発達したと考えられる。

表 5. ジャワ語の人称代名詞体系 (崎山 1989; レスタリ 2010)

人称	常体 (ngoko)			丁寧体 (krama)	尊敬語 (krama inggil)	謙讓語 (krama andhap)
	独立形	接頭形	接尾形			
1	aku	tak-, dak-	-ku	kula	ingsun	dalem, kawula
2	kowe	ko(k)-	-mu	sampeyan	(pa)njenengan	
3	dhe(we)ke	di-	-(n)e	-pun, dipun-, piyambakipun, panjenenganipun	panjenengane	

の見方では、代名詞代用表現の一般的使用の前提条件は、閉じたクラスとしての人称代名詞体系の不在ではなく、逆に、それが共時的あるいは通時的に存在していることとなる。また、[Helmbrecht \(2013\)](#) のように、代名詞代用表現の一般的使用の機能的背景として、ポライトネスを理由とした人称代名詞の回避を考えることも妥当ではない。回避されるのは、人称代名詞一般ではなく、指示対象の特性にそぐわない形式であり、それは人称代名詞の場合も代名詞代用表現の場合もある。

代名詞代用表現が人称代名詞体系の拡大の延長線上にあることは、言語現象からも見てとれる。ビルマ語では、最終音節が低平調の人称代名詞に特定の格助詞が付くと、声調が下降調に変化するが (16a)、この現象は親族名称 (16b) や一部の固有名詞でも観察される ([岡野 2007: 39–40](#))。

- (16) a. tɕänò 「私 (男性用語)」 → tɕänò=gò 「私を」
 b. ʔämè 「お母さん」 → ʔämè=gò 「お母さんを」

[Sneddon et al. \(2010: 257\)](#) によれば、インドネシア語の動詞に語幹形を用いるタイプの受動文では、動作主は人称代名詞でなければならないが (17a)、当該の位置には代名詞代用表現も生起できる。(17b) の bapak 「父」は、対称の代名詞代用表現としては容認されるが、発話行為参加者以外の父である人物を指すことはできない。

- (17) a. Surat ini harus saya tandatangani.
 letter this must 1SG sign.on
 「この手紙に私はサインしなければならない。」
 b. Surat ini harus bapak tandatangani.
 letter this must father sign.on
 「この手紙に {あなた/*父} はサインしなければならない。」 ([Sneddon et al. 2010: 259](#))

7. なりすまし (imposter)

インドネシア語と朝鮮語の先行研究として、代名詞代用表現を [Collins & Postal \(2012\)](#) の「なりすまし (imposter)」とみなして論じるものがいくつかある。「なりすまし」は、名詞句に語彙的に指定された人称と実際の指示対象の人称が一致しないような現象として定義される。例えば、(18) の this

reporter は、動詞の一致から分かるように、語彙的には 3 人称である。しかし、その指示対称は話し手・書き手であり、自称として用いられている。

(18) *This reporter is/*am signing off from Madrid, Spain.* (Collins & Postal 2012: 3)

なりすましにおいて興味深い現象として、束縛がある。英語では、単数と複数間に非対称性が観察される。(19) のコントラストに見られるように、単数では語彙的に指定された人称の照応形しか束縛できないのに対し、複数では指示対象の人称の照応形も束縛できる。

(19) [父親 (と母親) が子供に]

a. *Daddy is enjoying himself/*myself.*

b. *Daddy and Mommy are enjoying themselves/ourselves on the beach.*

(Collins & Postal 2012: 20)

この点に関して Kaufman (2014) は、インドネシア語では、代名詞代用表現を受けるのは同一の代名詞代用表現 (20a)–(20b) か指示対象の人称の人称代名詞 (20c) であると述べている。(20d) のように、3 人称の人称代名詞で受けることはできない。

(20) a. *Hanya bapak_i bisa mengerti bapak_i.*

only father can understand father

「お父さん (=あなた) だけがお父さん (=あなた) を理解できる。」

b. *Hanya bapak_i bisa mengerti diri bapak_i.*

only father can understand self father

「お父さん (=あなた) だけがお父さん (=あなた) 自身を理解できる。」

c. *Hanya bapak_i bisa mengerti diri anda_i.*

only father can understand self 2

「お父さん (=あなた) だけがあなた自身を理解できる。」

d. **Hanya bapak_i bisa mengerti diri-nya dia_i.*

only father can understand self-POSS 3SG

「お父さん (=あなた) だけが彼 (=あなた) 自身を理解できる。」の意で

(Kaufman 2014: 102)

Kim (2015) によると、朝鮮語の代名詞代用表現は、指示対象の人称の照応形しか束縛できない⁹。

(21) a. (na) *Kimmina-nun hangsang naycasin-ul/*kunyecasin-ul mit-ko iss-e.*

I Kimmina-TOP always myself-ACC/herself-ACC trust-KO ISS-IND

「(私) キム・ミナはいつも自分自身を信じている。」

⁹ Zanuttini, Pak & Portner (2012) は、朝鮮語の代名詞代用表現を指令法 (jussive) の節の主語に特徴的な現象であるとしているが、Kim (2015) や Choi (2016) はなりすましであるとみなしている。

- b. (tangsin) emmeni-kkeyse-nun tangsincasin-ul/*kunyecasin-ul salangha-sip-ni-ka?
you mother-HON-TOP yourself-ACC/herself-ACC love-HON-NI-Q
「お母さん (=あなた) は自分自身を愛していますか?」¹⁰ (Kim 2015)

なりすましとの関連での朝鮮語とインドネシア語の最近の研究としては他に [Adams & Conners \(2020\)](#) が人称指定の点から論じている。

8. 今後の展望

本稿では、対象言語の先行研究における代名詞代用・呼びかけ表現の扱いをまとめた。その中で、ある言語の研究ではある程度深く記述・分析がなされているが、他の言語の研究では全く手が付けられていないような現象があることが判明した。例えば、7節で見たように、インドネシア語と朝鮮語はなりすまし現象という一般言語学的背景での研究が進んでいる。だが、他の言語ではそのような視点からの研究はほぼ皆無と言ってよい¹¹。また、代名詞代用表現と呼びかけ表現の区別が明確になされている言語もあれば、なされていない言語もあった。今後、研究が進んでいる言語の先行事例を参考にして、共通の基準の下で、対象言語の通言語的研究を進めていく必要がある。

そのために、現在、我々のプロジェクトでは本稿の対象言語とベトナム語、日本語について代名詞代用・呼びかけ表現のデータベースを作成し始めた。このデータベースには、個別の表現について、その形式的・意味的特徴、代名詞代用表現（自称、対称）／呼びかけ表現／敬称になるかどうか（なる場合には例も付ける）などの情報を収録する。ある言語で代名詞代用・呼びかけ表現になる表現に対応する別の言語の対応表現についても調べられるようにする。

個別の表現を収集するのは、類似の表現でも代名詞代用・呼びかけ表現になるか否かが異なるものがあるためである。例えば、ビルマ語の *p^hèp^hè* 「お父さん」、*mè mè* 「お母さん」は代名詞代用表現になるが、*p^hà gìn* 「父、父親」、*mì gìn* 「母、母親」はならない。ジャワ語では、*profesor* 「教授」は代名詞代用表現になるが、*dosen* 「大学教員」、*guru* 「教師」はそのままではならない。

敬称を同時に調べるのは、以下の2つの理由による。第一に、代名詞代用・呼びかけ表現になる形式は敬称になる形式と分布が重複するが、完全には一致しない。例えば、ジャワ語では *kyai* 「イスラーム教長老」は代名詞代用表現にはなるが、**Kyai Mangun* のように敬称として用いることはない。また、インドネシア語で指摘されているのと同じく (4.3節参照)、ジャワ語でも短縮により敬称になった表現は代名詞代用表現にはならない。第二に、そのままでは代名詞代用表現になることが不可能でも、敬称を伴えば可能になることがある。日本語に関しては、1節の例(3)を論じた際に、「店員」と「店員さん」の違いとしてすでにそれを指摘した。同様の現象はジャワ語でも見られ、上述の *dosen*, *guru* は *pak* 「～さん (男性)」や *bu* 「～さん (女性)」などの敬称を付ければ、代名詞代用表現として使えるようになる。

また、このデータベースでは形式的特徴として、本稿の対象言語の先行研究では言及がないもの

¹⁰ 日本語では「私、キム・ミナ」のように言えても、「*あなた、キム・ミナ」や「*私、先生」のような言い方はできない。このような人称代名詞と代名詞代用表現の並置については、対象言語における言語事実を今後の研究で明らかにしていく必要がある。

¹¹ 管見の限り、日本語のなりすましについての研究には [Furuya \(2016\)](#) がある。

の、日本語では可能な照応形と数量表現も含む。ビルマ語の *kò* は日本語の「自分」と同じく、照応から転化して自称の代名詞代用表現となったものである。ジャワ語では (22) のように、「名詞＋数詞」という形式の数量表現が対称の代名詞代用表現になる。

- (22) *Wong loro arep lunga ning ngendi?*
person two FUT go to where
「二人 (=あなたたち) はどこに行く？」

このようなデータベースの構築により、通言語的比較が可能になり、代名詞代用・呼びかけ表現の記述や理論的分析に貢献するはずである。また、代名詞代用表現を一般的に使用する他の言語の研究においても¹²、調査票的な役割を果たすことが期待される。

参考文献

- Adams, Nikki & Thomas J. Connors. 2020. Imposter and their implication for third-person feature specification. *Linguistics* 58(2). 537–567. doi:10.1515/ling-2020-0047.
- Alves, Mark J. 1997. Problems in the European linguistic analyses of Southeast Asian languages. *Explorations in Southeast Asian Studies: A Journal of the Southeast Asian Studies Students Association* 1(1). 1–10.
- Alwi, Hasan, Soenjono Dardjowidjojo, Hans Lapoliwa & Anton M. Moeliono. 1998. *Tata bahasa baku bahasa Indonesia* [インドネシア語標準文法]. Jakarta: Balai Pustaka, 第3版.
- Angkab Palakornkul. 1972. *A socio-linguistic study of pronominal strategy in spoken Bangkok Thai*. テキサス大学オースティン校博士論文.
- Asmah Haji Omar. 2009. *Nahu Melayu mutakhir* [最新マレー語文法]. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka, 第5版.
- Choi, Jaehoon. 2016. Jussive subjects as imposters. *Eoneohag* 74. 3–24.
- Collins, Chris & Paul Postal. 2012. *Imposters: A study of pronominal agreement*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Connors, Thomas J., Claudia M. Brugman & Nikki B. Adams. 2016. Reference tracking and non-canonical referring expressions in Indonesian. In Yanti & Timothy McKinnon (eds.), *Studies in language typology and change*, vol. 60 *NUSA*, 59–88. Jakarta and Tokyo: Universitas Atma Jaya and Tokyo University of Foreign Studies. doi:10.15026/87444.
- Cooke, Joseph R. 1968. *Pronominal reference in Thai, Burmese, and Vietnamese*. Berkeley, CA: University of California Press. <https://escholarship.org/uc/item/9hf0g4gn>.
- Ewing, Michael C. & Dwi Noverini Djenar. 2019. Address, reference and sequentality in Indonesian conversation. In Paul Bouissac (ed.), *The social dynamics of pronominal systems*, 253–287. Amsterdam: John Benjamins.
- Flannery, Greg. 2009. Open and closed system of self-reference and addressee-reference in Indonesian and English: A broad typological distinction. In Yvonne Treis & Rik De Busser (eds.), *Selected papers from the 2009 conference of the Australian Linguistic Society*, <http://www.als.asn.au/proceedings/als2009/flannery.pdf>.
- Furuya, Kaori. 2016. PRO and (under)specification of person in imposter constructions. *Theory and Practice in Language Studies* 6(9). 1723–1731. doi:10.17507/tpls.0609.01.

¹² 代名詞代用表現の一般的使用が見られるのは、主に東南アジアの諸言語であるが、Connors, Brugman & Adams (2016) によると、モルディブ共和国で話されている印欧語のディベヒ語もそうであるという。

- Helmbrecht, Johannes. 2013. Politeness distinctions in pronouns. In Matthew S. Dryer & Martin Haspelmath (eds.), *The world atlas of language structures online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. <http://wals.info/chapter/45>.
- Jenny, Mathias & San San Hnin Tun. 2016. *Burmese: A comprehensive grammar*. London: Routledge.
- Kaswanti Purwo, Bambang. 1984. The categorial system in contemporary Indonesian: Pronouns. In John W. M. Verhaar (ed.), *Towards a description of contemporary Indonesian: Preliminary studies*, vol. 2 *NUSA*, 55–74. Jakarta: Universitas Atma Jaya.
- Kaufman, Daniel. 2014. The syntax of Indonesian imposters. In Chris Collins (ed.), *Cross-linguistic studies of imposters and pronominal agreement*, 89–120. Oxford: Oxford University Press.
- Kim, Lan. 2015. A note on imposter expressions in Korean. *Eoneohag* 71. 139–160.
- レスタリ, スリ・ブディ. 2010. 『ジャワ語の敬語に関する記述的研究—第三者敬語を中心に—』東京外国語大学博士論文.
- Liaw, Yock Fang. 1999. *Malay grammar made easy: A comprehensive guide*. Singapore: Times Books International.
- M. R. Kalaya Tingsabadh & Amara Prasithratsint. 1986. *The use of address terms in Thai during the Ratanakosin period*. Bangkok: Chulalongkorn University Press.
- Martin, Samuel E. 1992. *A reference grammar of Korean: A complete guide to the grammar and history of the Korean language*. Rutland, VT: Charles E. Tuttle.
- McGinn, Richard. 1991. Pronouns, politeness, and hierarchy in Malay. In Robert Blust (ed.), *Currents in pacific linguistics: Festschrift in honor of George W. Grace*, vol. C-177 Pacific Linguistics, 197–221. Canberra: Australian National University.
- Mintz, Malcolm W. 2002. *An Indonesian & Malay grammar for students*. Perth: Indonesian/Malay Texts and Resource, 第2版.
- Navavan Bandhmedha. 2016. *Way-yaa-koon thay* [タイ語文法]. Bangkok: Chulalongkorn University Printing House, 第7版.
- 野元裕樹. 2019. 「代名詞代用語の意味論」『第159回日本言語学会大会予稿集』, 486–492. https://www.ls-japan.org/modules/documents/LSJpapers/meeting/159/handouts/p/P-5_159.pdf.
- 野元裕樹. 2020. 『マレー語の教科書：詳解文法』 Next Publishing Authors Press.
- Nomoto, Hiroki, Kenji Okano, David Moeljadi & Hideo Sawada. 2018. TUFS Asian Language Parallel Corpus (TALPCo). In *Proceedings of the twenty-fourth annual meeting of the association for natural language processing*, 436–439. http://www.anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2018/pdf_dir/C3-5.pdf.
- Nor Hashimah Jalaluddin, Harishon Radzi, Maslida Yusof, Raja Masittah Raja Ariffin & Sa'adiah Ma'alip. 2005. *Sistem panggilan dalam keluarga Melayu: Satu dokumentasi* [マレーの家族における呼称の体系：記録]. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- 岡野賢二. 2007. 『現代ビルマ（ミャンマー）語文法』国際語学社.
- 岡野賢二. 2019. 「日本語とビルマ語の相互変換における問題点—人物を指示する名詞周辺の現象—」『東京外大東南アジア学』24. 55–79. doi:10.15026/92935.
- Okell, John. 1969. *A reference grammar of colloquial Burmese*. London: Oxford University Press.
- Okell, John & Anna J. Allott. 2001. *Burmese/Myanmar dictionary of grammatical forms*. Richmond, Surrey: Curzon Press.
- 小野沢純. 1996. 『基礎マレーシア語』大学書林.
- パク・ジノ (박진호). 2007. 「유형론의 관점에서 본 국어 대명사 체계의 특징 [類型論の観点から見た韓国語の代名詞体系の特徴]」『국어학』50. 115–147.
- Radiah Yusuf. 2007. Translating kinship terms to Malay. *Translation Journal* 11(3). <https://translationjournal.net/journal/41malay.htm>.
- 崎山理. 1989. 「ジャワ語」亀井孝, 河野六郎 & 千野栄一 (編), 『言語学大辞典 第2巻 世界言語編 (中)』, 209–212. 三省堂.
- Sneddon, James Neil, Alexander K. Adelaar, Dwi N. Djenar & Michael Ewing. 2010. *Indonesian: A comprehensive grammar*. London: Routledge, 第2版.

- スニサー ウィッタヤーパンヤーノン (齋藤). 2020. 「タイ語での代名詞代用表現・呼びかけ表現に関する考察」 『東京外大東南アジア学』 26. 1–23. doi:10.15026/95672.
- 鈴木孝夫. 1973. 『ことばと文化』 岩波書店.
- ソ・チョンス (서정수). 1990. 『국어문법 [国語文法]』 ソウル: プリギブンナム (뿌리깊은나무).
- 田窪行則. 1997. 日本語の人称表現. 田窪行則 (編) 『視点と言語行動』, 13–41. くろしお出版.
- Theeraporn Ratitamkul & Satoshi Uehara. 2012. A contrastive case study of pronominal forms in English, Japanese and Thai: A parallel corpus approach. In Tadao Miyamoto, Naoyuki Ono, Kingkarn Thepkanjana & Satoshi Uehara (eds.), *Typological studies on languages in Thailand and Japan*, 137–158. Tokyo: Hituzi Syobo Publishing.
- Thomason, Sarah G. & Daniel L. Everett. 2005. Pronoun borrowing. In Charles Chang, Michael J. Houser, Yuni Kim, David Mortensen, Mischa Park-Doob & Maziar Toosarvandani (eds.), *Twenty-seventh meeting of the Berkeley Linguistics Society*, vol. 27, 301–315. Berkeley, CA: Department of Linguistics, University of California at Berkeley.
- 藪司郎. 1992. 「ビルマ語」. 亀井孝, 河野六郎 & 千野栄一 (編), 『言語学大辞典 第3巻 世界言語編 (下-1)』, 567–610. 三省堂.
- Zanutini, Raffaella, Miok Pak & Paul Portner. 2012. A syntactic analysis of interpretive restrictions on imperative, promissive, and exhortative subjects. *Natural Language and Linguistic Theory* 30. 1231–1274. doi:10.1007/s11049-012-9176-2.

執筆者連絡先 : nomoto@tufs.ac.jp, sunisa@tufs.ac.jp, okanok@tufs.ac.jp, thuzarhlaing@tufs.ac.jp, namyj@tufs.ac.jp, tari0828@apu.ac.jp

原稿受理日 : 2020年12月21日

<翻訳>

談話における情報構造：
語用論の統合形式理論をめざして
**Information structure in discourse:
Towards an integrated formal theory of pragmatics**

クレイグ・ロバーツ¹ (大久保 弥², 野元 裕樹³ 訳)
Craige Roberts (translated by Wataru Okubo, Hiroki Nomoto)

¹ オハイオ州立大学言語学科

Department of Linguistics, Ohio State University

² 東京外国語大学大学院博士後期課程

Graduate School, Tokyo University of Foreign Studies

³ 東京外国語大学大学院総合国際学研究院

School of Language and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨： 談話をゲームとみなす語用論的分析のための枠組みを提案する。談話のゲームでは、文脈がスコアボードとなり、文脈というスコアボードは対話者たちによって議論下の疑問 (question under discussion) を中心に体系化される。この枠組みは、動的な構成的意味論と連携することを意図している。そのため、発話の文脈は、様々な種類の情報のタプルとしてモデル化され、疑問——形式意味論で普通そうするように、命題の代替集合 (alternative set) としてモデル化される——が談話の適切な流れに制約を加える。関連性 (Relevance) の要件が発話によって満たされるのは、(主張であれ、疑問であれ、提案であれ) その発話が議論下の疑問に対応するとき、そのときに限る。最後に、発話の韻律的焦点 (focus) は、(少なくとも英語では) 典型的には、議論下の疑問を反映する役割を担い、文脈における適切さに追加的な制約をかけるものであると主張する。

Abstract: A framework for pragmatic analysis is proposed which treats discourse as a game, with context as a scoreboard organized around the *questions under discussion* by the interlocutors. The framework is intended to be coordinated with a dynamic compositional semantics. Accordingly, the context of utterance is modeled as a tuple of different types of information, and the questions therein—modeled, as is usual in formal semantics, as *alternative sets* of propositions—constrain the felicitous flow of discourse. A requirement of *Relevance* is satisfied by an utterance (whether an assertion, a question or a suggestion) *iff* it addresses the question under discussion. Finally, it is argued that the prosodic *focus* of an utterance canonically serves to reflect the question under discussion (at least in English), placing additional constraints on felicity in context.

キーワード： 談話, 語用論, 発話の文脈, 議論下の疑問, 関連性, 焦点

Keywords: discourse, pragmatics, context of utterance, question under discussion, relevance, focus

原典 Roberts, Craige. 2012. Information structure in discourse: Towards an integrated formal theory of pragmatics. *Semantics and Pragmatics*. 5. 1–69. doi:10.3765/sp.5.6¹



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ この再版は Roberts (1996b) の 1998 年修正版に基づく。誤植の訂正と小さな修正を除けば、内容は 1998 年の原稿から本質的に変わっていない。1995 年冬春学期の筆者の演習「情報構造と意味解釈」の受講生たち (とりわけ, Louise McNally), Mike Calcagno, Peter Culicover, David Dowty, Andreas

(本文中では、原典におけるページ番号を灰色で示す。また、訳語対照表を第一訳者の [github](https://github.com/w4okubo/Roberts2012-jpn) ページ (<https://github.com/w4okubo/Roberts2012-jpn>) にて公開しているので、必要に応じて参照されたい。)

(p. 2) プラハ学派の理論家である [Halliday \(1967\)](#) や [Vallduví \(1993\)](#) をはじめとし、語用論に関心を抱く多くの言語学者にとって、**情報構造 (information structure)** は、文レベルの構造である。情報構造は一般に、文の伝える情報の提示法を調節する、ある種のパラメーターにより異なる文構造の違いであるとされる。調節はその文の情報を先行文脈に関係付けるような形で行われる。関係付けに関わる要因は、テーマ/レーマ、焦点/背景、トピック/リンク、旧情報/新情報などといった原始的*機能役割によって特徴付けられる。これらの原始的要素とそれと相関関係にある文の情報構造は、イントネーションによる焦点や個別の統語的焦点構文、主題化や他の転移変形、そしてドイツ語のように比較的自由的な語順を許す言語における語順、カタルーニャ語やハンガリー語の際立った構造的位置の機能、スラブ諸語の定性、トルコ語の特定性、日本語の「は」のような特定の接辞[†]の使用などといった、その他の幅広い現象の役割を説明するために用いられる。

焦点、主題などに取り組む研究者のほとんどは、これらの現象と適切性の関係、従って、発話の文脈との関係について語る。しかし、ある焦点を含む発話が実際に適切であるような文脈の種類を範囲を詳細に調べるために、文を超えるレベルを見ている者は少ない²。[Kadmon & Roberts \(1986\)](#) は、方法論として文を超えるレベルを見ることは、解釈における焦点の役割を理解するのに非常に重要であると論じた。彼女らは、最大限に抽象的に言えば、焦点の役割は、発話が適切になる**文脈の情報構造 (information structure of contexts)** と彼女らが呼ぶものを(規約的な前提を通じて)制限することであると主張した。この情報構造に対する見方は、根本的には [Carlson \(1982\)](#) の研究に端を発する。ただし、[Carlson](#) 自身は当該の情報構造に対する見方をテキストの文法で実現している³。ここで展開する捉え方は、情報構造は、情報を提示するために用いられる発話や発話の連続に関する構造ではなく、文字通り情報に関する構造——談話において遂行される探求とその探求がもたらす情報に関する構造——である、というものだ。文レベルで規約的に与えられるのは、発話が生起する談話の情報構造内でのその発話の場所と機能についてのある種の前提のみである。

[Kathol, Svetlana Godjevac](#) には、本稿の以前のバージョンに対するコメントや鋭い質問について感謝したい。[Paul Portner, Nirit Kadmon](#) にも、以前の原稿に対して貴重なコメントをいただいたことに感謝したい。短縮バージョンを発表した、1995年10月の *Colloque de Syntaxe et Sémantique à Paris* の運営委員・参加者の皆さんにも感謝したい。[Nirit Kadmon](#) とは、数年に渡り、ここで論じる問題の多くについて一緒に研究し、[Stanley Peters](#) とスタンフォード大学の *CSLI* にはともに我々の仕事を支援していただき、彼らの多大なご恩を有難く感じている。だが、これらの方々が筆者がここで行う提案に同意するものと想定すべきではない。

* 訳注：「原始的 (primitive)」とは、それ自体をさらに基本的な要素により規定することができないことをいう。

[†] 訳注：日本語の助詞「は」は、接辞ではなく接語と考えるのが一般的である。

² [Ellen Prince](#) と彼女の教え子たちは一般にこの批判に対する例外である。

³ 本稿に関連する考えをまとめ上げた後、[Ginzburg \(1996\)](#) の論文のコピーを受け取った。彼もまた [Carlson](#) に従い、(自身は情報構造とは呼んでいないものの) 本稿に関連する情報構造の捉え方に関する事柄を提案し、多くの点で非常に異なる方向に向かっている。彼が意図する適用対象は、より狭く、談話における適格なやりとりの特性を明らかにするためであるようだ。

(p. 3) まず 1 節では, [Stalnaker \(1978\)](#) の可能世界としての文脈の考え (possible worlds view of context) を拡張し, ここで意図する談話の情報構造 (information structure of discourse) の概念を定義する. その拡張は, 主張に加え疑問も考慮に入れ, 適格なやり取りに対して語用論的に動機付けられた構造を持たせるようなものである. 次に 2 節では, 古典的に情報構造の理論で論じられてきた諸現象をこの構造がいかにして説明するかを例証するために, 情報構造に非常に直接的に関係する現象——英語の発話における韻律的焦点に関連付けられる規約的含意——の理論の概要を述べ, この説明がどのような形で既存の研究をよりよいものにするかを示す.

情報構造は人間の談話に関して普遍的なものであり, ある言語において情報構造関連の機能を実現するために発達した具体的な統語構造やその他の規約には依存しないと想定する. しかし, 英語の韻律的焦点に関連付けられた意味の説明は非常に個別言語的なものである. 他の言語では, 英語の韻律的焦点が担う目的の一部を実現するのに非常に違った方法を用いたり, 英語の韻律的焦点に類似する手段を他の種の情報を符号化するのに用いるということが考えられるだろう. それぞれ普遍的, 個別言語的な二つの説明を一つの議論にまとめることの主眼は, 普遍的なものが個別言語の個別の発話の解釈にどのように入ってくるかを示すのに, 個別言語的な説明を用いることにある. しかし, 筆者の念頭にあるような類いの情報構造の概念のよい点の一つは, それが形式語用論の理論に対してより広い波及効果を持ち, それを用いなければかなり多様で互いに無関係であると考えられてしまう現象の説明のために統一的な基盤を提供することである. 3 節では, 本稿が提示する情報構造のいくつかの応用可能性を示すとともに, 本稿での提案と人工知能, 言語学, 哲学における他の多くの提案との関係についてごく簡潔に記す.

1. 言語ゲームにおける情報構造と疑問

談話は, 一連の会話の目標 (conversational goal) と, 会話参加者がその目標を達成するために作る計画あるいは方略 (strategy) を中心に組み立てられる. これは, 例えば, [Grice \(1989\)](#), [Lewis \(1969\)](#), [Grosz & Sidner \(1986\)](#), 人工知能におけるプランニング理論, [Sperber & Wilson \(1986\)](#) や [Thomason \(1990\)](#) がコミュニケーションや意味において意図に中心的役割を認めていることを踏まえれば, 驚くべきことではない. しかし, この意図の構造についての統合的な理論とその語用論理論に対する波及効果に関しては, 私の知る限り, これまで詳しく論じられてこなかった.

(p. 4) 筆者は [Stalnaker \(1978\)](#) に従い, 談話の主要な目標は共同探求であると想定する. 共同探求とは, 「ものごとの在り方」を発見し, 他の対話者と共有する, すなわち, 我々の世界についての情報を共有しようとする試みである. しかし, この目標を達成するためには, 方略を立てなければならず, それらの方略は下位探求を含む. ゲームにおいてそうであるように, ある方略は他の方略よりよかったり悪かったりする. これは主として, 参加者の合理的行動によるもので, 言語能力それ自体によるものではない. 方略が効果的であるかは, あらゆる探求でそうであるように, さらに運の要素も関与する. 筆者が念頭に置いていることをよりよく理解するために, ゲームの喩えを進めてみよう⁴.

⁴ これに関して, ここでは若干異なる見解を示すものの, 筆者は [Carlson \(1982\)](#) に従っている. 無論, 究極的には談話のゲームによる喩えは [Wittgenstein \(1953\)](#) まで遡り, [Lewis \(1969\)](#) や, もちろん, [Carlson](#) の師である [Hintikka \(1972, 1981\)](#) をはじめとする他の人々によって取り上げられてきた. ([Hintikka & Saarinen \(1979\)](#) も参照.)

ゲームの主要要素は、**目標 (goal)**、プレイヤーが守る**規則 (rule)**、プレイヤーが目標の達成に向けて打つ**手 (move)**、その手を打つ際に取りの**方略 (strategy)**であり、最後のものは一般に初めの三つと、そしてとりわけ合理的考察により制約を受ける。言語ゲームの目的あるいは目標は、既に述べたように、世界のものごとの在り方について合意に至ることであると考える。**Stalnaker (1978)**の**共通基盤 (common ground)**の概念(談話における対話者がそれらの命題すべてが真であるかのように振る舞うような命題の集合; 命題は厳密には可能世界の集合により実現される)と、関連する**文脈集合 (context set)**(共通基盤の共通集合、共通基盤のすべての命題が真であるような世界の集合)を用いると、我々の目標は文脈の集合を単集合、すなわち現実世界になるまで縮小することである。規則は二種類あり、いずれも対話者の言語行動に対する制約とみなされる。**規約的規則 (conventional rule)**(統語的、構成意味論的など)と**会話的規則 (conversational rule)**(例えば、グライスの格率)である。後者は正確には言語的なものではなく、(i) ゲームの目標(例えば、協調の格率は、言語ゲームを行うことがルイス流の調整問題であるということから導かれる。質の格率は真実が究極の目標であるということから、量の格率 1 は究極の目標に掛り合ったゆえに一手の利得を最大化したいという願望から導かれる)と、(ii) 人間の認知的限界 (cf. この視点からの **Sperber & Wilson (1986)**の**関連性**と量の格率 2 の議論)があつての合理的考慮により得られる⁵。プレイヤーが打てる手には二種類あり、それらは規則によって定義される容認可能な行動の種類に該当し、ゲームの目標との関係性に基づいて分類される言語行動である (p. 5) (ここでは、命令文という一般的クラスは考慮しない)。二種類の手とはすなわち、**Carlson (1982)**が**布石の手 (setup move)**および**決め手 (payoff move)**と呼ぶものであり、布石の手は**疑問 (questions)**、決め手は疑問に対する答えとなる**主張 (assertion)**である。ここで筆者がとる解釈では、手は発話行為ではなく、発話行為において用いられる意味的構成物であることに注意されたい。発話行為は手を提示する行為である。探求の方略*については、以下で改めて論じることにする。

どのような手の解釈にも、二つの側面があると想定する。**前提内容 (presupposed content)**と**提示内容 (proffered content)**である。**提示 (proffered)**という用語は、主張において主張される事柄および疑問と命令において前提となっていない内容の両方をカバーする用語として用いる。**Lewis (1979)**は、疑問を命令の一種として扱う。疑問は受理された場合、対話者に対してその疑問が提示する代替要素の中から選択を行うことを命じるのであるから、これは正しいと思われる⁶。現代の意味分析のほとんどで、疑問はその疑問に対する可能な答え(あるいは、理論によっては正しい答え)である命題の集合を外延とする、あるいは決定するものだとみなされている。そのような可能な答えが提示される代替要素となる。疑問が対話者によって受理されると、これにより対話者は共通の目標、つまり答えを見つけることに掛り合うことになる。プランニング理論における目標への掛り合いのように、これは特に強いタイプの掛り合いであり、目標が達成されるか、あるいは目標が達成不可能であると

⁵ これ以降、日常英語の用法と区別するために、グライスの**関連性 (Relevance)**と(以下で形式的に定義する)関係する概念を大文字で始める。[訳注: 日本語では太字で表記する。]

* 訳注: 改めて整理すると、談話の主要な目標は、対話者たちが「ものごとの在り方」を発見し、共有し合う「共同探求」であり、対話者たちは共同探求という目標の達成のために方略を立てる。

⁶ 疑問と命令を異なる種類の発話行為として扱いたくなる理由もある。ここでは命令については取り上げないので、いずれの立場が正しいかについて論じることにはしない。

示されるまで持続するものである。受理された疑問は、議論の直近の主題となる。筆者はこれを**直近の議論下の疑問** (immediate question under discussion) と呼び、しばしば**議論下の疑問** (question under discussion) と短縮する。

Stalnaker のいう談話の目標は、それ自体が疑問であるとみなせる。その疑問とは、**ものごとの在り方はどのようになっているか** (What is the way things are?) という大疑問 (the Big Question) で、この大疑問に対応する代替要素の集合は、談話の任意の時点における文脈集合内の世界の単集合すべてから成る集合である。このことは、疑問によって提示される代替要素の集合に対する別の見方を示唆する。疑問は発話時点における文脈集合の分割を行い、分割により生じる各セルはその疑問に対する完全な答え一つが真であるような世界の集合となる (cf. **Groenendijk & Stokhof 1984** における答えの集合の説明のための分割の使用)。だとすれば、文脈集合それ自体を代替要素の究極的な集合を表すものとして見ることができる。我々の究極の目標は唯一無二の(「現実の」)世界を選択することだからである。

(p. 6) 対話者は疑問を受理すると、その疑問に答えようという意図を抱き、その意図は共通基盤に入り込む⁷。協調的な対話者は、この意図の存在を承知していれば、それに掛り合う。つまり、自身が疑問に答えようという意図を(表向きには)持つ。そして、一貫性を下支えし、ゆえに情報の処理と貯蔵を助ける談話の構成原理である**関連性**によって、対話者は疑問が尋ねられてからできるだけ早くそれに答えようとする。**Grice** の量の格率 1 により、談話の目標を考えれば、部分的な答えより完全な答えの方が望ましいことになる。

Stalnaker がそう考えるように、主張は代替要素の中からの選択である。主張は、もし受理されれば、共通基盤に追加され、それにより文脈集合を縮小させる。談話が一貫した(**関連性**に従った)ものになるためには、ある主張がどのような(文脈集合の分割のセルに対応する)代替要素の中から選択を行うのが明らかでなければならない。選択候補となる代替要素は、議論下の疑問あるいは主題により提示されたものである。主張が決め手であるというのはそういうことである。主張は、布石の手/疑問により提示された代替要素から選択を行い、それによりゲームの目標を推進する。形式的誤謬は、議論下の疑問と無関係な主張であり、理屈上は情報があるけれども、方略のまずさと談話の直近の目標への掛り合いの欠如、すなわち協調性の欠如が反映されたものである。形式的誤謬は利得を最大化することもできない。優れた方略家は、それが誘発するであろう関連する推論の数を最適化するように主張を行う。そのような推論は談話の計画構造から生じる談話の分割のために行いやすくなると想定することは妥当であろう (**Grosz & Sidner (1986)** および **Sperber & Wilson (1986)** を参照。ただし、後者は**談話の分割** (discourse segmentation) という用語は用いていない)。

探求方略 (strategy of inquiry) とは、ゲームの制約を守りつつゲームの目標を(少なくとも部分的には)達成するように立案された一連の布石の手、すなわち疑問のことである。主たる目標は大疑問に答えることであるから、合理的な方略では、達成しやすく、主たる目標達成の助けになるよ

⁷ これは、疑問提示者の知識を増加させることに関係する **Carlson (1982)** のいう疑問の認識論的要件や、**Ginzburg (1994)** による関連する考えとは区別されるものである。ここでは、「情報を得る」のは話し手ではなく、共通基盤であり、求められるのは知識ではなく、相互信念の行動である。これにより、談話における情報のより独我論的な見方にとっては問題となる修辭的疑問やクイズ型疑問などに関して一般化が可能になる。

うに論理的に関連し合う下位目標を作り出し、それにより大疑問に答える計画が関与するだろう。Groenendijk & Stokhof (1984: 16) に従い、疑問に対する伴立関係を次のように定義することができる：(p. 7) ある疑問文 q_1 が別の疑問文 q_2 を伴立するのは、 q_1 の答えとなる命題すべてが q_2 の答えにもなるとき、そのときに限る。(これには完全な答えについて話しているという前提がある。そうではないと、伴立が実は逆向きに成り立つ可能性があるからだ。) 例えば、「あなたは何が好きですか?」は「あなたは食べ物は何が好きですか?」を伴立する。大疑問「ものごとの在り方はどのようになっているか?」に対する答えは、他に可能なあらゆる疑問を伴立する。そのような関係にある q_1 は、上位疑問 (superquestion) と呼べるだろう。そして、上位疑問 q_1 が伴立するような q_2 はどれも下位疑問 (subquestion) と呼べるだろう。他方で、もし我々が十分な数の下位疑問に答えられるならば、我々は上位疑問に対して答えを持っているということになる。談話の究極的な目標と参加者の合理性を考慮すれば、このような関係は我々の取る手を構築する中心的要因である。

もちろん、談話における疑問は一般に、大疑問よりも具体的なものであり、もっと処理しやすい。最も一般的な意味での談話における探求の目標の他に、我々にはたいてい領域内目標 (domain goal)、つまり、実世界における目標、探求とは全く別に達成したい事柄がある。領域内目標は一般に、会話中で行う探求の型、つまり、ものごとのあり方がどのようになっているかという疑問にアプローチする方法を義務の優先モダリティ*の形で管理する。我々は、自然と、領域内目標に直接関係する事柄について最初に探求するであろう。

従って、領域内目標は我々がある時点で大疑問の下位疑問のうちどれを取り上げるのかを規定する傾向がある。だが、上述のように、ひとたびある疑問に掛り合ったら、つまり、それに答えようとしたら、それに答えが与えられるか、もしくはそれが現時点では解答不可能であることが明らかになるまで、そしてそのいずれかでない限り、我々はその疑問を追求する。しかしながら、このような追求における対話者の方略としては、下位疑問に対する答えを追求するという決定もあるだろう。つまり、関連する疑問の連続がその中で最も一般的で論理的に最も強い疑問に対する答えを得るための方略となるかもしれないのだ。従って、探求方略は伴立関係により部分的に順序付けられた疑問の集合という、階層構造を持つだろう。事態は実はこれよりも複雑である。というのも、実際の方略における疑問は、特定の文脈的伴立関係があるがゆえに論理的に関連するだけかもしれないからだ。だが、これが方略の基本的性質であり、以下では、方略は文脈に相対化された形で、この理想化された論理構造を持つと想定する。

もちろん、談話中にはここで仮定する制約された関係に対する反例のように見える疑問の連続が多くある。例えば、ある時点で、対話者がある上位疑問に関連する多数の下位疑問を、どれにも答えずに次から次へと投げかけることがあるかもしれない。だが、これは単なる列挙であり、上位疑問にどのように取りかかるかについての計画を暗に示しているだけである。(p. 8) それらの疑問はどれもまだ提示されても受理されてもいない。そのような下位疑問に対し、我々は一度に一つずつしか対応できず、一つの疑問に対応しているときには、我々はその疑問から離れない(あるいは、その疑問から

* 訳注：優先 (priority) モダリティとは、ある状況が他の状況よりも優先されることを表すようなモダリティである。義務 (deontic) はその下位分類の一つで、他には目的 (teleological)、希望 (bouletic) が優先モダリティに含まれる。

離れて「話題を変えた」対話者に文句を言うこともできる)。別の事例としては、ある時点において、ちょうど議論されたばかりの情報が今は休眠状態の別の情報と関係することにはっと気づき、後者の情報を持ち出す人がいるかもしれない。これは会話を脱線させかねず、我々はその後、自分が追求していた方略により軌道修正しようとするか、さもなければ、その会話を諦め、先に進む。だが、これらの事例は、違反によって規則の一般的効力がかえって明白になるような規則違反である。2.1 節での修正的文脈における議論下の疑問に関する簡潔な議論も参照されたい。そこでは、これらの事例が談話それ自体についてのメタ疑問の一種であるとしている。

Carlson (1982) の中心的洞察の一つは、対話は疑問と答えの関係により機能的に構造化されているということである。ただし、疑問は明示的に発せられず、他の手がかりをもとに推定されるに留まることも多い。以下の節では、決して明示的に尋ねられず、暗に意図される議論下の疑問を対話者が引き出すことができる方法の一つを見る。筆者は、英語の韻律的焦点は議論下の疑問を前提とすると主張する。その前提により聞き手は、いくつかの他の文脈の手がかりを用いて、その疑問およびその疑問と遂行中の方略との関係を再構築することができる。これは、プランニング理論において、共通基盤にある他の情報および実際の発話内容から対話者の計画を推論することを可能たらしめる計画推論規則を用いて、より抽象的な形でモデル化される一般的なケースの例の一つに過ぎない。同様に、ある文脈において明らかに伴立される答えが、明示的に発話されないにもかかわらず、共通基盤に入り込むことがある。このようなケースには、Lewis (1979) のいう調節 (accommodation) が関与し、談話においてはごく自然なことである。ある対話者が、まだ共通合意は得られていないものの、他の対話者たちが異議を持たないような疑問または主張 ϕ を前提としていることが明らかな場合、他の対話者たちは ϕ がこれまでずっと共通基盤にあったかのように振舞うのである。従って、談話ゲームにおける手という概念は、本質的には意味論的なものである。疑問は必ずしも発話行為によって実現されるわけではなく、対話者がその対応に掛り合う関連する代替要素の集合を提示するものという厳密な意味での疑問の外延に過ぎない⁸。疑問は、談話中のその時点で、談話が何「について」であるかを教えてくれ、さらに、その疑問が関与する疑問の方略を見れば、談話がどこに向かっているかを教えてくれる。

(p. 9) 本節の残りの部分では、談話が疑問に基づいて組み立てられるという見方を展開するための準備として、まず 1.1 節で疑問の意味論の概略を述べる。次に、1.2 節で筆者が念頭に置いている情報構造の概念の形式的特徴を考える。最後に 1.3 節で、情報構造における役割の自然な帰結として見た、疑問と答えの語用論について考察する。

1.1 疑問の意味論

ここで採用する疑問の意味論は、重要な側面でいずれとも異なっているものの、Hamblin (1973), Groenendijk & Stokhof (1984), von Stechow (1991) の初期の研究から様々な要素を援用している。Hamblin の説明と同様に、疑問は代替要素の集合を外延とする。これを疑問の q -代替要素集合 (q -

⁸ 議論下の疑問という概念を意味論的に実現することのよい帰結の一つは、暗に意図された抽象的な疑問は前提、とりわけ実際の疑問の発話行為に付随すると言われることもある存在前提の類いである必要はないということである。それに対し、Carlson はそのような暗示的な疑問は談話のテキストの実際の一部であるという想定をしている。

alternative set) と呼ぶことにする。Groenendijk & Stokhof からは、疑問に対する完全な答え (complete answer) と部分的な答え (partial answer) の概念を定義するために、q-代替要素集合が世界の集合に対して築く分割の使用を援用する。そして、疑問の q-代替要素はすべて対話者により尋ねられ、このことが共通基盤に影響を与えるという von Stechow の想定を採用する。ただし筆者は、von Stechow (1991) のようにこれを疑問の意味的な外延の一部とはせず、疑問を受理するとはどういうことかという点に関する語用論の一部とする。本稿の説明は、疑問に対して構造化された意味論を考えることはせず、疑問／答えの対を同時に生成したりもしないという点で、von Stechow や Groenendijk & Stokhof の説明とは異なる。本稿の説明では、主張とそれが対処する疑問との緊密な関係、そしてそれゆえに (部分的には) 主張と答えとの緊密な関係は一般に、主張の韻律的焦点による前提に反映される。下の 2 節で、その前提は、談話の情報構造における議論下の疑問に関する主張の役割についての前提であると主張する。全体を通して、埋め込まれた疑問をどう分析するかという重要な問いは扱わない。埋め込まれた疑問の意味は、主節の疑問の意味とは異なると想定する。ただし、両者はもちろん密接に関係し合っている。関連する議論については、Jacobson (1995), Ginzburg (1995a, b), Higginbotham (1996) を参照されたい。

以下では、任意の構成素 α について、 $|\alpha|$ は、通例通り再帰的、構成的な規則によって得られる α の通常の外延であるとする。疑問の論理的形式は、広い作用域の疑問演算子「?」を含むとされる。その作用域内において、疑問における「誰が到着した?」のような wh 節は、「誰 ($\lambda x.x$ が到着した)」であると想定され、wh 要素が冠頭位置にあり、主節はその痕跡をラムダ抽象したものとして解釈される。(p. 10) 便宜上、考慮する wh 要素は、意味タイプが同じであることから、「誰」と「何」に限定する。単純な wh 疑問文であれば、その疑問の外延である q-代替要素集合は、wh 句をラムダ抽象し、そして次にその結果をモデル内の wh 句が外延とするものと同じタイプのすべてのもの (存在物であれ、関数であれ、何であれ) に適用することによって派生され得る命題の集合である。これは次のように一般化することができる。

(1) 節 α の発話に対応する q-代替要素

$$\text{q-alt}(\alpha) = \{p : \exists u^{i-1}, \dots, u^{i-n} \in D [p = |\beta| (u^{i-1}) \dots (u^{i-n})]\}$$

ただし、 α は、 $\{\text{wh}_{i-1}, \dots, \text{wh}_{i-n}\}$ を α 中の wh 要素の (空の可能性もある) 集合とすると、 $\text{wh}_{i-1}, \dots, \text{wh}_{i-n}(\beta)$ という論理形式を持ち、

D は当該言語のモデルの領域であり、例えば「誰」ならば人間、「何」ならば非人間というように、種類に応じた制限が適切になされているものとする。

定義 (1) は、いかなる発話に対しても、たとえそれが疑問でなくとも、代替要素の集合を与える⁹。発話中のいかなる wh 要素についてもラムダ抽象を行い、モデル内の適切な種類の存在物 (entity) が自

⁹ この集合は von Stechow (1991) が疑問によって定義されるとする代替要素とは異なることに注意されたい。彼の代替集合は疑問文中の wh 要素およびその疑問文の焦点となっている構成素の両方に関して同時に変化するのに対し、下の 2 節で明らかになるように、筆者はこれら二つの変化を分けている。

由に抽象の変項になれるようにしている¹⁰. yes/no 疑問は wh 要素を有していないため, (1) による yes/no 疑問 $?(\alpha)$ の q-代替要素は単集合 $\{|\alpha|\}$ になるだけである.

疑問の意味は, 極めて単純である. 疑問の外延は, その疑問の q-代替要素集合である¹¹.

(p. 11)

(2) 疑問 $?(\alpha)$ の解釈

$$|?(\alpha)| = \text{q-alt}(\alpha)$$

「メアリーは誰を招待した?」のような疑問について, 「誰」がタイプ e であるとする, この疑問が記述する q-代替要素集合は, 恐らく適切であろう「誰も (しなかった)」という答えを含まないことになる. そのため, q-代替要素集合は必ずしも疑問に対するすべての可能な答えの集合ではない. もちろん, 「誰」が例えば一般量化子 $\langle\langle e, t \rangle, t\rangle$ のような e よりも高階のタイプであるとするれば, 「誰も (しなかった)」は対応するラムダ抽象の値として適切なタイプとなる. しかし, 以下ですぐ見るように, そのような答えを可能にするために「誰」のタイプについて何らかの想定をする必要はない.

疑問に答えるためには, その疑問の q-代替要素集合のすべての要素について, それらの要素を評価し, もし真のものがあるならば, どれが真であるかを見極めなければならない. 答えであることは, 次のように定義される.

- (3) a. 疑問 q に対する部分的答え (partial answer) とは, $\text{q-alt}(q)$ の少なくとも一つの要素についての評価——真または偽——を文脈的に伴立する命題である.
- b. 完全な答え (complete answer) とは, $\text{q-alt}(q)$ の各要素についての評価を文脈的に伴立する命題である.

ある疑問の q-代替要素集合に二つの命題 p, p' のみがあると仮定しよう. その疑問に対する完全な答えの集合は, (4) の集合の要素一つを伴立するものである.

$$(4) \{(p \wedge p'), (p \wedge \neg p'), (\neg p \wedge p'), (\neg p \wedge \neg p')\}$$

この集合は, ある発話の文脈集合を含む, あらゆる任意の可能世界の集合に対して, 分割を設けることに注意されたい. なぜならば, いかなる世界においても, これら四つの可能な式のうち一つだけしか真となり得ず, 世界の集合で特異なものにおいては, 四つの式のいずれもが真であるような集合があり得るだろうからである. 完全な答えはそれぞれ分割におけるセル一つに対応し, 前節で非形式的に論じたように, ある完全な答えが受理されると, 他のすべてのセルが捨てられることになる.

¹⁰ ここで wh 要素を演算子として扱うことは重要ではない. ここで想定する論理形式では, 冠頭の wh 要素の役割は主としてその作用域を示すことである. そのようにしないのであれば, wh 要素そのものを別個の変項として想定することもあり得ただろう. Ginzburg 1995a, b にならい, 彼の QUANT-CLOSURE 演算子のような特別な空演算子が適切なレベルですべての自由な wh 変項を無差別に束縛するようにするのである. 空演算子を想定する経験的意義と同じく, 特に他の種類の演算子の作用域との相対的關係において, wh 要素の作用域決定に関する事実はよく分からない. そのため, 本稿ではこの問題は論じないことにする.

¹¹ ここでは議論なしにこの意味を採用する. それが単に, 以下で採用する代替意味論による焦点と疑問の説明と一貫性を持つ最も単純な外延であるというだけのことである. 情報構造と焦点に関する提案で (2) が要となるような点はないので, 疑問の解釈を別のタイプに置き換えてもいいだろう.

例として、(5)の例文と(6)に派生を示したその外延を考えよう。

(5) メアリーは誰を招待した？

(6) $|?(誰(\lambda x.メアリーはxを招待した))| = \mathbf{q-alt}(誰(\lambda x.メアリーはxを招待した))$ (p. 12)
 $= \{p : \exists u \in D[p = |\lambda x.メアリーはxを招待した|(u)]\}$
 $= \{メアリーはuを招待した : u \in D\}$

対話者は、提示された疑問(5)を受理したら、その疑問に答えること、すなわち、その疑問が提示するすべての代替要素の評価に掛り合うことになる。モデル内には三人しかいないとし、 $D = \{メアリー, アリス, グレース\}$ であるとしよう。その場合、(5)の外延は、(7)の集合になる(「招待する」が外延とする関係は非反射的であると想定し、モデル内の個体の結合は無視している)。

(7) $\{メアリーはアリスを招待した, メアリーはグレースを招待した\}$

「メアリーはアリスを招待した」を p 、「メアリーはグレースを招待した」を p' とすると、(5)は(4)に提案した分割に対応する。適度に豊かな文脈集合に対して分割が設けられたならば、完全な答えの集合は、「メアリーはアリスとグレースを招待した」、「メアリーはアリスは招待したが、グレースは招待しなかった」、「メアリーはグレースは招待したが、アリスは招待しなかった」、「メアリーは誰も招待しなかった」を含み、このうち最後のものが $\neg p \wedge \neg p'$ という式に対応するセルを選び出す。部分的答えは、その真偽が分割のセルのうち少なくとも一つを除外するような発話となる。例えば、「メアリーはグレースを招待しなかった」は p' が真である両方のセルを除外するが、メアリーはアリスを招待したのかという疑問は未解決のままである。すべての完全な答えは部分的答えであるが、その逆は成り立たない。

答えであることを(3)のように定義したことにより、疑問について論じるのに有用な他の用語を定義することができる。

(8) ある疑問 q_1 が別の疑問 q_2 を伴立するのは、 q_1 に答える(つまり、答えを与える)ことが q_2 への完全な答えを与えるとき、そのときに限る。(cf. Groenendijk & Stokhof 1984: 16)

(9) ある疑問 q_1 が別の疑問 q_2 を文脈的に伴立するのは、共通基盤 C (命題の集合)を持つ談話の文脈において q_1 に答えることで、 $C \cup \text{Ans}(q_1)$ が q_2 への完全な答えを伴立することになるとき、そのときに限る。

論証することはしないが、発話は、部分的答えを直接的に主張するか、部分的答えを文脈的に伴立するか、疑問への部分的答えを文脈的に伴立する事柄を前提または会話の含意とするかのいずれかによって、疑問に部分的に答えられると考える。

この節で示した疑問の意味は、本質的に静的である。これは次節で提示する情報構造を静的に捉える見方にはよいだろう。しかし、1.3節では、疑問においてどのように前提が投射されるかという問題を考える。その際、疑問および疑問がその中で役割を果たす情報構造の動的な見方が必要となる。(p. 13) そのため、動的な情報構造における疑問の潜在的な文脈変更力 (context change potential) について述べる。ただし、 q -代替要素の集合に対してアップデート関数を定義することは静的な意味解釈を与えることよりもいささか複雑になるものの、ここで提示した簡潔な意味は、答えであることおよび疑問の伴立関係という概念とともに、依然として提案の核心となるものである。

1.2 情報構造の形式的理論

本節では、談話の**情報構造** (information structure) の形式的定義について考察を進める。談話の情報構造とは、談話における明示的・暗示的 (語用論的に引き出される) な疑問や答えの手の集合およびその集合に含まれる手に対する様々な関数や関係であると考えられる。後者には疑問を順序付ける方略により生じる構造が含まれる。疑問/答えの関係から手の対が得られ、そのような対は疑問についての方略的關係によって部分的に順序付けられる。疑問が間接的に「尋ねられる」ことがあるように、答えも実際には一つあるいは複数の主張の連続によって与えられることがあることに注意されたい。ここで詳細に検討することはできないが、答えを得るのに、そのような連続を基になされた推論さえもが必要になることもあり、構造は単純な疑問/答えの対話よりも複雑になる。

形式的な情報構造の定義には、いくつかの方法が考えられる。そのうちの一つは次のように表される。

(10) 談話 \mathcal{D} の**情報構造**はタプルである¹²。

$$\text{InfoStr}_{\mathcal{D}} = \langle M, Q, A, <, \text{Acc}, \text{CG}, \text{QUD} \rangle^*, \text{ただし}$$

- a. M は談話における (布石の手と決め手の) 手の集合である。
- b. Q は M における疑問 (布石の手) の集合である。疑問は命題の集合である。(p. 14)
- c. A は M における主張 (決め手) の集合である。主張は可能世界の集合である。
- d. $<$ は先行関係であり、 M における全順序である。

$m_i < m_k$ が成り立つのは、 \mathcal{D} において m_i が m_k より先に打たれる/発せられるとき、そのときに限る

$<$ のもとにある任意の二つの要素の順序は、それらの指標の自然な順序に反映される。ただし、すべての m_i について、 $i \in \mathbb{N}$ とする。

- e. Acc は M において受理された手の集合である。
- f. CG は M から命題の集合への関数であり、各 $m \in M$ について、 m が発話される直前の \mathcal{D} の共通基盤を与える。さらに、以下が成り立つ必要がある。
 - i. すべての $m_k \in M$ について、 $\text{CG}(m_k) \supseteq \bigcup_{i < k} (\text{CG}(m_i))$
 - ii. すべての $m_k \in M$ について、 $\text{CG}(m_k) \supseteq \{m_i : i < k \text{ かつ } m_i \in \text{Acc} \setminus Q\}$

¹² 談話を対話者の集団の中で一定時間の間に打たれた明示的な手の集合として定義しようとするものもあるだろう。その場合、対話者が「同意」し得る可能な暗示的・補問の手から成る異なる集合が存在し、結果として情報構造も異なることになるだろう。従って、談話の決まった情報構造 (*the information structure*) ではなく、談話のある情報構造 (*an information structure*) について語ることになる。重要ではないものの、以下、談話は、談話内で打たれる明示的あるいは暗示的なすべての手から構成されると想定する。いずれの場合も、タプルに M の部分集合で、談話におけるすべての明示的な手から成る集合 Exp を加えることもできるだろう。

* 訳注：各変数名は以下の英語に基づく。 M : move (手) ; Q : question (疑問) ; A : answer (答え) ; Acc : accepted (受理された) ; CG : common ground (共通基盤) ; QUD : Question Under Discussion (議論下の疑問)。

- iii. すべての $m_k, m_i \in M, i < k$ について,
 1. 命題 $m_i \in M$ は $CG(m_k)$ の要素である.
 2. もし $m_i \in Q$ ならば, 命題 $m_i \in Q$ は $CG(m_k)$ の要素である.
 3. もし $m_i \in A$ ならば, 命題 $m_i \in A$ は $CG(m_k)$ の要素である.
 4. もし $m_i \in Acc$ ならば, 命題 $m_i \in Acc$ は $CG(m_k)$ の要素である.
 5. すべての命題 $p \in CG(m_i)$ について, 命題 $p \in CG(m_i)$ は $CG(m_k)$ の要素である.
 6. $QUD(m_i)$ の値が何であれ, それが $QUD(m_i)$ の値であるという命題は $CG(m_k)$ の要素である.
- g. 議論下の疑問のスタック (questions-under-discussion stack) である QUD は, M (談話における手)¹³ から, すべての $m \in M$ について以下が成り立つような $Q \cap Acc$ の順序部分集合への関数である.
 - i. すべての $q \in Q \cap Acc$ について, $q \in QUD(m)$ であるのは以下のとき, そのときに限る.
 1. $q < m$ (つまり, m あるいはどんな後続する疑問も含まれない), かつ
 2. $CG(m)$ は q への答えを伴立せず, q が事実上答えられないものであると決定されていない.
 - ii. $QUD(m)$ は $<$ によって (全) 順序付けられる. (p. 15)
 - iii. すべての $q, q' \in QUD(m)$ について, もし $q < q'$ であれば, q' への完全な答えは q への部分的答えを文脈的に伴立する.

疑問と主張のみを考慮しているため, \mathcal{Q} における主張の集合は, M において Q の補集合であると想定する.

談話における手がすべて受理されるとは限らず, Acc は一般に集合 M の真部分集合になることに注意されたい. 恐らく我々は, どのような疑問と主張が提案されたかを記憶に留めている. たとえそれらの疑問や主張が却下されたとしてもである. そう考えることは, 例えば否認や修正を説明する際に非常に重要になる. しかし, Carlson (1982) の談話の見方と異なり, 我々が記憶に留める手は意味的存在物, すなわち談話内の発話によって表現される情報であり, 談話内の発話の構造的な分析ではない. これは, 先行する談話に関する構造的情報は極めて急速に失われると示す心理言語学の研究から見て, 好ましいことだろう.

CG の値に対する制約により, いかなる手もその CG の値は先行するあらゆる手の共通基盤の上位集合となる. これにより, 共通基盤は単調となり, 以前に与えられた情報を保持することが保証される. もちろん, 談話は常にこの意味で単調なわけではないが, ここではこの問題は考えない. また, 共通基盤は, 疑問でないすべての先行する受理された手, すなわち先行する受理された主張を含むこ

¹³ 参加者が却下した主張や疑問であっても, それが生起する談話の情報構造との関係において適切 (あるいは不適切) であったと決められることがある. そのため, QUD の領域は受理された手に限定されない.

とが求められる。これは **Stalnaker (1978)** の主張を受理するとはどういうことかについての特徴付けに沿った形でなされる。共通基盤を、先行する共通基盤の、そして受理された主張の集合の、真の上位集合にもなり得るような上位集合とすることで、追加的な情報が受理された決め手／主張によってだけでなく、場合によっては調節された含意、推論、共通の知覚的経験などによって加えられる可能性を残している。(10f) の節 (iii) は、どんな手が打たれてきたか、どれが疑問でどれが主張であるか、どれが受理されたか、ある手が打たれた時点で何が共通基盤にあったか、その時点でどんな疑問が議論下にあったかということを含め、談話のどの時点においても、対話者が情報構造自体について完全な情報を持っているということを含めようとするものである。

談話の任意の時点における議論下の疑問の集合は、筆者が **QUD**, **議論下の疑問のスタック** (questions-under-discussion stack) と呼ぶ、**プッシュダウンストア** (後入れ先出し記憶装置) を用いてモデル化する。直感的に言えば、**QUD** は、 q が発話される時点で Q にある、受理された疑問すべての順序集合を与える。それらの疑問は、まだ答えられていないが答えることが可能な疑問である。我々は、疑問を受理すると、それをスタックの一番上に置く。その疑問とそれ以前に一番上にあった疑問との関係は、**関連性**およびスタックの構成のされ方に対する論理的な制約によって保証される。**関連性**は、以前の疑問に答えることへの掛り合いを伴立する。(p. 16) もし下位疑問を尋ねることによって受理された疑問の答えを探っていこうと決めたなら、その下位疑問をスタックに加えることができ、スタックは疑問の方略 (の一部) を反映することになる。疑問が答えを与えられるか、事実上答えられないと決定された時は、その疑問はスタックから取り出され、その下にある疑問が顕になる。談話のどの時点においても、スタックの一番上にある疑問が議論下の (直近の) 疑問である。

以下では、(10g) の **QUD** の定義の節 (iii) の動機について論じる。しかし、まず、ここでの議論が完全に抽象的にならないように、とても単純で、かなり過度に明示的な談話によって、**QUD** スタックがどのように働くかを説明したい。この例は、ヒラリーとロビンという二人の個体と、ベーグルと豆腐という二種類の食べ物から成るモデルを前提とする。談話 (\mathcal{D}_0) における各疑問が対話者によって受理されていると想定する。

(\mathcal{D}_0) 1. 誰が何を食べた?

a. ヒラリーは何を食べた?

i. ヒラリーはベーグルを食べた?

Ans(a_i) = はい

ii. ヒラリーは豆腐を食べた?

Ans(a_{ii}) = はい

b. ロビンは何を食べた?

i. ロビンはベーグルを食べた?

Ans(b_i) = はい

ii. ロビンは豆腐を食べた?

Ans(b_{ii}) = はい

この談話は全体で、最初の疑問である手 1 に答えるための方略を実現している。ここでは、登場する疑

問は単純な伴立関係にある。(D₀)の各疑問について、それが伴立する疑問の集合は下のようになる。

$$\begin{aligned} \models (1) &= \{a, a_i, a_{ii}, b, b_i, b_{ii}\} \\ \models (a) &= \{a_i, a_{ii}\} \\ \models (b) &= \{b_i, b_{ii}\} \end{aligned}$$

(これらの関係性は、談話のレイアウトにおけるインデントの階層によっても反映されている。) 上述のモデルでは次の事実が成り立つことにも注意されたい。ただし、モデルの領域は {ヒラリー, ロビン, ベーグル, 豆腐} である。

(p. 17)

- (11) a. $\text{Ans}(a_i) \cap \text{Ans}(a_{ii}) = \text{Ans}(a)$, つまり, a_i と a_{ii} に完全な答えを与えることで, a への完全な答えとなる. a_i に答えることは, 従って, a への部分的答えとなり, a_{ii} についても同様である.
- b. $\text{Ans}(b_i) \cap \text{Ans}(b_{ii}) = \text{Ans}(b)$, つまり, b_i と b_{ii} に完全な答えを与えることで, b への完全な答えとなる. b_i に答えることは, 従って, b への部分的答えとなり, b_{ii} についても同様である.
- c. $\text{Ans}(a) \cap \text{Ans}(b) = \text{Ans}(1)$, つまり, a と b に完全な答えを与えることで, 1 への完全な答えとなる. a に答えることは, 従って, 1 への部分的答えとなり, b についても同様である.
- d. (10g) の節 (iii) において, 部分的答えであることは推移的であるため, a_i, a_{ii}, b_i あるいは b_{ii} に答えることは, 1 への部分的答えとなる.

直感的に言えば, (D₀) が (1) にうまく答えるための方略を実現しているのは, 部分的にはこれら四つの事実による。(D₀)の各疑問が尋ねられるに従い, それらの疑問は QUD スタックに加えられていき, (1) が一番下になる。例えば (a_i) のような下位疑問が答えを得ると, その疑問はスタックから取り出され, その答えは共通基盤に加えられる。(a_i) と (a_{ii}) が答えを得た時, (11) の最初の事実で述べられているように, 共通基盤は (a) への答えを伴立し, その後, (a) も取り出される。a と b がこのようにして答えを得た時, (11) の三番目の事実に反映されているように, 共通基盤は 1* への答えを与える。そして, 1 も取り出され, (この談話が文脈のない環境で起こったものである限りにおいて) QUD スタックは空になる。

(D₀)における疑問間の論理的関係もまた, (D₀)の QUD スタックが (10g)の QUD の定義における節 (iii) を満たすことを保証するものである。同節は基本的に, スタック上でより高い位置にある疑問が, スタック上でより低く位置し, 以前に受理された疑問の下位疑問であることを要求する。InfoStr_{D₀} の順序付け機能である < は, 全順序を与える。

$$\langle 1, a, a_i, \text{Ans}(a_i), a_{ii}, \text{Ans}(a_{ii}), b, b_i, \text{Ans}(b_i), b_{ii}, b_{ii} \rangle$$

* 訳注: 原文では a となっているが, これは誤植であると考えられる。

(p. 18) そして, QUD 関数は以下の通りである.

$$\begin{aligned}
 \text{QUD}(1) &= \emptyset \\
 \text{QUD}(a) &= \langle 1 \rangle \\
 \text{QUD}(a_i) &= \langle 1, a \rangle \\
 \text{QUD}(\text{Ans}(a_i)) &= \langle 1, a, a_i \rangle \\
 \text{QUD}(a_{ii}) &= \langle 1, a \rangle \\
 \text{QUD}(\text{Ans}(a_{ii})) &= \langle 1, a, a_{ii} \rangle \\
 \text{QUD}(b) &= \langle 1 \rangle \\
 \text{QUD}(b_i) &= \langle 1, b \rangle \\
 \text{QUD}(\text{Ans}(b_i)) &= \langle 1, b, b_i \rangle \\
 \text{QUD}(b_{ii}) &= \langle 1, b \rangle \\
 \text{QUD}(\text{Ans}(b_{ii})) &= \langle 1, b, b_{ii} \rangle
 \end{aligned}$$

(10g) の QUD の定義における節 (iii) を満たすためには, 上に列挙した順序集合の各々において, 任意の要素に対する完全な答えがその要素の左側にあるどの要素に対しても部分的答えを伴立するようになっていなければならない. そのため, $\langle 1, b, b_{ii} \rangle$ を考えると, b_{ii} に答えることは, b および 1 への部分的答えを伴立しなければならず, b に答えることは, 1 への部分的答えを伴立しなければならない, などということになる. これはまさに (11) の事実が示すことである.

以上を踏まえ, ある主題あるいは議論下の疑問に対する探求方略の概念を QUD 関数を用いて, 次のように定義することができる.

(12) q に答えようとする探求方略 $\text{Strat}(q)$

$q \in Q \cap \text{Acc}$ であるあらゆる疑問 q について, $\text{Strat}(q)$ は順序対 $\langle q, S \rangle$ である. ただし, S は以下のような集合とする.

もし $\text{QUD}(q') = \langle \dots q \rangle$ を満たす $q' \in Q$ が存在しなければ, $S = \emptyset$.

それ以外の場合, すべての $q' \in Q$ について, $\text{Strat}(q') \in S$ であるとき, そのときに限り, $\text{QUD}(q') = \langle \dots q \rangle$.

ある疑問 q について Strat が与える順序対 $\langle q, S \rangle$ は, 「 S における下位探求の集合を実行することにより q に答える方略」と読めるだろう. (p. 19) (\mathcal{D}_0) に対しては, Strat は以下を与える.

$$\begin{aligned}
 \text{Strat}(a_i) &= \langle a_i, \emptyset \rangle \\
 \text{Strat}(a_{ii}) &= \langle a_{ii}, \emptyset \rangle \\
 \text{Strat}(a) &= \langle a, \{ \langle a_i, \emptyset \rangle, \langle a_{ii}, \emptyset \rangle \} \rangle \\
 \text{Strat}(b_i) &= \langle b_i, \emptyset \rangle \\
 \text{Strat}(b_{ii}) &= \langle b_{ii}, \emptyset \rangle \\
 \text{Strat}(b) &= \langle b, \{ \langle b_i, \emptyset \rangle, \langle b_{ii}, \emptyset \rangle \} \rangle \\
 \text{Strat}(1) &= \langle 1, \{ \langle a, \{ \langle a_i, \emptyset \rangle, \langle a_{ii}, \emptyset \rangle \} \rangle, \langle b, \{ \langle b_i, \emptyset \rangle, \langle b_{ii}, \emptyset \rangle \} \rangle \} \rangle
 \end{aligned}$$

最終行は, \mathcal{D}_0 が二つの下位探求を行うことで 1 に答える方略を含むことを示している. a_i と a_{ii} に答えることで a に答えるものと, b_i と b_{ii} に答えることで b に答えるものである. (10g) における

QUD の定義の節 (iii) により求められる、答えであることとの関係*、さらに (12) における QUD による Strat の定義の仕方から、疑問 q が疑問 q' に答えるための方略の一部であるのは、 q への完全な答えが q' への部分的答えを文脈的に伴立する場合のみであることが保証される。順序対 $\langle q, S \rangle$ の二番目の要素の順序付けをしなければ説明できないような、より複雑な種類の方略があるかもしれないが、ここでは検討しない。基本的には、合理的な熟慮が、共通基盤で利用可能な情報（従って、どのような種類の文脈的推論が潜在的に導かれ得るのか）と連携し、ある方略が適格かどうかを決定する。

QUD スタックにおけるすべての疑問がスタックにおいてより上にある疑問を伴立するという要件を付けて、(10g) の節 (iii) を強めることはしないことに注意されたい。これは、次の状況における (13) のような談話を例にすると分かる。

$$\text{CG}(13a) \supseteq \left\{ \begin{array}{l} \text{ジョンは貝アレルギーである,} \\ \text{人は自分がアレルギーを持つものを食べない,} \\ \text{人はそれを食べない何らかの理由がない限り何かを食べる} \end{array} \right\}$$

- (13) a. ジョンはどんなシーフードを食べる？
b. ジョンは貝アレルギーだよな？

ここでは、(13a) は (13b) への答えを伴立しない。ジョンが貝アレルギーでないとしても、彼が貝を食べない理由はあるだろう。例えば、ジョンはユダヤ教の食事規則に従っているのかもしれない。もし (13b) への答えが「はい、貝アレルギーです」ならば、これは談話の共通基盤と連携し、ジョンが貝を食べないということを文脈的に伴立し、(13a) に部分的答えを与える。しかし、(13b) への答えが「いいえ、貝アレルギーではありません」であっても、それ自体はジョンが実際に貝を食べることを伝えるわけではない。一見したところ、これは (10g) の節 (iii) での要件それ自体が強すぎるかもしれないことを示唆している。(p. 20) しかし、(13b) への答えが (14) への部分的答えだと見れば、この見かけ上の問題は解決すると思われる。

- (14) ジョンには貝を食べないどんな理由がある？

翻って、(14) は、人は食べない理由がないものは何でも食べるという想定の下では、ジョンが貝を食べるかどうかを探る手段である。従って、(14) への答えは (13a) への部分的答えを文脈的に伴立する。(13b) は暗示的に (14) のような橋渡しの疑問を想定し、これにより、結果として生じる談話が (10g) の節 (iii) の下で適格なものとなっていると考える。

定義上、QUD 関数は、連続する一連の疑問を順序付けることはないし、そうすべきでもない。任意の時点において、QUD がスタックの「底」にある疑問（すなわち、上位疑問）に関して探求方略の全体を表すとは限らない。下位疑問にはすでに答えられているものもあり、つまり、方略の一部は既に実現されているかもしれず、そのため、それらの疑問はスタックにもうないのだ。例えば、 (\mathcal{Q}_0) では、 a_i と a_{i+1} に答えることで a に答えた後、これらの疑問はすべて、 b に対処するときには、スタックから取り出されるが、それらは依然として 1 に答えるための方略の一部である。また、筆者は QUD を定義する際、疑問は答えが与えられるか、(事実上) 答えられないものであると決定された場合、スタックから取り出されると想定した。疑問はさらに、スタックの低い位置にある疑問に答えが

* 訳注：疑問 q' への完全な答えと疑問 q への部分的答えの間にある文脈的伴立関係。

与えられた場合にも, スタックから取り出される. たとえ, 答えを得たその疑問が「より高い」取り出された疑問を直接的には伴立していなくてもである. これは, QUD スタックをより大きな方略の断片であるとするならば, 納得の行くことである. もし各疑問について順番に掛り合うならば, 後続する疑問はいずれも, たとえ間接的にだとしても, 既にスタックにある疑問に答える助けにならねばならない. しかし, 我々は実際には方略全体に掛り合うのであり, 個別の疑問への掛り合いは, スタックのより下にある先行する疑問への掛り合いに対して相対化される. そのため, より下位の疑問 q に答えると, $\text{Strat}(q)$ における, より上位のいかなる疑問にも掛り合う必要がなくなる. 例えば, (13) では, もし (13b) の後に「ジョンはユダヤ教の食事規則に従っている」と続けば, 対話者はジョンが貝アレルギーであるかどうかという, 答えられていない疑問を取り下げただろう. なぜなら, 対話者はより大きな疑問である (13a) に最も関心があり, それについての部分的答えを今まさに得たからである.

疑問がどのように談話を構成するかについて前述の内容を踏まえると, 談話におけるすべての疑問でない手, すなわち主張が, 受理された疑問に対して少なくとも部分的答えとなること, そして, 実際には各主張が発話時点における議論下の疑問に対する (部分的) 答えとなることも保証しておきたい. これは, 情報構造の枠組みにおける**関連性**の定義のされ方から帰結として得られる. 手 m が打たれる時点における (直近の) **議論下の疑問**が $\text{last}(\text{QUD}(m))$, つまり, 順序集合 $\text{QUD}(m)$ における最後の疑問であると定義するとしよう. (p. 21) すると, 任意の時点における議論下の疑問により**関連性**の概念と (cf. Grice は, 関連性の格率を「議論の目的」に対して相対化している), そのような疑問に掛り合うとはどのようなことであるかを特徴付けることができる¹⁴.

- (15) 手 m が議論下の疑問 q , すなわち $\text{last}(\text{QUD}(m))$ と**関連する (Relevant)** のは, m が q への部分的答えを導入するか (m は主張), q に答えるための方略の一部である (m は疑問) と, そのときに限る.

協調的な話者は, ゲームの目標を追求するにあたり, 自分の発話を**関連する**ものにしようと努力する. このことから, 適切な談話, すなわちきちんとした情報構造を備えた談話における手はいずれも, 発話時点の議論下の疑問に**関連する**ものとなる. よって, そのような談話における主張はいずれも, 期待通り, 議論下の疑問に少なくとも一つの部分的答えを与える. さらに, (15) は, (10g) の QUD の定義における節 (i) との関係から, 疑問を受理する際に伴う掛り合いを捉える. (i) により, 疑問は, それが答えを与えられているか, 答えられないものでない限り, 議論下の疑問の集合から取

¹⁴ これと Sperber & Wilson (1986) の**関連性**の概念を比較しておく必要がある. ここでは詳細な比較はできないが, 彼らの概念と (15) にあるもの間にある二つの重要な違いに言及したい. 一つ目は, Sperber & Wilson の**関連性**が彼らの還元主義的プログラムを反映していることである. なぜなら, 彼らの**関連性**は (筆者が理解する限りでは) グライスの元々の会話の格率すべての役割を担うことが意図されているのに対し, (15) は還元主義的ではなく, 例えば, 量の含意を説明することは意図していない. 二つ目は, Sperber & Wilson は, 彼らの概念を対話者の直近の意図や目標に対して相対化しておらず (それどころか, 彼らは共通基盤の可能性すら否定している), そのため, 処理労力 (processing cost) を最小化しながらの情報提供性 (informativeness) の最大化が絶対的に計算されることである. しかし, (15) で定義された**関連性**は, 重要なことに, 対話者により, 議論下の疑問に相対化される. よって, 情報構造における疑問の語用論的機能を考慮すると, 対話者の目標に対して相対化される.

り除くことができない。関連性により、疑問は、対話者が既に掛り合っている疑問に答えるのを促進し、それにより、その掛り合いが永続的になものになる場合にのみ受理されることが分かる。

上で展開した談話の情報構造の静的な特徴付けの代わりに、文脈変更の観点から情報構造を定義することもできるだろう。筆者は、今後の研究でそのような見方を展開していくつもりである。静的な特徴付けの利点の一つは、より包括的な見方を提供することであり、文脈変更の問題はさておいて、情報構造それ自体の性質が論じやすくなる。しかし、より動的な見方により、特に疑問における前提投射に関して、他の種の洞察が得られるはずである。

(p. 22)

1.3 情報構造における疑問の語用論

疑問の外延の観点から、疑問を呈することが、その疑問が生起する談話の文脈にどのように影響を与えるかを特徴付けたい。上で概略を示した情報構造の理論は、一つの答えを示唆する。Stalnaker (1978) による、主張の語用論を思い出されたい。パラフレーズすると (16) のようになる。

(16) 主張の語用論

もし談話において主張が対話者によって受理されれば、その主張は談話のその時点における共通基盤に加えられる。すなわち、情報構造 $\text{InfoStr}_{\mathcal{D}}$ を持つ談話 \mathcal{D} において、決め手 m_i と後続の手 m_{i+1} について、もし $m_i \in \text{Acc}_{\mathcal{D}}(m_{i+1})$ ならば、 $m_i \in \text{CG}_{\mathcal{D}}(m_{i+1})$ である。

(16) の原理は、決め手の語用論である。布石の手については、(16) に対応する (17) を採用する。

(17) 疑問の語用論

- a. もし談話において疑問が対話者によって受理されれば、その疑問は議論下の疑問の集合に加えられる。すなわち、情報構造 $\text{InfoStr}_{\mathcal{D}}$ を持つ談話 \mathcal{D} において、疑問の手 m_i と後続の手 m_{i+1} について、もし $m_i \in \text{Acc}_{\mathcal{D}}(m_{i+1})$ ならば、 $m_i \in \text{QUD}_{\mathcal{D}}(m_{i+1})$ である。
- b. 談話 \mathcal{D} における議論下の疑問の集合の要素は、それに答えが与えられるか、あるいはそれが答えられないと決定されたとき、そのときに限り、その集合から取り除かれる。すなわち、情報構造 $\text{InfoStr}_{\mathcal{D}}$ を持つ談話 \mathcal{D} において、 $m_i < m_k < m_{k+1}$ および $m_i \in \text{QUD}_{\mathcal{D}}(m_k)$ が成り立つ手 m_i, m_k, m_{k+1} について、

$$m_i \notin \text{QUD}_{\mathcal{D}}(m_{k+1}) \text{ iff } \bigcap (\text{CG}(m_{k+1})) \subseteq \alpha \text{ または } \pi$$

ただし、 α は m_i への完全な答え、 π は m_i が答えられないという命題である。

QUD スタックへの追加は、疑問に答えることへの強い掛り合を伴立する。疑問が対話者によって受理されると、彼らはそれに答えることに掛り合うことになる。その疑問は、答えることができないと決定されない限り、答えを与えられるまでスタックに残る。QUD を含む InfoStr は共通基盤に反映されるため、この掛り合いの事実もまた共通基盤に反映される。最後に、疑問間の伴立関係および答えであることの定義のされ方に基づくと、ある疑問が QUD スタックから取り除かれる場合、その疑問が伴立する疑問もまた、QUD スタックから取り除かれる。(16) と (17) は疑問と主張の主要な語用論的効果でしかないことに注意されたい。その他の効果も存在するのである。(p. 23) 例えば、疑問が尋ねられると、それが受理されるか否かにかかわらず、その疑問が尋ねられたという事実が共通基盤に

入る。これは、尋ねることがすべての対話者に完全に知られる状況下で行われる発話行為であり、そのような（非言語的な）共有情報もまた共通基盤に反映されるという事実による。そして、もし疑問が受理されると、その疑問の解釈と、その疑問がその時点における議論下の疑問の集合に加えられたという事実も共通基盤の一部になる。これは、変化する InfoStr の特徴が継続的に共通基盤に反映されることに従うものである。

ここでは紙幅の都合上、詳細に論じられないが、疑問の語用論には他にも数多くの重要な側面が存在する。それらの側面についての議論は、Groenendijk & Stokhof (1984) と Ginzburg (1995a, b) を参照されたい。また、本稿の枠組みでの詳しい検討は、Roberts (準備中) を参照されたい。筆者が知る限り、他のどの先行研究でも解決されていないが、それらの側面の一つは本稿における疑問の意味論の定式化の仕方の動機の一部であり、情報構造の枠組みで仮定される二つの意味、すなわち前提とされる意味と提示される意味の關係に直接関わる。これは、疑問において前提がどのように投射するか、特に、どのようにして疑問が Karttunen (1973) のいう前提の穴 (hole) となるのか、つまり、どのようにして論理形式 $?(\alpha)$ の疑問が α のすべての前提を持つようになるのか、という問いである。1.1 節で提案した疑問の意味論からすると、 $?(\alpha)$ のすべての q -代替要素、すなわち α の例化が α の前提を持つことは考えられるだろうが、しかし、そのことでなぜ疑問全体がすべての前提を受け継ぐのかは説明できない。

前提に関して、筆者は Stalnaker (1978) や Heim (1992) が記述した現象を想定している。 φ の発話について命題 p が前提となるのは、 φ が任意の文脈 C で適切であるのが C が p を伴立する時だけであるとき、そのときに限る。文脈が p を伴立するためには、文脈集合が p の部分集合でなければならない。

Heim (1982, 1983, 1992) にとって、主張に対する前提上の適切性はその主張の潜在的な文脈変更力から導かれるものである。例えば、否定を伴う主張の文脈変更を計算するためには、まずは発話時点の文脈集合を否定の作用域にある内容で一時的にアップデートし、その後、結果として生じる文脈集合を実際の文脈集合から差し引かなければならない。

(p. 24)

(18) Heim (1992) の否定に関する潜在的な文脈変更力

$C + \text{not}(\varphi)$ は、 $C + \varphi$ が定義される場合にのみ定義され、その場合、

$$C + \text{not}(\varphi) = C \setminus (C + \varphi)$$

しかし、文脈のアップデートを決める関数とその関数に依拠する $C + \varphi$ は、追加される主張 φ の前提すべてが文脈集合により伴立される場合にのみ定義される。そのため、厳密な意味合いにおいて、否定の主張により文脈をアップデートする可能性というのは、否定の作用域にある内容の前提がいずれも満たされることなしには生じ得ない。前提投射に関する事実をアップデートの操作と標準的な否定の意味論から導き出すことによって、Heim は否定の主張の前提投射の性質を説明したとすることができる。疑問の前提の性質についても、この種の説明をしたい。このような説明を von Stechow (1991) の意味論に組み入れる方法として、ただその内容を規定として組み入れてしまう以上のものは筆者には考え付かない。しかし、情報構造の枠組みの動的なバージョンならばそのような説明が提案できる可能性がある。ただ、今後の研究を待たなければならない。

1.1 節とここに概略を示した説明は、意味論と語用論の間の線引きの仕方を変えることによってだが、[von Stechow](#) の説明と同じ最終的結果を導く。構造化された命題は別として、彼の説明の中心的特徴を採用したならば、疑問の意味論は (19) のようになる。

(19) [von Stechow 1991](#) に従った疑問 $?(\alpha)$ の解釈

$$|?(\alpha)| = \{w : w \text{ において, すべての } p \in \text{q-alt}(\alpha) \text{ が尋ねられる} \}$$

[von Stechow](#) にとって、疑問の外延は命題である。その命題は、対応する q -代替要素の集合のすべての命題が尋ねられるような世界の集合である。疑問が対話者により受理されれば、これは q -代替要素集合のすべての命題が尋ねられることを意味する。(19) の下では、(5) の外延は次のようになる。

$$\begin{aligned} |?(\text{メアリーは誰を招待した})| &= \{w : w \text{ において, すべての } p \in \text{q-alt}(\text{メアリーは誰を招待した}) \\ &\quad \text{が尋ねられる} \} \\ &= \{w : w \text{ において, すべての } p \in \{ \text{メアリーは } u \text{ を招待した} : u \in D \} \\ &\quad \text{が尋ねられる} \} \end{aligned}$$

上と同様に $D = \{ \text{メアリー, アリス, グレース} \}$ とすると、この疑問は (20) の世界の集合を外延とする（やはり、「招待する」が外延とする関係は非反射的であり、モデル内の個体の結合は考えないものと想定する）。

(p. 25)

(20) $\{w : w \text{ において, 「メアリーがアリスを招待した」と「メアリーがグレースを招待した」がどちらも尋ねられる} \}$

合理的には、[von Stechow](#) の疑問は、他の命題のように直接的に共通基盤に貢献し、そのため、先行する文脈集合が α の q -代替要素すべてが尋ねられるような世界のみを含むものに縮小されると想定できるだろう。これには疑問の受理を共通基盤に関連付けるという利点がある。しかし、ある世界において命題が「尋ねられる」というのはどういうことなのだろうか？[von Stechow](#) は明言していないが、恐らくこういうことである。命題が尋ねられると、対話者たちはその真理値を評価しようと試みるのである。尋ねるということをこのように考えると、(19) は (17) を伴立する。もし疑問が受理されると、共通基盤は、その疑問の q -代替要素で真のものがあるのなら、それはどれなのかを決めることに対話者が掛り合うという情報でアップデートされる。しかし、これと同様の共通基盤への漸進的な効果は、意味論的ではないものの、(2) の疑問の意味論、(3) の答えの定義、1.2 節で論じた情報構造と共通基盤の関係とを組み合わせることで、(17) の疑問の語用論からも直接導かれることに注意されたい。ひとたび疑問が受理され、(17) により、(2) に基づくその疑問の q -代替要素集合が情報構造の QUD スタックに加えられると、対話者たちは（それが答えられないと決まるまで、あるいはそれが答えられないと決まらない限り）その疑問に答えることに掛り合う。疑問に答えることは、その疑問の q -代替要素集合にあるすべての命題の評価を与えることを伴立する。従って、答えることに掛り合うということは、今定義した意味で、それらの命題一つ一つを尋ねることを含んでいる。談話の情報構造はすべての対話者に知られており、それについての命題的信息は実際には共通基盤にあると筆者が想定していることを思い出されたい ((10f) における CG の定義の節 (iii) を参照)。従って、共通基盤は疑問の q -代替要素が尋ねられることも伴立する。そのため、本稿の説明は [von Stechow](#) の

説明と同じ結果になるものの、談話への疑問の貢献の意味論的側面と語用論的側面を分離している。(19)の意味論によって例証した類いの扱いでは、疑問の持つ提示された内容が直接共通基盤に加えられるものの、疑問の前提投射の性質はそこからは自動的に導かれないことに注意されたい。提示された内容自体は、疑問のq-代替要素の一つに間接的に関連するに過ぎない。その提示された内容が、それらのq-代替要素の前提を自動的に伝えるものではない。なぜなら、彼の意味論には、疑問演算子自体が前提への栓(plug)になるのを阻止し、前提が疑問全体に投射するのを防ぐようなものは何もないからである。

疑問は、少なくとも一部の点で命令文と似ており、そして、疑問の意味論についての本稿の提案は、von Stechowの意味論のように、部分的にはその見方において評価されるべきである。(p. 26) 命令は、受理されれば、対応する主張を真にしようと努めることに聞き手を掛り合わせる。つまり、命令は聞き手を特定の領域内目標に掛り合わせる。疑問は、受理されれば、その疑問の答えを共通基盤に加えようと努めることに聞き手を掛り合わせる。つまり、疑問は聞き手を特定の談話の目標に掛り合わせる。疑問の受理に対話者側の掛り合いが関与するという事は、命令を受理することを拒否できるように、我々は疑問に拒否で応答することができることを示唆する。これは正しいと思われ、(2)/(17) および(19)における扱いの両方と矛盾しない。しかし、(19)にあるように疑問の提示する内容が命題であると言え、これは、主張の場合と同様に、我々がその命題が真であることを否定することができるということも示唆する。けれども、命令に対しては「いや(No)」と答えることができるものの、疑問に対しては「いや、私とその疑問の議論に掛り合っているというのは正しくない」というように、真であることを否定することによってその疑問を拒むことは適切でないように思われる。このことは、(19)や von Stechow 1991 のより意味論的な説明よりも、(2)や(17)といった、これまでに本稿で展開してきた、より語用論的な説明を支持する。間接疑問についての事実を注意深く考察すれば、この問題に関係しているということもあり得るだろうが、それについてはまだ不確かである。さらに、疑問の語用論についての本稿の扱いは、Stalnaker 1978 の巧みな主張の扱い方と対応すると同時に、構造化された命題に伴う複雑化を回避している。これらの考察をどう見るかにかかわらず、疑問の発話は、他の対話者に受理されると、少なくとも間接的に von Stechow が主張する効果を持つと筆者は考える。疑問とは何か、疑問を受理することはどういうことかを知っているため、対話者はそれが議論下の疑問であると分かるのである。

2. 焦点と情報構造

2.1 英語における韻律的焦点の前提

談話において巧みな対話者たちは、いかなる時点においても、共通基盤がどのようになっているかがすべての参加者にとって明白になるように尽力する。それには、彼らが話していること(議論下の疑問)や、彼らが話していることがどのように共通基盤にある残りの情報と関係するか(彼らが従っている探求方略およびその探求方略と談話の情報構造との全般的関係)が含まれる。Mike Calcagno (私信) が指摘してくれたように、競争的なゲームでは、プレイヤーは自身の方略を隠すが、協調的なゲームでは自身の方略を明示する。言語は、たとえ競争するために用いる時であっても、協調的で

ある。(p. 27) 冗長性は、情報共有における協調が効果的であることを保証する助けとなる¹⁵。

望ましい冗長性を実現するために使う道具の一つは前提であるが、後に見るように、前提は談話に一貫性を与える助けも担う。言語表現 φ の発話は、発話の文脈が φ の前提を伴立する場合にのみ適切であることを思い出されたい。これは、発話が前提を持つとき、それは規約的な冗長性であることを意味する。前提は、明示的に共通基盤の一部でないとしても、既に少なくとも文脈によって伴立されているのだ。しかし、この前提に元々備わった冗長性は、しばしば指摘されてきたように、それまで暗示的に想定されてきただけの情報や、それまで全く登場していなかった情報でさえをも実際に導入するために使うこともできる。発話が規約的に表現される前提を持つ場合、その発話が適切であるためには文脈がどのようなものでなければならないかは、たいてい極めて明白である。そして、文脈はそうになっていないものの、聞き手が協調的で、前提とされる情報が真であることに異義がなければ、聞き手はそれを調節する。すなわち、聞き手は、文脈がその情報をずっと含んでいたかのように振舞い、ゆえに、その前提を誘発した発話が適切であったかのように振舞う。ゴシップで叙実的動詞の使用により、中傷的な情報がお咎めなしに伝えられる例を考えられたい。「メアリーが家出したなんてショッキングだよな？」という具合にである。

本稿では、英語のイントネーションによる焦点は前提が関与し、前提を通じて、イントネーションによる焦点を持つ発話が起こる情報構造の種類と、その情報構造における当該発話の役割についての情報を与えるものであると論じる。情報構造は原則として共通の情報であるので、イントネーションによる焦点は冗長になる。そして、対話者はこの冗長性を用いて、自らが意図する情報構造について間接的に情報を伝えるのである。主張は疑問と同じく、規約的に代替要素の集合と関連付けられているが、これらの代替要素は、疑問の q -代替要素のように提示されるものではなく、韻律によって前提とされる、というのが主な考えである。焦点の代替要素は、Rooth (1992a) や von Stechow (1991) などの理論で展開されたような方法で、発話における韻律的焦点の位置に基づいて計算される。疑問／答えの対において答えの韻律がそれが答えとなり得る疑問を制限することは長く指摘されてきた（例えば、Jackendoff 1972 を参照）。本稿の理論では、今引用した他の理論と同様に、この関係性は、疑問／答えの対におけるそれぞれの要素に関連付けられている代替要素、すなわち、疑問の q -代替要素と答えの焦点代替要素の間の関係性に対する条件に反映される。(p. 28) また、疑問によって提示される代替要素の集合が部分的にその韻律に依るということは、他の事象との関連（例えば、yes/no 疑問と代替疑問を対比して論じた von Stechow 1991 を参照）において指摘されることがあった。このことは、本稿の理論では、韻律が、主張だけでなく疑問の焦点代替要素の集合を決める役割も果たすという想定に反映されている。疑問では、これらの代替要素は、探求方略においてその疑問が関連するであろう上位疑問の種類を制限する。従って、本稿の理論は韻律的焦点の代替意味論的説明である。しかし、only や even といった英語の小辞や、焦点に関する多数の言語学的研究で議論されてきた他の演算子や小辞について、直接的な焦点感性を想定しない点で、本稿の理論は同路線の他の近年の説明（Rooth 1985, von Stechow 1991, Krifka 1992）とは異なる。本稿の理論はこの点で、異なる仕組みを展開してはいるものの、ある種の焦点の効果を語用論的に導こうとする Rooth (1992a), Schwarzschild (1994a, b), von Fintel (2004) の近年の研究と同様である。

¹⁵ 談話における情報の冗長性の価値と役割に関する画期的な議論としては、Walker 1993 を参照。

ここでは、英語の韻律的焦点の役割を議論するだけにはっきり留め、ゆえに**焦点**という普遍的な言語現象に関する主張はしない。Rooth (1996) と同様に、筆者もむしろ個別の言語における具体的な規約的要素の仔細な分析をする必要があると主張したい。しかし、筆者は情報構造が人間の談話に普遍的なものであると想定してはいる。そして、研究者たちが抱く、情報構造の普遍的特徴といったもの(主題, 焦点, テーマ/レーマ等)が存在するという根強い直感、そして、焦点と疑問/答えのパラダイムとの根強い関係には説明が必要である。もし談話構造が筆者が提案するような機能構造を持つならば、そのような直感の説明をかなり進めることができる。その際、様々な言語において統語的構文や他の規約的要素が多少異なる方法でそれらの機能を果たすのに貢献する可能性を排除することはしない。

まず、英語の韻律的焦点とは何を意味するのか、簡潔に概略を述べたい。その後、前提がどのように生じるか、そして、その内容が何であるかに関するより詳細な提案をする。焦点の韻律音韻論について、以下のような、やや単純化された想定をする¹⁶。

(p. 29)

(22) 焦点の音韻論*

- a. 文(あるいは文の断片)である発話一つにつき、少なくとも一つのイントネーション句がある。
- b. イントネーション句一つにつき、少なくとも一つの焦点化された下位構成素(真に部分的でなくてもよい)がある。この**焦点構成素**(focused constituent)を、以下ではFという素性で標示する。
- c. 焦点構成素一つにつき、少なくとも一つのピッチアクセントがあり、それは下位構成素と結びつく。
- d. いずれのピッチアクセントも焦点構成素内の要素と結びついていなければならない。
- e. イントネーション句一つにつき、一つの句アクセント(H-あるいはL-)と一つの境界音調(H%あるいはL%)がある¹⁷。
- f. 焦点構成素における連なり末尾のピッチアクセントは、イントネーション句中で最も卓立した強勢が付与される(**核強勢規則**(Nuclear Stress Rule))。

以下のすべての韻律的要素は、恐らく語用論的に(それゆえに潜在的に意味論の上でも)重要である。

¹⁶ Selkirk (1984) は、これらの点について非常に詳細に探求し、多くの有益な例について議論している。筆者の韻律に関する想定は、断りがない限り、彼女の研究から採用したものである。Selkirk の研究は一方、ピッチアクセントを含む音調の音韻論に関する Pierrehumbert (1980) の研究に大きく依拠している。Lieberman & Pierrehumbert (1984) も参照されたい。

* 訳注: 原文において(21)が欠けている。この番号が(22)になるのは、そのためである。

¹⁷ Lieberman & Pierrehumbert 1984 では、境界音調はそれが結びついたイントネーション句の最後で実現され、句アクセントはイントネーション句中の最後のピッチアクセントと境界音調の間の推移をもたらす。中間イントネーション句を考える多少異なった説明については Beckman & Ayers 1997 も参照されたい。

(23) 語用論的に重要な韻律的要因

- a. イントネーション句の構成素の選択（当該構成素は常に統語的構成素と相関すると暫定的に想定する）
- b. イントネーション句内における
 - i. 焦点構成素の選択
 - ii. ピッチアクセントの位置
 - iii. ピッチアクセント、句アクセント、境界音調の選択
- c. 異なるイントネーション句の発話内および発話間における相対的な卓立

本節では焦点構成素の選択の重要性をもつばら論じるが、他の要因も、通常**焦点**という用語の下でまとめられる現象の完全な理解にとって当然重要であり、(p. 30) 2.2.2.2 節では、ある種の例においてイントネーション句の構成素の選択 (23a) とその発話内での相対的な卓立 (23c) が持つ決定的役割を指摘する¹⁸。

上述の想定は、すべての英語の発話において、少なくとも一つの構成素には韻律的焦点（音調的、リズム的卓立）があるという事実を反映している。ただし、その焦点は広いことも狭いこともある (Ladd 1980 と以下の例を参照)。このことと意味の構成性という方法論的原理に従って、筆者が提案する理論では、あらゆる種類の発話にわたり、英語の韻律的焦点の意味を統一的に説明することを目指す。それに対し、たいていの理論はたった一つか二つの使用文脈のみを扱っており、統一的説明は不可能であると主張している研究者すらいる。焦点構成素内におけるピッチアクセントと強勢の位置に関する想定により、F 素性が発話の表層形式で常にリズム的、音調的卓立によって実現されることになることにも注意されたい。焦点の韻律的実現は、焦点の意味論の研究者があまねく想定しているわけではない。焦点がそのように実現されない例については、Partee 1976 と Krifka 1992 を参照されたい。本稿の英語の分析には、抽象的な焦点はない。当面のところ、他のアプローチに対する批判は、本稿のアプローチを展開していく過程で暗に示されるに留まらざるを得ない。

すべてのピッチアクセントが焦点構成素内になければならないという想定 (22d) に特に注目されたい (Selkirk (1984: 282) のピッチアクセントの焦点支配 (Focus Domination of Pitch Accent) を参照)。これにより、もし発話がある構成素 x に単一の狭い（しばしば「対比的」と呼ばれる）焦点を

¹⁸ 一つの発話に複数のイントネーション句が生じることは重要な点であるが、この問題には触れられない。句アクセントと境界音調の様々な組み合わせの重要性について簡潔に述べるだけに留めておく。ただし、これらの事柄は精査に値するものだという事は確実だろう。そして、焦点構成素内でのピッチアクセントの位置について (Selkirk 1984 を参照) やピッチアクセントの選択について (Pierrehumbert & Hirschberg 1990 を参照) は、数多くの興味深い問いがあるが、これらも無視しなければならない。より詳細な取り組みが必要なもう一つの問題は、文法のどこで (例えば、どのレベルの表示で) これらの規約的要素が符号化されるべきなのかという問いである。Selkirk は、ピッチアクセントの位置と F 標示の間関係が統語的に制約されているようであることと、この情報が PF (音声形式 [phonological form]) と LF (論理形式 [logical form]) の両方で利用可能であることを捉えるために、統率束縛理論式の文法における SS (表層構造 [surface structure]) においてそれらを符号化している。制約に基づく文法の枠組みにおけるこれらの問題の綿密な探求は、筆者は見たことがない。

持つならば, その発話の残りの部分は一切イントネーション的卓立を持たず, その高低曲線は母語話者の耳には平坦に聞こえるということになる. Selkirk はピッチアクセントの位置について「旧」情報と「新」情報の観点から語っている. 発話の強勢を伴わない要素 (あるいは少なくとも, 通常ならば強勢を持つであろう NP や他の項) は「旧情報」とみなされ, (p. 31) 強勢を伴う構成素は「新情報」とみなされるが, Selkirk はこれらの用語をどのような意味で用いているのかについて正確に述べていない. 本稿の説明では, それらの用語についてより正確な意味を提示することができる. すなわち, 旧情報/新情報は議論下の疑問の一部であると考えられる¹⁹. 筆者は, 「旧」という表現は, 「議論下の疑問によって与えられている」と同義であり, (ここで関連する意味での) 「新」は, 「議論下の疑問によって与えられていない」を意味すると考える.

ある発話に対し, その焦点代替要素は次のように定義される²⁰.

(24) 構成素 β に対応する焦点代替要素 (focus alternative set)

$\|\beta\|$ は, β におけるすべての F 標示された (焦点化された) 構成素を変項と置換し, その結果を, それらの変項に割り当てる値のみが異なるような割り当て関数すべてから成る集合の各要素に対して解釈することで得られるすべての解釈の集合である²¹.

(24) により, 疑問とその答えである主張の両方が, 対応する代替要素集合, すなわち, 疑問の q-代替要素と答えの焦点代替要素を持つ. この観察が von Stechow (1991: 36) の疑問/答えの合致という概念の基盤であり, (25) はそれを修正・一般化したものである.

(25) 手 β が疑問 $?(\alpha)$ と合致する (congruent) のは, その焦点代替要素 $\|\beta\|$ が $?(\alpha)$ により決定された q-代替要素であるとき, すなわち, $\|\beta\| = \text{q-alt}(\alpha)$ であるとき, そのときに限る.

(24) と (25) により, (5b) の主張は (5a) の疑問と合致する答えとなる*.

¹⁹ Selkirk は, 強勢を伴わない NP は焦点構成素内において句末でも生起することがあるが, それでもやはり, ここで意図する意味での旧情報のようであると指摘している. これは, いくつかの点で焦点の音韻的表示を再考する必要があることを示唆するように思われるが, 本稿でそれを掘り下げて考えることはできない.

²⁰ Rooth (1985) と von Stechow (1991) は代替要素をこのようには定義していない. その代わりに, Krifka 1992 と同様に, 代替要素集合を決める構成素が焦点に敏感な演算子の項であるとき, その代替要素集合は相殺される. これは筆者が本稿で提示する定義では起こらず, 本稿の説明と Rooth, von Stechow あるいは Krifka の説明を比較する際には, その違いに留意されたい. 単純な事例については, (24) は, 焦点構成素が LF (論理形式) において繰り上げを受け, そのような繰り上げは島に敏感でないという想定 (Rooth 1992b を参照) と同じ結果をもたらす. だが, 焦点との結びつきは境界がある, つまり, 島に敏感であるという議論を Rochemont & Culicover 1990 がしているのだから, 参照されたい. 焦点代替要素集合を定義する上で, この点が提起する問題にどのように対処すべきかは, 筆者にはまだ分からないが, Rooth や von Stechow がこのようなデータを考慮に入れていたというようなことはないようである.

²¹ 置換する変項が Heim (1982) の言う意味で新たなものであるとし, 割り当て関数の集合が β の発話時点におけるファイル/文脈の充足集合にあるもののみを含むように制限した方がよいかもしれない. そうすれば, β におけるいずれの定の (あるいは, なじみがある) NP も適切に束縛されることが保証されるだろう. しかし, 本稿ではこの改良を行わないことにする.

* 訳注: 本節では英語という個別言語が議論の対象であるため, 例文は英文を示し, 必要に応じて括弧内にその日本語訳を付す.

(5) a. Who did Mary invite? (メアリーは誰を招待した?)

b. Mary invited nobody_F. (メアリーは誰も_F招待しなかった.)

(5b) の (この文脈で経験的に正しい焦点に応じた) 焦点代替要素の集合は, (5a) の q-代替要素集合と同じである. 合致するためには, 答えが代替要素に対応する集合に含まれる必要はなく (そして, この点において前節で示した「答えであること」の関係のようである), 答えと疑問が同じ代替要素の集合を生じさせるだけでよい. さらに, この疑問と答えの理論では, (5a) のような疑問に存在前提を与えないことに注意されたい. その q-代替要素集合に含まれる命題はすべて, 招待された誰かの存在を伴立するが, これらの命題はただ尋ねられただけであり, 主張されてはいない. 上で定義した疑問/答えの関係では, 答えが q-代替要素のうちの一つである必要はない. (5b) が伴立するように, q-代替要素はすべて偽であるかもしれず, その場合, 存在の含みはない.

von Stechow 1991 と Rooth 1992a における疑問/答えの対に対する要件から一般化された, 以下の主張の韻律的焦点の前提を考えたい.

(26) 主張 β における韻律的焦点の前提

β は, その発話の時点における議論下の疑問に合致する答えである.

(26) により, 主張にある韻律的焦点は, 談話の現行の目標が $\|\beta\|$ に含まれる代替要素の中からの選択であることを前提とする. (合致の前提により生じる経験的な予測の議論と例については, Kadmon 2001: 341–343 を参照.)

これは, (5a) や (5b) のような疑問/答えの対ではうまく機能する. しかし, 疑問も韻律的焦点を持つわけで, (26) よりもさらに一般的な, いかなる法の発話における韻律的焦点の意味にも対応する原理が必要である. 疑問は論理的に互いに関連し合うことがあること, そして効果的な探求方略においては一般にそうになっていることを思い出されたい. このことを経験的な根拠に基づいて動機付けるために, 多重 wh 疑問 (27a) と単一 wh 疑問 (27b) を考えたい.

(27) a. Who invited whom? (誰が誰を招待した?)

b. Who did [Mary]_F invite? ([メアリー]_F 誰を招待した?)

(27b) は (27a) のほぼすぐ後に尋ねることが可能であり, $\langle(27a), \{(27b), \emptyset\}\rangle$ は適切な探求方略のようである. この適切性には, (27b) の韻律が重要であるようだ. 例えば, 同じ連なりでも, invite (招待する) に焦点があったとしたら, それは不適切になるだろう. このことを捉えるために, (p. 33) 疑問における韻律的焦点の前提について何かしら述べておく必要がある.

下の (28) のように, 検討中の二種類の発話行為の韻律的焦点の前提に関して一般化することが望ましいだろう. 発話はそれぞれ法演算子を含む論理形式を持つと想定しよう. $*\beta$ は, 疑問演算子と主張演算子 $\{?, \cdot\}$ に対する法の変項 $*$ を伴う β の発話である.

(28) 発話 $*\beta$ における韻律的焦点の前提

β は発話時における議論下の疑問と合致する.

(28) は (26) の下位一般化を伴立する. しかし, (25) の合致の定義と, とりわけ, (24) の焦点代替要素集合の定義によると, (28) は $\langle(27a), (27b)\rangle$ の適切性を説明することができない. (27b) では wh 語

である who (誰) が韻律的に焦点化されていないためである (who (誰) がはっきりと焦点化されている WHO did Mary invite? (誰がメアリーを招待した?) という問い返し疑問と比較されたい). しかし, (24) を修正し, 集合が β において F 標示された構成素だけでなく, いかなる wh 要素にも及ぶようにすれば, 一般化は成り立つ. そうすると, (29) が得られる²¹.

(29) 構成素 β に対応する焦点代替要素 (focus alternative set) (改訂版)

$\|\beta\|$ は, β におけるすべての F 標示された (焦点化された) 構成素と wh 構成素を変項と置換し, その結果を, それらの変項に割り当てる値のみが異なるような割り当て関数すべてから成る集合の各要素に対して解釈することで得られるすべての解釈の集合である.

ここで, (25), (28), (29) での分析を (27) の発話の連続の分析に適用する. 1.2 節の疑問の意味論により, 当該の解釈は (27a') および (27b') となる.

(27) a'. $|?(Who\ invited\ whom)| = \{u\ invited\ u' : u, u' \in D\}$

そのため, もし $D = \{Mary, Alice, Grace\}$ だとすれば, 当該の疑問は次の q-代替要素集合を持つ (やはり結合的な項の可能性は考えない).

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{Mary invited Alice, Mary invited Grace, Alice invited Grace,} \\ \text{Alice invited Mary, Grace invited Mary, Grace invited Alice} \end{array} \right\}$$

(p. 34) 同じモデルにおいて, (6) に示したこの例の派生により, 以下が成り立つ.

(27) b'. $|?(who\ did\ [Mary]_F\ invite)| = \left\{ \begin{array}{l} \text{Mary invited Alice,} \\ \text{Mary invited Grace} \end{array} \right\}$

明らかに, Who did Mary_F invite? (メアリーは_F誰を招待した?) の q-代替要素集合は, Who invited whom? (誰が誰を招待した?) の q-代替要素集合の部分集合である. 従って, (27a) に対する完全な答えは (27b) のすべての代替要素に関しても評価を与えるため, (27a) は (27b) を伴立する. (27b) は (27a) の下位疑問であり, (27) は適切な探求方略となる.

(27b) の焦点前提を (29) のように計算すると, $\|(27b)\| = \{u\ invited\ u' : u, u' \in D\}$ となる. だが, これは単に (27a) の q-代替要素である命題の集合である. つまり, $\|(27b)\| = \text{q-alt}(27a) = \{u\ invited\ u' : u, u' \in D\}$ である. そのため, (28) は満たされる.

(27a) が広い焦点を持つ場合, それが合致する疑問は自明なもの, すなわち単に大疑問になることに注意されたい. しかし, 合致する疑問が大疑問であるとするのは, この例では誤解を与えるものであると思われる. たいていの場合, invite (招待する) は動作主と被動者だけでなく, 着点, すなわち被動者が招待されるイベントも取る. (27a) では着点を与えられていないため, 省略が起きていると考えられ, この省略により, この疑問と何らかのイベントに関するそれ以前から続く議論との間の関係が示唆される. この点について, ここではこれ以上は述べないが, 省略は, 焦点構成素内での強勢除去/アクセント除去と同様に, 疑問あるいは主張の発話が合致することが前提とされる疑問の決定に影響を与えるかもしれないという点についてだけは述べておきたい. 省略と「前方照応的強勢除去」の関係についての議論は, [Rooth 1992b](#) を参照されたい.

²¹ (29) は, 間接疑問を含む発話について正しい結果が得られるものではないだろう.

(28) の原理は、以下に再掲した $\langle(5a), (5b)\rangle$ および $\langle(27a), (27b)\rangle$ における談話の適切性を説明するだけでなく、 $\langle(5a), (5c)\rangle$, $\langle(5a), (5d)\rangle$ そして $\langle(27a), (27c)\rangle$, $\langle(27a), (27d)\rangle$ のような連続の不適切性も説明する。これは、後半の四つの事例のいずれでも、二番目の要素の焦点代替集合が、議論下の疑問である一番目の q-代替要素集合と等しくなることがないからである。

- (5) a. Who did Mary invite? (メアリーは誰を招待した?)
 b. Mary invited [nobody]_F. (メアリーは [誰も]_F 招待しなかった.)
 c. Mary [invited]_F nobody. (メアリーは誰も [招待]_F しなかった.)
 d. [Mary]_F invited nobody. ([メアリー]_F 誰も招待しなかった.)
- (27) a. Who invited whom? (誰が誰を招待した?)
 b. Who did [Mary]_F invite? ([メアリー]_F 誰を招待した?)
 c. Who did Mary [invite]_F? (メアリーは誰を [招待]_F した?)
 d. [Who]_F did Mary invite? (メアリーは [誰を]_F 招待した?)

(p. 35) 韻律的焦点の働き方についてこのように捉えると、Kadmon & Roberts 1986 に従えば、韻律的焦点は前提の誘発子にはなるが、発話が適合／合致せねばならない代替要素の集合の性質を一意に決定するものではないことに注意されたい。演算子作用域の潜在的曖昧性のため、多くの例において、議論下の疑問が実際に何であるか、そしてそのため、間接的に、発話自体の真理条件が何でなければならないかを決定するためには、先行する談話の構造に関する極めて豊かな情報が必要である。Kadmon & Roberts 1986 からの例を考えたい。選択肢となる作用域を可能な議論下の疑問により、例の下に示した。 δ はタイプ $\langle\langle e, t \rangle, \langle\langle e, t \rangle, t \rangle\rangle$ の変項で、 Δ は限定詞の外延の集合である²²。

- (30) He doesn't like [most]_F of the songs. (彼はそれらの曲の [ほとんど]_F が好きではない.)
- a. $\text{most}(\neg) : \text{q-alt}(30) = \{ | \delta \text{ songs}(\lambda x. \neg \text{likes}(\text{he}, x)) | : | \delta | \in \Delta \}$
 b. $\neg(\text{most}) : \text{q-alt}(30) = \{ | \neg \delta \text{ songs}(\lambda x. \text{likes}(\text{he}, x)) | : | \delta | \in \Delta \}$

これらの代替要素の集合は、異なる疑問に対応する。(30a) に関しては、疑問は、大まかに言って、What is the proportion of songs that he doesn't like? (彼が好きではない曲の割合はどのくらいか?) である。(30b) に関しては、疑問は、What is the proportion of songs that I deny that he likes? (彼が好きであることを私が否認する曲の割合はどのくらいか?) である。上の発話における焦点では、発話は原理的にはいずれの疑問にも合致し、そのため、発話がその前提に関して曖昧になる。一般に、曖昧性は発話の実際の文脈により解消される。もし解消されない場合、すなわち、適切な文脈のない状態で聞き手がそのような発話に直面した場合、Kadmon & Roberts (1986) が論じたように、喚起可能な最も単純な文脈は、デフォルトの想定ということになる。ここでは、それは most (ほとんど) が広

²² Kadmon & Roberts (1986) は、この例の完全な韻律曲線の分析をしているが、そこにはピッチアクセント、ピッチアクセントの位置、句・境界音調が含まれる。ここに示した読みのどちらについてもそのような分析を行っている。また、彼女らはこれらの読みのそれぞれが生じる文脈の種類についても仔細に説明している。詳細については、彼女らの論文を参照されたい。

い作用域を持つ, 非否認文脈だろう. 可能性として存在するもう一つの読みを出すには, 主張とその否認, そして修正という, より複雑な文脈が関与するため, 何の前触れもなく発話を聞いたときにこの読みを得ることは起こりにくい.

要約すると, 発話にある韻律的焦点は, その発話が主張であれ疑問であれ, その発話が議論下の疑問と合致するという前提を生じさせる. そのような仕組みは, 明らかに, 談話に一貫性を与え, 関連性を保証する助けとなる. そして, それは少なくとも一定程度は冗長である. 例えば, 疑問/主張という連続において, もし話し手が正しく言語ゲームを行っていれば, つまり, とりわけ**関連性**を遵守し, (p. 36) 議論下の疑問によって表される目標に取り組む責務に従っているならば, 主張は先行する疑問への答えになるはずである. 主張の韻律もこの役割を担うことを前提とするのなら, これは主張の役割を冗長に追認していることになり, ゆえに, 間接的に, 模索中の疑問を冗長に追認していることになる. しかし, もちろん, ゲームのルールが設定されれば, 我々は往々にして, より効果的にプレーするための方略を生み出すものである. 主張の場合, もし韻律がその主張が対処する疑問の種類を前提とするなら, 実際に疑問を明示的に尋ねる必要はないかもしれない. 特に, 疑問が進行中の探求方略と関連性を持つことが明らかな場合にはそうである. 従って, 聞き手は, 話し手の想定している情報構造の一部分を調節するために英語の韻律構造の前提を使うことができる.

ここから, この提案に照らして, 焦点についての先行研究から, いくつかのタイプの例を簡潔に検討していく.

2.2 英語の焦点現象

2.2.1 節では, 英語で最も議論されてきた焦点が関わる現象の一つ, すなわち焦点との結びつきへの 2.1 節の理論の適用について説明する. その後, 2.2.2 節では, 対比的主題, 対比的な焦点化された対および代替要素として解釈される **yes/no** 疑問における焦点の用法を扱うための拡張について, 簡潔に考察する. そのような焦点はしばしば**対比的** (contrastive) と呼ばれる.

2.2.1 会話の含意としての焦点との結びつき²³

過去十年間の焦点に関する形式主義的な先行研究における最も興味深い研究に **Jackendoff (1972)** が**焦点との結びつき** (association with focus) と呼ぶものを扱った研究がある. これは, 否定, **only**, **even**, モーダル, 量化副詞をはじめとする, ある種の演算子の解釈が, その演算子が生起する発話の韻律的焦点構造に部分的に依存するという傾向のことである. **Rooth (1985)** は, この焦点への感性は, 彼が検討した演算子の語彙的意味の一部であり, 当該演算子の領域制限の決定に関係があると主張した. **Rooth** の基本的主張によれば, 領域は焦点により決定される代替要素集合 (の部分集合) であり, この集合は論理形式において演算子の作用域である構成素に対応する. そして, このことは **only** のような演算子の語彙的意味の一部として指定されている. より最近では, (とりわけ) **von Stechow 1991** と (p. 37) **Krifka 1992** が, 構造化された命題の枠組みの中で同様のアプローチを採用している. 彼らの研究では, 構造化された意味は関連する発話の焦点構造を反映する. それは順序対であり, 発話の意味を焦点と背景に分割する. 焦点に敏感な演算子のうちの一つの持つ語彙的意味は,

²³ 以前の草稿への思慮深い助言をしてくれた **Nirit Kadmon** と **Paul Portner** に感謝したい. おかげで, この節は相当に改善された (と筆者は思いたい). ただ, 二人がここで提案する見方に必ず同意するものだとはいえないで欲しい.

その作用域にある構成素の構造化された意味の両方の側面を参照する。これらのアプローチはいずれも焦点に敏感な演算子が関与するが、結果として生じる意味理論の設計において焦点に重責を担わせている。焦点との結びつきは、それ自体が、言語の意味論をかなり複雑化することを許す動機となると考えられている（関連する議論については [Rooth 1996](#) を参照）。さらに、焦点がこれらの演算子の作用域を完全には決定しないことは明らかである。他の文脈的要因および演算子の作用域内の構成素の前提もその決定において重要な役割を担う（[Roberts 1995](#) を参照）。このような作用域決定の様々な方法の間の関係について何か述べておいた方がよいのだが、焦点に対する敏感性のアプローチは、基本的に意味論的であるため、意味論的な焦点に対する敏感性と明らかに語用論的な要因の両方を含んだ一般化をすることができない。単に焦点に対する敏感性を、関連する演算子の語彙的意味の一部にするだけでは、なぜこの現象が領域制限においてそんなにも幅をきかせているのかという問題を捉え損なう。しかし、焦点がこれらの演算子を含む発話の解釈において、規則的で重要な役割を担っていることは自明であるようにも思える。我々は、この役割について説明する必要がある。それは、[Vallduví \(1993\)](#) や [Vallduví & Zacharski \(1994\)](#) が体系的に行えていないことである。

[Rooth \(1992a\)](#), [von Fintel \(1994, 2004\)](#), [Schwarzschild \(1994a, b\)](#) は近年、様々な焦点との結びつきの現象について、より語用論的な説明を試みている。[Rooth](#) と [von Fintel](#) の研究は前方照応的な説明であり、[Schwarzschild](#) の研究は焦点を対比としての解釈する原理からの伴立を用いる説明である。ここで提示する情報構造の枠組みでは、焦点との結びつきに関して別の種類の語用論的効果を提唱する。それは、本稿の以前の節で定義した独立に動機付けられた原理から、追加的な規定をする必要なく、そのまま結果として生じるものである。この説明では、焦点との結びつきは本質的には、韻律的焦点が演算子の領域制限に影響する際の影響の仕方に関する事実であると想定する。その点で、[Rooth 1985](#) における初期の説明と同様である。しかし、筆者は関連する演算子に特別な語彙的意味を一切想定しない。そして、[von Fintel](#) や [Krifka](#) とは異なり、発話の焦点構造は、その意味に関して独立した分割を指定する必要なしに、韻律構造によって透明な形で与えられると論じたい。本節では、**only** の領域を制限する際に韻律的焦点が果たす役割が、(p. 38) 1 節の情報構造の枠組みと前節での韻律的焦点に関する想定により、どのように説明されるかについて概略を述べる。量化副詞における領域制限の関連した見方については、[Calcagno 1996](#) を参照されたい。

x **only** VPs (x は VP するだけだ) という、**only** が VP 修飾語である構文の発話について、理論家たちはしばしば x VPs (x は VP する) を前提とするものであるとみなすが、 x **only** VPs は x VPs を伴立するだけであると想定されることもある。筆者は前提の見方を想定するが、このことによりこれから提示する説明に違いが出るわけではない。もし x VPs が前提とされるならば、議論下の疑問を前提とする際に、その議論下の疑問を導入するために韻律的焦点を用いることができるのと同様に、 x VPs という前提を導入するために **only** を用いられることができる。それは、たとえ x VPs という前提が対話者にまだ知られていない場合にでもである。これら二つの事例は、いずれも前提が極めて明示的であるという点で同様であり、文脈を修復するために何が調節されなければならないかが明らかである。反対する根拠がない限り、協調的な対話者はこれらの前提を必要なものとして調節するだろう。

VP 付加詞 **only** の意味は (31) のようであるとしよう。

(31) VP 付加詞 *only* の解釈

前提となる内容: 主語は VP が外延とする特性を持つ。

提示される内容: 主語は VP が外延とする特性以外の特性を持たない。

これにより, 焦点との結びつきの分析には, Rooth に従えば, *only* の提示される内容における演算子 no^* の意図された量化の領域がどの部類の特性であるのかに関する決定が含まれる。Roberts 1995 では, これは韻律的焦点に基づいたアルゴリズムだけに基づいては決められず, 談話のその時点での文脈において関連する特性の集合でなければならないと主張した。それが何を意味するのかについては, より正確に述べることができる。その答えは, (15) で定義した関連性の要件と (28) にある韻律的焦点の前提から導かれることを, これから見ていく。ここにそれらを ((25) とともに) 再掲する。

(15) 手 m が議論下の疑問 q , すなわち $last(QUD(m))$ と関連する (Relevant) のは, m が q への部分的答えを導入するか (m は主張), q に答えるための方略の一部である (m は疑問) とき, そのときに限る。

(25) 手 β が疑問 $?(α)$ と合致する (congruent) のは, その焦点代替要素 $\|\beta\|$ が $?(α)$ により決定された q -代替要素である場合, すなわち, $\|\beta\| = q-alt(α)$ であるとき, そのときに限る。

(p. 39)

(28) 発話 $*\beta$ における韻律的焦点の前提

β は発話時における議論下の疑問と合致する。

この領域制限がどのように働くかを見るために, (32) の例を考えたい。

(32) Mary *only* invited [Lyn]_F for dinner. (メアリーは夕食に [リン]_F を招待しただけだ。)

(28) より, (32) は (33) の疑問を前提とする。

(33) メアリーが夕食にその個体を招待したという特性以外の特性を持たないのはどの個体か?

(32) を発話することによって話し手が何を意図しているのかを理解するためには, *only* の意図された領域を決定しなければならない。発話とそれが前提とする疑問が, 先行する文脈に関連する, すなわち, それらが議論下の疑問を扱うものでなければならないという, 独立した要件があることを我々は既に知っている。もし (32) が何の前触れもなく発話されれば, それは前提の疑問 (33) が大疑問に答えるための方略の一部を成すということにならざるを得ないだろう。そのような場合には, メアリーの特性のすべてが関連することになるだろう。なぜなら, メアリーがそれらの特性を持つか否かに関する情報は何であれ, 大疑問を扱うものであろうからだ。しかし, メアリーが存在するという想定の下では, メアリーはリンを夕食に招待したという特性に加え, 当然, 最低でも自己同一性という特性 (そして恐らく多くの他の特性) を持つ。そのため, (32) は, 何の前触れもなく発話されれば,

* 訳注: この演算子 no は, (31) の「提示される内容」にある「～以外の特性を持たない」という規定による。主語が「～以外の特性を持たない」ということは, 「～以外の特性を持つ」主語が存在しないということである。

どのような合理的なモデルであっても偽になるだろう。従って、(32) の話し手が十分な能力を持ち、グライスの質の格率を守っている、つまり、真である事柄を主張しようとしているという想定の下では、(32) の意図された発話の文脈として、何の前触れもないということとはあり得ない。筆者が他で論じたように (Roberts 1995, 1996a), 領域制限は常に協調性による制約を受ける。協調的な聞き手は、話し手もまた協調的である (そして十分な能力がある) と想定し、これに基づいて、貢献が最終的には協調的になるように領域を制限することで、グライスの質の格率や**関連性**の格率が満たされない、前提の失敗が起こるなどといった、協調性の見かけ上の欠如を解消しようとする。

ここで、(32) が何の前触れもなしにではなく、(34) に続いて発話されたと想像してみよう。

(34) Who did Mary invite for dinner? (メアリーは誰を夕食に招待した?)

(32) Mary only invited [Lyn]_F for dinner. (メアリーは夕食に [リン]_F を招待しただけだ。)

もちろん、既に見たように、(32) は韻律的に議論下の疑問が (33) であることを前提とし、それは明示的な疑問 (34) と同じ疑問ではない。(p. 40) 前提とされる (33) を適切に調節できるのは、新たに調節される疑問自体が受理された疑問 (34) と**関連**し、そのため二つの疑問が適切な探求方略を形成し、ゆえに結果として生じる情報構造が適格である場合のみである。この要件は、**only** の意図した領域が、Rooth (1985)/von Stechow (1991)/Krifka (1992) の理論において (32) の **only** の領域として規約的に決定される特性の集合 (の非真部分集合の可能性もある) であると想定した場合にのみ、すんなりと満たされる。これは、疑問の意味論により、この領域制限の場合にのみ、(33) への答えすべてが (34) への答えにもなり、(33) が (34) と**関連**することになるためである。その理由はこうである。

(34) に対処する唯一の方法は、 $|m \text{ invited } \alpha|$ という形の命題の真偽を決めることである。ただし、 α はモデルにおける個体を外延とする固定指示詞であるか、あるいは **nobody** である²⁵。しかし、その場合、**関連**する特性の集合は単に、メアリーについて叙述された時に $|m \text{ invited } \alpha|$ という形の命題の一つを与える集合、すなわち $|\text{invited } \alpha|$ (α はモデルにおける個体を外延とする固定指示詞あるいは **nobody**) という形の特性の集合ということになる。この特性の集合は、そうすると、それが (34) と**関連**する、つまり、(34) に対処するための探求方略の一部を成さんとする場合、(33) において **only** の領域を制限していなければならない集合である。しかし、これは他の説明なら、例えば Rooth 1985 での説明なら、(32) における VP の **p**-集合の計算によって引き出される代替特性の集合に過ぎない。そのような説明では、当該の **p**-集合は **only** の語彙的意味によって参照される。しかし、本稿の説明では、**only** の語彙的意味に基づく計算は必要ない。

(32) における **only** の領域 (関係のある特性の集合) が、誰かしらを夕食に招待するという特性の集合だとすると、(33) は論理的に (35) と同等になる。

(35) 誰かしらを夕食に招待するという特性すべてのうち、メアリーが夕食にその個体 x を招待するという特性以外の特性を持たないのはどの個体 x か? つまり、メアリーがその個体以外は誰も夕食に招待しなかったのはどの個体か?

²⁵ やはり、メアリーが二人以上の個体を招待した可能性は考えないことにする。そのような可能性を考慮に入れた場合、 $|\text{Mary invited few of the students}$ (メアリーは学生のごく一部しか招待しなかった) | のような命題が部分的答えとして**関連**することになる。これは単に簡潔さのためであり、筆者が行う議論に不可欠なものではない。

(34) と (35) は, 意味が非常に近い. ただ, 全く同じではない. それらの q-代替要素集合は異なる. 違いは, (35) への直接的な答えがすべて完全であり, それぞれが (34) への完全な答えでもあるという事実にも反映されている. もし (35) に「アリスとガートルード」と答えれば, これはグレースを含め, 他の人は誰も招待されなかったことを伴立する. しかし, (34) は, 完全ではない, 部分的に直接的な答えを持つため, (p. 41) メアリーがグレースも招待したことを排除することなしに, 「アリスとガートルード」と答えることができる. しかしながら, これらの二つの発話は同じ疑問を外延とすることはなく, いかなるモデルにおいても, (34) への完全な答えは (35) への完全な答えであり, さらにその逆も成り立ち, 二つの発話は Groenendijk & Stokhof (1984) が定義した意味において論理的に互いに伴立し合う²⁶. (34) と (35) は, 完全な答えの集合が同じであるため, ある発話時点における文脈集合に対して同じ分割を設ける. そのため, (35) のように領域が固定されると, 前提とされる疑問 (33) は, (15) で定義された厳密な意味で, (34) と関連する. しかし, その場合, (33)/(35) と関連するには, そしてゆえに間接的に (34) と関連するには, (32) における only の領域は, 同じように定められなければならない.

Paul Portner (私信) が指摘してくれたように, これは領域が Rooth の特性の真の部分集合でないことを保証するものではない. しかし, Rooth ももちろん, 文脈により only の領域がさらに制限される可能性を認めており, それは彼の提案する p-集合の規約的計算法と焦点に敏感な only の語彙的意味により与えられる. これは, <((34),(32))> のような談話により動機付けられる. メアリーが夕食に仕事仲間の来客を招待しており, 彼女の学科の誰か他の人にも一緒に来てもらいたいと思っているということを対話者たちが既に知っているというシナリオを考えてみよう. その場合, 特性の代替要素集合には, 彼女の学科の残りすべての人が関与するはずである. リンはそこに含まれるが, 仕事仲間の来客は含まれない. そうすると, その文脈で (32) を発話しても, メアリーがその世界においてリン以外の人を誰も夕食に招待しなかったということは伴立されず, 話し手も招待されているということにも矛盾しないことになる.

しかし, (32) が関連する形で対処する疑問には他にどのような種類のものがあるだろうか? その種類は極めて限定されており, 部分的に文脈に依存することが分かる. 韻律的に前提とされる疑問 (33) は文脈集合に対して分割を設ける. 疑問への可能な完全な答えであるセルは, 唯一招待された人物が誰かという点において互いに異なる. 上で考慮した関連する特性は Rooth の分析における VP の p-集合に対応するが, それに加えてメアリーが他に持ち得る特性はどれも以下の二つのタイプのいずれかになる. それら二つのタイプを筆者は文脈的に伴立される制限 (contextually entailed restriction) および論理的に独立した特性 (logically independent property) と呼ぶ. (p. 42) 伴立される制限は, 対

²⁶ 疑問と答えは, 意味的構成物であり, その疑問と答えを外延とする発話と混同してはならないことを思い出されたい. もし (34) への完全な答えが nobody (誰も) という返答により示唆されるものならば, これは (35) への答えが, モデル内に人がいるなら everyone (全員) という返答, モデル内に人が誰もいないなら nobody (誰も) という返答が外延とするものでなければならないことを伴立する. その逆の伴立も成り立つ. everyone (全員) が外延とする (34) への完全な答えと all the people (すべての人々) という返答により与えられる (35) への完全な答えとは, 同様の相関関係にある. さほど極端でない事例では, 二つの疑問への完全な答えは同一の表現になり得る. (34) に対する Alice, Gertrude and Grace (アリスとガートルードとグレース) という返答は, (33) に対する同じ返答が外延とする答えを伴立し, またそれによって伴立される, などである.

話者によってメアリーの特性であると知られているため、文脈集合により伴立される。これには、述べられた文脈において来客を招待するという特性が含まれる。文脈集合においてメアリーがそれらの特性をすべて持たない世界は存在しないため、伴立される制限は **only** の領域を暗示的に否定的な方法で制限する役割を果たす。そのため、述べられた状況において、(32) の VP に対し、暗示的な共格的制限「来客とともに」がかかる。しかし、伴立される制限は、(34) により設けられた分割においてセル間を区別しないため、**関連する**ことは決してない。

p-集合に対応する特性以外の特性のもう一方のタイプは、対話者が知る限りにおいて、メアリーについて成り立つかもしれないし、成り立たないかもしれないようなものであり、従って、基本的には議論下の疑問とは完全に独立したものである。例えば、もし (32) が **Did Mary brush her teeth this morning?** (メアリーは今朝歯を磨いたか?) のような疑問の後に続いて発せられれば、たいていの文脈ではその疑問とは無関係となるだろう。誰かと夕食を食べることは普通、歯を磨いたかどうかという疑問とは**関連**しない。このことを反映し、いかなる合理的に現実的なモデルにおいても、歯磨きするという論理的に独立した特性をメアリーが持つか否かという疑問は、(34) の設ける分割とは異なる分割を設ける。そのような独立した特性に基づいた疑問は、議論下の疑問 (33) の設けた分割においてセルを横に断つため、議論下の疑問 (33) に対する (部分的) 答えの選択に影響しない。メアリーがそれらの特性の一つを持つか否かを定めることは、従って、分割からのセルの除去に繋がらない。談話はそのような理由だけでも頓挫するわけで、そのような文脈において **only** の領域が前触れなしの発話のようになるだろうことは言うまでもない。しかし、ここで、メアリーが一人あるいはそれ以上の友人とともに夕食を食べる予定であることが文脈により伴立されると仮定しよう。さらに、メアリーの友人であるリンは彼女の歯科医でもあり、二人きりの時に限ってだが、いつもメアリーに歯科衛生に気を付けるようにうるさく言うと想定しよう。最後に、リンのメアリーへの注意はたいてい効を奏し、もしメアリーが友人たちの中からリンだけを選んで一緒に夕食を食べたら、(リンがうるさく言うため) メアリーは翌朝忘れずに歯を磨くものだとして想定しよう。このような場合、(32) が前提とする疑問である (33) は、彼女がともに夕食を食べようと考えていた唯一の人物は前述の友人たちであるという伴立された制限の下では、彼女が歯を磨いたかどうかという疑問に答えるための合理的な方略の一部になるだろう。(32) が文脈的にその疑問に対する答えを伴立するであろうからだ。**関連性**は、本質的に文脈依存的なのである。しかし、それでも、(32) が **Did Mary brush her teeth?** (メアリーは歯を磨いたか?) に対する答えを伴立し得るのは、**only** の解釈に含まれる **no** の解釈を制限するのに正しい領域、すなわち文脈的に際立ったメアリーの友人のグループが選択されたという想定の下だけである。(p. 43) そのため、論理的に独立した特性は時として**関連する**が、これは完全に文脈に依存する。

Rooth (1985) の焦点との結びつきの理論とその後の von Stechow (1991) と Krifka (1992) の理論では、**only** の領域はその作用域における韻律的焦点に直接基づいて計算されるべきものであることが、**only** の語彙的意味の一部として規定された。Vallduví (1990), Partee (1976), von Fintel (1994) および Roberts (1995) が指摘したように、そのような理論が体系的に誤った予測をするような種類の文脈がある。本稿の理論では、彼らの例を用いて、韻律は、意図した文脈、ゆえに意図した領域制限の決定に規則的で規約的 (なぜなら前提が関与するため) な貢献をするものの、それだけでは **only** の意図した領域制限を与えることができないということを示す。Nirit Kadmon (私信) は、(32) の例につい

て、この点を次のように説明する。我々がだめだとすることで、メアリーが今日それを行うのではないかと我々が恐れていたようなことについて話し合っているとしよう。そのようなことには、メアリーが (36) に挙げる特性を持つことが含まれていた。

- (36) a. リンを夕食に招待すること
- b. ビルを夕食に招待すること
- c. 昼食でテーブルクロスを汚すこと
- d. 夕食の前に喫煙すること

この文脈において、(37) を考慮されたい。

- (37) a. Mary wasn't so bad after all. Of all the things we were afraid she might do, she only [invited Bill for dinner]_F. (結局のところ、メアリーはそこまで酷くはなかった。彼女が行うのではないかと我々が恐れていたすべてのことのうち、彼女は [ビルを夕食に招待した]_F だけだ.)
- b. You got the person wrong. She only invited [Lyn]_F for dinner. But it's true that she did only one of those terrible things she could have done. (君は人を間違えているよ。彼女は [リン]_F を夕食に招待しただけだ。でも、彼女がやりかねなかったであろう酷いことの一つだけしか彼女が行わなかったことは事実だけだ.)

この場合、only の領域は (36) にある特性の集合であって欲しく、夕食に誰かしらを招待するという特性の集合であっては欲しくない。だが、例えば Rooth (1985) によって構成的に与えられる集合は後者だろう。規約的に領域を固定すると、誤った真理条件になってしまう。

(28) の韻律的焦点の前提により、情報構造の枠組みではそのような例を以下のように説明できる。(37a) は疑問 (38) を前提とする。

- (38) (36) のすべての特性の中で、メアリーがその特性以外の他の特性を持たないような特性ほどの特性か？

(p. 44) only の領域制限は明示的であり、第一の議論下の疑問、つまりメアリーが (36) の特性のどれを持つかを問う。そして、(37a) は、メアリーが (36) にあるすべての**関連する**特性のうち、ビルを夕食に招待したという特性だけを持つという特性を持つことを主張する。(37b) が前提とする疑問は、(32) と同様に、(33) である。しかし、ここでは、(37b) の発話が**関連せねばならない**文脈が異なるため、**関連する**特性は異なることになる。(37b) は、(37a) に対する修正の提示を行っていることが明確になっている。たとえ修正提示が明確になっていなかったとしても、(37b) とその直前の発話 (37a) が対処する疑問 (38) との**関連性**を説明するためには、特に両者が同様の形式を持ちつつも韻律的焦点においては対比的であることを考慮すると、(37b) は (37a) の行う主張に対する修正を提示していると想定することになる。修正が一般的にそうであるように、(37b) において修正者は、修正を受けた対話者が (37a) において対処したのとは異なる疑問に対処している。これは、(37a) で別個の韻律パターンが用いられていることに見てとれる。しかし、それでも、修正する発話である (37b) は、修正という行為の何たるかゆえに、事実上、修正された (37a) が対処する疑問に対して異なる代替的

答えを与える。修正的な発話が対処する疑問はメタ疑問である。ここでは、(33)は以下と論理的に等価である。

- (39) (36)のすべての特性のうち、メアリーが夕食にその人物を招待したこと以外の特性を持たないのはどの人物か？

もちろん、これは(35)と同じ疑問ではない。修正をしている(37b)は、(36)のすべての**関連する**特性のうち、メアリーが夕食にその人を招待するという特性のみを持つような人物はリンであると主張する。これは正しい解釈であり、実は(37a)が対処した疑問である(38)への完全な答えも与えており、文脈的に**関連**してもいる。

同様の例として、Partee (1991)は韻律的な反映のない埋め込み焦点があると主張した。本稿の説明は、表層的反映を持たない抽象的な焦点を想定せずに済むという点で、彼女の主張に対する改良となるだろう。Vallduví (1990)は、類似の例を用いて Rooth のアプローチの概略に疑念を投げかけたが、焦点との結びつきの効果に関して一般的な説明は提示していない。焦点の貢献は、Rooth 1985 では提示されるものであるとされたのに対し、本稿の枠組みでは前提が関与するものとするが、規約的なものであることに変わりはない。そのため、我々は、古典的な焦点との結びつきの例を説明でき、かつ(37)のような例も考慮に入れることができる。

本稿の説明のもう一つの利点は、主張だけでなく、疑問における焦点との結びつきの効果も説明できるということである。(40)と(41)を考えたい。

(p. 45)

- (40) Did Mary only invite [Lyn]_F? (メアリーは[リン]_Fを招待しただけか?)

- (41) [Did Mary only invite Lyn]_F? ([メアリーはリンを招待しただけか]_F?)

(28)により、(40)は疑問(42)に対処することが前提とされる。

- (42) Who did Mary only invite? (メアリーは誰を招待しただけか?)

(42)が意味する所は、(40)のための発話の文脈、すなわち、QUD スタックとその QUD スタックが(部分的に)体現する方略を考慮してのみ得られる。一つの可能性は、上で議論した疑問(35)と同じであるということである。その場合、**関連性**を持ち、それゆえに(35)/(42)に対処するためには、(40)は(35)に答えるための方略の一部でなければならない。しかし、(35)により設けられる分割はメアリーの特性のうちのある種のものしか**関連**しないような分割であることをすでに見た。(35)に対処する方略の一部を形成するには、(40)に答えることは、(35)に対して少なくとも部分的な答えを伴立しなければならない。従って、メアリーが**関連する**特性のうちどれを持つのかという点に関わるものでなければならない。これにより、(32)の場合と同様に、(40)の **only** について、正しい領域制限が生じる。(41)は広い焦点を持つため、大疑問のみを前提とする。それに対する答えは、当然、大疑問に答えるための方略の一部になる。しかし、大疑問は **only** の領域制限に関して何の手がかりも与えない。ここでは、追加的な文脈的要因のみが助けになり、そのことは適切であるように思える。前の例で見たように、韻律的焦点は常に**関連する**演算子について意図した領域制限を与えるわけではないのである。

最後に、本稿の説明では、意図した **only** の領域の選択は純粋に語用論的なもの、すなわち会話の含意になるということに注目されたい。正しい領域が想定された場合にのみ、発話は**関連する**ものになるのである。話し手が協調的であると想定するなら、我々はその領域が意図されていると想定しなければならない。領域選択の問題に対するこの種のアプローチは、焦点との結びつきに関する確固たる事実を説明するには弱すぎると異議を唱えられるかもしれない。例えば、含意の取り消しはどうか、この含意的な説明は焦点との結びつきが取り消し可能であると予測しないのか、といった異議である。ここではこの点について詳細に論じることはできないが、この異議に対して簡潔に反論したい。筆者は **Welker (1994)** に従い、含意の取り消しは一般に誤解されていると考える。具体的な文脈においては、(**Karttunen & Peters 1979** の意味での) 規約的含意、すなわち前提の取り消しができないように、会話の含意の取り消しもできない。含意の取り消しの古典的な事例 (例えば、**Grice 1989** の含意に関する論文や **Levinson 1983** の第三章を参照) で起きていることは、話し手が発話の意図した文脈を明らかにすることである。そしてしばしば、特に対処中の疑問および／あるいは探求方略におけるその疑問の役割についての誤解を正すということも起きている。そのため、「含意の取り消し」というのは、「意図した文脈の事後での (話し手による) 明確化と (聞き手による) 改訂」と呼ぶのがより適当だろう。(p. 46) 場合によっては、これは会話能力の崩壊のために必然的に生じるが、実は話し手が意図的に含意を設定し、その後急いで、その含意に対する責任を免れるためにそれが意図したものではない振りをする場合もある (前提でのゴシップの事例に対応する会話の含意の事例)。本稿の枠組みでは、取り消しは問題とならない。情報構造の理論は、発話の「文脈」が何であるかと、その文脈において発話が**関連する**ためには何が求められるかの両方を正確なものとし、そのため、予測は明快で曖昧さのないものになる。「取り消し」は、ミスコミュニケーションの一種であり、理論内の概念ではない。

これは、ここで提案した語用論的分析のような枠組みの提供する方法論的利点を例示するものである。ある例の発話の文脈について語ることは一般的であるが、この枠組みと特に疑問との合致という韻律的前提により、我々は必然的に発話の文脈の具体的な側面を見て、それらの側面が発話の解釈に与える直接的影響がどのようなものかについて予測を立てることになる。もし、疑問と答えの役割と両者の間の関係がきちんと定義されている **InfoStr** のようなものを想定すれば、議論下の疑問の決定を通じて、何が**関連する**のかに関する情報が得られ、領域制限のような解釈の論理的側面に制約がかかる。文脈が解釈に影響を与える方法は今までいささか謎めいていたが、**InfoStr** の想定により、それが解明され始めるだろう。これにより、これらの解釈の語用論的側面に関して反証可能な予測を立てることが可能になり (**Kadmon & Roberts 1986** も参照)、理論の意味論的設計を精緻化する代わりとして、語用論的な説明を用いることが正当化されるだろう。焦点との結びつきに関しては、**only** のような演算子の領域は、(15), (25), (28) の独立して動機付けられた原理だけを想定し、語用論的に与えられる。語彙意味論について追加的想定を行う必要はないし、構造化された命題も必要でないし、焦点と結びついた特別な前方照応的要素を想定して表層構造に注釈を付ける必要もない。情報構造が語用論的説明のための一般的な枠組みとして独立して動機付けられている限り、説明に追加のコストはかからないのである。

2.2.2 対比と代替要素

2.2.2.1 対比的主題を伴う発話における焦点の前提

Jackendoff (1972) は、単一の発話内における複数の焦点が二つの別個のイントネーション曲線を持ち得るという興味深い現象について議論し、それらを **A 曲線 (A-contour)**、**B 曲線 (B-contour)** と呼んだ。**Pierrehumbert (1980)** とその共同研究者らが展開してきたような高低曲線の分析の用語を使うならば、**Jackendoff** の高低曲線はいずれもイントネーション句全体が関与し、焦点化された下位構成素への **L+H*** ピッチアクセント²⁷、**L-**句アクセント、そしてそれとは別個の境界音調、すなわち **A 曲線**には **L%**、**B 曲線**には **H%**を伴うということになる。 (少なくとも母語話者は、以下の疑問／答えの対とそれが答えの韻律にもたらす結果に基づいて、これがどのような音調であるか再現することができるはずである。) **Jackendoff** は **B 曲線**の句における焦点構成素を**独立焦点 (independent focus)**、**A 曲線**の句の焦点構成素を**依存焦点 (dependent focus)**と呼び、これらのアクセントの使用がある種の疑問／答えの対とどのように相関するかを示した。加えて、**B 曲線**は一般に単独では使われず、**A 曲線**も存在することが想定される。例えば、**Jackendoff** の (43a) と (43b) を考えたい。

- (43) a. [John]_B ate [beans]_A
 b. [John]_A ate [beans]_B

Pierrehumbert & Hirschberg 1990 における同様の例の分析に沿うと、これらの例は (44) のように表示されるだろう。

- (44) a. [John]_F [ate beans]_F
 L-H% L-L%
 b. [John]_F [ate beans]_F
 L-L% L-H%

これらはいずれも二つのイントネーション句、すなわち、句アクセント・境界音調の連続で注釈を付けた括弧内の構成素を持ち、それぞれが焦点構成素を含む ((22) の焦点の音韻論の原理を参照)。以下では、筆者は簡潔さのために **A アクセント**と **B アクセント**の表記を用いることがあるが、(44) のようなものがより正確な転写であると考えている。

Jackendoff は、(43a) は **What about John—what did he eat?** (ジョンについては? —彼は何を食べたの?) のような疑問に答えるのに対し、(43b) は **What about beans?—who ate them?** (豆については? —誰が豆を食べたの?) のような疑問に答えるだろうことを指摘した。しかし、疑問／答えの組み合わせを逆にはできない。(43a) は **What about beans?—who ate them?** (豆については? —誰が豆を食べたの?) に答えることができないのである。(p. 48) 本稿の枠組みでは、これらの高低曲線とその分布を以下のように説明することを提案する。この説明は、**Nirit Kadmon** と

²⁷ これは筆者には単純な **H*** ピッチアクセントのように聞こえることがあるが、**Pierrehumbert & Hirschberg (1990)** に従い、**L+H*** であると考えられる。

の未出版の共同研究に基づく (しかしながら, この説明を展開している本稿の枠組みには彼女は同意しないかもしれない).

イントネーション句形成を考慮しなければ, (43a) と (43b) はともに, 議論下の疑問が次のようであることを前提とする.

(45) $\{u \text{ が } u' \text{ を食べた} : u, u' \in D\}$, すなわち, 「誰が何を食べた?」

しかしながら, 直感的には, (43a) と (43b) は (45) に対する直接的な答えではなく, むしろ, 異なる下位疑問 (46a) と (46b) に答えるものである.

- (46) a. What did [John]_F eat? ([ジョン]_Fは何を食べた?)
cf. What about John—what did he eat? (ジョンについては? —彼は何を食べたの?)
b. Who ate [beans]_F? (誰が[豆]_Fを食べた?)
cf. What about beans?—who ate them? (豆については? —誰が豆を食べたの?)

(43a) と (43b) が, (45) および下位疑問 (46a) または (46b) のいずれかを前提とすることは, 以下のタイプの対話で起こっていることと関係がある. 以下の対話では, 少なくとも関連した話題については, 先行する談話が何もない.

- (47) a. [When are you going to China]_F? ([あなたはいつ中国に行くのですか]_F?)
b. Well, I'm going to [China]_B in [April]_A. (ええと, 私は[中国]_Bには[四月]_Aに行きます.)

(47b) は (47a) の疑問に答えるが, それ以上のこともしている. その韻律的焦点構造により, 議論下の疑問が (47a) ではなく, (48) の上位疑問であることが前提とされる.

- (48) あなたはいつ, どの場所に行きますか? (When are you going to which place?)
すなわち, $\{ \text{あなたは } t \text{ において } u \text{ に行く} : u \text{ は場所, } t \text{ は時間} \}$

代替要素の集合は, 演算子の領域がそうであるように, 単集合でも空でもない一般に考えられている. そうすると, この疑問は, (47b) の話し手が訪れる予定の場所が二か所以上あることを含意する. もちろん, この文脈では, 上位疑問はまだ (47a) の話し手によって受理されていない. しかし, その話し手は好奇心からそれを調節し, (49) を尋ねるだろう. つまり, 前提とされる上位疑問への (47b) の答えを補完するだろう残りの情報について尋ねるのである.

- (49) Oh? Where else are you going, and when? (え? あなたは他にどこに, いつ行くのですか?)

この場合, 探求方略全体は, $\langle (48), \{ \langle (47a), \emptyset \rangle, \langle (49), \emptyset \rangle \} \rangle$ であり, 上位疑問 (48) は調節されている.
(p. 49) 同様に, (43) における B アクセントにより, 上位疑問 (45) が議論下にあり, 他にも議論下に (46a) あるいは (46b) の形式のいずれかの下位疑問があり, さらに (43a) は (46a) へのみ答えられる一方, (43b) は (46b) へのみ答えられるということが分かる. (43a) は探求方略 $\langle (45), \{ \langle (46a), \emptyset \rangle \} \rangle$ を前提とする一方, (43b) は方略 $\langle (45), \{ \langle (46b), \emptyset \rangle \} \rangle$ を前提とするとえよう. (43a) は方略 $\langle (45), \{ \langle (46b), \emptyset \rangle \} \rangle$ への返答として不適切な手である一方, (43b) は $\langle (45), \{ \langle (46a), \emptyset \rangle \} \rangle$ への返答として不適切である. もちろん, 下位疑問は (45) と同じく明示的に尋ねられる必要はないが, この理論において前提とされる疑問が持つ意味論的性格と, 談話の情報構造の抽象的性質ゆえ

に、そのことは問題にならない。(43)の例により前提とされる目標と想定は、これらの相関する方略によって正しく捉えられているだろう。

これらの事実を捉えるために、A アクセントと B アクセントの名詞句は両方とも焦点であると想定すると、(45)の疑問が前提とされるようになる。これは(43)の発話に対する F 標示から得られる²⁸。それでは、どのようにして(45)の直近の下位疑問の想定が生じるのだろうか？ これらの例における二種類のアクセントの重大な違いは、H% という境界音調（あるいは、一般的にその句+境界音調が形態的な単位を形成するのであれば、L-H% という連続）であると思われる。B 曲線のイントネーション句における(L-)H% アクセントは、(45)に対応する抽象への独立した項として、その焦点構成素を標示する。それはすなわち、はじめに選ばれる項であり、それが選択されることで、もう一方の、A 曲線の焦点に対応する集合からの代替要素の選択が決定される。あるいは、それが選択されることで、少なくとも代替要素の選択の幅が狭められる。（そのため、Jackendoff は依存焦点 (dependent focus) という用語を用いる）。「(L-)H%」は「答えはまだ途中である——埋めなければならない他の焦点がある」ということを意味し、これにより(L-)H% がなぜ単独では生起しない（が、どこかに A 曲線の焦点がある限りにおいて繰り返し生起し得る）のかが説明される。(45)の疑問に関連付けられた代替要素の集合の一つからこの独立した項を選ぶと、前提とされる議論下の疑問は、(50a)あるいは(50b)のいずれかになる*。

- (50) a. $\{u \text{ が } u' \text{ を食べた} : u, u' \in D \wedge u = \text{ジョン}\}$
 b. $\{u \text{ が } u' \text{ を食べた} : u, u' \in D \wedge u' = \text{豆}\}$

しかし、(50a)は(46a)の解釈である(51a)と等価であり、(50b)は(46b)の解釈である(51b)と等価である。

(p. 50)

- (51) a. $\{j \text{ が } u' \text{ を食べた} : u' \in D, j = |\text{ジョン}|\}$
 b. $\{u \text{ が豆を食べた} : u \in D\}$

そのため、(43a)と(43b)は、韻律的焦点が同一の位置に置かれるために、両方とも(45)を前提とする。しかし、L-H% という境界の連続の位置は、焦点に関わる対比集合からの一連の選択を示すため、韻律的に前提とされる疑問に対する下位疑問を前提とする。この境界の連続が(43a)と(43b)では異なって位置するため、両者は異なる下位疑問を前提とする。(43a)では、前提とされる疑問(45)および(46a)が疑問/下位疑問の方略を形成するということは、(43a)自体がそのような方略を前提とするということを意味する。(43b)についても同様で、方略 $\langle(45), \{(46b), \emptyset\}\rangle$ を前提とする。従って、本稿の説明では、独立焦点と依存焦点の両方を含む発話は、議論下の疑問だけでなく、場合によっては複雑にもなり得る疑問の方略をも前提とする。

²⁸ Vallduví は、対比的主題に Jackendoff の挙げたような例での B アクセントの要素を含められているとみられるが、対比的主題が焦点であるとは想定していない。しかし、筆者が見る限り、彼はこの想定ゆえに、ここで議論している類いの事実を説明できなくなっている。

* 訳注：(50)–(51)は、原文では動詞が likes となっているが、(45)では動詞は ate なので、これは誤植であると考えられる。

もちろん、これが L-H% という境界の連続がもたらす効果全般に対する妥当な説明であるかどうかは、その生起に関するより多くのデータを見なければ分からないだろう。そのため、現時点では、これは (43) のような例の扱いに対する暫定的な提案でしかあり得ない。しかし、B アクセント句における境界音調の連続は、疑問のイントネーションにおける連続と同じではないことに注意されたい。後者には H-H% の句+境界音調の連続が関与する。筆者が略式的に検討した L-H% を含む他の種類の例においては、L-H% が行うとされる意味への貢献は、本稿で明白に担うとする役割と少なくとも矛盾はしない。

例えば <(45), (46a), (43a)> のような、調節を通じて豊かになった談話では、その答え——ここでは (43a) ——が、直近の議論下の疑問 (46a) と上位疑問 (45) の両方に合致することに注意されたい。しかし、全体の方略 <(45), {(46b), 0}> が前提とされることは、このことだけからでは分からない。恐らく、全体の方略が前提とされることは、B アクセントの選択と結びついた前提から導かれるものであろう。これは、(28) における焦点の前提の定式化が、英語の文の韻律的焦点*の前提すべてを捉えるための必要条件ではあるものの、十分条件にはまだなっていないことを示している。

(28) 発話 * β における韻律的焦点の前提

β は発話時における議論下の疑問と合致する。

完全に妥当な説明をするには、焦点構成素の選択を見るだけでなく、イントネーション句の切り分け方と、選択されたイントネーション句と結びついた句アクセントそして境界音調の種類の間を見る必要があるだろう。(さらに加えて、選択される具体的なピッチアクセントも見ることがあるはずである。) (p. 51) 韻律構造の複雑さと豊かさは焦点の意味論的・語用論的な研究で見落とされることがあまりにも多く、これによりある種の例で重大な誤分析が生じることがある。次節ではそのうちのひとつを見る。

2.2.2.2 発話内の対比的焦点

しばしば**対比的焦点** (contrastive focus) と呼ばれてきたものの例には、本稿の提案する枠組みや原理からごく自然に導かれると思われる類いの例が数多く存在する。はじめに、下の (52) のような文境界 (あるいは節境界) を超える例に関わるものを考えたい³⁰。

(52) Mary called Sue a Republican, and then [she]_B insulted [her]_A. (メアリーはスーを共和党員と呼び、そして [彼女]_B[彼女を]_A 侮辱した。)

二番目の節における she には B アクセントがあることに注目されたい。

(52) における二番目の節の意図された解釈を説明するのに、単に (53) への答えを提示するのと言うだけでは十分でない。

(53) Who insulted whom? (誰が誰を侮辱した?)

* 訳注：原文では prosodic structure (韻律構造) となっているが、文脈から prosodic focus (韻律的焦点) に変更した。

³⁰ Rooth (1992b) は同様の例を議論している。この種の例は George Lakoff が初めて指摘したとそれとなく聞いたことがあるが、それがどこでなのかは分からない。読者の方々から何かしら関連文献に関してご教示いただければ幸いである。

これは (52) が前提をさらにもう二つ持つと思われるからである。

- (54) a. 一番目の節も侮辱を述べている。
b. 侮辱する者と侮辱される者の役割が、二番目の節では一番目の節における役割に対して反転している。

しかし、これらの前提は本節の前の方で概略を述べた韻律的焦点の見地からかなり自然に導かれるため、この種の例がとりわけ対比的焦点の解釈に関してさらなる原理を動機付けることはないと主張したい。

まず、(52) を発話する際、*insulted* が「アクセント除去」(Ladd 1980 参照) されていることに注目したい。Selkirk (1984) は、当該の韻律的現象に対してアクセント除去 (deaccenting) という用語を用いることに反対している。アクセント除去という用語は、対象となる構成素が当初はアクセントを持っていたものの、後にそのアクセントを失ったということを示唆するためである。特にその構成素が動詞である時、それが「通常は」韻律的に卓立していること、まして核強勢を受けるということは明らかでない。しかし (52) では、*insulted* の発音のされ方は、*What happened next?* (その後何が起こった?) に続く発話 *Mary insulted Sue* における *insulted* の発音のされ方と比べ、著しく平坦になる。そのような著しい平坦さは、(52) の二番目の節が、共和黨員と呼ばれることが侮辱的であるという含意が意図されずに発話される場合の *insulted* の発音のされ方と比べてもなお観察される。(p. 52) この種のアクセント除去は、(53) が議論下の疑問である場合にそうなるのと同様に、侮辱の関係が既に議論下にあるということを前提とする。筆者は、等位接続構造は一般に、単一の疑問に対する複合的な (部分的) 答えとして提示されると主張する。これは 1 節の情報構造の理論、とりわけ任意の手は関連するものであり、ゆえに議論下の疑問に対処するものでなければならないという要件から導かれるだろう³¹。(52) の二番目の等位項の *insulted* における強勢除去は、疑問が (53) であることを前提とする。もし一番目の等位項がこの疑問に対する答えの一部になるとしたら、それも侮辱について述べなければならず、(54a) の含意が生じる。

前提 (54b) が生じるのは、(54a) が成り立ち、かつ二つの代名詞が *Mary* と *Sue* を先行詞として取るが、それでいて二番目の節が情報提供の点で有益である唯一の方法が、侮辱する者/侮辱される者の役割の反転であるためである。*she* の B アクセントにより、その節が (53) に対処するだけでなく、下位疑問にも対処していることが伝わる。その下位疑問は、*she* を文脈上際立っている女性の一人で置き換えた結果生じる二つの疑問、*Who (of Mary and Sue) did Mary insult?* ([メアリーとスーのうち] メアリーは誰を侮辱したか?) あるいは *Who (of Mary and Sue) did Sue insult?* ([メアリーとスーのうち] スーは誰を侮辱したか?) のいずれかである。しかし、一番目の等位項は既にメアリーがスーを侮辱したことを伝えているため、*she insulted her* (彼女が彼女を侮辱した) が冗長になることなく対処できる唯一の下位疑問は二番目、つまり、*Who (of Mary and Sue) did Sue insult?* ([メアリーとスーのうち] スーは誰を侮辱したか?) となる。そして、非再帰代名詞の目的語はスーではな

³¹ もちろん、この主張を支持するにはより多くのことを言わなければならないが、そうするとここでは本題からかけ離れてしまうことになるだろう。これは究極的には複合的な節構造が担う修辭的役割に関する問題である。情報構造の理論がどのように修辭と関連するかに関する示唆については 3 節を参照されたい。

く, メアリーを外延とせねばならない³². 従って, 前提とされる疑問は, 答えにおける役割の反転を前提とするように文脈的に制約される. NP のペアの間の対比関係に関する特別な規定は必要ない.

Schwarzschild 1994a からの (55) のような例についても, 同様の説明が可能である.

- (55) a. John was a victim of suicide(, but) (ジョンは自殺で亡くなった [が, しかし])
b. THE MOB killed SAM. (暴徒がサムを殺した.)

(55b) における動詞のアクセント除去は, 当該動詞が議論下の疑問の一部であることを前提とする. (55b) が (55a) と等位接続されたとしても, あるいは単純に (55a) の後に続いたとしても, 二つの発話の内容と (55b) に示した韻律により, (p. 53) 両方とも Who killed whom? (誰が誰を殺したか?) という同じ疑問への部分的答えであることが示唆される. (55b) においてアクセント除去された述部は, (55) における述部とはアクセントの実現のされ方が異なることに注目されたい.

- (55) c. The mob poisoned Sam. (暴徒がサムを毒殺した.)

筆者にとっては, (55c) が (55a) に続く時, mob, Sam, poisoned はすべてアクセントを持つ. NP はどちらも B アクセント, 動詞は A アクセントを持ち, それは議論下の疑問が How was who killed by whom? (誰が誰によってどのように殺されたか?) であることを示唆していると考えられる. ((55a), (55b)) と ((55a), (55c)) の違いは, (55a) においてジョンが自殺をしたことは, 彼自身によってではあるものの, 彼が殺されたことを伴立する一方で, 毒殺されたことは伴立しないということのようである. 従って, (55b) における殺害は旧情報であるのに対し, (55c) における毒殺はそうではない.

このような例を説明するために Schwarzschild が提案する原理は, 本稿が提案する理論から導かれる.

- (56) 対比の制約 (Schwarzschild 1994a)

B が A と対比して発話されるならば,

- a. A は B と意味的に同一ではない.
b. A の意味は, B の焦点化された要素を同じ意味タイプの要素と置き換え, その結果生じる表現の意味を計算することで得られる.

しかしながら, この原理は, 本稿の説明と一般的なグライスの原理から導かれることを示すことが可能である. 意味における非同一性 (56a) は, (できる限り) 情報提供の点で有益でなければならないとする Grice の量の格率 1 から生じ, 置換の条項 (56b) は, これらの例における二つの節が両方とも同じ疑問に対処しているという想定および疑問/答えの合致から生じる.

しかし, 節内部の対比が関与するタイプの例があり, これは本稿で提案する説明にとって一見すると問題になる. Rooth 1992a からの以下の例を考えたい.

³² 誰かを共和党員と呼ぶことが侮辱的であるという含意を保ちつつ, スーがスーを侮辱するようにするには, 二番目の等位項を and then SHE insulted HERSELF (そして彼女は彼女自身を侮辱した) に置き換えればよい.

(57) An [American]_F farmer was talking to a [Canadian]_F farmer... ([アメリカ人]_Fの農家が[カナダ人]_Fの農家に話していた……)

Rooth が転写するように、筆者の説明では (57) は (58a) や (58b) のような議論下の疑問を前提とすると予測される。

- (58) a. どのような農家がどのような農家に話していたか？
b. どのような農家たちが（お互いに）話し合っていたか？

(p. 54) しかし、どうもこれは完全に正しいようには思えない。筆者がこの例について議論した英語の母語話者の言語学者たちは、(59)は何の前触れもなく発話されても適切となるということに大方同意している。

(59) An AMERICAN farmer was talking to a CANADIAN farmer. (アメリカ人の農家がカナダ人の農家に話していた.)

(59) はかなり粗い印象に基づいた転写であり、発話中で第一アクセントを持つ要素のみしか表記していない。もし Rooth が (59) を (57) として正しく分析していたなら、本稿で提案する韻律的焦点の理論は誤った予測をし、(59)における対比について何の説明も提示していないことになる。対比が節内部であるため、対比された構成素によって単一の議論下の疑問に対する（部分的）答えの代替案が示唆されると主張しても、この対比に対処することはできない。

しかし、(57) が印象に基づいて転写された (59) の正しい分析であるかどうか疑ってみるだけの理由がある。音韻論的原理 (22d)（以下に再掲）を思い出されたい。

(22) 焦点の音韻論

- a. 文（あるいは文の断片）である発話一つにつき、少なくとも一つのイントネーション句がある。
- b. イントネーション句一つにつき、少なくとも一つの焦点化された下位構成素（真に部分的でなくてもよい）がある。この**焦点構成素**（**focused constituent**）を、以下では F という素性で標示する。
- c. 焦点構成素一つにつき、少なくとも一つのピッチアクセントがあり、それは下位構成素と結びつく。
- d. いずれのピッチアクセントも焦点構成素内の要素と結びついていなければならない。
- e. イントネーション句一つにつき、一つの句アクセント（H-あるいはL-）と一つの境界音調（H%あるいはL%）がある。
- f. 焦点構成素における連なり末尾のピッチアクセントには、イントネーション句中で最も卓立した強勢が付与される（核強勢規則）。

これにより、(57)/(59) では二つの形容詞を除くすべての要素がアクセント除去されるはずであると予測される。しかし、これが (59) にとって適切な韻律曲線であるのは、(58)にある疑問のいずれかに対する答えである時だけであり、何の前触れもなく発話された時は適切でない。後者の何の前触れもないタイプの文脈では、一番目の名詞 **farmer** と動詞 **talking** は、どちらも核強勢は持たないが、アクセ

ントを付される。平坦で、アクセント除去された高低曲線にはならない。しかし、どのようにすれば (57) の転写とその転写から生じる、発話の他の要素にはピッチアクセントがないという誤った予測を回避しつつ、同時に **American** と **Canadian** が (59) で主に対比される要素であるという直感を反映させることができるだろうか? (p. 55) 一つの可能性は、下の (60) に示したものである。(60) では、中間のイントネーション句 (Beckman & Pierrehumbert 1986 を参照) は「-」、完全なイントネーション句は「%」で標示されている。英語の ToBI 転写システムにおいて標準的であるように (Beckman & Ayers 1997 を参照), アスタリスクが付された音調はピッチアクセントであり (統語的構成素と揃う), T- (T は高 [H] あるいは低 [L] 音調) は句標識 (中間句と揃う) であり, T% は境界音調である (完全なイントネーション句と揃う)。

(60) [[An American] [farmer]] [[was talking] [to a Canadian farmer]]
 H* L- H* L-L% H* L- H* L-L%

二つの完全なイントネーション句の存在は、一番目の最後, **farmer** の後のわずかな休止と延伸, そして下降調の句アクセントと境界音調によって示されている。加えて、それぞれの完全なイントネーション句は二つの中間句を含んでおり、その中間句の境界は **American** と **farmer** の間, そして **talking** と **to** の間にある。この構造では、それぞれの中間句が焦点化されている (つまり、それぞれが最大限に広い焦点を持っている) と主張できるかもしれない。これはピッチアクセントの位置と矛盾せず、最初の三つの中間句では最後の要素, すなわち **American**, **farmer**, **talking** にピッチアクセントが落ちている。(59) のインフォーマントたちによる実現に矛盾せず、そして Rooth の (57) の実現とは異なり、この連なりにおける唯一のアクセント除去された要素は **farmer** の二番目のトークンである。このようにアクセントがなくなるのは、Ladd (1980) と Selkirk (1984) が詳細に議論している前方照応的なアクセント除去として説明できるかもしれない。(59)/(60) における先行詞は当該名詞の一番目のトークンである。従って、アクセント除去された最後の要素は、最後の中間イントネーション句が広い焦点を持つと想定することと矛盾はしない。

(60) の発話は次の疑問と合致するだろう。

(61) 誰が何をしていた?

(59) の発話がごく一般的な疑問への対処を意味するものであるとすれば、(61) は、(58) の疑問とは異なり、(59) が何の前触れもなく発話されるという直感と整合する。

しかし、これが正しかったとして、形容詞に第一アクセントが置かれることについては何が言えるだろうか? これは明らかに形容詞の値の間に意図された対比によって動機付けられているように思われる。David Dowty (私信) は関連する例を指摘してくれた。この例は、Horn (1985, 1989) による先例に発想を得たものである (p. 56) ³³。

(62) A PROactive farmer was talking to a REactive farmer. (主体的な農家が受け身的な農家に話していた.)

³³ Horn は対比的焦点とメタ言語否定が組み合わさった例を出している。彼は Bolinger (1961) と Carlson (1982) がその類いの先例を指摘していると述べている (Horn 1989: 434–435)。

(62) の例も何の前触れもないような感じで発話されるだろう。そのような発話における韻律に関する事実——一番目の形容詞の語幹、名詞、動詞へのアクセント除去の欠如——は (59) と同様である。これは (62) の焦点の構造が (57) の構造よりも、(60) の構造のようであるということを示唆する。実は、この種の例は、焦点が統語的構成素と相関するとみなされる限りにおいて、対比されている接頭辞への狭い焦点を持つと理解することはできそうにない。そのような狭い焦点は、どのような議論下の疑問により示すことができるだろうか？ **What kind of -active farmer was talking to what kind of -active farmer?** (どのような-的な農家がどのような-的な農家に話していた?) だろうか？ reactive の接頭辞 re- は現代英語において生産的でないため、そのような狭い焦点は下位語彙的であるだけでなく、下位形態的にもなるだろうし、このことは確実にそのような疑問が不適切であることと関係がある。UNinterested や DISinterested のような、他のいくつかの形容詞の対も同様に機能するだろうから、この現象はかなり一般的である。

(60) の分析の下での (59) のように、(62) のような例では、対比は、何もなければ広く焦点化される韻律構造の上に覆いかぶさるようである。(60) に関しては、知覚される相対的な強勢がどのような物理的計測値と実際に相関するにせよ、それらの計測値に関して、(22) にある英語の韻律の音韻論の原理はいずれも、複数のイントネーション句や中間イントネーション句の相対的値に影響を与えないことに注意されたい。もちろん、実際には、最後の句がこの点において発話中の先の句よりも常に強いわけではないことが分かっている。節内の挿入的要素や余談のためにしばしば小声が用いられることを鑑みれば、このことは十分に領けよう。従って、(60) が示唆すると筆者が考えるのは、複数の中間句の相対的な重さを決めるための仕組みがあり、それは (22) にあるようなイントネーション句の形成やアクセント・焦点の配置のための規則を超えるようなものであるということである。

もちろん、(60) が実際に (59) の何の前触れもない発話の正しい分析であるかを決めるには、音声学的分析が必要であろうが、筆者はそれに着手する準備はできていない。焦点の配置とアクセント除去との関係の仕方やアクセント除去の示唆するところからして、(57) が正しい分析でないことは明らかであると考え。きっと、そこから得るべき明らかな教訓は、第一強勢や対比の印象よりももっと考慮すべき多くのことがあるため、我々は発話の焦点構造に関して主張する事柄についてより注意深くならなければならないということである。加えて、この議論は、韻律の語用論に関する他の重要な問題を提起する。特に問題となるのは、イントネーション句形成の機能で、対比を伝える際に同時に役割を担うと思われる。(p. 57) このような例においては対比に韻律のメタ言語的な使用が関与するという筆者の疑いは、部分的には、Horn のメタ言語否定や、いわゆる代替疑問 (alternative questions) において焦点が担う役割から発想を得て、強化されたものである。代替疑問の現象については、これから論じる。

2.2.2.3 yes/no 疑問 vs. 代替疑問

(63) は、von Stechow が指摘するように、yes/no 疑問の読みと代替疑問の読みの間で曖昧である。彼は韻律について議論していないが、これらの読みはそれぞれ (63a) と (63b) に大まかに示した異なる実現に対応すると考えられる。(ここではピッチアクセントは無視し、句アクセント、焦点、境界音調のみを示す)。

(63) Do you want coffee or tea? (あなたはコーヒーかお茶が欲しいですか? /
あなたはコーヒーかお茶, どちらが欲しいですか?)

a. [Do you want coffee or tea]_F?

H-H%

b. [Do you want [coffee]_F] [or [tea]_F] ?

H-H% L-L%

これらは, (64) に示した解釈を持つはずである. ただし, coffee ∨ tea は |coffee| と |tea| の交わりとする.

(64) a. {you want coffee ∨ tea}

b. {you want u : $u \in \{\text{coffee}, \text{tea}\}$ } = {you want coffee, you want tea}

(64a) に示した (63a) の解釈は何のこなしに得られる. 単純な yes/no 疑問は, 文脈集合に対して二つのセル, すなわち, 一つは集合 (64a) の単一の命題が真である世界を含むセル, もう一つはそれが偽である世界を含むセルのみを持つ分割を設ける. 問題は, (64b) の解釈にどのように至るかである. これは等位接続された Do you want coffee and do you want tea? (あなたはコーヒーが欲しいですか, そして, あなたはお茶が欲しいですか?) が外延とする疑問と同等であることに注目されたい. 従って, (64b) に示した (63) の解釈には, 対象言語の選言をメタ言語の連言に転換する, 等位構造縮約の意味論版が関与する. von Stechow は, 疑問における or は一般的に集合の和として振る舞うと提案している. or は, 内容のレベルでは世界の集合を結合するが, 代替的なレベルでは命題の集合を結合する. 彼の理論では, (64b) が何のこなしに得られる読みであり, (64a) は追加的な仕組みによって説明されなければならない (彼は基本的に量子子投入を用いている). (p. 58) この説明は韻律と解釈の相関関係について何も語っていない.

筆者は, or は通常 (疑問においてであっても) 標準的なブール論理の解釈を持つと提案する. そのため, (63a)/(64a) は極めて何の変哲もないものである. しかし, or は時にメタ言語的な用法を持ち, その機能は独立して焦点化された選言肢により表現される対比的な代替要素を示すことである. やはり一般に修正あるいは取り消しを受ける構成素に対する狭い焦点を伴う Horn (1985, 1989) のメタ言語否定と比較されたい. Horn (1989: 379ff) は, or をはじめとする他の演算子もメタ言語的解釈を持つと論じ, (65) のような例を提示している.

(65) Is the conductor Bernst[ɪ̃]n or Bernst[á̃]n?

(指揮者はバーンステインそれともバーンスタイン?)

これは指揮者の名前の発音に関する疑問であるため, 明らかにメタ言語的である.

筆者は, メタ言語的な使用において, or は von Stechow が示唆したように機能すると主張したい. すなわち, or は選言肢によって与えられた代替要素の和集合を生み出し, そしてその集合が, 問題になっている発話における単一の焦点化された項に対して代替的な値を与える. 従って, (63b) は, 議論下の疑問が What do you want? (あなたは何が欲しい?), {you want u : $u \in D$ } であるということを前提とする. 与えられる具体的な代替要素は, D を制限すると考えられる自然類の存在を示唆し, それは少なくともコーヒーとお茶を含まなければならない. (63b) におけるデフォルトの最終句/境

界音調の連続は L-L% であり、これは最終性、すなわち、与えられた代替要素が完全な集合であることを示唆する。そのため、{you want u : $u \in D$ かつ $u \in \{\text{coffee, tea}\}$ } という疑問に辿り着く。これは (64b) にある want(you, coffee) と want(you, tea) という命題の集合であり、望み通り、二つの等位接続された yes/no 疑問を尋ねることと同等である。(選言の排他的な感覚は会話の含意から生じるとする。この想定は今では関連文献においてかなり標準的なものである。) 句末には H-H% という連続も可能であり (coffee を含むイントネーション句の最後に一般に見られる H-H% のように)、これは他の飲み物も存在することを示唆する³⁴。メタ言語的選言を用いると、望む結果は等位構造縮約なしに得られ、(63a) は必要以上に複雑にはならない。

(p. 59) メタ言語的選言の働きに関するこの見方は、Horn の (65) のような例を説明するのに拡張できそうである。我々は確かに Is the conductor Bernstein[P]n? のような疑問を「彼の名前はどのように発音されるか?」という意味で尋ねるが、本稿の見方では (65) はそのような疑問二つの連言を外延とすることになろう。これは安心感を与えるものの、無論、筆者がここで示唆したことが当該の現象の理論となるということを意味するものではない。このような現象が、本節で概略を述べた韻律の前提の理論と矛盾しないと主張したまでである。

3. 情報構造の理論のさらなる適用

1 節および 2 節で概略を示した理論は、特別な前方照応の仕組みや焦点に対する敏感性なしに、Rooth (1992a) が主唱する類いの代替意味論にとって本質的な事柄を捉えているようである。さらに、Rooth (1992a), Roberts (1995), Calcagno (1996) そして von Stechow (2004) が概略を示した線で、自然言語における演算子の領域制限に関して、前提に基づく一般的な理論に到達できる見込みもある。しかし、筆者はさらに広い適用が可能であると考え。ここでは、様々な問題に関して、この理論と(いろいろな分野からの)語用論の研究の間に見られる関連性のいくつかについて簡潔に概略を述べる。それらを繋ぐ糸は計画や意図の概念である。恐らく、計画や意図の概念を、談話における目標あるいは議論下の疑問に読み替えることには、筆者がここで言及する研究を行った者の全員が満足するわけではないだろう。そのような読み替えにおいては、情報構造の中で目標は共通基盤に反映された役割を担う。しかし、もし我々がそのような読み替えを受け入れるならば、情報構造は語用論の理論の中心的側面となり、数多くの見かけ上異なる問題を統一し、興味深い可能性を切り拓くことになる

³⁴ つまり、代替疑問 (64b) は (i) の焦点構造をもって尋ねられることもある。

- (i) Do you want [coffee]_F or [tea]_F ?
H-H% H-H%

(63b) のように、(i) における韻律は、聞き手が何かを欲しがっていることを含意する。これは、(i) が What do you want? という疑問に答えるための方略の一部であることを前提としていることに起因する。(ii) も同様に (64b) を外延とするが、そのような上位疑問は前提としない。

- (ii) [Do you want coffee]_F or [tea]_F ?
H-H% H-H%

(i) と (ii) はどちらも明らかに二つの yes/no 疑問を尋ねており、各疑問は H-句アクセントと H% 境界音調で標示されている。もちろん、これらすべてについて、さらなる研究が必要である。関連した議論に関しては、Pierrehumbert & Hirschberg 1990: 302ff を参照されたい。

だろう。それら様々な語用論的現象すべての分析は一般的に想定されるよりも豊かな文脈の概念, 1節で概略を述べた類いのもが必要になるというのが中心的主張である。そうすると, 問題となる語用論的現象の多くは発話の文脈の構造, すなわち, その情報構造に関する前提として見ることができる。一方, その他の現象は, ある発話のその情報構造に対する適合の仕方に対する制約によって部分的に惹起される推論の生成を伴うことになる。(p. 60) 談話における情報の流れの構成についてより明瞭な概念があれば, それらの前提の分析や, それらの推論のなされ方の決定といったタスクは相当に容易になる。

Thomason (1990) は共通基盤, (人工知能のプランニング理論で展開されてきたような) 計画および調節は, 語用論の理論の中心的な構成要素であるべきだと主張している。彼は, 対話者の談話の計画, 共通基盤にある情報, そして計画の推論が, 話し手がグライスの会話の含意を計算する際にいかに重要な役割を担うかについて, 概略を示している。これは Grice 自身が一貫して含意 (そして実際のところ, 非自然的な意味そのもの) を話し手の意図に対して相対化していることとかなり一致する³⁵。さらに, 計画と会話の含意はともに調節されて共通基盤に入る。本稿の提案は目標 (goal) と計画 (plan) の概念を捉えるために意味論的疑問と探求方略を用いており, ある意味では, Thomason の語用論理論の見方の拡張とみなせるかもしれない。Sperber & Wilson (1986) が詳細に論じているように, グライスのアプローチの現在までの問題として, 彼の会話の格率の定義が漠然としたものであること, そしてそのためにその適用可能性に不確定さが生じることがある。関係の格率に加え, Grice は量の格率の両方を「会話の目的」に対して相対化された形で定義した。それらの意味や, さらにしばしば引き合いに出されることだが, 対立する要件の間のバランスの取り方の決定の問題も, 情報構造に基づいた枠組みにおけるそれらの役割を探ることを通じて明らかになると期待するのは, 非合理的なことではないだろう。Welker (1994) は Thomason 1990 で概略が示された基本的な発想を取り上げ, 共通基盤における計画の理論を展開している。そこでは会話の含意が, 文脈情報 (対話者たちの計画に関する既に利用可能な情報も含む) と発話そのものの内容に対して, 計画推論規則を適用することによって生成されるとしている。そして, 他の文脈的伴立と同様に, 含意は調節されて共通基盤に入る。彼女のアプローチは, あまり体系的でないアプローチでは概して見落とされているいくつかの含意のタイプについて探究し, 会話の含意と他の類いの文脈的伴立との密接な関係を明らかにしている。Thomason や Welker の研究に鑑み, 筆者は, 談話の計画を探求方略の観点から特徴付け, 本稿では焦点がその動機となっている構造と同じ構造を会話の含意の生成において用いることができると推察する。(p. 61) Roberts (1996c) はこれがどのようになされるかについて, 最初の概略を示したものである。

プランニング理論 (Perrault 1990 とその中の参考文献を参照) の枠組みで研究する者たちの一部は, 談話における様々な種類の発話行為の特徴を説明したり動機付けたりする際に, プランニング理論が有用であることを認識している。その特徴とは, この理論を用いなければ単に規定されるのみであったり, 原始的であると主張されているものである。これらの理論では, Searle (1969) などが提唱するのは違い, 発話行為のタイプは発話の規約的内容の一部である必要はなく, 話し手がどの発話

³⁵ Thomason の学生である McCafferty (1987) は会話の含意に対して同様のアプローチを取っていると思うが, 筆者は彼の研究をじかには把握していない。

行為を意図したかに関する結論を導くのに計画推論の仕組みが用いられる。本稿の理論の観点では、これは発話行為の情報（それは脅しか、約束か、主張か、警告か？）が、部分的にはある発話とその発話が役割を担う探求方略との関係から、また部分的にはその探求方略とその探求方略が寄与する領域の計画との関係から推論可能であることを示唆する。

談話の一貫性と談話の分割、そして照応と推論における後者の役割については多くの研究があり、それらは本稿で展開してきた見方と関連し得ると考えられる。一つの例として、彼らが談話の意図構造と呼ぶものの談話分割同定のための使用に関する [Grosz & Sidner \(1986\)](#) の研究があるが、彼らの主張では、談話の分割はさらに談話における照応の可能性に関して制約をかける役割を担う。[Sperber & Wilson \(1986\)](#) は、グライスの会話の格率を合理的行動の原理と人間の認知的処理の限界についての事実から派生する伴立に還元しようと試みている³⁶。認知的処理に関する事実からは、**関連性**のような一貫性の制約が生じ（彼らはこれに上述の (15) とはかなり異なる定義を与えている）、合理的行動の原理からは、自分の目的を達成するための合理的方略の発達が生じる。彼らは、**関連性**が共通基盤にはあるものの、目下の問題には関係ないような情報へのアクセスを限定することによって、談話における推論のための領域を制限する役割をいかに担うかについて論じている。後者の関係性は特に有望で、我々が展開する方略が、共通基盤に基づき、我々がアクセス可能な情報から行う可能性のある推論の種類を制限することを示唆する。

もう一つ必要なのは、情報構造に基づいて、主題と主題化（統語的な前置）の理論を発展させることであろう。2.2.2 節での議論は情報構造の観点から対比的主題の機能にアプローチする方法を示唆しており、これは [Büring \(1999\)](#) のものと関連するアプローチである。しかし、主題は、たとえ主題化されたとしても、(p. 62) すべてが必ず対比的であるわけではない。例えば、[Jackendoff \(1972\)](#) の B アクセントを持たないこともある（主題化された構成素で対比的でないものの多くの例については [Ward \(1985\)](#) を参照）。さらに、大多数の研究者が定義する主題は必ずしもすべて前置されているわけではないため、主題であることの機能と主題化の機能には、恐らく関連してはいるであろうが、独立した説明を与えることが望ましいだろう。筆者が知る限りでは、主題であることに対して主題化に対しても一連の必要十分条件を提案した者はまだおらず、主題であることがどのような概念なのか、主題化の機能的役割はどのようなものか、両者の関係性はどのようなものかは完全には明らかでない。さらに悪いことには、**主題**あるいは [Vallduví \(1993\)](#) のリンクのような普遍的な機能があるのか、主題化／前置の統一的な語用論的機能があるのかということに関してさえも懐疑になる理由があると思われる。英語のような言語には、対比的主題を除いて、主題やリンクであることを一貫して規約的に示すものは存在しないのである。英語の前置には複数の機能があるという示唆については [Culicover & Rochemont 1983](#) を、「主題」の意味する所を定義する上での問題に関する議論については [McNally \(1998\)](#) を参照されたい。焦点前置も焦点の理論に含まれるが、もちろん、それだけでは焦点が前置されることを説明できないだろう。主題と主題化の理論の発展に対する本稿の理論の有用性に関して見込みがあることとして、[Ward \(1985\)](#) が主題化によって前提とされるとする際立ちのある半順序集合の文脈的な出所が説明できる可能性がある（ただし、彼はなぜ主題化がそのような半順

³⁶ [Sperber & Wilson](#) はグライスの格率すべてを**関連性**という単一の格率に還元することも試みている。しかし、筆者には彼らの議論のこの側面はそれほど成功しているとは思われない。

序集合を前提とするのかということや, 一般的な事例においてそれがどのように導入されるのかということとは説明していない³⁷. 事前調査によれば実際にそのようであるのだが, もし主題化された構成素が韻律的に焦点化されるならば, これらの半順序集合はそれら構成素の対応する代替要素の集合であり, それらの構文が起こる探求方略や何が**関連する**のかを決める共通基盤を調べることで, それらの半順序集合を引き出すことができると予期されよう.

近年, **Mann & Thompson (1987)** の研究に従い, 談話の構造化のために修辞関係を利用することに多くの関心が集まってきている. (どこにおいてかは定かでないが) アリストテレスは論理学が修辞の科学の基礎であると主張していたと思う. 一連の談話に対する修辞関係のタイプは方略のタイプとして特徴付けられ, これは, 修辞構造と本稿で立てた情報構造との関係を探る上で興味深い出発点となるだろう. (p. 63) 修辞関係は普通, 少なくとも, 疑問と答えの観点から特徴付けられる. 例えば, 「なぜ」の疑問文とそれに対する答えを用いて, 説明の修辞関係の特徴付けるなどである. しかし, これらの関係は普通, もう一つの点において, 目標あるいは議論下の疑問に寄与するのではないかと思われる. 談話の目標としては, より多くの情報を提示することはその一部に過ぎず, 加えて, 与えられた情報の価値について合意を形成することが別の一部としてある. そのため, 修辞構造には主として, 提示された情報に共通基盤に加えるだけの価値があるということを開き手に納得させることを意図するものがある. 例えば, その情報が他の既知の事実からどのように生じるかとか, その情報により他の既知の事実がどのように説明されるかとかということを示すことによってである. このようなことを研究するにより, 情報構造や, とりわけ議論下の疑問に対処するとはどういうことかという点について, 緻密な理解に繋がるだろう.

最後に, もしこれらすべての関係を築くことができるならば, このアプローチの利点の一つは, 百科事典的な意味ネットワークと, 事実対デフォルトの想定あるいは明示的に導入された情報対含意されるに過ぎない情報といった, ある種の二元的区分の他に, 談話における情報に対しては原始的な構造を一つ設けるだけでよいということである³⁸. このような望みが本論文の副題「語用論の統合形式理論をめざして」の基にはある. もし語用論的な説明が理論的に信頼のおけるものになるものなら, それは十分に明示的であるために修正・棄却が容易にでき, 守備範囲が十分に広いために様々な種類の語用論的とされる現象の間関係について何かしら述べられるような語用論の理論に基づいた形で述べられなければならない. 1 節の理論はそのような明示性を目指しており, 本節に手短かに記した事柄にはその潜在的な守備範囲の広さを示唆することが意図されている. 本稿の提案する焦点の分析への適用は, そのような理論が意味論の理論から, そして究極的には統語論の理論からもだろうが, いかにもその負荷のいくらかを取り除くことができることを意図しており, それは経験的により優れた説明を与える一方で, 全体としてより単純な解釈の理論に繋がる. 語用論的な説明

³⁷ **Ward 1985** におけるこの提案は, 尺度含意も際立ちのある半順序集合を必要とするという **Hirschberg 1985** における想定と密接に関連している. この要件は, **Rooth 1992a** が指摘する含意と韻律的焦点の関係の下では, 本稿のアプローチでも生じるはずである.

³⁸ **Louise McNally** (私信) は, **図と地の関係 (figure/ground relation)** とも呼ばれる類いの情報の関係は情報構造には含まれないだろうと指摘した. それは, フレーム副詞の使用, 等位接続する節と従属する節の区別などに時折反映されているような関係である. 筆者はこの関係も前提が関与するとみなせるのではないかと思うが, 関与する前提の種類が韻律的焦点に関わるものとは興味深い点で異なるのかもしれない.

を提示することを称するいかなる理論も、ある特定の言語的現象それのみに対処するための主張だけに基つかず、そのような包括的な要件を基準にして評価されるべきである。

(p. 64)

参考文献

- Baüerle, Rainer, Urs Egli & Arnim von Stechow (eds.). 1979. *Semantics from different points of view* (Springer Series in Language and Communication 6). Berlin, Germany: Springer-Verlag.
- Beckman, Mary E. & Gayle Ayers. 1997. Guidelines for ToBI labelling. version 3.0. http://www.ling.ohio-state.edu/~tobi/ame_tobi/labelling_guide_v3.pdf.
- Beckman, Mary E. & Janet B. Pierrehumbert. 1986. Intonational structure in Japanese and English. *Phonology Yearbook* 3. 255–309. <http://www.jstor.org/stable/4615401>.
- Bolinger, Dwight. 1961. Contrastive accent and contrastive stress. *Language* 37(1). 83–96. doi:10.2307/411252.
- Büring, Daniel. 1999. Topic. In Peter Bosch & Rob van der Sandt (eds.), *Focus: linguistic, cognitive, and computational perspectives* (Studies in Natural Language Processing), 142–165. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Calcagno, Mike. 1996. Presupposition, congruence, and adverbs of quantification. In Jae-Hak Yoon & Andreas Kathol (eds.), *Papers in semantics* (Working Papers in Linguistics 49), The Ohio State University. https://linguistics.osu.edu/files/linguistics/workingpapers/osu_wpl_49.pdf.
- Carlson, Lauri. 1982. *Dialogue games: an approach to discourse analysis* (Synthese Language Library 17). Dordrecht, The Netherlands: D. Reidel.
- Culicover, Peter W. & Michael Rochemont. 1983. Stress and focus in English. *Language* 59(1). 123–165. doi:10.2307/414063.
- von Fintel, Kai. 1994. *Restrictions on quantifier domains*. Amherst, MA: University of Massachusetts Amherst 博士論文. <http://www.semanticsarchive.net/Archive/jA3N2IwN/fintel-1994-thesis.pdf>.
- von Fintel, Kai. 2004. A minimal theory of adverbial quantification. In Hans Kamp & Barbara H. Partee (eds.), *Context-dependence in the analysis of linguistic meaning* (Current Research in the Semantics/Pragmatics Interface 11), 137–175. Amsterdam, The Netherlands: Elsevier.
- Ginzburg, Jonathan. 1994. An update semantics for dialogue. In *First International Workshop on Computational Semantics (IWCS 1)*, 111–120.
- Ginzburg, Jonathan. 1995a. Resolving questions, I. *Linguistics and Philosophy* 18(5). 459–527. doi:10.1007/bf00985365.
- Ginzburg, Jonathan. 1995b. Resolving questions, II. *Linguistics and Philosophy* 18(6). 567–609. doi:10.1007/bf00983299.
- (p. 65)
- Ginzburg, Jonathan. 1996. Dynamics and the semantics of dialogue. In Jerry Seligman & Dag Westerståhl (eds.), *Logic, language and computation, vol. 1*, (CSLI Lecture Notes 58), 221–237. Stanford, CA: Center for the Study of Language & Information CSLI, Stanford University.
- Grice, Herbert Paul. 1989. *Studies in the way of words*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Groenendijk, Jeroen & Martin Stokhof. 1984. *Studies on the semantics of questions and the pragmatics of answers*. Amsterdam, The Netherlands: Institute for Logic, Language & Computation (ILLC), University of Amsterdam 博士論文. <http://dare.uval.nl/record/123669>.
- Grosz, Barbara J. & Candace L. Sidner. 1986. Attention, intentions, and the structure of discourse. *Computational Linguistics* 12(3). 175–204. <http://www.aclweb.org/anthology-new/J/J86/J86-3001.pdf>.
- Halliday, Michael Alexander Kirkwood. 1967. Notes on transitivity and theme in English: part 2. *Journal of Linguistics* 3(2). 199–244. doi:10.1017/S0022226700016613.
- Hamblin, Charles Leonard. 1973. Questions in Montague English. *Foundations of Language: International Journal of Language and Philosophy* 10(1). 41–53. Partee (1976: 247–259) として再掲.
- Heim, Irene. 1982. *The semantics of definite and indefinite noun phrases*. Amherst, MA: University of Massachusetts Amherst 博士論文. <http://semanticsarchive.net/Archive/jA2YTJmN/>.

- Heim, Irene. 1983. On the projection problem for presuppositions. *Second West Coast Conference on Formal Linguistics (WCCFL 2)*. 114–125.
- Heim, Irene. 1992. Presupposition projection and the semantics of attitude verbs. *Journal of Semantics* 9(3). 183–221. doi:10.1093/jos/9.3.183.
- Higginbotham, James. 1996. The semantics of questions. In Sharon Lappin (ed.), *The handbook of contemporary semantic theory*, 361–383. Oxford, UK: Blackwell.
- Hintikka, Jaakko. 1972. *Logic, language-games and information: Kantian themes in the philosophy of logic*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Hintikka, Jaakko. 1981. On the logic of an interrogative model of scientific inquiry. *Synthese* 47(1). 69–83. doi:10.1007/bf01064266.
- Hintikka, Jaakko & Esa Saarinen. 1979. Information-seeking dialogues: some of their logical properties. *Studia Logica: An International Journal for Symbolic Logic* 38(4). 355–363. doi:10.1007/bf00370473.
(p. 66)
- Hirschberg, Julia. 1985. *A theory of scalar implicature*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania 博士論文. <http://repository.upenn.edu/dessertations/AAI8603648>.
- Horn, Laurence R. 1985. Metalinguistic negation and pragmatic ambiguity. *Language* 61(1). 121–174. doi:10.2307/413423.
- Horn, Laurence R. 1989. *A natural history of negation*. Stanford, CA: Center for the Study of Language & Information (CSLI), Stanford University.
- Jackendoff, Ray. 1972. *Semantic interpretation in generative grammar* (Current Studies in Linguistics 2). Cambridge, MA: The MIT Press.
- Jacobson, Pauline. 1995. On the quantificational force of English free relatives. In Emmon Bach, Eloise Jelinek, Angelika Kratzer & Barbara H. Partee (eds.), *Quantification in natural languages*, vol. 2 (Studies in Linguistics and Philosophy 54), 451–486. Dordrecht, The Netherlands: Kluwer Academic Publishers.
- Kadmon, Nirit. 2001. *Formal pragmatics: semantics, pragmatics, presupposition, and focus*. Oxford, UK: Blackwell.
- Kadmon, Nirit & Craig Roberts. 1986. Prosody and scope: the role of discourse structure. In Peter T. Farley, Ann M. Farley & Karl-Erik McCullough (eds.), *Chicago Linguistics Society (CLS) 22(2): papers from the parasession on pragmatics and grammatical theory*, 16–28. Chicago, IL: University of Chicago.
- Karttunen, Lauri. 1973. Presuppositions of compound sentences. *Linguistic Inquiry* 4(2). 169–193. <http://www.jstor.org/stable/4177763>.
- Karttunen, Lauri & Stanley Peters. 1979. Conventional implicature. In *Syntax and semantics Volume 11: Presupposition*, 1–56.
- Krifka, Manfred. 1992. A compositional semantics for multiple focus constructions. *Semantics and Linguistic Theory (SALT) I* (10), 127–158. <http://elanguage.net/journals/salt/article/view/1.127/1558>.
- Ladd, D. Robert, Jr. 1980. *The structure of intonational meaning: evidence from English*. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics* (Cambridge Textbooks in Linguistics). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Lewis, David. 1969. *Convention: a philosophical study*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Lewis, David. 1979. Scorekeeping in a language game. *Journal of Philosophical Logic* 8(1). 339–359. doi:10.1007/BF00258436. [Bäuerle et al. \(1979: 172–187\)](#) として再掲.
(p. 67)
- Liberman, Mark & Janet Pierrehumbert. 1984. Intonational invariance under changes in pitch range and length. In Mark Aronoff, Richard Oehrle, Frances Kelly & Bonnie Wilker Stephens (eds.), *Language sound structure*, 157–233. Cambridge, MA: The MIT Press.

- Mann, William C. & Sandra A. Thompson. 1987. *Rhetorical structure theory: a theory of text organization* (Information Science Institute Research Report 87–190). Marina del Rey, CA: Information Sciences Institute.
- McCafferty, Andrew S. 1987. *Reasoning about implicature: a plan-based approach*. Pittsburgh, PA: University of Pittsburgh 博士論文.
- McNally, Louise. 1998. On recent formal analyses of topic. In *The Tbilisi Symposium on Language, Logic, and Computation: Selected Papers* (14). 147–160. http://www.upf.edu/pdi/louise-mcnally/_pdf/publications/tbilisi.pdf.
- Partee, Barbara H. (ed.). 1976. *Montague Grammar*. New York, NY: Academic Press.
- Partee, Barbara H. 1991. Topic, focus, and quantification. *Semantics and Linguistic Theory (SALT) I* (10), 159–188. <http://elanguage.net/journals/index.php/salt/article/view/1.159/1557>.
- Perrault, Raymond C. 1990. An application of default logic to speech act theory. In Cohen R. Philip, Jerry Morgan & Martha E. Pollack (eds.), *Intentions in communication* (System Development Foundation Benchmark Series), 161–185. Cambridge, MA: A Bradford Book, The MIT Press.
- Pierrehumbert, Janet. 1980. *The phonology and phonetics of English intonation*. Cambridge, MA: Massachusetts Institute of Technology 博士論文. <http://dspace.mit.edu/handle/1721.1/16065>.
- Pierrehumbert, Janet & Julia Hirschberg. 1990. The meaning of intonational contours in the interpretation of discourse. In Cohen R. Philip, Jerry Morgan & Martha E. Pollack (eds.), *Intentions in communication* (System Development Foundation Benchmark Series), 271–311. Cambridge, MA: A Bradford Book, The MIT Press.
- Roberts, Craige. 1995. Domain restriction in dynamic semantics. In Emmon Bach, Eloise Jelinek, Angelika Kratzer & Barbara H. Partee (eds.), *Quantification in natural languages*, vol. 2 (Studies in Linguistics and Philosophy 54), 661–700. Dordrecht, The Netherlands: Kluwer Academic Publishers.
- Roberts, Craige. 1996a. Anaphora in intensional contexts. In Shalom Lappin (ed.), *Handbook of contemporary semantic theory*, 215–246. Oxford, UK: Blackwell.
- Roberts, Craige. 1996b. Information structure in discourse: towards an integrated formal theory of pragmatics. In Jae-Hak Yoon & Andreas Kathol (eds.), (p. 68) *Papers in semantics* (Working Papers in Linguistics 49). The Ohio State University. http://linguistics.osu.edu/files/linguistics/workingpapers/osu_wpl_49.pdf.
- Roberts, Craige. 1996c. Information structure, plans, and implicature. Paper presented at the Association for the Advancement of Artificial Intelligence (AAAI) Spring Symposium on Computational Implicature: Computational Approaches to Interpreting and Generating Conversational Implicature. Stanford, CA: Stanford University.
- Roberts, Craige. 準備中. The information structure of discourse. The Ohio State University. *
- Rochemont, Michael S. & Peter W. Culicover. 1990. *English focus constructions and the theory of grammar* (Cambridge Studies in Linguistics 52). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Rooth, Mats. 1985. *Association with focus*. Amherst, MA: University of Massachusetts Amherst 博士論文. <http://scholarworks.umass.edu/dissertations/AAI8509599>.
- Rooth, Mats. 1992a. A theory of focus interpretation. *Natural Language Semantics* 1(1). 75–116. doi:10.1007/bf02342617.
- Rooth, Mats. 1992b. Ellipsis redundancy and reduction redundancy. *Stuttgart Ellipsis Workshop* (Arbeitspapiere 29).
- Rooth, Mats. 1996. Focus. In Shalom Lappin (ed.), *The handbook of contemporary semantic theory*, 271–297. Oxford, UK: Blackwell.
- Schwarzschild, Roger. 1994a. Association with focus: semantics or pragmatics. The Hebrew University of Jerusalem. 草稿.
- Schwarzschild, Roger. 1994b. The contrastiveness of associated foci. The Hebrew University of Jerusalem. 草稿.

* 訳注：この文献がその後出版されたのかは不明。

- John, Searle R. 1969. *Speech acts: an essay in the philosophy of language*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Selkirk, Elisabeth O. 1984. *Phonology and syntax: the relation between sound and structure* (Current Studies in Linguistics 10). Cambridge, MA: The MIT Press.
- Sperber, Dan & Deirdre Wilson. 1986. *Relevance: communication and cognition* (The Language and Thought Series). Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Stalnaker, Robert. 1978. Assertion. In Peter Cole (ed.), *Pragmatics* (Syntax and Semantics 9), 315–332. New York, NY: Academic Press.
- von Stechow, Arnim. 1991. Focusing and backgrounding operators. In Werner Abraham (ed.), *Discourse particles: descriptive and theoretical investigations* (p. 69) on the logical and pragmatic properties of discourse particles in German (Pragmatics & Beyond: New Series 12), 37–84. Amsterdam, The Netherlands: John Benjamins Publishing Company.
- Thomason, Richmond H. 1990. Accommodation, meaning, and implicature: interdisciplinary foundations for pragmatics. In Philip R. Cohen, Jerry Morgan & Martha E. Pollack (eds.), *Intentions in communication* (System Development Foundation Benchmark Series), 325–363. Cambridge, MA: A Bradford Book, The MIT Press.
- Vallduví, Enric. 1990. *The informational component*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania 博士論文.
- Vallduví, Enric. 1993. Information packaging: A survey. Prepared for the *Word Order, Prosody, and Information Structure (WOPIS)* initiative. http://groups.inf.ed.ac.uk/hcrc_publications/.
- Vallduví, Enric & Ron Zacharski. 1994. Accenting phenomena, association with focus, and the recursiveness of focus-ground. In *Ninth Amsterdam Colloquium*, 683–702.
- Walker, Marilyn A. 1993. *Informational redundancy and resource bounds in dialogue*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania 博士論文.
- Ward, Gregory. 1985. *The semantics and pragmatics of preposing*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania 博士論文. <http://repository.upenn.edu/dissertations/AAI8523465>.
- Welker, Katherine. 1994. *Plans in the common ground: toward a generative account of conversational implicature*. Columbus, OH: Ohio State University 博士論文. <http://linguistics.osu.edu/research/publications/dissertations/welker1994>.
- Wittgenstein, Ludwig. 1953. *Philosophical investigations*. New York, NY: Macmillan.

執筆者連絡先 : okubo.wataru.m0@tufs.ac.jp, nomoto@tufs.ac.jp

原稿受理日 : 2020 年 12 月 25 日

<特集補遺：まえがき>

特集補遺：まえがき

Special Issue: Foreword

風間 伸次郎
Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

1. これまでの経緯と今回(25号)での方針について

2009年に『語学研究所論集』(以下『語研論集』)の「特集」が開始され、一昨年度刊行の23号まで、10のテーマに関する特集が行われてきた。その内容を振り返ると、14号：受動表現、15号：アスペクト、16号：モダリティ、17号：ヴォイスとその周辺、18号：所有・存在表現、19号：他動性、20号：連用修飾的複文、21号：情報構造と名詞述語文、22号：情報標示の諸要素、23号：否定、形容詞と連体修飾複文、となっている。まだとりあげていない文法カテゴリーも多くあるが、性や数、名詞類別などの名詞の文法カテゴリーについては、これを持たない言語も多いので、通言語的なデータ収集には適していないと思われる。10年目(24号)と11年目(25号=今号)では、落穂拾いではないが、なるべくそれまで取り上げていなかったものを残さず取り上げることを目指した。すなわち今号でも引き続き、これまでの特集でデータの得られなかった言語の補遺を集め、データ全体を揃えることを目指すこととなった。

2. 今回の時点でのデータの収集状況について

幸い、申請した競争的経費も認められ、今回多くの補遺のデータを集めることができた。ここではまず本学にある28専攻語のうち、日本語を除く27専攻語について、今号ではどのような言語の補遺のデータがどこまで集まったのか、という点について整理してみよう。なお前号では27専攻語と書いたが、近年ウズベク語が加わり、外語大のいわゆる専攻語は現在28言語となっている。

フランス語、ポルトガル語、中国語、モンゴル語、マレーシア語、ラオ語、カンボジア語、ベトナム語、ビルマ語、ペルシア語、アラビア語、トルコ語、についてはすでに全データが揃っていた。今号ではさらに朝鮮語とウルドゥー語に最後の1回分が加わり、全回分のデータが揃った。英語についても今号で全回分のデータが得られた。したがって全回分のデータが揃っているのは合計15言語ということになる。

今号では上述の言語の他に、ドイツ語の1回分(残りは1回分)、ポーランド語の1回分(残りは4回分)、チェコ語の1回分(残りは4回分)、インドネシア語の3回分(残りは2回分)、タイ語の1回分(残りは4回分)、タガログ語の4回分(残りは6回分)が加わった。特にゼロだったタガログ語のデータが加わったことの意義は大きい。貴重なデータの収集に努力して下さった先生方、院生の方々、手配や依頼に奔走して下さった『語研論集』編集幹事の先生方、査読をしてくださった先生方、補佐の深尾さん、謝金の円滑な運用に配慮して下さった事務の方々などの御尽力なしには全く不可能であったことだろう。さまざまな方々の御協力に深く感謝申し上げたい。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

今回新しいデータは得られなかったが、イタリア語で残るのは15-18, 21の5つ、スペイン語は16, 22の2つ、ロシア語は17, 19, 21の3つ、ウズベク語は18, 20, 21, 23である。

一方、ベンガル語に関しては現時点ではなお1回分もデータがない。ヒンディー語も20に「ウルドゥー語・ヒンディー語」としてのデータがあるのみである。日本国内におけるこの地域の言語研究の発展、言語研究者の（育成による）増加を切に祈りたい。

3. 今回収集されたデータにおける意義

3.1. 英語のデータ：英語圏の言語の調査／類型論研究における意義

上記のように、今号では英語の全回分のデータが得られた。北米、アフリカ東部、オーストラリアなどには、十分に調査されていないたくさんの言語が存在する。英語のデータがあれば、今後上記をはじめとする地域の国々での少数言語の文法調査においてこれを「調査票」として使用することもできる。北米やオーストラリアの先住民の言語の大部分は消滅の危機に瀕しており、そのデータの収集は急務である。

3.2. ガイ語、ダグール語、フィジー語、パピアメント語のデータの意義と今後の課題

次に、本学の27専攻語以外の言語で今回データの得られた言語について簡単に触れておく。

まず特筆すべきはアフリカのコエ語族のガイ語に関して全回分のデータが揃ったことである。これは本学に中川裕先生という専門家がいらっしゃることによるもので、世界的にも貴重なデータといえるだろう。今後はさらにアフリカの3語族（アフロ・アジア語族（ここではアラビア語を除いて考えている）、ナイロ・サハラ語族、ニジェール・コンゴ語族）の言語のそれぞれから1言語ずつでもデータが集められないだろうかと考えている。

ダグール語はモンゴル語族の言語である。アルタイ諸言語のうちチュルク語族とツングース語族については、本学に専門とする研究者や院生がいるためにそれぞれに数言語に亘るデータがある。他方、モンゴル語族の言語のデータはもっぱらハルハ・モンゴル語のものばかりである（これはモンゴル諸語研究一般における課題であるとも言える）。河西回廊のいわゆるシロンゴル・モンゴル諸語に関するデータとなるときわめて乏しい。このような言語の語研「特集」アンケートによるデータの収集もアルタイ諸言語の全体像を明らかにしていくための重要な課題である。アルタイ諸言語は朝鮮語と共に日本語とよく似たタイプの言語であり、これらの言語の解明は日本語の類型的特性の解明につながっている。

フィジー語はオーストロネシア語族メラネシア語派の言語である。オーストロネシア語族は実に1,200ともいわれる言語からなる巨大語族である。オーストロネシア語族に関して今後、台湾先住民の言語、ポリネシア語派の言語、ミクロネシアの言語、ニューギニアおよびその近隣の言語の言語などについて対照できる言語データが収集されれば、現在すでにあるタガログ語、マレーシア語、インドネシア語のデータもさらに有用なものとなるだろう。

パピアメント語は、カリブ海のいわゆるABC諸島で話されるクリオール言語である。ピジン・クリオールの言語の研究は言語の起源や原初的形態の研究にとって極めて重要とされているが、その研究は遅れている。メジャーな言語に混じって今回初めてクリオール言語のデータが加わったことの意義はきわめて大きい。

個別言語の研究や教育、言語類型論の研究分野などにおいても今後上記の「特集」のデータをもとにさらに活発な議論が展開されることを望みたい。

4. 全体的な今後の課題

系統や地域に偏らないデータが類型論的な研究にとってきわめて重要であることはいうまでもない。したがってこの語研「特集」のデータには、（毎号書いているが）新大陸の言語やオーストラリア先住民の言語、

カフカースの言語などのデータが今なお皆無であり、これらの言語のデータの収集がもっとも重要な課題である。

日本国内にも中南米のインディオの言語の話者はある程度いらっしゃるに違いない。したがってぜひあと2回分のスペイン語のデータを揃え、ポルトガル語のデータとともに今後中南米の諸言語を調査するための貴重な調査票として有効に活用していくことが必要である。

27言語の10年分の特集であるので、本学の専攻語に限った限りでも、延べ270あることになるが、残っているのはそのうちの54であり、これは全体の20%に当たる。今回の補遺では22の新しいデータが得られたので、次の26号、もしくは遅くとも27号で270の全データが揃うことが期待される。

一方で、この『語研論集』の特集で収集されたデータを、言語と項目から自由に検索するシステムも作成中である。これは語研のHPに現在「語研論集データベース」として公開されている。ただし現在公開されているデータは、言語数に関してもテーマに関してもなお一部にとどまっている。グロスも不統一な状態である。全データ収集の後、その全データがこのデータベースに組み込まれる形となれば、文法の対照研究および類型的な研究にとって十全な貢献をなすものとなることだろう。

記述言語学や対照言語学、言語類型論の研究にとって有益なものとなるだろうという考えから、試行錯誤しつつ、このような「特集」データの収集を続けている。ただ我々が気付いていない問題点や、目指すべきより良い形、収集すべき別の重要なデータなどがあるという可能性は十分に考えられる。読者からの御教示、御批判御叱正等をいただければ幸いである。特にこの「特集」ならびに「語研論集データベース」の収集・作成・活用等に関して、建設的でより良い方策やアイデアをぜひお聞かせいただきたいと考えていることをお伝えして、筆を置くこととする。

<特集「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」>

英語：

特集補遺データ「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報構造の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」

English:

‘Passive expression’, ‘Aspect’, ‘Modality’, ‘Voice and related expressions’, ‘Expressions of possession and existence’, ‘Transitivity’, ‘Complex sentences of adverbial modification’, ‘Information structure and nominal predicate sentences’, ‘Markers of information structure’ and ‘Negation, adjectives, and complex sentences of adnominal modification’

風間 伸次郎

Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨：本稿は特集補遺「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」「所有・存在表現」「他動性」「連用修飾複文」「情報構造と名詞述語文」「情報表示の諸要素」「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第14-23号, 2009-2018, 東京外国語大学)に寄与するものである。

Abstract: This report contributes to the special cross-linguistic study on ‘Passive expression’, ‘Aspect’, ‘Modality’, ‘Voice and related expressions’, ‘Expressions of possession and existence’, ‘Transitivity’, ‘Complex sentences of adverbial modification’, ‘Information structure and nominal predicate sentences’, ‘Markers of information structure’ and ‘Negation, adjectives, and complex sentences of adnominal modification’ (*Journal of the Institute of Language Research* 14-23, 2009-2018, Tokyo University of Foreign Studies).

キーワード：受身、アスペクト、モダリティ、ヴォイス、所有、存在、他動性、複文、連用修飾複文、情報構造、名詞述語文、否定、形容詞、連体修飾複文

Keywords: passive, aspect, modality, voice, possession, existence, transitivity, complex sentence, adverbial modification, information structure, nominal predicate, negation, adjectives, adnominal modification

0. はじめに

本稿のデータは6-12歳の言語形成期をアメリカのカリフォルニア州ロサンゼルスで過ごされた英語と日本語のバイリンガルの方(1998年日本生まれ)に依頼し、日本語のアンケート例文から英語に訳していただいたものである。なお文によっては、このコンサルタントの内省について注記がある(風間によるものではない点に注意されたい)。 は日本語の表現に対応した訳が難しい場合に、その意図を伝えるもの、いわば意識の表現であることを示している。{ }は参考のために異なった語彙などを用いた別個の表現をあげたものである。なお査読の方からいただいたコメントを本稿に記したのは風間である。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

英語そのものについてデータが得られ、他言語との対照的観点ならびに言語類型論的な観点からの分析を行うことができるようになることが極めて重要であることは論を俟たないだろう。他方で、英語のデータを媒介言語として用い、これをアンケート例文として用いれば、ヨーロッパの諸言語、アフリカ東部の諸言語、オーストラリア先住民語やパプア諸語、北米先住民の言語などを調査する際にも大きな助けとなる。今後このアンケート例文を用いてこうした言語のデータが集まることを期待したい。

1. 「受動表現」(語研論集 第14号)

1-1 AはBに叩かれた。【直接受身】

Andy was hit by Bob.

1-2 AはBに足を踏まれた。【持ち主の受身、体の部分】

Andy's foot was stepped on by Bob.

Andy had his foot stepped on by Bob.

{Andy was hit by Bob in his arm.}

3つ目の文は、「AはBに腕を叩かれた。」の訳である。“hit 人 in the 身体部位”の構文は受身形にすることができるが、「足を踏む」を“step on 人 in the foot”とする表現は恐らくないと思われる。

1-3 AはBに財布を盗まれた。【持ち主の受身、持ち物】

Andy's wallet was stolen by Bob.

Andy had his wallet stolen by Bob.

1-4 昨日の夜、私は赤ん坊に泣かれた。それでちっとも眠れなかった。【自動詞からの間接受身】

[Last night, the baby cried. So, I couldn't sleep at all.]

?Last night, the baby cried on me. So, I couldn't sleep at all.

下の文は、内省では可能な表現だが、“cry on 人”が辞書などで見当たらないので Corpus of Contemporary American English (以下 COCA とする) で“cry on me”で調べたところ5例が見つかった。「泣く」は一般的に受身的に訳すことができないとされている。

1-5 新しいビルが(Aによって)建てられた。【モノ主語受身、一回的】

A new building was built (by Andy).

1-6 カナダではフランス語が話されている。【モノ主語受身、恒常的。動作主が問題にならない場合】

French is being spoken in Canada.

1-7 財布が(Aに)盗まれた。【モノ主語受身、モノ主語の背後に被影響者が想定される】

The wallet was stolen by Andy.

1-8 壁に絵が掛けられている。【モノ主語受身、結果状態の叙述】

?A picture is (being) hung on the wall.

この文は不自然に感じられる。

[A picture is on the wall.]

[There is a picture on the wall.]

1-9 AはBに／から愛されている。【感情述語の受身、特に動作主のマーカーに注目】

Andy is loved by Bob.

1-10 AはBに／から「...」と言われた。【伝達動詞の受身、特に動作主のマーカーに注目】

[Bob said "...” to Andy.]

発言の内容如何に関わらず伝達動詞においては用いることのできる受身表現はないと思われる。なお査読者の方からは、動詞が‘tell’の場合には受身文も可能ではないか (I was told “No” by John. や It was told to me by John. のような例において)、という意見をいただいた。

?Andy was said no to by Bob.

発言の内容が no (禁止) ならば、クオテーションマークを用いずに例外的な受身表現を用いることができるように感じられる。COCAに “I was said no to” で例が1つ見いだされる。内省でも可能である。

1-10-a AさんはBさんに呼ばれて、今Bさんの部屋に行っています。

Andy was called by Bob, and is in Bob’s room now.

1-10-b BさんがAさんを読んで、Aさんは今Bさんの部屋に行っています。

Bob called Andy, and Andy is in Bob’s room now.

2. 「アスペクト」(語研論集 第15号)

2-1 ~さん(固有名詞)は／あの人はもう来た。

Andy already came.

2-2 ~さん(固有名詞)は／あの人はもう来ている。

Andy has already come.

2-3 ~さん(固有名詞)は／あの人はまだ来ていない。

Andy hasn’t come yet.

2-4 ~さん(固有名詞)は／あの人はまだ来ない。

2-3と同じ

2-5 ~さん(固有名詞)は／あの人はもう(すぐ)来る。

Andy will come soon.

2-6 (あ!) ~さんが来た! [その人が来るのに気づいた場面での発話]

(Oh!) Andy has come!

文法的には不自然ではないが、表現としては硬く、あまり用いない。来ることを予想していた場合と

予想していなかった場合の双方について使用可能である。

(Oh!) Andy is here!

同じく予想していた場合と予想していなかった場合の双方について使用可能である。

2-7 昨日～さんが来たよ。

Andy came yesterday.

2-8 昨日～さんは来なかったよ。

Andy didn't come yesterday.

2-9 (私は) あのリンゴをもう食べた。

I already ate that apple.

2-10 私はあのリンゴをまだ食べていない。／私はあのリンゴをまだ食べない。

I haven't eaten that apple yet. / I won't eat that apple.

スラッシュの前は「私はあのリンゴをまだ食べていない。」の訳であり、スラッシュの後ろは「私はあのリンゴをまだ食べない。」の訳である。

2-11 あの人は今 (ちょうど) そのリンゴを食べています／食べているところです。

He's eating that apple just now.

2-12 窓が開いている／窓が開いていた。

[The window is open. / The window was open.]

この“be + open(adj.)”を用いるのがふつうである。

The window is opened. / The window was opened.

これは“be + 過去分詞”の形で、最も日本語の「開いている」に近い表現ではあるが、少し硬い感じがする。

The window has been opened. / The window had been opened.

過去形の方は、回想で「そのとき窓が開けられた。」の意味にとることができるので、“The window had been open.”の方が好まれる。

The window is left open. / The window was left open.

行為者の存在を含意する。ただし、「開かれた痕跡はあるが、今は閉じられている」とも取れるため、「開けてある」という意味は確定できない。

The window has been left open. / The window had been left open.

やはり行為者の存在を含意する。過去形の方は、回想で「そのとき窓は開け放ったままであった。」という意味にとることができるので、後の“The window had been left open.”の方が好まれる。

{The window is opening. / The window was opening.}

「窓がひとりでに開く動作の途中にある。」の意。英語の open は進行形を用いると動作の途中であることを示す。

2-13 私は毎朝新聞を読む／読んでいる。

I read the newspaper every morning.

read は現在形の/i:ɪd/である。

[?I'm reading the newspaper every morning now.]

「私は今は毎朝新聞を読むようになっていて」の訳である。習慣のアスペクトでも、以前と比較して新たな習慣がついていて、それを継続している、という状況では進行形を用いることができるように思われる。

2-14 あなたは（あなたの）お母さんに似ている。

You look like your mother.

You resemble your mother.

現在形を用いる。

2-15 私はその頃毎日学校に通っていた。

I used to go to school every day (back then).

I went to school every day back then.

「その頃」のような、過去と現在を対比する副詞があった場合には単純な過去形でもよい。

2-16 私は～に（大きな街の名前など）行ったことがある。

I have been to New York.

進行形は用いない。

2-17 やっとバスは走り出した／走り始めた。[開始]

Finally, the bus began moving.

Finally, the bus began to move.

2-18 昨日彼女はずっと寝ていた。[長時間継続]

She slept all day yesterday.

[She was asleep all day yesterday.]

She was sleeping (all day) yesterday.

過去進行形を用いれば、「ずっと」を意味する副詞がなくても可能。ただし、副詞を用いたほうが確実に文意を表現できる。

2-19 私はそれをちょっと食べてみた。[試行]

I tried eating it a bit.

2-20 あの人はそれ（ら）をみんなに分け与えた。[多くの（間接）目的語に対する多回のアスペクト]
He gave them to everyone.

2-21 さあ、（私たちは）行くよ！
Let's go!

2-22 地球は太陽の周りを回っている。[恒常的な真理]
The earth goes around the sun.

2-23 あの木は今にも倒れそうだ。[将然相]
That tree is about to topple.

2-24 （私は）あやうく転ぶところだった。[未実現の事態]
I was almost about to trip.

2-25 明日客が来るので、パンを買っておく。[準備]
[We will have guests tomorrow, so I will buy some bread.]
「～ておく」に該当する表現は特に見当たらない。

{Did you (remember to) buy some bread?}

「パンを買っておいた？」の訳。過去形にしても「～ておく」に該当する表現は見当たらない。「パンを買うのを忘れなかった？」などの表現で代替するのではないだろうか。

2-26 （私は）～に（街とか市場とか）行ったとき、この袋を買った。
I (had) bought this bag when I went to Tokyo.

had を用いることで「買ったのだった」のような、買った経験そのものを重視するニュアンスが伝わる。2-27, 2-28 についても同様。

2-27 （私は）～に（街とか市場とか）行く時／行く前に、この袋を買った。
I (had) bought this bag when going to Tokyo.

I (had) bought this bag upon going to Tokyo.

「行く際」という時点を明確にする表現である。

/ I (had) bought this bag before going to Tokyo.

「行く前に」という時点を明確にする表現である。

2-28 （私は）彼が市場でこの袋を買ったのを知っていた。
I knew he (had) bought this bag in this market.

3. 「モダリティ」(語研論集 第16号)

3-1 (その仕事が終わったら) もう帰ってもいいですよ。【許可】

You may go home (when you are done with that work).

You can go home (when you are done with that work).

3-2 (腐っているから、あなたは) それを食べてはいけない／それを食べるな。【禁止】

You may not eat that.

許可を与えない、という言い方である。

You must not eat that.

強制力の強い言い方である。

Do not eat that.

You can not eat that.

フランクな言い方である。

3-3 (遅くなったので) 私たちはもう帰らなければならない。【義務】

We must go home now.

We have to go home now.

3-4 (雨が降るそうだから) 傘を持って出かけたほうがいいよ。【推奨】

You should take an umbrella.

You better take an umbrella.

3-5 歳をとったら、子供の言うことを聞くべきだ／聞くものだ。【評価的義務】

You (People) should listen to your(their) children when you(they) get old.

3-4 での意味とあまり違いが感じられなかった。英語では一般論の主語も you を用いるのでほとんど同じ形になってしまう。

3-6 お腹が空いたので、(私は) 何か食べたい。【希望】

I'm hungry, so I want to eat something.

3-7 私が持ちましょう。【意志】

I will take that.

3-8 じゃあ、一緒に昼ご飯を食べましょう。【勧誘】

Let's eat lunch together.

3-9 一緒に昼ご飯を食べませんか？【相手の意向が不明な場合の勧誘】

Shall we eat lunch together?

Do you want to eat lunch together?

3-10 明日、良い天気になるといいなあ。／明日は良い天気になってほしいなあ。【希望】

I wish it would be sunny tomorrow.

3-11 (私はここで待っているから) すぐにそれを持って来なさい。【命令】

(I will wait here.) Bring it here immediately.

3-12 そのペンをちょっと貸していただけませんか? 【懇願】

Could(Would/Can/Will) you lend me that pen?

用いる助動詞によって丁寧さや、「貸すことができる」と「貸す気持ちがある」のような意味の対立が生まれる。

3-13 あの人は中国語が読めます。／あの人は中国語を読むことができます。【能力可能】

He can read Chinese.

3-14 明かりが暗くて、ここに何が書いてあるのか、読めない。【状況可能】

I can't read what is written here because the light is so weak.

3-15 (朝早く出発したから) 彼らはもう着いているはずだ／もう着いたに違いない。【確信】

They should have arrived by now.

They must have arrived by now.

They probably have arrived by now.

助動詞ではなく副詞を用いた場合の表現である。

3-16 (あの人は) 明日はたぶん来ないだろう。【推量】

He probably will not come tomorrow.

副詞を使って推量を表す表現である。

{He would come tomorrow.}

「彼は明日来るだろう。」に対する、より直訳に近い文である。

??He would not come tomorrow.

上の文を否定形にすると非常に不自然に感じる。“would not”の「来る意志がなかった」という意味が強く感じられ、未来の推量とはミスマッチになるように思われる。

3-17 彼らはまだ来ないなんて、きっと途中で車が壊れたんじゃないか。【疑念】

They haven't come yet, their car must have broken down.

査読の方からは、They haven't come yet, so their car ... のように何か接続詞的なものが必要ではないか、というコメントをいただいた。

3-18 (昼間だからあの人は家に) さあ、いるかもしれないし、いないかもしれない。【可能性】

I don't know... He may be there, but he may not be there.

- 3-19 (額に触ってみて) どうもあなたは熱があるようだ。【視覚／聴覚以外の感覚による判断】

It seems you have fever.

- 3-20 (天気予報によれば) 明日は雨が降るそうだ。【伝聞】

It's going to rain tomorrow.

単純な未来形を用いてしまう場合が多い。

I heard it's going to rain tomorrow.

伝聞の意味を正確に伝えるなら「～と聞いた」と表現するほかはないように思われる。

- 3-21 もしお金があつたら、あの車を買うんだけどなあ。【反実仮想】

If I had money, I would buy that car.

- 3-22 もしあなたが教えてくれていなかったら、私はそこにたどり着けなかったでしょう。【反実仮想過去】

If you hadn't told me, I wouldn't have gotten there.

- 3-23 (あの人は) 街へ行きたがっている。【3人称の主体による希望】

He's wanting to go to the city.

話し手による観測であることを強調した場合に使う表現である。

He wants to go to the city.

日本語とは異なり、3人称を主語とした文でもそのまま want を使うことができる。

- 3-24 僕にもそれを少し飲ませろ。【1人称命令】

Let me drink that a bit.

- 3-25 これはあの人に持って行かせろ／持って行かせよう。【3人称命令】

Have him bring that. / Let's have him bring that.

Make him bring that. / Let's make him bring that.

- 3-26 そのテーブルの上のお菓子は後で食べなさい。【遠未来命令形】

Eat the snack on the table afterwards.

副詞を用いる以外には普通の命令形と特に変わりはない。

- 3-27 もっと早く来ればよかった。【反実仮想】

If only I had come earlier...

- 3-28 あなたも一緒に行ったら (どうですか) ? 【脱従属化】

What if you go together?

Why don't you go together?

3-29 オレがそんなこと知るか！【(疑問詞を含まない) 反語】

How would I know (about that)!

3-30 これを作った(料理した)のは、お母さんだよね? / いいえ、私が作ったのよ。【付加疑問】

Your mother made this, didn't she? / No, I made it.

It's your mother who made this, isn't it? / No, it's me.

4. 「ヴォイス」(語研論集 第17号)

4-1-a (風などで) ドアが開いた。【自動詞と他動詞の対立・自動詞による表現】

The door opened.

4-1-b (彼が) ドアを開けた。【自動詞と他動詞の対立・他動詞による表現】

He opened the door.

4-1-c (入り口の) ドアが開けられた。【自動詞と他動詞の対立・他動詞の受け身】

The door was opened.

4-1-d ドアが壊れた。【自動詞と他動詞の対立】

The door broke.

4-2 私は(自分の) 弟を立たせた。【自動詞の使役】

I made my brother stand up.

I had my brother stand up.

4-3 私は(自分の) 弟に歌を歌わせた。【他動詞の使役】

I made my brother sing a song.

I had my brother sing a song.

4-4-a (遊びたがっている子供に無理やり) 母は子供をパンを買いに行かせた。【強制使役】

The mother made her child go buy some bread.

4-4-b (遊びに行きたがっているのを見て) 母は子供に遊びに行かせた。【許可使役】

The mother let her child go play.

4-5-a 私は弟に服を着せた。【他動詞による表現】

I dressed my brother.

「(直接目的語) に服を着せる」という動詞である dress を用いた表現である。「(間接目的語) に(直接目的語: 服) を着せる」という表現で、直接手を下して服を着せる意味を含意したものには思い当たらなかった。

4-5-b 私は弟にその服を着させた。 【自動詞の使役】

I made my brother wear the clothes.

完全には間接的な行為であることを排他的に含意できないが、特に詳しい説明がなければ間接的であると判断される。

4-6 私は弟にその本をあげた。 【やりもらい、(話者から見ての) 授恩恵と受恩恵の違い】

I gave my brother the book.

4-7-a 私は弟に本を読んであげた。 【やりもらい、(話者から見ての) 授恩恵と受恩恵の違い】

I read my brother a book.

恩恵の授受に対する特別な表現は見当たらない。

4-7-b 兄は私に本を読んでくれた。 【やりもらい、(話者から見ての) 授恩恵と受恩恵の違い】

My brother gave me a book.

やはり恩恵の授受に対する特別な表現は見当たらない。

4-7-c 私は母に髪を切ってもらった。 【テモラウ】

I had my mother cut my hair.

4-8-a 私は(自分の)体を洗った。 【再帰】

I washed my body.

少し不自然である。体全体を洗うことを wash では表現しづらいように感じられる。

I bathed.

「風呂に入る」「シャワーを浴びる」「水浴びをする」をすべて bathe で表現できるため、wash ではなくこちらで表現した方がよいと考えられる。

4-8-b 私は手を洗った。 【再帰】

I washed my hands.

4-8-c 彼は手を洗った。 【再帰】

He washed his (own) hands.

自らの手ではない解釈が可能になってしまう場合 own を用いる。

4-9 (自分のために) 私はその本を買った。 【自利態】

I bought myself the book.

I bought me the book.

上の文よりも若干非規範的な感じがする。COCA では “I bought myself” は 20 例であるのに対し、“I bought me” は 5 例と少ない。

4-10 彼らは(／その人たちは)(互いに)殴り合っていた。 【相互】

They were hitting each other.

4-11 その人たちは（みんな一緒に）街へ行った。 【衆動】

They (all) went to the city together.

4-12 その映画は泣ける（その映画を見ると泣いてしまう）。 【自発】

The movie makes you cry.

使役を用いる。

4-13-a 私は卵を割った。 【意志／無意志】

I cracked the egg open.

4-13-b （うっかり落として）私はコップを割った／割ってしまった。 【意志／無意志】

[I broke the glass.]

他方、下記の文は「私はコップを（故意に）割った。」の訳である。

I (accidentally) broke the glass.

4-14-a きょう私はコーヒーを飲みすぎて（飲みすぎたので）眠れなかった。 【随意の不可能と不随意の不可能】

Yesterday, I drank too much coffee and couldn't sleep.

4-14-b きょう私は仕事がたくさんあって（たくさんあったので）眠れなかった。 【随意の不可能と不随意の不可能】

Yesterday, I had too much work and couldn't sleep.

4-15 私は頭が痛い。 【全体と部分・主体・一時的】

I have a headache.

My head hurts.

直訳すると「私の頭が痛む。」のような表現である。

4-16 彼女は髪が長い。 【全体と部分・主体・恒常的】

She has long hair.

Her hair is long.

4-17-a 彼は（別の）彼の肩をたたいた。 【全体と部分・対象・接触／結果状態が継続的】

He tapped his shoulder.

「自分の肩を叩いた。」と確実に区別したい場合には、“He tapped Andy's shoulder.” とすればよい。

4-17-b 彼は（別の）彼の腕をつかんだ。 【全体と部分・対象・接触／結果状態が継続的】

He grabbed his arm.

査読の方からは、He grabbed him on the arm. も一般的ではないかというコメントをいただいた。

4-18-a 私は彼がやって来るのを見た。 【知覚構文】

I saw him come.

4-18-b 私は彼が今日来ることを知っている。 【知覚構文】

I know he will come today.

4-19 彼は自分（のほう）が勝つと思った。 【引用文中の再帰】

He thought he (himself) would win.

「彼は（別の）彼が勝つと思った。」との混同の可能性がある場合には、himself を付加する。

4-20-a 私は（コップの）水（の一部）を飲んだ。 【部分的に及ぶ動作と全体に及ぶ動作】

I drank some of the water in the glass.

“I drank the water in the glass.” では部分とも全体とも断定できない。

4-20-b 私は（コップの）水を全部飲んだ。 【部分的に及ぶ動作と全体に及ぶ動作】

I drank all of the water in the glass.

やはり “I drank the water in the glass.” では部分とも全体とも断定できない。

4-21 彼は肉を食べない。 【恒常的な否定文】

He doesn't eat meat.

He won't eat meat.

「彼は今日は肉を食べない。」の意味を排除できないが、恒常的な否定を意味することもある。

4-22-a 今日は寒い。 【感覚述語・非人称文／感覚主体の存在が感じられない、より客観的な表現】

It's cold today.

4-22-b 私は（何だか）寒い（私には寒く感じる）。 【感覚述語・非人称文／斜格主語】

I feel cold.

4-23 人がとても多かったことに私は驚いた。 【（感情主体が受動的である）感情述語】

I was surprised that there were many people.

4-24 雨が降り始めた。 【現象文・現場での直接体験】

It started to rain.

It started raining.

Rain started to fall.

最も文法的に近いのはこの表現だが、「雨が降る」の場合には主語を it とする場合の方が一般的である。

4-25 この本はよく売れる。 【中間構文】

This book sells well.

5. 「所有・存在表現」(語研論集 第18号)

5-1 あの人は青い目をしている。／青い目の人・目が青い人 【一体的(譲渡不可能的)な、恒常的な所有(1)】

She has blue eyes.

Her eyes are blue.

She is blue-eyed.

/ a blue-eyed person

a person with blue eyes

5-2 あの女 {は／の} 髪が長い・あの女は長い髪をしている／長い髪の女・髪の長い女 【一体的な、恒常的な所有(2)】

She has long hair.

Her hair is long.

/ a woman with long hair

5-3 あの人には髭がある。／髭の男 【非普通所有物】

He has a beard. / a man with a beard

5-4 あの人には(見る)目がある。／見る目のある人 【慣用句的表現】

(該当表現ナシ)

5-5 あの子は22歳だ。／22歳の人 【側面語のある表現(1)】

He is 22 years old. / a 22-year-old person

“a 5 year-old”のように、子供であれば child などなしで「五歳児」を表現できる。

5-6 あの子は優しい性格だ。／優しい性格の人 【側面語のある表現(2)】

He is kind.

He is kind-hearted.

?He has a kind heart.

この文は完全に非文であるとは言い切れない。

/ a kind person

a kind-hearted person

5-7 あの子は背が高い。／背の高い人 【側面語のある表現(3)】

He is tall. / a tall person

5-8 あの子は背が190センチもある。【側面語のある表現(4)、属性数量詞構文】

He is 190cm tall.

5-9 その石は四角い形をしている。／四角い（形の）石【側面語のある表現(5)】

The stone is square. / a square stone

?The stone has a square shape.

この文も完全に非文であるとは言い切れない。

5-10 あの人には才能がある。／才能のある人【属性】

He has talent. / a man with talent

5-11 あの人には病気が。／あの人には熱がある。／病気の人【一時的属性】

He is sick. / He has fever. / a sick person

5-12 あの人には青い服を着ている。／青い服の男【衣服等(1)】

He is wearing blue clothes.

/ a man with blue clothes

a man in blue

5-13 あの人にはメガネをかけている。／メガネの男【衣服等(2)】

He is wearing glasses. / a man with glasses

5-14 あの人には妻がいる。／既婚の人・妻のいる人【親族の所有(1)】

He has a wife.

He is married.

/ ?a man with a wife

不可能な構成ではないようだが、多くの場合 “a man with a wife and three children” “a man with a wife of 65 years” のように、妻も子供もいる場合や、妻について追記したいことがある場合に用いられているように感じる。

a married man

5-15 あの人には3人の子供がいる。／3人の子持ちの人・あの人の子供3人の子供／妊娠している女性【親族の所有(2)】

He has three children.

/ a man with three children

/ a pregnant woman

5-16 タコには足が8本ある。【普遍的な事実】

An octopus has eight legs.

Octopi(Octopuses) have eight legs.

5-17 その飲み物にはアルコールが入っている。／アルコール入りの飲み物【ともに無生物、含有物】

That drink has alcohol in it.

That drink contains alcohol.

/ a drink with alcohol in it.

液体の場合、中に混ざっていることを明示しなくてはならないように感じられる。

a drink containing alcohol

5-18 あの人はお金を持っている。／お金持ちの人【もっとも一般的な所有、やや恒常的】

That man has money.

額によらずお金を持っている、ととることもできるが、一般的にはわざわざ言及している時点で「お金持ちである」と解釈できるように感じる。

/ a man with money

“a rich man” とする方が一般的である。

5-19 おまえのところには犬がいるか？／犬のいる人【所有、やや恒常的、所有物は有生・家畜】

Do you have a dog?

/ a man with a dog

この表現だと、文脈によっては同じ場所に人と犬がいるだけで、所有関係は明示されない可能性がある。

a man who has a dog

5-20 おまえは（自分の）ペンを持っているか？／ペンを持っている人【一時的携帯物・自分のもの】

Do you have a pen?

Do you have your (own) pen?

自分のペンを持っているかを明確に問題にしたいときに用いる表現である。

/ a man with a pen

a man who has a pen

5-21 あの人は（誰か別の人の）ペンを持っている。【一時的携帯物・他人のもの】

He has somebody else's pen.

5-22 あの人は運がいい。／幸運な人【抽象的・一時的所有物】

He has good luck.

“He is lucky.” よりも has(現在形) を用いることによって恒常的に運がいいように感じられる。

/a man with good luck

“a lucky man” の方が冗長でなく、使いやすい

5-23 ここは石が多い。／石の多い土地【恒常的存在>状態／性質】

There are many rocks here.

?This land has many rocks.

非文ではないが、不自然である。

/ a land with many rocks

上の文よりは不自然でない。

// It rains much here.

不自然である。

/ a land with much rain

- 5-24 その部屋には椅子が3つある／3つ椅子のある部屋【非恒常的存在と数量】

There are three chairs in the room.

最も自然な表現である。

The room has three chairs (in it).

/ a room with three chairs (in it)

- 5-25 テーブルの上にスプーンがある。／スプーンのあるテーブル【存在・存在が新情報】

There is a spoon on the table. / the table with a spoon on it

- 5-26 そのスプーンはテーブルの上にある。／テーブルにあるスプーン【所在・場所が新情報】

The spoon is on the table. / the spoon on the table

- 5-27 そのペンは私のだ。・そのペンは太郎のだ。／私のペン・太郎のペン【所有物、属格のプロトタイプ】

That pen is mine(Taro's).

/ my(Taro's) pen

a pen of mine(Taro's)

- 5-28 昨日、学校で火事があった。／私は明日用事があります。【できごとの生起】

There was a fire at our school yesterday. / I have things to do tomorrow.

- 5-29 (この世には) お化けなんていない。【実在文】

Ghosts don't exist.

There are no ghosts.

上よりも実在の否定のニュアンスが薄れ、「ある特定の範囲には存在しない」と解釈されてしまう場合があるので、推奨できない表現である。

- 5-30 (そこには) 英語を話す人もいるが、話さない人もいる。【絶対存在文(1)】

Some speak English, but others do not.

- 5-31 私より英語ができる人は(ほかに／もっと) います。【絶対存在文(2)】

There are others who are better at speaking English than I am.

- 5-32 ちょっとあなたにお願いがあります。【抽象的なことの所有・発話内効力のある文】

There is something I want you to do.

- 5-33 冬の雨【時間】 東京の家【場所】

a winter rain / a house in Tokyo

- 5-34 彼の泳ぎ／犬の鳴き声／火山の爆発【Bが行為を示す名詞である場合の主体】
車の運転【同じく客体／対象】 ～の小説【Aの生産物であるB】

his swimming
/ a dog's bark
the bark of a dog
/ a volcanic eruption
an eruption of a volcano
/ driving a car
/ Andy's novel
a novel (written) by Andy

5-35 Xさん（固有名詞）のお母さん【親族】 机の横に／机の前に／*机に（来て！）【場所名詞】
あの人の次【時間的關係】

Andy's mother
the mother of Andy
/ Come to my desk!

命令文として自然な「*私の机に来て！」の訳である。

?Come beside my desk!

少し不自然。"Come to my desk!"で十分だからではないだろうか。

5-36 バラの花びら【種別】 果物のナイフ【用途】 紙の飛行機【材料・材質】
チューリップの絵【内容】 花の匂い【産出物】 英文の手紙【表現形式(?)】
日本語の先生【職種】 井戸の水【取得源】[「～の果物」のような産地でも良い]
雨の日【状況】

a rose petal
/ a fruit knife
/ a paper airplane
/ a picture of a rose
/ the scent of a flower
/ a letter in English
/ a Japanese teacher
?a teacher of Japanese
a teacher who teaches Japanese

1 番目は「日本人の先生」と誤解する可能性が生じる。実際は強勢が Japanese につけば「日本語の先生」、teacher につけば「日本人の先生」となり、区別できる。二番目は不自然。三番目は冗長だが、文でしか伝わらないときは混同を防ぐために使用されることもある。

/ water from the well

出所によっては“sea water”“tap water”などになることもある。

/ a rainy day

5-37 妹の花子／社長の田中さん 【同格】

my sister Hanako
my younger sister Hanako

my sister に形容詞がつく程度なら語順の交代やカンマは不要である。

{Hanako, my sister who lives in Tokyo}

my sister に関係節等がつく場合は Hanako を先にし、カンマを挟む必要が生じる。

/ Mr. Tanaka the president

Mr. Tanaka, the president (of our company)

カンマを挟んでもよい。the president に修飾節がつく場合はカンマが必須である。

5-38 となりの家の友達のお父さんの車のタイヤ（が昨日突然パンクしたんだって。） 【属格の連続使用】

The tire of the car my next-door friend's dad has

あらゆる文法的テクニックを用いて of や属格の連続使用を避けているが、なお不自然である。

my next-door friend's dad's car's tire

the tire of the car of the father of my friend that lives next door

上記の2つの句は、どちらもしつこく感じられる。

6. 「他動性」(語研論集 第19号)

6-1 【直接影響・変化】

6-1-a 彼はそのハエを殺した。

He killed the fly.

6-1-b 彼はその箱を壊した。

He destroyed the box.

6-1-c 彼はそのスープを温めた。

He warmed the soup.

この調査項目の主旨には関係ないが、動詞 warm は食品を温めるのに使うには不自然である。

6-1-d 彼はそのハエを殺したが、死ななかった。(言えるか? 言えないか?)

?He killed the fly, but it didn't die.

非常に特殊な状況(ハエが不死身であり、明らかに死んでいる状態から不可解に回復したなど)でしか使用できない。

6-2 【直接影響・無変化】

6-2-a 彼はそのボールを蹴った。

He kicked the ball.

6-2-b 彼女は彼の足を蹴った。

She kicked his leg.

6-2-c 彼はその人にぶつかった(故意に)。

He tackled him.

6-2-d 彼はその人とぶつかった（うっかり）。

He bumped into him.

6-2-c との違いは動詞の種類で表すしかないと思われる。

6-3 【知覚 2A vs. 2B】

6-3-a あそこに人が数人見える。

I see some people over there.

6-3-b 私はその家を見た。

I looked at the house.

{I saw the man.}

目的語を house とすると使いづらいが、自力で移動できるものが偶然視界に止まった場合に see を用いることができる。

6-3-c 誰かが叫んだのが聞こえた。

I heard somebody yell.

6-3-d 彼はその音を聞いた。

He heard that sound.

6-4 【(知覚 2A) 発見・獲得・生産など】

6-4-a 彼は（なくした）カギを見つけた。

He found the key (he (had) lost).

6-4-b 彼は椅子を作った。

He made a chair.

6-5 【追及】

6-5-a 彼はバスを待っている。

He is waiting for the bus.

6-5-b 私は彼が来るのを待っていた。

I was waiting for him to come.

6-5-c 彼は財布を探している。

He is looking for his wallet.

6-6 【知識 1】

6-6-a 彼はいろんなことをよく知っている。

He knows many things.

6-6-b 私はあの人を知っている。

I know that person.

6-6-c 彼はロシア語ができる。

He can speak Russian.

speak, write, read, understand など、より具体的な意味の動詞を用いるか、be good at Russian のように「上手である」と表現するほかにないように思われる。

6-7 【知識 2】

6-7-a あなたはきのう私が言ったことを覚えていますか？

Do you remember what I said yesterday?

6-7-b 私は彼の電話番号を忘れてしまった。

I forgot his phone number.

6-8 【感情 1】

6-8-a 母は子供たちを深く愛していた。

The mother loved her children very much.

6-8-b 私はバナナが好きだ。

I like bananas.

6-8-c 私はあの人を嫌いだ。

I hate that person.

6-9 【感情 2】

6-9-a 私は靴が欲しい。

I want a pair of shoes.

6-9-b 今、彼にはお金が要る。

He needs some money now.

6-10 【感情 3】

6-10-a (私の) 母は (私の) 弟がうそをついたのに怒っている。

My mother is angry that my brother told a lie.

My mother is angry at my brother for telling a lie.

My mother is angry with my brother for telling a lie.

6-10-b 彼は犬が怖い。

He is scared(afraid) of dogs.

6-11 【関係1】

6-11-a 彼は父親に似ている。

He resembles his father.

He is similar to his father.

He looks like his father.

3つ目の文は、見た目の上での類似性のみを意味する。

6-11-b 海水は塩分を含んでいる。

Sea water has salt in it.

Sea water contains salt.

6-12 【関係2】

6-12-a 私の弟は医者だ。

My brother is a doctor.

6-12-b 私の弟は医者になった。

My brother became a doctor.

6-13 【能力1】

6-13-a 彼は車の運転ができる。

He can drive (a car).

6-13-b 彼は泳げる。

He can swim.

6-14 【能力2】

6-14-a 彼は話をするのが上手だ。

He is good at giving a speech.

?He is good at speaking.

「話すこと」は基本的に人間に備わっている能力であると考えられ、「話すのが上手い」というのは不自然に感じられる。

6-14-b 彼は走るのが苦手だ。

He can not run fast.

?He is not good at running.

「早くは走れない」と表現するのが自然である。「走ること」も基本的に人間に備わっている能力であると考えられ、「走るのが上手ではない」というのは不自然に感じる。

6-15 【移動】

6-15-a 彼は学校に着いた。

He arrived at school.

6-15-b 彼は道を渡った／横切った。

He crossed the road.

6-15-c 彼はこの道を通った。

He took this road.

6-16 【感覚 1】

6-16-a 彼はお腹を空かしている。

He is hungry.

6-16-b 彼は喉が渇いている。

He is thirsty.

6-17 【感覚 2】 [完全な一項、もしくは 0 項の感覚述語である。]

6-17-a 私は寒い。

I'm cold.

6-17-b 今日は寒い。

It's cold today.

6-18 【(社会的) 相互行為 1】

6-18-a 私は彼を手伝った／助けた。

I helped him.

6-18-b 私は彼がそれを運ぶのを手伝った。

I helped him carry it.

6-19 【(社会的) 相互行為 2 (言語行動)】

6-19-a 私はその理由を彼に聞いた。

I asked him the reason.

6-19-b 私はそのことを彼に話した。

I spoke(talked) to him about it.

6-20 【再帰・相互】

6-20-a 私は彼と会った。

I met him.

7. 「連用修飾的複文」(語研論集 第20号)

7-1 彼はいつも新聞を読みながらご飯を食べる。【同時動作】

He always eats dinner while reading the newspaper.

{He always eats dinner while he reads the newspaper.}

同主語でなくても成立する。ただし動詞の形式が変化している。

7-2 (私は) 昨日は九時に家に帰って、少しテレビを見て (から)、寝ました。【継起的動作・物語的連鎖】

Yesterday I came home at nine, watched some TV, and went to bed.

7-6 のような表現と区別する必要がある場合、then をはさんで前後関係を明確にする。

7-3 (私は) 昨日階段で転んで、ケガをしてしまった。【継起：理由】

Yesterday, I fell on the stairs and got injured.

7-4 今日父は会社に行って、兄は大学に行った。【異主語】

Today my father went to work, and my brother went to college as always.

7-5 (あの人は) 今日は帽子をかぶって歩いていた。【付帯状況】

He was walking wearing a hat today.

?He was walking with a hat today.

「帽子とともに散歩をしていた」のように取れてしまい、少し不自然である。別の動詞と名詞を用いれば可能かもしれない。

{He was skiing with blue goggles today.}

上の文を異なる動詞と名詞で試してみた例である。上の文よりは意味がわかりやすくなっている。

7-6 (私は) 休みの日にはいつも本を読んだり、テレビを見たりしています。【並行動作】

I read books and watch TV on holidays.

7-2 や 7-3 とのニュアンスの違いは、必要ならばイントネーションや間のとり方によって区別するものと考えられる。

7-7 時間がないから、急いで行こう。【理由・カラ】

Since(Because) we don't have time, we must hurry.

We don't have time, so we must hurry.

カラとノデに対応する表現の差異は感じられなかった。7-8 も同じである。

7-8 昨日は頭が痛かったので、いつもより早く寝ました。【理由・ノデ】

Since(Because) I had a headache, I went to bed earlier than usual yesterday.

I had a headache, so I went to bed earlier than usual yesterday.

7-9 あの人は本を買いに行った。【趨向／移動の目的】

He went to buy a book.

{He will go buy a book.}

未来形、現在形、命令形などでは to を用いない。

7-10 (彼は) 外がよく見えるように窓を開けた。【目的・意図】

He opened the window so (that) he could see the scenery well.

7-11 ここでは夏になると、よく雨が降ります。【恒常的条件】

When it becomes summer, it often rains here.

7-12 窓を開けると、冷たい風が入って来た。【確定条件・生起】

When I opened the window, a cold wind blew in.

7-13 坂を上ると、海が見えた。【確定条件・発見】

When I got to the top of the hill, I saw the sea.

7-14 明日雨が降ったら、私はそこに行かない。【仮定条件】

If it rains tomorrow, I won't go there.

7-15 もっと早く起きればよかったなあ。【反実仮想】

If only I had woken up a little earlier...

7-16 あんなところへ行かなければよかった。【反実仮想・前件否定】

I shouldn't have gone to such a place.

7-17 1に1を足せば、2になる。【一般的真理】

If you add one and one, you get two.

条件形式も使用可能である。

7-18 駅に着いたら電話をしてください。【仮定条件＋働きかけのモダリティ】

Please make a call when you arrive at the station.

7-19 日曜日になったら、みんなで公園に行きたいなあ。【仮定条件＋願望】

I want to go to the park on Sunday.

「日曜日になる」の直訳がそもそもとても言いづらいように感じられる。

{I want to go to Japan when I get older.}

「大きくなったら」のような表現に変えることで when が使用可能になる。

7-20 明日雨が降ったら困るなあ。【心配】

It would be a bother if it would rain tomorrow.

7-21 家に来るなら、電話をしてから来てください。【時間的前後関係に則していないナラ条件文】

Call me first if you want to come.

if節は時間的前後関係の逆転を許さず、wantを挟んで前後関係を無理やり調整する必要があるように感じる。

Call me first if you are going to come.

未来形を用いることも可能である。

7-22 (もうすぐベルが鳴るので) 鳴ったら、教えてください。【予想を伴った条件文】

Tell me when the bell rings.

7-23 (もしかしたらベルが鳴るかもしれないので) もし鳴ったら、教えてください。【予想を伴わない条件文】

Tell me if the bell rings.

7-24 働かざるもの食うべからず。／働かない者は、食べるべきではない。【相関構文】

(One) Who does not work should not eat.

7-25 もう少しお金があったらなあ。【言いさし・願望】

If only I had more money...

7-26 これも食べたら? 【言いさし・提案】

How about eating this?

7-27 (やりたいなら自分の) 好きなようにやれば? 【言いさし・つき放し】

[Do as you like.]

文法的にはこれが一番近いが意味的にはあまりつき放したニュアンスが感じられない。なお 7-26 も 7-27 も英語では言いさし (insubordination) では表現されていない。

7-28 このコップは落としても割れない。【仮定的な逆接】

This glass does not break when dropped.

7-29 このリンゴは高かったのに、ちっとも甘くない。【アクチュアルな逆接】

Though it was expensive, this apple was not sweet at all.

7-30 彼の家に行ってみたけれども、彼はいなかった。【逆接3】

I went to his house, but he was not there.

7-31 あの人に来るまで、私はここで待っています。【時間的期限[1]】

I will wait here until he comes.

7-32 あの人に来るまでに、食事を作っておきますよ。【時間的期限[2]】

I will prepare a meal before he comes.

8. 「情報構造と名詞述語文」(語研論集 第21号)

8-1 えっ、A (固有名詞) が来たの? / いや、A じゃなくて B が来たんだ。【対比焦点 (主語)】 (例えば、昨日の集まりに珍しくやって来た人についての会話で)

Wait, Andy came? / No, not Andy, but Bob.

8-2 誰が来たの? / A が来たよ。【WH 焦点 (主語)・WH 応答焦点 (主語)】

Who came? / Andy (did).

8-3 A のほうが大きいんじゃないの? / いや、A じゃなくて、B のほうが大きいんだよ。【YesNo 疑問・形容詞述語応答焦点】

Isn't Andy taller? / No, not Andy, but Bob.

8-4 (電話で) どうしたの? / うん、今、お客さんが来たんだ。【文焦点 (自動詞文)】

What happened? / Uh, somebody's here.

8-5 あの子供が A を叩いたんだって! / いや、A じゃなくて、B を叩いたんだよ。【対比焦点 (目的語)】

That child hit Andy! / No, not Andy, but Bob.

8-6 赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買うの? / (私は) 青い袋を買うよ。【対比焦点 (目的語、特に「どっち」という対比的な疑問語の場合)】

There is a red bag and a blue bag, which will you buy? / I'll buy the blue one.

8-7 A はどこですか? / A は朝からどっかへでかけたよ。【述語焦点】 (例えば、朝少し遅く起きて来た A の父親が、姿の見えない A について母親に尋ねている場面で)

Where is Andy? / Andy went somewhere in the morning.

8-8 (あの子供は) 誰を叩いたの? / (あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。【WH 焦点 (目的語)・WH 応答焦点 (目的語)】

Who did he hit? / He hit his brother.

8-9 (電話で) どうしたの? / うん、A が (自分の) 弟を叩いたんだ。【文焦点 (他動詞文)】 (例えば、電話の向こうで子供の泣き声がかきたのを聞いての発話)

What happened? / Uh, Andy hit his brother.

8-10 あのケーキ、どうした? / (ああ、あれは) A が食べちゃったよ。【目的語主題化、主題 (目的語) の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

What happened to the cake? / Andy ate it.

8-11 私が昨日お店から買ってきたのはこの本だ。【分裂文】

It's this book that I bought from the store yesterday.

8-12 あの人は先生だ。この学校でもう 20 年働いている。【措定文 主題（名詞述語文の主語）の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

That man is a teacher. He has been working in this school for 20 years now.

口語では、“been working here for 20 years now.” のように表現することも可能である。ただし社会的威信のある話し方ではない。

8-13 彼のお父さんは、あの人だ。【倒置同定文】

His father is that man.

8-14 あの人が彼のお父さんだ。【同定文】

That man is his father.

8-15 あさってってというのはね、明日の次の日のことだよ。【定義文】

“Asatte” is the day after tomorrow.

8-16 （何人かが入った喫茶店で注文を聞かれて）私はコーヒーだ。【ウナギ文】

[I'll have coffee.]

ウナギ文に該当する表現は思い当たらなかった。

8-17 [(注文した数人分のお茶が運ばれてきて) どなたがコーヒーですか?との問いに] コーヒーは私だ。【逆行ウナギ文】

[I ordered coffee.]

同じく、逆行ウナギ文に該当する表現は思い当たらなかった。

8-18 その新しくて厚い本は（値段が）高い。【形容詞述語文 修飾・並列・述語】

That new and thick book is expensive.

8-19 （砂糖入れを開けて）あっ、砂糖が無くなっているよ！【意外性（mirativity）】

Hey, we're out of sugar!

8-20 午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ？ あっ、そうだ、～君だったな。【思い出し】

I was supposed to meet someone in the evening, who was it? Oh, I remember. It was Andy.

9. 「情報標示の諸要素」（語研論集 第 22 号）

9-1 この土地は野菜がよく育つ。だから高い値段で売れるだろう。【統語的に動詞の必須項ではない名詞の統語的軸項としての機能】

Vegetables grow well on this land. So, it will sell at a high price.

9-2 私は頭が痛い。だから今日は休む。【話し手のなわ張り内・聞き手のなわ張り外、統語的軸項としての機能】

My head hurts. So, I will be absent today.

9-3 あの**人**だけ、時間通りに来た。【限定】

Only he came on time.

9-4 これはここで**しか**買えない。【限定・否定との共起】

This can only be bought here.

9-5 その家にいたのは子供**ばかり**だった。【限定・多数】

There were only children in the house.

9-6 次回**こそ**、失敗ないようにしよう。【限定・強調】

[Let's try not to fail next time.]

「こそ」に該当する表現は思い当たらなかった。その代わり、"next time"を強調するなどしてニュアンスを表すように思われる。

9-7 疲れたね、お茶**でも**飲もう。【反限定・例示】

That was tiring, let's drink tea or something.

このように言えば、かなりくだけた表現になる。

9-8 水**さえ**あれば、数日間は大丈夫だ。【極端・意外】

[If we have water, we'll be OK for several days.]

「さえ」に該当する表現は思い当たらなかった。

{Even if we only had water, we'll be OK for several days.}

「水しかなくても」という表現を用いて類似のニュアンスを伝えることは可能である。ただしこの場合、水以外のものもある、あるいはあることが期待される状況だと感じられ、日本語の例文で表されるニュアンスとは少しずれてしまう。

9-9 小さい子供**まで**、その仕事の手伝いをさせられた。【極端・意外】

Even small children were forced to work on the job.

9-10 私はお金**なんか**欲しくない。【反極端・低評価】

[I don't want money.]

「なんか」に該当する表現は思い当たらなかった。その代わり、"money"を強調することで、「お金などではなく、他の何かが欲しいのだ」というニュアンスを伝えることができる。

9-11 自分の部屋**ぐらい**、自分できれいにしなさい。【反極端・最低限】

Clean your own room at least by yourself.

“at least” のかかる句を特定することが難しくなる。ただしこの場合、“by yourself” は既に最低限で

あるため “at least” がかかるとは考えづらいため、意味は通る。また、“own room” を強調することでも意味が明確になる。

9-12 私にもちょうだい。【類似・累加】

Give it to me too.

9-13 お父さんもう帰って来たね。お母さんは？【反類似・対比（疑問）】

Dad has come home already. How about mom?

9-14 誰か（が）電話してきたよ。【特定未知（specific unknown）】

Someone called.

9-15 誰かに聞いてみよう。【非現実不特定（irrealis non-specific）】

Let's ask someone.

9-16 私のいない間に誰か来た？【疑問（question）】

Did anyone come while I was away?

9-17 誰か来たら、私に教えてください。【条件節内（conditional）】

If anyone comes, please tell me.

9-18 今日は誰も来るとは思わない。／今日は誰も来ないと思う。【間接（全部）否定（indirect negation）】

I don't think anybody will come today.

I think nobody will come today.

9-19 そこには今誰もいないよ。【直接（全部）否定（direct negation）】

Nobody is there now.

9-20 （それは）誰でもできる。【自由選択（free-choice）】

Anyone can do that.

9-21 そんなこと（は）、みんな知っているんじゃないか!？【自由選択を示す「みんな」】

Everyone knows that!

9-22 そんなもの、誰が買うんだよ!？ 誰も買うわけじゃないか! 【反語】

Who would buy such a thing!? Nobody will.

9-23 君は英語がうまいね。【話し手のなわ張り内・聞き手のなわ張り内】

You are good at English.

9-24 君は退屈そうだね。【話し手のなわ張り外・聞き手のなわ張り内】

You seem bored.

9-25 明日も寒いらしいよ。【話し手のなわ張り外・聞き手のなわ張り外】

It seems like it will get cold again tomorrow.

10. 「否定、形容詞と連体修飾複文」(語研論集 第23号)

10-1 これは私の本ではない。【名詞述語文／コピュラ文の否定】

This is not my book.

This book is not mine.

直訳すると「この本は私のものではない。」となるような表現である。

10-2 この部屋には椅子がない。【存在文の否定】

This room does not have any chairs.

There are no chairs in this room.

10-3 この部屋には一つも椅子がない。【全部否定・モノ】

There aren't any chairs in this room.

There is not one chair in this room.

10-4 その部屋には誰もいない。【全部否定・ヒト】

There aren't any people in that room.

There is nobody in that room.

There is not one person in that room.

Nobody is in that room.

10-5 その本はこの部屋にない。【所在文の否定】

The book is not in this room.

10-6 この犬は大きくない。【形容詞文の否定】

This dog is not big.

10-7 この犬はあまり大きくない。【形容詞文の部分否定】

This dog is not so big.

10-8 この犬はあの犬より大きい。【比較級】

This dog is bigger than that one.

10-9 この犬がその犬たちの中で一番大きい。【最上級】

This dog is the biggest of the dogs.

10-10 今日のはあの人は来ない。【自動詞文の否定】

He will not come today.

- 10-11 あの人はその本を持って行かなかった。【他動詞文の否定】
He did not take the book.
- 10-12 全ての学生が参加しなかった。／学生は全員参加しなかった。【数量の全部否定】
No student participated.
None of the students participated.
- 10-13 全ての学生が参加したわけではない。【数量の部分否定】
Not all of the students participated.
- 10-14 (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。【文の否定】
It's not that the price is too high.
- 10-15 走るな！【禁止】
Don't run!
- 10-16 大きな声を出すな！【他動詞文の禁止】
Don't make a loud noise!
- 10-17 明日は雨は降らないだろう。【推量の否定】
It would not rain tomorrow.
- 10-18 あの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ。【目的節の否定】
Speak quietly so that he doesn't hear.
- 10-19 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。【否定のスキープの調節】
I didn't say it to make you angry.
- 10-20 私が昨日買った本はどこ (にある) ? 【内の関係の連体修飾節・目的語】
Where is the book I bought (that) yesterday?
- 10-21 その本を持って来た人は誰 (か) ? 【内の関係の連体修飾節・主語】
Who (was it that) brought this book?
- 10-22 この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。【内の関係の連体修飾節・場所】
This is the room (that) we work in.
- 10-23 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。【内の関係の連体修飾節・所有者】
I already threw away the chair with a broken leg.

10-24 ドアを叩いている音が聞こえる。【外の関係の連体修飾節】

I hear a knock on the door.

10-25 あの人が結婚したという噂は本当（か）？【外の関係の連体修飾節】

Is it true that he has married?

10-26 私はその人が来た時にご飯を食べていた。【時間節】

I was eating lunch when he came.

10-27 私はその人が待っている所に行った。【場所節】

I went (to) where he was waiting.

10-28 私はその人が走っていったのを見た。【補文節・視覚】

I saw him run away.

査読の方からは、I saw him running away. も可であろうというコメントをいただいた。その場合、一時性が高くなるという。

10-29 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。【補文節・聴覚】

Last night, I heard them talking.

10-30 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。【補文節・知識】

I know (that) he came here yesterday.

10-31 (昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。／(昨日) 彼は、「私は今日ここに来た」と言った。

【補文節・直接発話／間接話法】

He said (that) he came here yesterday. / He said, "I came here yesterday."

10-32 私はリンゴが(あの)皿の上にあったのを食べた。【内在節・従主・主主】

I ate the apple (lying) on the plate.

10-33 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。【内在節・従主・主目】

I caught the cat coming into the house.

執筆者連絡先：kazamas@tufs.ac.jp

原稿受理：2020年12月14日

<特集「他動性」>

ドイツ語における他動性 Transitivity in German

成田 節
Takashi Narita

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 諸言語における「他動性」についての風間(2014)の総論, およびそこに提示されている日本語の例文をベースに, ドイツ語での状況を記述し, 若干のコメントをつける。

Abstract: This report contributes to the special cross-linguistic study on ‘transitivity’ (*Journal of the Institute of Language Research* 19, 2014, Tokyo University of Foreign Studies). The purpose of this paper is to offer German data for the question of 20 phrases.

キーワード: 他動詞構文, 対格目的語, 前置詞句

Keywords: transitive construction, accusative object, prepositional phrase

本稿では, 諸言語における「他動性」についての風間(2014)の総論をベースに, そこに提示されている日本語の例文に対応するドイツ語の表現を例示し, 適宜コメントをつける。¹

1. 直接影響・変化

(1a) 彼はそのハエを殺した。

Er hat die Fliege getötet.
he has(AUX) the.F.SG.ACC fly(F):SG.ACC kill:PP²

(1b) 彼はその箱を壊した。

Er hat den Kasten kaputt gemacht.
he has(AUX) the.M.SG.ACC box(M):SG.ACC broken(ADJ) make:PP



本稿の著作権は著者が保持し, クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ 例文の容認可能性判断に際しては東京外国語大学のクリストフ・ヘンドリクス氏にご協力いただいた。また, 匿名の査読者からは本稿の改善のための数多くの提案をいただいた。ここに記して感謝します。

² グロスの付け方は概ね *The Leipzig Glossing Rules* (last change: May 31, 2015)に従った。用いた略号の一覧は本文の末尾に挙げておく。なお煩雑さを避けるために, 原則として形態素への分節は明記しない。また, 人称代名詞の場合, 主格のNOMは省略する(例えば he は he.NOM の略記)。また本稿で頻出する haben (have) と sein (be) の現在形は英語の対応形を挙げ, 時制及び人称と数の表示は省略する。例えば完了の助動詞 hat のグロスは has(AUX)としたが, これは have(AUX):PRS.3SG.の略記である。

(1c) 彼はそのスープを温めた。

Er hat die Suppe auf-gewärmt.
he has(AUX) the.F.SG.ACC soup(F):SG.ACC up-warm:PP

(1d) 彼はそのハエを殺したが、死ななかった。

*Er hat die Fliege getötet, aber sie ist nicht gestorben.
he has(AUX) the.F.SG.ACC fly(F):SG.ACC kill:PP but she is(AUX) not die:PP

「直接影響・変化」は〔主格主語—対格目的語〕という格枠（以下、他動詞構造と呼ぶ。また主格主語は主語と略記する。）で示される。なお (1b) では kaputt machen 「壊れた+…にする」という複合述語が用いられているが、zerbrechen 「破壊する」なども可能である。なお (1a) の töten 「殺す」も形容詞 tot 「死んだ」からの、(1c) の aufwärmen も形容詞 warm 「暖かい」からの派生動詞であり、(1b) の kaputt machen と同様に「形容詞の状態にする」という意味構造の動詞である。また、die Fliege töten は「ハエが死ぬ」ことを含意するので、当然のことながら (1d) は容認されない。versuchen 「しようとする」と zu 不定詞の組み合わせで「殺そうとする」などとしないと「...が、死ななかった。」を繋げることはできない。

2. 直接影響・無変化

(2a) 彼はそのボールを蹴った。

Er hat den Ball getreten.
he has(AUX) the.M.SG.ACC ball(M):SG.ACC kick:PP

(2b) 彼女は彼の足を蹴った。

Sie hat ihm/ihn an=s Bein getreten.
she has(AUX) he.DAT/he.ACC at=the.N.SG.ACC leg(N):SG.ACC kick:PP

(2c) 彼はその人にぶつかった。(±意図性)

Er ist gegen den Mann gestoßen.
he is(AUX) against the.M.SG.ACC man(M):SG.ACC bump:PP

「直接影響・無変化」には他動詞構造あるいは〔主語—前置詞句〕という格枠が用いられる。対象の状態変化は生じないとしても、(2a) の「ボールを蹴る」のように位置変化が生じる場合は対格目的語が用いられる。³ 他方「足を蹴る」のように「足」に位置変化が生じない場合は方向を表す前置詞句が用いられる。この場合「彼の」は与格 ihm 「彼に」あるいは対格 ihn 「彼を」で表される。(2c) 「その人にぶつかった」もぶつかることにより対象に物理的には多少の動きが生じるかもしれないが、表現自体は「ぶつかることで位置変化を引き起こす」という意味ではないので「その人に」は前置詞句で表される。なお (2c) はぶつかる意図の有

³ インフォーマントによれば「ボールを蹴る」に用いる動詞は schießen (シュートする) の方が普通だと感じられるとのことだが、コーパスでは treten もごく普通に用いられている。また Freistoß (フリーキック), Anstoß (キックオフ), Abstoß (ゴールキック) にも見られるように stoßen 用いられる。もっとも Langenscheidt (2003) では Anstoß を (im Fußball) der erste Schuss, mit dem eine Halbzeit eröffnet wird ((サッカーで) 前半/後半を始める最初のキック) と schießen からの派生名詞 Schuss を用いて言い換えているように、確かに schießen は「シュートする」だけでなく、「蹴る」の意味でも用いられているようだ。

無に関わらず用いられる。

また、ドイツ語には接頭辞（いわゆる非分離前綴）や不変化詞（いわゆる分離前綴）を用いた複合的な動詞が数多いが、そのような動詞においては基盤動詞とは異なる格枠で用いられるものも多く、「彼はその人にぶつかった」を他動詞構造で表すこともできる。

(2c') 彼はその人にぶつかった。(±意図性)

Er hat den Mann an-gestoßen.
 he has(AUX) the.M.SG.ACC man(M):SG.ACC on-bump:PP

anstoßen には「人を小突く」という意味もあるが、*stößt du einen Nachbar beim Aufstehen ein wenig an und entschuldigst dich* (DWDS)⁴「君は立ち上がる際に隣の人にちょっとぶつかって謝る」など明らかに「人にぶつかる」という意味で用いられている事例もある。また、同じ *stoßen* でも方向を表す語句と結びついて、「ぶつかって/突いて～に動かす」という意味の表現もある。この場合「ぶつかる/突く対象」は対格になる。

(2c'') 彼はその人を水の中に突き落とした。

Er hat den Mann in=s Wasser gestoßen.
 he has(AUX) the.M.SG.ACC man(M):SG.ACC in=the.N.SG.ACC water(N):SG.ACC bump:PP

3. 知覚

(3a) あそこに人が数人見える。

Ich sehe dort einige Leute.
 I see.PRS:1SG there some:ACC people:ACC

(3b) 彼はその家を見た。(知覚した)

Er hat das Haus gesehen.
 he has(AUX) the.N.SG.ACC house(N):SG.ACC see:PP

(3b') 彼はその家を見た。(目を向けた)

Er hat auf das Haus gesehen.
 he has(AUX) at the.N.SG.ACC house(N):SG.ACC look:PP

(3c) 誰かが叫んだのが聞こえた。

Ich habe gehört, dass jemand geschrien hat.
 I have(AUX) hear:PP that(COMP) someone:NOM scream:PP has(AUX)

(3c') 誰かが叫んでいるのが聞こえた。

Ich habe gehört, wie jemand geschrien hat.
 I have(AUX) hear:PP as(COMP) someone:NOM scream:PP has(AUX)

⁴ 本稿では適宜 *Digitales Wörterbuch der deutschen Sprache* (DWDS) のサイト (<https://www.dwds.de/>) を利用して事例を提示する。その場合事例の後ろに (DWDS) と記す。

(3c'') 誰かが叫んでいるのが聞こえた。

Ich habe jemanden schreien gehört/hören.
I have(AUX) someone:ACC scream:INF hear:PP/hear:INF

(3d) 彼はその物音を聞いた。(知覚した)

Er hat das Geräusch gehört.
he has(AUX) the.N.SG.ACC sound(N):SG.ACC hear.PP

(3d') 彼は鐘の音を聞いた。(耳を傾けた)

Er hat auf die Glocke gehört.
he has(AUX) to the.F.SG.ACC bell(F):SG.ACC listen.PP

「知覚」の「見る」については (3a) (3b) (3b') に見られるように、受動知覚 (風間 2014:45) すなわち知覚の成立を意味する「見える」は他動詞構文で、能動知覚 (風間 2014:45) すなわち知覚成立の前段階を意味する「目を向ける」は [主語-前置詞句 (方向)] で表される。この点は英語の see と look at と平行していると言える。しかし他動詞構文の sehen が常に受動知覚というわけではなく、「映画を見る」einen Film_{ACC} sehen や「芝居を見る」ein Theaterstück_{ACC} sehen のように意志的に「見る」という場合もある。もっともこの場合の sehen は視覚的知覚ではなく、内容把握に重点があるので、動詞の意味が違っても考えられる。さらに分離動詞 ansehen は常に対格目的語を取り、基本的には能動知覚 (den Mann_{ACC} ansehen 「その男を見つめる」、与格の再帰代名詞 sich を伴う sich_{DAT} das Haus_{ACC} ansehen 「その家を見る (吟味する)」) だが、受動知覚 (dem Mann_{DAT} die gute Laune_{ACC} ansehen 「その男の上機嫌を見て取る」) の用法もある。

「聞く」についても事情はだいたい同じである。(3d) は他動詞構文で受動知覚を表しているが、「対格目的語+hören」でも「ラジオを聞く」Radio_{ACC} hören や「講演を聞く」einen Vortrag_{ACC} hören のような (内容理解を伴う) 能動知覚がある。また (3d') のように「前置詞句 (方向) +hören」で能動知覚を表す用法もあり、これは sehen の (3b') と同様である。

(3c) の「誰かが叫んだのが聞こえた」は、用いる接続詞によって捉え方の違いが出る。Vater (1976: 219f.) によれば dass を用いる (3c) が「誰かが叫ぶ」という事態を「丸ごと」捉えるのに対して、wie を用いる (3c') では「誰かが叫ぶ」という事態の経過に目が向けられ、「叫ぶ」と「聞こえる」が同時並行的に (koextensiv) 捉えられるとのことである。日本語で表し分けるとすれば (3c) は「叫んだのが聞こえた」、(3c') は「叫んでいるのが聞こえた」とでもなるだろう。⁵ 後者の捉え方の場合は (3c'') のような AcI (< Accusativus cum Infinitivo; 不定詞付き対格) 構文も用いられる。なお、この構文では知覚動詞の過去分詞は (3c'') のように不定形と同形になることがある。

4. 発見・獲得・生産

(4a) 彼は (なくした) 鍵を見つけた。

Er hat den Schlüssel wieder gefunden.
he has(AUX) the.M.SG.ACC key(M):SG.ACC again find:PP

⁵ なお、(3c)は「誰かが叫んだと (いうことを) 聞いた。」という意味も表し得る。

(4b) 彼は椅子を作った。

Er hat einen Stuhl gemacht/gebastelt/gebaut.
he has(AUX) a:M.SG.ACC chair(M):SG.ACC make:PP/build:PP/build:PP

(4b') 彼は椅子を作っていた。(作成過程)

Er hat an einem Stuhl gebastelt/gebaut.
he has(AUX) PREP a:M.SG.DAT chair(M):SG.DAT build:PP/build:PP

「発見」は基本的には (4a) のように他動詞構文で表す。同じ構文で用いられる動詞は *auffinden* 「(行方不明になっていたものなどを) 見つけ出す」, *entdecken* 「発見する」など多数ある。なお「発見する」という状況は, *auf die Spuren treffen* 「足跡を見つける」, *auf Erdöl stoßen* 「石油を見つける」, *auf die Lösung kommen* 「答えを見つける」など「auf 前置詞句+treffen/stoßen/kommen」でも表すことができる。これは「(たまたま) …に出くわす」という「遭遇」からの転用と考えられる。

「作成」も基本的には (4b) のように他動詞構文で表すが, 作成動詞の多くは, (4b') のように「an+与格」という前置詞句を用いることで, 作成途中であることを表すことができる。ただしこれは *basteln* 「部品を組み立てて作る」, *bauen* 「いくつかの部分を組み立てて作る」, *malen* 「(絵を) 描く」, *dichten* 「詩作する」, *weben* 「(絨毯などを) 織る」, *nähen* 「縫製する」, *stricken* 「編む」などのように具体的な作業の様態を想起させる動詞に限られ, *machen*, *fertigen*, *schaffen* など「作成」のみを表し, 具体的な作業の様態に関して透明な動詞では不可能である。

5. 追及

(5a) 彼はバスを待っている。

Er wartet auf den Bus.
he wait.PRS:3SG for the.M.SG.ACC bus(M):SG.ACC

(5b) 私は彼 (が来るの) を待っていた。

Ich habe auf ihn gewartet.
I have(AUX) for he.ACC wait:PP

(5b') 私は彼 (が来るの) を待っていた。

Ich habe ihn er-wartet.
I have(AUX) he.ACC PRFX-wait:PP

(5c) 彼は財布を探している。

Er sucht sein Portemonnaie.
he look_for.PRS:3SG his:N.SG.ACC wallet(N):SG.ACC

(5c') 彼は財布を探している。

Er sucht nach seinem Portemonnaie.
he look_for.PRS:3SG PREP his:N.SG.DAT wallet(N):SG.DAT

「待つ」ことを表す基本動詞には *warten* と *erwarten* がある。*warten* は自動詞で、待つ対象は前置詞句「auf + 対格」で表す。接頭辞 *er-* の付いた *erwarten* は他動詞で、対象を対格目的語で表す。「彼が来るのを」は *sein Kommen* 「彼の到着を」と表現することもできるが、普通は *ihn* 「彼を」待つで十分表せる。(5b) (5b') から明確な意味の違いは読み取れないが、辞書の記述を見ると「auf + 対格 *warten*」は「何もせずにいる、待つのが長く感じる」という含みがあるのに対して、「対格目的語 + *erwarten*」は「期待して待つ」という含みがあるようだ。⁶ DWDS の検索データでも *warten* と共起度の高い副詞として *stundenlang* 「何時間も」、*ewig* 「永遠に」、*monatelange* 「何か月も」、*jahrelang* 「何年も」、*wochenlang* 「何週間も」が上位に挙がり、*erwarten* では *frühestens* 「早くとも (～後に)」、*mittelfristig* 「中期的に」、*kurzfristig* 「短期間で」など「到来の時期」を表すものが上位を占めている。ここにも *warten* の「無為」と *erwarten* の「期待」の違いは見て取れる。

「探す」の *suchen* にも対象を対格目的語で表す用法 (5c) と *nach* 前置詞句で表す用法 (5c') がある。両者を比べると、*nach* 前置詞句の方は探す過程により強く焦点を合わせた表現であるという指摘があるが、⁷ 対格目的語を用いた (5c) の意味に「探す過程」が含まれないということではない。両者の対比において、「探す対象」を対格ではなく *nach* 前置詞句で表す (5c') では、終結点 (すなわち対象の発見) には至らないことが含意され、その分だけ終結点に至るまでの過程が相対的に前面に出るということである。このことは搜索過程を修飾する *verzweifelt* 「必死に」などの副詞との共起度の高さにも現れている。⁸

6. 知識 1

(6a) 彼はいろいろなことをよく知っている。

Er	weiß	viel	über	Verschiedenes.
he	know.PRS:1SG	much	about	various_things:N.SG.ACC

(6b) 私はあの人 (男性) を知っている。

Ich	kenne	den	Mann.
I	know.PRS:1SG	the.M.SG.ACC	man(M):SG.ACC

⁶ *warten* の語義記述として „nichts tun, nicht weggehen o.Ä., bis jemand kommt oder etwas eintritt“ (誰かが来るあるいは何かが起こるまで何もせず、立ち去りなどもしない (Langenscheid 2003)), や „dem Eintreffen einer Person, einer Sache, eines Ereignisses entgegensehen, wobei einem oft die Zeit besonders langsam zu vergehen scheint“ (ある人・モノ・コトの到来・出現を待ち、その時の流れが特に遅く感じられることも多い (Duden 2012)) が見られ、*erwarten* は „darauf warten, dass jemand kommt oder dass sich etwas ereignet“ (誰かが来る、あるいは何かが起こることを待つ (Langenscheid 2003)) や „dem als gewiss vorausgesetzten Eintreffen einer Person oder Sache mit einer gewissen Spannung entgegensehen“ (確実だと予想される人やモノの到着を一定の期待感を持って待つ (Duden 2012)) などが見られる。

⁷ 例えば成田 (1993:158) に「nach etwas suchen には、Starke (1970) によれば *angestrengt*, *eifrig*, *emlich* など「さがす」行為の様態を表す語句と共に用いられている例が多いということである。これは *nach etwas suchen* が「探す」という行為に焦点を合わせた表現であることの表れだと考えられる。」という叙述が見られる。

⁸ „*verzweifelt suchen* (全変化形)“ の 2 語連鎖を DWDS の 20 世紀のドイツ語標準コーパス (1 億語) で検索し、ヒットした 7 例のうち、*zu* 不定詞句と結びついた 1 例 (以下の最後の例) 以外はすべて対象が *nach* 前置詞句で表示されていた。
Verzweifelt suche ich nach einem Weg. 私は必死にすべを探す / *Rosenöl, Nelke und Storax - nach diesen drei Komponenten hatte er heute nachmittag so verzweifelt gesucht;* (香水の原料の) これら 3 つの成分を彼は今日の午後必死に探していたのだ。 / *Verzweifelt suchte sie nach dem Namen.* 彼女は必死にその名前を探した / *Wer war der Mensch, nach dem sie verzweifelt suchte?* 彼女が必死に探した人は誰だったか? / *Verzweifelt suchte er in den Gesichtern der Kameraden nach Verständnis und Hilfe.* 必死に彼は仲間たちの顔に理解と支援の表情を探した / *Verzweifelt suchte er nach Gegengründen.* 必死に彼は反対理由を探した // *Verzweifelt suche ich mich seiner zu erwehren, und es gelingt mir wirklich für den Augenblick.* 私は必死に彼から身を守ろうとする

(6b') 私はあの人 (男性) を知っている。

Mir ist der Mann bekannt.
I.DAT is the.M.SG.NOM man(M):SG.NOM known(ADJ)

(6c) 彼にはドイツ語がわかる。

Er versteht Deutsch.
he understand.PRS:3SG German(N):SG.ACC

「～を知っている」「～ができる」は基本的には他動詞構文で表される。(6a) の wissen は対格目的語が必須であり、「いろいろなこと」は前置詞句で表されているが、「よく」に当たる viel が対格目的語相当と見なせる。(6b) の「私はあの人を知っている」に対しては、認識主体を与格、認識対象を主語で表す形容詞述語の用法 (6b') もある。(6c) に対しては能力主体を与格で表すような例はなさそうである。ただし、「私はそれがよくわかる」ならば Das_{NOM} ist mir_{DAT} gut verständlich. のように理解主体を与格で表す形容詞述語文も可能である。

7. 知識2

(7a) あなたはきのう私が言ったことを覚えていますか？

Wissen Sie noch, was ich gestern gesagt habe?
know.PRS:2SG you still what.ACC I yesterday say:PP have(AUX)

(7a') あなたはきのう私が言ったことを覚えていますか？

Erinnern Sie sich dar-an, was ich gestern gesagt habe?
remember.PRS:2SG you REFL.ACC there-on what.ACC I yesterday say:PP have(AUX)

(7b) 私は彼の電話番号を忘れてしまった。

Ich habe seine Telefonnummer vergessen.
I have(AUX) his:F.SG.ACC phone_number(F):SG.ACC forget:PP

(7b') 私は彼の電話番号を忘れてしまった。

Mir ist seine Telefonnummer entfallen.
I.DAT is his:F.SG.NOM phone_number(F):SG.NOM escape:PP

「覚えている」は、noch wissen 「まだ知っている」で表すなら対象は対格目的語で、再帰動詞の sich erinnern 「覚えている・思い出す」で表すなら対象は原則として an 前置詞句で表される。(7a) の was ich gestern gesagt habe (what I said yesterday) は従属文だが、wissen の対格目的語の位置を占めていると見なすことができる。(7a') の daran は後続の従属文を先取りする dar と前置詞 an の結合形である。

「忘れる」は (7b) の vergessen でも nicht mehr wissen 「もう知らない」でも対象は対格目的語になるが、(6b) に対する (6b') のように、記憶主体を与格、記憶対象を主語で表す動詞述語の用法もある (7b')。⁹ こ

⁹ sich erinnern 「思い出す・覚えている」も vergessen 「忘れる」も記憶の対象を属格で表す古風な用法もある。

これは英語の His name escapes me. 「彼の名前が思い出せない。」(グランドコンサイス英和辞典)に相当する。

8. 好悪

(8a) 母は子供たちを深く愛していた。

Die Mutter liebte ihre Kinder sehr.
the.F.SG.NOM mother(F):SG.NOM love.PST:3SG her:PL.ACC child(N):PL.ACC very_much

(8b) 私はバナナが好きだ。

Ich mag Bananen.
I like.PRS:1SG banana(F):PL.ACC

(8b') 私はバナナが好きだ。

Ich esse gern Bananen.
I eat.PRS:1SG gladly banana(F):PL.ACC

(8c) 私はあの人(男性)が嫌いだ。

Ich hasse den Mann.
I hate.PRS:1SG the.M.SG.ACC man(M):SG.ACC

(8c') 私はあの人(男性)が嫌いだ。

Mir ist der Mann verhasst.
I.DAT is the.M.SG.NOM man(M):SG.NOM hated(ADJ)

「愛している」の lieben (8a), 「私はバナナが好きだ」の mag (<mögen) (8b) および「好んで食べる」の gemessen (8b'), 「嫌いだ」の hassen (8c) はいずれも他動詞構文が基本となる。が、「嫌いだ」には (8c') のように感情主体を与格, 感情対象を主語とする形容詞述語文がある。

なお, アンケートの例文からやや離れるが, ドイツ語で「気に入る」「気に入らない」を表す基本表現は感情主体を与格, 感情対象を主語で表す動詞 gefallen および missfallen による構文 (8d) と (8e) である。

(8d) 私はあの人(男性)が気に入っている。

Mir gefällt der Mann.
I.DAT be_liked.PRS:3SG the.M.SG.NOM man(M):SG.NOM

(8e) 私はあの人(男性)が気に入らない。

Mir missfällt der Mann.
I.DAT be_disliked.PRS:3SG the.M.SG.NOM man(M):SG.NOM

9. 必要等の感情

(9a) 私は靴が欲しい。

Ich möchte neue Schuhe.
I want.PRS:1SG new: PL.ACC shoe(F):PL.ACC

(9b) 今, 彼にはお金が要る。

Er braucht jetzt Geld.
he need.PRS:3SG now money(N):SG.ACC

(9b') 今, 彼にはお金が要る。

Er bedarf jetzt des Geldes. (書き言葉)
he need.PRS:3SG now the.N.SG.GEN money(N):SG.GEN

「欲しい」「必要だ」とともに感情主体を主語とする他動詞構文が基本であるが、「必要だ」には書き言葉として(9b')のように対象を属格目的語で表す *bedürfen* という動詞もある。

10. 喜怒哀楽

(10a) (私の) 母はそのうそに怒っている。(くそが母を怒らせる)

Die Lüge ärgert meine Mutter.
the.F.SG.NOM lie(F):SG.NOM make_angry.PRS:3SG my:F.SG.ACC mother(F):SG.ACC

(10a') (私の) 母はそのうそに怒っている。

Meine Mutter ärgert sich über die Lüge.
my:F.SG.NOM mother(F):SG.NOM make_angry.PRS:3SG REFL about the.F.SG.ACC lie(F):SG.ACC

(10a'') (私の) 母はそのうそに怒っている。

Meine Mutter ist über die Lüge verärgert.
my:F.SG.NOM mother(F):SG.NOM is about the.F.SG.ACC lie(F):SG.ACC make_angry:PP

(10b) 私は犬が怖い。

Ich fürchte mich vor Hunden.
I fear.PRS:1SG REFL of dog(M):PL.DAT

(10b') 私は犬が怖い。

Es graust mir vor Hunden.
it be_terrifying.PRS:3SG I.DAT of dog(M):PL.DAT

喜怒哀楽を表す動詞には(10a)と(10a')のように、原因を主語で、感情主を対格目的語で表す他動詞表現と、感情主を主語とする再帰動詞表現の両方で用いられる動詞が多い。「怒り」を表す(10a)(10a')の他に、「喜び」(*X freut mich*. 「Xが私を喜ばせる」— *Ich freue mich über X*. 「私はXが嬉しい」)。以下用法は省略する)、「不安」*ängstigen*, 「憤慨」*empören*, 「驚き」*entsetzen, erstaunen, wundern*, 「退屈」*langweilen* などがある。

感情主を主語とする表現には(10a')などの再帰動詞表現の他に、(10a'')のような「過去分詞/形容詞+sein (be)」という表現もある。¹⁰ (10a'')の *verärgert* は他動詞 *verärgern* 「怒らせる」の過去分詞である。他に「感

¹⁰ これらの動詞の過去分詞は、辞書の見出し語としては形容詞としても記載されているものもある。

激] begeistern (X begeistert mich. 「X が私を感激させる」 — Ich bin von X begeistert. 「私は X に感激している」), 「驚き」 entsetzen, 「魅了」 faszinieren, 「失望」 enttäuschen, 「驚き」 überraschen, 「衝撃」 schockieren などが挙げられる。(10a') や (10a'') に見られるように、感情の原因は前置詞句で表される。

「恐い」の fürchten には、(10b) のように感情主体を主語とする再帰動詞表現と、感情主体を与格で表す非人称構文の (10b') がある。¹¹ なお、感情主体を主語とするパターンには Ich habe Angst_{acc} vor Hunden. (＜犬に対する不安を持っている) という表現もある。¹²

11. 類似関係・包含関係

(11a) 彼は父親に似ている。

Er ist seinem Vater ähnlich.
he is his:M.SG.DAT father(M):SG.DAT similar

(11a') 彼は父親に似ている。

Er ähnelt seinem Vater.
he resemble:PRS:3SG his:M.SG.DAT father(M):SG.DAT

(11b) 海水は塩分を含んでいる。

Meerwasser enthält Salz.
sea_water(N):SG.NOM contain:PRS:3SG salt(N):SG.ACC

(11b') 海水には塩分が含まれている。

I=m Meerwasser ist Salz enthalten.
in=the.N.SG.DAT sea_water(N):SG.DAT is salt(N):SG.NOM contain:PP

「類似」の基本的な表現は比較の対象を与格で表す形容詞述語文であるが (11a)、動詞述語文もある (11a')。また「包含関係」は含まれるものを対格で表すパターン (11b) と、含む方のものを主語として、同じ動詞の過去分詞と sein の組み合わせで表すパターン (11b') がある。

¹¹ 「怒り」の (10a) ärgern とは異なり、「恐怖」の (10b) fürchten には、再帰動詞表現に対応する他動詞表現 (「X が私を怖がらせる」という意味の X fürchtet mich.) はない。fürchten には感情主を主語とする他動詞表現もあるが、Ich fürchte die Armut/den Tod/den Feind/die Polizei. 「私は貧困/死/敵/警察を恐れる」のような危惧・懸念などを表す。尤も fürchten に限らず「恐怖・不安」を広く見ると、上述の ängstigen のように、原因を主語とし感情主を対格とする他動詞表現 Die Zukunft ängstigt mich. と、感情主を主語とする再帰動詞表現 Ich ängstige mich vor der Zukunft. (意味はどちらも「私は将来のことが不安だ」) の両用法で用いられる動詞もある。

¹² 三宅 (2008) はドイツ語感情動詞の諸構文を概観しており、本稿で取り上げた表現も含めて、以下の 7 パターンを挙げている。(1) Das_{NOM} freut mich_{ACC}. 私はそのことに喜ぶ。(2) Das_{NOM} gefällt mir_{DAT}. それは私の気に入る。(3) Mich_{ACC}/Mir_{DAT} ekelt vor dem Essen. 私はその食べ物に吐き気がする。(非人称構文) (4) Ich_{NOM} liebe Sushi_{ACC}. 私はお寿司が大好きだ。(5) Ich_{NOM} erschrak vor einem großen Hund. 私は大きな犬にびっくりした。(6) Ich_{NOM} wundere mich darüber. 私はそれをいぶかしく思う。(7) Ich_{NOM} bin darüber entsetzt. 私はそのことに驚いている。(1)から(3)は感情主を斜格で表すパターン、(4)から(7)は感情主を主語とするパターンである。

12. 変化の関係

(12a) 私の弟は医者だ。

Mein Bruder ist Arzt.
 my:M.SG.NOM brother(M):SG.NOM is doctor(M):SG.NOM

(12b) 私の弟は医者になった。

Mein Bruder ist Arzt geworden.
 my:M.SG.NOM brother(M):SG.NOM is(AUX) doctor(M):SG.NOM become:PP

(12c) 水が氷になった。

Das Wasser ist zu Eis geworden.
 the.N.SG.NOM water(N):SG.NOM is(AUX) to ice(N):SG.DAT become:PP

(12c') 水が氷になった。

Aus dem Wasser ist Eis geworden.
 from the.N.SG.DAT water(N):SG.DAT is(AUX) ice(N):SG.NOM emerge:PP

(12d) グラスが割れて粉々に (<千の破片に) になった。

Das Glas zersprang in tausend Scherben.
 the.N.SG.NOM glas(N):SG.NOM shatter.PST:3SG into thousand piece(F):PL.ACC

「医者」を主格で表すコピュラ文 (12a) 「私の弟は医者だ」と同様に「私の弟は医者になる」の「医者」も主格で表される (12b)。ただし「XがYになる」でもXからYへの質的・形状的な変化を表す場合は (12c) や (12d) のようにYが前置詞句で表されることがある。さらに (12c') 「水から氷が生じる」のように変化の結果の「氷」を主語にする表現も可能である。

13. 能力

(13a) 彼は車の運転ができる。

Er kann Auto fahren.
 he can.PRS:3SG car(N):SG.ACC drive:INF

(13b) 彼は泳げる。

Er kann schwimmen.
 he can.PRS:3SG swim:INF

「車の運転ができる」も「泳げる」も動作主体を主語として可能を表す助動詞 kann (<können) と不定詞を組み合わせる表現する。

14. 上手・下手

(14a) 彼は話をするのが上手だ。

Er kann gut reden.
he can.PRS:3SG well talk:INF

(14b) 彼はそんなに早く走れない。

Er kann nicht so schnell laufen.
he can.PRS:3SG not so fast run:INF

「～するのが上手だ」は「上手に～する」のように表すのが一般的である (14a)。この *gut* は品詞は形容詞だが、そのまま副詞と同様に用いられる。(14b)「そんなに早く走れない」の *schnell* も品詞は形容詞である。

「上手・下手」とは少し異なるが、「～するのは楽だ」「～するのは苦勞する」は行為を主語、行為主体 (楽・苦勞を感じる人) を与格で表す構文が一般的に用いられる。例文は以下の通りである。Mathematik_{NOM} fällt mir_{DAT} leicht. 「私は楽に数学ができる。」 (<数学は私には簡単だ。), Mathematik_{NOM} fällt mir_{DAT} schwer. 「私は数学に苦勞している。」 (<数学は私には難しい。)

15. 移動

(15a) 彼は学校に着いた。

Er ist in die Schule gekommen.
he is(AUX) into the.F.SG.ACC school(F):SG.ACC come:PP

(15a') 彼は学校に着いた。

Er hat die Schule erreicht.
he has(AUX) the.F.SG.ACC school(F):SG.ACC reach:PP

(15b) 彼は道を渡った／横切った。

Er ist über die Straße gegangen.
he is(AUX) across the.F.SG.ACC street(F):SG.ACC walk:PP

(15b') 彼は道を渡った／横切った。

Er hat die Straße über-quert.
he has(AUX) the.F.SG.ACC street(F):SG.ACC across-cross:PP

(15c) 彼はあの道を通って行った。

Er ging durch den Weg.
he go.PST:3SG through the.M.SG.ACC way(M):SG.ACC

(15c') 彼はあの道を通って行った。

Er ging den Weg (lang).
he go.PST:3SG the.M.SG.ACC way(M):SG.ACC (along)

「移動」は基本的に自動詞表現で、「到着」「横断」「経由」の空間関係は前置詞句で表すのが基本だが (15a) (15b) (15c), それぞれに対して空間関係を対格で表す表現も存在する (15a') (15b') (15c')。

16. 生理的欲求

(16a) 彼はお腹を空かしている。

Er hat Hunger.

he has hunger(M):SG.ACC

(16a') 彼はお腹を空かしている。

Es hungert ihn. (古風)

it make_hungry.PRS:3SG he.ACC

(16b) 彼は喉が渇いている。

Er hat Durst.

he has thirst(M):SG.ACC

(16b') 彼は喉が渇いている。

Es dürstet ihn. (古風)

it make_thirsty.PRS:3SG he.ACC

「お腹がすく」「喉が渇く」とともに「空腹を持つ」「渇きを持つ」というように他動詞構造で表す (16a) (16b)。古風な表現としては欲求の主体を対格で表す非人称構文もある (16a') (16b')。

17. 寒暖等の感覚

(17a) 私は寒い。

Mir ist kalt.

I.DAT is cold

(17a') 私は寒い。

Ich empfinde Kälte.

I feel.PRS:1SG cold(F):SG.ACC

(17b) 今日は寒い。

Heute ist es kalt.

today is it cold

「寒い」「暑い」などは形容詞+sein (be)で表す。「私は寒い」では感覚主体は与格で表され、主語は現れない (17a)。「今日は寒い」の場合は非人称主語 es が現れる (17b)。頻度は低いですが、「私は寒い」は感覚主体を

主語、「感覚」を対格として (17a') (=私は寒さを感じる) のように表現することもできる。¹³

18. 社会行為

(18a) 私は彼を手伝った／助けた。

Ich habe ihm geholfen.
I have(AUX) he.DAT help:PP

(18a') 私は彼を助けた。

Ich habe ihn gerettet.
I have(AUX) he.ACC save:PP

(18b) 私は彼がスーツケースを運ぶのを手伝った。

Ich habe ihm den Koffer tragen geholfen.
I have(AUX) he.DAT the.M.SG.ACC suitcase(M):SG.ACC carry:INF help:PP

広義の「助ける」を表す動詞には *helfen* 「手伝う」、*retten* 「助ける＝救う」、*unterstützen* 「助ける＝支える」などがあり、*helfen* では「相手」は与格 (18a)、*retten* (18a') および *unterstützen* では「相手」は対格で表す。「X が～するのを助ける／手伝う」は *helfen* と不定詞句 *den Koffer tragen* 「そのスーツケースを運ぶ」を組み合わせて表すことができる。

19. 言語行動

(19a) 私はその理由を彼に訊いた。

Ich habe ihn nach dem Grund gefragt.
I have(AUX) he.ACC about the.M.SG.DAT reason(M):SG.DAT ask:PP

(19a') 私はその理由を彼に訊いた。

Ich habe mich bei ihm nach dem Grund erkundigt.
I have(AUX) REFL with he.DAT about the.M.SG.DAT reason(M):SG.DAT ask:PP

(19b) 私はそのことを彼に話した。

Ich habe ihm das gesagt/erzählt/mitgeteilt.
I have(AUX) he.DAT that.M.SG.ACC say:PP/tell:PP/ tell:PP

(19b') 私はそのことを彼に話した。

Ich habe ihn dar-über informiert/unterrichtet.
I have(AUX) he.ACC there-on inform:PP/ notify:PP

¹³ 例えば, Allmählich kehrten auch die anderen Gefühlssensoren in meinem Körper zurück und ich empfand Kälte – obwohl man mich bis zu den Schultern zugedeckt hatte. 「徐々に私の体の他の感覚器官もよみがえってきて私は寒さを感じた – 肩まで (毛布で) 覆われていたのだが。」 (<https://www.kostenlosonlinelesen.net/kostenlose-magie-des-mondes-vollmond>, 2021年2月28日アクセス)

「訊く＝問う」の最も基本的な動詞 *fragen* は「相手」を対格, 「問の内容」を *nach* 前置詞句で表す (19a)。他に再帰動詞 *sich_{REFL} erkundigen* などもあり, 「問の内容」を *nach* 前置詞句で表すのは *fragen* と同じだが, 「相手」は前置詞句 *bei ihm* 「彼のもとで」で表す (19a')。

「彼にそのことを話す」は「相手」を与格, 「内容」を対格にする表現が基本的だが (19b), 「相手」を対格, 「内容」を *über* 前置詞句で表す表現もかなり見られる (19b')。

20. 相互行為

(20a) 私はその男に会った。

Ich habe den Mann gesehen/getroffen.
I have(AUX) the.M.SG.ACC man(M):SG.ACC see:PP/meet:PP

(20a') 私はその男に会った。

Ich habe mich mit dem Mann getroffen.
I have(AUX) REFL with the.M.SG.DAT man(M):SG.DAT meet:PP

(20a'') 私は彼に会った。

Ich bin dem Mann begegnet.
I am(AUX) the.M.SG.DAT man(M):SG.DAT come_across:PP

(20a''') 私は彼に会った。

Mir ist der Mann begegnet.
I.DAT is(AUX) the.M.SG.NOM man(M):SG.NOM come_across:PP

「Xに会う」にはいくつかのパターンがある。他動詞 *sehen* / *treffen* を用いて「相手」を対格目的語にする (20a), 再帰動詞 *sich_{REFL} treffen* を用いて「相手」を *mit* 前置詞句にする (20a'), 自動詞 *begegnen* を用いて「相手」を与格にする構文 (20a''), さらに同じ *begegnen* を用いて, 「相手」を主語にする(20a''')である。他動詞 *sehen* / *treffen* は約束して会う場合でも偶然会う場合でも用いられるが, 再帰動詞 *sich_{REFL} treffen* は約束して会う場合に限られる。また与格+*begegnen* は偶然会うことを表す。

以上概観したように語研論集第19号の特集テーマ「他動詞」のアンケート例文に関しては, ドイツ語ではほぼすべてに関して「主格主語－対格目的語」という格枠の表現が存在する。この格枠が欠けているのは(11a)の「類似関係」の表現, (12)の「変化の表現」だけである。なお, ドイツ語文法では過去分詞+*werden* (*become*) で作る受動文の主語に転換できる対格名詞句のみを対格目的語とし, この狭義の対格目的語を取る動詞のみを他動詞と見なす考え方もある (Brinkmann ²1971: 202f., Helbig/Buscha ¹⁷1996:546)。この考え方で見るならば本稿で挙げた対格名詞句を取る動詞でも, 例えば「知っている」の *wissen* (6a)と *kennen* (6b), 「怒らせる」の *ärgern* (10a), 「含む」の *enthalten* (11b), 「持っている」の *haben* (16a)(16b), また「車を運転する」の *Auto fahren* (13a)における *fahren* などは他動詞とは見なされないことになるが, 本稿ではこのような動詞を用いた文も含めて「主格主語－対格目的語」という格枠で実現したものと見なしてデータを整理したことを付記しておく。

略語一覧

1	first person	F	feminine	PREP	preposition
2	second person	GEN	genitive	PREFIX	prefix
3	third person	INF	infinitive	PRS	present
ACC	accusative	M	masculine	PST	past
ADJ	adjective	N	neuter	REFL	reflexive pronoun
AUX	auxiliary	NOM	nominative	SG	singular
COMP	complementizer	PL	plural		
DAT	dative	PP	past participle		

参考文献

- 風間 伸次郎 (2014) 「企画：特集「他動性」まえがき」東京外国語大学『語学研究所論集』第19号, 33-59.
- 成田 節 (1993) 「ドイツ語の4格目的語の一特性について -日本語のヲ格補語と比較して-」『富山大学教養部紀要』第25巻2号 (人文・社会科学編), 153-168.
- 三宅洋子 (2008) 「ドイツ語の感情動詞における格枠組みの文意味機能について」三瓶裕文／成田節 (編) 『ドイツ語を考える. ことばについての小論集』2008, 三修社, 92-99.
- Brinkmann, Hennig (?1971): *Die deutsche Sprache. Gestalt und Leistung*. Düsseldorf: Pädagogischer Verlag Schwann.
- Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim (¹⁷1996): *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. Leipzig/Berlin: Langenscheidt/Verlag Enzyklopädie.
- Vater, Heinz (1976): Wie-Sätze. In Braunmüller, Kurt / Kürschner, Wilfried (Hgg.): *Akten des 10. Linguistischen Kolloquiums Tübingen 1975. Band 1*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag. 209-222.

辞書

- Langenscheidt: *Langenscheidts e-Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache 4.0* (2003), Langenscheidt KG Berlin und München.
- Duden: *Duden Das große Wörterbuch der deutschen Sprache*, 4. Aufl. Mannheim 2012 [CD-ROM]

執筆者連絡先 : narita@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2021年1月11日

<特集「モダリティ」>

ポーランド語におけるモダリティ¹ Modality in Polish

森田 耕司
Koji Morita

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿は、特集「モダリティ」(『語学研究所論集』第 16 号, 2011, 東京外国語大学) に寄与するものである。本稿の目的は、30 個のアンケート項目に対するポーランド語のデータを提供することである。

Abstract: This report contributes to the special cross-linguistic study on ‘modality’ (Journal of the Institute of Language Research 16, 2011, Tokyo University of Foreign Studies). The purpose of this paper is to offer Polish data for the question of 30 phrases.

キーワード: ポーランド語, モダリティ

Keywords: Polish, Modality

『語学研究所論集』第 16 号の特集「モダリティ」に関する風間 (2011) のまえがきに提示されているアンケート項目及びその意図や説明に基づき、ポーランド語のデータを提示する。必要に応じて、解説も加える。

1. (その仕事が終わったら) もう帰ってもいいですよ。

【許可】「～してもいい」

Możesz	już	wracać	do	domu.
can-2SG.IMPF.PRS	already	return-IMPF.INF	to	house-GEN

ポーランド語は、能力可能と状況可能を明確に区別する言語に属するが、例文 1 では許可の意味で状況可能の助動詞 *móc* が用いられる。ポーランド語では特に強調する必要がない限り、代名詞による主語は基本的に省略されるが、助動詞 *móc* に 2 人称単数形の標示が出ている。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deedja>

¹ ポーランド語のデータ作成に際して、ご協力いただいた本学特任講師のカロリナ・レシニェフスカ先生に、心よりお礼を申し上げます。

2. (腐っているから、あなたは) それを食べてはいけない/それを食べるな.

【禁止】「～するな」

Nie	wolno	tego	jeść.
NEG	allowed-PRED	that-GEN	eat-IMPF.INF

Nie	jedz	tego.
NEG	eat-IMPF.IMP	that-GEN

ポーランド語には特別な禁止専用の形式がないため、例文2の1文目のように「許可+否定」で表現するか、2文目のように「命令+否定」で表現することになる。

3. (遅くなったので) 私たちはもう帰らなければならない.

【義務】「～しなければならない」

Musimy	już	wracać	do	domu.
must-1PL	already	return-IMPF.INF	to	house-GEN

確信の助動詞 *musieć* 「～はずだ」と同じ形式により、義務「～しなければならない」も表現される。

4. (雨が降るそうだから) 傘を持って出かけたほうがいいよ.

【推奨】「～したほうがいい」

Lepiej	wziąć	parasol.
better	take-PF.INF	umbrella-ACC

日本語と同じように「(より) 良い」という意の形容詞/副詞が用いられる。

5. 歳をとったら、子供の言うことを聞くべきだ/聞くものだ.

【評価的義務】「～するべきだ/～するものだ」

Kiedy	się	zestarzejemy,	powinniśmy	słuchać	tego,
when	REF	age-1PL.PF	should-1PL.PRED	listen-IMPF.INF	that

co	mówią	nasze	dzieci.
what	tell-3PL.IMPF.PRS	our	children

評価的義務は、述語 *powinien* 「(当然) ～べきである」の1人称複数形で表現されている。

6. お腹が空いたので、(私は) 何か食べたい.

【希望】「～したい」

Zgłodniałem,	więc	chcę	coś	zjeść.
get hungry-1.M.SG.PF.PST	so	want-1SG.IMP.F.PRS	something-ACC	eat-PF.INF

希望は、主に英語の want に相当する *chcieć* で表現される。

7. 私が持ちましょう。

【意志】「(私が) ~しよう」

Wezmę.

take-1SG.PF.PRS

意志は単なる 1 人称単数形の動詞で表現するが、大切なのはアスペクトであり、ここでは完了体である。例文 7 の場合、動詞 *wziąć* 「持つ」が他動詞であるため、目的語（例えば、*to* 「それ」等）を加え、*Wezmę to* 「(私が) それを持ちましょう」または *Ja to wezmę* 「私がそれを持ちましょう」のように、目的語を添えた方がより自然である。

8. じゃあ、一緒に昼ご飯を食べましょう。

【勧誘】「(私たちが) ~しよう」

No	więc,	zjedzmy	razem	lunch.
well	so	eat-1PL.PF.IMP	together	lunch-ACC

勧誘は、動詞の 1 人称複数形またはその命令形で表現されるが、アスペクトが重要であり、例文 8 の場合は、完了体動詞で表現される。

9. 一緒に昼ご飯を食べませんか？

【相手の意向が不明な場合の勧誘】「~しませんか」

Może	zjemy	razem	lunch?
maybe	eat-1PL.PF.PRS	together	lunch-ACC

相手の意向が不明な場合、助詞 *może* 「もしかしたら／よろしかったら」を文頭に添え、疑問文にすることにより「~しませんか」という勧誘や提案をするのが、一般的である。

10. 明日、良い天気になるといいなあ。／明日は良い天気になってほしいなあ。

【希望】「~といいなあ／~してほしいなあ」

Mam	nadzieję,	że	jutro	będzie
have-1SG.IMP.F.PRS	hope-ACC	that	tomorrow	be-3SG.IMP.F.FUT
piękna	pogoda.			
beautiful-NOM	weather-NOM			

名詞 **nadzieja** 「希望」に後続する関係節内は直接法による表現が多い。

11. (私はここで待っているから) すぐにそれを持って来なさい。

【命令】「～しろ」

Przynieś	to	natychmiast.
bring-2SG.PF.IMP	it	immediately

命令は、動詞の命令形で表現されるのが一般的である。

12. そのペンをちょっと貸していただけませんか？

【懇願】「～していただけませんか？」

Czy	mógłbyś	mi	pożyczyć	na chwilę	ten	długopis?
Q	can-2.M.SG.IMP.F.SBJV	I-DAT	lend-PF.INF	for a moment	that	pen-ACC

懇願は、可能の助動詞を仮定法で表現することにより、婉曲化するのが一般的である。

13. あの人は中国語が読めます。／あの人は中国語を読むことができます。

【能力可能】「～できる」

Ta	osoba	umie	czytać	po chińsku.
that	person	be able to-3SG.IMP.F.PRS	read-IMP.F.INF	in Chinese

能力可能は、基本的に専用の助動詞 **umieć** により表現される。

14. 明かりが暗くて、ここに何が書いてあるのか、読めない。

【状況可能】「～できる」

Światło	jest	tak	słabe,	że	nie	mogę
light-NOM	be-3SG.PRS	so	weak	that	NEG	can-1SG.IMP.F.PRS
odczytać	tego,	co	tu	jest	napisane.	
read out-PF.INF	that-GEN	what	here	be-3SG.IMP.F.PRS	written-PF	

状況可能は、基本的に専用の助動詞 **móc** により表現される。

15. (朝早く出発したから) 彼らはもう着いているはずだ／もう着いたに違いない。

【確信】「～はずだ」

Oni	już	muszą	być	na miejscu.
they-MP	already	must-3PL.IMP.F.PRS	be-INF	in place

確信は、基本的に専用の助動詞 *musieć* により表現される。

16. (あの人は) 明日はたぶん来ないだろう。

【推量】「～だろう」

Przypuszczam,	że	jutro	chyba	nie	przyjdzie.
suppose-1SG.IMP.F.PRS	that	tomorrow	surely	NEG	come-3SG.PF.PRS

推量は、推量専用の動詞 *przypuszczać* を用いて表現されることが多い。

17. 彼らはまだ来ないなんて、きっと途中で車が壊れたんじゃないか。

【疑念】「～のではないか」

Skoro	oni	jeszcze	nie	przyjechali,	to	podejrzewam,
since	they-MP	still	NEG	arrive-3.MP.PL.PF.PST	so	suspect-1SG.IMP.F.PRS

że	pewnie	samochód	się	zepsuł	po drodze.
that	confidently	car	REF	break-3.M.SG.PF.PST	on the way

疑念は、動詞 *podejrzewać* 「疑わしく思う／推察・想像する」により表現するのが一般的である。その代わりに再帰動詞 *obawiać się* 「心配する」で表現することも可能である。ポーランド語の「壊れる」には再帰動詞 *zepsuć się* が使われている。

18. (昼間だからあの人は家に) さあ、いるかもしれないし、いないかもしれない。

【可能性】「～かもしれない」

No,	może	być,	albo	jej	nie	być.
well	can-3SG	be-INF	or	that-GEN	NEG	be-INF

可能性は、状況可能の助動詞で表現することができる。

19. (額に触ってみて) どうもあなたは熱があるようだ。

【視覚／聴覚以外の感覚による判断】「～ようだ」

Wydaje	mi	się,	że	masz	gorączkę.
seem-3SG.IMP.F.PRS	I-DAT	REF	that	have-2SG.IMP.F.PRS	fever-ACC

視覚／聴覚以外の感覚による判断においては、ポーランド語は(共感覚に基づき)視覚の動詞を転用し表現する言語、いわゆる [seem 型] 言語に属する。ポーランド語では、再帰動詞 *wydawać się* 「～のように見える／

思われる」が使われることが多い。

20. (天気予報によれば) 明日は雨が降るそうだ。

【伝聞】「～そうだ」

Podobno	jutro	będzie	padał	deszcz.
allegedly	tomorrow	be-3SG.IMPF.FUT	fall-3.M.SG.IMPF.PST	rain-NOM

伝聞には、助詞 *podobno* 「～という話／うわさだ」を用いた特殊な形式がある。

21 もしお金があつたら、あの車を買うんだけれどなあ。

【反実仮想】「～だったら～するのだが」

Gdybym	miał	pieniądze,	kupiłbym	ten	samochód.
If-1SG.SBJV	have-3.M.SG.IMPF.PST	money	buy-1.M.SG.PF.SBJV	this	car-ACC

例文 21 と 22 にあたる反実仮想や反実仮想過去は、ポーランド語の場合、主節・従属節ともに特別な法の形式を用いて表現する。

22. もしあなたが教えてくれていなかったら、私はそこにたどり着けなかったでしょう。

【反実仮想過去】「～だったら～したことだろう」

Gdybyś	nie	powiedział,	nie	dotarłbym	tam.
If-2SG.SBJV	NEG	say-3.M.SG.PF.PST	NEG	reach-1.M.SG.PF.SBJV	there

例文 22 は、状況により「もし（現在ないし未来において）あなたが教えてくれなかったら、私はそこにたどり着けないでしょう」と訳すことも可能である。どちらの意味かは、その時どきの状況によって判断する必要がある。

23. (あの人は) 街へ行きたがっている。

【3 人称の主体による希望】「～したがつている」

Chce	jechać	do	miasta.
want-3SG.IMPF.PRS	go-IMPF.INF	to	town-GEN

ポーランド語では、1 人称による希望と同じく *chcieć* を用いて表現するのが一般的である。

24. 僕にもそれを少し飲ませろ。

【1 人称命令】「(私に) ～させろ」

Pozwól	mi	też	trochę	tego	się	napić.
let-PF.IMP	I-DAT	also	a bit	that-GEN	REF	drink-PF.INF

ポーランド語では, 許可使役の形式によって表現される. 動詞「飲む」には, 例文 24 の場合, 「それを少し」という全体の一部分であることから, 再帰動詞 *napić się* 「(ある量を) 飲む」が使われている.

25. これはあの人に持って行かせろ／持って行かせよう.

【3人称命令】「(彼に) ~させろ」

Niech	ta	osoba	to	weźmie.
let	that	person	it	take-3SG.PF.PRS

例文 25 のように, ポーランド語には文の冒頭に *niech* を添えた 3 人称命令形専用の特別な形式が存在する.

26. そのテーブルの上のお菓子は後で食べなさい.

【遠未来命令形】「(あとで) ~しろ」

Słodczyce, które	leżą	na tym stole,	zjedz	później.	
sweets	that	lie-3PL.IMP.F.PRS	on the table	eat-PF.IMP	later

ポーランド語には, 命令形に近未来／遠未来の対立は存在しない.

27. もっと早く来ればよかった.

【反実仮想】「~だったら~するのだが」

Chciałbym	przyjechać	wcześniej.
want-1.M.SG.IMP.F.SBJV	arrive-PF.INF	earlier

この例文は, 文脈や状況により「もっと早く来たいんだけどなあ」と訳すことも可能である.

28. あなたも一緒に行ったら (どうですか) ?

【脱従属化】「~したら (どうか)」

Może	ty	też	pójdiesz	razem?
maybe	you-NOM	also	go-2SG.PF.PRS	together

例文 28 のような提案をする場合, 助詞 *może* 「もしかしたら／よろしかったら」を文頭に添え, 疑問文にすることによって「~したらどうか」と表現するのが一般的である.

29. オレがそんなこと知るか!

【(疑問詞を含まない) 反語】「~か!」

Czy	ja	to	wiem!
Q	I-NOM	it	know-1SG.IMP.F.PRS

疑問助詞 czy 等を用いるのが一般的である。

30. これを作った（料理した）のは、お母さんだよ？／いいえ、私が作ったのよ。

【付加疑問】「～よね!?!」

To	ugotowała	twoja	matka,	prawda?
it	cook-3.F.SG.PF.PST	your	mother	true

Nie,	ja	to	ugotowałam.
NEG	I-NOM	it	cook-1.F.SG.PF.PST

付加疑問を示す要素には *prawda*（英語の *true*, *right* に相当）を文末に添えることが多い。

略語

ACC=対格, DAT=与格, F=女性, FUT=未来, GEN=生格, IMP=命令形, IMPF=不完了体, INF=不定形, INST=造格, LOC=前置格, M=男性, MP=男性人間形, NEG=否定, NMP=非男性人間形, NOM=主格, PST=過去, PL=複数, PF=完了体, Q=疑問助詞, PRED=述語, PRS=現在, REF=再帰代名詞, SBJV=仮定法, SG=単数, 1=1 人称, 2=2 人称, 3=3 人称

参考文献

風間伸次郎 (2011) 「特集 モダリティ まえがき」東京外国語大学語学研究所『語学研究所論集』第 16 号, pp. 29-55.

執筆者連絡先 : morita@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2020 年 12 月 15 日

<特集「情報構造と名詞述語文」>

情報構造と名詞述語文：チェコ語
Information structure and nominal predicate sentences: Czech

浅岡 健志朗
Kenshiro Asaoka

東京大学大学院／日本学術振興会特別研究員
Graduate School of the University of Tokyo / JSPS Research Fellowship for Young Scientists

要旨：本稿は、特集「情報構造と名詞述語文」のアンケートに沿って、チェコ語のデータを提供することを目的とする。

Abstract: The purpose of the present paper is to give data of information structure and nominal predicate sentences in the Czech language, based on the questionnaire of the special topic of this volume.

キーワード：情報構造、名詞述語文、チェコ語

Keywords: information structure, nominal predicate sentences, Czech

1. はじめに

本稿は、特集「情報構造と名詞述語文」のアンケートに沿って、チェコ語のデータを提示するものである。データは、日本語の例文をコンサルタントに翻訳していただく形で得られた。コンサルタントはボヘミア地方出身の30代前半チェコ語母語話者1名である。

2. データ

- (1) Hele, to přišel Petr? /
hey that.means come.3SG.PST P.SG.NOM
Ne, to není Petr, to přišel Honza.¹
no that.SG.NOM be.NEG.3SG.PRS P.SG.NOM that.means come.3SG.PST H.SG.NOM
「えっ、Petr が来たの？／いや、Petr じゃなくて Honza が来たんだ」

- (2) Kdo přišel? / (Přišel) Petr.
who.SG.NOM come.3SG.PST come.3SG.PST P.SG.NOM
「誰が来たの？／Petr が来たよ」



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・commons 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ 一番目の節と三番目の節における to は項ではなく、文修飾の機能を果たす要素である。

- (3) Není větší Petr? /
 be.NEG.3SG.PRS bigger.SG.NOM P.SG.NOM
 Ne, Petr ne, Honza je větší.
 no P.SG.NOM no H.SG.NOM be.3SG.PRS bigger.SG.NOM
 「Petrのほうが大きいんじゃないの? / いや、Petr じゃなくて、Honzaのほうが大きいんだよ」
- (4) Co se stalo? / Jo, teď právě přišla návštěva.²
 what.NOM REFL.ACC happen.3SG.PST yeah now just come.3SG.PST visitor.SG.NOM
 「(電話で) どうしたの? / うん、今、お客さんが来たんだ」
- (5) Prý to dítě bouchlo Petra. /
 they.say that.SG.NOM child.SG.NOM hit.3SG.PST P.SG.ACC.
 Ale ne Petra, Honzu.³
 no not P.SG.ACC H.SG.ACC
 「あの子供が Petr を叩いたんだって / いや、Petr じゃなくて、Honza を叩いたんだよ」
- (6) Mají tu červenou a modrou tašku,
 have.3PL.PRS here red.SG.ACC and blue.SG.ACC bag.SG.ACC
 kterou si koupíš? / (Koupím si) Modrou.
 REL.SG.ACC REFL.DAT buy.2SG.PRS buy.1SG.PRS REFL.DAT blue.SG.ACC
 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買うの? / (私は) 青い袋を買うよ」
- (7) Kde je Petr? / Petr je od rána pryč.
 where be.3SG.PRS P.SG.NOM P.SG.NOM be.3SG.PRS since.morning away
 「Petr はどこですか? / Petr は朝からどっかへでかけたよ」
- (8) Koho bouchlo to dítě? /
 who.SG.ACC hit.3SG.PST that.SG.NOM child.SG.NOM
 (Bouchlo) Svého mladšího bratra.
 hit.3SG.PST own.SG.ACC younger.SG.ACC brother.SG.ACC
 「(あの子供は) 誰を叩いたの? / (あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ」

² 先行する文において、stalo と se は全体として「起こった」に相当する意味を表す述語を構成している。不定形は stát se である。この表現において、stát は常に再帰代名詞 se と共に用いられる。se は接語であり、stát とは統語的に離れた位置に出現しうる。stát se のように、常に再帰代名詞 se (ないしその与格形の si) を伴う動詞を、再帰動詞と呼ぶ。

³ 返答の文における ale は、否定表現と共起することで不賛成(相手の発言の否定)を表す間投詞である。

- (9) Co to je? /
 what.NOM that.SG.NOM be.3SG.PRS
 Jo, Petr bouchl svého mladšího bratra.
 yeah P.SG.NOM hit.3SG.PST own.SG.ACC younger.SG.ACC brother.SG.ACC
 「(電話で) どうしたの? / うん、Petr が (自分の) 弟を叩いたんだ」
- (10) Kde je ten koláč? /
 where be.3SG.PRS that.SG.NOM cake.SG.NOM
 Petr ho snědl.
 P.SG.NOM 3SG.ACC eat.up.3SG.PST
 「あのケーキ、どうした? / (ああ、あれは) Petr が食べちゃったよ」
- (11) To, co jsem včera v obchodě koupil,
 that.SG.NOM what.ACC AUX.1SG yesterday in shop.SG.LOC buy.3SG.PST
 je tahle kniha.⁴
 be.3SG.PRS this.SG.NOM book.SG.NOM
 「私が昨日お店から買ってきたのはこの本だ」
- (12) Tamten člověk je učitel.
 that.SG.NOM person.SG.NOM be.3SG.PRS teacher.SG.NOM
 V téhle škole pracuje už deset let.
 in this.SG.LOC school.SG.LOC work.3SG.PRS already for.10.years
 「あの人は先生だ。この学校でもう 10 年働いている」
- (13) Jeho otec je tamten člověk.
 his father.SG.NOM be.3SG.PRS that.SG.NOM person.SG.NOM
 「彼のお父さんは、あのんだ」
- (14) Tamten člověk je jeho otec.
 that.SG.NOM person.SG.NOM be.3SG.PRS his father.SG.NOM
 「あの人が彼のお父さんだ」
- (15) Pozítří se říká dnu,
 the.day.after.tomorrow.SG.NOM REFL.ACC say.3SG.PRS day.SG.DAT
 který přichází za zítřkem.
 which.SG.NOM come.3SG.PRS after tomorrow.SG.INS
 「あさってっていうのはね、明日の次の日のことだよ」

⁴ jsem は過去時制を標示する動詞の屈折形式の一部である。統語的には接語として振る舞い、動詞（この事例においては koupil）とは離れた位置に出現しうる。主語が一人称単数の場合は jsem、一人称複数場合は jsme、二人称単数では jsi ないし jste、二人称複数では jste という形式になる。主語が三人称の場合にはこの要素は出現しない。

- (16) Já si dám kávu.^{5 6}
 1SG.NOM REFL.DAT give.1SG.PRS coffee.SG.ACC
 「(何人かが入った喫茶店で注文を聞かれて) 私はコーヒーだ」
- (17) Kdo si objednal kávu? / Já.
 who.NOM REFL.DAT order.3SG.PST coffee.SG.ACC 1.SG.NOM
 「どなたがコーヒーですか? / コーヒーは私だ。」
- (18) Ta nová tlustá kniha je drahá.
 that.SG.NOM new.SG.NOM thick.SG.NOM book.SG.NOM be.3SG.PRS expensive.SG.NOM
 「その新しくて厚い本は (値段が) 高い」
- (19) Hele, už není cukr.
 hey already be.NEG.3SG.PRS sugar.SG.NOM
 「(砂糖入れを開けて) あっ、砂糖が無くなっているよ！」
- (20) S někým jsem se měl odpoledne sejit.
 with someone.INS AUX.1SG REFL.ACC have.to.SG.PST in.the.afternoon meet.INF
 Kdo to byl? Jo, vlastně Petr.^{7 8}
 who.NOM that.SG.NOM be.3SG.PST yeah actually P.SG.NOM
 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ? あっ、そうだ、Petr だったな」

略号

ACC (対格) AUX (助動詞) DAT (与格) INF (不定形) INS (造格) LOC (所格/前置格) NEG (否定)
 NOM (主格) PL (複数) PRS (現在) PST (過去) REFL (再帰代名詞) REL (関係詞) SG (単数)

執筆者連絡先 : kenshiro.asaoka1990@gmail.com

原稿受理 : 2020 年 12 月 30 日

⁵ si は再帰動詞 *dát si* 「食べる/飲む」の一部である。脚注 2 を参照。

⁶ チェコ語ではこのような状況で次のようなコンピュータを用いたウナギ文の表現はできない。(17)の逆行ウナギ文も同様に不可である。

(i) *Já jsem káva.
 1SG.NOM be.1SG.PRS coffee.SG.NOM

「(何人かが入った喫茶店で注文を聞かれて) 私はコーヒーだ」を意図。

⁷ *jsem* は過去時制における動詞の屈折形式の一部である。脚注 4 を参照。

⁸ 最初の文における *se* は、再帰動詞 *sejít se* 「会う」の一部である。脚注 2 を参照。

<特集「情報標示の諸要素」>

ウルドゥー語の情報標示の諸要素 Markers of informational structure of Urdu

萬宮 健策
Kensaku Mamiya

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿は特集「情報標示の諸要素」(『語学研究所論集』第22号, 2017, 東京外国語大学)に寄与する。25個のアンケート項目に対するウルドゥー語データを与え、情報構造や不定代名詞などについての検討を行った。

Abstract: This report contributes to the special cross-linguistic study on ‘markers of informational structure’ (*Journal of the Institute of Language Research* 22, 2017, Tokyo University of Foreign Studies). The purpose of this paper is to offer the Urdu data for the question of 25 phrases.

キーワード: ウルドゥー語、情報構造、とりたて表現、不定代名詞

Keywords: Urdu, informational structure, focus, indefinite pronouns

1. はじめに

本稿では、例文を参照しながら、ウルドゥー語の情報標示の諸要素について検討する。

ウルドゥー語は、現代インド・アールヤ諸語の1つに数えられ、屈折語である。格表示は、後置詞が担う機能であり、名詞(相当語)は、後置詞を伴わないか、伴うかという主格と後置格を語尾変化で示す。動詞過去分詞を用いる単純過去、完了表現に限り、能格構造が現れることでも知られる。その点からも、この言語では、動詞の自他を厳密に区別すると言える。

2. 例文の分析

本章では、例文のウルドゥー語訳を提示し、気付きの点を個別に示す。

2.1. 主題卓越型類型論の軸項

ウルドゥー語では、与格構文、能格構文でなければ、文法上の主語と意味上の主語は一致し、主格で表される。主格(ゼロマーカ)を取るのは、通常文中で一語に限定され、1)では「野菜」、2)では「痛み」が主格で現れ、それぞれ売れる、あるという動詞と一致している。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

1) この土地は野菜がよく育つ。だから高い値段で売れるだろう。

is	zamīn	par	sabziyā	acc ^{hī}	
この OBL.SG.	土地 OBL.F.SG.	LOC.	野菜 NOM.F.PL.	よい ADV.	
ugtī hāī.	is liyē	acc ^{hī}	qīmat	mē	bikē gī
育つ PRS.F.PL.	だから	いい ADJ.F.	値 OBL.F.SG.	LOC.	売れる FUT.F.PL.

2) 私は頭が痛い。だから今日は休む。

mērē	sar	mē	dard	hai.
私 GEN.OBL.M.	頭 OBL.M.SG.	LOC.	痛み NOM.M.	ある PRS.SG.
is liyē āj	(māī)	ārām karū gā.		
だから 今日 ADV.	(私)	休む FUT.M.SG.		

2.2. とりたて表現

ウルドゥー語におけるとりたて表現については、日本語では、「だけ」や「しか」という複数の副助詞がその役割を担うように、hī および tō という副助詞にその機能が集約されると指摘できる。3人称代名詞には hī との融合形もある。どちらの副助詞がどの場合に用いられるかについては、前後の文脈と関係することが多い一方、入れ換え可能な場合も多い。また、別の副詞 (sirf など。例文 3a を参照) を伴う場合もある。

3) あの**人だけ**、時間通りに来た。

vō	ādmī	hī	waqt	par	āyā.
あの	人 NOM.M.SG.	だけ	時間 OBL.M.	LOC.	来る PST.M.SG.
3a) sirf	vō	ādmī	waqt	par	āyā.
だけ ADV.	あの	人 NOM.M.SG.	時間 OBL.M.	LOC.	来る PST.M.SG.

3a)の文頭にある副詞は、直後の語句「あの人」を限定する機能を持つ。ウルドゥー語は多くの場合日本語と同じ語順だが、この副詞は当てはまらない。

4) これはここで**しか**買えない。

yē	siwāē	yahā	kē	nahī
これ NOM.SG.	除いて ADV.	ここ	GEN.OBL.	NEG.
milē gā.				
手に入る FUT.M.SG.				

4a) yē	yahā	hī	milē gā.
これ NOM.SG.	ここ ADV.	だけ	手に入る FUT.M.SG.

4)では、siwāē がペルシア語文法を借用する形で前置されているが、ウルドゥー語文法にしたがって yahā kē siwā という語順も用いられる。4)の語順の方が文語表現寄りである。4a)では、yahā hī の代わりに yahī という強調形も用いることができる。

5) その家にいたのは子供**ばかり**だった。

us	g ^h ar	par	baccē	hī	thē.
その OBL.SG.	家 OBL.M.SG.	LOC.	子ども NOM.M.PL.	だけ	いる PST.M.PL.

6) 次回こそ, 失敗ないようにしよう.

aglī bār	hī	nākām	nah	hōnē	kī
次回 ADV.	こそ	失敗した ADJ.	NEG.	なる INF.OBL.	GEN.F.
kōšīš karū gā.					
努力する FUT.M.SG.					

6a) aglī bār	hī	kāmyāb hōnē	kī	kōšīš karū gā.
次回 ADV.	こそ	成功する INF.OBL.	GEN.F	努力する FUT.M.SG

6a)の文は, 6)文で「失敗した」という形容詞に含まれる否定要素と, 次の否定辞が重複しているため, 否定の否定を避けるために参考として挙げた.

7)以下の例文は, 日本語の副助詞に相当する語として **tō** や **hī** が用いられている例である. これらの語は, 辞書により副助詞や不変化詞などさまざまな説明がなされ, その機能の多さがうかがえる.

7) 疲れたね, お茶**でも**飲もう.

(ham)	ʔak gaē hāī nā.	cāē	tō	piē.	
(我々 NOM.)	疲れる PRS-PST.M.PL.	お茶 NOM.F.	でも	飲む FUT.PL.	
7a) (āp)	ʔak gaē	hō gē.	cāē	tō	piē.
(あなた NOM.)	疲れる PST.M.PL.	COP.FUT.M.PL	お茶 NOM.F.	でも	飲む FUT.PL.

8) 水**さえ**あれば, 数日間は大丈夫だ.

pānī	hī	hō	tō	kuc ^h	dinō
水 NOM.M.	さえ	ある FUT.SG.	CONJN.	少し	日 OBL.M.PL.
tak	rah	sakē gā.			
まで	いる STEM.	できる FUT.M.SG.			
8a) sirf	pānī	hō	tō	b ^h	kuc ^h
だけ	水 NOM.M.	ある FUT.SG.	CONJN.	も	少し
dinō	tak	rah	sakē gā.		
日 OBL.M.PL.	まで	いる STEM.	できる FUT.M.SG.		

9) 小さい子供**まで**, その仕事の手伝いをさせられた.

c ^h ōṭē	baccō	kō	b^h	us
小さい ADJ.OBL.M.	子ども OBL.M.PL.	DAT.	も	その OBL.SG.
kām	mē	madad karnā	paṛī.	
仕事 OBL.M.SG.	LOC.	手伝う INF.	AUX.PST.F.SG.	

10) 私はお金**なんか**欲しくない.

muj ^h ē	paisē	tō	nahī	cāhiyē.
私 DAT.	金 NOM.M.PL.	なんか	NEG.	必要である PTCL.

11) 自分の部屋ぐらい, 自分できれいにしなさい.

apnē	kamrē	kī	safāi	tō
自分の OBL.M.SG	部屋 OBL.M.SG.	GEN.F.	掃除 NOM.F.	ぐらい
xud	(kiyā) karō.			
自ら ADV.	する IMP.SG.			

12) 私にもちょうだい.

mujhē	bhī	dēnā.
私 DAT.	も	与える IMP.

13) お父さんもう帰って来たね. お母さんは?

wālid	sāhab	wāpas ā gaē.	aur	wālidah sāhibah?
父親 NOM.M.PL.	戻る PST.M.PL.	そして	母親 NOM.F.SG.	

2.3. 不定表現

ウルドゥー語による不定表現は, 不定代名詞を用いる. 人に対しては「誰か」kōī, モノに対しては「何か」kuc^hが用いられる. また, 否定辞 nahīを加えると, 全否定になる.

14) 「誰か(が)電話してきたよ。」

kisī	kā	fōn	āyā t̥ā.
誰か OBL.	GEN.	電話 NOM.M.SG.	来る PST.M.SG.

15) 「誰かに聞いてみよう。」

(māī)	kisī	sē	pūc ^h ū gā.
(私 NOM.)	誰か OBL.	に	尋ねる FUT.M.SG.

16) 「私のいない間に誰か来た?」

mērī	ğairmaujūdagī	mē	kōī	āyā t̥ā?
私 GEN.OBL.F.	不在 OBL.F.SG	LOC.	誰か NOM.	来る PST-PRE.M.SG.

17) 「誰か来たら, 私に教えてください。」

agar	kōī	āē	tō	mujhē	batāiyē.
もし	誰か NOM.	来る FUT.SG.	CONJN.	私 DAT.	伝える IMP.PL.

17a) jab	kōī	āē	tō	mujhē	batāiyē.
REL.	誰か NOM.	来る FUT.SG.	CONJN.	私 DAT.	伝える IMP.PL.

18) 「今日は誰も来るとは思わない. /今日は誰も来ないと思う。」

mērē	xayāl	mē	āj	kōī
私 GEN.OBL.SG.	考え OBL.M.SG.	LOC.	今日 ADV.	誰か NOM.
nahī	āē gā.			
NEG.	来る FUT.M.SG.			

18a) māī nahī samaj̄h̄tā ke āj kōī
私 NOM. NEG. 理解する PRS.M.SG. CONJN. 今日 ADV. 誰か NOM.
āē gā.
来る FUT.M.SG.

18b) muj̄h̄ē nahī lagtā ke āj kōī
私 DAT NEG 感じる PRS.M.SG. CONJN. 今日 ADV 誰か NOM.
āē gā.
来る FUT.M.SG.

19) 「そこには今誰もいないよ。」
ab wahā kōī nahī hai.
今 ADV. そこ 誰か NOM. NEG. いる PRS.SG.

20) 「(それは) 誰でもできる。」
yē kōī bhī kar saktā hai.
これ NOM. 誰か NOM. も する STEM. できる PRS.M.SG.

21) 「そんなこと (は), みんな知っているんじゃないか!」
aisī bāt tō sab̄hī kō
このような ADJ.F. 事柄 NOM.F.SG. は みな OBL. DAT.
mālūm hai nā?!
知っている PRS.SG. 付加疑問

22) 「そんなもの, 誰が買うんだよ!?, 誰も買うわけじゃないか!」
yē kaun lē gā? kōī nahī lē gā.
これ NOM. 誰 NOM. 取る FUT.M.SG. 誰か NOM. NEG. 取る FUT.M.SG.

22)は反語表現である。ウルドゥー語の反語表現も疑問文と同じ文型となり、文脈や抑揚により判断される。

2.4. なわ張り理論

いわゆる「なわ張り理論」については、以下の例文を見る限り、話し手のなわ張り内に留まる(23)場合は、直接話法で表現されるが、そうでない(24), 25)場合、複文構造となって、推量や伝聞の形式が先行する。先行する部分のうち、24)は与格構文、25)は能格構文である。

23) 「君は英語がうまいね。」
tum angrezi acchī bōltē hō.
君 NOM. 英語 NOM.F.SG. よく ADV. 話す PRS.M.PL.

24) 「君は退屈そうだね。」

lagtā hai ke tum bōr hō gaē.
感じる PRS.M.SG. CONJN. 君 NOM. 退屈な ADJ. なる PST.M.PL.

25) 「明日も寒いらしいよ。」

sunā hai ke kal bhī sardī hō gī.
聞く PRS-PFT.M.SG. CONJN. 明日 も 寒さ NOM.F.SG. ある FUT.F.SG.

3. おわりに

今回例文としてあげられて日本語の文は、ウルドゥー語で表現しにくい、ぴったり当てはまる表現が見つけない文であり、学部の授業でもしばしば取り上げるものが含まれている。今回の例文検討により、あらためて課題が見つかった。中でも、2.4.で扱われている「なわ張り理論」の表現と、ウルドゥー語の副助詞である *tō* および *hī* の用法については、より詳細な検討を要するため、あらためて考える機会を設ける予定である。

最後に、本稿例文に関する質問に詳しく答えていただいたスハイル・アッバース・ハーン先生¹とアーミル・アリー・ハーン先生²に謝意を表す。本稿で用いた例文は、日本語をもとに著者が作成したものを、2人の教員にチェックしていただいたものであるが、内容に誤りがあるとすればその責は全て著者に帰するものである。

グロスについては、The Leipzig Glossing Rules にしたがったが、そこに含まれていないものについては以下のとおり。

CONJN.接続詞, PRS-PFT 現在完了, PST-PFT 過去完了, STEM 語幹.

参考文献

欧文

Kachru, Yamuna. 1980. Aspects of Hindi grammar. New Delhi: Manohar Publications.

和文

加賀谷寛 2005. 『ウルドゥー語辞典』 大学書林

古賀勝郎, 高橋明編 2005. 『ヒンディー語＝日本語辞典』 大修館書店

萩田博, 萬宮健策 2019. 『ニューエクスプレス ウルドゥー語』 白水社

執筆者連絡先 : k_mamiya@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2020年12月31日

¹ 東京外国語大学前特定外国語主任教員。パキスタンのパンジャーブ州出身の50代男性で、母語はパンジャービー語だが、ウルドゥー語が第一言語である。

² 東京外国語大学特定外国語主任教員。パキスタンのスィンド州カラチ市出身の40代男性で、母語がウルドゥー語。

<特集「受動表現」>

朝鮮語・韓国語の受動表現 Passive expression in Korean

長渡 陽一
Youichi Nagato

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 朝鮮語(韓国語)で動詞の受動形に関わる形式には、語形の上で受動と言える *pat-*(받-)「受ける」や *taŋ=ha-*(당하-)「被る」のほか、自動詞化の補助語幹 *-dʒi-*(-지-)や、ヴォイス転換形態素などがある。これらの文が受動と呼べるかどうかは構文や意味などにより判断することになる。朝鮮語で受動構文が可能なのは、被動者が人である直接受身の一部、および持ち物や身体部位の受身、動作主が非明示的な結果目的語の場合である。自動詞の迷惑受身などは受動文にできず能動文で表される。

Abstract: In Korean, the passive forms of verbs include *pat-*(받-) 'to receive' and *taŋ=ha-*(당하-) 'to suffer from', as well as the intransitivizing stem *-dʒi-*(-지-) and the voice-converting morphemes. Whether or not these sentences can be called passive is determined by the sentence structure and meaning. In Korean, passive constructions are possible in some direct passives where the subject is a person, and where the subject is a possessive or a body part and some passives with an effective object where the agent is not explicit. The passive of annoyance of the intransitive verb cannot be expressed in a passive sentence, but in an active sentence.

キーワード: ヴォイス転換形態素、持ち物受身、結果目的語

Keywords: Voice-converting morphemes, Possessive passive, Effective object

1. はじめに

朝鮮語の受動表現の使用率は日本語に比べて少ないようである。許(1999)では、会話文において日本語がコーパスの約6.5%に対して朝鮮語では約2%と算出している。許(1999)では朝鮮語の受身文について「被動文」としており、データの中には日本語訳で「捕まった」となるなど、受身でないと思われる自動詞も含まれるので、これらを除外すれば朝鮮語の受動文はさらに少ないと思われる。

朝鮮語で動詞の受動形として扱われる *-i-*, *-hi-*, *-li-*, *-ki-* (-이-, -히-, -리-, -기-) はヴォイス転換形態素であり、伊藤(2012)も指摘しているように受動とは限らず、自動詞、他動詞、使役も形成するので、形成された自動詞が受身であるかどうかは動詞の形態からは判断できない。また、日本語と朝鮮語の対照研究では、日本語の「られる」形に対応する朝鮮語文を受動文として観察することがある。この視点からは、*teri-*「殴る」の受動形ではない別の語彙である *madʒ-*「殴られる」を受動として扱ったり(例文(1)参照)、また *kol-li-*(걸리-)「掛かる」を *kol-*(걸-)「掛ける」の受動の「掛けられている」として扱う(例文(15)参照)ことがある。いずれにしても、白(2011)が(ヴォイス転換形態素や *-dʒi-*などの形態について)「これらすべてを受身形式として認めるかどうかについては、統一的な見解が得られていない」と指摘しているように、朝鮮語の受動は形態的に定義することは難しい。そこで朝鮮語の受動は、動詞の関連項がとっている格や構文、意味なども含めて定義することになる。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

本稿の朝鮮語発音表記は音素表記を基本としつつ、音声実現形をある程度反映させた。g, d, dʒ, b と k, t, tʃ, p は音素 /g/ (ㄱ), /d/ (ㄷ), /j/ (ㅈ), /b/ (ㅂ) の異音である。これらが形態論的に濃音化する場合は *k* のように示し、もともと濃音である *kk* (ㄱㄱ) と区別した。r (ㄹ) は音節末や重子音のとき *l* とした。ただし、*i-ŏ* は [jŏ], *iss-ta* は [itta], *palp-hi* は [palpʰi] などとなるが、このようなものは音声よりも形態素の特定性を優先するため反映していない。また音節末の閉鎖音は不可聴的開放 [kʰ] で実現するが表記には反映させていない。

本稿のデータを収集するにあたり、日本語文からの朝鮮語文の作成とその後のいろいろな検証は、コンサルタントとして韓国ソウル市出身、現在 40 歳代のキム・ウンソン (金銀鮮) 氏に協力いただいた。

1.1. 受動表現に関わる動詞の形式

朝鮮語には、動詞の受動形をつくるための十分に生産的な方法はない。それぞれ動詞によって次のような形式の操作によって構文的または意味的に受動的な表現が得られるものがある。これらの操作のうち明確に受動と呼べるのは(a)のみである。

- (a) 補助動詞 *pat-* (받-) 「受ける」、*taŋ=ha-* (당하-) 「被る」を付する
- (b) 補助動詞 *=ha-* (하-) 「する」を *=twe-* (되-) 「なる」に替える
- (c) 補助語幹 *-dʒi-* (-지-) をつける
- (d) 動詞語幹にヴォイス転換形態素をつける
- (e) 意味的に受動の対と考えられる別語彙

(a) この形式は *pat-* (받-) 「受ける」、*taŋ=ha-* (당하-) 「被る」を利用しているため意味的に受動と呼べる。この形式を用いるのは、主に補助動詞 *=ha-* (하-) 「する」を伴う他動詞であり、この *=ha-* (하-) を、利益のあるもの時は *pat-* 받- 「受ける」に、被害の時は *taŋ=ha-* 당하- 「被る」に置き換える。ただし *=ha-* (하-) 「する」形式の全ての動詞がこの形式にできるわけではない。

saraŋ=ha- (사랑하-) 「愛する」 → *saraŋ=pat-* (사랑받-) 「愛される」 (2.9 参照)

mojok=ha- (모욕하-) 「侮辱する」 → *mojok=taŋ=ha-* (모욕당하-) 「侮辱される」

前接の名詞が補助動詞から独立することがあり、その時は *saraŋ-ul ha-* (사랑을 하-), *saraŋ-ul pat-* (사랑을 받-) のように対格 *-rul / -ul* (-를/-을) をとる。また *kwerop-hi-* 괴롭히- 「苛める」のように補助動詞 *=ha-* (하-) 「する」を伴わない動詞でも、動名詞化 (*-m*) して *kwerop-hi-m-ul taŋ=ha-* (괴롭힘을 당하-) 「いじめられる」のようにできるものがある。また、被動者は必ず人(有情物)であり、*ijon=taŋ=ha-* (이용당하-) 「利用される」なども物が被動者にはならない。

(b) この方法は *palmjŏŋ=ha-* (발명하-) 「発明する」のような他動詞を *palmjŏŋ=dwe-* (발명되-) とするもので、このように動作主を *-e ui=he* (-에 의해) 「によって」などで表せるものは構文的に受動(「発明される」と考えることもできる。しかし *pal'ŏn* (발전) 「発展」や *kamjŏm* (감염) 「感染」¹ のように *=ha-* (하-) と *=dwe-* (되-) がほぼ同じ意味「発展する」「感染する」で用いられるものもある。

「感染」	<i>*pairɔsu-ga kamjŏm=ha-</i> ウイルス-NOM 感染 する	<i>pairɔsu-e kamjŏm=dwe-</i> 「ウイルスに感染する」 ウイルス-DAT 感染 なる
	<i>*마이러스가 감염하-</i>	바이러스에 감염되-
「発展」	<i>pal'ŏn=ha-</i> 「発展する」 발전하-	<i>pal'ŏn=dwe-</i> 「発展する」 발전되-

1 *kamjŏm=ha-* (감염하-) 「感染する」は韓国国立国語院『標準国語大辞典』に登録されている(査読者から指摘頂いた。ここに感謝する)が、コンサルタントによれば一般には用いられないとのことである。

(c) 補助語幹 *-dʒi-* (-지-) には次のような機能がある。

(c-1) 無意志的变化を表す:

tɔp- (덥-) 「暑い」 → *tɔwɔ-dʒi-* (더워지-) 「暑くなる」
tfoaha- (좋아하-) 「好む」 → *tfoahe-dʒi-* (좋아해지-) 「好きになる」
kkunh- (끊-) 「切る」 → *kkunhɔ-dʒi-* (끊어지-) 「切れる」

(c-2) 無意志的な自発性を表す:

ka- (가-) 「行く」 → *ka-dʒi-* (가지-) (動きにくかった自転車に油をさしたら「よく動く」など)
ssu- (쓰-) 「書く」 → *ssɔ-dʒi-* (써지-) 「(書きやすくすらすら) 書ける」
nukki- (느끼-) 「感じる」 → *nukki-ɔ-dʒi-* (느껴지-) 「感じられる」

(c-3) (d)や他動詞化の *-u-* (-ㅓ-), *-iu-* (-ㅣ우-) につけて自動詞化する。動作主は明示されない。

ssu- (쓰-) 「書く」 → *ssu-i-* (쓰이-) 「書かれる」 → *ssu-i-ɔ-dʒi-* (쓰여지-) 「書かれる」
al- (알-) 「知る」 → *al-li-* (알리-) 「知らせる」 → *al-li-ɔ-dʒi-* (알려지-) 「(広く) 知られる」
sɔ- (서-) 「立つ」 → *se-u-* (세우-) 「立てる」 → *se-u-ɔ-dʒi-* (세워지-) 「立てられる」(2.5 参照)
pitʃi- (비치-) 「映る」 → *pitʃu-* (비추-) 「映す」 → *pitʃu-ɔ-dʒi-* (비춰지-) 「映る、映される」

(d) ヴォイス転換形態素は特徴母音が *-i-* で、主に語幹末の音により *-i-*, *-hi-*, *-li-*, *-gi-* (이, 히, 리, 기) の異形態がある。受動に関連する機能としては他動詞を自動詞化する機能があるが、逆に自動詞を他動詞に、あるいは自動詞や他動詞を使役にするもの、さらには他動詞から同じ方法で自動詞と使役の両方を得るもの、自動詞から意味の異なる自動詞を得るものもある。*-i-* (이) と *-hi-* (히) を使い分けている例(「食べる」)もある。

他動詞→自動詞	<i>palp-</i> (밟-) 「踏む」	→	<i>palp-hi-</i> (밟히-) 「踏まれる」(2.2 参照)
〃	<i>kɔl-</i> (걸-) 「掛ける」	→	<i>kɔl-li-</i> (걸리-) 「掛かる」(2.8 参照)
〃	<i>puru-</i> (부르-) 「呼ぶ」	→	<i>pul-li-</i> (불리-) 「呼ばれる」(2.11 参照)
他動詞→自動詞	<i>tut-</i> (듣-) 「聞く」	→	<i>tul-li-</i> (들리-) 「聞こえる」
↳使役		↳	<i>tul-li-</i> (들리-) 「聞かせる」
他動詞→自動詞	<i>mɔk-</i> (먹-) 「食べる」	→	<i>mɔk-hi-</i> (먹히-) 「食が進む(自発)」
↳使役		↳	<i>mɔg-i-</i> (먹이-) 「食べさせる」
自動詞→他動詞	<i>nup-</i> (눅-) 「横になる」	→	<i>nup-hi-</i> (눅히-) 「(横に) 寝かす」
自動詞→自動詞	<i>ul-</i> (울-) 「泣く、鳴く」	→	<i>ul-li-</i> (울리-) 「(時計) 鳴る」
↳使役		↳	<i>ul-li-</i> (울리-) 「泣かす」(2.4 参照)

(e) 意味的に受動の対と考えられる別語彙が受動表現とされることがある。*teri-* (때리-) 「叩く」に対する *madʒ-* 맞- 「叩かれる」(2.1 参照) と、(*mal*=) *ha-* ((말)하-) 「言う」に対する *tut-* (듣-) 「聞く」(2.10 参照) がその例であるが、*pʰal-* 팔- 「売る」に対して *sa-* (사-) 「買う」が受動と呼べないように、これらを受動とするには問題が残る。

1.2. 格標示

格は、助詞によって標示される。ここには主な格助詞のほか、日本語の「は」に相当する主題助詞もあげておく。本稿の例文では、主格助詞と主題助詞は入れ替えがほぼ可能である。

主格「が」	<i>-ga/-i</i>	(-가/-이)	語末母音には <i>-ga</i> 、語末子音には <i>-i</i>
対格「を」	<i>-rul/-ul</i>	(-를/-을)	語末母音には <i>-rul</i> 、語末子音には <i>-ul</i>

与格「に」	<i>-hant^he / -ege</i>	(-한테/-에게)	人名詞に付く。口語は <i>-hant^he</i> 、文語は <i>-ege</i>
奪格「から」	<i>-hant^hesɔ / -egesɔ</i>	(-한테서/-에게서)	人名詞に付く。口語は <i>-hant^hesɔ</i> 、文語は <i>-egesɔ</i>
具格「で」	<i>-ro / -uro</i>	(-로/-으로)	語末母音, <i>r</i> には <i>-ro</i> 、語末子音には <i>-uro</i>
主題「は」	<i>-nun / -un</i>	(-는/-은)	語末母音には <i>-nun</i> 、語末子音には <i>-un</i>

朝鮮語は主格・対格型であり、能動文では動作主が主格、被動者が対格で現れ、受動文は被動者が主格で現れる構文をしているとすることができるだろう。その際、例文(1)のように動作主はふつう与格 (*-hante*) をとるが、奪格 (*-hant^hesɔ*) でも可能である。また日本語の「に」にあたる助詞 *-e* -에 は場所格の一つであり、人にはつかず受動の判断には関わらない。

2. 受動表現の文データ

2.1. (7) A は B に叩かれた。(直接受身)

- (1) *tfine-ga judʒɔŋ-hant^he madʒ-a-ss-ta.* (진예가 유정한테 맞았다.)
チネ -NOM ユジョン -DAT 叩かれる -E -PAST -終結
「チネがユジョンに叩かれた。」

この文は、直接受身の受動構文と同じく叩かれた被動者が主格 *-ga* (-가)、動作主が与格 *-hant^he* (-한테) となっているが、動詞 *madʒ-* (맞-) 「叩かれる」は *teri-* (때리-) 「叩く」の受動形式ではなく、意味的に対称的な別語彙 ((e)タイプ) であるので、この文は受動表現と明確に呼べるわけではない。次の(2)は同じ構文で動詞形式も受動形であることから、直接受身の受動構文が可能と言える。動詞は、*tfug-* (죽-) 「死ぬ」の(d)による他動詞形 *tfug-i-* (죽이-) 「殺す」を動名詞化 (*-m* 「殺し」) し、それを(a)によって受動にしたものである。

- (2) *tfine-ga judʒɔŋ-hant^he tfug-i-m-ul tay=he-ss-ta.* (진예가 유정한테 죽임을 당했다.)
チネ -NOM ユジョン -DAT 死ぬ-VOICE-名詞化-ACC 被る-PAST -終結
「チネがユジョンに殺された。」

この文はまた、*tfug-i-m* (죽임) 「殺し」を *salhe* (살해) 「殺害」としてもほぼ同じ意味の文となる。

2.2. (4) A は B に足を踏まれた。(持ち主の受身、体の部分)

この文も、日本語と並行した構文で表すことが可能である。被動者が主格で現れ、被動者の身体部分是对格 *-ul* (-을) で現れる。

- (3) *tfine-ga judʒɔŋ-hant^he par-ul palp-hi -ɔ-ss-ta.* (진예가 유정한테 발을 밟혔다.)
チネ -NOM ユジョン -DAT 足 -ACC 踏む -VOICE -E -PAST -終結
「チネがユジョンに足を踏まれた。」

2.1 の(1)の文にも(4)のように叩かれた身体部分を対格で入れることができる。こうすると構文は持ち主の受身となる。

- (4) *tfine-ga judʒɔŋ-hant^he mɔri-rul madʒ-a-ss-ta.* (진예는 유정한테 머리를 맞았다.)
チネ -NOM ユジョン -DAT 頭 -ACC 叩かれる -E -PAST -終結
「チネがユジョンに頭を叩かれた。」 ((1)に身体部分を追加)

2.3. (9) A は B に財布を盗まれた。(持ち主の受身、持ち物)

この文も次の(5)のように、動作主を与格とし、持ち物を対格とした持ち主の受身(持ち物)の文が可能である。(a)タイプによるもので、構文は持ち主の受身(体の部分)と同じである。ただし、ここでは動作主に人名ではなく *ɔttɔn saram* 「だれか」を入れてある。

(5) *tʃine-nun ɔtʃɔn saram-hantʰe tʃigab-ul sometʃigi taj=he-ss-ta.*

チネ -TOP 或る 人 -DAT 財布 -ACC スリ 被る -PAST-終結
「チネはだれかに財布を**掏られた。**」 (진에는 어떤 사람한테 지갑을 소매치기 당했다.)

コンサルタントによれば、動作主に *ɔtʃɔn saram* (어떤 사람) 「ある人」の代わりに具体的な人名を入れると、(6)のように動作主を主格にするのが自然とのことである。

(6) *judʒɔŋ-i tʃine-e tʃigab-ul sometʃigi he-ss-ta.* (유정이 진예의 지갑을 소매치기했다.)

ユジョン-NOM チネ-GEN 財布 -ACC スリ する-PAST-終結
「ユジョンがチネの財布を**掏った。**」

(5) は持ち主の受身(体の部分)と構文は同じである。したがって、具体的な動作主を明示できるかどうかは、体の部分なのか持ち物なのかの違いに原因があることが考えられる。(5)と(6)の両文において *sometʃigi* (소매치기) 「スリ」も対格をとることができるが、これは強調などによって独立させたときに文法上必要になるものであり、構文上は「スリ」が目的語ではなく、「スリ(を)する」の目的語が *tʃigab* (지갑) 「財布」である。また 2.7 でも触れるが、被動者は人でなければならず、「財布」を主格にした受動構文にはできない。

2.4. (エ) 昨日の夜、私は赤ん坊に泣かれた。それでちっとも眠れなかった。(自動詞からの間接受身)

ul- 울- 「泣く」のような自動詞の動作主を与格にした受動文は作ることができない。また *ul-* (울-) 「泣く」にヴォイス転換形態素をつけた *ul-li-* (울리-) は「泣かす」であり、この動詞の受動形は作れない。したがってこのような状況は次の(7)のように能動文で表されることとなる。

(7) *ɔdʒe 'pam-e-nun agi-ga ur-ɔ-sɔ hansum-do mot tʃa-ss-ta.*

昨日 夜 -LOC-TOP 赤ん坊 -NOM 泣く -て ひと休み -も できない 寝る-PAST-終結
「昨日の夜は、赤ん坊が泣いて、一睡もできなかった。」
(어젯밤에는 아기가 울어서 한숨도 못 잤다.)

2.5. (オ) 新しいビルが(Aによって)建てられた。(モノ主語受身、一回的)

建てた動作主が明示されない次の(8)は可能である。

(8) *i pildij-un fim njɔn dzɔn-e seu-ɔ-dʒi-ɔ-ss-ta.* (이 빌딩은 10년 전에 세워졌다.)

このビル -TOP 10 年 前 -LOC 立てる -DETR-E-PAST-終結
「このビルは10年前に**建てられた。**」

この文の *seu-ɔ-dʒi-* (세워지-) は、自動詞 *ɔ-* (서-) 「立つ」の他動詞形 *seu-* (<**so-ju-*) (세우-) に自動詞化補助語幹 *-dʒi-* (-지-) がついたもので「立てられた」と訳すことができ、意味的にも受動形と呼んでいいだろう。ところが次の(9)は、日本語訳をみると(8)と同じ状況に見えるが、*seu-ɔ-dʒi-* (세워지-) は使いにくく、(9)のように別の動詞 *seŋgi-* (생기) 「生じる」が自然だということである。

(9) *tʃɔgi(-e) pildij-i sero seŋgi-ɔ-ss-ta. (?seu-ɔ-dʒi-ɔ-ss-ta)* (저기에 빌딩이 새로 생겼다.)

あそこ-LOC ビル -NOM 新たに できる -E-PAST-終結
「あそこに新しいビルが**できた。**」 (?建てられた)

(9)で *seu-ɔ-dʒi-* (세워지) 「建てられる」が使いにくい原因としては、(8)よりも「建てる」過程への注目度が小さいことがあるかも知れない。また(8)でも動作主(施工主: *hʃɔnde kɔnsɔl* (현대건설) 「現代建設」)を入れると受動にしにくく、(10)のように能動形 *seu-* (세우-) 「立てる」で言うとのことである。

(10) *i pildij-un hʃɔnde kɔnsɔl-i fim njɔn dzɔn-e seu-ɔ-ss-ta.* (이 빌딩은 현대건설이 10년 전에 세웠다.)

このビル -TOP 現代 建設 -NOM 10 年 前 -LOC 立てる -E-PAST-終結
「このビルは**現代建設が**10年前に**建てた。**」

「建てる」のほか結果物を目的語（結果目的語）とする動詞として *mandul-ɔ-dzi-* (만들어지-) 「作られる」 (< *mandul-* 만들- 「作る」) や *kuri-ɔ-dzi-* (그려지-) 「描かれる」 (< *kuri-* 그리- 「描く」) も動作主が明示されない方がふつうである。

2.6. (カ)カナダではフランス語が話されている。(モノ主語受身、恒常的。動作主が問題にならない場合)

「話す」を「使う」に替え、それを自動詞化することで *p^hurajsuɔ* (프랑스어) 「フランス語」を主格とした(11)の文が可能である。*ssu-* (쓰-) 「使う」の自動詞化は(d)によって *ssu-i-* 쓰이- にするか、これにさらに自動詞化の(c)を加え *ssu-i-ɔ-dzi-* 쓰여지- とする方法、または同義語の漢語語彙 *sajon=ha-* 사용하- 「使用する」の(b)タイプの自動詞化 *sajon=dwe-* 사용되- も可能である。

(11) *k^henada-esɔ-nun p^hurajsuɔ-ga ssu-i-nda / ssu-i-ɔ-dzi-nda / sajon=dwe-nda.*

カナダ -LOC -TOP フランス語 -NOM 使われ -終結 使われ -DETR -終結 使用 なる -終結
 「カナダではフランス語が使われている。」
 (캐나다에서는 프랑스어가 쓰인다/쓰여진다/사용된다.)

ただし、(11)の文はいくらか文章語的であり、話し言葉でこの内容を表す最も自然な言い方は(12)のように *ssu-* 쓰- 「使う」を使った能動文である。

(12) *k^henada-esɔ-nun p^hurajsuɔ-ruil ssu-nda.* (캐나다에서는 프랑스어를 쓴다.)

カナダ -LOC -TOP フランス語 -ACC 使う -終結
 「カナダではフランス語を使っている。」

ところで一般的に「話す」を表す動詞は *mal=ha-* (말하-) 「言う、話す」 (*mal* 말 「言葉」) または *ha-* (하-) 「する、言う、話す」であるが、ここでは能動文にしたとしてもこの動詞を使えない。その原因は、*mal=ha-* (말하-) 「言う、話す」の意味特徴としておそらく、ある程度具体的な内容を言うことを想定している動詞であることが考えられる。

2.7. (キ)財布が (A に) 盗まれた。(モノ主語受身、モノ主語の背後に被影響者が想定される)

被害の意味でのモノ主語受身はできないと考えられる。この文は(13)のように *tfigab* 지갑 「財布」を対格にして「財布を泥棒された」とするのが自然である。

(13) (a) *tfigab-i ɔps-ta tfigab-ul toduk₂madʒ-a-ss-ta.* ((아, 지갑이 없다.) 지갑을 도둑맞았다.)

あ 財布-NOM ない -終結 財布 -ACC 泥棒 受ける -E -PASS -終結
 「(あ、財布がない) 財布を泥棒された。」

ここで「財布」を主格にすることはできない。すなわち(13)は2.3の「持ち主の受身」である。

ところで *humtʃi-* (훔치-) 「盗む」を(c)タイプにより自動詞化し、「財布」を主格にした(14)は、コンサルタントによると、文法的に間違いとは言えないが実際に使うことはないとのことである。

(14) ? *tfigab-i humtʃi-ɔ-dzi-ɔ-ss-ta.* (지갑이 훔쳐졌다.)

財布 -NOM 盗む -E -DETR -E -PASS -終結
 「財布が盗まれた。」

2.8. (ク)壁に絵が掛けられている。(モノ主語受身、結果状態の叙述)

kɔl- (걸-) 「掛ける」を(d)タイプで自動詞化した *kɔl-li-* (걸리-) 「掛かる」を使って(15)のように表される。

(15) *pjɔg-e kurim-i kɔl-li-ɔ iss-ta.* (벽에 그림이 걸려 있다.)

壁 -LOC 絵 -NOM 掛ける -VOICE -E いる -終結
 「壁に絵が掛かっている。」

この文の動詞は自動詞の「掛かる」であり、受動とは言えないだろう。また動作主を示すことはできない。類似の例として *jol-li-ᵛ iss-* (열려 있-) (< *jol-* 열-「開ける」)「開いている」がある。ところで、*kol-li-* (걸리-)「掛かる」に(c) *-dji-* をつけた *kol-li-ᵛ-dji-ᵛ iss-ta* (걸려져 있다)「掛けられている」は受動形と言えるが、これをこの文に使うことは、可能ではあるが非常に不自然とのことである。

2.9. (㉞) A は B に／から愛されている。(感情述語の受身、特に動作主のマーカ―に注目)

saraj=ha- (사랑하-)「愛する」は(a)タイプによって受動にすることができる。(16)の文は、被動者が主語、動作主が与格 *-hantʰe* (-한테)「に」となる受動構文である。

- (16) *tfine-nun judʒon-hante saraj=pat-ko=iss-ta.* (진에는 유정한테 사랑받고 있다)
チネ -NOM ユジョン -DAT 愛 受ける -PROG-終結
 「チネはユジョンに愛されている。」

pat-(받-)「もらう」を利用していることから意味的にも受動といえる。動作主はふつう与格で現れるが、奪格 *-hantʰeso* (-한테서) でも可能である。

2.10. (㉟) A は B に／から「...」と言われた。(伝達動詞の受身、特に動作主のマーカ―に注目)

「言う」にあたる *ha-* (하-)、*mal=ha-* (말하-)「話す」は、2.6 で触れたように、受身ないし自動詞化することはできない。したがって(17)のように能動形で表すことになる。

- (17) *judʒon-un tfine-hante "kadzi ma!" rago he-ss-ta.* (유정은 진예한테 “가지마!”라고 했다.)
ユジョン -NOM チネ -DAT 行くな と 言う-PASS-終結
 「ユジョンはチネに“行くな”と言った。」

「言われる」という表現は、言われた内容がその本人自身に対する評価である場合には、(18)のように「言う」と対称な動詞 *tut-* (듣-)「聞く」を用いて「～だという言葉を書く」として表現することができる。ただしこの構文は動作主(言った者)を明示するときには使えない。

- (18) *tfine-num jeppu-da-nun mal-ul manhi tut-nunda.* (진에는 예쁘다는 말을 많이 듣는다.)
チネ -TOP 可愛い終結 -という 言葉 -ACC 多く 聞く -終結
 「チネはよく可愛いと言われる。」(チネは可愛いという言葉をよく聞く)

2.11. (㊱) 重文後半の主語、指示転換

(㊱-1) 「AさんはBさんに呼ばれて、今Bさんの部屋に行っています。」

(㊱-2) 「BさんがAさんを読んで、Aさんは今Bさんの部屋に行っています。」

(㊱-1) の日本語は受動「呼ばれる」となっているが、これを朝鮮語にするときは能動形を使わざるを得ず、結果として(㊱-1)にあたる(19)と、(㊱-2)にあたる(20)はほぼ同じ文になる。

- (19) *tfine-nun sadzaj nim-i puru-si-ᵛ-sᵛ tfigum sadzajfir-e iss-ta.*
チネ -NOM 社長 様 -NOM 呼ぶ -(尊敬)-E-て 今 社長室 -LOC 居る-終結
 「チネは、社長が呼んで、今、社長室にいる。」
 (진에는 사장님이 부르셔서 지금 사장실에 있다.)

- (20) *sadzaj nim-i tfine-rul puru-si-ᵛ-sᵛ tfine-nun tfigum sadzajfir-e iss-ta.*
社長 様 -NOM チネ -ACC 呼ぶ -(尊敬)-E-て チネ -NOM 今 社長室 -LOC 居る-終結
 「社長がチネを呼んで、チネは今、社長室にいる。」
 (사장님이 진예를 부르셔서 진예는 지금 사장실에 있다.)

(19)では、日本語の助詞「は」に相当する主題標示の *-nun* (-는) が使われており、これは遠く後半の動詞まで規定する性質があり、後半に主語がないのは省略というわけではない。また「呼ぶ」の末尾につけられた *-sᵛ* (-서)「して」は後半の理由を表す従属節をつくっており、重文ではない。*tfine-nun*

(진예는)「チネは」を対格 *tfine-rul* (진예를)「チネを」にすると(20)の前半と同じくなり、後半に主語が必要となる。

「呼び出される」を表そうとするとき、*puru-* (부르-)「呼ぶ」の(d)タイプの自動詞 *pul-li-* (불리-)をそのまま使うわけにはいかないが、補助動詞 =*ka-* (가-)「行く」をつけて *pul-li-ᄃ=ga-sᄃ* (불러가서)「呼ばれて行って、呼び出されて」とすれば可能である。

- (21) *tfine-nun sadzan̄nim-hant̄he pul-li-ᄃ=ga-sᄃ tfigum sadzan̄fir-e iss-ta.*
チネ -NOM 社長 -DAT 呼ぶ-VOICE -E 行く -て 今 社長室 -に いる-終結
「チネは社長に呼び出されて、今社長室にいる。」
“공부의 신”이라고 불리고 있다.

pul-li- 불리- は、次の(22)のように動作主を明示しない「(広く)呼ばれている」という意味として使われる。

- (22) “*konbu-e jin*”-*i-rago pul-li-go=iss-ta.*
勉強の 神 -COP-と 呼ぶ-VOICE -PROG-終結
「“勉強の神”と呼ばれている。」
“공부의 신”이라고 불리고 있다.

参考文献

- 伊藤英人. 2012. 「朝鮮語」『語学研究所論集 (特集「ヴォイスとその周辺」)』17, pp. 128-144.
許明子. 1999. 「日本語と韓国語の受身文の実証的対照研究 — 両国のテレビドラマと新聞コラムにおける受身文の使用率の分析を通して —」『世界の日本語教育』9, pp. 115-131.
韓国国立国語院 『標準国語大辞典』
(https://stdict.korean.go.kr/search/searchView.do?word_no=7616&searchKeywordTo=3) 2021年2月2日最終アクセス.
白明学. 2011. 「受身形式の多様性と構文の特徴」『名古屋大学文学部研究論集 (文学)』 pp. 69-82.
長渡陽一. 2013. 『初級を卒業した人のための韓国語文法』 ナツメ社.

執筆者連絡先 : nagatoyouichi@gmail.com

原稿受理 : 2020年12月19日

〈特集「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイスとその周辺」〉

ダグール語のアスペクト、モダリティ、ヴォイス

Aspect, modality, and voice of Dagur

山田 洋平¹, 風間 伸次郎²

Yohei Yamada, Shinjiro Kazama

¹東京外国語大学世界言語社会教育センター

World Language and Society Education Center, Tokyo University of Foreign Studies

²東京外国語大学大学院総合国際学研究院

Tokyo University of Foreign Studies

要旨：本稿は特集「アスペクト」(第15号, 2010)「モダリティ」(第16号, 2011)「ヴォイスとその周辺」(第17号, 2012)のアンケートに沿って、ダグール語のデータを提供する。

Abstract : This paper provides data concerning “aspect” (2010), “modality” (2011), and “voice and related matters” (2012), of the Dagur language based on the questionnaire on these special topics.

キーワード：アスペクト、モダリティ、ヴォイス、モンゴル諸語、ダグール語

Keywords : aspect, modality, voice, Mongolic languages, Dagur

1. はじめに

1.1. 概要

本稿は語学研究所論集の過去のテーマ企画である特集「アスペクト」(第15号, 2010)、「モダリティ」(第16号, 2011)、「ヴォイスとその周辺」(第17号, 2012)の調査アンケートに沿って、ダグール語のデータを提供することを目的としたものである。

ダグール語(ダグル語、ダウール語などとも)はモンゴル諸語に属する言語で、中国の黒龍江省や内モンゴル自治区フルンボイル市などに分布する。モンゴル諸語の内部の系統関係はあまりよくわかっておらず、ダグール語の系統的な位置づけも十分には明らかになっていない。中国におけるダグール族の人口はおおよそ10万人であるが、そのうちダグール語話者がどれほどの割合を占めるかも正確なところはわからない。

本稿ではそのうち、フルンボイル市ハイラル区で使用されているハイラル方言(以下、[H]と表記)および黒龍江省チチハル市で使用されているチチハル方言(以下、[Q]と表記)について風間が調査を行った結果を示す。ハイラル方言については、温都日呼(onderhuu)氏(1969年エウエンク族自治旗バインチャガン・ソム生まれ、2014年3月16日に同自治旗バヤントホイ(巴音托海)鎮にて調査)から、チチハル方言については何文钧(he wenjun)氏(1936年黒龍江省安子匠村生まれ、2014年3月20日、2015年3月22日にチチハルにて調査)から、調査票の中国語(三宅 2010, 2011, 加藤 2012 をもとに作成)をダグール語に訳してもらうという形で調査させていただいた。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

以下 1.2. ではダグール語の文法を簡略にまとめ、形態素分析に用いる略号の一部 (Leipzig Glossing Rules (<https://www.eva.mpg.de/lingua/resources/glossing-rules.php>) に掲載されていないもの) について説明を付した。2. ではアスペクト、3. でモダリティ、4. でヴォイスとその周辺の例文を記す。例文番号はそれぞれの特集の調査アンケートの番号で示す。例文中の () で囲った要素は有無が揺れること、[] で囲った部分は / の前後の表現が揺れることを示す。

1.2. ダグール語の文法概略

・音素目録

ダグール語の基本となる短母音は語の最初に現れる場合において a, e [ə], i, o, u の5つが対立する。それ以外の位置ではこうした対立が失われるが、口蓋化子音の直後で i, 円唇化子音の直後で u, その他の位置で e というように表記上は3母音を区別して記す。長母音は基本となる短母音に対応する aa, ee [ə:], ii, oo, uu のほか、ie [e:] が立てられ、語の位置を問わず現れる (形態素境界を跨る場合 icee と表記することもある)。

子音音素目録は以下の通り。/p, t, č [tʃ], k; b, d, j [dʒ], g, f [ɸ], s, š [ɕ], h [x]; m, n [n~ŋ]; l, r, w, y [j]/ この他に口蓋化子音と円唇化子音があるが、子音字の直後にそれぞれ i, u を置くことで表記する。/gu/ は [g^w~w] と実現する。子音字の直後に ii, uu, ie が置かれている場合、それぞれ [i:], [u:], [e:] という音声で実現する。また、n は基本的に語末や子音 g, k の直前で [ŋ], その他の位置で [n] として現れるという分布を見せるが、一部の語の語末や g, k の直前で [n] が現れることがある。これについては /n/ と表記する。

本調査で得られた文例には様々な音の弱化や脱落と揺れが見られるが、こうした音声実現についても極力子細に記載することとした。

・名詞形態論

名詞類には (動詞の形動詞形にも) 格接辞と所属の諸要素が付されうる。格接辞の一覧は以下の通り。表記上 AA のように大文字で記したものは、母音調などにより aa~ee~oo~ie という異形態があることを表す。

表 1. ダグール語の格接辞

	ハイラル方言 [H]	チチハル方言 [Q]
属対格	-II (-ii ~ -i ~ -yi ~ -ei)	
奪格	-AAs	-AAr
造格	-AAr	
与位格	-d	
共同格	-tii	

名詞の語幹の裸の形は、文中で主語、述語、連体修飾語、並列の先行要素、不定目的語として用いられる。

属対格は日本語の「～の」にあたる名詞修飾語や「～を」にあたる直接目的語に対して用いられるものである (ただし、裸の名詞句が直接目的語になることもある)。グロスでは GA (genitive-accusative) とした。人称代名詞 bii, čii については異なる斜格語幹が現れることで属格と対格の区別が顕在化する。

奪格と造格はチチハル方言において合流している。母音調により交替する異形態があり、長母音で終わる語幹に接続する場合は渡り子音として y が現れる。

これらの他に本稿では程度格 -čeer {-DEG} と分析した形式があるが、その機能は明らかではない。

これらの格接辞の後ろは所属の諸要素が占める。所属の諸要素は人称所属と再帰所属に分類される。前者には単複一～三人称所属接語、後者には主語への帰属を示す再帰所属接辞がある。次の表 2 では代表的な形 (基底形) を示すが、実際の現れには若干の揺れが見られる。

表2. ダグール語の所属接辞

	単数	複数
一人称	=mini	=maani (除外) =naani (包括)
二人称	=šini	=taani
三人称	=ini	=inaani
再帰	-AA ([Q] では -mAA という形も)	

これらの文法範疇の他、名詞類の語には恒常的所有を表す -tii (-PROP: propriative, 共同格と同形) という要素も頻用である。「～がある」「～を持っている」という意味を表すもので、形容詞的な語を派生する派生接辞と見ることも可能であるが、生産性が極めて高いことから名詞類の屈折範疇として扱う。

・動詞形態論

動詞語幹に接続する屈折接辞は主節の述語となる動詞形を成す定動詞接辞と、連用修飾節の述語となる動詞形を成す副動詞接辞、連体修飾節の述語となる動詞形を成す形動詞接辞に分類されるのが一般的である。

定動詞接辞は時制と人称によるパラダイムを成す叙述と、意思や命令を表す希求とがある。

定動詞叙述形を成す接辞 ([Q] の一例) は非過去 -bei, -n と過去 -sen, -IAA がある。

-bei は [H] では -wei で実現する他、[Q] では述語人称の要素が融合した形で現れることがある。グロス上は非過去 NPST (non-past) と記し、形態上述語人称の要素と不可分であると判断した場合は融合した形式として分析した (ex. NPST.1SG (非過去, 一人称単数) など)。-n はもっぱら否定文 (動詞の直前に否定語 ul を置く) に用いられるが、この要素そのものに否定の意味があるわけではない。ここでは非過去の第二形式という意味合いで非過去II (NPST II) というグロスを付す。なお、形動詞形 -g の後ろに否定を表す語 uwei や udien を付して否定表現を成すことも可能である。後者の udien という語については「まだ～していない」という意味を表すものとして未完了否定 NEG.IMP (negative imperfect) というグロスをふった。

過去 -sen も述語人称や否定を表す要素 uwei との融合した形で現れることがある。この他に頻度の低い形式 -IAA がある。分析上は -sen を PRF (perfect)、-IAA を PAST と分析したが、これは通時的な変化を念頭に付したもので、必ずしも共時的な意味解釈を反映したものではない。-sen は語幹末の子音によって順行同化した -ten, -den, -len などの異形態を有する。また後述のように文末位置の n は脱落し、長母音に取って代わられる現象が見られる。これらを総合すると、本稿で現れる -IAA は単に -sen の異形態として現れたにすぎないものである可能性もある。

定動詞希求形には以下のようなものがある。

一人称意志 -y(AA), 二人称単数命令 -ø, 二人称複数命令 -t, 三人称命令 -tgei (~-thei)

未来命令: 一人称 -gAAAn, 二人称 -gAAAnie (~hAAAnie), 三人称 -g

動詞と動詞、節と節をつなぐ副動詞形を成すおもな接辞には次のようなものがある。

同時 -j, -jee, -jii, 先行 -AA(r) (ANT: anterior), 継続 -sAAr,

即時 -mter, 条件 -AAs, 譲歩 -yieš, 限界 -tel

このほか、連体修飾節を成す専用の形式として形動詞形未来 -g がある (-sen も連体修飾節の述語として用いられる用法がある)。

これらの屈折接辞の他、語幹に付すことで相や態の意味を付与する -jik 「完了」、-lkAA 「使役」、-rd (~ -d) 「受動」等の派生接辞がある。

なお、屈折接辞を付さない動詞語幹について本文中で言及する場合には、これが動詞語幹であるということを示すために _ (アンダーバー) を動詞語幹の直後に付して示す。

・その他

ダゲール語は修飾語が被修飾語に先行し、主語や目的語などの項は述語に先行するという基本語順を有する。動詞も名詞類も述語になることができるが、いずれの場合にも主語の人称に応じた述語人称の要素 =bi (=1SG), =baa (=1PL.EXCL), =daa (=1PL.INCL), =š (=2SG), =taa (=2PL) が付される。[Q] の動詞接辞 -bei, -n, -sen は表層においてこれら述語人称と融合した形で現れる。形態素が不可分であると判断した場合、グロス上ではそれぞれ非過去 -bei, -n、過去 -sen, -laa, -swei に人称接辞が融合したものであるとして分析している。-bei および3人称については人称接辞無しであると分析した。なお、[H] ではこのような融合の度合は低い。

文末位置に現れる終助詞的要素として、本稿では推量 =baa (=SPEC: speculation) が現れるほか、強調 =AA (=EMP: emphasis) も認める。

[H][Q] いずれにおいても文末位置の子音 n は脱落し、長母音が現れる。例えば 1.2. 動詞形態論で見た -sen {-PRF} にあたる形式は、文末に現れる場合 -see として実現する。上述の =AA については機能が十分に明らかになっていないが、こうした文末をマークするものと見て「強調」というラベルを付けた。

2. [アスペクト]

調査票として用いた漢語は三宅 (2010) の用例に基づく (ただし固有名詞は調査時に適宜変更してある)。例文番号は同調査票に付された番号 (三宅 (2010) では [] に囲われた数) に従う。

(1) ~さん (固有名詞) は もう来た。小王已经来了。

[H] baater ir-see.
 バータル (PSN) 来る-PRF

[Q] šauwan akuu ir-see.
 小王 (PSN) もう 来る-PRF

[Q] akuu は恩和巴图 (1983) などの辞書に見られないが、akembuu_ 「完成する」と関係がある語かもしれない。

「(2) 小王は/あの人は もう来ている。」は調査票の漢語が (1) と同じ文となってることから、これらの区別を聞き出すことはできなかった。

(3) ~さん (固有名詞) はまだ来ていない。小王还没来。

[H] baater ir-wu=udie.
 バータル (PSN) 来る-FUT-NEG.IMPF

[Q] šauwan hai ir-g=udien.
 小王 (PSN) まだ 来る-FUT=NEG.IMPF

(4) ~さん (固有名詞) はまだ来ない。小王还不来。

[H] baater bas ir-wu=udie.
 バータル (PSN) まだ 来る-FUT-NEG.IMPF

[Q] šauwan hai ir-s=wei.
 小王 (PSN) まだ 来る-PRF=NEG

(5) ~さん (固有名詞) はもう (すぐ) 来る. 小王快要来了。

[H] baater ir-w el-j+ii-wei.
 バータル (PSN) 来る-NPST と言う-SIM+COP-NPST

[Q] šauwan ir-gu-er horden bol-see.
 小王 (PSN) 来る-FUT-INS 速い なる-PRF

[H] の例で ii_ (COP) という語が現れるが, これは従来の記述で aa_ (COP/ある) とされるものである. 直前の j 音に引かれ ii という音声で実現したものであり, ここでは初期調査記録に基づき ii_ として表記した. 以下 [Q] も含め同様に表記する.

[Q] 「もうすぐ」の意で horden 「(速度が) 速い」が現れたのは調査票の影響 (漢語の 快要 という語の直訳) か.

(6) (あつ,) ~さんが来た. [その人が来るのに気づいた場面での発話] 小王来了。

[H] a, baater ir-see.
 あつ バータル (PSN) 来る-PRF

[Q] a, šauwan ir-see.
 あつ 小王 (PSN) 来る-PRF

(7) 昨日, ~さんが来たよ. 前天小王来了。

[H] udeš baater ir-see.
 昨日 バータル (PSN) 来る-PRF

[Q] udeš#uder šauwan ir-see.
 昨日 小王 (PSN) 来る-PRF

(7) (8) ともにいずれの方言でも調査票の日本語とも漢語とも異なり「おととい」の部分が「昨日」と訳出されている. なお, 「一昨日」はダグール語で čaa#uder と言う。

(8) 昨日, ~さんは来なかったよ. 前天小王没来。

[H] udeš baater ir-s=wei.
 昨日 バータル (PSN) 来る-PRF=NEG

[Q] udeš#uder šauwan ir-s=wei.
 昨日 小王 (PSN) 来る-PRF=NEG

(9) (私は) あのリンゴをもう食べた. 我已经把那个苹果吃了。

[H] bii ter pinguo id-sem=bi=ee.
 私 あの リンゴ 食べる-PRF=1SG=EMP

[Q] bii ten pinguo-yi id-dem=bi.
私 あの リンゴ-GA 食べる-PRF=1SG

[Q] の話者の発話では指示詞が音的環境に関わらず ten とも ter とも聞こえる。また-sen {-PRF} は先行する動詞語幹末子音及び後続の述語人称の同化が起こって-dem と実現する。

(10) 私はあのリンゴをまだ 食べていない／食べない。我还没吃那个苹果。

[H] bii ter pinguo-yi bas id-wu=udiem=bi=ee.
私 あの リンゴ-GA まだ 食べる-FUT=NEG.IMP=1SG=EMP

bii ter pinguo-yi bas id-see uwei=bi=ee.
私 あの リンゴ-GA まだ 食べる-PRF NEG=1SG=EMP

[Q] bii ten pinguo-yi id-dee=wei.
私 あの リンゴ-GA 食べる-PRF=NEG

(11) あ的那个人は今（ちょうど）そのリンゴを食べています／食べているところです。他现在正在吃那个苹果呢。

[H] ter pinguo-yi ide-j+ii-wei.
あれ リンゴ-GA 食べる-SIM+COP-NPST

ter は「あれ (あの人)」とも「あの (その)」とも訳出可能だが、音調から前者として解釈した。

[Q] in edee ten pinguo-yi ide-j+ii-bei.
彼 今 その リンゴ-GA 食べる-SIM+COP-NPST

(12) 窓が開いている。／窓が開いていた。窗户开着呢。

[H] čonku nee-j+ii-wei.
窓 開ける-SIM+COP-NPST

[Q] čonk=in nee-rde-j+ii-bei.
窓=3SG 開ける-PASS-SIM+COP-NPST

(13) 私は毎朝新聞を読む／読んでいる。我每天早上看报纸。

[H] bii uder#uder ert baujii uŋ-wei.
私 毎日 朝 新聞 見る-NPST

[Q] bii uder#uder ert=in baujii uŋ-bei.
私 毎日 朝=3SG 新聞 見る-NPST

(14) あなたは (あなたの) お母さんに似ている。你很像你妈妈。

[H] šii meemee-tii adel (=š).
あなた 母親-COM 同じ (=2SG)

[H]では人称所属接辞 =š の出現に揺れが見られた。

[Q] šii meemee-tie adel=š.
あなた 母親-COM 同じ=2SG

(15) 私はその頃毎日学校へ通っていた。那个时候我每天都去学校。

[H] ter ui-d bii uder#uder šuetan-d ič-wei.
あの 頃-DAT 私 毎日 学校-DAT 行く-NPST

[Q] ten kem-d bii uder tol šuetan ič-bei.
あの 頃-DAT 私 日 全て 学校 行く-NPST

(16) 私は北京に行ったことがある。我去过北京。

[H] bii bejĭn-d ič-sem=bi=ee.
私 北京-DAT 行く-PRF=1SG=EMP

bii bejĭn-d ič-see.
私 北京-DAT 行く-PRF

bii bejĭn-d iči-j dulee-see.
私 北京-DAT 行く-SIM 過ぎる-PRF

dulee_ 「過ぎる」を用いた表現は漢語 过 の翻訳借用であると思われる。

[Q] bii bejĭn ič-dee aa-sem=bi.
私 北京 行く-PRF COP-PRF=1SG

動詞に付された -dee は形動詞完了の -sen の異形態。

(17) やっとバスは 走り出した／走り始めた。公共汽车终于开了。

[H] paas edeehe=l yaw-see.
バス やっと-EMP 行く-PRF

[Q] čiičie kailaa [yaw-jik-see / yaw-see].
バス ?? 行く-PFV-PRF / 行く-PRF

[Q] の kailaa はおそらく漢語の 开了 kaile で、「バスは出発して行ってしまった」と訳しうる表現になっていると思われる。

(18) きのお彼女はずっと寝ていた。她昨天整天都在睡觉。

[H] ter udeš neg uder want-see.
彼 昨日 一 日 寝る-PRF

[Q] in udeš#uder uderken want-tee.
彼 昨日 終日 寝る-PRF

uderken 「終日」は辞書に見られない。

(19) 私はそれをちょっと食べてみた。我尝了尝那个东西。

[H] bii ter-ii ante-ĵ uĵ-sem=bi.
私 あれ-GA 味見する-SIM 見る-PRF=1SG

[Q] bii ten ĵak-ii ante-ĵ uĵ-ĵem=bi.
私 あの もの-GA 味見する-SIM 見る-PRF=1SG

-ĵem=bi は-ĵem のようにも -tem のようにも聞こえた。

(20) あの人はそれ(ら)をみんなに分け与えた。他把那些东西分给了大家。

[H] ter jah-sel-ii kuu-d hobii-ĵ uk-see.
あれ もの-PL-GA 人-DAT 分ける-SIM 与える-PRF

jah~ĵak 「もの」の揺れが観察される。

[Q] in ten ĵak-maa hauyaaraa-d hobie-ĵ uk-see.
彼 あの もの-REFL みんな-DAT 分ける-SIM 与える-PRF

(21) さあ、(私たちは) 行くよ！ 我们走吧！

[H] baa yaw-yaa.
1PL.EXCL 行く-VOL

山田 (2011: 59) では [H] において 1 人称複数の形式に除外・包括の別は無く、ともに bid という形式を用いるとしたが、ここでは除外形に当たる形式が用いられている。

[Q] badi yaw-yaa.
1PL.INCL 行く-VOL

(22) 地球は太陽の周りを回っている。地球绕着太阳转。

[H] diičiu nar-ii dage-ĵ ergii-ĵ+ii-wei.
地球 太陽-GA 従う-SIM 回る-SIM+COP-NPST

[Q] diičiur nar-ii dage-ŋ yaw-bei.
地球 太陽-GA 従う-SIM 行く-NPST

(23) あの木は今にも倒れそうだ. 那棵树看起来快要倒了。

[H] ter mood ul guaidaa-n wane-w el-ŋ+ii-wei.
あの木 NEG 時間がかかる-SIM 倒れる-NPST と言う-SIM+COP-NPST

[Q] ten hails uŋi-g-d horden wan-laa.
あの 榆 見る-FUT-DAT 速い 倒れる-PAST

hails は辞書では kails 「榆の木」とある. horden は horgun と聞こえる. -laa は過去時制であると解釈したが、モンゴル語の対応形式に近い未来を表す用法があるのと並行的な使われ方をしている。

(24) (私は) あやうく転ぶところだった. 我差点儿摔倒。

[H] bii gel#gel tonkool-ŋ wan-see.
私 あやうく 転ぶ-SIM 倒れる-PRF

[Q] ではこの訳文は得られなかった。

(25) 明日お客が来るので, パンを買っておく. 明天要来客人, 我去买点儿面包。

[H] bun(i)#uder ailči(n) ir-wei, bii gar-ŋ mienbao aw-č-wei.
明日 客 来る-NPST 私 出る-SIM パン 取る-~しに行く-NPST

aw-č_ の -č は「~しに行く」の意味の接尾辞で, ič_ 「行く」が文法化・接辞化したものである。

[Q] buni#uder kuu ir-wei, bii nakem mienbao aw-č-yaa.
明日 人 来る-NPST 私 少し パン 取る-~しに行く-VOL

(26) (私は) ~ (街とか市場とか) に行った時, この袋を買った. 我去王府井的时候买了这个袋子。

[H] bii hailaar-aar en [daiz-ei / olenkoo-yi] aw-sem=bi=ee.
私 ハイラル (地名)-INS この 袋-GA 袋-GA 取る-PRF=1SG=EMP

[Q] bii hailaar iš-ten-d, en dais-ii aw-sem=bi.
私 ハイラル (地名) 行く-PRF-DAT この 袋-GA 取る-PRF=1SG

[H] daiz, [Q] dais は漢語の 袋子 daizi 「袋」からの借用語であろう (/z/ は外来語のみに見られる音素であるので子音音素目録には含めなかった). ič_ 「行く」に形動詞完了 -sen が付されると [Q] で -ten になるだけでなく、語幹が iš という音形に替わることがある。

(27) (私は) ~に (街とか市場とか) 行く時/行く前に, この袋を買った. 我去王府井之前买了这个袋子。

[H] bii hailaar-d ič-gu-ees-ee emel, en olenkoo-yi aw-sem=bi=ee.
私 ハイラル-DAT 行く-FUT-ABL-REFL 前 この 袋-GA 取る-PRF=1SG=EMP

[Q] bii hailaar iš-ten-d, en keudii aw-sem=bi.
私 ハイラル 行く-PRF-DAT この 袋 取る-PRF=1SG

bii hailaar iči-g ordoon-d en keudii aw-sem=bi.
私 ハイラル 行く-FUT 前-DAT この 袋 取る-PRF=1SG

(28) (私は) 彼が市場でこの袋を買ったのを知っていた。我知道他在市场买了这个袋子。

[H] horšoo-yaas en olenkoo-yi aw-s-ei=šni bii med-w=bi=ee.
市場-ABL この 袋-GA 取る-PRF-GA=2SG 私 知る-NPST=1SG=EMP

horšoo 「市場」はソロン語でも xoččoo という語形で現れる。恩和巴图 (1983: 77) には heezeešel 「市場」(原文表記 heezeexel <漢語 合作社 hezuoshe) という語もある。

[Q] minii med-gu-d=mini, in şltşang-aar en keudii aw-see.
1SG.GEN 知る-FUT-DAT=1SG 彼 市場-ABL この 袋 取る-PRF

şltşang は漢語 市场 shichang であり、借用というよりもコードスイッチングが起こったものと考えられる。ゆえにここで現れる音素は上掲の音素目録に含めていない。

3. [モダリティ]

調査票の漢語及び例文番号は三宅 (2011) に基づく。

(1) (その仕事が終わったら) もう帰ってもいいですよ。(工作做完了,) 你就可以回去了。

[H] šii edee hari-j bol-wei.
あなた もう 帰る-SIM なる-NPST

[Q] weil kii bar-see, šii edee hari-j bol-bei.
仕事 する 終わる-PRF あなた もう 帰る-SIM なる-NPST

hari_「帰る」の r は非常に弱く聞こえた。kii_「する」は語幹が用いられているように聞こえるが、他の方言での現れから見て -j {-SIM} が弱化したものであると考えられる。

(2) (腐っているから, あなたは) それを食べてはいけない。/それを食べるな。(不新鲜了,) 不要吃。

[H] ter moo jah-ii buu id-ø.
その 悪い もの-GA PROH食べる-IMP

[Q] buu id-ø.
PROH 食べる-IMP

(3) (遅くなったので) 私たちはもう帰らなければならない。(时间不早了,) 我们得回去了。

[H] baa ič-sen-d bol-j+ii-wei / bol-see.
1PL.EXCL 行く-PRF-DAT なる-SIM+COP-NPST/ なる-PRF

[Q] baa edee hari-b=baa.
1PL.EXCL もう 帰る-NPST-1PL.EXCL

(4) (雨が降るそうだから) 傘を持って出かけたほうがいいよ。(听说要下雨,) 你出门最好带上伞。

[H] šii gar-gu-d saren bari-gaanie.
あなた 出る-FUT-DAT 傘 持つ-FUT.IMP.2

直訳は「あなたは出かけるとき、傘を持ちなさい」。未来命令の形式には -gaanie ~ -haanie の揺れが観察される。また動詞は ačči_「持っていく」(<aw-čī_ {to.take-to.go})という形式も用いられうるといふ。

[Q] šii edee beed-ee yaw-(g)u-d, jak-maa buu mart-ø=aa.
あなた 今 外-REFL 行く-FUT-DAT もの-REFL PROH 忘れる-IMP=EMP

[Q] で得られた用例の直訳は「あなたは今外に出るとき、ものを忘れるな」。

(5) 歳を取ったら、子供の言うことを聞くべきだ/ものだ。上了年纪就听孩子的吧。

[H] saddie bol-oos-oo, ičher-ii usg=ini sons-haanie.
年寄り なる-COND-REFL 子供-GA 言葉=3SG 聞く-FUT.IMP.2

[Q] nas-ii jew bol-laa, ičkr-ee hel-g(u)=in sons-ø=ee.
年齢-GA ?? なる-PAST 子供-REFL 言う-FUT=3SG 聞く-IMP=EMP

jew は不明だが、jebk「成人する」と関係がある語か。bol-laa は saa (<sen?) のようにも聞こえる。また ičkr-ee は ičhr-ee と聞こえる。

(6) (お腹が空いたので、私は) 何か食べたい。(我饿了,) 想吃点儿什么。

[H] bii negčig id-yaa bod-wei=ee.
私 何か 食べる-VOL 考える-NPST=EMP

[Q] bii huns-ŷ+ii-b=bi.
私 飢える-SIM+COP-NPST=1SG

bii huns-(ŷ)+ii-bei, yekee nakem id-bei el-ŷ+ii-bei.
私 飢える-CVB.SIM+COP-NPST.1SG 少し ちょっと 食べる-NPST と言う-SIM+COP-NPST

(7) 私が持ちましょう。我来拿。

[H] bii aw-yaa.
私 取る-VOL

[Q] bii awč-yaa.
私 持っていく-VOL

(8)じゃあ、一緒に昼ごはんを食べましょう。那一起吃午饭吧。

[H] uder negend budaa id-yaa.
昼 一緒に 御飯 食べる-VOL

[Q] nekenn' uder badaa id-yaa.
一緒に 昼 御飯 食べる-VOL

nekenn' は nekend の語末子音が同化したことによる形式。

(9)一緒に昼ごはんを食べませんか？ 一起吃午饭，怎么样？

[H] uder negend budaa id-yaa, bol-wei=yee?
昼 一緒に 御飯 食べる-VOL なる-NPST=INTERR

[Q] uder nekenn' badaa id-yaa, bol-bei=yee?
昼 一緒に 御飯 食べる-VOL なる-NPST=INTERR

両言語とも、「lit. 食べよう，良いか？」という表現になっている。

(10)明日，良い天気になるといいなあ。／明日は良い天気になってほしいなあ。希望明天是个好天。

[H] bun(i) sain uder bol-thei.
明日 良い 日 なる-IMP.3SG

bun(i) sain uder bol-thei=j san-ǰ+ii-wei.
明日 良い 日 なる-IMP.3SG=SIM 思う-SIM+COP-NPST

=j は el-j 「と／と言って」の語幹部分が消失して接語化したものであると考えられる。

[Q] bun#uder saan uder [bol-ø / bol-tgen].
明日 良い 日 なる-IMP / なる-IMP.3SG

(11) (私はここで待っているから) すぐにそれを持って来なさい。(我在这儿等你,) 你快去把那个拿来。

[H] šii horden ter-ii aw-aar ir-ø.
あなた すぐに あれ-GA 取る-ANT 来る-IMP

[Q] šii horden ter [yekee-yi / yekee-yee] ačir-ø.
あなた すぐに あの もの-GA / もの-REFL 取って来る-IMP

(12)そのペンをちょっと貸していただけませんか？ 能用一下那支笔吗？

[H] ter čimbii=šini [keregl-yaa / baitl-yaa].
あの 鉛筆=2SG 使う-VOL / 使う-VOL

[Q] ter gambii=šin jar bol-bei=yee.
あの 万年筆=2SG 使う なる-NPST=INTERR

(13)あの人 は 中国語が読めます。 / あの人 は 中国語を読むことができます。 那个人 读得懂汉语。

[H] ter kuu nihen useg med-wei.
あの人 漢 言語 わかる-NPST

[Q] ter kuu niaken bitg-ii med-bei.
あの 人 漢 文字-GA わかる-NPST

ter kuu niaken husg-ii guuruu-bei.
あの 人 漢 言語-GA わかる-NPST

(14)明かりが暗くて、ここに何て書いてあるのか、読めない。 光线太暗，看不清写着什么。

[H] gegee aiduwu moo aa-ʃ+ii-wei, bič-sen jah-ii=šini
明かり とても 悪い ある-SIM+COP-NPST 書く-PRF もの-GA=2SG
uʃi-ʃ [ol-gu=wei aa-ʃ+ii-wei / ol-ʃ uʃ-gu=wei].
見る-SIM 得る-FUT=NEG ある-SIM+COP-NPST / 得る-SIM 見る-FUT=NEG

[Q] isaan=in aiduu ičiik, yoo kii-sen=in uʃ ol-(g)u=wei.
光=3SG とても 小さい 何 する-PRF=3SG 見る 得る-FUT=NEG

(15) (朝早く出発したから) 彼らはもう着いているはずだ。 / もう着いたに違いない。 他们应该到了。

[H] teden-sel kučir-see.
彼ら-PL 着く-PRF

[Q] aan edee kučir-see.
彼ら 今 着く-PRF

(16) (あの人 は) 今日 は たぶん 来ない だろう。 (那个人,) 今天 可能 不会 来吧。

[H] ter oler-sel en uder ul ire-m=baa.
あの 人々-PL この日 NEG 来る-NPSTII=SPEC

[Q] en uder ul ire-n=kawoo.
この日 NEG 来る-NPSTII=SPEC

(17)彼ら が まだ 来ない なんて、 きっと 途中で 車 が 壊れた ん じゃない か。 他们 还没到， 肯定是 车 坏了。

[H] ter oler-sel bas ir-wu=udie, terg=ini edde-rd-sem=baa.
あの人々-PL まだ 来る-FUT=NEG.IMPF 車=3SG 壊れる-PASS-PRF=SPEC

[Q] aan hai kučir-gu=udie(n), terg=in erd-sen=kawoo.
彼ら まだ 着く-FUT=NEG.IMPF 車=3SG 壊れる-PRF=SPEC

(18) さあ、(昼間だからあの人は家に) いるかもしれないし、いないかもしれない。(白天, 他) 可能在家, 也可能不在家, 说不好。

[H] ter en uder ger-t aa-(g)u=uwei=č maged=wei, el-ĵ ul med-ee.
あれ この日 家-DAT ある-FUT=NEG=も 確か=NEG 言う-SIM NEG 知る-NPSTII

ter en uder ger-t aa-(g)u=wei=baa, el-ĵ ul med-ee.
あれ この日 家-DAT ある-FUT=NEG=SPEC 言う-SIM NEG 知る-NPSTII

[Q] ger-t-ee bii yum=oo, ger-t-ee uwei yum=oo, ul med-ee.
家-DAT-REFL ある もの=INTERR 家-DAT-REFL NEG もの=INTERR NEG 知る-NPSTII

(19) (額に触ってみて) どうもあなたは熱があるようだ。你好像有点儿发烧。

[H] šii nee elčir halool-ĵ+ii-wei=š=baa.
あなた 少しどうも 熱が出る-SIM+COP-NPST=2SG=SPEC

šii halool-ĵ+ii-wei=š=baa.
あなた 熱が出る-SIM+COP-NPST=2SG=SPEC

[Q] šinii bey=šin haloon bol-lee.
あなた.GEN 身体=2SG 熱い なる-PAST

(20) (天気予報によれば) 明日は雨が降るそうだ。明天可能会下雨。

[H] bun(i) uder huar war-(g)u maged=wei.
明日 日 雨 入る-FUT 確か=NEG

[Q] bun#uder huar-tie.
明日 雨-PROP

bun#uder huar war-bei=kawoo.
明日 雨 入る-NPST=SPEC

(21) もしお金があつたら、あの車を買うんだけどなあ。要是有钱我就买那辆车。

[H] bii [joos-tie / ĵigaa-tie] aas-aa, ter terg-ii aw-(g)u aa-sem=bi=ee.
私 お金-PROP / お金-PROP COND-REFL あの 車-GA 取る-FUT COP-PRF=1SG=EMP

aas-aa は aa-AAs {COP-COND} の語幹部分が消失した形式 aas に -aa {-REFL} がついた接続詞な形式である。(22) には aas=ini, aas=šini という形式があらわれているが、これも aas に人称所属が付されて成った形式であるとみなせる。

[Q] bii ĵigaa-tie aas-aa ter terg=ini aw-b=bi.
私 お金-PROP COND-REFL あの 車=3SG 取る-NPST=1SG

(22) もしあなたが教えてくれていなかったら私はそこにたどり着けなかったでしょう。要不是你告诉我, 我肯定找不到那儿。

[H] šii nam-d jaa-s=uwei aas=ini, bii ter gaŋr-ii
あなた 私-DAT 教える-PRF=NEG. COND=3SG 私 あの 場所-GA
er-ŋ ul ole-m=bi=ee.
探す-SIM NEG 得る-NPSTII=1SG=EMP

[Q] šii nam-d jaa-see=uwei aas=šini, bii ter gaŋr-ii
あなた 私-DAT 教える-PRF=NEG COND=2SG 私 あの 場所-GA
eri-ŋ ul ole-n=bi.
探す-SIM NEG 得る-NPSTII=1SG

(23) (あの人は) 街へ行きたがっている。(那个人) 想上街。

[H] ter kuu giaa-d gar-wei el-ŋ+ii-wei.
あの 人 街-DAT 行く-NPST と言う-SIM+COP-NPST

[Q] ter kuu giaa-d ič-w(ei) el-ŋ+ii-bei.
あの 人 街-DAT 行く-NPST と言う-SIM+COP-NPST

(24) 僕にもそれを少し飲ませろ。给我也喝一点儿。

[H] nam-d negčeg oo-lgoo-ø.
私-DAT 少し 飲む-CAUS-IMP

[Q] bii bas nakem oo-yaa.
私 も 少し 飲む-VOL

(25) これはあの人に持って行かせろ／持って行かせよう。这个让他拿去吧。

[H] en-ii ter kuu awč-thei.
あれ-GA あの 人 持って行く-IMP.3SG

[Q] en-ii in ačir-jik-tgaan.
あれ-GA 彼 持って来る-PRF-IMP.3SG

(26) そのテーブルの上のお菓子は後で食べなさい。那桌子上的点心一会儿再吃。

[H] ter širee deer-ii utm-ii edlee id-gaanie.
あのテーブル 上-GA お菓子-GA 後で 食べる-FUT.IMP.2

[Q] ter širee deer-ii ide-g jak=in enčer id-ø
あの テーブル 上-GA 食べる-FUT もの=3SG 後で 食べる-IMP

enčer 「後で」は en-čeer {これ-DEG} と分析可能か。

(27) もっと早く来ればよかった。 早点儿来就好了。

[H] ert-hen ir-see aas=ini sain aa-see.
早い-DIM 来る-PRF COND=3SG 良い COP-PRF

ert-hen ir-see aas=in bol-gu aa-see.
早い-DIM 来る-PRF COND=3SG なる-FUT COP-PRF

[Q] ert-ken ir-see aas=šini sain aa-see.
早い-DIM 来る-PRF COND=2SG 良い COP-PRF

(28) あなたも一緒に行ったら (どうですか) ? 你也一起去吧。

[H] šii bas negend ič-yeē.
あなた も 一緒に 行く-VOL

[Q] šii bas nekend ič-jik-ø.
あなた も 一緒に 行く-PRF-IMP

(29) オレがそんなこと知るか。 谁知道呀! 我怎么知道?

[H] ken med-wei=mee, bii bas ul med-m=bi=ee.
誰 知る-NPST=INTERR わたし も NEG 知る-NPSTII=1SG=EMP

=mee は jum=yee {もの=INTERR} 「～ものか」 に由来する形式であると考えられる。塩谷 (1990) には [H] の疑問語疑問文につく要素として =imwoo が見られるが、これと同じものであろう。

[Q] anin med-bei? bii ker mede-b=bi.
誰 知る-NPST わたし どれだけ 知る-NPST=1SG

(30) これを作った (料理した) のは、お母さんだよな? いいえ、私が作ったのよ。 这是你妈妈做的吧? 不是, 这是我做的。

[H] en meemee=šini kii-see=yee.
これ 母親=2sg 作る-PRF=INTERR
biš=ie, bii kii-sem=bi.
違う=EMP 私 作る-PRF=1SG

[Q] en meemee=šini kii-sem=baa.
これ 母親=2SG 作る-PRF=SPEC
biš=ie, en bii kii-sem=bi.
違う これ 私 作る-PRF=1SG

4. [ヴォイス]

調査票の漢語及び例文番号は加藤 (2012) に基づく。

(1a) 《風などで》ドアが開いた。 门开了。

[H] eud nee-see.
 ドア 開ける-PRF

 eud nee-d-dee.
 ドア 開ける-PASS-PRF

[Q] eud nee-rd-dee.
 ドア 開ける-PASS-PRF

(1b) (彼が) ドアを開けた。 他开了门。

[H] ter eud nee-see.
 あれ ドア 開ける-PRF

[Q] in eud-ii nee-see.
 彼 ドア-GA 開ける-PRF

(2) 私は (自分の) 弟を立たせた。 我叫弟弟站起来。

[H] bii deu-yee bos el-sem=bi=ee.
 私 弟-REFL 立つ と言う-PRF=1SG=EMP

[Q] bii deu-mee bos-goo-yoo.
 私 弟-REFL 立つ-CAUS-VOL

[Q] では「立たせよう」と訳しうる文例が得られた。

(3) 私は (自分の) 弟に歌を歌わせた。 我叫弟弟唱歌。

[H] bii deu-yee dau daul-ø el-sem=bi=ee.
 私 弟-REFL 歌 歌う -IMP と言う-PRF=1SG=EMP

[Q] bii deu-mee doo doo-lgaa-yaa.
 私 弟-REFL 歌 歌う -CAUS-VOL

[Q] は上記 (2) と同様「歌わせよう」と訳しうる。

(4a) 《遊びたがっている子供に無理やり》母は子供にパンを買いに行かせた。 妈妈叫孩子去买面包。

[H] meemee icher-eer-ee mienbao aw-či-lgaa-see.
 母親 子供-INS-REFL パン 取る-行く -CAUS-PRF

[Q] eg=ini keku-mee mienbao aw-či-lgaa-see.
 母親=3SG 子供-REFL パン 取る-～しに行く-CAUS-PRF

(4b) 《遊びに出たがっているのを見て》母は子供を遊びに行かせた。妈妈叫孩子出去玩儿。

[H] meemee ičher-ee gar-gaa-jii naad-lgaa-see.
 母親 子供-REFL 出る-CAUS-SIM 遊ぶ-CAUS-PRF

[Q] eg=in ičker-ee beed naad-lgaa-see.
 母親=3SG 子供-REFL 外 遊ぶ-CAUS-PRF

(5a) 私は弟に服を着せた。我给弟弟穿衣服。

[H] bii deu-d-ee warhel emse-lgee-sem=bi=ee.
 私 弟-DAT-REFL 服 着る-CAUS-PRF=1SG=EMP

[Q] bii deu-mee warkel=ini emse-lgee-sem=bi.
 私 弟-REFL 服=3SG 着る-CAUS-PRF=1SG

(5b) 私は弟にその服を着させた。我叫弟弟穿那件衣服。

[H] bii deu-d-ee ter hantaas-ei emse-lgee-sem=bi=ee.
 私 弟-DAT-REFL あの 服-GA 着る-CAUS-PRF=1SG=EMP

[Q] bii deu-mee ten warkel=in ems-lgee-sem=bi.
 私 弟-REFL あの 服=3SG 着る-CAUS-PRF=1SG

(6) 私は弟にその本をあげた。我把那本书给弟弟了。

[H] bii deu-d-ee ter [bens-ei / bith-ii] uk-sem=bi=ee.
 私 弟-DAT-REFL あの 本-GA / 本-GA あげる-PRF=1SG=EMP

[Q] bii ten bitg-ee deu-d-ee uk-sem=bi.
 私 あの 本-REFL 弟-DAT-REFL あげる-PRF=1SG

(7a) 私は弟に本を読んであげた。我给弟弟读那本书

[H] bii deu-d-e ter [bith-ii / bičh-ii] daude-ĵ uk-sem=bi=ee.
 私 弟-DAT-REFL あの 本-GA / 本-GA 読む-SIM あげる-PRF=1SG=EMP

[Q] bii deu-d-mee ten bitg-ii doode-ĵ uk-sem=bi.
 私 弟-DAT-REFL あの 本-GA 読む-SIM あげる-PRF=1SG

(7b) 兄は私に本を読んでくれた。哥哥给我读那本书。

[H] ahaa=mini nam-d en bens-ei daude-ĵ uk-see.
 兄=1SG 私-DAT あの 本-GA 読む-SIM あげる-PRF

[Q] ag=mini ten bitg-ee nam-d doode-j uk-se(n).
兄=1SG あの 本-REFL 私-DAT 読む-SIM あげる-PRF

(7c) 私は母に髪の毛を切ってもらった。我叫妈妈给我剪头发。

[H] meemee=mini nam-d us haičle-j uk-see.
母=1SG 私-DAT 髪 切る-SIM あげる-PRF

[Q] bii ewee-yeer-ee hus-mee haičil-gaa-sem=bi.
私 母-INS-REFL 髪-REFL 切る-CAUS-PRF-1SG

(8a) 私は（自分の）体を洗った。我洗澡了。

[H] bii bey-ee waa-sem=bi=ee.
私 体-REFL 洗う-PRF=1SG=EMP

[Q] bii bey-mee waa-sem=bi.
私 体-REFL 洗う-PRF-1SG

(8b) 私は手を洗った。我洗手了。

[H] bii gari-e waa-sem=bi=ee.
私 手-REFL 洗う-PRF=1SG=EMP

[Q] bii gari-a waa-sem=bi.
私 手-REFL 洗う-PRF=1SG

(8c) 彼は（／その人は）手を洗った。他洗手了。

[H] ter kuu gari-e waa-see.
あの 人 手-REFL 洗う-PRF

[Q] in gari-a waa-see.
彼 手-REFL 洗う-PRF

(9) 私は（自分のために）その本を買った。我（为自己）买了那本书。

[H] bii en bith-ii aw-sem=bi=ee.
私 この 本-GA 取る-PRF=1SG=EMP

[Q] bii ten bitg-ii aw-sem=bi.
私 その 本-GA 取る-PRF=1SG

(10) 彼らは（互いに）殴り合っていた。他们互相打。

[H] ted duand-aa tarhe-lč-see.
彼ら 中-REFL 叩く-RECP-PRF

[Q] bey bey-mee tarke-j+ii-bei.
 身体 身体-REFL 叩く-SIM+COP-NPST

duandaa, bey beymee はいずれも「互いに」の意味である。

(11) その人たちは《みな一緒に》町へ出発した。他们一起上街了。

[H] ted negend giaa-d gar-see.
 彼ら 一緒に 街-DAT 出る-PRF

[Q] aan nekend giaa-d iš-tee.
 彼ら 一緒に 街-DAT 行く-PRF

(12) その映画は泣ける（その映画を見ると泣いてしまう）。那部电影使人流泪。

[H] en dien'yin(g)-ii uĵ-seer uĵ-eer wail-sem=baa.
 この 映画-GA 見る-PROG 見る-ANT 泣く-PRF=SPEC

en dien'yin(g)-ii uĵ-eer wail-see.
 この 映画-GA 見る-ANT 泣く-PRF

[Q] ten dien'ying=in kuu-yii akuu wail-gaa-bei.
 あの 映画-3SG 人-GA 全て 泣く-CAUS-NPST

(13a) 私は卵を割った。我打了一个鸡蛋。

[H] ter neg endeg edde-see.
 彼 一つ 卵 壊す-PRF

質問票の意図に反し「彼は」と訳出されている。

[Q] bii ten endug-ii erd-dem=bi.
 私 その 卵-GA 壊す-PRF=1SG

(13b) 《うっかり落として》私はコップを割った（／割ってしまった）。我不小心打碎了一个杯子。

[H] bii sanaan-d uwei en čomoo-yi edd-sem=bi=ee.
 私 気持ち-DAT NEG この コップ-GA 壊す-PRF=1SG=EMP

[Q] bii kečee-s=wei ten čaajk-ii erd-jik-sem.
 私 注意する-PRF=NEG その コップ-GA 壊す-PFV-PRF.1SG

(14a) きょう私はコーヒーを飲みすぎて（飲みすぎたので）眠れなかった。我昨天喝咖啡喝得太多，怎么也睡不着。

[H] bii udeš (orie) aiduwu baraan kaafei oo-goor want šad-s=uwei=bi=ee.
 私 昨日 夜 とても たくさん コーヒー 飲む-ANT 寝る できる-PRF=NEG=1SG=EMP

[Q] bii udeš#uder kaafei aidug baraan oo-sem=bi,
私 昨日 コーヒー とても たくさん 飲む-PRF-1SG
want-ŷ šad-gu=wei bol-see.
寝る-SIM できる-FUT=NEG なる-PRF

(14b) きのう私は仕事がたくさんあって(たくさんあったので) 眠れなかった。我昨天工作太多, 一宿都没睡。

[H] bii udeš orie aidew baraan aŷil kii-geer neg
私 昨日 夜 とても たくさん 仕事 する-ANT 一つ
suni want-s=uwei=bi=ee.
晩 寝る-PRF=NEG=1SG=EMP

[Q] udeš#uder minii weil=mini aidug baraan neg suni neken
昨日 私.GEN 仕事=1SG とても たくさん 一つ 晩 中
want-t(ee)=u(wei).
寝る-PRF=NEG

neken はどのような機能であるか不明だが、2. [アスペクト] (18) [Q]で見た uderken 「終日」と関連がるものかもしれない。

(15) 私は頭が痛い。我头疼。

[H] minii eki=mini eud-ŷ+ii-wei.
私.GEN 頭=1SG 痛む-SIM+COP-NPST

[Q] minii heki=mini eud-ŷ+ii-bei.
私.GEN 頭=1SG 痛む-SIM+COP-NPST

(16) あの女性は髪が長い。她头发很长。

[H] ter-ii us=ini (yamer-tie) ort.
あれ-GA 髪=3SG どんな-PROP 長い

yamer-tie は辞書に見られないが、「とても」に当たる意味か。

[Q] in-ii heki-i hus=in aidug ort bol-see.
彼-GA 頭-GA 髪=3SG とても 長い なる-PRF

(17a) 彼は(別の)彼の肩を叩いた。他拍了他的肩膀。

[H] ter mur=ini tuwslee-see.
あれ 肩=3SG 叩く-PRF

[Q] in gari=in tark-ŷik-see.
彼 手=3SG 叩く-PFV-PRF

(17b) 彼は (別の) 彼の手をつかんだ. 他抓住了他的手。

[H] ter kuu ter-ii gari=ini bari-see.
あの 人 あれ-GA 手=3SG つかむ-PRF

[Q] in gari=in bari-jik-see.
彼 手=3SG つかむ-PRF-PRF

(18a) 私は彼がやって来るのを見た. 我看见他来了。

[H] bii ter kuu-yi ir-s=(yi)ni ol-ĵ uj-sem=bi=ee.
私 あの 人-GA 来る-PRF=3SG 得る-SIM 見る-PRF=1SG=EMP

[Q] in ir-sen=ini bii uj ol-sem.
彼 来る-PRF=3SG 私 見る 得る-PRF.1SG

[H]では「得て見た」, [Q]では「見て得た」という構成になっている. [Q] の助動詞構造ではこの例のように本動詞が語幹のみで現れることがある (cf. 3. (1) [Q]). これは他の方言での現れから見て -ĵ {-SIM} が脱落したものである。

(18b) 私は彼が今日来ることを知っている. 我知道他今天来。

[H] ter en uder ir-gu=(yi)ni bii med-wei=bi=ee.
あれこの 日 来る-FUT=3SG 私 知る-NPST=1SG=EMP

[Q] in en uder ir-gu=in bii mede-b=bi.
彼 この 日 来る-FUT=3SG 私 知る-NPST=1SG

(19) 彼は自分 (のほう) が勝つと思った. 他觉得自己会赢。

[H] minii med-gu-er bii lawtie denge-wei=bi=ee.
私.GEN 知る-FUT-INS 私 絶対 勝つ-NPST=1SG=EMP

[Q] in weer-ii bey et-wei el-ĵ+ii(-wei).
彼 自分-GA 身体 勝つ-NPST と言う-SIM+COP-NPST

(20a) 私は (コップの) 水 (の一部) を飲んだ. 我把 (杯子里的) 水喝了一半。

[H] bii en čomoo os-ii duand-ii=(yi)ni oo-sem=bi=ee.
私 このコップ 水-GA 半分-GA=3SG 飲む-PRF=1SG=EMP

[Q] bii ten čaaĵg-ii os=in nakem oo-sem.
私 そのコップ-GA 水=3SG 少し 飲む-PRF.1SG

(20b) 私は (コップの) 水を全部飲んだ. 我把 (杯子里的) 水全喝了。

[H] bii en čomoo os-ii hoh oo-sem=bi=ee.
私 このコップ 水-GA 全部 飲む-PRF=1SG=EMP

[Q] bii ten čaajg-ii os=in buleg oo-sem.
私 そのコップ-GA 水=3SG 全部 飲む-PRF.1SG

「全部」は恩和巴图 (1983: 25) では buguli (恩和巴图の表記では buwuli) とある。

(21) あの人は肉を食べない。他不吃肉。

[H] ter miag ul id-ee.
あれ 肉 NEG 食べる-NPSTII

[Q] in miag ul id-ee.
彼 肉 NEG 食べる-NPSTII

(22a) 今日は寒い。今天很冷。

[H] en uder aidew kuiten.
この 日 とても 寒い

[Q] en uder aideg kuiten.
この 日 とても 寒い

(22b) 私は (何だか) 寒い (私には寒く感じる)。我觉得有点儿冷。

[H] minii med-gu-eer en uder aidew kuiten.
私.GEN 知る-FUT-INS この 日 とても 寒い

[Q] bii (bas) kuiten-čeer el-ŷ+ii-bei.
私 また 寒い-DEG と言う-SIM+COP-NPST

(23) 私は人がとても多いのに驚いた。我很吃惊, 居然这么多人!

[H] end baraan kuu ir-sen-d bii (unen) čoč-sem=bi=ee.
ここ 多い 人 来る-PRF-DAT 私 本当に 驚く-PRF=1SG=EMP

[Q] bii aideg gaig-sem=bi, eikeen baraan kuu ir-see.
私 とても 驚く-PRF=1SG こんなに 多い 人 来る-PRF

(24) 雨が降ってきた。下雨了。

[H] huar war-see.
雨 入る-PRF

[Q] huar war-se(n).
雨 入る-PRF

(25) その本は良く売れる。那本书卖得很好。

[H] en bens-ei aw-see unen sain bol-see.
 あの 本-GA 取る-PRF 本当 良い なる-PRF

意図に反し、「買ってよかった」という意味で訳出されてしまったようである。

[Q] ten biteg aideg saiken dur-see.
 あの 本 とても よい 売る-PRF

参考文献

- 恩和巴图. 1983. 『达汉小辞典』 (Daor Niakan Bulku Biteg) 呼和浩特: 内蒙古人民出版社
- 加藤晴子. 2012. 「<特集「ヴォイスとその周辺」>中国語」東京外国語大学『語学研究所論集』第 17 号. pp117-127.
- 三宅登之. 2010. 「日本語との対照から見た中国語のアスペクト」東京外国語大学『語学研究所論集』第 15 号. pp193-213.
- _____. 2011. 「<特集「モダリティ」>中国語」東京外国語大学『語学研究所論集』第 16 号. pp128-133.
- 塩谷茂樹. 1990. 「ダグール語ハイラル方言の口語資料 –テキストと注釈–」『日本モンゴル学会紀要』 No.21. pp47-95.
- 山田洋平. 2011. 『ハイラル・ダグール語の文法記述 –述語人称, 所属人称, 再帰を中心として–』東京外国語大学修士論文

執筆者連絡先 : yamadabayar@tufs.ac.jp, kazamas@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2020 年 12 月 24 日

<特集「モダリティ」>

タイ語のモダリティ

Modality in Thai

スニサー ウィッタヤーパンヤーノン(齋藤)

Sunisa Wittayapanyanon (Saito)

東京外国語大学世界言語社会教育センター
World Language and Society Education Center, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿は特集「モダリティ」(『語学研究所論集』第16号, 2011, 東京外国語大学)に寄与する。本稿の目的は30個のアンケート項目に対するタイ語データを与えることである。

Abstract: This report contributes to the special cross-linguistic study on ‘modality’ (Journal of the Institute of Language Research 16, 2011, Tokyo University of Foreign Studies). The purpose of this paper is to offer the Thai data for the question of 30 phrases.

キーワード: タイ語, モダリティ

Keywords: Thai language, Modality

1. はじめに

本稿では、『語学研究所論集』第16号特集「モダリティ」のアンケート項目の(1)から(30)までの例文の筆者によるタイ語訳を掲げ、それに適宜補足説明を加える。日本語の例文(1)に対して、異なるタイ語の語順にて、比較例示すべき複数の文が考えられる場合、(1)-1, (1)-2...として複数の文を示している。それに加え、各例文を説明する目的で別の文を追加している場合は、(1)-a, (1)-b...として記載している。また、タイ語において同じ位置で日本語に対応するタイ語語彙が複数ある場合は、[...]とし、どの語彙を使ってもよいということを示す他、<...>で示したものは非表示とすることが可能であることを意味している。また本稿のグロスで使用している略語については、本稿末に一覧を記載している。タイ語については、発音記号での表記としている。

2. タイ語訳文データ

(1) 【許可】「～してもいい」

「(その仕事が終わったら) もう帰ってもいいですよ。」

(1)-1

<cà?> klàp ləəy kɔ̌ dāay ná?
AUX.FUT return right now also can PTCL

(1)-2

klàp dāay ná?
return can PTCL



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed/ja>

許可を意味する助動詞 *dâay* を用いた複数の表現が可能である。(1)-1 は *kôo* 「～も」を付加することで、複数ある選択肢の中で「帰る」ことを選択肢の 1 つとして提示している。タイ語は意味・統語上の必須項の省略を許す Pro Drop 言語であり、文脈により主語あるいは目的語を省略することが可能であるため(峰岸&スニサー 2019)、ここで例示しているいずれの例文でも主語となる対話者は非表示としているが、終結小辞 *ná?* を入れることで対話者への許可をより明確に示すことになる。

(2) 【禁止】「～するな」

「(腐っているから、あなたは) それを食べてはいけない/それを食べるな。」

(2)-1

kin mây dâay ná?
eat NEG can PTCL

(2)-2

yàa kin [ná?si?]
AUX.PROH eat PTCL

(2)-3

hâam kin ná?
TR.PROH eat PTCL

(2)-4

mây kin ná?
NEG eat PTCL

(2)-1 では状況可能を示す助動詞 *dâay* を *mây* によって否定し、文末に行為要求の意味を有する終結小辞 *ná?* を付加することで不許可を示している。*ná?*がない場合は、「食べられない」という状況を説明する文となる。(2)-2 では禁止の意味を持つ助動詞 *yàa* を、(2)-3 では禁止の意味を持つ動詞 *hâam* を命題となる動詞とともに用いることで、禁止の命令文としている。(2)-2 で用いている *yàa* よりも、(2)-3 で用いている *hâam* の方が、禁止要求が強いニュアンスとなる。両文とも文末に行為要求の意味を有する終結小辞 *ná?*を用いることで表現を和らげることが可能となる。一方、(2)-2 で示した同意共感要求の機能を持つ終結小辞 *si?*(スニサー 2017) は、命令文であることをより明示する機能を有する終結小辞となる。(2)-3 で用いている *hâam* は、命題内容が明らかであれば、単独で使用することも可能である。また、(2)-4 のように、否定を示す *mây* と文末に行為要求の意味を有する終結小辞 *ná?*を付加することで禁止を示すこともできる。

禁止を示すには、文脈によって義務の意味を持つ助動詞 *tôŋ* を用いることもある。

(2)-a

tôŋ mây khuy kan ráwàaŋ sòp
must NEG talk together during test
「試験中、おしゃべりしてはいけない。」

(3) 【義務】「～しなければならない」

「(遅くなったので) 私たちはもう帰らなければならない。」

(3)-1

phûakraw tôŋ kláp léew
1.PL must return AUX.PRF

(3)-2

phûakraw mây klàp mây dâay léew
1.PL NEG return NEG can AUX.PRF

(3)-1 は義務の意味を持つ助動詞 *tɔŋ* を用いる文型となるが, (3)-2 のように状況可能の助動詞 *dâay* を含んだ二重否定の文型によって義務を意味することも可能である. 両文とも完了を示す助動詞 *léew* を用いることで, 「～する時間になった」という意味を持たせている.

(4) 【推奨】「～したほうがいい」

「(雨が降るそうだから) 傘を持って出かけたほうがいいよ。」

(4)-1

phók rôm pay dūay dii kwàa ná?
take umbrella go together good COMP PTCL

(4)-2

phók rôm pay dūay si?
take umbrella go together PTCL

(4)-1 は比較文型となり, 「傘を持って出かける」方が「傘を持たないで出かける」よりも良いということを示し, 推奨を表している. (4)-2 では, 同意共感要求の機能を持つ終結小辞 *si?* を命令文に付加した文型となる.

(5) 【評価的義務】「～するべきだ/～するものだ」

「歳をとったら, 子供の言うことを聞くべきだ/聞くものだ。」

?aayú? mâak léew kôo khuan faŋ thîi dèk phûut bâaŋ
age a lot AUX.PRF so should listen what child speak sometimes

「～することが正しい」といった評価的義務の意を有する助動詞 *khuan* を使用した文型となるが, *khuan* の前に結果を示す *kôo* 「だから」を置くことで, 「歳をとった」という理由で, その結果「子供の言うことを聞くべき」とのニュアンスとしている. タイ社会は年上を敬う傾向が強いため, 本例文には違和感があるが, *bâaŋ* 「時には/多少」を付加することで許容されるとみなしている. 上記は「言うことを聞く」を「耳を傾ける」という意味での訳文であるが, 「従う」という意味であれば, 参考として「子供は大人に従うべき」という文でのタイ語訳を 5-(a), 5-(b)に例示する. (5)-a は, 対話者が子供であり, 「子供=幼い/未熟であるので, 大人の言うことを聞くべき」という意味であるのに対して, 5-(b)は一般的に「子供は大人の言うことを聞くべき」という意味となる.

(5)-a

pen dèk kôo khuan chúafaj phûuyà
COP child so should follow adult

「子供だから, 大人の言うことを聞くべきだ」

(5)-b

dèk khuan chúafaj phûuyà
child should follow adult

「子供は大人の言うことを聞くものだ」

(6) 【希望】「～したい」

「お腹が空いたので、(私は) 何か食べたい。」

hǐw	léew	[yàak/tǒŋ kaan]	kin	ʔaray	kôo	dâay	sák	yàaŋ
hungry	PRF	want	eat	something	also	can	just a	sort

希望を示す yàak や tǒŋ kaan を命題となる動詞とともに用いる文型となるが、tǒŋ kaan は書き言葉となり、口語では専ら yàak が用いられる。ʔaray+kôo dâay は、複数の食べ物の中でいずれも可能、さらには文末に sák yàaŋ 「1 つぐらい」という語を付加することで「何か 1 つ、何でも良いので食べたい」というニュアンスとなる。kôo dâay を用いない場合、「お腹が空いたので、何か食べたいが、その何かは何なのかわからない」というニュアンスとなる。また、その場合は対話者への希望を伝えるのではなく、発話者の状態を説明する独り言として捉えられる可能性もある。但し、食べ物の提供という希望を対話者へ明確に伝えたい場合は、6-(a)のような文とするのが自然である。使役の意を持つ hây と命題となる動詞 kin 「食べる」を用い、「対話者が発話者に食べさせる」という希望を伝えることになる。

(6)-a

hǐw	léew	mii	ʔaray	hây	kin	máy
hungry	PRF	have	something	CAUS	eat	Q

「お腹が空いたので、何か食べるものはありますか。」

(7) 【意志】「(私が) ～しよう」

「私が持ちましょう。」

(7)-1

<chán>	thǔuu	[náʔ/máy]
<SBJ.1.SG.F>	take	[PTCL/Q]

(7)-2

hây	chán	thǔuu	[náʔ/máy]
CAUS	OBJ.1.SG.F	take	[PTCL/Q]

(7)-3

<chán>	thǔuu	hây	[náʔ/máy]
<SBJ.1.SG.F>	take	CAUS	[PTCL/Q]

(7)-4

hây	chán	thǔuu	hây	[náʔ/máy]
CAUS	OBJ.1.SG.F	take	CAUS	[PTCL/Q]

(7)-1 は同意共感要求としての終結小辞 náʔを用い、発話者の意志を示す文となる (スニサー 2017)。また、náʔに代わって疑問小辞 máy を用いると、A(人)+B(動詞) +máy 「A が B をしましょうか」と対話者の意志を伺うことで対話者への提案となり、発話者の意志を示すことも可能である。なお、A に該当する主語となる chán は非表示とすることが多い。他にも、(7)-2、(7)-3、(7)-4 のように使役表現によっても発話者の意志を示すことも可能である。(7)-2 は、A+hây+B(人)で「A が B にさせる」という意味となるが、B に 1 人称表現が入ると、対話者からの許可を求めることで、発話者の意志を示すこととなる。なお、このケースでは主語となる A が対話者の場合は非表示とするのが一般的である。(7)-3 は、A(人)+B(動詞)+hây+C(人)「A が C のために B をしてあげる」という表現となるが、C に入る対話者は文脈上明らかたため、非表示とすることが多

く、7-(3)も非表示としている。また、文脈に応じて、Aに該当する主語となる *chán* も非表示とすることもあ
る。7-(3)の文型では C(対話者)のために何かをしてあげたいという意味を示す表現である。(7)-2 と(7)-3 の
両方の意味を合わせ持つのが(7)-4 となる。A(人)+*hây*+B(人)+C(動詞)+*hây*+D(人)「AがBにDのためにC
をさせてあげる」という使役表現となるが、(7)-3と同様Dに該当する対話者、そして主語となるAは同じく
対話者であるが、ともに非表示とすることが多い。対話者のために行う発話者の行為への許可を求めること
で発話者の意思を示している。

(8) 【勧誘】「(私たちが) ~しよう」

「じゃあ、一緒に昼ご飯を食べましょう。」

nán *pay kin khâaw thîaŋ dūaykan* <*thəʔ/náʔ/máy*>
CONJ go eat lunch together <PTCL/PTCL/Q>

結論/結果を示す接続詞 *nán*「それでは」を文頭に入れることで、対話者が昼食に行く意志があることを示
した後、発話者が一緒に行くことを勧誘する文脈となる。勧誘の意味を有する終結小辞 *thəʔ*, 行為要求の意味
を有する終結小辞 *náʔ*, もしくは対話者の意志を伺う疑問小辞 *máy* を付加することも可能である。

(9) 【相手の意向が不明な場合の勧誘】「～ませんか」

「一緒に昼ご飯を食べませんか？」

(9)-1

càʔ *pay kin khâaw thîaŋ dūaykan máy*
AUX.INT go eat lunch together Q

(9)-2

pay kin khâaw thîaŋ dūaykan <*thəʔ/náʔ/máy*>
go eat lunch together <PTCL/PTCL/Q>

(9)-1 では意思の意味を有する助動詞 *càʔ*を使用することで、相手の意向を確認する疑問文となるが、*dūaykan*
「一緒に」を付加することで勧誘であることも示しており、相手の意向が不明な場合に勧誘表現として使用
する。(9)-2 は(8)【勧誘】の訳文から *nán*「じゃあ」を除いたものとなるが、相手の意向が不明な場合でも勧
誘表現として使用可能である。

(10) 【希望】「～といいなあ／～してほしいなあ」

「明日、良い天気になるといいなあ。／明日は良い天気になってほしいなあ。」

(10)-1

phrŭŋnii thâa ʔaakàat dii kôo dii siʔ
tomorrow if weather fine so good PTCL

(10)-2

phrŭŋnii yàak hây ʔaakàat dii caŋ
tomorrow want let weather fine PTCL

(10)-1 は *thâa*「もし」の後に仮定や条件を表す内容が入り、*kôo*「それなら」の後には起こり得る結果や希
望を示す内容が入る表現となるが、終結小辞 *siʔ*によって「良い天気になってほしい」という希望を強めてい
る。(10)-2 は *ʔaakàat*「天候」といった非生物を目的語とした使役表現と願望を表す *yàak* を組み合わせた表現

となり、終結小辞 *caŋ* によって希望の意味を強調している。

(11) 【命令】「～しろ」

「(私はここで待っているから) すぐにそれを持って来なさい。」

(11)-1

<kεε> pay ʔaw khǒŋ nân maa dǎawnii
<2.SG> go take thing that come right now

(11)-2

<kεε> pay ʔaw khǒŋ nân maa siʔ <dǎawnii>
<2.SG> go take thing that come PTCL right now

命令文型は、①*coŋ*+動詞、②動詞、③動詞+終結小辞 *siʔ*があり、①は書き言葉で、②と③は話し言葉となる。(11)-1 は②の文型、(11)-2 は③の文型を使用している。(11)-2 では *dǎawnii* 「すぐに」を非表示とすることがあるが、*dǎawnii* 「すぐに」を用いる場合は、終結小辞 *siʔ*の後に間を空ける必要がある。また、これらの表現の主語は非表示となることが多いが、命令の対象者を特定する場合は主語を表示する必要がある。

(12) 【懇願】「～していただけませんか？」

「そのペンをちょっと貸していただけませんか？」

(12)-1

khǒ yuum pàakkaa dâam nân nòy dâay máy [kháʔ/khráp]
TR.REQ borrow pen CLF that a little can Q [PTCL.F/PTCL.M]

(12)-2

khǒ yuum pàakkaa dâam nân nòy náʔ [kháʔ/khráp]
TR.REQ borrow pen CLF that a little PTCL [PTCL.F/PTCL.M]

(12)-3

mây sâap càʔ khǒ yuum pàakkaa dâam nân nòy dâay máy [kháʔ/khráp]
NEG know AUX. TR. borrow pen CLF that a little can Q [PTCL.F/PTCL.M]
FUT REQ

(12)-4

hây yuum pàakkaa dâam nân nòy dâay máy [kháʔ/khráp]
CAUS borrow pen CLF that a little can Q [PTCL.F/PTCL.M]

依頼の意味を表す動詞 *khǒ* の後には動詞またはモノなどの名詞が来るが、疑問文=(12)-1、平叙文=(12)-2のいずれの文型も可能である。(12)-1 では疑問文とすることで間接的表現となり、また(12)-1 と(12)-2 では *nòy* 「ちょっと」を入れることで表現を和らげつつ、さらに終結小辞 *kháʔ/khráp* を付加することで丁寧さを示している。(12)-3 では、(12)-1 の前に定型表現 *mây sâap càʔ* 「～になるかは分からないが=恐れ入りますが」を文頭に加えることで、より謙虚な姿勢を示している。また、(12)-4 のように使役表現と可能表現を組み合わせ、ここでは非表示となっているが対話者を主語として対話者視点で、発話者にペンを借りさせることについて対話者に許可を求める、といった文型とするのも懇願を示す表現の1つとなる。

(13) 【能力可能】「～できる」

「あの人は中国語が読めます。／あの人は中国語を読むことができます。」

(13)-1

khon	nán	<săamâat>	ʔaan	phaasăa	ciin	dâay
person	that	<can>	read	language	Chinese	can

(13)-2

khon	nán	<săamâat>	ʔaan	phaasăa	ciin	pen
person	that	<can>	read	language	Chinese	can

(13)-3

khon	nán	<săamâat>	ʔaan	phaasăa	ciin	ʔòok
person	that	<can>	read	language	Chinese	can

(13)-1, (13)-2, (13)-3 は全て能力的に可能であることを示す表現となるが、それぞれ若干ニュアンスが異なる。(13)-1 で使用している *dâay* は汎用的に使用される能力可能や状況可能を示す助動詞となる。(13)-2 の *pen* は学習や練習によって後天的に可能となる技能・能力が使用可能であることに焦点を当てる場合に使用し、この場合であれば漢字の読み方や仕組みを理解し、読めるというニュアンスを示すこととなる。(13)-3 の *ʔòok* を使用する場合は、非常に難しい漢字や乱雑な字、崩し字といった特殊な文字を読むことができるといった意味を含むものとなる。いずれの訳文でも *dâay/pen/ʔòok* とともに *săamâat* を使用することもあるが、非表示することが多い。逆に上記で述べた *dâay/pen/ʔòok* で意味するニュアンスが文脈として明らかな場合、稀に *dâay/pen/ʔòok* を非表示とし、*săamâat* だけとする場合もある。

(14) 【状況可能】「～できる」

「明かりが暗くて、ここに何が書いてあるのか、読めない。」

(14)-1

mûut	ʔaan	mây	dâay	wâa	khĭan	wáy	wâa	ʔaray
dim	read	NEG	can	COMP	writtem	STAT	COMP	something

(14)-2

mûut	ʔaan	mây	ʔòok	wâa	khĭan	wáy	wâa	ʔaray
dim	read	NEG	can	COMP	written	STAT	COMP	something

(14)-3

mûut	ʔaan	mây	wăy	wâa	khĭan	wáy	wâa	ʔaray
dim	read	NEG	can	COMP	written	STAT	COMP	something

(14)-1 で使用されている *mây dâay* は、暗いという状況に起因し、文字の姿が見えずに読めないことを表している。(14)-2 の *mây ʔòok* は文字自体の姿は見えるものの、暗くて何と書いてあるかが読めない状況であることを示している。また、(14)-3 の *mây wăy* はその暗さであれば、通常であれば読める人が多い可能性が高いかもしれないものの、発話者の視力が暗さよりも大きな要因となって読めない状況であることを意味するものである。

(15) 【確信】「～はずだ」

「(朝早く出発したから) 彼らはもう着いているはずだ／もう着いたに違いない。」

(15)-1

phûakkháw	ʔòkðənthaaŋ	kan	tèecháaw	tənníi	nâa càʔ	thǔŋ	léew	[náʔ/lèʔ/lâʔ]
3.PL	leave	PL	early morning	now	AUX.INFER	arrive	PRF	PTCL

(15)-2

phûakkháw	ʔòkðənthaaŋ	kan	tèecháaw	tənníi	nâa càʔ	thǔŋ	léew	nêenêe
3.PL	leave	PL	early morning	now	AUX.INFER	arrive	PRF	surely

根拠に基づく推量を示す時に用いる *nâa càʔ* とともに (15)-1 では終結小辞 *náʔ/lèʔ/lâʔ* を用いることで、より確度の高い推量であることを示している。(15)-2 では、これらの終結小辞の代わりに、副詞 *nêenêe* 「きっと」が同様の機能を担っている。

(16) 【推量】「～だろう」

「(あの人は) 明日はたぶん来ないだろう。」

(16)-1

phrúníi	khon	nán	khəŋ càʔ	mây	maa	ròk
tomorrow	person	that	AUX.INFER	NEG	come	PTCL

(16)-2

phrúníi	khon	nán	khəŋ càʔ	mây	maa	nêe	ləəy
tomorrow	person	that	AUX.INFER	NEG	come	surely	PTCL

(15) 【確信】 で用いた *nâa càʔ* は根拠に基づく推量の際に使用するに對して、*khəŋ càʔ* は根拠が不確かな場合に用いる表現となる。根拠がない推量であるものの、その可能性が高いことを示すため、(16)-1 では否定を強める *ròk*, (16)-2 では *nêe* 「確かに」とそれを強める *ləəy* といった表現と共起することがある。

(17) 【疑念】「～のではないか」

「彼らはまだ来ないなんて、きっと途中で車が壊れたんじゃないか。」

(17)-1

phûakkháw	yaŋ	mây	maa	rót	sǎa	klaaŋthaan	rúpláaw
3.PL	yet	NEG	come	car	break	on the way	Q

(17)-2

phûakkháw	yaŋ	mây	maa	sǒŋsǎy	rót	càʔ	sǎa	klaaŋthaan	nêe	ləəy
3.PL	yet	NEG	come	suspect	car	AUX.	break	on the way	surely	PTCL
						INFER				

(17)-1 では疑問小辞 *rúpláaw* を用いて、疑問文型で疑念を表している。(17)-2 では *sǒŋsǎy* 「疑う」という動詞で疑念を呈し、*nêe ləəy* 「確実に」によって、疑念を強めている。

(18) 【可能性】「～かもしれない」

「(昼間だからあの人は家に) さあ、いるかもしれないし、いないかもしれない。」

(18)-1

ʔùuu	klaaŋwan	ʔàat càʔ	yùu	rǔuu	<ʔàat càʔ>	mây	yùu	kóo	dâay
INTJ	daytime	AUX.INFER	exist	or	AUX.PSBL	NEG	exist	also	AUX.PSBL

(18)-2

mây	rúu	si?	klaaŋwan	ʔaat cà?	yùu	rǔuu	<ʔaat cà?>	mây	yùu	kôo	dâay
NEG	know	PTCL	daytime	AUX.	exist	or	AUX.	NEG	exist	also	AUX.
				PSBL			PSBL				PSBL

(18)-3

mây	nêecay	ná?	klaaŋwan	ʔaat cà?	yùu	rǔuu	<ʔaat cà?>	mây	yùu	kôo	dâay
NEG	sure	PTCL	daytime	AUX.	exist	or	AUX.	NEG	exist	also	AUX.
				PSBL			PSBL				PSBL

上記のいずれの訳文でも用いられているʔaat cà?は可能性を示す場合に用いられる表現となり、文末に kôo dâay 「～も可能である」と共起してよく使用される。(18)-1 では間投詞rǔuu 「さあ」、(18)-2 では mây rúu si? 「分からないが」、(18)-3 では mây nêecay ná? 「確信はない」といった表現を前置きにそれぞれ用いることで、いずれの選択肢の可能性を示している。なお、2つ目のʔaat cà?は非表示することもある。

(19) 【視覚／聴覚以外の感覚による判断】「～ようだ」

「(額に触ってみて) どうもあなたは熱があるようだ。」

(19)-1

[duumǔan/duuthâa/	khun	cà?	mii	khây	ná?
thâathaaj/rúusùk/nâaklua]					
[it looks/it looks/	2.SG	AUX.INFER	have	fever	PTCL
it looks/feel/be afraid]					

(19)-2

khun	nâa cà?	mii	khây	ná?
2.SG	AUX.INFER	have	fever	PTCL

duu は「見る」という動詞であるが、duu が含まれた duumǔan/duuthâa といった語も手で触るといった触覚による判断においても使用可能である。thâathaaj は「様態」の意となり、こちらも視覚に関連する語となるが、この語も同じく触覚による判断にも使用可能である。rúusùk 「感じる」を用いる場合は触覚による判断を示す場合に、nâaklua 「心配である」については、熱があることに対する不安といった主観的な判断を示す場合にそれぞれ用いる表現となる。また、触覚という根拠に基づく推量となるため、(15) 【確信】で使用している nâa cà?を含んだ文も(19)-2 のように使用することが可能である。

また、duumǔan/duuthâa/nâaklua については、他者からの症状説明といった口頭での言語情報や医師の診断書といった文字情報などを根拠にした判断の場合でも使用することが可能である。

(19)-a

[duumǔan/duuthâa/nâaklua]	khun	cà?	tâŋthóoŋ	ná?
[it looks/it looks/be afraid]	2.SG	AUX.INFER	pregnant	PTCL

「(対話者の症状の説明や他の医者 of 診断書を見て) どうもあなたは妊娠しているようだ。」

(20) 【伝聞】「～そうだ」

「(天気予報によれば) 明日は雨が降るそうだ。」

(20)-1

dâyyn	wâa	phrûŋnii	fõn	cà?	tòk
hear	COMP	tomorrow	rain	AUX.FUT	fall

(20)-2

phayaakoon	?aakaat	bòok	wâa	phrûŋnii	fõn	cà?	tòk
forecast	weather	say	COMP	tomorrow	rain	AUX.FUT	fall

(19)で用いた duumûan/duuthâa/thâathaay/rúusùk/nâaklua は、発話者の判断が加わるのに対して、(20)-1, (20)-2とも発話者の判断は加わっていないものとなる。(20)-1のように動詞 dâyyn「聞く」を用いることで伝聞を示すことができる。この日本語文であれば、(20)-2のように phayaakoon ?aakaat「天気予報」を主語として、bòok「言う」と組み合わせた表現も可能である。

(21) 【反実仮想】「～だったら～するのだが」

「もしお金があったら、あの車を買うんだけどなあ。」

thâa	mii	ŋən	<kô>	cà?	súuu	rót	khan	nán	[ná?/lè?/lá?]
if	have	money	so	AUX.INT	buy	car	CLF	that	PTCL

接続詞 thâa「もし」を用いて条件文を設定し、意思を示す助動詞 cà?を用いた文型となる。終結小辞 ná?/lè?/lá?を付加することで、今は実現できない反実仮想の願望を表すことになる。

(22) 【反実仮想過去】「～だったら～したことだろう」

「もしあなたが教えてくれていなかったら、私はそこにたどり着けなかったでしょう。」

(22)-1

thâa	khun	mây	bòok	chán	khøj cà?	yaŋ	pay	mây	thũŋ	thiinân	nêenêe
if	2.SG	NEG	say	1.SG.F	AUX.INFER	yet	go	NEG	reach	there	surely

(22)-2

thâa	khun	mây	bòok	chán	?aat cà?	yaŋ	pay	mây	thũŋ	thiinân	kôo	dây
if	2.SG	NEG	say	1.SG.F	AUX.PSBL	yet	go	NEG	reach	there	also	PSBL

(22)-3

thâa	khun	mây	bòok									
if	2.SG	NEG	say									
pen	pay	dây	wâa	chán	?aat cà?	yaŋ	pay	mây	thũŋ	thiinân	kôo	dây
possibly			COMP	1.SG.F	AUX.PSBL	yet	go	NEG	reach	there	also	PSBL

(21) 【反実仮想】と同様 thâa「もし」を用いた文型となるが、仮想過去の事象については、根拠が不確かな推量の意を持つ khøj cà?や可能性を示す ?aat cà?によって表現することとなるが、(22)-1は実際には起きていないことを推量することで、(22)-2は現実とは異なる別の結果が生じる可能性を示すことで、それぞれ反実仮想過去を示している。また、(22)-2では、kôo dâay「～という状況もあり得る」を付加することで、現実とは異なる別の結果もあり得たことも示唆している。また、(22)-3の pen pay dâay wâa「～ということもあり得る」という可能性を表す表現をさらに加えた文も使用される。この日本語文には「まだ」という語は含まれていないが、タイ語で訳出する場合、yaŋ「まだ」を加えることで、反実仮想過去であることをより明確に示すことが可能となる。一方、肯定文の場合、(22)-aのように完了を示す lèwを用いることで、より明確に反実仮

想過去の意を示すこととなる。さらに、断定を示す *lâʔ/lèʔ* を使用すると、その可能性が強いことを表すこととなる。

(22)-a

thâa fõn mây tòk kôo khoŋ càʔ pay léew [lâʔ/lèʔ]
if rain NEG fall so AUX.INFER go AUX.PRF PTCL

「もし雨が降らなかったら、行っただろうな。」

(23) 【3人称の主体による希望】「～したがっている」

「(あの人は) 街へ行きたがっている。」

<khon nán> [yàak/tõŋkaan] <càʔ> [khâw/pay nay] muawŋ
<person that> want AUX.INT enter town

主語である *khon nán* 「あの人」を非表示とすることも可能であるが、主語の人称の違いによって表現の差はないため、非表示とすると文脈によっては発話者の希望と解釈することも可能である。文脈によって主語が明らかな場合にのみ、主語を非表示とする。

(24) 【1人称命令】「(私に) ～させろ」

「僕にもそれを少し飲ませろ。」

(24)-1

hây <phõm> kin [bâaŋ/nõy] <siʔ/thòʔ>
CAUS 1.SG.M take a little PTCL

(24)-2

hây <phõm> kin dūay <siʔ/thòʔ>
CAUS 1.SG.M take together PTCL

使役を意味する *hây* 「～させる」とともに、(24)-1 では命令の意を持つ終結小辞 *siʔ* や強い依頼の意の *thòʔ* を共起させることで、命令の意をより明確に表している。*nõy* には「少し」の意味を示す他、依頼文を和らげる機能もあるが、*bâaŋ* には「一部/少し」といった意味の他にもこの文脈では「～にも」といった意味を含んでいる。(24)-2 の *dūay* には「～にも」の意味のみを示すこととなる。

(25) 【3人称命令】「(彼に) ～させろ」

「これはあの人に持って行かせろ/持って行かせよう。」

nīi hây <khon nán> [thũu/hîw/ pay [siʔ/thòʔ]
khõn/bèek/?aw]
this CAUS <person that> take go PTCL

(24) 【1人称命令】と同様、使役の文型が可能であるが、終結小辞には命令の意の *siʔ* や強い依頼の意の *thòʔ* を用いている。また、目的語となる *khon nán* 「あの人」が文脈上明らかな場合は非表示することも可能となる。

(26) 【遠未来命令形】「(あとで) ～しろ」

「そのテーブルの上のお菓子は後で食べなさい。」

khanǒm bon tóʔ tua nán <kèp> wáy kin <thiilǎŋ> [náʔ/láʔ]
 confectionery on table CLF that <keep> AUX eat <afterwards> PTCL

wáy は「しておく」という状態を示す助動詞となるが、この語によって「お菓子を取っておき、後で食べる」という表現となる。wáy があれば kèp 「取っておく」と thiilǎŋ 「後で」は非表示とすることもでき、wáy のみで遠未来を表すことが可能となる。また、終結小辞 náʔ/láʔ を付加することで、命令や依頼の意味を明確にすることができるが、láʔの方が「今は不可」であることのニュアンスがより強いものとなる。

(27) 【反実仮想】「～だったら～するのだが」

「もっと早く来ればよかった。」

nâa càʔ maa rew kwàa níi
 AUX come early COMP this

比較文型の中で、nâa càʔ を用いることで、事実としての到着時間 níi 「この（到着時間）」の比較対象となる仮想としての早い到着時間の方がより良い選択肢であったという後悔と推奨の意味を同時に表している。

(28) 【脱従属化】「～したら（どうか）」

「あなたも一緒に行ったら（どうですか）？」

(28)-1

khun kǝ pay dũaykan siʔ
 2.SG also go together PTCL

(28)-2

khun mây pay dũaykan lâʔ
 2.SG NEG go together PTCL

(28)-3

khun mây pay dũaykan rǝ
 2.SG NEG go together Q

(28)-4

khun nâa càʔ pay dũaykan náʔ
 2.SG AUX go together PTCL

(28)-1 は同意共感要求の機能を有する終結小辞 siʔ (スニサー 2017) を文末に付加することで強い推奨となり、「どうですか」の訳出を不要としている。(28)-2 は否定形と終結小辞 lâʔ を、(28)-3 は否定形と疑問小辞 rǝ をそれぞれ共起させることで推奨の意味を示し、「どうですか」の部分と同じく非表示とすることを許容可能なものとしている。一方、(28)-4 で推奨の助動詞 nâa càʔ と行為要求の終結小辞 náʔ (スニサー 2017) を共起させる用法でも推奨のニュアンスとなる。

(29) 【(疑問詞を含まない) 反語】「～か！」

「オレがそんなこと知るか！」

(29)-1

khray càʔ pay rúu rúaŋ nán [láʔ/lâw]
 INDF AUX DIR know story that PTCL

(29)-2

khâa cà? pay rúu rûaŋ nán dâay ɲay [lâ?/lâw]
1.SG.M AUX DIR know story that can how PTCL

(29)-1 では khray 「誰が」とともに, cà? pay を使用することが反語表現として必要となる. 一方, (29)-2 のように 1 人称表現 khâa 「俺」を主語することも可能であり, (29)-1 と同じく cà? pay を用いる必要があるとともに, 状況可能の助動詞 dâay 「できる」と ɲay 「どう?」を合わせて用い, 「どうやってできる」の意を表している. なお, lâ?/lâw を付加すると答えを求めていることとなり, 「(発話者が) そんなことは知らない」という反語の意を強めることとなる.

(30) 【付加疑問】「～よね!？」

「これを作った (料理した) のは, お母さんだよね?」

(30)-1

khon thîi tham ʔaahǎan nîi mĕe chây máy/rúplàaw
person REL make cuisine this mother that is so Q

(30)-2

khon thîi tham ʔaahǎan nîi mĕe [si?/nó?]
person REL make cuisine this mother PTCL

「いいえ, 私が作ったのよ。」

(30)-3

mây chây chán tàaŋhàak
NEG that is so 1.SG.F on the contrary

(30)-4

plàaw chán tàaŋhàak
NEG 1.SG.F on the contrary

(30)-5

mây chây chán tham [yâ?/lè?/lâ?/ròk]
NEG that is so 1.SG.F make PTCL

(30)-6

plàaw chán tham [yâ?/lè?/lâ?/ròk]
NEG 1.SG.F make PTCL

(30)-1, (30)-2が疑問文に該当する第1文目, (30)-3, (30)-4, (30)-5, (30)-6が応答文に該当する第2文目を訳出したものとなる. (30)-1では文全体を指示するchây「そう」と疑問小辞mây/rúplàawを共起させ, 情報の確認を行っている(スニサー 2017). (30)-2では対話者への同意共感要求の機能を持つ終結小辞si?/nó?を付加し, 聞き手に賛同を求める文とすることも訳出が可能である. (30)-3, (30)-5では付加疑問文で用いたchây「そう」を否定する形式であるが, (30)-4, (30)-6では付加疑問文も含めた疑問文全般において否定で答える際に用いるplàawを用いている. (30)-5, (30)-6で付加されているyâ?/lè?/lâ?/ròkは, 意見修正要求の機能を有しており, 対話者や発話者自身が既に述べた意見や考え方などに対して, 発話者が不賛成や異議があることを表し, 前出の意見を修正することを求める意を示している.

略語リスト

1	一人称	first person	INFER	推量	inferential
2	二人称	second person	INT	意思	intention
3	三人称	third person	INTJ	間投詞	interjection
ADV	副詞	adverb	M	男性	masculine
ASP	アスペクト	aspect	NEG	否定	negation, negative
AUX	助動詞	auxiliary	OBJ	目的語	object
CAUS	使役	causative	PL	複数	plural
CLF	類別詞	classifier	PRF	完了	perfect
COMP	比較	comparative	PROH	禁止	prohibitive
COMP	補文マーカ	complementizer	PSBL	可能性	possible
CONJ	接続詞	conjunction	PTCL	小辞	particle
COP	コピュラ	copula	Q	疑問小辞	question particle
DIR	方向接辞	directional prefix	REL	関係詞	relative
EMPH	強調	epenthesis	REQ	依頼	request
F	女性	feminine	SBJ	主語	subject
FOC	焦点	FOC	SG	単数	singular
FUT	未来	future	STAT	状態	stative
HS	伝聞	hearsay	TR	他動詞	transitive
INDF	不定代名詞	indefinite			

参考文献

- 峰岸真琴・スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2019. 「タイ語の主題とその談話での現れ方について」, 『言語の類型的特徴対照研究会論集』第2号, pp.111-135.
- スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2017. 「タイ語話し言葉コーパスから見た「語用論的終結小辞」」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』94号, pp.111-136.
- スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2017. 『表現を広げる中級へのタイ語』, 三修社.
- スニサー ウィッタヤーパンヤーノン. 2016. 『表現を身につける初級タイ語』, 三修社.

執筆者連絡先 : sunisa@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2020年12月15日

〈特集「ヴォイスとその周辺」〉

インドネシア語のヴォイスとその周辺 Voice and related matters in Indonesian

佐近 優太
Yuta Sakon

東京外国語大学大学院総合国際学研究科
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿の目的は、特集「ヴォイスとその周辺」(『語学研究所論集』第17号, 2012, 東京外国語大学)におけるアンケート項目に対するインドネシア語のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Indonesian data which answers the thirty survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 17, 2012, which focuses on the cross linguistic study of 'Voice and related matters'.

キーワード: インドネシア語, ヴォイス, 使役, 自動詞, 他動詞

Keywords: Indonesian, voice, causative, intransitive verb, transitive verb

1. はじめに

本稿では、インドネシア語のヴォイスとその周辺に関する事項について記述を行う。今回の記述は『語学研究所論集』第17号(2012)の特集テーマ「ヴォイスとその周辺」のアンケート項目に基づいている。アンケート回答に際しては、執筆者が日本語からインドネシア語¹に翻訳した後、コンサルタント二名²に協力していただき修正を行った。例文については、それぞれの一行目にアンケート原文の日本語を提示する。補足が必要な場合は、アンケート項目外の文も適宜用いている。この項目外の例文も執筆者が作成した後、コンサルタントによるチェックを受けたものである。

2. インドネシア語データ

2.1. 自動詞と他動詞

最初に、インドネシア語における自動詞と他動詞による表現をみる。

1-a (風などで)ドアが開いた。【自動詞による表現】

- (1) Pintu itu *(ter-)buka (oleh angin).
door that TER-open by wind
「(風によって)そのドアが開いた」



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ 基本的に書き言葉における標準インドネシア語を用いるが、一部口語体またはインフォーマルな文体も含まれる。そうした場合はその都度明記する。

² コンサルタントは Rahmat Sopian 氏と Himawan Pratama 氏である。この場を借りて感謝の意を表す。

1-b (彼が)ドアを開けた。【他動詞による表現】

- (2) Dia mem-buka³ pintu itu.
3SG ACT-open door that
「彼はドアを開けた」

上の例文は、それぞれのアンケート原文に最も合致すると考えられるものである。しかし(1)において、接頭辞 *ter-*は受動態標識の一つとして捉えられる場合があることに注意が必要である。(2)と以下の(3)-(4)からわかるように、インドネシア語には能動態標識として接頭辞 *meN-*⁴、受動態標識として接頭辞 *di-*と接頭辞 *ter-*が存在する(ルシアナワティ 1998: 91)。受動態標識のうち接頭辞 *di-*は無標の形式と捉えられるのに対して、接頭辞 *ter-*は「結果状態」「可能」「非意図」の意味を付与するという点で意味的に有標である⁵。

1-c (入り口の)ドアが開けられた。【他動詞の受け身】

- (3) Pintu masuk itu di-buka.
door enter that PASS-open
「その入り口のドアが開けられた」

- (4) Pintu masuk itu ter-buka.
door enter that TER-open
「その入り口のドアは開いている/開いてしまった/開けられた」

そのため、(1)の文も能動文「風がドアを開けた」に対応する受動文の一つとしてみなされる。しかし接頭辞 *ter-*は有生の動作主が非意図的に行為を行った場合、または動作主が無生物もしくは動作主が不明である場合に多く用いられる形式である。そのため「(何かによって)ドアが開いた」というような日本語では自動詞で表す事態は、インドネシア語では接頭辞 *ter-*が用いられることがある。

こうした日本語の自動詞とインドネシア語の接頭辞 *ter-*の標示との対応関係は必ずしもすべての動詞に当てはまるものではない。以下の(5)では動詞 *rusak* に接辞による標示を行う必要はなく、接頭辞 *ter-*は生起することができない(6)。

1-d ドアが壊れた。【自動詞と他動詞の対立】

- (5) Pintu itu rusak.
door that broken
「そのドアは壊れた」

³ 接頭辞 *meN-*の *N-*の部分は語幹の冒頭音に応じて *m-*, *n-*, *ng-*, *ny-*, *nge-*, \emptyset -の形で現れる。これらは語幹にそのまま接続する場合と、冒頭音と置き換わる場合がある。本稿では前者は(i)のように形態素境界を設け、後者は(ii)のように表記する。

(i) mem-bawa (ii) memukul [meN- + (p)ukul]
ACT-take ACT.hit

⁴ 接頭辞 *meN-*は文体によって省略される場合がある。

⁵ 本稿では、便宜上 *ter-*とグロスを *TER-*で統一する。

- (6) *Pintu itu te(r)⁶-rusak.
door that TER-broken
「(意図した意味)そのドアは壊れた」

(5)に対応した他動詞文は以下ようになる。接尾辞-kan が用いられる場合もあり、その場合(7)は形態的使役文といえる。

- (7) Dia me-rusak(-kan)⁷ pintu itu.
3SG ACT-broken-CAUS door that
「彼はそのドアを壊した」

以上のように buka「開く」では接頭辞 ter-と接頭辞 meN-が、rusak「壊れる」では無標示と接辞 meN-(+kan)によって日本語における自他の対立が表されている。

なお、buka「開く」に接尾辞-kan が伴う場合は使役の意味は生じず、(8)のように受益の解釈を引き起こす。

- (8) Dia mem-buka-kan pintu itu.
3SG ACT-open-BEN door that
「彼はそのドアを開けてあげた」

以上、インドネシア語では自動詞・他動詞の形態的区別が難しく、語によって差異が存在する⁸。

2.2. 使役

次にインドネシア語の使役文について考える。(9)は menjadikan「～の状態にさせる」という使役動詞が用いられている例である。なおこの場合、(7)のような形態的使役文を用いることは出来ない(10)⁹。

⁶ 接頭辞 ter-は基本的にそのまま語幹に接続するが、語幹の冒頭音が r の場合 te-となる。

⁷ 接尾辞-kan には(a)benefactive, (b)instrumental, (c)causative の他に、(d)applicative として働くが付随する機能が曖昧なものや(e)統語的变化を引き起こさず、標示が非義務的な場合がある(Kroeger 2007, Shiohara 2012)。本稿では(d)(e)のようなグロスを-KANと表記する。

⁸ さらに、同じ buka「開ける」でも「店が開いている」の場合は接頭辞 ter-がない方が自然である。

(i) Toko itu (*ter-)buka.
store that TER-open
「その店は開いている」

⁹ コンサルタントによれば、berdiri は diri「立つ」に自動詞的なプロセスを表す語を作ることのできる ber-(便宜上グロスは BER-とする)という接頭辞が付いた派生語であるため、接辞 meN-+kan を用いた形の許容度が低いという。しかし、派生語であることが必ずしもその他の接辞の付与を妨げるわけではない(e.g. men-[ber-henti]-kan [ACT-[BER-stop]-CAUS]「止まらせる」)。また diri に直接使役接辞を付与した場合は(ii)のように「設立する」という別の意味になる。

(ii) Dia men-diri-kan usaha itu.
3SG ACT-stand-CAUS company that
「彼はその会社を設立した」

2 私は(自分の)弟を立たせた。【自動詞の使役】

- (9) Saya men-jadi-kan adik saya berdiri.
1SG ACT-become-CAUS brother 1SG stand
「私は弟を立たせた」

- (10) *Saya mem-berdiri-kan adik saya.
1SG ACT-stand-CAUS brother 1SG
「私は弟を立たせた」

ただし自動詞の形態的使役文の可否も語彙の種類に依存し、例えば mandi 「シャワーを浴びる」であれば(11)のような文が可能である。

- (11) Saya me-mandi-kan adik saya.
1SG ACT-shower-CAUS brother 1SG
「私は弟を風呂に入れた(兄弟にシャワーを浴びさせた)」

他動詞の場合、基本的に接尾辞-kan を用いて使役文を作ることは出来ず、(9)同様に使役動詞を用いる。(12)では buat 「作る、させる」という動詞が用いられている。他動詞に接尾辞-kan が付いた場合は前述の(8)のように受益の意味が通常付与される。ただし以下の(15)で見ると一部他動詞は接尾辞-kan によっても使役文を作ることが出来る。

3 【他動詞の使役】¹⁰

- (12) Saya mem-buat adik saya mem-buka pintu itu.
1SG ACT-make brother 1SG ACT-make door that
「私は自分の弟にドアを開けさせた」

次に強制使役と許可使役の違いを見る。インドネシア語では、これらは語彙によって区別される。強制使役(13)は memaksa/menyuruh 「強制する/命令する」、許可使役(14)は mengizinkan/membolehkan 「許可する」などの語が用いられる、

4-a (遊びたがっている子供に無理やり)母はパンを買いに行かせた【強制使役】

- (13) Se-orang ibu memaksa / menyuruh anak=nya mem-beli roti.
one-CLF mother ACT.force / ACT.command child=3 ACT-buy bread
「母は子供にパンを買いに行くことを強制した」

4-b (遊びに行きたがっているのを見て)母は子供を遊びに行かせた【許可使役】

- (14) Se-orang ibu meng-izin-kan / mem-boleh-kan anak=nya bermain di luar.
one-CLF mother ACT-permit-KAN / ACT-let-KAN child=3 play in outside
「母は子供が遊びに行くのを許可した」

¹⁰ アンケート原文で用いられていた「歌を歌う」はインドネシア語では bernyanyi と自動詞であるため、アンケートの趣旨と合致せず、例文を変更した。

ここまでインドネシア語の使役には接尾辞-kan によるものと、使役動詞を用いるものがあることを見た。「着せる」という動詞の場合、これら二つの形式は行為の直接性によって使い分けられる。直接手を下して行為を行っている場合は接尾辞-kan (15)、間接的な命令の場合は使役動詞による使役文が用いられる(16)。

5-a 私は弟に服を着せた【直接の行為】

- (15) Saya memakai-kan adik saya baju baru.
1SG ACT.use-CAUS brother 1SG clothes new
「私は弟に新しい服を着せた」

5-b 私は弟にその服を着させた【間接の行為】

- (16) Saya menyuruh adik saya memakai baju itu.
1SG ACT.command brother 1SG ACT.use clothes that
「私は弟にその服を着るように命じた」

2.3. 授与

「与える」を表す動詞は *beri* であるが、接尾辞-kan の有無によって与格交替が起こる。

6 私は弟にその本をあげた【やりもらい】

- (17) a. Saya mem-beri-kan buku itu kepada adik saya.
1SG ACT-give-KAN book that to brother 1SG
「私はその本を弟にあげた」

- b. Saya mem-beri adik saya buku itu.
1SG ACT-give brother 1SG book that
「私は弟にその本をあげた」

また前述の通り、接尾辞-kan の機能の一つに恩恵の授与がある。日本語のような授受による形式の違いは存在しない。

7-a 私は弟に本を読んであげた【授恩恵】

- (18) Saya mem-baca-kan buku itu untuk adik saya.
1SG ACT-read-BEN book that to brother 1SG
「私は弟に本を読んであげた」

7-b 兄は私に本を読んでもくれた【受恩恵】

- (19) Kakak saya mem-baca-kan buku itu untuk saya.
brother 1SG ACT-read-BEN book that to 1SG
「兄は私に本を読んでもくれた」

多くの場合接尾辞-kan による受益表現は、受益者が目的語となる対象物を所有することを含意する(20)。そのため(21)の例では受益者である私が、髪を切った結果としてそれを所有することを想定しにくいた

め、容認度が下がる。

- (20) Ibu saya memotong-kan kue untuk saya.
mother 1SG ACT.cut-BEN cake to 1SG
「母は私にケーキを切ってくれた(母はケーキを切って、私にくれた)」

7-c 私は母に髪を切ってもらった【デモラウ】

- (21) ?Ibu saya memotong-kan rambut saya.
mother 1SG ACT.cut-BEN hair 1SG
「母は私の髪を切ってくれた」

2.4. 再帰など

一人称の場合は(22)-(23)のように、代名詞または再帰代名詞 *diri* を用いて主語を参照することが出来るが、三人称の場合は再帰代名詞の容認度が低くなる(24)。

8-a 私は自分の体を洗った【再帰】

- (22) Saya men-cuci tubuh {saya / diri}.
1SG ACT-wash body 1SG / self
「私は自分の体を洗った」

8-b 私は手を洗った【再帰】

- (23) Saya men-cuci tangan {saya / diri}.
1SG ACT-wash hand 1SG / self
「私は手を洗った」

8-c 彼は手を洗った【再帰】

- (24) Dia mem-cuci {tangan=nya / ?tangan diri}.
3SG ACT-wash hand=3 / hand self
「彼は手を洗った」

自利態は(25)のように *diri sendiri* など再帰代名詞を用いて表す。

9 (自分のために)私はその本を買った【自利態】

- (25) Saya mem-beli buku itu untuk diri sendiri.
1SG ACT-buy book that to self own
「私は自分のためにその本を買った」

2.5. その他

相互に行う行為を表す際には、副詞 *saling* (26a)か、動詞の重複(26b)が用いられる。ただし(27)で示すように、副詞 *saling* と重複を併用することは出来ない。

10 彼らは (／その人たちは) (互いに) 殴り合っていた 【相互】

(26) a. Mereka saling memukul.
3PL each.other ACT.hit
「彼らは互いに殴り合った」

b. Mereka pukul-memukul.
3PL hit-ACT.hit
「彼らは互いに殴り合った」

(27) *Mereka saling pukul-memukul.
3PL each.other hit-ACT.hit
「彼らは互いに殴り合った」

「共に～する」という事象は副詞 *bersama-sama* を用いて表す。

11 その人たちは (みんな一緒に) 街へ行った 【衆動】

(28) Mereka pergi bersama-sama ke kota.
3PL go together to town
「彼らは一緒に街へ行った」

「その映画は泣ける」といった自発を表す専用の形式は無く、以下の(29)-(30)が対応する表現となる。

12 その映画は泣ける (その映画を見ると泣いてしまう) 【自発】

(29) Film itu akan mem-buat saya menangis.
film that will ACT-make 1SG cry
「その映画は私を泣かせるだろう」

(30) Saya akan menangis kalau menonton film itu.
1SG will cry if ACT.see film that
「その映画を見ると、私は泣いてしまうだろう」

行為の意志性について、(31)のような接頭辞 *meN-*を用いた能動文は通常意図的な行為を表す。行為の無意志性の標示には、動詞に接頭辞 *ter-*を付加する文法的な方法と、副詞 *tidak sengaja* を用いる語彙的な方法がある。ただし接頭辞 *ter-*を用いる場合、(32)のように主語は被動作主でなければならない。そのため、(33)のように「私」を主語位置に置くと、不自然な意味になる。一方で副詞 *tidak sengaja* を用いる場合には能動文にそのまま付加する形となる(34)。

13-a 私は卵を割った 【意志／無意志】

(31) Saya memecah-kan telur.
1SG ACT.break-CAUS egg
「私は卵を割った」

13-b (うっかり落として) 私はコップを割った／割ってしまった【意志／無意志】

(32) Cangkir itu ter-pecah-kan oleh saya.
glass that TER-break-CAUS by 1SG
「私はコップを割ってしまった」

(33) ?Saya ter-pecah-kan cangkir itu.
1SG TER-break-CAUS glass that
「?私はコップに割られてしまった」

(34) Saya tidak sengaja memecah-kan cangkir itu.
1SG NEG deliberately ACT.break-CAUS glass that
「私は意図せずコップを割ってしまった」

不可能の随意性に関して、不随意の不可能を表す場合、助動詞 *bisa* が用いられる(35a)。可能の標識には *bisa* の他に *mampu/dapat* があるが、これらは能力可能を表すためにこの場合文意とあわない(35b)。

14-a きのう私はコーヒーを飲みすぎて(飲みすぎたので) 眠れなかった【不随意の不可能】

(35) a. Kemarin saya terlalu banyak minum kopi, jadi tidak bisa tidur.
yesterday 1SG too many drink coffee then NEG can sleep
「昨日私はコーヒーを飲んだので、眠れなかった」

b. Kemarin saya terlalu banyak minum kopi, jadi tidak {?dapat / *mampu} tidur.
yesterday 1SG too many drink coffee then NEG can / can sleep
「昨日私はコーヒーを飲んだので、眠れなかった」

対して、基本的に随意の不可能の場合には可能の標識は現れない(36a)。(36b)のように助動詞 *bisa* を用いると、「仕事がたくさんあって眠る時間がない」といった随意の解釈ではなく、「仕事が溜まっていることに対して不安感を感じ、そのために眠ることが出来ない」という不随意の解釈となる。

14-b きのう私は仕事がたくさんあって(たくさんあったので) 眠れなかった【随意の不可能】

(36) a. Kemarin saya banyak pekerjaan, jadi tidak tidur.
yesterday 1SG many work then NEG sleep
「昨日私は仕事がたくさんあって、(遅くまで仕事をする必要があつて)眠れなかった」

b. Kemarin saya banyak pekerjaan, jadi tidak bisa tidur.
yesterday 1SG many work then NEG can sleep
「昨日私は仕事がたくさんあって、(不安で)眠れなかった」

日本語などにおけるいわゆる二重主語構文に関して、インドネシア語でも同様な形式が見られる(37)。ただし、「私は頭が痛い」では対比的文脈が想定される(38)。

- (37) Saya asal=nya dari Tokyo.
1SG origin=DET from Tokyo
「私は出身地が東京です」

15 私は頭が痛い【全体と部分・主体・一時的】

- (38) Saya kepala=nya sakit.
1SG head=DET sick
(複数人いる中で、「あなたはどこが痛いの?」と聞かれて)「私は頭が痛い」

通常「私は頭が痛い」という言う場合には、「私の頭」を主語に置くか(39)、sakit kepala「頭痛」という句を用いる(40)。

- (39) Kepala saya sakit.
head 1SG sick
「私は頭が痛い (lit. 私の頭は痛い)」

- (40) Saya sakit kepala.
1SG sick head
「私は頭が痛い (lit. 私は頭痛です)」

「彼女は髪が長い」のような場合は、二重主語構文(41)及び、被所有物を主語に置く型(42)を用いることが出来る。

16 彼女は髪が長い【全体と部分・主体・恒常的】

- (41) Dia rambut=nya panjang.
3SG hair=DET long
「彼女は髪が長い」

- (42) Rambut=nya panjang.
hair=3 long
「彼女の髪は長い」

また、このような所有関係がある場合には接辞 ber-を用いることも可能である¹¹。

- (43) Dia be(r)-rambut¹² panjang.
3SG BER-hair long
「彼女は長い髪を持っている」

他人の身体部位に働きかけを表現する場合には、「彼の肩」など身体部位を被動作主項にとる。

¹¹ 接頭辞 ber-とその他の所有表現との使い分けについては、Moeljadi (2011)及び降幡(2013)が詳しい。

¹² 接頭辞 ber-は接頭辞 ter-と同じように、語幹の冒頭音が r の場合 be-となる。

17-a 彼は（別の）彼の肩をたたいた【全体と部分・対象・接触／結果状態が継続的】

- (44) Budi menepuk bahu Agus.
Budi ACT.pat shoulder Agus
「Budi は Agus の肩を叩いた」

17-b 彼は（別の）彼の腕をつかんだ【全体と部分・対象・接触／結果状態が継続的】

- (45) Budi memegang lengan Agus.
Budi ACT.catch arm Agus
「Budi は Agus の腕をつかんだ」

知覚構文は以下のような形式をとる。

18-a 私は彼がやって来るのを見た【知覚構文】

- (46) Saya me-lihat dia datang.
1SG ACT-see 3SG come
「私は彼がやって来るのを見た」

18-b 私は彼が今日来ることを知っている【知覚構文】

- (47) Saya menge-tahu-i (bahwa) dia akan datang hari ini.
1SG ACT-know-APPL CONJ 3SG will come day this
「私は彼が今日来ることを知っている」

引用文中での再帰には *dirinya* という再帰代名詞を用いる。

19 彼は自分（のほう）が勝つと思った【引用文中の再帰】

- (48) Dia kira dirinya akan menang.
3SG think REFL will win
「彼は自分が勝つと思った」

動作が部分的か全体的かを示す、文法的な要素は存在しない。一部の場合は *sedikit* 「少し」、全部の場合は *semua* 「すべて」という語を用いる。

20-a 私は（コップの）水（の一部）を飲んだ【部分的に及ぶ動作】

- (49) Saya minum air sedikit.
1SG drink water a.little
「私は水の一部を飲んだ」

20-b 私は（コップの）水を全部飲んだ【全体に及ぶ動作】

- (50) Saya minum air semua=nya
1SG drink water all=3
「私は水を全部飲んだ」

恒常的な否定文を表す特別な形式は存在しない。

21 彼は肉を食べない【恒常的な否定文】

- (51) Dia tidak makan daging.
3SG NEG eat meat
「彼は肉を食べない」

感覚に関する表現は以下ようになる。hari ini「今日」を主語にする場合は dingin「寒い」を述語とする(52)。感覚主体を主語に置く場合は、merasa「感じる」という動詞を用いるか(53)、dinginに被害受身の機能を持つ接周辞 ke-an¹³を適用した kedinginan「寒さにやられる」を用いる(54)。

22-a 今日は寒い【感覚述語・非人称文／感覚主体の存在が感じられない、より客観的な表現】

- (52) Hari ini dingin.
day this cold
「今日は寒い」

22-b 私は(何だか)寒い(私には寒く感じる)【感覚述語・非人称文／斜格主語】

- (53) Saya me-rasa dingin.
1SG ACT-feel cold
「私は寒さを感じる」

- (54) Saya ke-dingin-an.
1SG KE-cold-AN
「私は寒さにやられている」

(55)のように接頭辞 ter-を伴った terasa「感じられる」という語を用いることもできる。ただしこの場合の文字通りの意味は「今日は(私には)寒く感じられる」となる。

- (55) Hari ini te-rasa dingin.
day this TER-feel cold
「今日は寒く感じられる」

次の例は感情主体が受動的である感情述語文である。「驚く」を表す動詞には terkejut と kaget がある。前者は必ず接頭辞 ter-と共に現れるのに対し(56a)、後者は基本的に無接辞で生起する(56b)。

23 人がとても多かったことに私は驚いた【(感情主体が受動的である)感情述語】

- (56) a. Saya {ter-kejut / *kejut} (karena) ada banyak orang.
1SG TER-surprise / surprise because exist many people
「人がたくさんいたために、私は驚いた」

¹³ 接周辞 ke-an は被害受身の他、自発的用法や名詞化の機能を持つため、便宜上グロスに KE-AN とする。

- b. Saya {?ter-kaget / kaget} (karena) ada banyak orang.
1SG TER-surprise / surprise because exist many people
「人がたくさんいたために、私は驚いた」

「雨が降り始めた」は mulai 「始める」を用いて以下のように表す。

24 雨が降り始めた【現象文・現場での直接体験】

- (57) Hujan mulai turun.
rain start fall
「雨が降り始めた」

中間構文について、「よく売れる」のような表現は、インドネシア語では laris という語を用いる。

25 この本はよく売れる【中間構文】

- (58) Buku itu laris.
book that sell.well
「この本はよく売れる」

略号一覧

1: first person, 2: second person, 3: third person, ACT: active voice, APPL: applicative, BEN: benefactive, CAUS: causative, CLF: classifier, CONJ: conjunction, DET: determiner, NEG: negation, PASS: passive voice, PL: plural, POSS: possessive, REFL: reflexive, SG: singular

参考文献

- Kroeger, Paul R. (2007). “Morphosyntactic vs. morphosemantic functions of Indonesian -kan.” In *Architectures, rules, and preferences: Variations on themes of Joan Bresnan*, Annie Zaenen, Jane Simpson, Tracy Holloway King, Jane Grimshaw, Joan Maling, and Chris Manning (eds.), Stanford: CSLI Publications, pp.229–251.
- Moeljadi, David. Possessive Verbal Predicate Constructions in Indonesian. *Tokyo University Linguistic Paper*, 31, pp.117-133
- Shiohara, A. 2012. “Applicatives in Standard Indonesian.” *Senri ethnological studies*, 77, pp.59-76.
- Sneddon, J. N. 2006 *Colloquial Jakartan Indonesian*. Canberra: Australia Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University.
- Sneddon, J. N., Adelaar, K. A., Djenar, D. N. & Ewing, M. 2010. *Indonesian: A Comprehensive Grammar. 2nd edition*, London: Routledge.
- 降幡正志. 2013. 「インドネシア語の所有・存在表現」『語学研究所論集』18, 東京外国語大学, pp. 308-331
- ルシアナワティ. 1998. 「インドネシア語における種々の受身構文について -日本語とインドネシア語の対照研究-」『STUDIUM 25』, 大阪外国語大学大学院院生協議会, pp91-109.

執筆者連絡先 : sakon.yuta.n0@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2020年12月15日

<特集「他動性」>

インドネシア語の他動性 Transitivity in Indonesian

佐近 優太
Yuta Sakon

東京外国語大学大学院総合国際学研究科
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿の目的は、特集「他動性」(『語学研究所論集』第19号, 2014, 東京外国語大学)におけるアンケート項目に対するインドネシア語のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Indonesian data which answers the thirty survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 19, 2014, which focuses on the cross linguistic study of 'Transitivity'.

キーワード: インドネシア語、他動性

Keywords: Indonesian, Transitivity

1. はじめに

本稿では、インドネシア語の他動性に関する事項について記述を行う。今回の記述は『語学研究所論集』第19号(2014)の特集テーマ「他動性」のアンケート項目に基づいている。アンケート回答に際しては、執筆者が日本語からインドネシア語¹に翻訳した後、コンサルタント二名²に協力していただき修正を行った。例文については、一行目にアンケート原文の日本語を提示している。説明はアンケート原文の項目ごとに行うが、補足が必要な場合は、アンケート項目外の文も適宜用いている。項目外の例文は執筆者が作成し、コンサルタントによるチェックを受けたものである。

2. インドネシア語データ

【直接影響・変化】

最初に、行為の対象の変化を含意する動詞群を見る。(1)-(3)にあるように、インドネシア語では状態変化を含む事象は、状態を表す語に使役接尾辞-kanを使って表されることが多い。なお、アンケート項目ではこのような形態をとる動詞に偏ったが、membunuh「(人)殺す」などの接尾辞を伴わない他動詞も多く存在する。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ 基本的に書き言葉における標準インドネシア語を用いるが、一部口語体またはインフォーマルな文体も含まれる。そうした場合はその都度明記する。

² コンサルタントは Himawan Pratama 氏と Rahmat Sopian 氏である。この場を借りて感謝の意を表す。

1-a 彼はそのハエを殺した

- (1) Dia me-mati-kan³ lalat itu.
3SG ACT-die-CAUS fly that
「彼はそのハエを殺した」

1-b 彼はその箱を壊した

- (2) Dia {me-rusak(-kan) / meng-hancur-kan} kotak itu.
3SG ACT-break-CAUS / ACT-shatter-CAUS box that
「彼はその箱を壊した」

1-c 彼はそのスープを温めた

- (3) Dia {meng-hangat-kan / memanas-kan} sup itu.
3SG ACT-warm-CAUS / ACT.hot-CAUS sup that
「彼はそのスープを温めた」

これらのような文において、結果のキャンセルは基本的に容認されない。

1-d 彼はそのハエを殺したが、死ななかった

- (4) ?Dia me-mati-kan lalat itu, tapi lalat itu tidak mati.
3SG ACT-die-CAUS fly that but fly that NEG die
「彼はそのハエを殺したが、そのハエは死ななかった」

【直接影響・無変化】

行為の対象の変化を含意しない場合は他動詞が用いられ、前置詞などを伴うことはない。

2-a 彼はボールを蹴った

- (5) Dia menendang bola itu.
3SG ACT.kick ball that
「彼はボールを蹴った」

2-b 彼女は彼の足を蹴った⁴

- (6) Dia menepak kaki orang itu.
3SG ACT.kick foot person that
「彼はその人の足を蹴った」

³ 接頭辞 meN-の N-の部分は語幹の冒頭音に応じて m-, n-, ng-, ny-, nge-, Ø-の形で現れる。これらは語幹にそのまま接続する場合と、冒頭音と置き換わる場合がある。本稿では前者は(i)のように形態素境界を設け、後者は(ii)のように表記する。

(i) mem-bawa (ii) memukul [meN- + (p)ukul]
ACT.take ACT.hit

⁴ 「ボールを蹴った」と「彼の足を蹴った」で異なる動詞が用いられている理由に関して、コンサルタントから menendang に比べ menepak の方が悪意などの行為者の気持ちが含意されることがあるという意見が得られた。

2-c 彼はその人にぶつかった(故意に)

- (7) Dia menabrak orang itu.
3SG ACT.collide person that
「彼はその人にぶつかった」

接頭辞 *meN-*が用いられる能動文においては、(7)のように「当該行為は意図的になされた」ということが無標の解釈である。無意志の解釈を行うことは可能であるが、通常は(8)のように *tidak sengaja* 「意図せず」という副詞を用いて表す⁵。

2-d 彼はその人とぶつかった(うっかり)

- (8) Dia (tidak sengaja) menabrak orang itu.
3SG NEG deliberately ACT.collide person that
「彼はうっかりその人とぶつかってしまった」

【知覚 2A vs. 2B】

「～が見える」「～が聞こえる」といった他動性の低い知覚行為は接頭辞 *ter-*または接周辞 *ke-an* を用いて表される(9), (11)。一方で意図的な「見る」「聞く」は接頭辞 *meN-*が用いられる(10), (12)。

3-a あそこに人が数人見える

- (9) {*Ter-lihat / Ke-lihat-an*}⁶ (ada) beberapa orang di situ.
TER-see / KE-see-AN exist several person in there
「あそこに数人(いるのが)見える」

⁵ 非意図性を表す接辞に接頭辞 *ter-*があるが、非意図の意味は主に自動詞語幹に接続する場合に顕在化する(a)。

- a. Dia ter-jatuh.
3SG *TER-fall*
「彼はうっかり落ちてしまった」

他動詞に付く場合は主語が被動作主でなければならず、アンケート原文とは情報構造上の違いが生じる。さらにこの場合行為は必ずしも非意図的に行われる必要はない。(b)(c)の場合であればそれぞれ動作主が故意にぶつかった場合にも使用可能である。

- b. Orang itu ter-tabrak oleh dia.
person that *TER-collide* by 3SG
「その人は彼にぶつかられた」

- c. Dia ter-tabrak orang itu.
3SG *TER-collide* person that
「彼はその人にぶつかられた」

⁶ 接頭辞 *ter-*は注 5 にもあるように、機能が一つに定まらない。そのため、便宜上 *ter-*のグロスを *TER-*で統一する。また接周辞 *ke-an* についても、自発的用法の他に被害受身を表す場合もあるため、グロスを *KE-AN* とする。

3-b 私はその家を見た

- (10) Saya me-lihat rumah itu.
1SG ACT-see house that
「私はその家を見た」

3-c 誰かが叫んだのが聞こえた

- (11) {Ter-dengar / Ke-dengar-an} seseorang berteriak.
TER-hear / KE-hear-AN someone scream
「誰かが叫んだのが聞こえた」

3-d 彼はその音を聞いた⁷

- (12) Dia men-dengar(-kan) suara itu.
3SG ACT-hear-KAN⁸ voice that
「彼はその音を聞いた」

ただし、(9)や(11)は受動文であることに注意が必要である(cf. 注 5)。そのため、「私(から/に)は見える/聞こえる」と言う場合は、(13)のように oleh 「よって」を用いて知覚者を標示する。以下は lihat 「見る」の例である。

- (13) {Ter-lihat / Ke-lihat-an} (ada) beberapa orang di situ oleh saya.
TER-see / KE-see-AN exist several person in there by 1SG
「私にはあそこに人が数人(いるのが)見える」

【(知覚 2A) 発見・獲得・生産など】【追及】

この項目においては特筆すべき形態・統語的特徴は確認できない。

4-a 彼は(なくした)カギを見つけた

- (14) Dia menemu-kan kunci yang hilang kemarin.
3SG ACT.find-KAN key REL disappear yesterday
「彼は昨日なくしたカギを見つけた」

⁷ 接尾辞-kan が付与された形 mendengarkan が明確に「意識して聞く」という行為を表すのに対し、接尾辞-kan のない形 mendengar は「聞こえてくる」という事態もあらわしうる。以下の文を参照。

Saya men-dengar suara yang sangat merdu dari kejauhan,
1SG ACT-hear voice REL very beautiful from distant

dan saya berusaha untuk men-dengar-kan lebih seksama.
and 1SG make.effort to ACT-hear-KAN more detail

「(私に)遠くから美しい声が聞こえてきたので、私は注意してその声を聴いた」

⁸ 接尾辞-kan には(a)benefactive, (b)instrumental, (c)causative の機能の他に、(d)applicative として働くが付随する機能が曖昧なものや(e)統語的変化を引き起こさず、標示が非義務的な場合がある(Kroeger 2007, Shiohara 2012)。本稿では(d)(e)のグロスを-KAN と表記する。

4-b 彼は椅子を作った

- (15) Dia mem-buat kursi.
3SG ACT-make chair
「彼は椅子を作った」

5-a 彼はバスを待っている

- (16) Dia sedang menunggu bus.
3SG PROG ACT.wait bus
「彼はバスを待っている」

5-b 私は彼が来るのを待っていた

- (17) Tadi saya sedang menunggu dia datang.
just.now 1SG PROG ACT.wait 3SG come
「さっき、私は彼が来るのを待っていた」

5-c 彼は財布を探している

- (18) Dia sedang men-cari dompet=nya.
3SG PROG ACT-seek wallet=3
「彼は財布を探している」

【知識 1】

「知識がある」という意味の「知る」は tahu、「人を知っている」という場合には kenal を用いるという違いがある。tahu に接頭辞 meN-と applicative の接尾辞-i がついた mengetahui は、よりフォーマルな形式である。一方で kenal の場合は接頭辞 meN-及び接尾辞-i の有無によって意味が変化する。kenal では知っているという状態が強調されるのに対し、mengenal ではプロセスが意識される⁹。さらに、接尾辞-i が付いた場合、(21)のように「認識する」という意味に変化する。

6-a 彼はいろんなことをよく知っている

- (19) Dia {tahu (tentang)/ menge-tahu-i} banyak hal.
3SG know about ACT-know-APPL many thing
「彼はいろんなことをよく知っている」

6-b 私はあの人を知っている

- (20) Saya {kenal (dengan)/ mengenal} orang itu.
1SG know with/ ACT.know person that
「私はあの人を知っている」

⁹ このような接頭辞 meN-の有無による違いは Soh & Nomoto (2015: 169)がマレーシア語において指摘しているところであり、インドネシア語にも同様に当てはまると言える。

- (21) Saya bisa mengenal-i wajah orang itu dengan komputer itu.
 1SG can ACT.know-APPL face person that with computer that
 「そのコンピューターを使ってその人の顔を認識できた」

「～語が出来る」では、接頭辞 *ber-* を用いる¹⁰。

6-c 彼はロシア語ができる

- (22) Dia ber-bahasa Rusia.
 3SG *BER*-language Russia
 「彼はロシア語が出来る」

また、動詞 *paham* 「理解する」を用いることもできる。前述の「知る」と同じように接頭辞 *meN-* と接尾辞 *-i* を付加する。ただし、意味に曖昧性が生じる。(23)では、「ロシア語をすみずみまで理解している」だけでなく、「(聞いて)理解はできるが、話せない」という解釈も可能である。

- (23) Dia memaham-i bahasa Rusia.
 3SG ACT.understand-APPL language Russia
 「彼はロシア語を理解している」

【知識 2】

「覚えている」は動詞 *ingat* を用いて表す(24a)。しかし、【知識 1】で現れていた接尾辞 *-i* や接尾辞 *-kan* を付与した場合、意味が「忠告する」のように変化するため文意とあわなくなる(24b)。また(24b)の場合目的語は通常注意の内容ではなく注意する相手をとるため、文法的にも容認度が低くなる。

7-a あなたはきのう私が言ったことを覚えていますか？

- (24) a. Apa=kah Anda masih ingat apa yang saya katakan kemarin?
 What=Q 2SG still remember what REL 1SG say yesterday
 「あなたはきのう私が言ったことを覚えていますか」

- b. ?Apa=kah Anda masih meng-ingat-{kan / i} apa yang saya katakan kemarin?
 what=Q 2SG still ACT-remember-KAN/APPL what REL 1SG say yesterday
 「あなたはきのう私が忠告したことを覚えていますか」

「忘れる」の場合は動詞 *lupa* を用いて表すことが一般的である(25a)。しかし、*ingat* の場合と異なり、接尾辞 *-kan* を用いた *melupakan* でも同じ意味を表すことが出来る(25b)。ただし、接尾辞 *-i* を用いた *melupai* はやや古い形で、現在ではほとんど使われていない。

¹⁰ 接頭辞 *ber-* は自動詞的のプロセスを表す語を作るほか、所有の意味を表すなど多くの機能を持つ。そのため便宜上グロスを表記する場合は *BER-* とし、本稿のテーマと直接関係のない場合については分析を行わない。

7-b 私は彼の電話番号を忘れてしまった

(25) a. Saya lupa (dengan) nomor telepon=nya.
1SG forget with number telephone=3
「私は彼の電話番号を忘れてしまった」

b. Saya me-lupa-{kan/*i} dengan nomor telepon=nya.
1SG ACT-forget-KAN/APPL with number telephone=3
「私は彼の電話番号を忘れてしまった」

【感情 1】

感情を表す場合は大きく二通りあり、感情を表す語に前置詞を続けるか、applicativeの接尾辞-iを用いる方法がある(26)-(28)。ただしコンサルタントによれば、(27a)のように感情の対象がモノの場合、前置詞があると不自然である。

8-a 母は子供たちを深く愛していた

(26) a. Se-orang ibu sayang (pada) anak=nya.
one-CLF mother love on child=3
「母は子供たちを深く愛していた」

b. Se-orang ibu menyayang-i anak=nya.
one-CLF mother ACT.love-APPL child=3
「母は子供たちを深く愛していた」

8-b 私はバナナが好きだ

(27) a. Saya suka (?pada) pisang.
1SG like on banana
「私はバナナが好きだ」

b. Saya suka (kepada) Anda.
1SG like on 2SG
「私はあなたが好きだ」

c. Saya menyuka-i pisang.
1SG ACT.like-APPL banana
「私はあなたが好きだ」

8-c 私はあの人が嫌いだ

(28) a. Saya benci (kepada) orang itu.
1SG dislike on person that
「私はあの人が嫌いだ」

- b. Saya mem-benci¹¹ orang itu.
 1SG ACT-dislike person that
 「私はあの人が嫌いだ」

【感情 2】

「～を欲しがっている」、「～を必要としている」には、それぞれ *ingin/mau* (29a), *butuh/perlu* (30a) と異なる語彙を用いる。これらは接辞を伴うこともできるが、【感情 1】と違い、接尾辞-kan が用いられる(29b), (30b), (30c)。

9-a 私は靴が欲しい

- (29) a. Saya {ingin / mau} sepatu.
 1SG want / want shoes
 「私は靴が欲しい」
- b. Saya meng-ingin-{kan / *i} sepatu.
 1SG ACT-want-KAN / APPL shoes
 「私は靴が欲しい」

9-b 今、彼にはお金が要る

- (30) a. Dia {butuh / perlu} uang.
 3SG need / need money
 「彼はお金が必要だ」
- b. Dia mem-butuh-{kan / *i} uang.
 3SG ACT-need-KAN / APPL money
 「彼はお金が必要だ」
- c. Dia memerlu-{kan / *i} uang.
 3SG ACT.need-KAN / APPL money
 「彼はお金が必要だ」

【感情 3】

「怒る」と「怖い」は *marah* と *takut* で表すことができる(31a), (32a)。両者の違いとして、*marah* 「怒る」は前置詞が義務的であるのに対し、*takut* 「怖い」は前置詞を省略することができる。また、(31b)のように「怒る」は接尾辞-i を用いた *memarahi* という形を用いることができるのに対し、*takut* に接尾辞-i を用いた *menakuti* という形は「心配させる」という意味となり、文意と合わない(32b)。

¹¹ *membenci* 「嫌う」も接尾辞-i が付いた形であるとされる。これは i が二つ重なってしまうという音韻的な理由から片方の i が削除されていると考えるためである(野元&ウン・シンティ 2014: 374)。

10-a (私の) 母は(私の) 弟がうそをついたのに怒っている

- (31) a. Ibu saya marah kepada adik saya karena (dia) berbohong.
mother 1SG angry on brother 1SG because 3SG lie
「私の母は弟が嘘をついたので、彼を怒った」

- b. Ibu saya me-marah-i adik saya karena (dia) berbohong.
mother 1SG ACT-angry-APPL brother 1SG because 3SG lie
「私の母は弟が嘘をついたので、彼を怒った」

10-b 彼は犬が怖い

- (32) a. Dia takut (kepada) anjing.
3SG scared on dog
「彼は犬が怖い」

- b. Dia menakut-i anjing.
3SG ACT.scared-APPL dog
「彼は犬を心配させた」

【関係 1】

「似ている」は mirip¹²、「含む」は mengandung という語を用いる。

11-a 彼は父親に似ている

- (33) Dia mirip ayah=nya.
3SG resemble father=3
「彼は父親に似ている」

11-b 海水は塩分を含んでいる

- (34) Air laut mengandung(*-i)¹³ garam.
water sea ACT.contain-APPL salt
「海水は塩分を含んでいる」

【関係 2】

(35)のようにコピュラ文では、adalah の使用は義務的ではない。「～になる」は menjadi という動詞を使って表す(36)。

¹² menyerupai という serupa 「同じ」という語に接頭辞-i を付与した形も存在するが、この場合「全く同じ」という意味で、「何者かが父親の姿を借りて現れた」などといった文脈で用いられる。

Dia menyerupa-i ayah=nya.
3SG ACT.same-APPL father=3
「彼は父親と全く同じである」

¹³ 野元&ウン・シンティ(2014)によれば、マレーシア語では mengandung-i[ACT.contain-APPL]という接尾辞-i の付いた形が用いられるが、インドネシア語ではこの形式は容認度が低い。

12-a 私の弟は医者だ

- (35) Adik saya (adalah) (se-orang) dokter.
brother 1SG be one-CLF doctor
「私の弟は医者だ」

12-b 私の弟は医者になった

- (36) Adik saya men-jadi (se-orang) dokter.
brother 1SG ACT-become one-CLF doctor
「私の弟は医者になった」

【能力1】

以下に現れる可能の助動詞のうち、**mampu/dapat** は主に能力可能にのみ用いられ、状況可能の文脈では適さないことに注意が必要である。

13-a 彼は車の運転ができる。

- (37) Dia {bisa / mampu / dapat} mengendara-i mobil.
3SG can / can / can ACT.drive-APPL car
「彼は車の運転ができる」

13-b 彼は泳げる

- (38) Dia {bisa / mampu / dapat} berenang.
3SG can / can / can swim
「彼は泳げる」

【能力2】

(39)のように、「上手だ」は **mahir** 「熟練の」または **pintar** 「賢い」を使って表す。「苦手だ」は(40a)のように、否定文を用いて表すことが普通である。**mahir** や **pintar** と対義語である **bodoh** 「愚かな」はこのような形式では用いられない(40b)。また、「走る」の場合は **pintar** や **mahir** といった語を使うことが出来ず(41a)、(41b)や(42)のように「彼は速く走る」「彼は速く走ることが出来ない」などと言い換える必要がある。語彙によるこのような違いの要因については、今後の課題とする。

14-a 彼は話をするのが上手だ

- (39) Dia {mahir / pintar} berbicara.
3SG skilled / wise talk
「彼は話をするのが上手だ」

- (40) a. Dia tidak {mahir / pintar} berbicara.
3SG NEG skilled / wise talk
「彼は話をするのが苦手だ」

- b. ?Dia bodoh berbicara.
3SG poor talk
「彼は話すのが苦手だ」
- (41) a. ?Dia {mahir / pintar} berlari.
3SG skilled / wise run
「彼は速く走る」
- b. Dia berlari dengan cepat.
3SG run with fast
「彼は速く走る」
- 14-b 彼は走るのが苦手だ
- (42) Dia tidak bisa berlari dengan cepat.
3SG NEG can run with fast
「彼は速く走ることが出来ない」

【移動】

(43)のように「着いた」は自動詞+前置詞で表すが、(44)-(46)の「渡る」「通る」は他動詞をとる。「渡る」は接尾辞-iを用いた *menyebrangi* でも表すことが出来るが、これは(45a)にあるように海など面積が大きいものを横断するというニュアンスを含むため、*jalan* 「道」のようなものを目的語にとると不自然になる(45b)。

- 15-a 彼は学校に着いた
- (43) Dia tiba di sekolah.
3SG arrive in school
「彼は学校に着いた」
- 15-b 彼は道を渡った/横切った
- (44) Dia menyeberang jalan=nya.
3SG ACT.cross road=3
「彼は道を渡った」
- (45) a. Dia menyeberang-i laut.
3SG ACT.cross-APPL sea
「彼は海を渡った」
- b. ?Dia menyeberang-i jalan=nya.
3SG ACT.cross-APPL road=3
「彼は道を渡った」

15-c 彼はこの道を通った

- (46) Dia {me-lewat-i / me-lalu-i} jalan ini.
3SG ACT-through-APPL / ACT-through-APPL road this
「彼はこの道を通った」

【感覚 1】

「お腹がすく」や「喉が渴く」が、それぞれ *lapar* と *haus* を用いて表すことが出来る。これに被害受身を表す接周辞 *ke-an* を用いると、より苦しんでいるニュアンスが付与される。

16-a 彼はお腹を空かしている

- (47) a. Dia *lapar*.
3SG hungry
「彼はお腹を空かしている」

- b. Dia *ke-lapar-an*.
3SG *KE-hungry-AN*
「彼は空腹に苦しんでいる」

16-b 彼は喉が渴いている

- (48) a. Dia *haus*.
3SG thirsty
「彼は喉が渴いている」

- (49) b. Dia *ke-haus-an*.
3SG *KE-thirsty-AN*
「彼は喉の渴きに苦しんでいる」

【感覚 2】

dingin 「寒い」などの感覚を表す語は、経験者を主語にとることができない。経験者を主語とする場合は、被害受身の接周辞 *ke-an* を用いるか(50a)、*merasa* 「感じる」という動詞を用いる(50b)。反対に、(51)のように *hari ini* 「今日」が主語となる場合は接周辞 *ke-an* の形は用いられない。

17-a 私は寒い

- (50) a. Saya {*ke-dingin-an* / **dingin*}.
1SG *KE-cold-AN* / cold
「私は寒い」

- b. Saya *me-rasa dingin*.
1SG ACT-feel cold
「私は寒さを感じる」

17-b 今日は寒い

- (51) Hari ini {*ke-dingin-an / dingin}.
day this KE-cold-AN / cold
「今日は寒い」

【(社会的) 相互行為 1】

「手伝う」は動詞 *membantu* または *menolong* で表し、助ける対象を目的語にとる(52)。行為を明示する場合は(53)のように前置詞 *untuk* を用いる。

18-a 私は彼を手伝った／助けた

- (52) Saya {mem-bantu / menolong} dia.
1SG ACT-help / ACT.help 3SG
「私は彼を手伝った/助けた」

18-b 私は彼がそれを運ぶのを手伝った

- (53) Saya mem-bantu dia untuk mem-bawa barang itu.
1SG ACT-help 3SG to ACT-take thing that
「私は彼がそれを運ぶのを手伝った」

【(社会的) 相互行為 2 (言語行動)】

「聞く(尋ねる)」は自動詞+前置詞と接尾辞-*i/-kan* を用いる二種類の方法がある。(54a)の場合は、前置詞 *kepada* 「～へ、～に」、*tentang* 「ついて」がないと非文となる。接尾辞-*kan* を用いた(54b)の場合は質問の内容の方を目的語にとり、人は前置詞 *kepada* を用いて表す。接尾辞-*i* を用いた(54c)の場合は人を目的語にとり、質問の内容は *tentang* で表す。どちらの場合も前置詞を省略し、英語の二重目的語構文のような形式をとることは出来ない。

19-a 私はその理由を彼に聞いた

- (54) a. Saya bertanya *(kepada) dia *(tentang) alasan=nya.
1SG ask to 3SG about reason=3
「私はその理由を彼に聞いた」
- b. Saya menanya-kan alasan=nya *(kepada) dia.
1SG ACT.ask-KAN reason=3 to 3SG
「私はその理由を彼に聞いた」
- c. Saya menanya-i dia *(tentang) alasan=nya.
1SG ACT.ask-APPL 3SG about reason=3
「私はその理由を彼に聞いた」

「話す」を表す動詞には *bicara*, *sampai*, *beritahu* などがある。(55a), (56), (57a)で示すように、接尾辞-*kan* を用いた場合は目的語に話す内容を取り、話す相手は前置詞句で標示するという点で、前述の「聞く」共通している。ただし、*bicara* の場合は *berbicara* という自動詞形が存在するのに対し(55b)、**bersampai*,

*berberitahu という形式は無い。また、beritahu は接尾辞を伴わない形式を用いて話す相手を目的語にとることができるが(57b)、他の二つの動詞については、?menyampai, *membicara という形はない。3つの動詞に共通して接尾辞-iを伴う形は容認度が低い(*menyampai(-i), *membicarai, *memberitahui)。

19-b 私はそのことを彼に話した

(55) a. Dia mem-bicara-kan hal itu kepada dia.
3SG ACT-talk-KAN thing this to 3SG
「私はそのことを彼に話した」

b. Saya berbicara *(kepada) dia *(tentang) hal itu.
1SG ask to 3SG about thing that
「私はそのことを彼に話した」

(56) Dia menyampai-kan hal itu kepada dia.
3SG ACT.reach-CAUS thing this to 3SG
「私はそのことを彼に話した」

(57) a. Dia mem-beritahu-kan hal itu *(kepada) dia.
3SG ACT-inform-KAN thing this to 3SG
「私はそのことを彼に話した」

b. Dia mem-beritahu dia *(tentang) hal itu.
3SG ACT.inform 3SG about thing this
「私はそのことを彼に話した」

【再帰・相互】

「会う」は接頭辞 ber-を用いた自動詞で表す場合(58a)と、接尾辞-iを伴った他動詞で表す場合(58b)がある。前者は kebetulan 「偶然」と共起することが出来るが、後者は能動的行為であることを含意するため、kebetulan と共起することはできない(59)。

20-a 私は彼と会った

(58) a. Saya {berjumpa / bertemu} dengan=nya.
1SG meet / meet with=3
「私は彼と会った」

b. Saya {men-jumpa-i / menemu-i} dia.
1SG ACT-find-APPL / ACT.find-APPL 3SG
「私は彼と会った」

(59) Saya kebetulan {bertemu dengan / *menemu-i} dia.
1SG accidentally meet with / ACT.meet-APPL 3SG
「私は偶然彼と会った」

略号一覧

1: first person, 2: second person, 3: third person, ACT: active voice, APPL: applicative, CAUS: causative, CLF: classifier, NEG: negation, PL: plural, POSS: possessive, PROG: progressive, Q: question marker, REFL: reflexive, REL: relative, SG: singular

参考文献

- Kroeger, Paul R. (2007). “Morphosyntactic vs. morphosemantic functions of Indonesian -kan.” In *Architectures, rules, and preferences: Variations on themes of Joan Bresnan*, Annie Zaenen, Jane Simpson, Tracy Holloway King, Jane Grimshaw, Joan Maling, and Chris Manning (eds.), Stanford: CSLI Publications, pp.229–251.
- Shiohara, A. 2012. “Applicatives in Standard Indonesian.” *Senri ethnological studies*, 77, pp.59-76.
- Soh, H.L. and Nomoto, H., 2015. “Degree achievements, telicity and the verbal prefix meN-in Malay”. *Journal of Linguistics*, 51(1), pp.147-183.
- 野元裕樹&ウン・シンティ. 2014. 「マレーシア語と述語階層」『語学研究所論集』19, 東京外国語大学, pp.365-379.

執筆者連絡先 : sakon.yuta.n0@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2020年12月15日

<特集「[連用修飾的]複文」>

インドネシア語の連用修飾的複文 Clause combining in Indonesian

佐近 優太
Yuta Sakon

東京外国語大学大学院総合国際学研究科
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿の目的は、特集「(連用修飾的)複文」(『語学研究所論集』第20号, 2015, 東京外国語大学)におけるアンケート項目に対するインドネシア語のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Indonesian data which answers the thirty survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 20, 2015, which focuses on the cross linguistic study of 'Clause combining'.

キーワード: インドネシア語、複文、接続詞

Keywords: Indonesian, clause combining, conjunction

1. はじめに

本稿では、インドネシア語の連用修飾的複文に関する事項について記述を行う。今回の記述は『語学研究所論集』第20号(2015)の特集テーマ「(連用修飾的)複文」のアンケート項目に基づいている。アンケート回答に際しては、執筆者が日本語からインドネシア語¹に翻訳した後、コンサルタント二名²に協力していただき修正を行った。各項目について最初にアンケート原文を提示し、その後インドネシア語の例文及び説明を加える。補足が必要な場合は、アンケート項目外の例文も適宜用いている。アンケート項目外の例文は執筆者が作成し、コンサルタントによるチェックを受けたものである。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ 基本的に書き言葉における標準インドネシア語を用いるが、一部口語体またはインフォーマルな文体も含まれる。そうした場合はその都度明記する。

² コンサルタントは Rahmat Sopian 氏と Himawan Pratama 氏である。この場を借りて感謝の意を表す。

2. インドネシア語データ

1 【同時動作】彼はいつも新聞を読みながらご飯を食べる。

- (1) a. Dia selalu makan sambil *(mem-)baca³ koran.
3SG always eat during ACT-read newspaper
「彼はいつも新聞を読みながらご飯を食べる」
- b. ?Dia selalu makan dan mem-baca koran.
3SG always eat and ACT-read newspaper
「彼はいつも新聞を読みながらご飯を食べる」

「～しながら」といった同時動作は *sambil* を用いて表す。(1a)では、*sambil* に *membaca* 「読む」が後続している。通常インドネシア語では能動態標識である接頭辞 *meN-* が特に口語において比較的自由に省略可能であるが、*sambil* の後に置かれた接頭辞 *meN-* は省略することが出来ない。また、(1b)のように等位接続詞 *dan* はこのような同時動作には用いられない(cf. (4))。

2 【継起的動作・物語的連鎖】(私は)昨日は時に家に帰って、少しテレビを見て(から)、寝ました。

- (2) Kemarin saya pulang ke rumah pada pukul 10, menonton TV,
yesterday 1SG go.home to house on time 10 ACT.watch TV
dan (kemudian / lalu) tidur.
and then / after.that sleep

継起的動作は接続詞 *kemudian / lalu* 「それから」を用いて表す。この例文では「帰る」「テレビを見る」「寝る」の順番が明らかであるため、接続詞がない場合でも継起的動作であることが含意される。

3 【継起：理由】(私は)昨日階段で転んで、ケガをしてしまった。

- (3) Saya jatuh dari tangga, (sehingga) terluka⁴.
1SG fall from stairs as.a.result TER-injury
「私は階段で転んで、ケガをしてしまった」

二つの出来事の間原因・結果の関係がある場合、接続詞 *sehingga* が用いられる。くだけた文体の場合は *sehingga* を省略することもできる。

³ 接頭辞 *meN-* の *N-* の部分は語幹の冒頭音に応じて *m-*, *n-*, *ng-*, *ny-*, *nge-*, \emptyset の形で現れる。これらは語幹にそのまま接続する場合と、冒頭音と置き換わる場合がある。本稿では前者は(i)のように形態素境界を設け、後者は(ii)のように表記する。

(i) *mem-bawa* (ii) *memukul* [*meN-* + (p)ukul]
ACT.take ACT.hit

⁴ 接頭辞 *ter-* は基本的に受動態標識であり、「結果状態」や「可能」の意味が付随するが、自動詞について「非意図」の意味を加える場合もある。そのため、便宜上 *ter-* のグロスを *TER-* で統一する。

4 【異主語】 今日も父は会社に行って、兄は大学に行った。

(4) Hari ini ayah pergi ke kantor, {dan / sementara} kakak ke sekolah.
 day this father go to office and / whereas brother to school
 「父は会社に行って、兄は大学に行った」

(5) Pagi hari ayah pergi ke kantor, {?dan / sementara} kakak masih tidur.
 morning day father go to office and / whereas brother still sleep
 「今朝父は会社に行ったが、兄はまた寝ていた」

並列では、等位接続詞 *dan* が用いられる。*sementara* 「一方で」も使用可能あるが、対比的なニュアンスを含む。この違いは、(5)のような文脈で顕在化する。

5 【付帯状況】 (あの人は) 今日は帽子をかぶって歩いていた。

(6) a. Dia berjalan-jalan {dengan / ?sambil} {mengena-kan⁵ / memakai} topi.
 3SG walk with / during ACT.contact-KAN / ACT.use hat
 「彼は帽子をかぶって歩いていた」

b. ?Dia berjalan-jalan {mengena-kan / memakai} topi.
 3SG walk ACT.contact-KAN / ACT.use hat
 「彼は帽子をかぶって歩いていた」

付帯状況は前置詞 *dengan* を用いて表すことが出来る。*sambil* や動詞連続的構文を用いた場合、*mengenakan* や *memakai* は容認度が低くなる⁶。

6 【並行動作】 (私は) 休みの日にはいつも本を読んだり、テレビを見たりしています。

(7) Biasanya saya mem-baca buku {dan / atau} menonton TV pada hari libur.
 usually 1SG ACT-read book and / or ACT.watch TV on day rest
 「普通、休みの日には私は本を読んだり、テレビをみたりしています」

並列動作、または動作の列挙には等位接続詞 *dan* または *atau* を用いる。

⁵ 接尾辞-kan には(a)benefactive, (b)instrumental, (c)causative の他に、(d)applicative として働くが付随する機能が曖昧なものや(e)統語的変化を引き起こさず、標示が非義務的な場合がある(Kroeger 2007, Shiohara 2012)。本稿では(d)(e)のようなグロスを-KANと表記する。

⁶ このような制約は *sambil* が継続的動作を要求し、状態の解釈が出来なくなるためであると現時点では考えられる。これは頻繁に用いられる語でないものの、*ber-topi[POSS-hat]*においてわかりやすい。この語は「帽子をかぶっている」という状態を表す語であり、*sambil* とは共起できない。

Dia berjalan-jalan {dengan / *sambil} ber-topi.
 3SG walk with / during POSS-hat
 「彼は帽子をかぶって歩いていた」

7 【理由・カラ】時間がないから、急いで行こう。

- (8) a. Karena tidak ada waktu lagi, mari kita pergi.
because NEG exist time again let's 1PL.INC go
「もう時間がないから、行きましょう」
- b. Tidak ada waktu lagi, jadi mari kita pergi.
NEG exist time again then let's 1PL.INC go
「もう時間がないから、行きましょう」

「理由」は接続詞 *karena* を用いるか(8a)、後続する節に接続詞 *jadi* 「そして」を挿入する(8b)。また、両方の接続詞を共起させることも可能である。

8 【理由・ノデ】昨日は頭が痛かったので、いつもより早く寝ました。

- (9) a. Kemarin, karena saya sakit kepala, saya tidur cepat.
yesterday because 1SG illness head 1SG sleep early
「昨日は頭が痛かったので、早く寝ました」
- b. Kemarin, saya sakit kepala, {jadi / ?sehingga} saya tidur cepat.
yesterday 1SG illness head then / as.a.result 1SG sleep early
「昨日は頭が痛かったので、早く寝ました」
- (10) Kemarin, saya sakit kepala, sehingga saya susah tidur.
yesterday 1SG illness head as.a.result 1SG difficult sleep
「昨日は頭が痛かったので、なかなか眠れなかった」

日本語における「ので」と「から」の違いは、インドネシア語には現れない。どちらも *karena* (9a) および *jadi* (9b) の使用が可能である。*jadi* と似た意味を表す単語として *sehingga* があるが、(9b) にあるようにこのアンケート文のような文脈では用いることが出来ない。これは、*sehingga* が(10)のように明確な因果関係を想定するためである。

9 【趨向／移動の目的】あの人は本を買いに行った。

- (11) Dia pergi (untuk) mem-beli buku.
3SG go to ACT-buy book
「彼は本を買いに行った」

移動の目的は前置詞 *untuk* で標示する。しかし *untuk* を省略し、動詞連続的構造を取ることもできる。

10 (彼は) 外がよく見えるように窓を開けた。【目的・意図】

- (12) Dia mem-buka jendela {agar / supaya} (dia) bisa me-lihat pemandangan
3SG ACT-open window so.that / so.that 3SG can ACT-see view
di luar lebih jelas.
in outside more clear
「彼は外の景色をよく見るために、窓を開けた」

目的・意図は *agar* または *supaya* を使って表す。両者の違いは今後の課題とする⁷。

11 【恒常的条件】 ここでは夏になると、よく雨が降ります。

- (13) Di Jepang, {kalau / jika} (di) musim panas,
in Japan if / if in season hot
{sering hujan turun / hujan sering turun}.
frequently rain fall / rain frequently fall
「日本では夏になると、よく雨が降ります」

- (14) Di Jepang, {?waktu / saat} musim panas,
in Japan when / when season hot
{sering hujan turun / hujan sering turun}.
frequently rain fall / rain frequently fall
「日本では夏になると、よく雨が降ります」

恒常的条件の場合、条件の接続詞(13)と時の接続詞(14)のどちらも使用可能である。ただし、時の接続詞の中でも *waktu* は容認度が低い⁸。

⁷ マレーシア語では *agar* は主体的な働きかけが必要であるが、*supaya* にはそうした制限がない(野元&アズヌール・アイシャ・アブドゥッラー2015: 262)。しかし、この違いはインドネシア語には必ずしも当てはまらないようである。「見える」という主体的に働き掛けがない場合でも、どちらも容認される。

Dia mem-buka jendela {agar / supaya} pemandangan di luar ter-lihat lebih jelas.
3SG ACT-open windows so.that / so.that view in outside TER-see more clear
「彼は外の景色が良く見えるように、窓を開けた」

⁸ コンサルタントによれば、*waktu* が季節など時間的幅のあるものをとる際は、主節が表す事態がその間継続することを想定しない。つまり、以下のように非継続的動作であれば許容される。ただし、この説明が *waktu* と *saat* の違いをすべて説明するものではないため、今後の課題とする。

Waktu musim panas, saya pergi ke Okinawa.
when season hot 1SG go to Okinawa
「夏になると、私は沖縄に行きます」

12 【確定条件・生起】窓を開けると、冷たい風が入って来た。

- (15) a. Tadi saya mem-buka jendela,
just.now 1SG ACT-open window
{jadi / sehingga} angin dingin masuk ke dalam kamar.
then / as.a.result wind cold enter to inside room
「さっき窓を開けたら、冷たい風が入ってきた」
- b. Saya mem-buka jendela, lalu angin dingin masuk ke dalam kamar.
1SG ACT-open window after.that wind cold enter to inside room
「窓を開けると、冷たい風が入ってきた」
- c. Tadi {waktu / saat / setelah} saya mem-buka jendela,
just.now when / when / after 1SG ACT-open window
angin dingin masuk ke dalam kamar.
wind cold enter to inside room
「さっき窓を開けたら、冷たい風が入ってきた」
- d. Tadi {kalau / jika} saya mem-buka jendela,
just.now if / if 1SG ACT-open window
angin dingin *(pasti) masuk ke dalam kamar.
wind cold must enter to inside room
「さっき窓を開けていたら、冷たい風が入ってきたはずだった」

確定条件には、後続する節に *jadi*, *sehingga*, *lalu* といった結果を表す種類の接続詞を用いるか(15a)(15b)、最初の節で時の接続詞 *waktu*, *saat* 「～の時」か *setelah* 「の後」を用いる(15c)。どの場合も基本的に *tadi* 「さっき」がある方が過去の出来事であることが明確となるが、*lalu* はすでに過去の事実であることが含意されるため、*tadi* の標示は必ずしも要求されるわけではない。また、条件の接続詞 *kalau* や *jika* はアンケート文のような確定条件の意味にはならず、実現しなかった過去の仮定を表す(15d)。

13 【確定条件・発見】坂を上ると、海が見えた。

- (16) a. Setelah saya naik ke atas bukit, ter-lihat=lah laut.
after 1SG climb to above hill TER-see=PTC sea
「丘に上がると、海が見えた」
- b. {Waktu / Saat} saya naik ke atas bukit, ter-lihat laut.
when / when 1SG climb to above hill TER-see sea
「丘に上がると、海が見えた」

- c. Saya naik ke atas bukit, {sehingga / jadi / lalu} ter-lihat laut.
1SG climb to above hill as.a.reslut / then / after.that TER-see sea
「丘に上がると、海が見えた」

発見の場合も、前述の生起と同じように最初の節で時の接続詞 *setelah* 「の後」(16a)、*waktu, saat* 「～の時」を用いるか(16b)、(16c)のように後続する節に *sehingga, jadi, lalu* といった結果を表す種類の接続詞を用いる。ただし *waktu, saat* を用いた場合は対比が含意され、「丘の上にいるときには海が見えたが、下りたら見えなくなった」という文脈が予測されるという。

14 【仮定条件】明日雨が降ったら、私はそこに行かない。

- (17) {Kalau / Jika} besok hujan, saya tidak akan pergi ke sana.
if / if tomorrow rain 1SG NEG will go to there
「明日雨が降ったら、私はそこに行かない」

仮定条件では接続詞 *kalau/jika* が用いられる。

15 【反実仮想】もっと早く起きればよかったなあ。

- (18) {Kalau / Jika} (saja) saya bangun lebih awal, ?(lebih baik).
if / if only 1SG wake.up more early more good
「もっと早く起きていれば、よりよかった」

反実仮想は仮定条件と同じ接続詞 *kalau/jika* をもちいる。また反実仮想における脱従属化の容認度は低く、*lebih baik* 「よりよい」がないと、文が途中で終わってしまっている印象を受けるといえる。

16 【反実仮想・前件否定】あんなところへ行かなければよかった。

- (19) {Kalau / Jika} (saja) saya tidak pergi ke sana, ?(lebih baik).
if / if only 1SG NEG go to there more good
「あそこに行かなければ、よりよかった」

前件否定の場合も通常の反実仮想と同様である。

⁹ *kalau saja* という形であれば脱従属化が容認されると述べるコンサルタントもおり、この容認度には個人差があるといえる。

Kalau saja saya datang lebih awal.
if only 1SG come more early
「もっと早く来ればよかった」(佐近 2020: 415)

17 【一般的真理】 1に1を足せば、2になる。

(20) (#Kalau) satu tambah satu, jadi dua.
if one plus one then two
「1足す1は、2になる」

kalau を用いると、「もし1に1を足すと、何になりますか？」と先生が生徒に質問している文脈が想定されるため、一般的真理とはやや意味がずれる。そのため、一般的真理を表す場合は条件の接続詞は用いられにくい。

18 【仮定条件+働きかけのモダリティ】 駅に着いたら電話をしてください。

(21) a. {Kalau/Jika} sudah tiba di stasiun, tolong telepon saya.
if/if already arrive in station help telephone 1SG
「駅に付いたら、私に電話をしてください」
b. {Waktu/Saat} sudah tiba di stasiun, tolong telepon saya.
when/when already arrive in station help telephone 1SG
「駅に付いたら、私に電話をしてください」

働きかけのモダリティが後続する仮定条件では、条件の接続詞(21a)と時の接続詞(21b)の両方を使うことが出来る。

19 【仮定条件+願望】 日曜日になったら、みんなで公園に行きたいなあ。

(22) a. {Kalau/Jika} hari minggu tiba, saya ingin pergi ke taman bersama-sama.
if/if day Sunday arrive 1SG want go to park together
「日曜日になったら、みんなで一緒に公園に行きたい」
b. {*Waktu/?Saat} hari minggu tiba, saya ingin pergi ke taman bersama-sama.
when/when day Sunday arrive 1SG want go to park together
「日曜日になったら、みんなで一緒に公園に行きたい」

仮定条件に願望を後続させる場合、条件の接続詞のみが適格となる(22a)。時の接続詞である waktu と saat には容認度の差があるようだが(22b)、この要因については今後の課題とする。

20 【心配】 明日雨が降ったら困るなあ。

(23) a. {Kalau/Jika} besok hujan, akan susah.
if/if tomorrow rain will difficult
「明日雨が降ったら困る」

- b. {*Waktu / *Saat} besok hujan, akan susah.
when / when tomorrow rain will difficult
「明日雨が降ったら困る」

(23)は(22)と、時の接続詞が使えないという点で類似している。

21 【時間的前後関係に則していないナラ条件文】 家に来るなら、電話をしてから来てください。

- (24) a. {Kalau / Jika} datang ke rumah saya, tolong telepon dulu.
if / if come to house 1SG help telephone ago
「家に来るなら、先に電話をしてください」
- b. {?Waktu / Saat} datang ke rumah saya, tolong telepon dulu.
when / when come to house 1SG help telephone ago
「家に来るとき、先に電話をしてください」

時間的前後関係に即していない条件文でも基本的に条件の接続詞が用いられる(24a)。時の接続詞について saat は使用可能であるが(24b)、waktu との容認度の差の要因については今後の課題とする。

22 【予想を伴った条件文】 (もうすぐベルが鳴るので) 鳴ったら、教えてください。

23 【予想を伴わない条件文】 (もしかしたらベルが鳴るかもしれないので) もし鳴ったら、教えてください。

- (25) a. {Kalau / Jika} lonceng berdering, tolong beritahu saya.
if / if bell ring help tell 1SG
「ベルが鳴ったら教えてください」
- b. *(Nanti) {waktu / saat} lonceng berdering, tolong beritahu saya.
later when / when bell ring help tell 1SG
「ベルが鳴ったら教えてください」

コンサルタントによれば、予測のあるなしは形式とは関係がなく、条件の接続詞(25a)と時の接続詞(25b)の両方が用いられる。ただし、時の接続詞の場合は nanti 「あとで」の共起が義務的となる。

24 【相関構文】 働かざるもの食うべからず。／働かない者は、食べるべきではない。

- (26) Siapa pun yang tidak bekerja keras, orang itu tidak bisa makan.
who also REL NEG work hard person that NEG can eat
「働いていないものは誰でも、食べることができない」

いわゆる「誰が働かない、その人は食べない」といった相関構文はインドネシア語でも可能である。

25 【言いさし・願望】もう少しお金があったらなあ。

- (27) {Kalau / Jika} saya punya uang lebih banyak, ?(lebih baik).
if / if 1SG have money more many more good
「もう少しお金を持っていたら、よりよい」

(18)-(19)で見たように、言いさし表現は容認度が低いため lebih baik 「よりよい」が後続する必要がある。

26 【言いさし・提案】これも食べたら？

- (28) {Silakan / Ayo} di-makan ini juga.
please / please PASS-eat this also
「これも食べてください」

- (29) Bagaimana kalau makan ini juga.
how if eat this also
「これも食べたらどうですか」

提案は silakan 及びインフォーマルな形の ayo という勧誘表現を用いるか(28)、 bagaimana kalau 「～したらどうですか」という表現を用いる(29)。(29)の場合 bagaimana を省略した言いさし文は容認されない。

27 【言いさし・つき放し】(やりたいなら自分の)好きなようにやれば？

- (30) a. {Jika / Kalau} itu mau=mu, kalau saja kerja-kan sesukanya, ?(lebih baik).
if / if that want=2SG if only work-KAN as.you.like more good
「もしそれをしたければ、好きなようにやればいいでしょう」
- b. {Jika / Kalau} itu mau=mu, kerja-kan saja sesukanya.
if / if that want=2SG work-KAN only as.you.like
「もしそれをしたければ、好きなようにやりなさい」

モダリティが異なる突き放しの言いさしも、(27), (29)と同様に許容されない(30a)。またこの場合、命令文を用いても自然である(30b)。

28 【仮定的な逆接】このコップは落としても割れない。

- (31) a. Cangkir ini tidak akan pecah kalau di-jatuh-kan.
cup this NEG will break if PASS-fall-CAUS
このコップは落としても割れない

- b. Cangkir ini tidak akan pecah {walaupun / meskipun} di-jatuh-kan.
cup this NEG will break although / although PASS-fall-CAUS
このコップは落としても割れない

仮定的な逆接の場合、条件の接続詞 *kalau* (31a)か逆接を表す接続詞 *walaupun/meskipun* を用いる(31b)。コンサルタントによれば、条件の接続詞を用いた場合は「もし意図せず落としてしまった場合」というように非意図的ニュアンスが含まれるのに対し、*walaupun/meskipun* を用いた場合は意図性に関して中立的である。

29 【アクチュアルな逆接】 このリンゴは高かったのに、ちっとも甘くない。

- (32) a. Apel ini sangat mahal, tapi tidak enak.
apple this very expensive but NEG tasty
「このリンゴは高かったのに、ちっとも甘くない」
- b. {Walaupun / Meskipun} sangat mahal, apel ini tidak enak.
although / although very expensive apple this NEG tasty
「このリンゴは高かったのに、ちっとも甘くない」

アクチュアルな逆接は接続詞 *tapi* か(32a)、逆接の接続詞 *walaupun/meskipun* を用いる(32b)。

30 【逆接3】 彼の家に行ってみたけれども、彼はいなかった。

- (33) a. Saya pergi ke rumah=nya, tapi dia tidak ada di rumah=nya.
1SG go to house=3 but 3SG NEG exist in house=3
彼の家に行ってみたけれども、彼はいなかった
- b. {Walaupun / Meskipun} saya pergi ke rumah=nya, dia tidak ada di rumah=nya.
although / although 1SG go to house=3 3SG NEG exist in house=3
彼の家に行ってみたけれども、彼はいなかった

異主語の逆接の場合も、(32)と同様に *tapi* 及び *walaupun/meskipun* の使用が可能である。

31 【時間的期限[1]】 あの人に来るまで、私はここで待っています。

32 【時間的期限[2]】 あの人に来るまでに、食事を作っておきますよ。

- (34) Saya akan menunggu di sini {sampai / sebelum} dia (akan) datang.
1SG will ACT.wait in here until / before 3SG will come
「あの人に来るまで、私はここで待っています」

- (35) Saya akan memasak makan malam di sini {#sampai / sebelum} dia (akan) datang.
1SG will ACT.cook eat night in here until / before 3SG will come
「あの人が来るまでに、食事を作っておきますよ」

時間的期限を表す際には、*sampai*「～まで」や *sebelum*「～の前」が用いられる。ただし、動詞の種類によって解釈の違いが生じる。「待つ」のように動作に時間的幅がある動詞に関しては *sampai* と *sebelum* に表す意味の違いが現れない(34)。これに対し、(35)のように「作る」といった時間的幅がない動詞では、*sampai* の場合は「食事を作る」という動作が「あの人が来る」という事態が生じるまで継続するのに対し(日本語の「まで」に相当)、*sebelum* の場合はあの人が来るまでに食事の準備が完了していることを表す(日本語の「までに」に相当)。

略号一覧

1: first person, 2: second person, 3: third person, ACT: active voice, APPL: applicative, CAUS: causative, CLF: classifier, INC: inclusive, NEG: negation, PASS: passive voice, PL: plural, PTC: particle, PROG: progressive, REL: relative, SG: singular

参考文献

- Kroeger, Paul R. (2007). “Morphosyntactic vs. morphosemantic functions of Indonesian -kan.” In *Architectures, rules, and preferences: Variations on themes of Joan Bresnan, Annie Zaenen, Jane Simpson, Tracy Holloway King, Jane Grimshaw, Joan Maling, and Chris Manning* (eds.), Stanford: CSLI Publications, pp.229–251.
- Shiohara, A. 2012. “Applicatives in Standard Indonesian.” *Senri ethnological studies*, 77, pp.59-76.
- 野元裕樹&アズヌール・アイシャ・アブドゥッラー. 2015. 「マレーシア語の連用修飾的複文」『語学研究所論集』20, 東京外国語大学, pp.253-276.
- 佐近優太. 2020. 「インドネシア語のモダリティ」『語学研究所論集』24, 東京外国語大学, pp. 407-416.

執筆者連絡先 : sakon.yuta.n0@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2020年12月15日

<特集「他動性」>

タガログ語の他動性 Transitivity in Tagalog

林 真衣
Mai Hayashi

東京外国語大学言語文化学部
School of Language and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿は、特集「他動性」のアンケートに基づいて、タガログ語のデータを提供することを目的とする。

Abstract: This article offers Tagalog data based on the questionnaire for the special issue “Transitivity”.

キーワード: 他動性, タガログ語

Keywords: transitivity, Tagalog

1. はじめに

タガログ語は主要部先行型言語で、典型的な他動詞文では VSO の語順をとる。動詞はヴォイス体系を持ち、動作主ヴォイス・被動者ヴォイス・場所ヴォイス・状況ヴォイスの少なくとも4つのヴォイスを区別する (Himmelman 2005)。また格標識は、主格標識の *ang/si*、属格標識の *ng/ni*¹、場所格標識の *sa/kay* が存在する。前者が普通名詞、後者が個人名に対する標識である。主格標識としては、遠称主格指示詞に由来する *yung* が普通名詞に用いられることもある。人称代名詞は、人称・数・格によって以下のように屈折する (表1を参照)。

表1: タガログ語の人称代名詞

	主格形	属格形	場所格形
1SG	ako	ko	sa akin
2SG	ikaw/ka	mo	sa iyo
3SG	siya	niya	sa kaniya
1PL.INCL	tayo	natin	sa atin
1PL.EXCL	kami	namin	sa amin
2PL	kayo	ninyo	sa inyo
3PL	silá	nila	sa kanila



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ タガログ語の正書法では ‘ng’ が [ŋ] と対応している。属格標識 *ng* は /naŋ/ と発音され、複数標識 *mga* は /maŋa/ と発音される (Himmelman 2005)。

この調査は、マニラ首都圏に隣接するリザール州出身の20代女性に協力していただいた。アンケートの日本語文と英語文の両方を踏まえて、2020年8月29日に回答されたデータである。

2. 言語データ

まず「殺す」といった意味的他動性の高い動詞から見ていく。語根 *patay* に付加する接辞が異なっており、「殺したが死ななかった」という表現は可能である²。

(1-a) 彼はそのハエを殺した。

P<in>atay niya ang langaw.
 <PV.RL>kill 3SG.GEN NOM fly

(1-b) 彼はその箱を壊した。

B<in>asag niya ang kahon.
 <PV.RL>break 3SG.GEN NOM box

(1-c) 彼はそのスープを温めた。

<In>init niya ang sabaw.
 <PV.RL>warm 3SG.GEN NOM soup

(1-d) 彼はそのハエを殺したが、死ななかった。

P<in>atay niya yung langaw, pero hindi naman na-matay.
 <PV.RL>kill 3SG.GEN NOM fly but NEG indeed AV.RL-die

以下は、衝撃を与える出来事を描写する動詞述語の例である。語根 *bangga* に非意図を表す接頭辞 *ma-* が付加することによって、構文や語根は変化させずに意図性の違いを表現している。(1-a) から (2-c) では被動者ヴォイス動詞を用いており、他動性が高い動詞の場合には属格行為者、主格被動者という格枠組みをとる傾向があると言える。

(2-a) 彼はそのボールを蹴った。

S<in>ipa niya ang bola.
 <PV.RL>kick 3SG.GEN NOM ball

(2-b) 彼女は彼の足を蹴った。

S<in>ipa niya ang binti niya.
 <PV.RL>kick 3SG.GEN NOM leg 3SG.GEN

² 本稿で用いる略号は以下の通り：ADV-adverb, AV-actor voice, DEM-demonstrative, DIS-distal, EXCL-exclusive, EXS-existential, GEN-genitive, INCL-inclusive, LK-linker, LOC-locative, LV-locative voice, NEG-negation, NOM-nominative, NVOL-non-volitional, P-personal name/kinship term, PL-plural, PROX-proximal, PV-patient voice, Q-question, RDP-reduplicant, RL-realis, SG-singular, 1-first person, 2-second person, 3-third person, “<”-infix, “=”-cliticization, “~”-reduplication.

(2-c) 彼はその人にぶつかった (故意に).

B<in>angga niya siya.
<PV.RL>crash 3SG.GEN 3SG.NOM

(2-d) 彼はその人とぶつかった (うっかり).

Na-bangga niya siya.
NVOL.PV.RL-crash 3SG.GEN 3SG.NOM

既に映像や音を捉えているかという他動性の違いでは場所格標識は現れていない. 存在や所有の意味を持つ述語が用いられているという点が, (3-a) と (3-c) に共通している.

(3-a) あそこに人が数人見える.

May na-ki-kita ako=ng mga tao doon.
EXS NVOL.PV.RL-RDP~see 1SG.NOM=LK PL people DEM.DIS.LOC

(3-b) 私はその家を見た.

Na-kita ko yung bahay na iyon.
NVOL.PV.RL-see 1SG.GEN NOM house LK DEM.DIS.NOM

(3-c) 誰かが叫んだのが聞こえた.

Na-rinig ko=ng may s<um>i~sigaw.
NVOL.PV.RL-hear 1SG.GEN=LK EXS RDP<AV.RL>~shout

(3-d) 彼はその音を聞いた.

Na-rinig niya ang tunog na iyon.
NVOL.PV.RL-hear 3SG.GEN NOM sound LK DEM.DIS.NOM

発見・獲得・生産などの動詞の目的語であることが要因で, 異なる格枠組みや構文を用いることはない. ただし, 動詞に付く接辞によって volitional かどうかの対立があり, non-volitional な動詞では可能・達成・自発・偶然といった意味が表現される (Schachter and Otones 1972: 330-333). *hanap* は volitional/non-volitional の交替が「探す」と「見つける」の区別と対応する. ここでは *hanap* に接頭辞 *na-* を付けることで「見つけた」という達成を表現している (volitional の (5-c) と比較されたい).

(4-a) 彼はなくしたカギを見つけた.

Na-hanap niya yung susi=ng na-wala na.
NVOL.PV.RL-find 3SG.GEN NOM key=LK AV.RL-lose already

(4-b) 彼は椅子を作った.

G<um>awa siya ng upuan.
<AV.RL>make 3SG.NOM GEN chair

追及を表す動詞の目的語にも, 異なる格や構文を用いることはない. タガログ語では時制の違いが形

式的に示されないため、現在と過去どちらの事態を表す場合も同じ形式を用いることができる。そのため (5-a), (5-b) ではどちらも継続相が用いられている。(5-b) に関しては、リンカーに後続する要素は関係節の用法と異なる³。

(5-a) 彼はバスを待っている。

H<in>i-hintay niya yung bus.
RDP<PV.RL>~wait 3SG.GEN NOM bus

(5-b) 私は彼が来るのを待っていた。

H<in>i-hintay ko siya=ng d<um>ating.
RDP<PV.RL>~wait 1SG.GEN 3SG.NOM=LK <AV>arrive

(5-c) 彼は財布を探している。

H<in>a-hanap niya yung pitaka niya.
RDP<PV.RL>~find 3SG.GEN NOM wallet 3SG.GEN

「知る」の意味に対しては *alam* を、「(人を見識っている)」には *kilala* を用いる。(6-a) の *alam* は形容詞の語幹である。*kilala* は動詞の語幹として用いられることがあるが、ここでは単独で用いられており、他動性が低くなるにつれて動詞が明示的なヴォイスの形態素を欠く傾向にあると言える。「わかる/できる」に対しては形容詞 *marunong* が用いられ、後続する動詞を修飾する。

(6-a) 彼はいろんなことをよく知っている。

Maalam siya sa marami=ng bagay.
know 3SG.NOM LOC many=LK thing

(6-b) 私はあの人を知っている。

Kilala ko yung tao=ng iyon.
know 1SG.GEN NOM person=LK DEM.DIS.NOM

(6-c) 彼はロシア語ができる。

Marunong siya mag-salita ng Russian.
good 3SG.NOM AV-speak GEN Russian

記憶に関する動詞でも、異なる格枠組みや構文は用いない。

(7-a) あなたはきのう私が言ったことを覚えていますか？

Na-a~alala mo ba yung s<in>abi ko kahapon?
NVOL.PV.RL-RDP~remember 2SG.GEN Q NOM <PV.RL>say 1SG.GEN yesterday

³ リンカーは語や文をつなげる要素で、それらの関係を示す以外には意味を持たない (Schachter and Otanes 1972: 107-109).

(7-b) 私は彼の電話番号を忘れてしまった.

Na-kalimut-an ko yung number niya.
NVOL.RL-forget-LV 1SG.GEN NOM number 3SG.GEN

(8-a) と (8-c) ではそれぞれ疑似動詞を, (8-b) は形容詞を用いている. (8-b) では疑似動詞 *gusto* を用いた表現も可能ではあるが, (9-a) のように「欲しい」という意味が強くなる⁴. 非人称構文の場合は感情主体も属格になるが, 感情の対象に関しては属格または対格である格枠組みをとる傾向があると言える.

(8-a) 母は子供たちを深く愛していた.

Mahal na mahal ng nanay yung mga anak niya.
love LK love GEN mother NOM PL children 3SG.GEN

(8-b) 私はバナナが好きだ.

Mahilig ako sa saging.
fond.of 1SG.NOM LOC banana

(8-c) 私はあの人が嫌いだ.

Ayaw ko sa tao=ng iyon.
hate 1SG.GEN LOC person=LK DEM.DIS.NOM

タガログ語で「欲しい」「要る」という感情を表現するには, 疑似動詞を用いるのが一般的である.

(9-a) 私は靴が欲しい.

Gusto ko ng sapatos.
want 1SG.GEN GEN shoe

(9-b) 今, 彼にはお金が要る.

Kailangan niya ng pera ngayon.
need 3SG.GEN GEN money now

感情主体がもっとも積極的に関与する感情を表す (10-a), 消極的に関与する感情を表す (10-b) とともに, 感情主体を主格とする格枠組みをとる.

(10-a) 私の母は私の弟がうそをついたのに怒っている.

Na-galit yung nanay ko kasi nag-sinungaling yung kapatidko.
AV.RL-angry NOM mother 1SG.GEN because AV.RL-lie NOM sibling 1SG.GEN

⁴ 疑似動詞は動詞のような意味を持つが, 動詞のように屈折をせず文法的には形容詞類に属する (Schachter and Otnes 1972: 261-262).

(10-b) 彼は犬が怖い.

Na-ta~takot siya sa aso.
AV.RL-RDP~scary 3SG.NOM LOC dog

(11-a) は形容詞を用いて表現され, (11-b) では存在の構文を用いている.

(11-a) 彼は父親に似ている.

Kamukha niya ang tatay niya.
look.like 3SG.GEN NOM father 3SG.GEN

(11-b) 海水は塩分を含んでいる.

May asin sa tubig+dagat.
EXS salt LOC water+sea

(12-a) 私の弟は医者だ.

Doktor ang kapatid ko.
doctor NOM sibling 1SG.GEN

(12-b) 私の弟は医者になった.

Na-ging doktor ang kapatid ko.
AV.RL-become doctor NOM sibling 1SG.GEN

以下のどちらも能力的に可能であることを表す形容詞 *marunong* を用いる.

(13-a) 彼は車の運転ができる.

Marunong siya mag-drive ng sasakyan.
can 3SG.NOM AV-drive GEN car

(13-b) 彼は泳げる.

Marunong siya l<um>angoy.
can 3SG.NOM <AV>swim

(14-b) は「彼は早く走ることができない」という意味. 可能を表す疑似動詞 *kaya* を用いている.

(14-a) 彼は話をするのが上手だ.

Magaling siya mag-salita.
good 3SG.NOM AV-speak

(14-b) 彼は走るのが苦手だ.

Hindi niya kaya=ng t<um>akbo nang mabilis.
NEG 3SG.GEN can=LK <AV>run ADV fast

移動の表現では行為者が主格, 着点や通り道が場所格または属格という格枠組みが一般的であると言える。(15-c) は厳密には「彼はここを通った」という意味。

(15-a) 彼は学校に着いた。

D<um>ating na siya sa paaralan.
<AV.RL>arrive already 3SG.NOM LOC school

(15-b) 彼は道を渡った。

T<um>awid siya ng kalsada.
<AV.RL>across 3SG.NOM GEN road

(15-c) 彼はこの道を通った。

Dito siya d<um>aan.
DEM.PROX.LOC 3SG.NOM <AV.RL>pass

(16-a) 彼はお腹を空かしている。

Gutom na siya.
hungry already 3SG.NOM

(16-b) 彼は喉が渇いている。

Uhaw na siya.
thirsty already 3SG.NOM

(17-a) は動詞を用いて「寒がっている」という意味を表す。つまり, 主格で現れている要素が被動作者としてコード化されている。(17-b) は形容詞を用いた非人称構文になっている。

(17-a) 私は寒い。

G<in>i~ginaw ako.
RDP<PV.RL>~chill 1SG.NOM

(17-b) 今日は寒い。

Malamig ngayon.
cold today

(18-a) と (18-b) はともに場所ヴォイスであるため, ここでは手伝う相手に主格をとっている。

(18-a) 私は彼を手伝った。

T<in>ulung-an ko siya.
<RL>help-LV 1SG.GEN 3SG.NOM

(18-b) 私は彼がそれを運ぶのを手伝った。

T<in>ulung-an ko siya=ng buhat-in iyon.
<RL>help-LV 1SG.GEN 3SG.NOM=LK carry-PV DEM.DIS.NOM

(19-a) 私はその理由を彼に聞いた。

T<in>anong ko siya ng dahilan.
<PV.RL>ask 1SG.GEN 3SG.NOM GEN reason

(19-b) 私はそのことを彼に話した。

K<in>ausap ko siya tungkol doon.
<PV.RL>talk 1SG.GEN 3SG.NOM about DEM.DIS.LOC

「A は B と会う」は相互行為として表現され、主格は複数である。

(20-a) 私は彼と会った。

Nag-kita kami.
AV.RL-meet 1PL.EXCL.NOM

参考文献

- Himmelman, Nikolaus P. 2005. Tagalog. Alexander Adelaar & Nikolaus P. Himmelman (eds.), *The Austronesian languages of Asia and Madagascar*, 350-376. London: Routledge.
Schachter, Paul and Fe T. Otanes. 1972. *Tagalog reference grammar*. Berkeley, CA: University of California Press.

執筆者連絡先 : hayashi.mai.r0@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2020年12月16日

<特集「[連用修飾的]複文」>

タガログ語の連用修飾的複文 Clause combining in Tagalog

林 真衣
Mai Hayashi

東京外国語大学言語文化学部
School of Language and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿は、特集「連用修飾的複文」のアンケートに基づいて、タガログ語のデータを提供することを目的とする。

Abstract: This article offers Tagalog data based on the questionnaire for the special issue “Clause combining”.

キーワード: 複文, タガログ語

Keywords: clause combining, Tagalog

1. はじめに

タガログ語は主要部先行型言語で、典型的な他動詞文では VSO の語順をとる。動詞はヴォイス体系を持ち、動作主ヴォイス・被動者ヴォイス・場所ヴォイス・状況ヴォイスの少なくとも4つのヴォイスを区別する (Himmelman 2005)。また格標識は、主格標識の *ang/si*, 属格標識の *ng/ni*¹, 場所格標識の *sa/kay* が存在する。前者が普通名詞、後者が個人名に対する標識である。主格標識としては、遠称主格指示詞に由来する *yung* が普通名詞に用いられることもある。アスペクトについては *realis* と *continuous* の組み合わせによって、継続相・完了相・未然相・不定相の4つを区別する (表1を参照)。

表1: タガログ語のアスペクト

	continuous	non-continuous
realis	継続相	完了相
irrealis	未然相	不定相

この調査は、マニラ首都圏に隣接するリサール州出身の20代女性に協力していただいた。アンケートの日本語文と英語文の両方を踏まえて、2020年8月29日に回答されたデータである。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deedja>

¹ タガログ語の正書法では ‘ng’ が [ŋ] と対応している。属格標識 *ng* は /naŋ/ と発音され、複数標識 *mga* は /maŋa/ と発音される (Himmelman 2005)。

2. 言語データ

2 つの動詞が表す動作が同時に行われる際の表現には、接続詞 *habang* が用いられる。主格が異なる動作者を標示する場合にもこの表現が用いられ、主格が標示する動作者が同じ場合には一方の主格名詞句は省略可能である。動詞は継続相をとることが多い (Schachter and Otones 1972: 470)²。

- (1) 彼はいつも新聞を読みながらご飯を食べる。

Lagi siya=ng nag-ba-basa ng dyaryo habang k<um>a-kain.
 always 3SG.NOM=LK AV.RL-CONT~read GEN newspaper while CONT<AV.RL>~eat

継起的動作は、ヴォイスと相という文法範疇を欠いていない動詞を並べることで表現される。接続詞 *tapos* 「それから」などが挿入されることがある。

- (2) 私は昨日 9 時に家に帰って、少しテレビを見て、寝ました。

<Um>*uwi ako nang alas nuwebe kahapon, na-nood ng TV, tapos*
 <AV.RL>return 1SG.NOM ADV o'clock nine yesterday AV.RL-watch GEN TV then
na-tulog.
 AV.RL-sleep

理由を含む継起的動作には、ヴォイスと相という文法範疇を欠いていない動詞を接続詞 *kaya* 「だから」で並べて表現する。

- (3) 私は昨日階段で転んで、骨折をしてしまった。

Na-laglag ako sa hagdan kahapon, kaya na-bali ang buto ko.
 AV.RL-fall 1SG.NOM LOC stairs yesterday so AV.RL-break NOM bone 1SG.GEN

「行った」という要素がどちらの主格にも共通しているため、「兄は大学に行った」の「行った」は省略されている。小辞 *naman* は状況の相違性を示す (Schachter and Otones 1972: 425)。

- (4) 今日父は会社に行って、兄は大学に行った。

Nag-punta rin ngayon sa trabaho yung tatay ko, at sa university naman
 AV.RL-go too today LOC work NOM father 1SG.GEN and LOC university indeed
ang kapatid ko.
 NOM sibling 1SG.GEN

衣服や装飾品などを身につけている状況には、*naka-* という接頭辞が用いられる。動詞と付帯状況の表現は、間に位置する主格にリンカーを伴うことでつながられている。(5-b) のようにリンカーが介在し

² 本稿で用いる略号は以下の通り：ADJ-adjective, ADV-adverb, AV-actor voice, CAUS-causative, COND-conditional, CONT-continuous, DEM-demonstrative, DIS-distal, EXCL-exclusive, EXS-existential, GEN-genitive, GER-gerund, INCL-inclusive, IRR-irrealis, LK-linker, LOC-locative, LV-locative voice, MED-medial, NEG-negation, NOM-nominative, NVOL-non-volitional, P-personal name/kinship term, PL-plural, PROX-proximal, PV-patient voice, Q-question, RDP-reduplicant, RL-realis, SG-singular, SMP-sentence-medial particle, 1-first person, 2-second person, 3-third person, “<”-infix, “=”-cliticization, “~”-reduplication.

ないものも許される.

- (5) 彼は今日帽子をかぶって歩いていた³.

a.	<i>Naka-sumbrero</i>	<i>siya=ng</i>	<i>nag-la-lakad~lakad</i>	<i>ngayon.</i>
	ADJ-hat	3SG.NOM=LK	AV.RL-CONT~RDP~walk	today
b.	<i>Nag-lakad</i>	<i>siya</i>	<i>ngayon</i>	<i>naka-sumbrero.</i>
	AV.RL-walk	1SG.NOM	today	ADJ-hat

習慣的な動作には動詞は継続相で表現され, 英語の *and* にあたる接続詞 *at* を用いて並べられている.

- (6) 私は休みの日にはいつも本を読んだり, テレビを見たりしています.

<i>Tuwing</i>	<i>pahinga,</i>	<i>na-no-nood</i>	<i>ako</i>	<i>ng</i>	<i>TV</i>	<i>at</i>	<i>nag-ba-basa</i>
every	rest	AV.RL-CONT~watch	1SG.NOM	GEN	TV	and	AV.RL-CONT~read
	<i>ng</i>	<i>libro.</i>					
GEN	book						

日本語のカラ・ノデにあたる区別はなく, とともに接続詞 *kaya* 「だから」 でつながれる.

- (7) 時間がないから, 急いで行こう.

<i>Wala</i>	<i>na</i>	<i>tayo=ng</i>	<i>oras,</i>	<i>kaya</i>	<i>bilis-an</i>	<i>na</i>	<i>natin.</i>
NEG.EXS	already	1PL.INCL.NOM=LK	time	so	hurry-LV.IRR	already	1PL.INCL.GEN

- (8) 昨日は頭が痛かったので, いつもより早く寝ました.

<i>Sakit</i>	<i>ng</i>	<i>ulo</i>	<i>ko</i>	<i>kahapon,</i>	<i>kaya</i>	<i>mas</i>	<i>maaga</i>	<i>ako=ng</i>	<i>na-tulog.</i>
pain	GEN	head	1SG.GEN	yesterday	so	more	early	1SG.NOM=LK	AV.RL-sleep

(9) と (10) はともに, 目的を表す動詞が不定相の形式で接続詞 *para* 「ために」 に後続する.

- (9) 彼は本を買いに行った.

<Um>	<i>alis</i>	<i>siya</i>	<i>para</i>	<i>b<um>ili</i>	<i>ng</i>	<i>libro.</i>
<AV.RL>	leave	3SG.NOM	for	<AV.IRR>	buy	GEN book

- (10) 彼は外がよく見えるように窓を開けた.

<i>B<in>uks-an</i>	<i>niya</i>	<i>yung</i>	<i>bintana</i>	<i>para</i>	<i>ma-kita</i>	<i>yung</i>	<i>labas.</i>
<RL>	open-LV	3SG.GEN	NOM window	for	NVOL.PV.IRR-see	NOM	outside

条件を表す接続詞には主に *kapag/kung* があり, 過去の出来事に対しては *noong* が用いられる. 動詞以外が述語である節や不定相以外の動詞が述語である節には *kapag* が用いられ, *kung* はすべての相の動詞で使用可能である. 両者は置き換え可能な場合が多い. *noong* は動詞以外が述語である節や完了相

³ リンカーは語や文をつなげる要素で, それらの関係を示す以外には意味を持たない (Schachter and Otnes 1972: 107-109).

の動詞が述語である節に用いられる (Schachter and Otnes 1972: 466-469).

(11) ここでは夏になると、よく雨が降ります。

Maulan dito kapag tag-init.
rainy here COND summer

(12) 窓を開けると、冷たい風が入って来た。

P<um>asok yung malamig na hangin noong b<in>uks-an ko
<AV.RL>enter NOM cold LK wind at.that.time <RL>open-LV 1SG.GEN
ang bintana.
NOM window

(13) では接頭辞 *pag-* を用いて動名詞を表している。これは時を表す節として用いることができる (Himmelman 2005: 372-373).

(13) 坂を上ると、海が見えた。

Na-kita ko yung dagat pag-akyat ng burol.
NVOL.PV.RL-see 1SG.GEN NOM sea GER-climb GEN hill

(14) 明日雨が降ったら、私はそこに行かない。

a. *Kapag <um>ulan bukas, hindi ako maka-punta diyan.*
COND <AV.RL>rain tomorrow NEG 1SG.NOM NVOL.AV.IRR-go DEM.MED.LOC
b. *Kung <um>ulan bukas, hindi ako pu-punta diyan.*
COND <AV.RL>rain tomorrow NEG 1SG.NOM CONT~go(AV.IRR) DEM.MED.LOC

反実仮想を表す節では、接続詞は *kung* しか用いることができない (Schachter and Otnes 1972: 466-469). (15-a) は願望を表す小辞を用いた表現, (15-b) は言いさし表現がなされている。また、動詞はともに完了相である。

(15) もっと早く起きればよかったなあ。

a. *Mas maaga sana ako g<um>ising.*
more early SMP 1SG.NOM <AV.RL>wake.up
b. *Kung mas maaga lang ako g<um>ising.*
COND more early just 1SG.NOM <AV.RL>wake.up

(16) あんなところへ行かなければよかった。

Hindi na lang sana ako p<um>unta doon.
NEG already just SMP 1SG.NOM <AV.RL>go DEM.DIS.LOC

一般的真理を表現する場合でも、タガログ語は条件形式が可能である。

(17) 1に1を足せば, 2になる.

- a. *Kapag p<in>ag-sama ang isa at isa, ma-gi-ging dalawa.*
 COND CAUS<PV.RL>-combine NOM one and one AV.IRR-CONT~become two
- b. *Kung pag-sa~sama-hin ang isa at isa, ma-gi-ging dalawa.*
 COND CAUS-CONT~combine-PV.IRR NOM one and one AV.IRR-CONT~become two

働きかけのモダリティが現れる文でも特別な形式は用いられず, 動名詞や接続詞による条件形式が現れる.

(18) 駅に着いたら電話をしてください.

- a. *Tawag-an mo ako pag-dating mo sa istasyon.*
 call-LV.IRR 2SG.GEN 1SG.NOM GER-arrive 2SG.GEN LOC station
- b. *Tawag-an mo ako kung d<um>ating ka na sa istasyon.*
 call-LV.IRR 2SG.GEN 1SG.NOM COND <AV.RL>arrive 2SG.NOM already
 LOC station

「日曜日になったら」という表現はせず, *Linggo* 「日曜日」が場所格標識をとる形式となっている.

(19) 日曜日になったら, みんなで公園に行きたいなあ.

- Para=ng gusto ko=ng p<um>unta sa park sa Linggo.*
 seem=LK want 1SG.GEN=LK <AV.IRR>go LOC park LOC Sunday

タガログ語では「心配法」のような動詞の形式を持たない.

(20) 明日雨が降ったら困るなあ.

- Nag-alala ako kung u~ulan bukas.*
 AV.RL-worry 1SG.NOM COND CONT~rain(AV.IRR) tomorrow

時間的前後関係に則していないナラ条件文でも, 特別な形式は現れない.

(21) 家に来るなら, 電話をしてから来てください.

- a. *Kung pu~punta ka dito, t<um>awag ka muna.*
 COND CONT~go(AV.IRR) 2SG.NOM DEM.PROX.LOC <AV.IRR>call 2SG.NOM first
- b. *Kapag pu~punta ka dito, t<um>awag ka muna.*
 COND CONT~go(AV.IRR) 2SG.NOM DEM.PROX.LOC <AV.IRR>call 2SG.NOM first

(22) (もうすぐベルが鳴るので) 鳴ったら, 教えてください.

- a. *Sabi-han mo ako kapag t<um>unog ang bell.*
 say-LV.IRR 2SG.GEN 1SG.NOM COND <AV.RL>sound NOM bell

b. *Sabi-han mo ako pag-tunog ng bell.*
 say-LV.IRR 2SG.GEN 1SG.NOM GER-sound GEN bell

(23) (もしかしたらベルが鳴るかもしれないので) もし鳴ったら, 教えてください.

Sabi-han mo ako kung tu-tunog ang bell.
 say-LV.IRR 2SG.GEN 1SG.NOM COND CONT~sound(AV.IRR) NOM bell

(24) は一般論的な条件を表現する文である. タガログ語では節内の名詞が現れ得るどの位置にも, 明示的な派生なしに動詞が現れることができる. ここでは, 主格標識に否定の語と継続相の動作主ヴォイス動詞が後続し, 「働いていない人間」を指すという指示的な機能を果たしている.

(24) 働かない者は, 食べるべきではない.

Hindi dapat k<um>ain yung hindi nag-ta~trabaho.
 NEG must <AV.IRR>eat NOM NEG AV.RL-CONT~work

条件の接続詞による言いさし表現である.

(25) もう少しお金があつたらなあ.

Kung may pera lang ako.
 COND EXS money just 1SG.NOM

(26) これも食べたら?

Kung/Kapag ito ba, kain-in mo rin.
 COND/COND DEM.PROX.NOM Q eat-PV.IRR 2SG.GEN too

(27) 好きなようにやれば?

Kung ano=ng gusto mo.
 COND what=LK want 2SG.GEN

逆説の表現には条件の接続詞に加えて, 接続詞 *kahit* 「にもかかわらず」も用いられる. (30) では接続詞 *pero* 「しかし」でつなげている.

(28) このコップは落としても割れない.

a. *Hindi ma-ba~basag ito=ng baso kahit ma-bagsak.*
 NEG NVOL.PV.IRR-CONT~break DEM.PROX.NOM=LK glass although AV.IRR-fall

b. *Hindi ma-ba~basag ito=ng baso kung ma-bagsak*
 NEG NVOL.PV.IRR-CONT~break DEM.PROX.NOM=LK glass COND AV.IRR-fall
na.
 already

c. *Hindi ma-ba~basag ito=ng baso kapag na-bagsak.*
 NEG NVOL.PV.IRR-CONT~break DEM.PROX.NOM=LK glass COND AV.RL-fall

- (29) このリンゴは高かったのに, ちっとも甘くない.

Hindi matamis ito=ng apple kahit mahal.
NEG sweet DEM.PROX.NOM=LK apple although expensive

- (30) 彼の家に行ってみたけれども, 彼はいなかった.

P<in>unta-han ko siya sa bahay niya, pero wala siya.
<RL>go-LV 1SG.GEN 3SG.NOM LOC house 3SG.GEN but NEG.EXS 3SG.NOM

時間的制限を表すのに, 接続詞 *hanggang* 「まで」, *bago* 「前に」をそれぞれ用いる.

- (31) あの人が来るまで, 私はここで待っています.

Mag-hi~hintay ako dito hanggang d<um>ating siya.
AV.IRR-CONT~wait 1SG.NOM DEM.PROX.LOC until <AV.IRR>arrive 3SG.NOM

- (32) あの人が来るまでに, 食事を作っておきますよ.

Mag-ha~handa ako ng pagkain bago siya d<um>ating.
AV.IRR-CONT~prepare 1SG.NOM GEN food before 3SG.NOM <AV.IRR>arrive

参考文献

- Himmelman, Nikolaus P. 2005. Tagalog. Alexander Adelaar & Nikolaus P. Himmelmann (eds.), *The Austronesian languages of Asia and Madagascar*, 350-376. London: Routledge.
Schachter, Paul and Fe T. Otanes. 1972. *Tagalog reference grammar*. Berkeley, CA: University of California Press.

執筆者連絡先 : hayashi.mai.r0@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2020年12月23日

<特集「情報構造と名詞述語文」>

フィリピン語の情報構造と名詞述語構文 Information structure and nominal predicate sentences in Tagalog

細羽 洸希
Hiroki Hosoba

東京外国語大学言語文化学部
School of Language and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿は特集「情報構造と名詞述語構文」(『語学研究所論集』第25号, 2021, 東京外国語大学)に寄与する。本稿の目的は20個のアンケート項目に対するフィリピン語データを与えることである。

Abstract: This report contributes to the special cross linguistic study on ‘Information structure and nominal predicate sentences in Tagalog’ (*Journal of the Institute of Language Research* 25, 2021, Tokyo University of Foreign Studies).

キーワード: 情報構造, 名詞述語構文, フィリピン語

Keywords: information structure, nominal predicate, sentences, Tagalog

今回のアンケート調査は、フィリピン語を対象とする。例文の作成にあたり、フィリピン語ネイティブ話者1名の協力を得た。

1. フィリピン語データ

(1) えっ, A(固有名詞)が来たの?/いや, AじゃなくてBが来たんだ。

D<um>ating	na	si	A?
come<PFV.AF>	already	NOM	A

hindi	si	A,	si	B	yung	d<um>ating.
NEG	NOM	A,	NOM	B	NOM	come<PFV.AF>

(2) 誰が来たの?/Aが来たよ。

Sino	yung	d<um>ating?/	Si	A	yung	d<um>ating.
who	NOM	come<PFV.AF>	NOM	A	NOM	come<PFV.AF>



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

- (3) Aのほうが大きいんじゃないの?/いや, A じゃなくて, Bのほうが大きいんだよ.

Hindi	ba	si	A	yung	mas	malaki?/
NEG	Q	NOM	A	NOM	COMP	big

Hindi,		si	B	yung	mas	malaki.
NEG		NOM	B	NOM	COMP	big

- (4) (電話で) どうしたの?/うん, 今, お客さんが来たんだ.

Ano=ng	nang-yari?/	Ah,	may	d<um>ating.
what=NOM	AV.PFV-happen	Ah	EXS	come<PFV.AF>

- (5) あの子供が A を叩いたんだって!/?いや, A じゃなくて, B を叩いたんだよ.

T<in>ama-an	nung	bata=ng	iyon	si	A!?
hit<PFV>-OF	distal	child=LINK	NOM.that	NOM	A

Hindi	si A,	si	B	yung	t<in>ama-an.
NEG	NOM.A	NOM	B	NOM	hit<PFV>-LF

- (6) 赤い袋と青い袋があるけど, どちらを買うの?/(私は) 青い袋を買うよ.

Mayroon	po=ng	pula	at	asul	nung bag,
EXS	HON=LINK	red	and	blue	GENI bag,

ano	po=ng	pi-pili-in	niyo?	Pili-in	ko
what	HON=NOM	FUT-pick-OF	2SG.GEN	pick-PF	1SG.GEN

yung	asul.
NOM	blue

- (7) Aはどこですか?/Aは朝からどっかへでかけたよ.

Nasaan	si	A?
LOC.EXS	NOM	A

May	p<in>unta-han	si	A	noo=ng	umaga.
EXS	go<PFV>-LF	NOM	A	when.=LINK	morning

- (8) (あの子供は) 誰を叩いたの?/(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ.

Sino	ang	t<in>ama-an	niya?
who	NOM	hit<PFV>-PF	3SG.GEN

T<in>ama-an	niya	yung	kapatid	niya.
hit<PFV>-OF	3SG.GEN	NOM	brother	3SG.GEN

- (9) (電話で) どうしたの? / うん, A が (自分の) 弟を叩いたんだ.

Ano=ng nang-yari?
what=LINK OF.PFV-happen

Uh, t<in>ama-an ni A yung kapatid niya
Uh hit<PFV>-PF GEN A NOM brother GEN.3SG

- (10) あのケーキ, どうした? / (ああ, あれは) A が食べちゃったよ.

Ano=ng nang-yari doon sa cake?
what=LINK PF.PFV-happen there LOC cake

K<in>ain na ni A.
eat<PF.PFV> already GEN A

- (11) 私が昨日お店から買ってきたのはこの本だ.

Eto yung libro=ng b<in>ili ko sa tindahan
NOM.this NOM book=LINK buy<PFV.PF> GEN.me LOC store

kahapon.
yesterday

- (12) あの人は先生だ. この学校でもう 20 年働いている.

Guro yung lalaki=ng iyon.
teacher NOM man=LINK that

Mga dalawampu=ng taon na siya nag-ta-trabaho dito.
PL 20=LINK year already 3SG AF-RDP-work here

- (13) 彼のお父さんは, あの人だ.

Yung tatay niya ay yung lalaki=ng iyon.
NOM father GEN.3SG TOP NOM man=LINK that

- (14) あの人が彼のお父さんだ.

Yung lalaki=ng iyon yung tatay niya.
NOM man=LINK that NOM father GEN.3SG

- (15) あさってってというのはね, 明日の次の日のことだよ.

Ang ibig-sabihin ng Asatte ay yung araw na kasunod ng
NOM meaning GEN Asatte TOP NOM day LINK next GEN

bukas.
tomorrow

(16) (何人かが入った喫茶店で注文を聞かれて) 私はコーヒーだ.

[1]

Kape po.
coffee HON

[2]

Kape po sa akin.
coffee HON LOC 1SG.LOC

(16) では [2] の方がより丁寧な表現.

(17) [(注文した数人分のお茶が運ばれてきて) どなたがコーヒーですか? との問いに] コーヒーは私だ.

Sa akin po yung kape.
LOC 1SG.LOC HON NOM coffee

(18) その新しくて厚い本は (値段が) 高い.

Ang mahal nung bago=ng makapal na libro.
NOM expensive GEN new=LINK thick LINK book

(19) (砂糖入れを開けて) あっ, 砂糖が無くなっているよ!

Uy, wala na tayo=ng asukal!
Uy, NEG.EXS LINK 1PL.INCL.NOM=LINK sugar

(20) 午後, 誰かに会うはずだったなあ. 誰だったっけ? あっ, そうだ, A 君だったな.

Kanino nga pala ako dapat makipag-kita mamaya?
whom by the way 1SG.NOM should AF-talk later

Ah, si A nga pala.
ah, NOM A by the way

略号

NOM: 主格 / LOC: 所格 / AF: Actor focus / PF: Patient focus / LF: Locative focus

執筆者連絡先 : hosoba.hiroki.r0@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2021 年 1 月 11 日

<特集「情報標示の諸要素」>

フィリピン語の情報標示の諸要素 Markers of informational structure in Tagalog

細羽 洸希
Hiroki Hosoba

東京外国語大学言語文化学部
School of Language and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿は、特集「情報標示の諸要素」(『語学研究所論集』第25号, 2021, 東京外国語大学) に寄与する。本項の目的は25個のアンケート項目に対するフィリピン語データを与えることである。

Abstract: This report contributes to the special cross-linguistic study on ‘markers of informational structure’ (*Journal of the Institute of Language Research* 21, 2016, Tokyo University of Foreign Studies).

キーワード: とりたて表現, 不定表現, フィリピン語

keywords: emphasizing expression, indefinite expression, Tagalog

今回のアンケート調査は、フィリピン語を対象とする。例文の作成にあたり、フィリピン人のフィリピン語ネイティブ話者の協力を得た。

1. とりたて表現について

(1) あの人だけ, 時間通りに来た。

Siya	lang	yung	d<um>ating	sa	oras.
3SG.NOM	only	NOM	arrive<AF.PFV>	LOC	time

(2) これはここでしか買えない。

Dito	lang	na-bi-bili	ito.
here.LOC	only	PF-IPFV-buy	this.NOM

(3) その家にいたのは子供ばかりだった。

Puro	bata	lang	yung	nasa	loob	ng	bahay.
purely	child	only	NOM	at	inside	GEN	house

(1) の「だけ」(2) の「しか～ない」は、小辞 lamang/lang を用いて表現する。(3) は, puro と lang を組み合わせて「ばかり」のニュアンスを表現する。

(4) 次回こそ, 失敗しないようにしよう。

Sa	susuod	talaga,	subuk-an	natin=g	hindi	na	ma-bigo.
LOC	next	really	try-PF	1PL=LINK NEG	anymore	AF-fail	



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

(4) では「こそ」に相当する表現はないが、小辞 na をつかって「次回はもう～しない」と表現する。

(5) 疲れたね, お茶でも飲もう.

Nakakapagod	no,	inom	naman	tayo	ng	tsaa.
tiring	EMPH	drink	anyway	1PL.INCL	GEN	tea

(5) の「でも」は、小辞 naman を用いて表現する。

(6) 水さえあれば, 数日間は大丈夫だ.

Basta	may	tubig	ka-kayanin	naman	ng
as.long.as	EXS	water	PF.FUT-endure	EMPH	GEN
ilan=g		araw.			
a.few=LINK		day			

(6) の「さえ」は、副詞 basta を用いて表現する。

(7) 小さい子供まで, その仕事の手伝いをさせられた.

Kahit	mga bata	p<in>atulong	doon	sa	trabaho.
even	PL child	<PF.PFV>CAUS-help	there.LOC	LOC	work

(8) 私はお金なんか欲しくない.

[1]

Hindi	pera	ang	hanap	ko.
NEG	money	NOM	quest	1SG.GEN

[2]

Ayaw	ko	ng	pera.
NEG.like	1SG.GEN	GEN	money

(8) では、2通りの表現があるが、[1] は、日本語の「なんか」のニュアンスを表現する。

(9) 自分の部屋ぐらい, 自分できれいにしなさい.

Kuwarto	mo	iyan	kaya	ikaw	na	mag-linis.
room	2SG.GEN	that.LOC	so	2SG.NOM	LINK	AF-clean

(9)では「ぐらい」は、「あなたの部屋だから、掃除するのはあなただ」と表現する。

(10) 私にもちょうだい.

Pahingi	din	ako.
request	also	1SG.NOM

(11) お父さんもう帰って来たね. お母さんは?

Nakauwi na si Tatay no. Si Nanay?
at_home already NOM father EMPH NOM mother

2. 不定表現について

(12) 誰か(が)電話してきたよ.

May t<um>awag kanina oh.
EXS call<AF.PFV> earlier oh

存在を表す may を用いて「～する人がいる」と表現する.

(13) 誰かに聞いてみよう.

Mag-tanong-tanong tayo.
AF-ask_around 1PL.INCL

英語の let's のような 勧誘表現を用いて「(誰かに) ～しよう」と表現する.

(14) 私のいない間に誰か来た?

May d<um>ating ba noon=g wala
EXS arrive<AF.PFV> Q when=LINK NEG.EXS

ako?

1SG.NOM

(15) 誰か来たら, 私に教えてください.

Sabih-an niyo po ako pag may d<um>ating.
say-LF 2SG.GEN HON 1SG.NOM if EXS arrive<AF>

(16) 今日は誰も来るとは思わない. /今日は誰も来ないと思う.

Hindi ko ma-isip na may da-rating ngayon.
NEG 1SG.GEN PF-think LINK EXS FUT-arrive today

否定辞 hindi と may を組み合わせて「今日来る人がいるとは思わない」と表現する.

Sa palagay ko, wala=ng darating ngayon.
LOC opinion 1SG.GEN NEG.EXS=LINK FUT-arrive today

存在の否定を表す wala を用いて「今日は来る人がいないと思う」と表現する.

(17) そこには今誰もいないよ.

Wala=ng tao ngayon doon.
NEG.EXS=LINK people now there.LOC

(17) の「誰も」は、wala を用いて「人がいない」と表現する。

(18) (それは) 誰でもできる。

Kahit	sino	ma-ga-gawa	iyon.
even	who	PF-FUT-do	that.NOM

(18) 「だれでも」は、kahit と sino を組み合わせて表現する。

(19) そんなこと (は) , みんな知っているんじゃないか!?

Alam	naman	ng	lahat	iyon!
known	EMPH	GEN	all	that.NOM

(20) そんなもの, 誰が買うんだよ!? 誰も買うわけじゃないか!

Sino	naman	bi-bili	noon?
who	EMPH	FUT.AF-buy	that.GEN

Wala	kaya=ng	bi-bili	noon!
NEG.EXS	can=LINK	FUT.AF-buy	that.GEN

3. その他

(21) 君は英語がうまいね。

Ang	galing	mo	sa	Ingles	no.
NOM	good	2SG.GEN	LOC	English	EMPH

(22) 君は退屈そうだね。

Parang	na-i-inip	ka	ah.
seems_like	AF-IPFV-feel_bored	2SG.NOM	EMPH

(23) 明日も寒いらしいよ。

Mukha=ng	malamig	din	daw	bukas.
seems=LINK	cold	also	reportedly	tomorrow

(24) この土地は野菜がよく育つ。だから高い値段で売れるだろう。

Maganda	yung	pagtubo	ng	gulay	sa	lupa=ng	ito.
beautiful	NOM	growth	GEN	vegetable	LOC	soil=LINK	NOM.this

Kaya	malaki	din	ang	kita	pagbinenta	na.
so	big	also	NOM	to_you	sale	by_now

(25) 私は頭が痛い。だから今日は休む。

[1]

Ang	sakit	ng	ulo	ko.
NOM	hurt	GEN	head	1SG.GEN

Kaya	hindi	ako	pa-pasok	ngayon.
so	NEG	1SG.NOM	AF.FUT-go	today

[2]

Hindi	ako	pa-pasok	ngayon
NEG	1SG.NOM	AF.FUT-go	today

kasi	ang	sakit	ng	ulo	ko.
because	NOM	hurt	GEN	head	1SG.GEN

(25) は2通りあるが, [1] はあまり自然な文ではない。

略号

AF: Actor focus / PF: Patient focus / LF: Locative focus

参考文献

Schachter, Paul, and Fe T. Otnes. 1972. “*Tagalog reference grammar*”, Berkeley: University of California Press.

執筆者連絡先 : hosoba.hiroki.r0@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2021年1月11日

〈特集「ヴォイスとその周辺」〉

ヴォイスとその周辺：フィジー語 Voice and related matters: Fijian

岡本 進
Susumu Okamoto

東京外国語大学大学院総合国際学研究科
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨：本稿の目的は、特集「ヴォイスとその周辺」のアンケートに基づき、フィジー語のデータを提供することである。

Abstract: The goal of the paper is to provide data of voice and related expressions in Fijian based on the questionnaire.

キーワード：フィジー語、ヴォイス、派生

Keywords: Fijian, voice, derivation

1. はじめに

フィジー語はオーストロネシア語族、東マラヨ・ポリネシア語派、オセアニア諸語に属す。本研究で扱うデータはすべて標準フィジー語である。基本語順はVOSで、主語の一致標示が動詞の前に現れる。三人称単数 *e* はアスペクト標示とは共起しない。音素目録は以下の通り; /p, b [mb], t, d [nd], k, q [ŋg], r, dr [nr], v [β], f, c [ð], j [tʃ], z [ndʒ], m, n, g [ŋ], l, w, y, a, e, i, o, u/. 母音は長短の別があり、長母音はマクロンで示す。コンサルタントはフィジー語母語話者であるLG氏(1962年生まれ、男性)である。

2. データ

略語は The Leipzig Glossing Rules に基づく。

フィジー語では自動詞が形態的に無標で(1d)、他動詞に接尾辞が付加される(1b)。動詞によっては自発の接頭辞が付加される(1a, c)。

(1) a. (風などで) ドアが開いた

Sā ta-dola na kātuba
ASP SPON-open ART door

b. (彼が) ドアを開けた

E dola-va na kātuba
3SG open-TR ART door



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed/ja>

c. (入り口の) ドアが開けられた

Sā ta-dola na kātuba
ASP SPON-open ART door

d. ドアが壊れた

Sā basu na kātuba
ASP break ART door

使役には接頭辞 *vaka-* が用いられる (2)-(5). 強制使役と許可使役について形態的な差異はない.

(2) 私は (自分の) 弟を立たせた

Au ā vaka-tū-cake-taki taci-qu
1SG PST CAUS-stand-up-TR younger.sibling-1SG

(3) 私は (自分の) 弟に歌を歌わせた

Au ā vaka-laga-sere-taki taci-qu
1SG PST CAUS-sing-song-TR younger.sibling-1SG

(4) a. (遊びたがっている子供に無理やり) 私は子供をパンを買いに行かせた

Au ā vaka-saurārā-taka na luve-qu me voli madrai
1SG PST CAUS-force-TR ART child-1SG SUB buy bread

b. (遊びに行きたがっているのを見て) 私は子供に遊びに行かせた

Au ā vaka-tara-a me qito na luve-qu
1SG PST CAUS-permit-TR SUB play ART child-1SG

(5) a. 私は弟に服を着せた

Au vaka-isulu-taki taci-qu
1SG CAUS-clothes-TR younger.sibling-1SG

b. 私は弟にその服を着させた

Au vaka-isulu-taki taci-qu
1SG CAUS-clothes-TR YOUNGER.sibling-1SG

(6)-(7) のとおり, 受益者は前置詞句で表される. 恩恵の授受を特別に標示する動詞形態はない.

(6) 私は弟にその本をあげた

Au ā solī-a na ivola vei taci-qu
1SG PST give-TR ART book to younger.brother-1SG

(7) a. 私は弟に本を読んであげた

Au ā wili-ka na ivola vei taci-qu
1SG PST read-TR ART book to younger.brother-1SG

- b. 兄は私に本を読んでもらった

E ā wili-ka vei au na ivola na tuaka-qu
3SG PST read-TR to 1SG ART book ART older.brother-1SG

- c. 私は母に髪を切ってもらった

E ā koti-va na uluqu ko tina-qu
3SG PST cut-TR ART head-1SG PRP mother-1SG

再帰や自利を表す特別な形式はなく、「私は私の体を洗った」のようになる (8)-(9).

- (8) a. 私は (自分の) 体を洗った

Au ā sava-ta na yaqo-qu
1SG PST wash-TR ART body-1SG

- b. 私は手を洗った

Au ā sava-ta na liga-qu
1SG PST wash-TR ART hand-1SG

- c. 彼は手を洗った

E ā sava-ta na liga-na o koya
3SG PST wash-TR ART hand-3SG PRP 3SG

- (9) (自分のために) 私はその本を買った

Au ā voli-a na ivola me baleti au gā
1SG PST buy-TR ART book as for 1SG only

相互は接頭辞 *vei-* で表される (10).

- (10) 彼らは (／その人たちは) (互いに) 殴り合っていた

Erau ā vei-vacu
3DU PST RECP-punch

衆動は動詞語幹のあとに現れる小詞 *kece* で表される (11).

- (11) その人たちは (みんな一緒に) 街へ行った

Eratou lako kece ki tauni
3PA go all to town

(12) は「映画」が主語となり、「映画が私を泣かせる」となっている.

- (12) その映画は泣ける (その映画を見ると泣いてしまう)

E vaka-tagci-ci au na iyalo
3SG CAUS-cry-TR 1SG ART movie

意図的な動作には他動詞が用いられ (13a), 非意図的な動作には使役形が用いられている (13b).

(13) a. 私は卵を割った

Au ā voro-ka e dua na yaloka
1SG PST break-TR 3SG one ART egg

b. (うっかり落として) 私は卵を割った／割ってしまった

Au ā vaka-voro-taka e dua na yaloka
1SG PST CAUS-break-TR 3SG one ART egg

随意の不可能と不随意の不可能について形態的な違いはない (14).

(14) a. 私はコーヒーを飲みすぎて (飲みすぎたので) 眠れなかった

Au ā gunu-va na kove vaka-levu ka-u sega ni moce rawa
1SG PST drink-TR ART coffee ADV-big and-1SG NEG.V COMP sleep able

b. きノウ私は仕事がたくさんあって (たくさんあったので) 眠れなかった

E levu na kā me-u caka-va ka-u sega ni moce rawa
3SG big ART thing SUB-1SG do-TR and-1SG NEG.V COMP sleep able

全体部分関係はすべて「～の…」という属格的表現となっている (15)-(17). 例えば (15) は字義通りには「私の頭が痛い」となっている.

(15) 私は頭が痛い

E mosi na ulu-qu
3SG pain ART head-1SG

(16) 彼女は髪が長い

E balavu na drau ni ulu-na na yalewa
3SG long ART hair of head-3SG ART woman

(17) a. 彼は (別の) 彼の肩をたたいた

E ā tavi-a na taba-na
3SG PST tap-TR ART shoulder-3SG

b. 彼は (別の) 彼の腕をつかんだ

E ā qumi-a na liga-na
3SG PST grasp-TR ART shoulder-3SG

(18)-(19) では補文節が用いられている .

(18) a. 私は彼がやってくるのを見た

Au ā rai-ca ni lako mai o koya
1SG PST see-TR COMP.3SG go hither PRP 3SG

- b. 私は彼が今日来ることを知っている

Au kila-a ni lako mai nikua o koya
1SG know-TR COMP go hither today PRP 3SG

- (19) 彼は自分 (のほう) が勝つと思った

E ā nanu-ma na tagane ni na rawa ni qāqā
3SG PST think-TR ART man COMP FUT able COMP win

動作が部分的か全体的かによって動詞の形態は変化しない (20).

- (20) a. 私は (コップの) 水 (の一部) を飲んだ

Au ā gumu-va vaka-lilai na bilo wai
1SG PST drink-TR ADV-small ART cup water

- b. 私は (コップの) 水を全部飲んだ

Au ā gumu-va taucoko na bilo wai
1SG PST drink-TR all ART cup water

- (21) では習慣相 *dau* と共に名詞抱合が用いられ, 恒常性を表している.

- (21) 彼は肉を食べない

E sega ni dau kana lewe ni manumanu
3SG NEG.V COMP HAB eat flesh of animal

「寒い」のような感覚は非人称でも一人称主語でも表される (22).

- (22) a. 今日は寒い

E batabatā nikua
3SG cold today

- b. 私は (何だか) 寒い (私には寒く感じる)

Au vā-kila-a tiko na batabatā
1SG CAUS-feel-TR DUR ART cold

- (23) は形容詞述語文である.

- (23) 人がとても多かったことに私は驚いた

Au ā kurabui e na levu ni tamata
1SG PST be.surprised by ART big of human

- (24) は字義通りには「雨の降ることが始まった」である.

(24) 雨が降り始めた

E ā tekivū me tau na uca
3SG PST start SUB fall ART rain

(25) では非対格動詞が使われている。

(25) この本はよく売れる

E voli vaka-levu na ivola
3SG be.sold ADV-big ART book

略語一覧 (The Leipzig Glossing Rules がないもの)

ASP aspect
HAB habitual
NEG.V negative verb
PA paucal
PRP proper article
SPON spontaneous
SUB subordinator

執筆者連絡先 : susumu.okamoto415@gmail.com

原稿受理 : 2021 年 1 月 17 日

〈特集「所有・存在表現」〉

所有・存在表現：フィジー語 Possessive and existential expressions: Fijian

岡本 進
Susumu Okamoto

東京外国語大学大学院総合国際学研究科
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨：本稿の目的は、特集「所有・存在表現」のアンケートに基づき、フィジー語のデータを提供することである。

Abstract: The goal of the paper is to provide data of possessive and existential expressions in Fijian based on the questionnaire.

キーワード：フィジー語, 所有表現, 存在表現

Keywords: Fijian, possessive expression, existential expression

1. はじめに

フィジー語はオーストロネシア語族, 東マラヨ・ポリネシア語派, オセアニア諸語に属す。本研究で扱うデータはすべて標準フィジー語である。基本語順は VOS で, 主語の一致標示が動詞の前に現れる。音素目録は以下の通り; /p, b [mb], t, d [nd], k, q [ŋg], r, dr [nr], v [β], f, c [ð], j [tʃ], z [ndʒ], m, n, g [ŋ], l, w, y, a, e, i, o, u/. 母音は長短の別があり, 長母音はマクロンで示す。コンサルタントはフィジー語母語話者である LG 氏 (1962 年生まれ, 男性) である。

2. データ

略語は The Leipzig Glossing Rules に基づく。

(1)-(2) のように譲渡不可能名詞の所有者は接尾辞で標示される。(1a) と (2a) は, それぞれ「彼の眼は青い」や「彼女の髪は長い」といった表現となる。

(1) a. あの人は青い目をしている

E karakarawa na yaloka ni mata-na na tagane
3SG blue ART egg of eye-3SG ART man

b. 青い目の人・目が青い人

na tagane yaloka ni mata karakarawa
ART man egg of eye blue



本稿の著作権は著者が保持し, クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

(2) a. あの女 {は／の} 髪が長い・あの女は長い髪をしている

E balavu na drau ni ulu-na na yelewa
3SG long ART hair of head-3SG ART woman

b. 長い髪的女人・髪が長い女

na yalewa drau ni ulu balavu
ART woman hair of head long

接頭辞 *vaka-* (軟口蓋音が後続する際は *vā-*) は名詞に付いて形容詞を派生する。(3) は「髭持ちの」といった意味合いである。

(3) a. あの人には髭がある

E vā-kumi na tagane
3SG ADJ-beard ART man

b. 髭の男

na tagane vā-kumi
ART man ADJ-beard

(4)-(7) では所有構文が用いられず、動詞文や形容詞文が用いられる。

(4) a. あの人は芸術を見る目がある

E talei-taka na art na tagane
3SG admire-TR ART art ART man

b. 芸術を見る目のある人

na tagane e talei-taka na art
ART man 3SG admire-TR ART art

(5) a. あの人は22歳だ

E yabaki 22 na tagane
3SG year 22 ART man

b. 22歳の人

na tagane yabaki 22
ART man year 22

(6) a. あの人は優しい性格だ

E dau vei-kauwai-taki na tagane
3SG HAB COLL-care.about-TR ART man

b. 優しい性格の人

na tagane dau vei-kauwai-taki
ART man HAB COLL-care.about-TR

(7) a. あの人は背が高い

E balavu na tagane
3SG long ART man

b. 背の高い人

na tagane balavu
ART man long

(8) は文字通りには「彼の長さは 1.9 メートルだ」となる。このように数詞が述語となる所有表現はフィジー語で頻繁に観察される (cf. (15), (16)).

(8) あの人は背が 190 センチもある

E 1.9 metres na ke-na balavu
3SG 1.9 meter ART CLF-3SG long

(9)-(11) では所有構文ではなく、形容詞文となっている。

(9) a. その石は四角い形をしている

E square na vatu
3SG square ART rock

b. 四角い (形の) 石

na vatu square
ART rock square

(10) a. あの人には才能がある

E lomakasa na tagane
3SG intelligent ART man

b. 才能のある人

na turaga lomakasa
ART man intelligent

(11) a. あの人は病気だ

E tauvimate toko na tagane
3SG sick DUR ART man

b. 病気の人

na tagane tauvimate
ART man sick

(12b), (13) (14) は「～持ちの」で表されている。

(12) a. あの人は青い服を着ている

E sulu-ma na isulu karakarawa
3SG dress-TR ART clothes blue

b. 青い服の男

na tagane vaka-isulu karakarawa
ART man ADJ-clothes blue

(13) a. あの人はメガネをかけている

E vaka-matailoilo tiko na tagane
3SG ADJ-glass DUR ART man

b. メガネの男

na tagane vaka-matailoilo
ART man ADJ-glass

(14) a. あの人には妻がいる

E vaka-wati na tagane
3SG ADJ-spouse ART man

b. 既婚の人・妻のいる人

na tagane vaka-wati
ART man ADJ-spouse

(15)-(16) では数詞が述語となっている所有表現である.

(15) a. あの人には3人子供がいる

E tolu na luve-na na tagane
3SG three ART child-3SG ART man

b. 3人の子持ちの人

na tagane vaka-wati ka tolu na luve-na
ART man ADJ-spouse and three ART child-3SG

(16) タコには足が8本ある

E walu na iqaqalo ni kuita
3SG eight ART arm of octopus

(17) のようにフィジー語の叙述所有には *tiko* 「ある, いる」のような存在動詞もよく用いられる. ゆえに所有表現は存在表現と連続している. 所有者は「～に…がある」のように場所扱いとなるか, 「～の…がある」のように属格で現れる.

(17) a. その飲み物にはアルコールが入っている

E tiko na alcohol e na gunu
3SG stay ART alcohol in ART drink

b. アルコール入りの飲み物

na gunu vaka-alcohol
ART drink ADJ-alcohol

(18)-(19) では接頭辞 *vaka-/vā-* が用いられ, 「～持ちの」という表現になっている.

(18) a. あの人はお金を持っている

E levu no-na ilavo na tagane / E vaka-ilavo na tagane
3SG big CLF-3SG money ART man 3SG ADJ-money ART man

b. お金持ちの人

na tagane vaka-ilavo
ART man ADJ-money

(19) a. おまえのところには犬がいるか?

O vā-kolī?
2SG ADJ-dog

b. 犬のいる人

na tagane vā-kolī
ART man ADJ-dog

(20)-(21) では所有者が属格表現で現れ, 「～の…がある」のようになっている. (21) のような一時所有の場合, 所有者を前置詞句で表す処格所有も用いられる (21') (岡本 2019).

(20) a. おまえは (自分の) ペンを持っているか?

E dua no-mu peni?
3SG one CLF-2SG pen

b. ペンを持っている人

na tagane vaka-peni
ART man ADJ-pen

(21) あの人は (誰か別の人の) ペンを持っている

E tiko no-na peni na tagane
3SG stay CLF-3SG pen ART man

(21') 私は彼のペンを (誰か別の人の) 持っている

E tiko vei au na peni
3SG stay to 1SG ART pen

(22)-(23) では所有構文ではなく形容詞文が用いられる.

(22) a. あの人は運がいい

E kalougata na tagane
3SG blessed ART man

b. 幸運な人

na tagane kalougata
ART man blessed

(23) a. ここは石が多い

E levu na vatu e na vanua qō
3SG big ART stone in ART land this

b. 石の多い土地

na vanua levu na vatu
ART land big ART stone

先に述べたように、フィジー語の所有表現と存在表現は連続している (24)-(26). (25b) のように、関係節の被修飾語が周辺項相当の場合、*kina* という語が関係節内に義務的に現れる。

(24) a. その部屋には椅子が3つある

E tolu na idabadabe e na rumu
3SG three ART chair in ART room

b. 3つ椅子のある部屋

na rumu ka tolu na ke-na idabedabe
ART room REL three ART CLF-3SG chair

(25) a. テーブルの上にスプーンがある

E dua na itaki e dela ni teveli
3SG one ART spoon in top of table

b. スプーンのあるテーブル

na teveli ka toka kina na itaki
ART table REL be.placed RES ART spoon

(26) a. そのスプーンはテーブルの上にある

Na itaki e dela ni teveli
ART spoon in top of table

b. テーブルにあるスプーン

Na itaki e dela ni teveli
ART spoon in top of table

(27a) は「私の」「ジョンの」が述語である名詞述語文となっている。

(27) a. そのペンは私のだ／そのペンはジョンのだ

Na peni e no-qu / Na peni e ne-i Jone
ART pen 3SG CLF-1SG ART pen 3SG CLF-of John

b. 私のペン／太郎のペン

no-qu peni / na peni ne-i Jone
CLF-1SG pen ART pen CLF-of John

(28) では数詞 *dua* 「一」が述語として用いられ、「火事が一つある」「やることが一つある」のような

表現になっている。

- (28) a. 昨日, 学校で火事があった

E dua na kama e koronivuli enanoa
 3SG one ART in school yesterday

- b. 私は明日用事があります

E dua tiko na kā au na caka-va nimataka
 3SG one DUR ART thing 1SG FUT do-TR tomorrow

存在の否定には否定動詞 *sega* が用いられる (29).

- (29) (この世には) お化けなんていない

E sega na yalo e na vuravura qō
 3SG NEG.V ART sprit in ART world this

(30)-(31) では *sō* 「いくらかの」が述語として現れている。

- (30) (そこには) 英語を話す人もいるが, 話さない人もいる

E sō e vosa vaka-vāvālagi ka so e sega
 3SG several 3SG speak ADJ-English and several 3SG NEG.V

- (31) 私より英語ができる人は (ほかに/もっと) います

E so e vosa vaka-vāvālagi vinaka sara mai vei au
 3SG several 3SG speak ADJ-English good very from 1SG

(32) のような抽象的な所有も存在動詞 *tiko* が用いられる。

- (32) ちょっとあなたにお願いがあります

E tiko e dua na kā au na kere-a mo caka-va
 3SG stay 3SG one ART thing 1SG FUT beg-TR SUB.2SG do-TR

(33) では所有構文ではなく前置詞が用いられている。

- (33) a. 冬の雨 b. スバの家

uca e na vula i liliwa na vale e Suva
 rain in ART month of cold ART house in Suva

(34) は所有表現で表され, 特に所有者が普通名詞の場合前置詞 *ni* が用いられる。

- (34) a. 彼の泳ぎ/犬の鳴き声/火山の爆発

no-na qalo / na kodro~kodoro ni kolī / kacabote ni ulunivanua kama
 CLF-3SG swim ART RED~bark of dog explode of mountain burn

b. 車の運転

na draiva ni motokā
ART drive of car

c. ジョンの小説

na italanoa ne-i Jone
ART story CLF-of John

固有名詞の親族名称は接尾辞 *-i* が被所有名詞句に付加される (35a). フィジー語に「トコロ性」はなさそうである (35b). (36c) では所有構文は用いられない.

(35) a. ジョン (固有名詞) のお母さん

tina-i Jone
mother-of John

b. 机の横に／机の前に／*机に (来て！)

lako mai ki { na yasa ni teveli / na mata ni teveli / na teveli }
go hither to ART side of table ART front of table ART table

c. あの人の次

vōlekati koya
near.to 3SG

(36) では *ni* が用いられるか, 形容詞が用いられている.

(36) a. バラの花びら

sē ni rosi
petal of rose

c. 紙の飛行機

waqavuka buli e na veva
airplane make in ART paper

e. 花の匂い

iboī ni sēnikau
smell of flower

g. 英語の先生

qasenivuli ni vosa vaka-vāvālagi
teacher of speech ADJ-English

i. 雨の日

sigā uca~uca
day RED~rain

b. 果物のナイフ

isele ni vuanikau
knife of fruit

d. 花の絵【内容】

iyaloyalo ni sēnikau
picture of flower

f. 英文の手紙

ivola vola-i vaka-vāvālagi
letter write-PASS ADJ-English

h. 泉の水

wai mai na tovure
water from ART spring

(37) のような同格は並置によって表される.

(37) 妹のメアリー／上司のジョン

na taci-qu ko Meri / no-qu iliuliu ko Jone
ART younger.sibling-1SG PRP Mary CLF-1SG leader PRP Jone

(38) のように所有構文を重ねて表す表現も可能である。

(38) となりの家の友達のお父さんの車のドア

katuba ni motokā ne-i tama-i no-qu itau ka tiko vōlekati au
door of car CLF-of father-of CLF-1SG friend REL stay near.to 1SG

略語一覧 (The Leipzig Glossing Rules にないもの)

COLL collective
HAB habitual
NEG.V negative verb
PRP proper article
RED reduplication

参考文献

岡本進. 2019. 「フィジー語の叙述所有について」『日本言語学会第 158 回大会予稿集』, pp.246-252.

執筆者連絡先 : susumu.okamoto415@gmail.com

原稿受理 : 2021 年 1 月 17 日

<特集「受動表現」>

グイ語資料：受動表現

G|ui data: passive

加藤 幹治¹, 大野 仁美², 中川 裕³

Kanji Kato, Hitomi Ono, Hiroshi Nakagawa

¹ 東京外国語大学大学院総合国際学研究所

² 麗澤大学外国語学部

³ 東京外国語大学大学院総合国際学研究院

Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

Faculty of Foreign Studies, Reitaku University

School of Language and Cultural Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨：『語研論集』特集 14 号の「受動表現」の調査票を用いて面談調査により収集した、コエ・クワディ語族グイ語の資料を提示する。

Abstract: This article provides G|ui data collected by using the questionnaire “Passive” designed by Shinjiro Kazama.

キーワード：コイサン諸語, 受動態

Keywords: Khoisan, passive

1. はじめに

この報告は『語研論集』特集 14 号の「受動表現」の調査票に基づくグイ語 (G|ui) 資料収集の結果を提示する。グイ語は、カラハリ言語帯 (コイサンの名でも知られる言語地域)、コエ・クワディ語族、南西カラハリ・コエ語派ガナ語群に属し、ボツワナ共和国ハンシー県・クエネング県で話される。話者数は約 800 人と推定される (Nakagawa 2006)。

資料収集手順は次の通りである。まず、調査票に列記された項目の日本語文に対応するグイ語訳暫定案を中川裕が作成し、それをもとに大野仁美と中川が母語話者 2 人との面談調査により、実際の適格なグイ語文およびそれに類似・関連する文などの資料を引き出し記録した。面談はグイ語で行った。次いで、加藤幹治が、その記録を集約し、中川が編纂中のグイ語辞書および文法的形態素リストを用いて、形態素ごとに逐語訳がなされた例文へ整形した上で、全体的な文書作成を行った。なお、調査票の項目の日本語表現に含まれる、グイ語の社会的文脈に馴染まない単語は適宜入れ替えを行った。

次節の記述では、同調査票で用いられた項目の順序になるべく従って資料を配列する。グイ語表示は音韻論的妥当性を満たす簡略音声表記であり、記号は IPA に基づく。なお、この研究は JSPS 科研費の助成を受けている (課題番号: 16H01925, 18H00661, 18K18500, 18KK0006, 18K00582, 19H01264, 20H00011)。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

2. 資料

この節でグロスに用いる略号は以下のとおりである。

ACC = accusative, ADVLZ = adverbializer, ASSOC = associative, C = common (男性と女性を含む), F = feminine, GEN = genitive, IPFV = imperfective, JUNCT = juncture (複合節における非末動詞を作る形態素), M = masculine, NEG = negative, NOM = nominative, P.N. = proper noun, PASS = passive, PL = plural, PRF = perfect, PROH = prohibitive, PST.N = 昨夜過去, QUOT = quotative, REFL = reflexive, SG = singular.

なお、表示を簡潔にするために、英単語で性数格が十分に伝わる場合は、略号の組み合わせの代わりに英単語を用いている。

- (1) Takada=bì Dzérò=m̃ kà ||qχ'ám-ʔè
P.N.=3M.SG.NOM P.N.=3M.SG.GEN by hit-PASS
高田は二郎に殴られた。

受身は動詞拡張辞-ʔè で表す。ただし完了の-hā がつく場合は、-sā を使う。例 (35)・(38)・(41) 参照。

- (2) *Takada=bì Dzérò=m̃ kà ʔàm ŋ!àrè=sà jíà-ʔè
P.N.=3M.SG.NOM P.N.=3M.SG.GEN by 3M.SG.GEN foot=3F.SG.ACC step.on-PASS
(非文) 高田は二郎に足を踏まれた。

- (3) Takada=bì Dzérò=m̃ kà jíà-ʔè
P.N.=3M.SG.NOM P.N.=3M.SG.GEN by step.on-PASS
高田は二郎に足を踏まれた。

- (4) Dzérò=bì Takada=mà jíà
P.N.=3M.SG.NOM P.N.=3M.SG.ACC step.on
二郎は高田を踏んだ。

- (5) Takada=bì Dzérò=m̃ kà jíà-ʔè ʔàm ŋ!àrè-ʔò wà
P.N.=3M.SG.NOM P.N.=3M.SG.GEN by step.on-PASS 3M.SG.GEN foot-place in
高田は二郎に足を踏まれた (高田は二郎に踏まれた, 足を)。

- (6) Takada=bì Dzérò=m̃ kà jíà-ʔè ʔàm kà ŋ!àrè=sì
P.N.=3M.SG.NOM P.N.=3M.SG.GEN by step.on-PASS 3M.SG.GEN by foot=3F.SG.GEN
ʔò wà
place in
高田は二郎に足を踏まれた (高田は二郎に踏まれた, 足を)。

- (7) Dzérò=bì Takada=m̃ ŋ!àrè jíà
P.N.=3M.SG.NOM P.N.=3M.SG.GEN foot step.on
二郎は高田の足を踏んだ。

身体の一部に受けた動作に対する受動文として、人を主語にした「A が B に (よって) 身体の一部を ~される」という文は作成することができない。

(8) cī g||àē=sì kà mārī=sì |úá=m̄ kà ts'áá-ʔè
 1SG.GEN wife=3F.SG.GEN of money=3F.SG.NOM child=3M.SG.GEN by steal-PASS
 私の妻は少年に金を盗まれた (lit. 私の妻の金は少年に盗まれた).

(9) cī g||àē=sì |úá=m̄ kà ts'áá-ʔè
 1SG.GEN wife=3F.SG.NOM child=3M.SG.GEN by steal-PASS
 妻は少年に盗まれた (何かを).

(10) |úá=bì cì g||àē=sì kà mārī=sà ts'áá
 child=3M.SG.NOM 1SG.GEN wife=3F.SG.GEN of money=3F.SG.ACC steal
 少年は妻の金を盗んだ.

(11) *cī g||àē=sì |úá=m̄ kà ts'áá-ʔè mārī=sì kà
 1SG.GEN wife=3F.SG.NOM child=3M.SG.GEN by steal-PASS money=3F.SG.GEN with
 (非文) 妻は少年に金を盗まれた.

(12) *cī g||àē=sì |úá=m̄ kà ts'áá-ʔè mārī=sì ʔò
 1SG.GEN wife=3F.SG.NOM child=3M.SG.GEN by steal-PASS money=3F.SG.GEN place
 wà
 in
 (非文) 妻は少年に金を盗まれた.

mārī=sì ts'áá-ʔè |úá=m̄ kà cī g||àē=sì ʔò wà money 3F.SG.NOM steal PASS child 3M.SG.GEN of 1SG.GEN
 wife 3F.SG.GEN place in 金は子供のもので，妻のところで盗まれた（「金は子供によって盗まれた」と
 は解釈できない）．受動文の動作主を表す形式と所有を表す形式とが同一のため，「子供によって妻の
 ところで金が盗まれた」という文を作成しようとしてもこのような解釈になる．

(13) !χāē=sì kà cī |úá=bì ŋ|ī qχ'áē cìrè jā cúá
 night=3F.SG.GEN at 1SG.GEN child=3M.SG.NOM PST.N cry I and NEG
 c'úí-sī ||ʔúúm
 be.good-ADV LZ sleep

昨夜，私は赤ん坊に泣かれた．それでちっとも眠れなかった（昨夜子供が泣いた，私はよく
 寝なかった）．

(14) *cìrè |úá=m̄ kà qχ'áē-ʔè
 I child=3M.SG.GEN by cry-PASS
 私は赤ん坊に泣かれた（私は子供によって泣かれた）．

日本語に見られるような自動詞からの間接受身は作ることができない．ただし以下のような表現が存
 在することを記録しておく．

(15) qχ'áē-|χàè
 cry-for
 何かを欲しがってなく

- (16) |úá=bì ŋ|ĩ cíā qχ'áē-|χàè
 child=3M.SG.NOM PST.N me cry-for
 赤ん坊は（行こうとする）私を求めて泣いた（一緒に行きたい，行かずにいてほしい）。
- (17) cìrè ŋ|ĩ |úá=m̄n kà qχ'áē-|χàè-ʔè
 1SG.NOM PST.N child=3M.SG.GEN by cry-for-PASS
 昨夜，私は赤ん坊に（求められ）泣かれた。
- (18) qχ'áē-qχ'àì
 cry-to.see
 ～を見て泣く（e.g. 子供が知らない人を見て怖がって泣く，大人でも長年会ってない人に会って泣く）
- (19) cìrè |úá=m̄n kà qχ'áē-qχ'àì-ʔè
 I child=3M.SG.GEN by cry-to.see-PASS
 私は子供に泣かれた（怖がられて）。
- (20) iiχo=sà tsĩ cì qχ'áē-ʔō
 what=3F.SG.ACC 2M.SG.NOM IPFV cry-for
 何を泣いているのか？
- (21) cìrè cì cĩ ||ũũ=mà qχ'áē-ʔō
 I IPFV 1SG.GEN parent=3M.SG.ACC cry-about
 お父さんのことで泣いている。
- (22) cìrè cì cĩ ||ũũ=mà qχ'áē-|χàè
 I IPFV 1SG.GEN parent=3M.SG.ACC cry-for
 お父さんと一緒に行きたくて泣いている。
- (23) cìrè cì cĩ ||ũũ=mà qχ'áē-qχ'àì
 I IPFV 1SG.GEN parent=3M.SG.ACC cry-to.see
 お父さんを見て泣いている（不吉な理由 dziũ で）。
- (24) ʔàbì cì ʔàm̄n ||ũũ=mà qχ'áē-ʔō
 he IPFV 3M.SG.GEN parent=3M.SG.ACC cry-about
 彼は彼のお父さんのことで泣いている。
- (25) *ʔàm̄n ||ũũ=bì qχ'áē-ʔō-ʔè
 3M.SG.GEN parent=3M.SG.NOM cry-about-PASS
 （非文）「彼のお父さんは（自分のことで）泣かれている」とはできない。
- (26) ʔàbì cì †ʔúúχò=sà qχ'áē-ʔō
 he IPFV food=3F.SG.ACC cry-about
 彼は食べ物の中で泣いている。

- (27) †ʔúúχò=sì cì ʔàm kà qχ'áē-ʔō-ʔè
 food=3F.SG.NOM IPFV 3M.SG.GEN by cry-about-PASS
 食べ物は彼によって泣かれている。
- (28) Takada=bì †ʔúúχò=sì |χàè qχ'áē
 P.N.=3M.SG.NOM food=3F.SG.GEN for cry
 高田は食べ物を求めて泣いた。
- (29) Takada=bì †ʔúúχò=sà qχ'áē-|χàè
 P.N.=3M.SG.NOM food=3F.SG.ACC cry-for
 高田は食べ物を求めて泣いた。
- (30) ʔàri qábā=m̄ ŋ!úú=mà ||ʔān̄
 they new=3M.SG.GEN hut=3M.SG.ACC build
 彼らは新しい小屋をたてた。
- (31) qábā=m̄ ŋ!úú=bì cì ʔàn kà ||ʔān̄-ʔè
 new=3M.SG.GEN hut=3M.SG.NOM IPFV 3C.PL.GEN by build-PASS
 新しい小屋が人々によって建てられている最中だ。
- (32) New Xade=sì wà g|úí-qχ'úí=sì cì qχ'úí-ʔè
 New Xade=3F.SG.GEN in G'ui-language=3F.SG.NOM IPFV speak-PASS
 ニューカデ（村）ではグイ語が話されている。
- (33) †χájá=sà k^hóè=bì ŋ!úú=m̄ ||χàrà |χàè †éé
 paper=3F.SG.ACC person=3M.SG.NOM hut=3M.SG.GEN side on hang;JNCT
 cíēχōrō-hā
 put;JNCT-PRF
 (人が) 壁に絵を掛けてある。
- (34) †χájá=sì k^hóè=m̄ kà ŋ!úú=m̄ ||χàrà |χàè †éé
 paper=3F.SG.NOM person=3M.SG.GEN by hut=3M.SG.GEN side on hang;JNCT
 cíēχò-sā-hā
 put-PASS(REFL;JNCT)-PRF
 壁に絵が (人によって) 掛けられている。
- (35) †χájá=sì ŋ!úú=m̄ ||χàrà |χàè †éé-sī cì
 paper=3F.SG.NOM hut=3M.SG.GEN side on hang-ADVLZ be.standing
 絵が壁にかかっている。
- (36) ʔàbì ʔàm kà g||àēkò=sà g||āmā-hā
 he 3M.SG.GEN of wife=3F.SG.ACC love;JNCT-PRF
 彼は彼の妻を愛している。

(37) ʔàm kà g||àèkò=sì ʔàm kà g||àm-sā-hā
 3M.SG.GEN of wife=3F.SG.NOM 3M.SG.GEN by love-PASS(REFL;JNCT)-PRF
 彼の妻は（彼に）愛されている。

(38) ʔàm kà g||àèkò=sì ʔàm kà g||àm-ʔè
 3M.SG.GEN of wife=3F.SG.NOM 3M.SG.GEN by love-PASS
 彼の妻は（彼に）愛されている。

ŋ|ì=sì †ʔúúχò=sì χà g||àm -ʔè g|úí -kò χà=ñ kà this 3F.SG.GEN food 3F.SG.NOM may love PASS G|ui
 person ASSOC=3C.PL.GEN by この食べ物はグイの間で好まれそうだ。

(39) ŋ|ì=sì †ʔúúχò=sì g||àm-sā-hā g|úí-kò
 this=3F.SG.GEN food=3F.SG.NOM love-PASS(REFL;JNCT)-PRF G|ui-person
 χà=ñ kà
 ASSOC=3C.PL.GEN by
 この食べ物はグイの間で好まれている。

(40) ŋ|ì=sì †ʔúúχò=sì New Xade=sì wà
 this=3F.SG.GEN food=3F.SG.NOM New Xade=3F.SG.GEN in
 g||àm-sā-hā
 love-PASS(REFL;JNCT)-PRF
 この食べ物はニューカデ（村）で好まれている。

(41) cìrè cì ʔàm kà míí qχ'áà-cī
 I IPFV 3M.SG.GEN to say drink-PROH
 私は彼に「飲むな」と言っている (lit. 私は彼に言っている, 「飲むな」).

(42) qχ'áà-cī cà cìrè cì ʔàm kà míí
 drink-PROH QUOT I IPFV 3M.SG.GEN to say
 「飲むな」と私は彼に言っている。

(43) cìrè cì qχ'áà-cī cà ʔàm kà míí
 1SG.NOM IPFV drink-PROH QUOT 3M.SG.GEN to say
 私は「飲むな」と彼に言っている。

(44) cìrè cì ʔàmà bóōrī jā cì míí qχ'áà-cī
 I IPFV 3M.SG.ACC tell and IPFV say drink-PROH
 私は「飲むな」と彼に言っている (lit. 彼に伝えて, 「飲むな」と言っている)。

(45) Sugawara=bì cì cía bóōrī-ʔè cìrè jā cì míí qχ'áà-cī címā
 P.N.=3M.SG.NOM IPFV 1SG.ACC tell-PASS I and IPFV say drink-PROH but
 ʔàbì cì cúá kúm
 he IPFV NEG listen

菅原は私から「飲むな」と言われたのに，聞かない。(lit. 菅原は言いつけられて，(それを聞いた) 私は彼に飲むなと言っているが，彼は聞かない.)

「～に～と言う」を表す動詞 *míí* は受身にならない (他動詞ではない).

- (46) Keexa=bì Meme=sì kà ʰí-ʔè jā ʔēsì dā sí jā
P.N.=3M.SG.NOM P.N.=3F.SG.GEN by call-PASS and 3F.SG.GEN to go and
ʔēsì dā háá̃
3F.SG.GEN at be

ケーハはメメに呼ばれて，(メメのところに) 行っている.

- (47) Meme=sì Keexa=mà ʰí ʔàbì jā sí jā ʔēsì dā háá̃
P.N.=3F.SG.NOM P.N.=3M.SG.ACC call he and go and 3F.SG.GEN at be

メメがケーハを呼んで，彼は今彼女のところに行っている.

参考文献

Nakagawa, Hirosi (2006) |Gui dialects and |Gui-speaking communities before the relocation from the CKGR. *Pula: Botswana Journal of African Studies*, 20(1): 42–52.

執筆者連絡先: jiateng.ganzhi@gmail.com (加藤幹治), ono@reitaku-u.ac.jp (大野仁美), nhirosi@tufs.ac.jp (中川裕)

原稿受理日: 2020年12月1日

<特集「アスペクト」>

グイ語資料：アスペクト G|ui data: aspect

加藤 幹治¹, 大野 仁美², 中川 裕³
Kanji Kato, Hitomi Ono, Hiroshi Nakagawa

¹ 東京外国語大学大学院総合国際学研究所

² 麗澤大学外国語学部

³ 東京外国語大学大学院総合国際学研究院

Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

Faculty of Foreign Studies, Reitaku University

School of Language and Cultural Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨：『語研論集』特集 15 号の「アスペクト」の調査票に基づき収集した、コエ・クワディ語族グイ語の資料を提示する。

Abstract: This article provides G|ui data collected by using the questionnaire “Aspect” designed by Shinjiro Kazama.

キーワード：コイサン諸語, アスペクト

Keywords: Khoisan, aspect

1. はじめに

この報告は『語研論集』特集 15 号の「アスペクト」の調査票に基づくグイ語 (G|ui) 資料収集の結果を提示する。グイ語は、カラハリ言語帯 (コイサンの名でも知られる言語地域)、コエ・クワディ語族、南西カラハリ・コエ語派ガナ語群に属し、ボツワナ共和国ハンシー県・クエネング県で話される。話者数は約 800 人と推定される (Nakagawa 2006)。

資料収集手順は次の通りである。まず、調査票に列記された項目の日本語文に対応するグイ語訳暫定案を中川裕が作成し、それをもとに大野仁美と中川が母語話者 2 人との面談調査により、実際の適格なグイ語文およびそれに類似・関連する文などの資料を引き出し記録した。面談はグイ語で行った。次いで、加藤幹治が、その記録を集約し、中川が編纂中のグイ語辞書および文法的形態素リストを用いて、形態素ごとに逐語訳がなされた例文へ整形した上で、全体的な文書作成を行った。なお、調査票の項目の日本語表現に含まれる、グイ語の社会的文脈に馴染まない単語は適宜入れ替えを行った。

次節の記述では、同調査票で用いられた項目の順序になるべく従って資料を配列する。グイ語表示は音韻論的妥当性を満たす簡略音声表記であり、記号は IPA に基づく。なお、この研究は JSPS 科研費の助成を受けている (課題番号: 16H01925, 18H00661, 18K18500, 18KK0006, 18K00582, 19H01264, 20H00011)。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

2. 資料

この節でグロスに用いる略号は以下のとおりである。

ACC = accusative, ASSOC = associative, C = common (男性と女性を含む), COP = copula, EMPH = emphatic, F = feminine, FUT.1 = 今日未来, FUT.2 = 明日未来, GEN = genitive, INCL = inclusive, IPFV = imperfective, IRR = irrealis, JUNCT = juncture (複合節における非末動詞を作る形態素), M = masculine, NEG = negative, NOM = nominative, P.N. = proper noun, PASS = passive, PFV = perfective, PL = plural, PRF = perfect, PROG = progressive, PST.1 = 今日過去, PST.2 = 昨日過去, PST.3 = 遠過去, PST.N = 昨夜過去, REFL = reflexive, SG = singular.

なお、表示を簡潔にするために、英単語で性数格が十分に伝わる場合は、略号の組み合わせの代わりに英単語を用いている。

- (1) kééχà=bì †ʔāā̄ (k^hā) àà
P.N.=3M.SG.NOM already EMPH come
ケーハはすでに来た。

グイ語はアスペクトを表す一連の不変化詞を有するが、それらは全て不完結相 (imperfective) の意味を有する。完結相 (perfective) はアスペクト詞の不使用・無標で示される。時制もまた一連の不変化詞で表され、時制詞とアスペクト詞は共起可能である。

- (2) ʔā=ɪ̀n k^hóè=bì †ʔāā̄ (k^hā) àà
that=3M.SG.GEN person=3M.SG.NOM already EMPH come
あのひとはすでに来た。

- (3) kééχà=bì qχ'ájà àà
P.N.=3M.SG.NOM long.ago come
ケーハはだいぶん前に来た。

- (4) ʔā=ɪ̀n k^hóè=bì qχ'ájà àà
that=3M.SG.GEN person=3M.SG.NOM long.ago come
あのひとはだいぶん前に来た。

- (5) kééχà=bì cūū̄ cì àà
P.N.=3M.SG.NOM already IPFV come
ケーハはすでによく来るようになっている。

- (6) ʔā=ɪ̀n k^hóè=bì cūū̄ cì àà
that=3M.SG.GEN person=3M.SG.NOM already IPFV come
あのひとはすでによく来るようになっている。

- (7) kééχà=bì kōōkā àà-c^hīmā
P.N.=3M.SG.NOM yet come-NEG
ケーハはまだ来ていない。

(8) ?ā=ɪ̃m k^hóè=bì kōōkā àà-c^hīmā
 that=3M.SG.GEN person=3M.SG.NOM yet come-NEG
 あのひとはまだ来ていない。

(9) kééχà=bì cì sūũ k^hā àà
 P.N.=3M.SG.NOM IPFV soon EMPH come
 ケーハはもうすぐ来る。

(10) ?ā=ɪ̃m k^hóè=bì cì sūũ k^hā àà
 that=3M.SG.GEN person=3M.SG.NOM IPFV soon EMPH come
 その男はもうすぐ来る。

「もう(すぐ)来る」, すなわちその動作はまだ実現していないが, 実現直前である場合も *imperfective* のアスペクト詞を用いる。(11)と(12)に例示する通り, アスペクト詞を使用しなければ完結相となり, その動作がすぐに実現したこと(「これから実現する」ではなく)を表す。

(11) kééχà=bì ∅ sūũ (k^hā) àà
 P.N.=3M.SG.NOM PFV soon EMPH come
 ケーハはすぐに来た(そして今ここにいる)。(perfective ∅)

これはアスペクト詞が用いられていない完結相の例である。アスペクト詞の不在(結果として完結相形となる)を明示するために ∅ を入れてある。下の例も同様。

(12) ?ā=ɪ̃m k^hóè=bì ∅ sūũ (k^hā) àà
 that=3M.SG.GEN person=3M.SG.NOM PFV soon EMPH come
 その男はすぐに来た(そして今ここにいる)。(perfective ∅)

この(12)の文の ∅ の位置に IPFV の cì を入れると「すぐに来る」の意味になる。例(13)のように時制詞がある場合も, アスペクト詞がなければアスペクトは完結相である。

(13) ?àbì ɲjĩ ∅ k^hā !úù cí mā sūũ (k^hā) àà
 he PST.N ∅ EMPH go but soon EMPH come
 今出て行ったけどすぐ来た。

(14) kééχà=bì hĩ sūũ (k^hā) àà
 P.N.=3M.SG.NOM FUT.1 soon EMPH come
 ケーハはすぐに来る。

(15) ?ā=ɪ̃m k^hóè=bì hĩ sūũ (k^hā) àà
 that=3M.SG.GEN person=3M.SG.NOM FUT.1 soon EMPH come
 あの男はすぐに来る。

今日未来の hĩ と perfective の組み合わせは可能。hĩ と imperfective の cì は共起不可(以下(16)(17)を参照)。

(16) *kééχà=bì hī cì sūū k^hā àà
 P.N.=3M.SG.NOM FUT.1 IPFV soon EMPH come
 ケーハはすぐに来るところだ (非文).

(17) *ʔā=m̄n k^hóè=bì hī cì sūū k^hā àà
 that=3M.SG.GEN person=3M.SG.NOM FUT.1 IPFV soon EMPH come
 その男はすぐに来るところだ (非文).

日本語の「(あ!) ~さんが来た!」という、その人が来るのに気づいた場面での発話、すなわち、その人が (まだ話者のところには到達していないが) こちらに向かっているところを見ての発話は、動作が移動しながら進行中であることを表すアスペクト詞 kùà を用いる。

(18) kééχà=bì kùà àà
 P.N.=3M.SG.NOM PROG come
 ケーハが来た (こちらに向かって近くまで移動してきている).

(19) ʔā=m̄n k^hóè=bì kùà àà
 that=3M.SG.GEN person=3M.SG.NOM PROG come
 あの男が来た (ふつう今来ているところを見たときに使う).

(20) kééχà=bì c^hū àà
 P.N.=3M.SG.NOM PST.2 come
 昨日ケーハが来た.

その動作が過去に生じたことを表すには、過去の時制詞を用いる。この例はアスペクト詞不使用なので、アスペクトは完結相である。

(21) ʔā=m̄n k^hóè=bì c^hū àà
 that=3M.SG.GEN person=3M.SG.NOM PST.2 come
 昨日あのひとが来た.

(22) kééχà=bì c^hū cúá àà
 P.N.=3M.SG.NOM PST.2 NEG come
 ケーハは来なかった.

(22) は意外性が感じられる。来ると言ったのに来なかったという否定の場合に cúá を使う。(23) を参照。

(23) kééχà=bì c^hū àà-c^hīmā
 P.N.=3M.SG.NOM PST.2 come-NEG
 ケーハは来なかった (意外性は感じられない).

(24) cìrè kì ʔáā=sì |χáā=sà qχ'ájà qχ'óō
 I PST.1 that=3F.SG.GEN meat=3F.SG.ACC already eat
 私はあの肉をもう食べた.

(25) cìrè ʔáá=sì |χáá=sà kōōkā qχ'óō-c^hīmā jā ŋ||áũ hī̄
 I that=3F.SG.GEN meat=3F.SG.ACC yet eat-NEG and later FUT.1
 ʔēsà qχ'óō
 3F.SG.ACC eat

私はあの肉をまだ食べていない，後で食べる。

(26) cìrè hī̄ ŋ|ĩŋʔúũkà cúá ŋ|ĩ=sì |χáá=sà qχ'óō jā hī̄
 I FUT.1 right.now NEG this=3F.SG.GEN meat=3F.SG.ACC eat and FUT.1
 k^háókà ʔēsà qχ'óō
 later 3F.SG.ACC eat

私はまだ今はこの肉を食べない，あとで食べる。

「まだ食べない」は，近い将来その動作を行わないということなので，今日未来の時制詞 hī̄を用いる。
 hī̄は2回必要で，2つ目は相対的時制。

(27) ʔàbì ŋ|ĩŋʔúũkà cì ŋ|ĩ=sì |χáá=sà qχ'óō
 he right.now IPFV this=3F.SG.GEN meat=3F.SG.ACC eat
 彼はいま肉を食べている。

動作が進行中であることを表すにはアスペクト詞 cì を用いる。なお，グイ語には進行を表すアスペクト詞は cì 以外に意味の異なる5種類がある。詳しくは，Nakagawa (2016) 参照。

(28) ŋ|úũ-qχ'ám=sì ||χórē-sā-hā
 hut-mouth=3F.SG.NOM open-PASS(REFL;JNCT)-PRF
 小屋のドアが開いている。

「ドアが開いている」のは，誰か，あるいは風などがドアを開けた結果の状態が続いているということなので，ドアを主語にした場合は，受身の完了 (perfect) の形式-sā-hā で表される。

(29) ŋ|úũ-qχ'ám=sì kì ||χórē-sā-hā cí mā ŋ|ĩŋʔúũkà ʔēsì
 hut-mouth=3F.SG.GEN PST.1 open-PASS(REFL;JNCT)-PRF but right.now 3F.SG.NOM
 ʔíqχ'àm-sā-hā
 close-PASS(REFL;JNCT)-PRF

小屋のドアは開いていたが，今はしまっている。

(30) cìrè cì òē |ám k^hā ts^háá=sà àrē
 1SG.NOM IPFV all day EMPH water=3F.SG.ACC fetch.water
 私は毎日水を汲んでいる。

アスペクト詞 cì は習慣・反復を表すのにも用いられる。

(31) tsī sīrī=sà ŋ|áē-hā
 2M.SG.NOM your.mother=3F.SG.ACC resemble;JNCT-PRF
 あなたはお母さんに似ている。

「似ている」は完了で表される。進行形は使えない。「だんだん似て来る」という内容は表現できない。また、似ていたのに今は違うとも言わない。

- (32) ʔēsì qχ'ò qχ'áòkò=mà sēē-hā cí mā ŋ|ĩŋ#úũkà qχ'áòkò=mà
 she PST.3 husband=3M.SG.ACC take;JNCT-PRF but right.now husband=3M.SG.ACC
 !qχ'ārē-hā
 lack;JNCT-PRF
 彼女は、かつては夫がいたが、今は夫がいない。

- (33) ʔēsì ŋ|ĩŋ#úũkà qχ'áò-ŋ|àwā-hā
 she right.now male-be.single;JNCT-PRF
 彼女は今夫がいない。

- (34) cìrè qχ'ò ||ò cì g'lúí=mà ||ʔáũ
 I PST.3 trait IPFV trap=3M.SG.ACC set
 かつては罾猟に行ったものだ。

「かつて～していた」という過去の習慣を表すには、遠過去時制とアスペクト詞 *cì* とを組み合わせる（なお、習慣を表すアスペクト詞と進行を表すアスペクト詞の意味的な違いについては大野 (2020) 参照）。

- (35) cìrè qχ'ò Māũ=sì wà !ūwā-hā
 1SG.NOM PST.3 P.N.=3F.SG.GEN in go;JNCT-PRF
 私はマウンに行ったことがある。

「経験」は完了で表す。進行を表すアスペクト詞は使わない。

- (36) báāsì=sì cì !úũ
 bus=3F.SG.NOM IPFV go
 バスが動き出した。

動作が開始直前であることもアスペクト詞 *cì* で表す。

- (37) báāsì=sì cì ŋ|ĩĩ-k^hā !úũ
 bus=3F.SG.NOM IPFV be.about.to-EMPH go
 まさに動こうとしている。(ずっと待っていて、エンジンがかかった。)(乗客の立場から。)

- (38) báāsì=sì !úũ
 bus=3F.SG.NOM go
 (バスに乗り遅れた人からみて) バスが出発した。

バスに乗り遅れた人が今出て行ってしまったバスを見ながらいう場合はアスペクト詞を用いない完結相である。

(39) ʔēsì c^hū ||ùì
 she PST.2 be.lying.down
 昨日彼女はずっと寝ていた。

(40) ʔēsì c^hū ||ùì-nā
 she PST.2 be.lying.down-state
 昨日彼女はずっと寝ていた（ある一定の時間）。

姿勢動詞の場合は，状態の継続を表すのに-nā を用いる。

(41) òē kámá kà
 all time at
 一日中／いつも

(42) ʔēsì c^hū cì òē kámá kà ||ùì
 she PST.2 IPFV all time at be.lying.down
 彼女は昨日あたりまで寝ていた（が今は寝てない）。

(43) ʔēsì c^hū k^húmá ||óé jā ||ùì |ám=bì jā ʔ^hēē
 she PST.2 in.the.morning lie and be.lying.down sun=3M.SG.NOM and set
 彼女は昨日朝から寝ていて，一日中寝続けた（寝ているうちに日が暮れた）。

(44) cìrè cì ʔēsà g|àà
 I IPFV 3F.SG.ACC try
 私はそれをちょっと食べて／使ってみた（lit. 試した）。

(45) cìrè cì ʔēsà kúm
 I IPFV 3F.SG.ACC try
 私はそれを味見する。

(46) *g|àà-tséékàχō
 try;JNCT-use
 （非文）g|àà jā ... tséékàχō

「試す」と「使う」を合わせて「試し使う」のようにはできない。「試して，そして使う」とする。

(47) ʔàbì cì ʔúúχò=dzì ʔànà g|óò
 he IPFV food=3F.PL.ACC 3C.PL.ACC share.with
 彼は食べ物を彼らに分け与える。

(48) ʔàbì cì ʔúúχò=dzì ʔànà χárō
 he IPFV food=3F.PL.ACC 3C.PL.ACC serve.for
 彼は食べ物を彼らに盛り分ける。

例 (47)・(48) のアスペクト詞 *ci* の代わりにアスペクト詞 *hā-ci* を使うと、長時間の繰り返しを意味する。

- (49) *cià* *!úù*
 1C.INCL.PL.IRR go
 さあ行くよ！

勧誘は 1 人称 inclusive の irrealis 形で示される。過去時制は用いない。

- (50) *!ám=sì* *ci* *‡qχ'úā jā* *ŋ!áé jā* *‡^hēē*
 sun=3F.SG.NOM IPFV appear and pass and set.down
 太陽は出て（天を）巡って沈む。

「恒常的な真理」のうち、恒常的な運動については、アスペクト詞 *ci* を用いる。

- (51) *!ám=sì* *ci* *‡qχ'úā jā* *ŋ!áé jā* *ci* *‡^hēē*
 sun=3F.SG.NOM IPFV appear and pass and IPFV set.down
 太陽は出て（天を）巡って沈む（2カ所に *ci* を使っても良い）。

- (52) *ĩĩ=bì* *ci* *|qχ'áé*
 tree=3M.SG.NOM IPFV fall.down
 木が今にも倒れそうだ。

その動作が起こる直前であることを表すのにもアスペクト詞 *ci* を用いる。

- (53) *ŋ|ĩĩ* *k^hā* *ĩĩ=bì* *ci* *|qχ'áé*
 eventually EMPH tree=3M.SG.NOM IPFV fall.down
 とうとう木は倒れ始めた (lit. 倒れ始めている)。

じきに倒れることがわかっている場合は副詞 *ŋ|ĩĩ-k^hā* を使う。

- (54) *cìrè sēmā* *k^hā* *|qχ'áé*
 I closely EMPH fall.down
 危うく転ぶところだった。

- (55) *cìrè* *chū* *sēmā* *k^hā* *||ʔóó*
 I PST.2 nearly EMPH die
 昨日死ぬところだった (死にそうになった)。

- (56) *cìrè* *ci* *ŋ|ĩ* *!ám* *kà* *páré=sà* *||ʔáĩ* *!ʔúú* *kà*
 I IPFV this day on bread=3F.SG.ACC buy tomorrow on
k^hôè-χà=rì *ʔūsì* *cíā* *jírá* *k^hùà*
 person-ASSOC=3C.PL.NOM FUT.2 me visit because
 明日客が来るので、私は今日パンを買っておく (lit. 買う)。

「～しておく」にあたる内容を意味するアスペクト表現はない。

(57) !ʔúū kà k^hóè-χà=rì ʔūsì cíā jírá k^hùà cìrè cì ŋǐ
 tomorrow on person-ASSOC=3C.PL.NOM FUT.2 me visit because I IPFV this
 |ám kà (ʔābāχō jā cì) páré=sà ||ʔáí
 day on (prepare and IPFV) bread=3F.SG.ACC buy
 明日客が来るので，(準備して)パンを買っておく (lit. 買う)。

(58) !ʔúū kà k^hóè-χà=rì ʔūsì cíā jírá cìrè jā cì ŋǐ |ám
 tomorrow on person-ASSOC=3C.PL.NOM FUT.2 me visit I and IPFV this day
 kà (ʔābāχō jā cì) páré=sà ||ʔáí
 on (prepare and IPFV) bread=3F.SG.ACC buy
 明日客が来る，(準備して)パンを買っておく (lit. 買う)。

(59) cìrè c^hū Māū=sì wà lúú jā ŋǐ=sì jùbē=sà ||ʔáí
 I PST.2 P.N.=3F.SG.GEN in go and this=3F.SG.GEN bag=3F.SG.ACC buy
 私は昨日マウンに行って，この袋を買った。

(60) cìrè c^hū Māū=sì kà !ʔúā (dā) ŋǐ=sì jùbē=sà ||ʔáí
 I PST.2 P.N.=3F.SG.GEN of before (to) this=3F.SG.GEN bag=3F.SG.ACC buy
 私は昨日マウンに行く前(途中)でこの袋を買った。

(61) cìrè ʔē !ʔánā-hā ʔàm c^hū ŋǐ=sì jùbē=sà
 I it know;JNCT-PRF 3M.SG.GEN PST.2 this=3F.SG.GEN bag=3F.SG.ACC
 Māū=sì wà ||ʔáí=sà ʔà
 P.N.=3F.SG.GEN in buy=3F.SG.ACC COP
 私は彼が市場でこの袋を昨日買ったのを知っている。

(62) cìrè ʔē !ʔánā-hā ʔàm χà ŋǐ=sì jùbē=sà
 I it know;JNCT-PRF 3M.SG.GEN can this=3F.SG.GEN bag=3F.SG.ACC
 Māū=sì wà ||ʔáí=sà ʔà
 P.N.=3F.SG.GEN in buy=3F.SG.ACC COP
 私は彼がこの袋を買うだろうこと(買いそうだということ)を知っていた。

(63) *cìrè c^hū ʔē !ʔánā-hā ʔàm c^hū ...
 I PST.2 it know;JNCT-PRF 3M.SG.GEN PST.2 ...
 非文

この場合，今日が12/31とすると，知っていたのは12/30で，彼が袋を買ったのは12/29となり非文。
 次の例も同様に非文。

(64) *cìrè c^hū ʔē !ʔánā-hā ʔàm qχ'ō ...
 I PST.2 it know;JNCT-PRF 3M.SG.GEN PST.3 ...
 非文

参考文献

Nakagawa, Hiroshi (2006) !Gui dialects and !Gui-speaking communities before the relocation from the CKGR, *Pula: Botswana Journal of African Studies*, 20(1): 42–52.

Nakagawa, Hiroshi (2016) The aspect system in Glui: with special reference to postural features. *African Study Monograph*, 52: 119–134.

大野仁美 (2020) 「グイ語における姿勢動詞の文法化」『言語と文明』18(1): 103–112. 麗澤大学大学院.

執筆者連絡先 : jiateng.ganzhi@gmail.com (加藤幹治), ono@reitaku-u.ac.jp (大野仁美),
nhiroshi@tufs.ac.jp (中川裕)

原稿受理日 : 2020年12月1日

<特集「モダリティ」>

グイ語資料：モダリティ G|ui data: modality

加藤 幹治¹, 大野 仁美², 中川 裕³
Kanji Kato, Hitomi Ono, Hiroshi Nakagawa

¹ 東京外国語大学大学院総合国際学研究所

² 麗澤大学外国語学部

³ 東京外国語大学大学院総合国際学研究院

Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

Faculty of Foreign Studies, Reitaku University

School of Language and Cultural Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨：『語研論集』特集 16 号の「モダリティ」の調査票に基づき収集した、コエ・クワディ語族グイ語の資料を提示する。

Abstract: This article provides G|ui data collected by using the questionnaire “Modality” designed by Shinjiro Kazama.

キーワード：コイサン諸語, モダリティ

Keywords: Khoisan, modality

1. はじめに

この報告は『語研論集』特集 16 号の「モダリティ」の調査票に基づくグイ語 (G|ui) 資料収集の結果を提示する。グイ語は、カラハリ言語帯 (コイサンの名でも知られる言語地域), コエ・クワディ語族, 南西カラハリ・コエ語派ガナ語群に属し, ボツワナ共和国ハンシー県・クエネング県で話される。話者数は約 800 人と推定される (Nakagawa 2006)。

資料収集手順は次の通りである。まず, 調査票に列記された項目の日本語文に対応するグイ語訳暫定案を中川裕が作成し, それをもとに大野仁美と中川が母語話者 2 人との面談調査により, 実際の適格なグイ語文およびそれに類似・関連する文などの資料を引き出し記録した。面談はグイ語で行った。次いで, 加藤幹治が, その記録を集約し, 中川が編纂中のグイ語辞書および文法的形態素リストを用いて, 形態素ごとに逐語訳がなされた例文へ整形した上で, 全体的な文書作成を行った。なお, 調査票の項目の日本語表現に含まれる, グイ語の社会的文脈に馴染まない単語は適宜入れ替えを行った。

次節の記述では, 同調査票で用いられた項目の順序になるべく従って資料を配列する。グイ語表示は音韻論的妥当性を満たす簡略音声表記であり, 記号は IPA に基づく。なお, この研究は JSPS 科研費の助成を受けている (課題番号: 16H01925, 18H00661, 18K18500, 18KK0006, 18K00582, 19H01264, 20H00011)。



本稿の著作権は著者が保持し, クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

2. 資料

この節でグロスに用いる略号は以下のとおりである。

ACC = accusative, ADVLZ = adverbializer, C = common (男性と女性を含む), COP = copula, DU = dual, EMPH = emphatic, F = feminine, FUT.1 = 今日未来, FUT.2 = 明日未来, GEN = genitive, INCL = inclusive, INTERJ = interjection, IPFV = imperfective, IRR = irrealis, JUNCT = juncture (複合節における非末動詞を作る形態素), M = masculine, NEG = negative, NOM = nominative, PL = plural, PRF = perfect, PROG = progressive, PROH = prohibitive, PRPTV = propietive, PST = past, PST.1 = 今日過去, PST.3 = 遠過去, PST.N = 昨夜過去, Q = question particle, REL = relative, SG = singular.

なお、表示を簡潔にするために、英単語で性数格が十分に伝わる場合は、略号の組み合わせの代わりに英単語を用いている。

- (1) ɲĩ̀=̀sì tséé=̀sì kùà kʰúrĩ kà tsĩ ɣà ||ʔáékũ
this=3F.SG.GEN work=3F.SG.NOM PROG end when 2M.SG.NOM can go.home
この仕事が終わるときにあなたは帰っていい。

ɣà は推量や可能性を表すムード詞。

- (2) ɲĩ̀=̀sì tséé=̀sì kʰúrjā-hā kà tsĩ ɣà ||ʔáékũ
this=3F.SG.GEN work=3F.SG.NOM end;JUNCT-PRF when 2M.SG.NOM can go.home
この仕事が終わったらあなたは帰っていい (おわる見込みがある)。

- (3) ɲĩ̀=̀sì tséé=̀sì ɣà kʰúrjā-hā kà tsĩ ɣà
this=3F.SG.GEN work=3F.SG.NOM can end;JUNCT-PRF when 2M.SG.NOM can
||ʔáékũ
go.home
この仕事が終わったらあなたは帰っていい (いつ終わるやらわからない)。

- (4) ɲĩ̀=̀sì tséé=̀sì hĩ kʰúrĩ tsĩ jā ||ʔáékũ
this=3F.SG.GEN work=3F.SG.NOM FUT.1 end 2M.SG.NOM and go.home
この仕事が終わったらあなたは帰る。

- (5) ɲĩ̀=̀sì tséé=̀sì ɣà kʰúrĩ tsĩ jā ||ʔáékũ
this=3F.SG.GEN work=3F.SG.NOM can end 2M.SG.NOM and go.home
もし終わったらあなたは帰る (終わるかどうかわからないが)。

- (6) ʔáā=̀sì †ʔúúχò=sà †ʔúú-cĩ ʔēsì ts'órō-hā kè
that=3F.SG.GEN food=3F.SG.ACC eat-PROH 3F.SG.NOM rot;JUNCT-PRF because
腐っているから、それを食べてはいけない (それを食べるな)。

- (7) ʔē cì g||àm cìà ||ʔáékũ
it IPFV like 1C.INCL.PL.IRR go.home
(遅くなったので) 私たちはもう帰るのが望ましい。

- (8) ?ē cì kínī cìà ||ʔáékū
 it IPFV need 1C.INCL.PL.IRR go.home

(遅くなったので) 私たちはもう帰らなければならない。

- (9) ?ē χà c'úí ?ātsà̀m kúní=sì kà ?ā χò sí=sì
 it may be.good 1M.INCL.DU.GEN car=3F.SG.GEN by that place go.to=3F.SG.NOM
 ?ē hī̄ †úū k^hùà
 it FUT.1 rain because

(雨が降るそうだから) 車でいったほうがいいよ。

(10)

ほぼ同じ意味を，異なる構文および異なる形容詞「良い」で，(10)-(12)のように表現することができる。

- (11) ?ē χà c'úí ?ātsìbì kúní=sì kà ?ā χò sí ?à ?ē hī̄ †úū k^hùà

it may be.good 1M.INCL.DU.NOM car 3F.SG.GEN by that place go.to COP it FUT.1 rain because (雨が降りそうだから) 車でいったほうがいいよ。

- (12) ?ē χà !áí ?ātsà̀m kúní=sì kà ?ā χò sí=sì
 it may be.good 1M.INCL.DU.GEN car=3F.SG.GEN by that place go.to=3F.SG.NOM
 ?ē hī̄ †úū k^hùà
 it FUT.1 rain because

(雨が降るそうだから) 車でいったほうがいいよ。

- (13) ?ē χà !áí ?ātsìbì kúní=sì kà ?ā χò sí ?à ?ē
 it may be.good 1M.INCL.DU.NOM car=3F.SG.GEN by that place go.to COP it
 hī̄ †úū k^hùà
 FUT.1 rain because

(雨が降りそうだから) 車でいったほうがいいよ。

- (14) ?ē kì cì kínī |úá=mà g||ōō-hā=m̄
 it PST.1 IPFV need child=3M.SG.IRR grow.up;JNCT-PRF=3M.SG.GEN
 k^hòè=mà kúm̄
 person=3M.SG.ACC listen.to

子供は大人 (の言うこと) を聞くべきだ／聞くものだ。

過去時制詞 kì (今日過去) は現実ではないこと・想念を表す際にも用いられる。

- (15) cìrè ||àbā-hā jā cì †?úúχò=sì †?úú †?áñ
 I become.hungry;JNCT-PRF and IPFV food=3F.SG.GEN eat want
 お腹が空いたので，(私は) 何か食べたい。(lit. 食べ物を食べたい)

(16) cìrè ||àbā-hā jā cì †?úúχò=sà †?úú=sà †?áñ
 I become.hungry;JUNCT-PRF and IPFV food=3F.SG.ACC eat=3F.SG.ACC want
 お腹が空いたので、(私は)何か食べたい。(lit. 食べ物を食べることを望む)

(17) dà ?ēsà !χóó
 1SG.IRR it hold
 私がそれを持ちましょう。

命令・勧誘・意志は *irrealis* のモードで表される (主語の形で示される)。

(18) cià òē k^hā †?úúχò kà q'únì-jì=dzì †?úú
 1C.INCL.PL.IRR all EMPH food REL noon-be.for=3F.PL.ACC eat
 一緒に昼ご飯を食べましょう。

(19) ?ācià=m χà †?úúχò kà q'únì-jì=dzì †?úú
 1C.INCL.PL.GEN=Q may food REL noon-be.for=3F.PL.ACC eat
 一緒に昼ご飯を食べませんか？

(20) ?ācià òē k^hā=m χà †?úúχò kà q'únì-jì=dzì †?úú
 1C.INCL.PL.GEN all EMPH=Q may food REL noon-be.for=3F.PL.ACC eat
 みんなで一緒に昼ご飯を食べませんか？

(21) cìrè cì †?áñ !?úú kà cúú=bì χà cíé
 I IPFV want tomorrow on rain=3M.SG.NOM may stop
 明日雨が止むといいなあ。

(22) cìrè ŋ|ì χò k^hā tsā qχ'úā-hā kè sí nì ?ēsì |χùà
 I this place EMPH 2M.SG.ACC wait;JUNCT-PRF because go and it with
 àà
 come

私はここで待っているから、行ってそれを持って来なさい。

(23) cíā=m χà ŋ|ì=m pèn=mà |χóbè
 me=Q may this=3M.SG.GEN pen=3M.SG.ACC borrow
 そのペンをお借りできますか？

(24) cíā=m ŋ|ì=m pèn=mà |χóbè
 me=Q this=3M.SG.GEN pen=3M.SG.ACC borrow
 そのペンを借りられる？

(25) ?àbì χà ts^háíná-kò qχ'úí=sà ŋ||áé
 he can China-person language=3F.SG.ACC read
 あの人是中国語が読めます。

(26) ?ē ŋɛúú cìrè jǎ ɣà cúá c'úú-sī múú ìĩɣò=sì ŋǐ ɣò
 it be.dark I and can NEG be.good-ADVLZ see what=3F.SG.GEN this place
 háá=sà ?à
 exist=3F.SG.ACC COP

明かりが暗くて，ここに何かあるのか見えない。

(27) ?àri ɣà ŋǐ Ghantsi=sì wà síí
 they may PST.N Ghanzi=3F.SG.GEN in arrive

(朝早く出発したから) 彼らはもうハンシーに着いているはずだ／着いたに違いない。

(28) ?àbi ?ūsì |?ũkà cúá àà
 he FUT.2 perhaps NEG come

あの人は明日はたぶん来ないだろう。

(29) ae ?àri cúá àà |?ũkà ?àn kà kúní=sì ŋǐ ||?óó
 INTERJ they NEG come perhaps 3C.PL.GEN of car=3F.SG.NOM PST.N be.broken

彼らはまだ来ないなんて，きっと途中で車が壊れたんじゃないか。

(30) ae ?àri cúá àà |?ũkà ?àn kà kúní=sì ɣà ŋǐ
 INTERJ they NEG come perhaps 3C.PL.GEN of car=3F.SG.NOM possibly PST.N
 ||?óó
 be.broken

彼らはまだ来ないなんて，きっと途中で車が壊れたんじゃないか。

(31) ?àbi ||?áé=sì wà |?ũkà háá jǎ |?ũkà hááciè
 he home=3F.SG.GEN at possibly be and possibly not.be

(昼間だからあの人は家に) さあ，いるかもしれないし，いないかもしれない。

(32) ?àm |ɣáé?ò kùrū c^hā=sà kúmí
 3M.SG.GEN body be.hot way.how=3F.SG.ACC hear

彼の体あちこちに触って熱があるか確かめる。

(33) tsā |ɣáé?ò è kùrū k^hùà ||ām
 2M.SG.GEN body NOM be.hot as feel

(体あちこちに触ってみて) あなたは熱があるようだ。

視覚以外の感覚による判断には聴覚動詞 kúmí や味覚動詞 ||ām が用いられる。詳しくは Nakagawa (2012) 参照。

(34) !?úú-sì kà cúú=bì kūmā ?ūsì ɛúú
 tomorrow-3F.SG.GEN on rain=3M.SG.NOM hearsay FUT.2 rain

(天気予報によれば) 明日は雨が降るそうだ。

(35) cíā χὰ kì màrī-χὰ kà cìrè χὰ kì η|ì=sì
 1SG.GEN can PST.1 money-PRPTV if I can PST.1 this=3F.SG.GEN
 kúní=sà ||ʔáí
 car=3F.SG.ACC buy

もしお金があったら、あの車を買うんだけどなあ。

反実仮想は、ムード詞 χὰ と過去時制詞の組み合わせで表される。

(36) tsā χὰ qχ'ō cíā jíò=mà ||áé-c^hīmā kà cúá cìrè χὰ
 2M.SG.GEN can PST.3 1SG.ACC road=3M.SG.ACC teach-NEG if NEG I can
 qχ'ō ʔā χò síí
 PST.3 that place reach

もしあなたが教えてくれていなかったら、私はそこにたどり着けなかったでしょう。

(37) ʔàbì cì ||ʔáé kà g'lúrī=sì wà lūū=sà †ʔáñ
 he IPFV town REL be.big=3F.SG.GEN in going=3F.SG.ACC want

あの人は（大きな）街へ行きたがっている。

(38) |ì dà |qχ'áré-sī ʔēsà qχ'áà
 INTERJ(excuse) 1SG.IRR little-ADVLZ it drink

僕にそれを少し飲ませろ。

(39) χúū dà |qχ'áré-sī ʔēsà qχ'áà
 leave 1SG.IRR little-ADVLZ it drink

僕にそれを少し飲ませろ。（丁寧さはない）

(40) nì ʔā=m̄ k^hóè=mà η|ì=sì χò=sà séè
 so.that that=3M.SG.GEN person=3M.SG.IRR this=3F.SG.GEN thing=3F.SG.ACC take
 nì ʔēsà ʔúú
 and it carry

これはあの人に持って行かせろ／持って行かせよう。

1人称・3人称命令にも2人称命令と同様に *irrealis* ムードを用いる。命令文と命令文の連結には（平叙文をつなぐ等位接続詞とは異なる）*nì* を用いる。

(41) taafle=m̄ |χàè háá=sì páré=sà hī †ʔúú
 table=3M.SG.GEN on exist=3F.SG.GEN bread=3F.SG.ACC FUT.1 eat

そのテーブルの上のお菓子は後で食べなさい。

(42) taafle=m̄ |χàè háá=sì páré=sà nì hī †ʔúú
 table=3M.SG.GEN on exist=3F.SG.GEN bread=3F.SG.ACC and FUT.1 eat

そのテーブルの上のお菓子は後で食べなさい。（*nì* は *irrealis* とともに用いる等位接続詞で、ここでは何らかの行為の後に食べることを暗示している）

- (43) kŭmā dà χà kì qχ'áíjà àà nì
 hearsay 1SG can PST.1 long.ago come and
 もっと早く来ればなあ（来ればよかった）.

「～だったらなあ」という反実仮想（事実と異なる願望）は [hearsay]+[IRR]+χà+[PST]+...nì という構文で表す.

- (44) tsā òē !úù kà ?ē χà c'úú
 2M.SG.GEN also go if it may be.good
 あなたも一緒に行ったらいい（必ず主節を加える）.

- (45) tsā òē ∅ !úù
 2M.SG.GEN also IRR go
 お前も行け [NB: tsā òē は, tsā òē è (realis nominative) に対する irrealis nominative の形]

- (46) nì tsā òē ∅ !úù
 and 2M.SG.GEN also IRR go
 お前も後から行け（「後から」の意味があるか不明；後でも，一緒でも良い）.

- (47) cíā=m χà ?ēsà !?ánā-hā
 me=Q can 3F.SG.ACC know;JNCT-PRF
 オレがそんなこと知るか！（「私がそれを知っているだろうか？」）

- (48) cìrè χà ?ēsà !?ánā-hā
 I can 3F.SG.ACC know;JNCT-PRF
 私はそれを知らない（知り得ない）。（これは反語にならない）.

- (49) cíā=m ?ēsà !?ánā-hā
 me=Q 3F.SG.ACC know;JNCT-PRF
 私はそれを知っているか？（反語ではなく疑問文）.

- (50) sīrī=sì=m kì ?ēsà ŋ|úā-hā
 mother=3F.SG.GEN=Q PST.1 it cook;JNCT-PRF
 これを作った（料理した）のは，あなたのお母さんだよ（あなたのお母さんがこれを料理したか）？

- (51) máā=sì kì ?ēsà ŋ|úā-hā sīrī=sì mā
 who=3F.SG.NOM PST.1 3F.SG.ACC cook;JNCT-PRF mother=3F.SG.GEN Q
 これを作った（料理した）のは，お母さんだよ（誰がこれを料理した，あなたのお母さんか）？

- (52) cìrè kì ?ēsà ŋ|úā-hā
 I PST.1 3F.SG.ACC cook;JNCT-PRF
 （いいえ）私が作ったのよ.

(53) *cīā-kī dà ?ēsà ŋ|úá
me-focus 1SG it cook

非文（「母ではなく私が作った」という意味で，kīは対比の焦点には使えない．）

参考文献

Nakagawa, Hiroshi (2006) !Gui dialects and !Gui-speaking communities before the relocation from the CKGR. *Pula: Botswana Journal of African Studies*, 20(1): 42–52.

Nakagawa, Hiroshi (2012) The importance of TASTE verbs in some Khoe languages. *Linguistics*, 50(2): 395–420.

執筆者連絡先：jiateng.ganzhi@gmail.com（加藤幹治），ono@reitaku-u.ac.jp（大野仁美），
nhiroshi@tufs.ac.jp（中川裕）

原稿受理日：2020年12月1日

<特集「ヴォイスとその周辺」>

グイ語資料：ヴォイスとその周辺

G|ui data: voice

加藤 幹治¹, 大野 仁美², 中川 裕³

Kanji Kato, Hitomi Ono, Hiroshi Nakagawa

¹ 東京外国語大学大学院総合国際学研究所

² 麗澤大学外国語学部

³ 東京外国語大学大学院総合国際学研究院

Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

Faculty of Foreign Studies, Reitaku University

School of Language and Cultural Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨：『語研論集』特集 17 号の「ヴォイスとその周辺」の調査票に基づき収集した、コエ・クワディ語族グイ語の資料を提示する。

Abstract: This article provides G|ui data collected by using the questionnaire “Voice” designed by Shinjiro Kazama.

キーワード：コイサン諸語, ヴォイス

Keywords: Khoisan, voice

1. はじめに

この報告は『語研論集』特集 17 号の「ヴォイスとその周辺」の調査票に基づくグイ語 (G|ui) 資料収集の結果を提示する。グイ語は、カラハリ言語帯 (コイサンの名でも知られる言語地域) の、コエ・クワディ語族、南西カラハリ・コエ語派ガナ語群に属し、ボツワナ共和国ハンシー県・クエネング県で話される。話者数は約 800 人と推定される (Nakagawa 2006)。

資料収集手順は次の通りである。まず、調査票に列記された項目の日本語文に対応するグイ語訳暫定案を中川裕が作成し、それをもとに大野仁美と中川が母語話者 2 人との面談調査により、実際の適格なグイ語文およびそれに類似・関連する文などの資料を引き出し記録した。面談はグイ語で行った。次いで、加藤幹治が、その記録を集約し、中川が編纂中のグイ語辞書および文法的形態素リストを用いて、形態素ごとに逐語訳がなされた例文へ整形した上で、全体的な文書作成を行った。なお、調査票の項目の日本語表現に含まれる、グイ語の社会的文脈に馴染まない単語は適宜入れ替えを行った。

次節の記述では、同調査票で用いられた項目の順序になるべく従って資料を配列する。グイ語表示は音韻論的妥当性を満たす簡略音声表記であり、記号は IPA に基づく。なお、この研究は JSPS 科研費の助成を受けている (課題番号: 16H01925, 18H00661, 18K18500, 18KK0006, 18K00582, 19H01264, 20H00011)。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

2. 資料

この節でグロスに用いる略号は以下のとおりである。

ACC = accusative, ADVLZ = adverbializer, ASSOC = associative, C = common (男性と女性を含む), CAUS = causative, COP = copula, DU = dual, F = feminine, FUT.1 = 今日未来, GEN = genitive, IPFV = imperfective, JUNCT = juncture (複合節における非末動詞を作る形態素), M = masculine, NEG = negative, NOM = nominative, PASS = passive, PL = plural, PRF = perfect, PROG = progressive, PST.N = 昨夜過去, RECP = reciprocal, REFL = reflexive, SG = singular.

なお、表示を簡潔にするために、英単語で性数格が十分に伝わる場合は、略号の組み合わせの代わりに英単語を用いている。

- (1) η!úū=m̄n qχ'ám̄ è η!ĩ kākāĩ ||χórē-sì
hut=3M.SG.GEN mouth NOM PST.N by.oneself open-REFL
(風などで) ドアがひとりでに開いた。

動詞の自他は区別される。動詞||χórē「開ける」は他動詞で対応する自動詞はないので、「開く」という意味にするには再帰を表す拡張辞-sìを用いる。

- (2) ?àbi η!ĩ η!úū=m̄n qχ'ám̄ ||χórē
he PST.N hut=3M.SG.GEN mouth open
(彼が) ドアを開けた。

- (3) η!úū=m̄n qχ'ám̄ è ||χórē-?è
hut=3M.SG.GEN mouth NOM open-PASS
(入り口の) ドアが開けられた。

- (4) η!úū=m̄n qχ'ám̄ è k^húá-?è
hut=3M.SG.GEN mouth NOM break.vt-PASS
(入り口の) ドアが壊された。

- (5) η!úū=m̄n qχ'ám̄ è kākāĩ k^hūā
hut=3M.SG.GEN mouth NOM by.oneself break.vi
ドアがひとりでに壊れた (ただし家のドアがひとりでに壊れることは現実的には無い)。

「壊す」k^húáと「壊れる」k^hūāは自他のペアで、声調で区別される。

- (6) cìrè cī jìbāχō=mà cíé-kàχō
I 1SG.GEN younger.brother=3M.SG.ACC stand-CAUS
私は自分の弟を立たせた (つかんで立たせる場合や、生まれと言って立ち止まらせる場合も)。

被使役主は目的語と同じ格で示される。使役は動詞拡張辞-kàχōを他動詞・自動詞両方に用いる方法と、動詞を重複させる方法が存在するが、前者のほうがより生産的で表す意味の範囲も広い。

- (7) cìrè cī jìbāχō=mà cèn-kàχō
I 1SG.GEN younger.brother=3M.SG.ACC stand.up-CAUS
私は (自分の) 弟を立たせた。立ち上がらせる (搦んで)。(cèn-cèn は普通使わない)

- (8) cìrè cī jìbāχō=mà |fī=sà ŋ||áè-kàχō
 I 1SG.GEN younger.brother=3M.SG.ACC song=3F.SG.ACC sing-CAUS
 私は弟に歌を歌わせた。

他動詞の目的語がある場合も，被使役主と両方が同じ対格で示される。

- (9) *cìrè cī jìbāχō mà |fī sà ŋ||āēŋ||àè

(非文) 私は弟に歌を歌わせた。(この意味では，使役豊語 ŋ||āēŋ||àè は使えない)

- (10) ʔēsì ʔàmà páré=sà tséé ʔàbì jā sí cì ʔēsà ||ʔáí
 she him bread=3F.SG.ACC make.work he and go IPFV 3F.SG.ACC buy
 bentere=sì wà
 shop=3F.SG.GEN in

(遊びたがっている子供に無理やり) 彼女は彼をパンを買いに行かせた (A (B) tséé 「(B のこと)A を使う」)。

使役が強制的であったり許会的であったりすることを明示的に示したい場合は，使役形以外で示す。

- (11) cìrè ʔàmà ʔāāχò=dzì tséé ʔàbì jā cì ʔēdzì ||qχ'áà
 I him clothes=3F.PL.ACC make.work he and IPFV them wash
 私は彼に服を洗わせている (私は彼を服のことで使い立てして，彼は服を洗っている)。

- (12) cìrè ʔāāχò=dzì ʔàmà ||qχ'áà-kàχō
 I clothes=3F.PL.ACC him wash-CAUS
 私は彼に服を洗わせた。

- (13) ||ūū=sì cì ʔàmà χúū ʔàbì jā sí cì ōōk^húrī
 parent=3F.SG.NOM IPFV him leave he and go IPFV play
 (子供が遊びに行きたがっているのを見て) 母は彼に遊びに行かせる。

- (14) ||ūū=sì cì ʔàmà g#úm ʔàbì jā sí cì ōōk^húrī
 parent=3F.SG.NOM IPFV him agree he and go IPFV play
 (子供が遊びに行きたがっているのを見て) 母は彼に遊びに行かせる。

- (15) ||ūū=sì cì ʔàmà ōōk^húrī-kàχō
 parent=3F.SG.NOM IPFV him play-CAUS
 母は子供に遊ばせる (子供は遊びたいわけではない)。

- (16) cìrè cī jìbāχō=mà ʔāā-kàχō
 I 1SG.GEN younger.brother=3M.SG.ACC wear-CAUS
 私は弟に服を着せた。

- (17) cìrè cī jìbāχō=mà ?āāχò=dzì ?āā-kàχō
 I 1SG.GEN younger.brother=3M.SG.ACC clothes=3F.PL.ACC wear-CAUS
 私は弟にその服を着させた。

直接の行為か間接の行為かは含意しないので、それを明示的に示す場合はその説明が別途必要である。

- (18) cìrè cī jìbāχō=mà †χájá=sà c^hîè
 I 1SG.GEN younger.brother=3M.SG.ACC paper=3F.SG.ACC present
 私は弟にその本をあげた。

- (19) cìrè cī jìbāχō=mà †χájá=sà máá
 I 1SG.GEN younger.brother=3M.SG.ACC paper=3F.SG.ACC give
 私は弟にその本を渡した。

「あげる」c^hîè は所有者が変わるが、máá「渡す」は必ずしもそうではない。後者は動詞に接続して恩恵表現 (benefactive) に用いられる。

- (20) cìrè cī jìbāχō=mà †χájá=sà
 I 1SG.GEN younger.brother=3M.SG.ACC paper=3F.SG.ACC
 ŋ||áē-máá
 read;JNCT-give(benefactive)
 私は弟に本を読んであげた。

- (21) cī cīāχō=bì cíā †χájá=sà ŋ||áē-máá
 1SG.GEN elder.brother=3M.SG.NOM me paper=3F.SG.ACC read;JNCT-give(benefactive)
 兄は私に本を読んでもらった。

- (22) cìrè cī cīāχō=ìn kà †χájá=sà
 I 1SG.GEN elder.brother=3M.SG.GEN by paper=3F.SG.ACC
 ŋ||áē-máá-?è
 read;JNCT-give(benefactive)-PASS
 私は兄に本を読んでもらった。

- (23) jìē=sì cī kà |?ūū=dzì |?ñ
 mother=3F.SG.NOM 1SG.GEN of hair=3F.PL.ACC cut
 私は母に髪を切ってもらった (lit. 母は私の髪を刈った)。

- (24) cī kà |?ūū=dzì jìē=sì kà |?ñ-?è
 1SG.GEN of hair=3F.PL.NOM mother=3F.SG.GEN by cut-PASS
 私は母に髪を切ってもらった (lit. 私の髪は母に刈られた)。

- (25) cī |?ūū è |?ñ-?è
 1SG.GEN hair NOM cut-PASS
 私の髪は刈られた。

- (26) cìrè |ʔí-sā-hā jìē=sì kà
 I cut-PASS(REFL;JNCT)-PRF mother=3F.SG.GEN by
 私は（母に）整髪してもらった（髪の毛には言及できない）。

「母に」を述べずに，cìrè cī kà |ʔūū dʒi |ʔíjā-hā 「私は髪を刈っている（完了）」なら良い。

- (27) cìrè ɣò=sà ||qɣ'áà
 I thing=3F.SG.ACC wash
 私は物を洗った。

- (28) cìrè ts^héū=sèrà ||qɣ'áà
 I hand=3F.DU.ACC wash
 私は（自分の）両手を洗った。

- (29) cìrè cī |ɣáéʔò ||qɣ'áà
 I 1SG.GEN body wash
 私は（自分の）体を洗った。

主語の身体（の一部）を他動詞の目的語とすることができる。

- (30) cìrè ||qɣ'āā-sì
 I wash-REFL
 私は（自分の）体を洗った (lit. 私は自分を洗った)。

再帰形を用いた場合は，（身体の一部などの）目的語は使用しない。

- (31) cìrè cī ts^héū ||qɣ'áà
 I 1SG.GEN hand wash
 私は自分の手を洗った。

- (32) cìrè ||qɣ'āā-ts^héū
 I wash-hand
 私は手洗いをした。

- (33) cìrè ʔēsà ||ʔājā-māā-sī
 I it buy;JNCT-give(benefactive)-REFL
 （自分のために）私はそれを買った。

- (34) ʔētsèrà cì ||qɣ'ám-kū
 they.two IPFV hit-RECP
 彼ら二人は殴り合っている。

相互動作は拡張辞-kū で表される。

- (35) ʔētsèrà hācì ||qɣ'ám-kū
 they.two PROG hit-RECP
 彼ら二人は殴り合っている（長時間）。

(36) ʔàh òē è ||ʔáé=sì wà !ūwā-hā
 3C.PL.GEN all NOM town=3F.SG.GEN in go;JNCT-PRF
 その人たちは（みんな一緒に）街へ行った。 【衆動】

(37) ŋ|ĩ=sì |ĩ=sì cì k^hóè χà=nà qχ'áē-kàχō
 this=3F.SG.GEN song=3F.SG.NOM IPFV person ASSOC=3C.PL.ACC cry-CAUS
 その歌は泣ける（その歌は聞く人を泣かせる）。

(38) ŋ|ĩ=sì |ĩ=sì qχ'áē-jì
 this=3F.SG.GEN song=3F.SG.NOM cry-be.for
 その歌は泣ける（その歌は泣くためのものだ）。

(39) cìrè †ʔúbí=mà !qárā
 I egg=3M.SG.ACC break
 私は卵を割った。

割る行為が意志的かどうかは問わない。!ʔáá-kà-gáā-k^hā ‘on purpose’, sáá jā ‘by mistake’ のどちらとも共起できる。

(40) cìrè sáá jā kúbí=mà !qárā
 I fail and cup=3M.SG.ACC break
 うっかり私はコップを割った（割ってしまった）。

(41) cìrè ŋ|ĩ koofi=mà qχ'áá jā cúá c'úí-sī ||ʔúm
 I PST.N coffee=3M.SG.ACC drink and NEG be.good-ADVLZ sleep
 昨夜私はコーヒーを飲みすぎて（飲みすぎたので）よく眠れなかった。

(42) cìrè ŋ|ĩ ʔáó-sī tséé jā cúá c'úí-sī ||ʔúm
 I PST.N last.long-ADVLZ work and NEG be.good-ADVLZ sleep
 きのう私は仕事がたくさんあって（長時間働き）よく眠れなかった。

随意の不可能と不随意の不可能の区別はない。

(43) cī màā è c^húú
 1SG.GEN head NOM be.painful
 私は頭が痛い（lit. 私の頭が痛い）。

(44) cìrè c^húú à màā
 I be.painful in head
 私は頭が痛い（lit. 私は頭において痛い）。

(45) ʔēsì |ʔūū è !ào
 3F.SG.GEN hair NOM be.long
 彼女は髪が長い（lit. 彼女の髪は長い）。

- (46) ʔēsì láò à |ʔū̄̄
 3F.SG.GEN be.long in hair
 彼女は髪が長い (lit. 彼女は髪において長い).
- (47) ʔàbì ʔēsì ŋʔórōʔò †q^hábā
 he 3F.SG.GEN back slap
 彼は彼女の背中をたたいた.
- (48) ʔàbì ʔēsì ŋʔórōʔò wà ʔēsà †q^hábā
 he 3F.SG.GEN back in 3F.SG.ACC slap
 彼は彼女の背中をたたいた (lit. 私は彼女を背中においてたたいた).
- (49) ʔàbì ʔēsì ts^héū !χóó
 he 3F.SG.GEN hand grasp
 彼は彼女の手をつかんだ.
- (50) ʔàbì ʔēsì ts^héū wà ʔēsà !χóó
 he 3F.SG.GEN hand in 3F.SG.ACC grasp
 彼は彼女の手をつかんだ (lit. 私は彼女を手においてつかんだ).
- (51) cìrè cì ʔàm cì àà c^hā mú̄̄
 I IPFV 3M.SG.GEN IPFV come way.how see
 私は彼がやって来るのを見た (見つつある).
- (52) cìrè cì ʔàm kùà àà c^hā mú̄̄
 I IPFV 3M.SG.GEN PROG come way.how see
 私は彼がやって来るのを見た (見つつある).
- (53) (アスペクト詞 kùà は移動する進行を表す. 詳しくは, Nakagawa
 (2016) 参照. ただしこの文は (51) とほぼ同じ意味を表す.
- (54) cìrè ʔē !ʔánā -hā ʔàm hī àà =sà ʔà
 I it know;JUNCT PRF 3M.SG.GEN FUT.1 come 3F.SG.ACC COP 私は彼が今日来ることを知っている.
- (55) ʔàm hī àà=sà cìrè !ʔánā-hā
 3M.SG.GEN FUT.1 come=3F.SG.ACC I know;JUNCT-PRF
 私は彼が今日来ることを知っている.
- (56) 統語構造は異なるが, (53) と (54) はほぼ同じ意味を表す.
- (57) ʔàbì †ʔán ʔàbì hī |ʔú̄̄ =mà ŋ!áé

he think he FUT.1 other 3M.SG.ACC surpass 彼は自分（のほう）が勝つと思った.

(58) cìrè ts^háā=sà qχ'áà
I water=3F.SG.ACC drink

私は水を飲んだ (容器内の一部でも全部でも).

(59) cìrè ts^háā=sà qχ'āā !^húṁ
I water=3F.SG.ACC drink;JNCT break

私は水（の一部）を飲んだ.

(60) cìrè ts^háā=sà qχ'āā-!áù~!àù
I water=3F.SG.ACC drink;JNCT-stay~CAUS

私は水を一部だけ飲んで一部残した.

(61) cìrè ts^háā=sà qχ'āā-k^húṙī
I water=3F.SG.ACC drink;JNCT-finish

私は水を全部飲んだ.

(62) ?àbì |χáā=sà ŋ!ānā-hā
he meat=3F.SG.ACC food.taboo;JNCT-PRF

彼は肉を食べない.

(63) ?àbì ||ò cúá |χáā=sà qχ'óō
he trait NEG meat=3F.SG.ACC eat

彼は肉を食べない. (習慣的に食べない・食べる能力がない)

(64) ŋ!í |ám kà ?ē !q^hāī
this day on it be.cold

今日は寒い.

(65) cìrè !q^hāī k^hùà ||ām
I be.cold like feel

私は (何だか) 寒い (私には寒く感じる).

(66) k^hóè χà=n ðúī c^hā=sà cìrè |î||à
person ASSOC=3C.PL.GEN be.many way.how=3F.SG.ACC I be.surprised

人が多かった様子には私は驚いた.

(67) cúú=bì ðúū
rain=3M.SG.NOM rain

雨が今降り始めた.

(68) cúú=bì cì ðúū
rain=3M.SG.NOM IPFV rain

雨が今降り始めた。降っている。降りそうだ。降る準備が終わって (?ābāχōrō-hā), 多分すぐ降る。

- (69) ŋ|ēē kà c'úú=bì cì ɬúū
eventually at rain=3M.SG.NOM IPFV rain
(ずっと降っていなかった) 雨がやっと降り始めた。

- (70) ʔēsì ||ʔāĩ è c'úĩ
3F.SG.GEN sale NOM be.good
それはよく売れる (lit. その売れ行きは良い ; ||ʔāĩは名詞「売れ行き」)。

- (71) ʔēsì c'úĩ jà ||ʔāĩ
it be.good in sale
それはよく売れる。

参考文献

- Nakagawa, Hirosi (2006) lGui dialects and lGui-speaking communities before the relocation from the CKGR. *Pula: Botswana Journal of African Studies*, 20(1): 42–52.
Nakagawa, Hirosi (2016) The aspect system in Glui: with special reference to postural features. *African Study Monograph*, 52: 119–134.

執筆者連絡先 : jiateng.ganzhi@gmail.com (加藤幹治), ono@reitaku-u.ac.jp (大野仁美),
nhirosi@tufs.ac.jp (中川裕)

原稿受理日 : 2020年12月1日

<特集「所有・存在表現」>

グイ語資料: 「所有・存在表現」
G|ui data: possessive and existential expressions

木村 公彦¹, 中川 裕², 大野 仁美³
Kimihiko Kimura, Hiroshi Nakagawa, Hitomi Ono

¹ 東京外国語大学大学院総合国際学研究所
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies
² 東京外国語大学大学院総合国際学研究院
School of Language and Cultural Studies, Tokyo University of Foreign Studies
³ 麗澤大学外国語学部
Faculty of Foreign Studies, Reitaku University

要旨: 『語研論集』特集 18 号の「所有・存在表現」の調査票に基づき収集した, コエ・クワディ語族グイ語の資料を提示する.

Abstract: This article provides G|ui data collected by using the questionnaire “Possessive and existential expressions” proposed by Shinjiro Kazama.

キーワード: コイサン諸語, 所有, 存在

Keywords: Khoisan, possessive, existential

1. はじめに

『語研論集』特集 18 号の「所有・存在表現」の調査票を用いてグイ語 (G|ui) の資料を収集した。その結果を提示する。グイ語は, カラハリ言語帯 (コイサンの名でも知られる言語地域) の語族の一つ, コエ・クワディ語族における南西カラハリ・コエ語派ガナ語群の言語である。ボツワナ共和国ハンシー県やクエネング県にその話者集落は分布する。話者数は全体で約 800 人と推定される (Nakagawa 2006)。

資料は次のような手順で収集・記録し編集をした。はじめに, 調査票の項目 (日本語文) を中川裕が暫定的にグイ語訳した。それをもとに大野仁美と中川が母語話者 2 人との面談調査により, 実際の適格なグイ語文およびそれに類似・関連する文などの資料を引き出し記録した。なお, 母語話者との面談の過程で, 調査票の同項目に複数の表現が現れた場合は, それを列記してある。それら複数の表現は, 2 人の母語話者のいずれからも適格であることを確認してある。面談はグイ語で行った。次いで, 木村公彦が, その記録を集約し, 中川が編纂中のグイ語辞書および文法的形態素リストを用いて形態素ごとに分節し, グロス付けをした上で, 全体的な文書作成を行った。なお, 調査票の項目の日本語表現に含まれる, グイ語の社会的文脈に馴染まない単語は適宜入れ替えを行った。

次節の記述では, 同調査票で用いられた項目の順序になるべく従って資料を配列する。グイ語表示は音韻論的妥当性を満たす簡略音声表記であり, 記号は IPA に基づく。なお, この研究は JSPS 科研費の助成を受けている (課題番号: 16H01925, 18H00661, 18K18500, 18KK0006, 18K00582, 19H01264, 20H00011)。



本稿の著作権は著者が保持し, クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

2. 資料

この節でグロスに用いる略号は以下のとおりである。

ACC = accusative, ADVLZ = adverbializer, C = common (男性と女性を含む), EXC = excessive, F = feminine, FUT.2 = 明日未来, GEN = genitive, IPFV = imperfective, JUNCT = juncture, M = masculine, NEG = negative, NOM = nominative, P.N. = proper noun, PASS = passive, PL = plural, POSS = possessive, PRF = perfect, PRPTV = propietive, PST.2 = 昨日過去, Q = question marker, REFL = reflexive, REL = relative, SG = singular.

なお、表示を簡潔にするために、英単語で性数格が十分に伝わる場合は、略号の組み合わせの代わりに英単語を用いている。

- (1) ʔà̀m ɸχáí è tsqχ'āē
3M.SG.GEN eye NOM be.blue
彼の目は青い。
- (2) ʔà̀bì tsqχ'āē à ɸχáí
he be.blue in eye
彼は目が青い (lit. 彼は目において青い)。
- (3) k^hóè kà ʔē ɸχáí tsqχ'āē=mà
person REL 3C.SG.GEN eye be.blue=3M.SG.ACC
目が青い人 (lit. その目が青い人)
- (4) k^hóè kà tsqχ'āē à ɸχáí=mà
person REL be.blue in eye=3M.SG.ACC
目が青い人 (lit. 目において青い人)
- (5) ʔḕsì |ʔūū̀ è !áò
3F.SG.GEN hair NOM be.long
彼女の髪は長い。
- (6) ʔḕsì !áò à |ʔūū̀
3F.SG.GEN be.long in hair
彼女は髪が長い (lit. 髪において長い)。
- (7) g||à̀èkò kà ʔē |ʔūū̀ !áò=sà
woman REL 3C.SG.GEN hair be.long=3F.SG.ACC
髪が長い女 (lit. その髪が長い女)
- (8) g||à̀èkò kà !áò à |ʔūū̀=sa
woman REL be.long in hair=3F.SG.ACC
髪が長い女 (lit. 髪において長い女)

- (9) ʔàbì qχ'ám-|ʔū̄=dzì ʔúā-hā
 he mouth-hair=3F.PL.ACC carry;JNCT-PRF
 あの人は髭がある (lit. 髭を持っている).
- (10) ʔàbì qχ'ám-|ʔū̄=dzì !ʔúnānā-hā
 he mouth-hair=3F.PL.ACC bring;JNCT-PRF
 あの人には髭がある (lit. 髭を持っている).
- (11) ʔàbì qχ'ám-|ʔū̄-χà
 he mouth-hair-PRPTV
 あの人には髭がある (lit. 髭付きだ).
- (12) k^hòè kà qχ'ám-|ʔū̄=dzì ʔúā-hā=mà
 person REL mouth-hair=3F.PL.ACC carry;JNCT-PRF=3M.SG.ACC
 髭の男 (lit. 髭をもつ男)
- (13) k^hòè kà qχ'ám-|ʔū̄-χà=mà
 person REL mouth-hair-PRPTV=3M.SG.ACC
 髭の男 (lit. 髭もちの男)
- (14) màā-χà
 head-PRPTV
 賢い (lit. 頭もちの)
- (15) ʔàbì !árī jà màā
 he be.strong in head
 彼は頭が固い (なかなか上達しない).
- (16) ʔàbì c^hém à màā
 he be.soft in head
 彼は頭が柔らかい (物覚えが早い).
- (17) †ʔáñ-χà
 thinking-PRPTV
 賢い (lit. 思考もちの) (この場合の†ʔáñ は名詞.)
- (18) †áó-χà
 heart-PRPTV
 精神が強い (lit. 心臓もちの).
- (19) !ū̄-χà
 walk-PRPTV
 歩く能力が強い (lit. 歩行もちの) (この場合の!ū̄は名詞. !úú「歩く」ではないことに注意).

(20) ɲ|àà-χà
 stomach-PRPTV
 妊娠している (lit. 腹をもつ)

例 (11), (13), (14), (17)~(20) は次の例 (21) で示す表現を用いている。-χà (propietive) は名詞に接続する。

(21) ?àbì ...-χà
 he ...-PRPTV
 彼は...もちである。

(22) ?àbì 22 kúrī=dzì !?únānā-hā
 he 22 year=3F.PL.ACC bring;JNCT-PRF
 あ的那个人は 22 歳だ (lit. 22 の歳を持っている)。

(23) ?àbì 22 kúrī=dzì ?úā-hā
 he 22 year=3F.PL.ACC carry;JNCT-PRF
 あ的那个人は 22 歳だ (lit. 22 の歳を持っている)。

(24) ?àbì 22 kúrī |χùà háā
 he 22 year with exist
 あ的那个人は 22 歳だ (lit. 22 年とともにある)。

(25) ?àbì c'úí à †áó
 he be.good in heart
 彼は優しい性格だ (lit. 彼は心において良い)。

(26) ?àm †áó è c'úí
 3M.SG.GEN heart NOM be.good
 彼は優しい性格だ (lit. 彼の心は良い)。

(27) ?àbì !áò
 he be.tall
 あ的那个人は背が高い。

(28) k^hòè kà !áò=mà
 person REL be.tall=3M.SG.ACC
 背の高い人

(29) ?àbì !áò à ||?úà
 he be.long in arm
 彼は腕が長い (「脚が長い」ならば||?úàに替えて!?úá「脚」を入れる)。

(30) !āō-qχ'āi

be.long;JNCT-EXC

極端に長い

グイ語には比較級・最上級の形式はないが, 過剰級とでも呼ぶべき形式が動詞の juncture 形に-qχ'āi (excessive) が後続して形成される.

(31) ||ùmā-qχ'āi

be.short;JNCT-EXC

極端に短い

(32) ŋ|i=ṁ iī=bì g||ám-χà
this=3M.SG.GEN tree=3M.SG.NOM thorn-PRPTV

この木にはトゲがある.

(33) ŋ|i=ṁ iī=bì g||ám=dzi ?úā-hā
this=3M.SG.GEN tree=3M.SG.NOM thorn=3F.PL.ACC carry;JNCT-PRF

この木にはトゲがある (lit. トゲを持っている).

(34) ŋ|i=ṁ iī=bì ts'éè jà g||ám
this=3M.SG.GEN tree=3M.SG.NOM be.sharp in thorn

この木はトゲが鋭い (lit. トゲにおいて鋭い).

(35) ?àbì ŋ|i=jā-hā

he be.skilled;JNCT-PRF

あの人には才能がある (並外れて技芸がある).

(36) k^hòè kà ŋ|i=jā-hā=mà
person REL be.skilled;JNCT-PRF=3M.SG.ACC

才能のある人 (優れた技芸者)

(37) *?àbì ŋ|i=sà ?úā-hā
he be.skilled=3F.SG.ACC carry;JNCT-PRF
非文 (「技能を持っている」とは表現できない.)

(38) *?àbì ŋ|i=sà !?únānā-hā
he be.skilled=3F.SG.ACC bring;JNCT-PRF

非文 (同上)

(39) ?àbì tsèrā-hā
he be.sick;JNCT-PRF

あの人は病いだ.

- (40) ʔàbì tsāā-χà
 he sickness-PRPTV
 彼は病気だ.
- (41) ʔàbì tsāā=sà ʔúā-hā
 he sickness=3F.SG.ACC carry;JNCT-PRF
 彼は病気だ (lit. 病気を持っている ; !ʔúnānā-hā でも可).
- (42) ʔàm |χáéʔò è kūrū
 3M.SG.GEN body NOM be.hot
 彼には熱がある (lit. 彼の体は熱い).
- (43) ʔàbì kūrū à |χáéʔò
 he be.hot in body
 彼には熱がある (lit. 彼は体において熱い).
- (44) *ʔàbì kūrū-χà à |χáéʔò
 he be.angry-PRPTV in body
 (非文) 彼は怒っている.

kūrū「熱い」は「怒っている」の意味も持つ。いずれの場合も kūrū に proprietive の-χá は付かない。

- (45) *ʔàbì kūrū=sà ʔúā-hā
 he be.angry=3F.SG.ACC carry;JNCT-PRF
 (非文) 彼は怒っている.
- (46) *ʔàm |χáéʔò è kūrū=sà ʔúā-hā
 3M.SG.GEN body NOM heat=3F.SG.ACC carry;JNCT-PRF
 (非文) 彼の体は熱を持っている.
- (47) k^hòè kà tsèrā-hā=mà
 person REL be.sick;JNCT-PRF=3M.SG.ACC
 病気の人 (lit. 患っている人)
- (48) *k^hòè kà tsāā-χà=mà
 person REL sickness-PRPTV=3M.SG.ACC
 (非文) 病気もちの人
- (49) k^hòè kà ʔē |χáéʔò kūrū=bì ʔī
 person REL 3C.SG.GEN body be.hot=3M.SG.NOM be
 熱のある人だ (lit. その体が熱い人だ).
- (50) ʔàbì |qχ'án à tsāā
 he be.bad in sickness
 彼は病気がひどい (lit. 病気において悪い).

- (51) tsqχ'āē=sì ?āāχò=sà ?āā
 blue=3F.SG.GEN clothes=3F.SG.ACC wear
 青い服を着る
- (52) k^hòè kà tsqχ'āē=sì ?āāχò=sà ?ānā-hā=mà
 person REL blue=3F.SG.GEN clothes=3F.SG.ACC wear;JNCT-PRF=3M.SG.ACC
 青い服を着ている男
- (53) ?àbì tsqχ'āē à ?āāχò
 he be.blue in clothes
 彼は服が青い (lit. 服において青い).
- (54) †āā†χái=dzì †ēnā-hā
 glasses=3F.PL.ACC enter;JNCT-PRF
 メガネをかけている
- (55) k^hòè kà †āā†χái=dzì †ēnā-hā=mà
 person REL glasses=3F.PL.ACC enter;JNCT-PRF=3M.SG.ACC
 メガネの男 (lit. メガネをかけた人)
- (56) †āā†χái=dzì ?úā-hā
 glasses=3F.PL.ACC carry;JNCT-PRF
 メガネを所有している
- (57) †āā†χái-χà
 glasses-PRPTV
 メガネを持っている
- (58) ?àbì g|úrí à †āā†χái
 he be.big in glasses
 彼はメガネが大きい (lit. 彼は眼鏡において大きい).
- (59) ?àbì g||àēkò=sà sēē-hā
 he wife=3F.SG.ACC take;JNCT-PRF
 彼には妻がいる.
- (60) ?àbì g||àēkò=sà ?úā-hā
 he wife=3F.SG.ACC carry;JNCT-PRF
 彼には妻がいる.
- (61) ?àbì g||àēkò-χà
 he wife-PRPTV
 彼には妻がいる (lit. 妻もちだ).

- (62) ʔàbì c'úí à g||àē(kò)
 he be.good in woman
 彼は妻が綺麗だ (lit. 妻において綺麗だ).
- (63) g||àē(kò) kà ʔàm-ɸì=sì c'úí
 wife REL 3M.SG.GEN-be.for=3F.SG.NOM be.good
 彼の妻は綺麗だ (lit. 彼のための女は綺麗だ).
- (64) ʔàbì ŋ!ūnā=n̄ |úá=nà ʔúā-hā
 he three=3C.PL.GEN child=3C.PL.ACC carry;JNCT-PRF
 彼には3人子供がいる (lit. 3人の子供を持っている).
- (65) ʔàbì |úá-χà
 he child-PRPTV
 彼には子供がいる (lit. 彼は子持ちだ).
- (66) *ʔàbì ŋ!ūnā=n̄ |úá-χà
 he three=3C.PL.GEN child-PRPTV
 非文
- (67) k^hòè kà ŋ!ūnā=n̄ |úá=nà ʔúā-hā=mà
 person REL three=3C.PL.GEN child=3C.PL.ACC carry;JNCT-PRF=3M.SG.ACC
 3人子供がいる男 (3人の子持ち)
- (68) ʔàbì ŋ!ūnā à |úá
 he be.three in child
 彼は子供が3人だ (lit. 彼は子供において3だ).
- (69) ʔàbì g!úrí à |úá
 he be.large in child
 彼は子供が大きい (lit. 彼は子供において大きい).
- (70) ||àmà=bì tsórō-χà
 beetle=3M.SG.NOM shell-PRPTV
 甲虫には甲羅がある.
- (71) ||àmà=bì tsórō=sà ʔúā-hā
 beetle=3M.SG.NOM shell=3F.SG.ACC carry;JNCT-PRF
 甲虫は甲羅を持っている.
- (72) ||àmà kà g!úrí=sì tsórō=sà ʔúā-hā=mà
 beetle REL big=3F.SG.GEN shell=3F.SG.ACC carry;JNCT-PRF=3M.SG.ACC
 大きな甲羅がある甲虫

- (73) *||àmà=bì g!úrī-tsóró-χà
 beetle=3M.SG.NOM big-shell-PRPTV
 非文
- (74) ||àmà=bì g!úrī jà tsóró
 beetle=3M.SG.NOM be.big in shell
 甲虫は甲羅が大きい (lit. 甲羅において大きい).
- (75) ŋ|ĩ=sì ts^háā=sì suukuri=sà ?úā-hā
 this=3F.SG.GEN water=3F.SG.NOM sugar=3F.SG.ACC carry;JNCT-PRF
 この水には砂糖が入っている.
- (76) ŋ|ĩ=sì ts^háā=sì suukuri-χà
 this=3F.SG.GEN water=3F.SG.NOM sugar-PRPTV
 この水には砂糖が入っている (lit. 砂糖入りだ).
- (77) ŋ|ĩ=sì ts^háā=sì g!úrī jà suukuri
 this=3F.SG.GEN water=3F.SG.NOM be.big in sugar
 この水には砂糖がたくさんが入っている.
- (78) ?àbì mārī=dzì ?úā-hā
 he money=3F.PL.ACC carry;JNCT-PRF
 彼はお金を持っている.
- (79) ?àbì mārī-χà
 he money-PRPTV
 彼は金もちだ.
- (80) ?àbì g!úrī jà mārī
 he be.big in money
 あの人はお金を持っている／金持ちだ.
- (81) tsā=m ?ābā=mà ?úā-hā
 2M.SG.GEN=Q dog=3M.SG.ACC carry;JNCT-PRF
 おまえのところには犬がいるか (lit. 犬を持っているか) ?
- (82) tsā=m ?ābā-χà
 2M.SG.GEN=Q dog-PRPTV
 おまえのところには犬がいるか (lit. 犬もちか) ?
- (83) ?ām=m ?ābā è ŋ|ūnā
 3M.SG.GEN=Q dog NOM be.three
 彼の犬は3匹だ.

(84) *ʔàbì ŋ!ūnā à ʔābā
 he be.three in dog
 (非文)

(85) *ʔàbì glúrī à ʔābā
 he be.big in dog
 (非文)

(86) ʔàm pírí è ŋ!ūnā
 3M.SG.GEN goat NOM be.three
 彼のヤギは3頭だ。

(87) ʔàbì ŋ!ūnā à pírí
 he be.three in goat
 彼のヤギは3頭だ。

(88) *ʔàbì ŋ!ūnā/glúrī à ʔābā
 he be.three/big in dog
 (非文)

この構文が「ヤギ3頭」や「金」では言えるのに「犬3匹」では非文となるのは、ヤギは財産であって、犬よりも金と同じカテゴリーに分類されるからだと考えられる。

(89) tsā=m pen=mà ʔúā-hā
 2M.SG.GEN=Q pen=3M.SG.ACC carry;JNCT-PRF
 おまえはペンを持っているか？

(90) tsā=m pen-χà
 2M.SG.GEN=Q pen-PRPTV
 おまえはペンを持っているか (lit. ペン持ちか) ？

(91) cī kà pen=bì c'úì
 1SG.GEN POSS pen=3M.SG.NOM be.good
 私のペンは良い。

(92) cī pen è c'úì
 1SG.GEN pen NOM be.good
 私のペンは良い。

(93) cìrè c'úì jà pen
 1SG.NOM be.good in pen
 私のペンは良い (lit. 私はペンにおいて良い)。

- (94) ʔàbì pen kà |ʔũ=ṁ kʰóè=ṁ jì=mà
 he pen REL other=3M.SG.GEN person=3M.SG.GEN be.for=3M.SG.ACC
 ʔúā-hā
 carry;JNCT-PRF
 彼は他の人のペンを持っている。
- (95) ʔàbì ts'èèqχ'āī
 he be.lucky
 彼は運がいい／ついている。
- (96) ʔàbì cì ts'èèqχ'āī
 he IPFV be.lucky
 彼はいつもついている。
- (97) ʔàbì ts'èèqχ'āī-hā
 he be.lucky;JNCT-PRF
 彼はついていた。
- (98) kʰóè kà (cì) ts'èèqχ'āī=mà
 person REL IPFV be.lucky=3M.SG.ACC
 (普段) 運のいい人／ついている人
- (99) cìrè ʔē !ʔānā-hā
 I 3C.SG.ACC know;JNCT-PRF
 私に良い考えがある... (lit. 私は知っている...) (グイ語訳困難).
- 「私に良い考えがある」はグイ語での表現が困難である。
- (100) cìrè c'úí †ʔān=sì |χùà háā
 I good thinking=3F.SG.GEN with exist
 私に良い考えがある... (lit. 私は良い考えとともにある) (グイ語訳困難).
- (101) ŋ|í=sì ŋ|úú=sì wà ŋ||úá=dzì †úī
 this=3F.SG.GEN land=3F.SG.GEN in stone=3F.PL.NOM be.many
 この土地は石が多い。
- (102) ŋ|úú kà ŋ||úá=dzì ʔē ʔò wà †úí=sà
 land REL stone=3F.PL.GEN 3C.SG.GEN place in be.many=3F.SG.ACC
 石の多い土地 (lit. その中に石の多い土地)
- (103) ŋ|í=sì ŋ|úú=sì wà cúú=bì cì gl'úrī-sī †úū
 this=3F.SG.GEN land=3F.SG.GEN in rain=3M.SG.NOM IPFV big-ADV LZ rain
 この土地は雨が多い (lit. 雨がよく降る)。

「雨が多い」とは言えない。

(104) ŋ!úú kà cúú=m̄ cì ?ē ?ò wà g!úrí-sī †úú=sà
land REL rain=3M.SG.GEN IPFV 3C.SG.GEN place in big-ADVLZ rain=3F.SG.ACC
雨が多い土地 (lit. その中で雨がよく降る土地)

(105) ŋ!í ŋ!úú=m̄ wà ŋ†úúí=dzi ŋ!únā
this hut=3M.SG.GEN in chair=3F.PL.NOM be.three
その小屋には椅子が3つ(ある)。

(106) ŋ!úú kà ŋ†úúí=dzi ?ē ?ò wà ŋ!únā=mà
hut REL chair=3F.PL.GEN 3C.SG.GEN place in be.three=3M.SG.ACC
椅子が3つある小屋 (lit. その中に椅子が3つの小屋)

(107) taafle=m̄ |χàè g†èbē=sì háá
table=3M.SG.GEN on spoon=3F.SG.NOM exist
テーブルの上にスプーンがある。

(108) ŋ!í=sì g†èbē=sì taafle=m̄ |χàè háá
this=3F.SG.GEN spoon=3F.SG.NOM table=3M.SG.GEN on exist
そのスプーンはテーブルの上にある。

(109) ŋ!í=m̄ pen=bì cī jì
this=3M.SG.GEN pen=3M.SG.NOM 1SG.GEN be.for
そのペンは私のだ。

(110) ŋ!í=m̄ pen=bì Dzérò=m̄ jì
this=3M.SG.GEN pen=3M.SG.NOM P.N.=3M.SG.GEN be.for
そのペンは二郎のだ。

(111) cī kà pen
1SG.GEN POSS pen
私のペン

(112) Dzérò=m̄ kà pen
P.N.=3M.SG.GEN POSS pen
二郎のペン

(113) pen kà cī jì
pen REL 1SG.GEN be.for
私のペン (私用ペン)

(114) pen kà Dzérò=m̄ jì
pen REL P.N.=3M.SG.GEN be.for
二郎のペン (二郎用ペン)

- (115) kole=sì c^hū jìō
 school=3F.SG.NOM PST.2 burn
 昨日, 学校で火事があった (lit. 学校は昨日焼けた).
- (116) cìrè ?ūsì tséé
 1SG.NOM FUT.2 work
 私は明日用事があります (lit. 私は明日働く).
- (117) xúm̩qχ'ài=sì wà g||ámá=bì háā-cìè qànù kà g||ámá=m̩
 earth=3F.SG.GEN in God=3M.SG.NOM exist-NEG story REL God=3M.SG.GEN
 jì =sì |úí kī=sì háā
 be.for =3F.SG.GEN only focus=3F.SG.NOM exist
 この世には神は存在しなくて, 神の話が存在するだけだ.
- (118) ?áā xò=sì wà |?ū=rì g|úí-qχ'úí=sà qχ'úí
 that place=3F.SG.GEN in other=3C.PL.NOM G|ui-language=3F.SG.ACC speak
 |?ū=rì jā cúá ?ēsà qχ'úí
 other=3C.PL.NOM and NEG 3F.SG.ACC speak
 そこにはグイ語を話す人もいるが, 話さない人もいる.
- (119) k^hòè kà cī kà c'úí-sī g|úí-qχ'úí=sà
 person REL 1SG.GEN than good-ADVLZ G|ui-language=3F.SG.ACC
 ŋɰjā-hā=bì háā
 master;JNCT-PRF=3M.SG.NOM exist
 私よりグイ語ができる人が (一人) います.
- (120) k^hòè kà cī kà c'úí-sī g|úí-qχ'úí=sà cì
 person REL 1SG.GEN than good-ADVLZ G|ui-language=3F.SG.ACC IPFV
 qχ'úí=bì háā
 speak=3M.SG.NOM exist
 私よりグイ語をうまく話す人が (一人) います.
- (121) k^hòè kà cī kà c'úí-sī g|úí-qχ'úí=sà cì
 person REL 1SG.GEN than good-ADVLZ G|ui-language=3F.SG.ACC IPFV
 qχ'úí=rì háā
 speak=3C.PL.NOM exist
 私よりグイ語をうまく話す人が (複数) います.
- (122) cìrè cì tsā tsáó
 1SG.NOM IPFV 2M.SG.ACC request
 あなたにお願いがあります (lit. 私はあなたに乞う).

- (123) *cìrè tsáo=sà ?úā-hā
 1SG.NOM request=3F.SG.ACC carry;JNCT-PRF
 (非文) tsáo は「要望」の意味で所有動詞の目的語にならない。
- (124) *cìrè tsáo-χà
 1SG.NOM request-PRPTV
 (非文) tsáo は要望の意味では PRPTV の-χà と使えない (尻尾 tsáo があるの意味になる)。
- (125) cúú kà bàrā=sì jì=mà
 rain REL rainy.season=3F.SG.GEN be.for=3M.SG.ACC
 雨季の雨 (lit. 雨季用の雨)
- (126) cúú kà ŋ||àō=sì jì=mà
 rain REL hot.rainy.season=3F.SG.GEN be.for=3M.SG.ACC
 高温雨季の雨 (lit. 高温雨季用の雨)
- (127) ||?áé kà Māū=sì jì=sà
 house REL P.N.=3F.SG.GEN be.for=3F.SG.ACC
 マウンの家 (lit. マウン用の家 ; 「マウン」は地名)
- (128) ?àm !ūū è !árī
 3M.SG.GEN walk NOM be.difficult
 彼の歩きは困難だ (lit. 歩行に困難がある)。
- (129) ?àm kà !ūū=sà
 3M.SG.GEN of walk=3F.SG.ACC
 彼の歩行
- (130) dzérá=m̄ qχ'áē
 bird=3M.SG.GEN cry
 鳥の鳴き声 【行為名詞 qχ'áē の主体が dzérá】
- (131) dzérá=m̄ kà qχ'áē=sà
 bird=3M.SG.GEN of cry=3F.SG.ACC
 鳥の鳴き声 【行為名詞 qχ'áē の主体が dzérá】
- (132) cúú=m̄ cíbè
 rain=3M.SG.GEN lightning
 稲妻 (lit. 雨の稲妻)
- (133) cúú=m̄ kà cíbè=sà
 rain=3M.SG.GEN of lightning=3F.SG.ACC
 稲妻 (lit. 雨の稲妻)

- (134) kúní=sì |húí cìrè !?ánā-hā
 car=3F.SG.GEN drive 1SG.NOM know;JNCT-PRF
 車の運転を私は知っている【行為名詞の客体】.
- (135) *kúní=sì kà |húí=sà cìrè !?ánā-hā
 car=3F.SG.GEN of drive=3F.SG.ACC 1SG.NOM know;JNCT-PRF
 (非文)
- (136) kúní=sà |húí=sà cìrè !?ánā-hā
 car=3F.SG.ACC drive=3F.SG.ACC 1SG.NOM know;JNCT-PRF
 車を運転することを私は知っている【行為名詞の客体】.
- (137) Khanta=m̄ kà ɣánkúrè=m̄ cìrè múú
 P.N.=3M.SG.GEN POSS stringed.instrument=3M.SG.ACC I see
 カンタのハンクレ (弦楽器) を私は見た.
- (138) *Khanta=m̄ ɣánkúrè cìrè múú
 P.N.=3M.SG.GEN stringed.instrument I see
 (非文)
- (139) Nakagawa=m̄ kúní
 P.N.=3M.SG.GEN car
 中川の車
- (140) Keeɣa=m̄ kà ||ū̄=sà
 P.N.=3M.SG.GEN POSS parent=3F.SG.ACC
 ケーハの母
- (141) Keeɣa=m̄ ||ū̄=sà
 P.N.=3M.SG.GEN parent=3F.SG.ACC
 ケーハの母
- (142) taafle=m̄ ||ɣàrà kà
 table=3M.SG.GEN side in
 テーブルの脇に
- (143) *taafle=m̄ kà ||ɣàrà kà
 table=3M.SG.GEN of side in
 (非文)
- (144) taafle=m̄ kà !?úā dā
 table=3M.SG.GEN of speaker's.side on
 テーブルの手前 (に)

- (145) *taafle=m̄n !ʔúā dā
 table=3M.SG.GEN speaker's.side on
 テーブルの手前 (に)
- (146) taafle=m̄n kà síí
 table=3M.SG.GEN in go
 テーブルに向かって行く
- (147) k^hóè=m̄n ŋʔórō-ʔò wà
 person=3M.SG.GEN back-place in
 人の背後に (で)
- (148) k^hóè=m̄n ŋʔórō-ʔò kà
 person=3M.SG.GEN back-place in
 人の背後に (で)
- (149) *k^hóè=m̄n kà ŋʔórō-ʔò wà
 person=3M.SG.GEN of back-place in
 (非文)
- (150) !áĩ!ánī=m̄n kà ||'áā=sì dánà ʔī
 plant.name=3M.SG.GEN of flower=3F.SG.GEN leaf be
 カエンカネの花の花びらだ.
- (151) !áòχò kà |χáā=sì cì ʔē kà qχ'óō-ʔè=mà
 knife REL meat=3F.SG.GEN IPFV it with eat-PASS=3M.SG.ACC
 肉を食べるためのナイフ (lit. それで肉が食べられるナイフ)
- (152) !áòχò kà |χáā=dzì cì ʔē kà †ʔéè-ʔè=sà
 knife REL meat=3F.PL.NOM IPFV it with cut-PASS=3F.SG.ACC
 肉を切るためのナイフ (lit. 肉がそれでいつも切られるナイフ)
- (153) ŋ||úá-ŋ!úū=sà
 stone-hut=3F.SG.ACC
 石でできた家 (lit. 石小屋)
- (154) g|áā-ŋ!úū=mà
 grass-hut=3M.SG.ACC
 草でできた小屋 (lit. 草小屋)
- (155) |qχ'áō=||ù kà †χájá=sà
 snake=3M.PL.GEN of paper=3F.SG.ACC
 蛇の本 (多義的: e.g. 蛇についての本, 蛇が持っている本)

- (156) gúè=m̄n kà ꜱχájǎ=sà
 ox=3M.SG.GEN of paper=3F.SG.ACC
 牛の本 (多義的: e.g. 牛についての本, 牛が持っている本)
- (157) ||'áā=sì ||qχ'áù
 flower=3F.SG.GEN smell
 花の匂い【産出物】
- (158) ?áā=sì qχ'úī=sì kà ꜱχájǎ=sà
 that=3F.SG.GEN language=3F.SG.GEN of paper=3F.SG.ACC
 あの言語の手紙【表現形式(?)】
- (159) Tswana qχ'úī=sì kà teetsera
 Tswana language=3F.SG.GEN of teacher
 ツワナ語の先生【職種】
- (160) !ód=sì kà ts^háā=sì ?ī
 puddle=3F.SG.GEN of water=3F.SG.NOM be
 水場の水【取得源】だ.
- (161) !ód=sì ts^háā ?ī
 puddle=3F.SG.GEN water be
 水場の水【取得源】だ.
- (162) cúú=m̄n kà |ám=bì ?ī
 rain=3M.SG.GEN of day=3M.SG.NOM be
 雨の日【状況】だ.
- (163) cúú=m̄n |ám ?ī
 rain=3M.SG.GEN day be
 雨の日【状況】だ.
- (164) ?ājākò kà Tanaka=mà
 chief REL P.N.=3M.SG.ACC
 首長の田中さん (i.e. 田中氏であるところの首長)
- (165) ?ājākò=mà Tanaka=mà
 chief=3M.SG.ACC P.N.=3M.SG.ACC
 首長の田中さん (同格)
- (166) cī jībāχō=mà N|óōsèè=mà
 1SG.GEN younger.brother=3M.SG.ACC P.N.=3M.SG.ACC
 私の弟のノーシェ (同格)

- (167) ?cī jìbāχō kà N|óòsèè=mà
 1SG.GEN younger.brother REL P.N.=3M.SG.ACC
 私の弟のノーシエ（適格性が落ちる）（？ ノーシエであるところの私の弟）
- (168) cī g||àē=sà Mimmi=sà
 1SG.GEN wife=3F.SG.ACC P.N.=3F.SG.ACC
 私の妻のメメ（同格）
- (169) *cī g||àē kà Mimmi=sà
 1SG.GEN wife REL P.N.=3F.SG.ACC
 （非文）（*メメであるところの私の妻）
- (170) cī g†ùā?ò=m̄ kà ||ū̄=m̄ kà kúní=sì ŋ!àrē è
 1SG.GEN friend=3M.SG.GEN of parent=3M.SG.GEN POSS car=3F.SG.GEN foot NOM
 c^hū !^húī-sì
 PST.2 pierce-REFL
 私の友人の父親の車のタイヤが昨日パンクした。

参考文献

Nakagawa Hiroshi. 2006. |Gui dialects and |Gui-speaking communities before the relocation from the CKGR. *Pula: Botswana Journal of African Studies* 20. 42–52.

執筆者連絡先 : kimura.kimihiko.q0@tufs.ac.jp, nhirosi@tufs.ac.jp, ono@reitaku-u.ac.jp

原稿受理日 : 2020 年 12 月 1 日

<特集「他動性」>

グイ語資料: 「他動性」 G|ui data: transitivity

木村 公彦¹, 中川 裕², 大野 仁美³
Kimihiko Kimura, Hiroshi Nakagawa, Hitomi Ono

¹ 東京外国語大学大学院総合国際学研究所
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

² 東京外国語大学大学院総合国際学研究院
School of Language and Cultural Studies, Tokyo University of Foreign Studies

³ 麗澤大学外国語学部
Faculty of Foreign Studies, Reitaku University

要旨: 『語研論集』特集 19 号の「他動性」の調査票に基づき収集した, コエ・クワディ語族グイ語の資料を提示する.

Abstract: This article provides G|ui data collected by using the questionnaire “Transitivity” designed by Shinjiro Kazama.

キーワード: コイサン諸語, 他動性

Keywords: Khoisan, transitivity

1. はじめに

『語研論集』特集 19 号の「他動性」の調査票を用いてグイ語 (G|ui) の資料を収集した. その結果を提示する. グイ語は, カラハリ言語帯 (コイサンの名でも知られる言語地域) の語族の一つ, コエ・クワディ語族における南西カラハリ・コエ語派ガナ語群の言語である. ボツワナ共和国ハンシー県やクエネング県にその話者集落は分布する. 話者数は全体で約 800 人と推定される (Nakagawa 2006).

資料は次のような手順で収集・記録し編集をした. はじめに, 調査票の項目 (日本語文) を中川裕が暫定的にグイ語訳した. それをもとに大野仁美と中川が母語話者 2 人との面談調査により, 実際の適格なグイ語文およびそれに類似・関連する文などの資料を引き出し記録した. なお, 母語話者との面談の過程で, 調査票の同項目に複数の表現が現れた場合は, それを列記してある. それら複数の表現は, 2 人の母語話者のいずれからでも適格であることを確認してある. 面談はグイ語で行った. 次に, 木村公彦が, その記録を集約し, 中川が編纂中のグイ語辞書および文法的形態素リストを用いて形態素ごとに分節し, グロス付けをした上で, 全体的な文書作成を行った. なお, 調査票の項目の日本語表現に含まれる, グイ語の社会的文脈に馴染まない単語は適宜入れ替えを行った.

次節の記述では, 同調査票で用いられた項目の順序になるべく従って資料を配列する. グイ語表示は音韻論的妥当性を満たす簡略音声表記であり, 記号は IPA に基づく. なお, この研究は JSPS 科研費の助成を受けている (課題番号: 16H01925, 18H00661, 18K18500, 18KK0006, 18K00582, 19H01264, 20H00011).



本稿の著作権は著者が保持し, クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します.
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

2. 資料

この節でグロスに用いる略号は以下のとおりである。

ACC = accusative, ADVLZ = adverbializer, ASSOC = associative, BEN = benefactive, C = common (男性と女性を含む), CAUS = causative, DU = dual, F = feminine, GEN = genitive, IPFV = imperfective, JUNCT = juncture, M = masculine, NEG = negative, NMLZ = nominalizer, NOM = nominative, PL = plural, PRF = perfect, PROG = progressive, PRPTV = propietive, PST.1 = 今日過去, PST.2 = 昨日過去, PST.3 = 遠過去, PST.N = 昨夜過去, Q = question marker, REL = relative, SG = singular.

なお、表示を簡潔にするために、英単語で性数格が十分に伝わる場合は、略号の組み合わせの代わりに英単語を用いている。

(1) ʔàbì ŋjì=m̄n g|ĩnĩ=mà |qχ'úũ

he this=3M.SG.GEN fly=3M.SG.ACC kill

彼はこのハエを殺した。

(2) ʔàbì ŋjì=m̄n booksi=mà k^húá

he this=3M.SG.GEN box=3M.SG.ACC break.vt

彼はこの箱を壊した。

(3) ʔàbì ŋjì=sì tsàà=sà ||'òò~||'òò

he this=3F.SG.GEN soup=3F.SG.ACC be.warm~CAUS

彼はこのスープを温めた。

温かい||'òòの使役置語形を用いて「温める」を表す。

(4) ʔàbì ŋjì=m̄n g|ĩnĩ=mà |qχ'úũ címā ʔàbì cúá ||ʔóó

he this=3M.SG.GEN fly=3M.SG.ACC kill but 3M.SG.NOM NEG die

彼はこのハエを殺したが、死ななかった。

(5) ʔàbì ŋjì=sì bolo=sà láì

he this=3F.SG.GEN ball=3F.SG.ACC kick

彼はこのボールを蹴った。

(6) ʔēsì ʔàm |ʔúá láì

she 3M.SG.GEN leg kick

彼女は彼の足を蹴った。

属格+名詞により所有を表す場合は、名詞に性数格の接語は付かない。

(7) ʔàbì ŋjì=m̄n k^hòè=mà g||ùù !ʔáákàgáák^hā

he this=3M.SG.GEN person=3M.SG.ACC bump.into on.purpose

彼はこの人にぶつかった(故意に)。

(8) ʔàbì ŋjì=m̄n k^hòè=mà g||ùù sáá jā

he this=3M.SG.GEN person=3M.SG.ACC bump.into fail and

彼はこの人とぶつかった(うっかり)。

- (9) cìrè cì ʔáā=n̄ kʰóè=nà múù
 I IPFV that=3C.PL.GEN person=3C.PL.ACC see
 あそこに人が数人見える。
- (10) ʔáā χò háā=n̄ kʰóè χà=nà cìrè cì múù
 that place exist=3C.PL.GEN person ASSOC=3C.PL.ACC I IPFV see
 私はあそこにいる人たちを見ている。
- (11) cìrè ŋjĩ=m̄ ŋlúū=mà mūwā-hā
 I this=3M.SG.GEN hut=3M.SG.ACC see;JUNCT-PRF
 私はこの小屋を見たことがある。
- (12) cìrè kʰóè=m̄ qχ'áē kúm
 I person=3M.SG.GEN cry hear
 誰かが叫んだのが聞こえた (今しがた) (lit. 私は人の悲鳴を聞いた)。
- (13) ʔàbì ŋjĩ=sì kúní=sì ts'óō kúm
 he this=3F.SG.GEN car=3F.SG.GEN noise hear
 彼はこの車の音を聞いた。
- (14) ʔàm cʰū cì kínī=m̄ kʰŋ=mà ʔàbì ŋjĩ múù
 3M.SG.GEN PST.2 IPFV look.for=3M.SG.GEN key=3M.SG.ACC he PST.N see
 彼は (なくした) カギを見つけた (lit. 彼は求めていたカギを見つけた)。
- (15) ʔàm cʰū tsáàtsērānā-hā=m̄ kʰŋ=mà ʔàbì ŋjĩ múù
 3M.SG.GEN PST.2 lose;JUNCT-PRF=3M.SG.GEN key=3M.SG.ACC he PST.N see
 彼は (なくした) カギを見つけた。
- (16) cʰū tsērā-hā=m̄ kʰŋ=mà ʔàbì múù
 PST.2 disappear;JUNCT-PRF=3M.SG.GEN key=3M.SG.ACC he see
 彼は (なくした) カギを見つけた。
- (17) ʔàbì ŋʔúúĩ=sà ts'áũ
 he chair=3F.SG.ACC make
 彼は椅子を作った。
- (18) ŋʔúúĩ=sà ||ʰáá
 chair=3F.SG.ACC carve
 椅子を作る。
- (19) ʔàbì cì báāsì=mà qχ'úá
 he IPFV bus=3M.SG.ACC wait
 彼はバスを待っている。

- (20) *ʔàbì k^hóè=m̄ àà=sà cì qχ'úá
 he person=3M.SG.GEN arrival=3F.SG.ACC IPFV wait
 非文：「人が来るのを待つ」とは言えない（名詞節を目的語にできない）。
- (21) *ʔàm àà=sà cìrè cì qχ'úá
 3M.SG.GEN arrival=3F.SG.ACC I IPFV wait
 非文：同上
- (22) cìrè cì k^hóè kà kùà àà=mà qχ'úá
 I IPFV person REL PROG come=3M.SG.ACC wait
 私は彼が来るのを待っている（lit. こちらに向かってきている人を待っている）。
- (23) ʔàbì cì páātsì=sà kínī
 he IPFV purse=3F.SG.ACC look.for
 彼は財布を探している。
- (24) ʔàbì ʔúī=dzì χò=dzì !ʔánā-hā
 he many=3F.PL.GEN thing=3F.PL.ACC know;JNCT-PRF
 彼はいろんなことを知っている。
- (25) cìrè ʔā=m̄ k^hóè=mà !ʔánā-hā
 I that=3M.SG.GEN person=3M.SG.ACC know;JNCT-PRF
 私はあの人を知っている。
- (26) ʔàbì ||ò g|úī qχ'úī=sà qχ'úī
 he trait G|ui language=3F.SG.ACC speak
 彼はグイ語ができる。
- (27) ʔàbì cì g|úī qχ'úī=sà qχ'úī
 he IPFV G|ui language=3F.SG.ACC speak
 彼はグイ語を話す。
- (28) ʔàbì g|úī qχ'úī=sà ŋ|jā-hā
 he G|ui language=3F.SG.ACC be.skilled.in;JNCT-PRF
 彼はグイ語が巧みだ。
- (29) ʔàbì g|úī qχ'úī=sà !ʔánā-hā
 he G|ui language=3F.SG.ACC know;JNCT-PRF
 彼はグイ語を知っている（話せる）。
- (30) tsā=m ʔē !ʔánā-hā cīā c^hū ŋ||āē=sì χò=sà
 2M.SG.GEN=Q it know;JNCT-PRF 1SG.GEN PST.2 state=3F.SG.GEN thing=3F.SG.ACC
 ʔà
 be
 あなたはきのう私が言ったことを覚えていますか？

- (31) cìrè ?à̀m kà námbà̀rā=sà |?ūrū
 I 3M.SG.GEN of phone.number=3F.SG.ACC forget
 私は彼の電話番号を忘れてしまった。

グイ語の所有構文には「属格+名詞」タイプ(例文(6)参照)と後置詞 kà を使う構文がある。譲渡可能なものには後者を使うのが普通。

- (32) ||ūũ=sì qχ'ō ?ēsì kà |úá χà=nà újā-hā
 parent=3F.SG.NOM PST.3 3F.SG.GEN of child ASSOC=3C.PL.ACC love;JNCT-PRF
 母は自分の子供たちを愛していた。

- (33) cìrè bànā̀nà=mà g||àmā-hā
 I banana=3M.SG.ACC like;JNCT-PRF
 私はバナナが好きだ。

- (34) cìrè ?ā̀=̀m k^hóè=mà tsχáá
 I that=3M.SG.GEN person=3M.SG.ACC hate
 私はあの人を嫌いだ(一時的に嫌いになった)。

- (35) cìrè ?ā̀=̀m k^hóè=mà tsχāā-hā
 I that=3M.SG.GEN person=3M.SG.ACC hate;JNCT-PRF
 私はあの人を嫌いだ(ずっと嫌いだ)。

- (36) tsχáá, †óó, †áá, ||qχ'āũ
 hate hate hate hate

これらの動詞は「嫌う」という感情を表すが、これらの間の意味的な差異は未調査である。

- (37) cìrè cì †||à̀bō=sèrà †?áā
 I IPFV sandal=3F.DU.ACC want
 私は靴が欲しい。

- (38) cìrè †||à̀bō=sèrà †?énā-hā
 I sandal=3F.DU.ACC want;JNCT-PRF
 私は靴が欲しい。

- (39) cìrè cì màrī=dzì kínī
 I IPFV money=3F.PL.ACC need
 私には今お金が要る。

- (40) cìrè màrī=dzì kínjā-hā
 I money=3F.PL.ACC need;JNCT-PRF
 私には今お金が要る(いつ金が手に入るかといつも考えている。必要になってからずっと)。

- (41) cī jībāχō=bì kì jīē=sà láé!àrè ?ēsì jā
 1SG.GEN younger.brother=3M.SG.NOM PST.1 mother=3F.SG.ACC cheat she and
 kūrū
 be.angry
 私の弟がうそをついたので私の母は怒った (lit. 私の弟が母を騙した, 母はそして怒った).
- (42) cī jībāχō=bì kì jīē=sà láé!àrè ?ēsì jā
 1SG.GEN younger.brother=3M.SG.NOM PST.1 mother=3F.SG.ACC cheat she and
 ?àmà kūrū-|χàè
 3M.SG.ACC be.angry-against
 私の弟がうそをついたので私の母は弟に対して怒った.
- (43) cī jībāχō=m̄ kà láé!àrè=sì kà jīē=sì
 1SG.GEN younger.brother=3M.SG.GEN of cheat=3F.SG.GEN by mother=3F.SG.NOM
 kì kūrū
 PST.1 be.angry
 私の弟がうそをついたことで, 私の母は怒った.
- (44) ?àbì cì ?ābā=dzì bēē
 he IPFV dog=3F.PL.ACC fear
 彼は犬を怖がる (彼は犬が怖い).
- (45) ?àbì ||ò ?ābā=dzì bēē
 he trait dog=3F.PL.ACC fear
 彼は犬が怖い (彼の性格: 犬が怒っていても怖い).
- 「犬が怖い」を表すのに, 例文 (44) は実際に犬を怖がるようなことが繰り返し起こっている場合に用いる. 一方例文 (45) は実際にはそういうことが起こっていても用いることができる.
- (46) ?àbì ?àm kà ||ūū=mà ŋ!áē-hā
 he 3M.SG.GEN of parent=3M.SG.ACC resemble;JNCT-PRF
 彼は父親に似ている.
- (47) ŋjì=sì !óò=sì kà ts^háā=sì q^hánā-χà
 this=3F.SG.GEN large.puddle=3F.SG.GEN of water=3F.SG.NOM salt-PRPTV
 この水たまりの水は塩分を含んでいる.
- (48) cī jībāχō=bì ŋààkà
 1SG.GEN younger.brother=3M.SG.NOM doctor
 私の弟は医者だ.
- (49) cī jībāχō=bì c^hū ŋààkà=sì wà †āā
 1SG.GEN younger.brother=3M.SG.NOM PST.2 doctor=3F.SG.GEN in enter
 私の弟は医者になった (lit. 医者に入った).

(50) ʔàbì c^hū ʔājā=sì wà ʔāā̄
 he PST.2 chiefship=3F.SG.GEN in enter
 彼は最近チーフになった (lit. チーフに入った).

(51) ʔàbì ||ò kúní=sà |húí
 he trait car=3F.SG.ACC drive
 彼は車の運転ができる.

(52) ʔàbì kúní=sì |húí !ʔánā-hā
 he car=3F.SG.GEN drive know;JNCT-PRF
 彼は車の運転ができる (運転を知っている).

(53) ʔàbì ||ò ts^háā=sì wà cùè
 he trait water=3F.SG.GEN in move
 彼は泳げる.

(54) ʔàbì q^hāñ=sà ŋ+ìjā-hā
 he talk=3F.SG.ACC be.skilled.in;JNCT-PRF
 彼は話をするのが上手だ.

(55) ʔàbì cì c'úí-sī q^hāñ
 he IPFV good-ADV LZ talk
 彼は上手に話をする.

(56) ʔàbì !àrò=sà |ʔūwā-hā
 he run=3F.SG.ACC not.know;JNCT-PRF
 彼は走るのが苦手だ (lit. 走りを知らない).

動詞を名詞化する場合には, 3F.SG の接語を使う.

(57) ʔàbì !árī à !àrò-ʔò
 he be.hard in run-NMLZ
 彼は走るのが苦手だ.

(58) ʔàm !àrò-ʔò è !árī
 3M.SG.GEN run-NMLZ NOM be.hard
 彼は走るのが苦手だ.

è は接語あるいは接尾辞の可能性があるが, 現時点では未決.

(59) ʔàbì kole=sì wà síí
 he school=3F.SG.GEN in go
 彼は学校に着いた.

- (60) ʔàbì kole=sì dā sí
 he school=3F.SG.GEN to go
 彼は学校に着いた.
- (61) ʔàbì jíò=mà !χán
 he road=3M.SG.ACC go.across
 彼は道を渡った／横切った.
- (62) ʔàbì ŋí=̀m jíò=̀m |χùà !úú
 he this=3M.SG.GEN road=3M.SG.GEN along go
 彼はこの道を通った.
- (63) ʔàbì ŋí=̀m jíò=mà †ēnā-hā
 he this=3M.SG.GEN road=3M.SG.ACC enter;JNCT-PRF
 彼はこの道を通った.
- (64) ʔàbì ||àbā-hā
 he be.hungry;JNCT-PRF
 彼はお腹を空かしている.
- (65) ʔàbì |émā-hā
 he be.thirsty;JNCT-PRF
 彼は喉が渴いている.
- (66) cìrè !q^hāī
 I be.cold
 私は寒い.
- (67) cìrè !q^hājā-hā
 I be.cold;JNCT-PRF
 私は寒い (寒くなった).
- (68) ʔē !q^hāī
 it be.cold
 寒い (ʔē がないと非文となる).
- (69) cī ʔò wà ʔē !q^hāī jā cī ʔò wà c^húú c^hīmā
 1SG.GEN inside in it be.cool and 1SG.GEN inside in pain NEG
 それは、私にとっては問題ではない (ので、私は辛い). そんなこと平気だ. ノープロブレム.

!q^hāī 「寒い」は精神状態が冷静であることを示すのにも用いられる.

- (70) ɲĩ |ám kà ?ē !q^hāī
 this day on it be.cold
 今日は寒い.
- (71) ɲĩ |ám è !q^hāī
 this day NOM be.cold
 今日は寒い.
- (72) cìrè ?àmà gùī
 I 3M.SG.ACC help
 私は彼を助けた (ùī ‘help’ でも可).
- (73) cìrè ?àmà gùī jā ?àm |χùà ?ē ?úú
 I 3M.SG.ACC help and 3M.SG.GEN with it carry
 私は彼がそれを運ぶのを手伝った (lit. 彼を助けて一緒にそれを運んだ).
- (74) cìrè ?àmà ùī jā ?àm |χùà ?ē ?úú
 I 3M.SG.ACC help and 3M.SG.GEN with it carry
 私は彼がそれを運ぶのを手伝った (lit. 彼を助けて一緒にそれを運んだ).
- (75) cìrè ?àmà ?ē ?úwā-máá
 I 3M.SG.ACC it carry;JNCT-BEN
 私は彼がそれを運ぶのを手伝った (lit. それを運んでやった).
- (76) cìrè ?àmà †?ūā†?ùà īχòsìjúmka
 I 3M.SG.ACC ask why
 私はその理由を彼に聞いた (lit. 「なぜ・・・」と彼に尋ねた).
- (77) cìrè ?àmà ?ā=sì χò=sà bóōrī
 I 3M.SG.ACC that=3F.SG.GEN thing=3F.SG.ACC tell
 私はそのことを彼に話した (bóōrīは ditransitive verb).
- (78) cìrè kì ?àm |χùà ||qχ’áē
 I PST.1 3M.SG.GEN with meet
 私は彼と会った.
- (79) cìrè cì síj jā ?àm |χùà ||qχ’áē
 I IPFV go and 3M.SG.GEN with meet
 私は彼に会いに行く.
- (80) cìrè χà síj ?àm |χùà ||qχ’áē
 I can go 3M.SG.GEN with meet
 私は彼に会いに行ける.

(81) cìrè kì ?àmà sáō||qχ'áē χantsi=sì wà
I PST.1 3M.SG.ACC come.across Ghanzi=3F.SG.GEN in
私はハンシーで彼と会った。

(82) cìrè cì sí jā ?àmà sáō||qχ'áē χantsi=sì wà
I IPFV go and 3M.SG.ACC come.across Ghanzi=3F.SG.GEN in
私は彼に会いにハンシーに行く。

(83) cìrè χà sí ?àmà sáō||qχ'áē χantsi=sì wà
I can go 3M.SG.ACC come.across Ghanzi=3F.SG.GEN in
私は彼と会いにハンシーに行ける。

参考文献

Nakagawa Hiroshi. 2006. |Gui dialects and |Gui-speaking communities before the relocation from the CKGR. *Pula: Botswana Journal of African Studies* 20, 42–52.

執筆者連絡先 : kimura.kimihiko.q0@tufs.ac.jp, nhirosi@tufs.ac.jp, ono@reitaku-u.ac.jp

原稿受理日 : 2020 年 12 月 1 日

<特集「〔連用修飾的〕複文」>

グイ語資料: 「〔連用修飾的〕複文」 G|ui data: subordination (adverbial clause)

木村 公彦¹, 中川 裕², 大野 仁美³
Kimihiko Kimura, Hiroshi Nakagawa, Hitomi Ono

¹ 東京外国語大学大学院総合国際学研究所
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies
² 東京外国語大学大学院総合国際学研究院
School of Language and Cultural Studies, Tokyo University of Foreign Studies
³ 麗澤大学外国語学部
Faculty of Foreign Studies, Reitaku University

要旨: 『語研論集』特集 20 号の「〔連用修飾的〕複文」の調査票に基づき収集した、コエ・クワディ語族グイ語の資料を提示する。

Abstract: This article provides G|ui data collected by using the questionnaire “Subordination (adverbial clause)” designed by Shinjiro Kazama.

キーワード: コイサン諸語, 複文, 副詞節, 従属節

Keywords: Khoisan, subordination, adverbial clause, dependent clause

1. はじめに

『語研論集』特集 20 号の「〔連用修飾的〕複文」の調査票を用いてグイ語 (G|ui) の資料を収集した。その結果を提示する。グイ語は、カラハリ言語帯 (コイサンの名でも知られる言語地域) の語族の一つ、コエ・クワディ語族における南西カラハリ・コエ語派ガナ語群の言語である。ボツワナ共和国ハンシー県やクエネング県にその話者集落は分布する。話者数は全体で約 800 人と推定される (Nakagawa 2006)。

資料は次のような手順で収集・記録し編集をした。はじめに、調査票の項目 (日本語文) を中川裕が暫定的にグイ語訳した。それをもとに大野仁美と中川が母語話者 2 人との面談調査により、実際の適格なグイ語文およびそれに類似・関連する文などの資料を引き出し記録した。なお、母語話者との面談の過程で、調査票の同項目に複数の表現が現れた場合は、それを列記してある。それら複数の表現は、2 人の母語話者のいずれからも適格であることを確認してある。面談はグイ語で行った。次いで、木村公彦が、その記録を集約し、中川が編纂中のグイ語辞書および文法的形態素リストを用いて形態素ごとに分節し、グロス付けをした上で、全体的な文書作成を行った。なお、調査票の項目の日本語表現に含まれる、グイ語の社会的文脈に馴染まない単語は適宜入れ替えを行った。

次節の記述では、同調査票で用いられた項目の順序になるべく従って資料を配列する。グイ語表示は音韻論的妥当性を満たす簡略音声表記であり、記号は IPA に基づく。なお、この研究は JSPS 科研費の助成を受けている (課題番号: 16H01925, 18H00661, 18K18500, 18KK0006, 18K00582, 19H01264, 20H00011)。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

2. 資料

この節でグロスに用いる略号は以下のとおりである。

ACC = accusative, ADVLZ = adverbializer, ASSOC = associative, C = common (男性と女性を含む), DU = dual, EMPH = emphatic, F = feminine, FUT.1 = 今日未来, FUT.2 = 明日未来, GEN = genitive, INCL = inclusive, IPFV = imperfective, IRR = irrealis, JUNCT = juncture, LOC = locative, M = masculine, NEG = negative, NOM = nominative, PASS = passive, PL = plural, PRF = perfect, PROG = progressive, PST = past, PST.1 = 今日過去, PST.2 = 昨日過去, PST.3 = 遠過去, REFL = reflexive, REL = relative, SG = singular.

なお、表示を簡潔にするために、英単語で性数格が十分に伝わる場合は、略号の組み合わせの代わりに英単語を用いている。

- (1) ?ēsì cì òē |ám kà †?úúχò=dzì ŋ||āē cíó
she IPFV all day on food=3F.PL.ACC sing;JUNCT pound

彼女はいつも歌を歌いながら食べ物を杵つきする（「歌いつき」する）。

この例文では「歌う」と「杵つき」が一体化された動作であることを示す。

- (2) òē |ám kà ?ēsì cì |ī=sà ŋ||āē jā cì †?úúχò=sà cíó
all day on she IPFV song=3F.SG.ACC sing and IPFV food=3F.SG.ACC pound

彼女はいつも歌を歌いながら食べ物を杵つきする（歌ってはつき、歌ってはつきを繰り返す）。

このようにアスペクト詞 cì (imperfective) をそれぞれの動詞に用いた場合は、それらの動作がオーバーラップして行われていることを示す。

- (3) cìrè c^hū !χāē=sì kà ||?áékū jā video=sà múù jā
I PST.2 night=3F.SG.GEN at get.home and television=3F.SG.ACC see and
||?úùm
sleep

私は昨日は夜に家に帰って、少しテレビを見て（から）、寝ました。

!χāē=sì kà に見られるように、後置詞がつく名詞は属格となる。アスペクト詞の不使用は完結相を表す。完結相の節を等位接続するとそれぞれの動作が継起的に実現したことを示す。

- (4) cìrè c^hū jíò=m ?ò wà |qχ'áé jā !^hāē-?è
I PST.2 road=3M.SG.GEN inside in fall.down and stab-PASS

私は昨日道で転んで、ケガをしてしまった。

- (5) ŋ|í |ám òē cī cījāχō=bì kì bentere=sì wà síí
this day all 1SG.GEN elder.brother=3M.SG.NOM PST.1 shop=3F.SG.GEN in go
cī jībāχō=bì jā kole=sì wà síí
1SG.GEN younger.brother=3M.SG.NOM and school=3F.SG.GEN in go

今日も兄は店に行き、弟は学校に行った。

- (6) ŋjĩ |ám kà ?àbì |éba=sà |éba jā lúũ
 this day on he hat=3F.SG.ACC wear and walk
 (あの人は) 今日は帽子をかぶって (かぶったままで) 歩いていた.

- (7) swantaxa kà cìrè cì ||āō †χájǎ=dzì bàrà jā cì
 Sunday on I IPFV usually book=3F.PL.ACC read and IPFV
 video=sà múũ
 television=3F.SG.ACC see
 (私は) 日曜日にはいつも本を読んだり, テレビを見たりする.

例文 (2) と同様にオーバーラップする 2 つの動作を表す. 2 つ目の cì がなければ, 「読書の後にテレビを見る」の意味になる.

- (8) q'úni=sì cì ts'áũ-sì kè tsχārā kà tsàm
 noon=3F.SG.NOM IPFV make-REFL because hurry in 1M.INCL.DU.IRR
 †?úúχò=dzì ?ābāχō
 food=3F.PL.ACC prepare
 昼になるので, 二人で急いで飯の支度をしよう.

- (9) cī màā è c^hū c^húũ cìrè jā sūũ sí ||?úm cīā
 1SG.GEN head NOM PST.2 pain I and immediately go sleep 1SG.GEN
 ||āō ?ē kà ||?úm-c^hīmā=sì kémá=sì kà
 usually it at sleep-NEG=3F.SG.GEN time=3F.SG.GEN at
 昨日は頭が痛かったので, いつもより早く寝ました (lit. 私の頭が痛かったので私は早く寝た, いつもは寝ない時間に).

NB: 重文を作る等位接続詞 jā は, 後続文の主語の後に現れる.

- (10) cìrè ŋjĩ |ám g!úrī-sī suukuri=sà †āā cīā ||āō ?ēsà
 I this day big-ADVLZ sugar=3F.SG.ACC enter 1SG.GEN usually 3F.SG.ACC
 †āā k^hūnā
 enter as
 いつものように今日砂糖をたくさん入れた.

- (11) *cìrè ŋjĩ |ám g!úrī-sī suukuri=sà †āā cīā ||āō ?ēsà
 I this day big-ADVLZ sugar=3F.SG.ACC enter 1SG.GEN usually 3F.SG.ACC
 †āā-c^hīmā k^hūnā
 enter-NEG as
 非文: この言い方はしない.

「いつも~するのようなやり方で~した」とは言えるが, 「いつも~しないようなやり方で~した」とは言えないことを記録しておく.

- (12) ʔàbì síì cì †χájǎ=sà ‖ʔáí
 he go IPFV paper=3F.SG.ACC buy
 あの人は本を買いに行った (おそらく書店に向かっている).
- (13) ʔàbì kùm=sà ‖χórē k^hóè χà=rì jā !qáēqχ'àràχò=sì
 he window=3F.SG.ACC open person ASSOC=3C.PL.NOM and outside=3F.SG.GEN
 wà c'úí-sī †χáísènà
 in good-ADVLZ look.out.over
 彼は外がよく見渡せるように窓を開けた (lit. 彼は窓を開けた, 人々は外をよく見渡せる).
- (14) ʔàbì kùm=sà ‖χórē k^hóè χà=rì jā !qáēqχ'àràχò=sà
 he window=3F.SG.ACC open person ASSOC=3C.PL.NOM and outside=3F.SG.ACC
 c'úí-sī múú
 good-ADVLZ see
 彼は外がよく見えるように窓を開けた (lit. 彼は窓を開けた, 人々は外をよく見る).

以下に場所を表す表現を記録する. 調査票のトピックとは関連しないが, 形態素境界も示しておく.

- (15) !qáē-qχ'àrà-χò
 outside-LOC-place
 野外の場所

例 (15) は, 以下の例 (16) のようにパラフレーズできる.

- (16) χúm-qχ'ài kà !qáē-qχ'àrà háǎ=sà
 sand-surface REL outside-LOC exist=3F.SG.ACC
 野外の場所
- (17) !ʔòð-qχ'àrà-χò=sà
 under-LOC-place=3F.SG.ACC
 何かの下の場所
- (18) †ʔám-qχ'àrà-χò=sà
 above-LOC-place=3F.SG.ACC
 何かの上の場所
- (19) ŋí=sì ŋ'úú=sì wà bàrā=sì kà cúú=bì
 this=3F.SG.GEN country=3F.SG.GEN in rainy.season=3F.SG.GEN in rain=3M.SG.NOM
 cì g'úrī-sī †úú
 IPFV large-ADVLZ rain
 ここでは夏になると, よく雨が降ります (lit. この土地では夏によく雨が降る).

- (20) ɲĩ̀=̀sì ɲlúú́=̀sì wà ʔē bàrā kà cúú=bì
 this=3F.SG.GEN country=3F.SG.GEN in it be.rainy.season when rain=3M.SG.NOM
 cì ɲlúrī-sī ʔúū
 IPFV large-ADV LZ rain

ここでは夏になると、よく雨が降ります (lit. この土地では夏によく雨が降る).

- (21) ɲĩ̀=̀sì ɲlúú́=̀sì wà ʔē ||ò bàrā cúú=bì
 this=3F.SG.GEN country=3F.SG.GEN in it trait be.rainy.season rain=3M.SG.NOM
 jā cì ɲlúrī-sī ʔúū
 and IPFV large-ADV LZ rain

ここでは夏になると、よく雨が降ります (lit. この土地では夏によく雨が降る).

- (22) kù̀m̀=̀sà kʰóè=̀m̀ cì ||χórē kà ʔáá kà
 window=3F.SG.ACC person=3M.SG.GEN IPFV open when wind REL
 !qʰā̀=̀sì cì ʔā̀
 be.cold=3F.SG.NOM IPFV enter

窓を開けると、冷たい風が入って来る。

従属節の主語は属格で示される。また、アスペクト詞 *cì* を用いると、「窓を開けている途中で、開け終わる前に」の意味になる。

- (23) kù̀m̀
 window (lit. hole)
 窓

「窓」を表すのに (借用語でなければ) 「穴」と同じ語を用いる。

- (24) cìrè ||à̀bì=̀sà !ʔábò jā ||ʔáé=̀sà múú̀
 I dune=3F.SG.ACC climb.up and village=3F.SG.ACC see
 坂を上ると村が見えた。

例文 (22) と異なり、この例文はアスペクト詞 *cì* を使っていないので、「坂を登り終えたところで今見えた」の意味である。

- (25) cìrè cì ||à̀bì=̀sà !ʔábò jā cì ||ʔáé=̀sà múú̀
 I IPFV dune=3F.SG.ACC climb.up and IPFV village=3F.SG.ACC see
 坂を上ると村が見える (見えている)。

この例文は両方の節にアスペクト詞 *cì* を用いているので、坂を上っている途中で村が見えているという意味である。

- (26) !ʔúū=̀sì kà ʔē ʔūsì ʔúū kà cìrè ʔūsì cúá ʔā χò síf
 tomorrow=3F.SG.GEN on it FUT.2 rain when I FUT.2 NEG that place go
 明日雨が降ったら、私はそこに行かない。

(27) !ʔúú=sì kà ʔē ʔūsì ʔúú cìrè jā cúá ʔā χò síí
 tomorrow=3F.SG.GEN on it FUT.2 rain I and NEG that place go
 明日雨が降ったら、私はそこに行かない。

(28) kūmā dà χà kì qχ'ájà ʔχ'ái nì
 hearsay 1SG.IRR can PST.1 already wake.up and
 もっと早く起きればよかったなあ。

反実仮想（現実とは異なる願望）は、「[hearsay]+[IRR]+χà+[PST]+nì」の構文で表現される。なお、この構文は、文末の等位接続詞の後は表現されない「言いさし」的表現である。他の言語で観察される類似の表現、従属節による「言いさし」insubordination は、この言語では観察されない。

(29) kūmā dà χà qχ'ò cúá ʔā χò síí nì
 hearsay 1SG.IRR can PST.3 NEG that place go and
 あんなところへ行かなければよかった。

(30) |úí=bì cì |úí=m̄ wà ʔāā ʔē jā cì |ám̄
 one=3M.SG.NOM IPFV one=3M.SG.GEN in enter it and IPFV be.two
 1 に 1 を足せば、2 になる (lit. 1 が 1 の中に入る、それは 2 だ)。

(31) |úí=bì cì |úí=m̄ |χ'ùà ||qχ'áē ʔētsèrà jā cì |ám̄
 one=3M.SG.NOM IPFV one=3M.SG.GEN with connect 3M.DU.NOM and IPFV be.two
 1 に 1 を足せば、2 になる (lit. 1 が 1 と混ざる、それらは 2 だ)。

(32) ʔā χò síí nì gl'úí=sì kà cíā ʔí
 that place go and telephone=3F.SG.GEN by 1SG.ACC call
 あそこに着いたら私に電話をしろ (lit. そこに着け、そして私を電話で呼べ)。

(33) tsā ʔā χò síí kà gl'úí=sì kà cíā ʔí
 2M.SG.GEN that place go if telephone=3F.SG.GEN by 1SG.ACC call
 あそこに着いたら電話をしろ。

(34) nì tsā ʔā χò síí kà gl'úí=sì kà cíā ʔí
 so.that 2M.SG.GEN that place go if telephone=3F.SG.GEN by 1SG.ACC call
 あそこに着いたら電話をしろ。

(35) nì ʔā χò síí nì gl'úí=sì kà cíā ʔí
 so.that that place go and telephone=3F.SG.GEN by 1SG.ACC call
 あそこに着いたら電話をしろ。

(36) swantaxa kà ciā ʔūsì ʔā χò síí
 Sunday on 1C.INCL.PL.IRR FUT.2 that place go
 日曜日に、みんなで公園に行きたいなあ (行こう)。

- (37) swantaxa kà cià òē ʔūsì ʔā χò sí
 Sunday on 1C.INCL.PL.IRR all FUT.2 that place go
 日曜日には, みんなそろってあそこに行きたいなあ (行こう).
- (38) ʔē χà ʔūsì ʔúū=sà cìrè cì bèē
 it can FUT.2 rain=3F.SG.ACC I IPFV be.afraid
 明日雨が降ったら困るなあ (lit. 明日雨が降ることを恐れている).
- (39) tsā hī kùà cī kà ||ʔáé=sà jírā kà
 2M.SG.GEN FUT.1 PROG 1SG.GEN of house=3F.SG.ACC visit if
 g!úí=m kà cíā bóōrī nì ŋ||áú sí
 telephone=3M.SG.GEN by 1SG.ACC tell and afterwards go
 家に来るなら, 電話をしてから来てください (lit. 電話でそれを伝えて, それから来い).
- 「伝える」 bóōrī を使う. ʔú 「呼ぶ」 ではこのような意味にならない. 以下, 関連して収集した例を記録しておく.
- (40) g!úí=sì hī kùà qχ'áē kà nì hī cíā bóōrī
 telephone=3F.SG.GEN FUT.1 PROG cry if then FUT.1 1SG.ACC tell
 (もうすぐ電話のベルが鳴るので) 電話が鳴ったら, 教えてください.
- (41) g!úí=sì χà hī qχ'áē kà nì cíā ʔē bóōrī
 telephone=3F.SG.GEN may FUT.1 cry if then 1SG.ACC it tell
 (もしかしたらベルが鳴るかもしれないので) もし電話が鳴ったら, それを私に教えてください.
- (42) tsī tséé-c^hīmā kè cúá ʔúúχò=dzì ʔúú
 2M.SG.NOM work-NEG because NEG food=3F.PL.ACC eat
 働かざるもの食うべからず (lit. あなたは働かないから, 食事をするな).
- (43) tsā tséé-c^hīmā kà cúá ʔúúχò=dzì ʔúú
 2M.SG.GEN work-NEG if NEG food=3F.PL.ACC eat
 働かざるもの食うべからず (lit. あなたは働かないなら, 食事をするな).
- (44) kūmā mārī=dzì χà kì ʔúí nì
 hearsay money=3F.PL.IRR can PST.1 be.many and
 もう少しお金があったらなあ (lit. お金がたくさんあったらなあ).
- (45) kūmā dà χà kì g!úí=m mārī=mà ʔúā-hā nì
 hearsay 1SG.IRR can PST.1 big=3M.SG.GEN money=3M.SG.ACC carry;JUNCT-PRF and
 たくさんのお金があったらなあ (lit. 私がたくさんのお金を持っていたらなあ).

例文 (44), (45) は, 例文 (28) でのべた反実仮想の構文の例である.

(46) ʔē χà c'úì ŋ|ĩ=sì òē tsā ʔʔúú kà
 it may be.good this=3F.SG.GEN all 2M.SG.GEN eat if
 これも食べたら？ (lit. 良いだろう，あなたがこれも食べたら)

(47) ʔē χà c'úì tsā cì ʔʔáñ=sì χò=sà tsā
 it may be.good 2M.SG.GEN IPFV want=3F.SG.GEN thing=3F.SG.ACC 2M.SG.GEN
 cì ts'áũ kà
 IPFV do if
 (やりたいなら自分の) 好きなようにやれば？ (lit. あなたは望むことをすれば良いだろう)

ʔē χà c'úì 「良いだろう」を省略して従属節による「言いさし」を作ると非文で意味不明となる。

(48) ŋ|ĩ=sì χalasi=sì cì ʔ^hēē címā cúá !qārā-sì
 this=3F.SG.GEN glass=3F.SG.NOM IPFV fall but NEG break-REFL
 このガラスは落としても割れない (lit. このガラスは落ちる，でも割れない).

NB: !qārā-sì (lit. break(transitive)-itself)

(49) ŋ|ĩ=sì apolo=sì dúrú címā cúá qārē
 this=3F.SG.GEN apple=3F.SG.NOM be.expensive but NEG be.sweet
 このリンゴは高いのに甘くない.

(50) ŋ|ĩ=sì apolo=sì dúrú címā qārē-c^hĩmā
 this=3F.SG.GEN apple=3F.SG.NOM be.expensive but be.sweet-NEG
 このリンゴは高いのに甘くない.

(51) cìrè kì ʔàmà jírá címā ʔàbì háá-cìè
 I PST.1 3M.SG.ACC visit but he exist-NEG
 彼の家に行ってみたが，彼はいなかった.

この言語には複数の否定の表現がある．詳しくは，大野・中川 (2018) を参照されたし．

(52) cìrè cì ʔàmà qχ'úá |ʔũkà ʔàbì hĩ àà k^hùà
 I IPFV 3M.SG.ACC wait maybe he FUT.1 come because
 あの方が来るまで，私はここで待っています (lit. 私は彼を待っている，きっと彼は来るから).

(53) *cìrè cì ʔàmà qχ'úá ʔàbì àà c^hēm k^hā
 I IPFV 3M.SG.ACC wait he come before EMPH
 非文：imperfective と c^hēm との組み合わせ不可.

(54) cìrè cì ʔàmà qχ'úá ʔàbì àà-c^hĩmā k^hùà
 I IPFV 3M.SG.ACC wait he come-NEG because
 私は彼が来ないので待っている (正しい表現だが，「彼が来るまで」という意味はない).

(55) ʔàm háā-ciè k^hāmākà cìrè cì ʔàmà qχ'úá
3M.SG.GEN exist-NEG because I IPFV 3M.SG.ACC wait

あの人があるまで, 私はここで待っています (lit. 彼がいないので待っている. 「彼があるまで」の意味はない).

(56) cìrè hī †ʔúúχò=sà ŋ|úá ʔàbì àà c^hēm k^hā
I FUT.1 food=3F.SG.ACC cook he come before EMPH

あの人があるまでに, 食事を作っておきます.

参考文献

- Nakagawa Hiroshi. 2006. |Gui dialects and |Gui-speaking communities before the relocation from the CKGR. *Pula: Botswana Journal of African Studies* 20. 42–52.
大野仁美 & 中川裕. 2018. 「グイ語資料: 否定, 形容詞と連体修飾複文」 『語学研究所論集』 23. 267–278.

執筆者連絡先: kimura.kimihiko.q0@tufs.ac.jp, nhirosi@tufs.ac.jp, ono@reitaku-u.ac.jp

原稿受理日: 2020年12月1日

<特集「情報標示の諸要素」>

グイ語資料: 「情報標示の諸要素」 G|ui data: information structure markers

木村 公彦¹, 中川 裕², 大野 仁美³
Kimihiko Kimura, Hiroshi Nakagawa, Hitomi Ono

¹ 東京外国語大学大学院総合国際学研究所
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies
² 東京外国語大学大学院総合国際学研究院
School of Language and Cultural Studies, Tokyo University of Foreign Studies
³ 麗澤大学外国語学部
Faculty of Foreign Studies, Reitaku University

要旨: 『語研論集』特集 22 号の「情報標示の諸要素」の調査票に基づき収集した、コエ・クワディ語族グイ語の資料を提示する。

Abstract: This article provides G|ui data collected by using the questionnaire “Information structure markers” designed by Shinjiro Kazama.

キーワード: コイサン諸語, 情報構造

Keywords: Khoisan, information structure

1. はじめに

『語研論集』特集 22 号の「情報標示の諸要素」の調査票を用いてグイ語 (G|ui) の資料を収集した。その結果を提示する。グイ語は、カラハリ言語帯 (コイサンの名でも知られる言語地域) の語族の一つ、コエ・クワディ語族における南西カラハリ・コエ語派ガナ語群の言語である。ボツワナ共和国ハンシー県やクエネング県にその話者集落は分布する。話者数は全体で約 800 人と推定される (Nakagawa 2006)。

資料の収集・記録・編集の要領は次の通りである。最初に中川裕が調査票の項目 (日本語文) を暫定的にグイ語訳し、それをもとに大野仁美と中川が母語話者 2 人との面談調査 (媒介言語はグイ語) により、実際の適格なグイ語文およびそれに類似・関連する文などの資料を引き出し記録した。なお、母語話者との面談の過程で、調査票の同項目に複数の表現が現れた場合は、それを列記してある。それら複数の表現は、2 人の母語話者のいずれからも適格であることを確認してある。次いで、木村公彦が、その記録を集約し、中川が編纂中のグイ語辞書および文法的形態素リストを用いて形態素ごとに分節し、グロス付けをした上で、全体的な文書作成を行った。なお、調査票の項目の日本語表現に含まれる、グイ語の社会的文脈に馴染まない単語は適宜入れ替えを行った。

次節の記述では、同調査票で用いられた項目の順序になるべく従って資料を配列する。グイ語表示は音韻論的妥当性を満たす簡略音声表記であり、記号は IPA に基づく。なお、この研究は JSPS 科研費の助成を受けている (課題番号: 16H01925, 18H00661, 18K18500, 18KK0006, 18K00582, 19H01264, 20H00011)。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

2. 資料

この節でグロスに用いる略号は以下のとおりである。

ACC = accusative, ADVLZ = adverbializer, ASSOC = associative, C = common (男性と女性を含む), CAUS = causative, COP = copula, DU = dual, EMPH = emphatic, EXCL = exclusive, F = feminine, FOC = focus, FUT.1 = 今日未来, FUT.2 = 明日未来, GEN = genitive, INCL = inclusive, IPFV = imperfective, IRR = irrealis, JUNCT = juncture, M = masculine, NEG = negative, NOM = nominative, P.N. = proper noun, PASS = passive, PL = plural, PRF = perfect, PROG = progressive, PST.1 = 今日過去, PST.2 = 昨日過去, PST.N = 昨夜過去, Q = question marker, QUOT = quotative, REFL = reflexive, SG = singular.

なお、表示を簡潔にするために、英単語で性数格が十分に伝わる場合は、略号の組み合わせの代わりに英単語を用いている。

- (1) ɲ|ĩ=sì plaasi=sì wà ʔúúχò=dzì cì c'úì-sī ts'áũ-sì
 this=3F.SG.GEN farm=3F.SG.GEN in food=3F.PL.NOM IPFV good-ADVLZ make-REFL
 júm kà ɲ|ĩ=sì plaasi=sì χà dǘrú
 reason by this=3F.SG.GEN farm=3F.SG.NOM can be.expensive
 この農場は野菜がよく育つ、だからこの農場は高いだろう。

- (2) ɲ|ĩ=sì plaasi=sì wà ʔúúχò=dzì cì c'úì-sī ts'áũ-sì
 this=3F.SG.GEN farm=3F.SG.GEN in food=3F.PL.NOM IPFV good-ADVLZ make-REFL
 júm kà ɲ|ĩ=sì plaasi=sì χà g'lúrí jà mǎrí
 reason by this=3F.SG.GEN farm=3F.SG.NOM can be.big in money
 この農場は野菜がよく育つ、だからこの農場は値段が高いだろう。

- (3) ɲ|ĩ=sì plaasi=sì wà ʔúúχò=dzì cì c'úì-sī ts'áũ-sì
 this=3F.SG.GEN farm=3F.SG.GEN in food=3F.PL.NOM IPFV good-ADVLZ make-REFL
 ʔēsì jǎ cì dǘrú-sī ||ʔáí-kàχō-ʔè
 it and IPFV expensive-ADVLZ buy-CAUS-PASS
 この農場は野菜がよく育つ、だからそれは高い値段で売れる。

第2文の主語 ʔēsì は農場を指す。例文(4)も同様である。

- (4) ɲ|ĩ=sì plaasi=sì wà ʔúúχò=dzì cì c'úì-sī ts'áũ-sì
 this=3F.SG.GEN farm=3F.SG.GEN in food=3F.PL.NOM IPFV good-ADVLZ make-REFL
 ʔēsì jǎ cì g'lúrí=dzì mǎrí=dzì kà ||ʔáí-kàχō-ʔè
 it and IPFV big=3F.PL.GEN money=3F.PL.GEN by buy-CAUS-PASS
 この農場は野菜がよく育つ、だからそれは高い値段で売れる。

- (5) cī mǎǎ è c^húú k^hùà cìrè hī cúá tséé
 1SG.GEN head NOM pain because I FUT.1 NEG work
 私は頭が痛いから、今日は働かない。

- (6) ɲ|íí=ìṁ k^hóè=ìṁ |úí kī=bì kì nààkò=sì
 that=3M.SG.GEN person=3M.SG.GEN one FOC=3M.SG.NOM PST.1 time=3F.SG.GEN
 kà àà
 on come

今日, あの人だけ, 時間通りに来た.

他には該当する人・物がないことを示す場合は|úí「だけ」を用いる. それに kī (焦点マーカ) が加わると「こそ」のような意味が付加される (文脈が必要になる). 以下の例文 (7) も同様である.

- (7) ɲ|íí=ìṁ k^hóè=ìṁ |úí kī=bì nààkò=sì kà àà
 that=3M.SG.GEN person=3M.SG.GEN one FOC=3M.SG.NOM time=3F.SG.GEN on come
 あの人だけ, 時間通りに来た.

- (8) qχ'áíjà k^hóè χà=rì c^hū nààkò=sà cíēχōrō-hā
 already person ASSOC=3C.PL.NOM PST.2 time=3F.SG.ACC put;JUNCT-PRF
 人々は時間を昨日すでに約束してあった.

時間の約束に関連する表現を例文 (9), (10) に記録しておく.

- (9) Keeχa=ìṁ |úí kī=bì nààkò=sì kà àà
 P.N.=3M.SG.GEN one FOC=3M.SG.NOM time=3F.SG.GEN on come
 ケーハだけが今日時間通りに来た.

- (10) nààkò=sì k^húrí ɲ|áũ N|óōsèè=bì jā àà
 time=3F.SG.GEN end afterwards P.N.=3M.SG.NOM and come
 約束の時間が過ぎてからノーシエが来た (時間が終わってその後ノーシエが来た).

- (11) ɲ|íí=sì súrí=sì ?ā=sì bentere=sì wà |úí
 this=3F.SG.GEN tobacco=3F.SG.NOM that=3F.SG.GEN shop=3F.SG.GEN in one
 k^hā háã
 emphasis exist
 このタバコはあの店にだけある.

- (12) ?ā=sì bentere=sì |úí ?ò wà k^hā ?ēsì cì ||?áí-?è
 that=3F.SG.GEN shop=3F.SG.GEN one inside in EMPH it IPFV buy-PASS
 あの店でだけそれは売られている.

- (13) ɲ|íí=sì ||?áé=sì wà |úá=ṁ |úí kī=rì kì
 this=3F.SG.GEN house=3F.SG.GEN in child=3C.PL.GEN one FOC=3C.PL.NOM PST.1
 háã
 exist
 この家にいたのは子供ばかりだった.

- (19) ts^háā=sì |úí kī=sì háā k^hùà ŋ!ūnā |ám=dzì kà
 water=3F.SG.GEN one FOC=3F.SG.NOM exist because three day=3F.PL.GEN for
 ?ācià χà qχ'úì
 1C.INCL.PL.NOM can survive

水さえあれば, 数日間は大丈夫だ (lit. 水だけしかないので, 私たちは3日間生きるだろう).

- (20) cìrè |qχ'áré=n̄ |úá=nà ŋ!áà=dzì tséé
 I small=3C.PL.GEN child=3C.PL.ACC dish=3F.PL.ACC make.work

私は, 小さい子供に皿洗いさせた.

動作動詞はアスペクト表示なしに使われると, perfective を意味し, 時制表示がない場合は「過去」の読みになる.

- (21) |qχ'áré=n̄ |úá=rì ŋ!áà=dzì tséé-?è
 small=3C.PL.GEN child=3C.PL.NOM dish=3F.PL.ACC make.work-PASS

小さい子供は皿洗いさせられた.

- (22) |qχ'áré=n̄ |úá=n̄ òē è cì ŋ!áà=dzì tséé-?è
 small=3C.PL.GEN child=3C.PL.GEN all NOM IPFV dish=3F.PL.ACC make.work-PASS

小さい子供まで皿洗いさせられている (lit. 小さい子供も皿洗いさせられている).

- (23) cìrè màrī=dzì †?áñ-c^hīmā
 I money=3F.PL.ACC want-NEG

私はお金なんか欲しくない (lit. 私は金を欲しがっていない).

例文 (23) の「なんか」にあたる要素は存在しない. 低評価を表すためにも, 他のものが欲しい場合も, 別途その表現を付け加える必要がある.

- (24) cìrè òē=sì χò kī=sà †?áñ-c^hīmā
 I all=3F.SG.GEN thing FOC=3F.SG.ACC want-NEG

私はすべての物を欲しくない.

- (25) cìrè màrī kī=dzì †?áñ-c^hīmā
 I money FOC=3F.PL.ACC want-NEG

私は金も他のものも欲しくない.

次の例文 (26) と異なり, 複数形の接語が使われていることが「他のものも」の意味を表す.

- (26) cìrè màrī kī=sà †?áñ-c^hīmā
 I money FOC=3F.SG.ACC want-NEG

私は金こそは欲しくない (=他のものが欲しい).

- (27) tsā kà ɲlúū=bì ʔī kè tsáā kī tsì
 2M.SG.GEN of hut=3M.SG.NOM be because 2M.SG.GEN FOC 2M.SG.IRR
 ʔàmà ʔháu
 3M.SG.ACC clean

自分の部屋ぐらい、自分できれいにしなさい (lit. 自分の部屋なのだから、自分が掃除しなさい).

命令は、主語を表示しないか、あるいは、2人称主語を *irrealis* 形にすることにより表す。「ぐらい」にあたる要素はない。

- (28) cúá cíā ʔàmà ʔháu-kàχō
 NEG 1SG.ACC 3M.SG.ACC clean-CAUS
 私に掃除させるな.

- (29) cī òē ʔē c^hrē
 1SG.GEN all 3C.SG.ACC give
 私にもそれをちょうだい.

- (30) ʔūū=bì kī qχ'ájjà ʔáékū àà. ʔūū=sì=m kōōkā
 parent=3M.SG.NOM PST.1 already get.home come. parent=3F.SG.GEN=Q yet
 àà -c^hīmā
 come -NEG

お父さんはもう帰って来た。お母さんはまだ来ていないのか? (=sì=m の表層形は [sàm])

「お母さんは？」のような対比疑問はない。

- (31) k^hóè=bì kī cì tsā glúī=sì kà ʔī
 person=3M.SG.NOM PST.1 IPFV 2M.SG.ACC telephone=3F.SG.GEN by call
 誰かがあなたに電話してきたよ (人があなたを電話で呼んでいたよ).

「誰」 máā̄ は疑問詞としてのみ用いられる。特定・不特定の人物を指す場合は「人」 k^hóè を用いる。

- (32) tsī kī cì glúī=sì kà ʔī-ʔè cí mā cìrè ʔē
 2M.SG.NOM PST.1 IPFV telephone=3F.SG.GEN by call-PASS but I it
 |ʔūwā-hā máā̄=m kī tsā ʔī=sà ʔà
 not.know;JNCT-PRF who=3M.SG.GEN PST.1 2M.SG.ACC call=3F.SG.ACC COP
 あなたは電話で呼ばれていた、でも私は誰があなたを呼んでいたのか知らない。

この構文は形式目的語 ʔē の具体的内容を máā̄=m 以下の従属節が示す一種の外置構文で、従属節内の主語は属格となる。

- (33) tsàm k^hóè=mà ʔūāʔà
 1M.INCL.DU.IRR person=3M.SG.ACC ask
 誰かに聞いてみよう (lit. 我々 2 人は人に尋ねよう).

「～してみよう」の訳なので1人称双数／複数を主語にする。ここでは双数。

- (34) k^hóè=m m kì àà cíā kì háā-cìè kà
 person=3M.SG.GEN=Q PST.1 come 1SG.GEN PST.1 exist-NEG when
 私のいない間に誰か来た? (lit. 人が来たか, 私がいない時に)
- (35) k^hóè=m àà kà cíā bóōrī
 person=3M.SG.GEN come if 1SG.ACC tell
 誰か来たら, 私に教えてください (lit. 人が来たら, 私に伝えよ).
- (36) k^hóè=m àà kà cíā ?ē bóōrī
 person=3M.SG.GEN come if 1SG.ACC it tell
 誰か来たら, 私に教えてください (lit. 人が来たら, 私にそれを伝えよ).
- (37) k^hóè=m kùà àà kà cíā bóōrī
 person=3M.SG.GEN PROG come if 1SG.ACC tell
 誰か来たら, 私に教えてください (lit. 人がこちらに向かって来たら, 私に伝えよ).
- (38) k^hóè=m kùà àà kà cíā ?ē bóōrī
 person=3M.SG.GEN PROG come if 1SG.ACC it tell
 誰か来たら, 私に教えてください (lit. 人がこちらに向かって来たら, 私にそれを伝えよ).
- (39) ŋjì |ám k^hóè=bì χà cúá àà cà cìrè cì †?āñ
 this day person=3M.SG.NOM can NEG come QUOT I IPFV think
 今日は誰も来るとは思わない/今日は誰も来ないと思う (lit. 今日は人は来ないと私は思う).
- (40) *ŋjì |ám k^hóè=bì χà àà cà cìrè cì cúá †?āñ
 this day person=3M.SG.NOM can come QUOT I IPFV NEG think
 非文: 「人が来ると私は思わない」と言うことはできない。
- (41) ŋjìŋ†úũkà k^hóè χà=rì ?ā χò háā-cìè
 right.now person ASSOC=3C.PL.NOM that place exist-NEG
 そこには今誰もいない (lit. 今人々はそこにいない).
- (42) òè=m k^hóè=bì χà ?ēsà ts'áũ
 all=3M.SG.GEN person=3M.SG.NOM can 3F.SG.ACC do
 誰でもそれができる (lit. 全ての人がそれを作るだろう).
- (43) ?ā=sì χò=sà òè=m k^hóè=bì χà
 that=3F.SG.GEN thing=3F.SG.ACC all=3M.SG.GEN person=3M.SG.NOM can
 !?ānā-hā
 know;JUNCT-PRF
 そんなこと (は), みんな知っているんじゃないか (lit. そのことを, 皆が知っているだろう).

- (44) máá=bì χὰ ?ā=m̄n χò=mà ||?áì χὰ ?àmà
 who=3M.SG.NOM can that=3M.SG.GEN thing=3M.SG.ACC buy can 3M.SG.ACC
 ||?áì=m̄n k^hóè=bì háá-cìè
 buy=3M.SG.GEN person=3M.SG.NOM exist-NEG

そんなもの、誰が買うんだ!? 誰も買うわけじゃないか! (lit. 誰があのものを買うだろうか、あれを買いそうな人はいない)

この例は、修辞疑問文と平叙文、2つの文からなる。疑問文と平叙文を jā で等位接続することはできない。

- (45) *máá=bì χὰ ?ā=m̄n χò=mà ||?áì jā χὰ ?àmà
 who=3M.SG.NOM can that=3M.SG.GEN thing=3M.SG.ACC buy and can 3M.SG.ACC
 ||?áì=m̄n k^hóè=bì háá-cìè
 buy=3M.SG.GEN person=3M.SG.NOM exist-NEG
 非文

以下例文 (46) も同様である。

- (46) *máá=bì χὰ ?ā=m̄n χò=mà ||?áì χὰ ?àmà
 who=3M.SG.NOM can that=3M.SG.GEN thing=3M.SG.ACC buy can 3M.SG.ACC
 ||?áì=m̄n k^hóè=bì jā háá-cìè
 buy=3M.SG.GEN person=3M.SG.NOM and exist-NEG
 非文

- (47) tsī g|úí-qχ'úí=sà η|jā-hā
 2M.SG.NOM G|ui-language=3F.SG.ACC master;JNCT-PRF
 君はグイ語がうまい。

- (48) tsā χὰ η|ī tàū k^hùà tsī ?n̄
 2M.SG.GEN can PST.N be.tired as 2M.SG.NOM look
 あなたは退屈そうだ (lit. あなたが飽きているかもしれないようにあなたは見える)。

日本語の「ね」「よ」に該当するような要素は確認できていない。以下のように言い換えることができるが、いずれにもそのような要素は用いられない。

- (49) tsā χὰ tàū k^hùà tsī ?n̄
 2M.SG.GEN can be.tired as 2M.SG.NOM look
 あなたは退屈そうだ (lit. あなたが飽きているかもしれないようにあなたは見える)。

- (50) tsā χὰ tàwā-hā k^hùà tsī ?n̄
 2M.SG.GEN can be.tired;JNCT-PRF as 2M.SG.NOM look
 あなたは退屈そうだ (lit. あなたが飽きているかもしれないようにあなたは見える)。

- (51) tsī χà tàwā-hā k^hùà ʔīī
2M.SG.NOM can be.tired;JNCT-PRF as look
あなたは退屈そうだ (lit. あなたは飽きているかもしれないように見える).
- (52) tsī tàwā-hā k^hùà ʔīī
2M.SG.NOM be.tired;JNCT-PRF as look
あなたは退屈そうだ (lit. あなたは飽きているように見える).
- (53) ʔē kūmā ʔūsì !q^hāī
it hearsay FUT.2 be.cold
明日は寒いらしい.

参考文献

Nakagawa Hiroshi. 2006. |Gui dialects and |Gui-speaking communities before the relocation from the CKGR. *Pula: Botswana Journal of African Studies* 20, 42–52.

執筆者連絡先 : kimura.kimihiko.q0@tufs.ac.jp, nhirosi@tufs.ac.jp, ono@reitaku-u.ac.jp

原稿受理日 : 2020 年 12 月 1 日

〈特集「ヴォイスとその周辺」〉

パピアメント語におけるヴォイスとその周辺

Voice and related expressions in Papiamentu

パトリシオ・バレラ・アルミロン

Patricio Varela Almiron

東京外国語大学大学院総合国際学研究科
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨：本稿の目的は、特集「ヴォイスとその周辺」(『語学研究所論集』第17号, 東京外国語大学) における25個のアンケート項目に対するパピアメント語のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Papiamentu data which answers the 25 survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 17, which focuses on the cross-linguistic study of ‘voice and related expressions’.

キーワード：パピアメント語, クレオール言語, 受身, 再帰

Keywords: Papiamentu, creole, passive, reflexive

1. はじめに

パピアメント語は主にアルバ島, ボネール島, キュラソー島(3つの島の頭文字を取り「ABC諸島」とも呼ばれる)で話されているクレオール言語である。基本語順はSVOであり, 修飾語と被修飾語の語順は品詞(場合には語彙)によって異なる。本稿における表記はキュラソー島の正書法を採用している。

本稿の作成にあたり, J.C.氏(キュラソー島出身, 1990年生まれ, 男性)の協力をいただいた。

2. 言語データ

(1a) (風などで) ドアが開いた。 【自動詞と他動詞の対立】

E porta a habri.
ART.DEF door PFV open

(1b) (彼が) ドアを開けた。 【自動詞と他動詞の対立】

El a habri e porta.
3SG PFV open ART.DEF door

(1c) (入り口の) ドアが開けられた。 【自動詞と他動詞の対立】

E porta a wòrdu habrí.
ART.DEF door PFV PASS open.PSTPTCP



本稿の著作権は著者が保持し, クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

(1c') E porta a **ser** **habrí.**
ART.DEF door PFV PASS open.PSTPTCP

(1a)-(1b) のように **habri** 「開く・開ける」は自動詞としても他動詞としても用いられうる。受動態では受身を表す動詞 **wòrdu** もしくは **ser**¹ が用いられ、語彙動詞は過去分詞の形で現れる²。

(1d) ドアが壊れた。 【自動詞と他動詞の対立】

E porta a **kibra.**
ART.DEF door PFV break

(1e) (彼が) ドアを壊した。

El a **kibra** e porta.
3SG PFV break ART.DEF door

(1f) (入り口の) ドアが壊された。

E porta a **wòrdu kibrá.**
ART.DEF door PFV PASS break.PSTPTCP

(1f') E porta a **ser** **kibrá.**
ART.DEF door PFV PASS break.PSTPTCP

kibra 「壊す／壊れる」も同じように自他両方に用いられる。

(2) 私は (自分の) 弟を立たせた。 【自動詞からの使役, 他動詞からの使役】

Mi a **pone** mi ruman lanta para.
1SG PFV put 1SG sibling stand stop

(2') Mi a **buta** mi ruman lanta para.

1SG PFV put 1SG sibling stand stop

(2'') Mi a **laga** mi ruman lanta para.

1SG PFV let 1SG sibling stand stop

(3) 私は (自分の) 弟に歌を歌わせた。 【自動詞からの使役, 他動詞からの使役】

Mi a **pone** mi ruman kanta un kantika.
1SG PFV put 1SG sibling sing ART.INDF song

(3') Mi a **buta** mi ruman kanta un kantika.

1SG PFV put 1SG sibling sing ART.INDF song

¹ J.C.氏によると **ser** は主にアルバ島のパピアメント語で用いられるという。

² この2つの形式が Kouwenberg and Murray (1994: 37) でパピアメント語の受動態に用いられる補助動詞として挙げられている。

(3'') Mi a **laga** mi ruman kanta un kantika.
1SG PFV let 1SG sibling sing ART.INDF song

(2), (2'), (3), (3') では pone/buta 「置く」が用いられ, 使役表現を作っている. J.C.氏によると, どれも「強制的にさせる」意味を表す. (2''), (3'') における laga 「放置する」を用いた表現は「強制的にさせる」というのが一番自然な解釈であるが, 場合によって「許可」を表すとも解釈できる.

(4a) (遊びたがっている子供に無理やり) 母は子供をパンを買いに行かせた. 【強制使役と許可使役】
E mama a **pone** su yu kumpra pan.
ART.DEF mother PFV put 3SG.POSS child buy bread

(4a') E mama a **buta** su yu kumpra pan.
ART.DEF mother PFV put 3SG.POSS child buy bread

(4b) (遊びに行きたがっているのを見て) 母は子供に遊びに行かせた. 【強制使役と許可使役】
E mama a **laga** su yu hunga.
ART.DEF mother PFV let 3SG.POSS child play

pone/buta 「置く」を用いた使役は (2) と (3) の例と同じく「強制使役」として解釈される. それに対し, (4b) では laga 「放置する」を用いた表現は「許可使役」として解釈される. このことから laga 「放置する」を用いた表現は「強制使役」と「許可使役」の両方表すことができ, その解釈はおそらく文脈などによって決まる.

(5a) 私は弟に服を着せた. 【他動詞による表現と使役の違い, 直接の行為か間接の行為か】
Mi a **bisti** mi ruman.
1SG PFV wear 1SG sibling

(5b) 私は弟にその服を着させた. 【他動詞による表現と使役の違い, 直接の行為か間接の行為か】
Mi a **laga** mi ruman bisti e paña.
1SG PFV let 1SG sibling wear ART.DEF cloth

(5b') Mi a **pone** mi ruman bisti e paña.
1SG PFV put 1SG sibling wear ART.DEF cloth

(5b'') Mi a **buta** mi ruman bisti e paña.
1SG PFV put 1SG sibling wear ART.DEF cloth

(5a) では bisti 「(服を) 着る/着せる」が用いられ, ruman 「兄弟」が目的語になっている. J.C.氏によると, (5a) では「直接手を下して着せる」ことが含意されている. これに対し, 「許可使役」の laga 「放置する」を用いた (5b) と「強制使役」の pone/buta 「置く」を用いた (5b') と (5b'') では「言語による命令など, 間接的な行為である」ことが含意されている.

(6) 私は弟にその本をあげた。 【(物の) 授受動詞は恩恵の授受においても助動詞的に使えるか】
Mi a **duna** mi ruman e buki.
1SG PFV give 1SG sibling ART.DEF book

(7a) 私は弟に本を読んであげた。 【(物の) 授受動詞は恩恵の授受においても助動詞的に使えるか】
Mi a lesa e buki **pa mi ruman**.
1SG PFV read ART.DEF book for 1SG sibling

(7b) 兄は私に本を読んでくれた。 【(物の) 授受動詞は恩恵の授受においても助動詞的に使えるか】
Mi ruman a lesa e buki **pa mi**.
1SG sibling PFV read ART.DEF book for 1SG

(7c) 私は母に髪を切ってもらった。 【テモラウ】
Mi a **laga** mi mama korta mi kabei.
1SG PFV let 1SG mother cut 1SG hair

(7a)-(7c) から分かるように, (6) の授受動詞 **duna** 「与える」は恩恵の授受に用いることができず, (7a)-(7b) では前置詞 **pa** が恩恵の受け手を指す。それに対し, (7c) では授受動詞 **resibi** 「もらう」を用いず, 使役表現を作る **laga** 「放置する」が用いられる。

(8a) 私は (自分の) 体を洗った。 【再帰】
Mi a **laba mi kurpa**.
1SG PFV wash 1SG body

(8a') Mi a **baña (mi kurpa)**.
1SG PFV bath 1SG body

(8b) 私は手を洗った。 【再帰】
Mi a **laba mi man**.
1SG PFV wash 1SG hand

(8c) 彼は手を洗った。 【再帰】
El a **laba su man**.
3SG PFV wash 3SG.POSS hand

(8a-8b) では1人称単数の所有限定詞が用いられているため, 主語である1人称の再帰的動作であることが分かる。なお, J.C.氏によると, (8a) のような言い方がかなり不自然であり, (8a') のように **baña** 「シャワーを浴びる」を用い, 目的語を省略した言い方のほうが自然であるという。(8c) では3人称所有限定詞の **su** は主語と同一指示をしている。

- (9) (自分のために) 私はその本を買った. 【自利態】

Ami a kumpra e buki ei pa mi (mes).
1SG PFV buy ART.DEF book there for 1SG self

(9) では **pa mi** や **pa mi mes** という副詞句を用いて「自利」を明確に表すことができる. そのような表現を用いなくても「自利」として解釈できることがある. (9) ではいわゆる「強調形代名詞」の **ami** (非強調形は **mi**) が用いられている. J.C.氏によると非強調形を用いても「自利」の解釈に変わりがないが, 強調形を用いることによって, 「他人ではなく私が買った」という情報構造的な意味合いが含まれるという.

- (10) 彼らは (／その人たちは) (互いに) 殴り合っていた. 【相互】

Nan tabata dal otro ku moketa.
3PL IPFV.PST hit other with fist

(10) では相互を表す表現として **otro** が用いられている. 冠詞を伴った **otro** はふだん「その他 (の人・もの)」を意味する.

- (11) その人たちは (みんな一緒に) 街へ行った. 【衆動】

E hende=nan ei a bai kaya.
ART.DEF people=PL there PFV go street

- (12) その映画は泣ける (その映画を見ると泣いてしまう). 【自発】

E pelikula aki ta pone=bu yora.
ART.DEF movie here IPFV put=2SG cry

- (12') **E pelikula aki ta pone hende yora.**

ART.DEF movie here IPFV put people cry

(12) では **pone** 「置く」を用いた使役表現が用いられ, 2 人称単数の代名詞は総称として用いられている. J.C.氏によると, 総称的な意味をもつ名詞 **hende** 「人」も用いることができる.

- (13a) 私は卵を割った. 【意志／無意志】

Mi a kibra e webu=nan.
1SG PFV break ART.DEF egg=PL

- (13a') **Mi a kibra e webu=nan sin mi ke.**

1SG PFV break ART.DEF egg=PL without 1SG want

- (13b) (うっかり落として) 私はコップを割った／割ってしまった. 【意志／無意志】

Mi a kibra e kùp.
1SG PFV break ART.DEF cup

(13b') Mi a laga e kùp kai kibra.
1SG PFV let ART.DEF cup fall break

(13a) では他動詞が用いられ、行為が「意志」をもって行われたか否かに関して無標である。J.C.氏によると、副詞句を用いて「意志」があったか否かを表すことができる。例えば(13a')のように無意志に行われたことを示すことができる。(13b)でも他動詞が用いられ、行為が「意志」をもって行われたか否かに関して無標である。無意志に行われたことを示すのに、laga「放置する」を用いた使役表現が可能である。

(14a) きのう私はコーヒーを飲みすぎて（飲みすぎたので）眠れなかった。

Ayera mi a bebe asina tantu kòfi ku mi no por a drumi.
yesterday 1SG PFV drink like_that much coffee that 1SG NEG can PFV sleep

(14b) きのう私は仕事がたくさんあって（たくさんあったので）眠れなかった。

Ayera mi taba=tin asina tantu trabou ku mi no por a drumi.
yesterday 1SG IPFV.PST=have like_that much work that 1SG NEG can PFV sleep

(14a)-(14b) はどれも no por で「不可能」を表している。

(15) 私は頭が痛い。 【全体と部分・主体・一時的】

Mi tin dolo di kabes.
1SG have pain of head

(15') Mi kabes ta morde.

1SG head IPFV bite

(16) 彼女は髪が長い。 【全体と部分・主体・恒常的】

E tin kabei largu.
3SG have hair long

(15) と (16) では tin「もつ」を用いて部分が所有関係で表されている。J.C.氏によると (15') のような慣用的な表現も可能である。この場合は全体（1 人称）が所有限定詞でしか表されていない。パピアメント語の人称代名詞は基本的にそのまま所有限定詞としても用いられうる。そのため人称代名詞と所有限定詞の判別は主にその統語環境によるといえる。

(17a) 彼は（別の）彼の肩をたたいた。 【全体と部分・対象・接触／結果状態が継続的】

El a dal e den su skòuder.
3SG PFV hit 3SG in 3SG.POSS shoulder

(17b) 彼は（別の）彼の腕をつかんだ。 【全体と部分・対象・接触／結果状態が継続的】

El a tene su skòuder.
3SG PFV hold 3SG.POSS shoulder

(17a) では、最初の 3 人称代名詞と、目的語の人称代名詞および所有表現の人称代名詞は別の 3 人称に関係すると解釈される。行為の結果を被る部分は前置詞 **den** によって表されている。(17b) では所有表現の人称代名詞は基本的に別の 3 人称の所有物として解釈されるが、文脈によって再帰として解釈することも可能である。この場合は部分が目的語になっている。

(18a) 私は彼がやって来るのを見た。 【知覚構文】

Mi a **mira e yega**.
1SG PFV see 3SG arrive

(18a') Mi a **wak e yega**.

1SG PFV watch 3SG arrive

(18b) 私は彼が今日来ることを知っている。 【知覚構文】

Mi sa **ku e ta bini** awe.
1SG know that 3SG IPFV come today

(18a) と (18a') では従属節化などの標識が用いられていない。yega 「着く」の前に TAM 標識³が用いられていないことから、e yega が不定形節になっている、もしくは先行する動詞の TAM 標識の範囲に含まれていると考えられる。これに対し、(18b) では従属節化標識の ku が用いられており、従属節内部の動詞が TAM 標識を取っている。

(19) 彼は自分（のほう）が勝つと思った。 【引用文中の再帰】

El a **pensa ku e (mes)lo** a gana.
3SG PFV think that 3SG self IRR PFV win

(19) では従属節における 3 人称主語が、再帰を明示する標識 mes がなくても主節の 3 人称と同一指示であると解釈できる。J.C.氏によると、文脈によって従属節の 3 人称主語が主節の主語とは異なるという解釈も可能であるが、同一指示の解釈が一番自然であるという。

(20a) 私は（コップの）水（の一部）を飲んだ。 【部分的に及ぶ動作と全体に及ぶ動作】

Mi a bebe (**un tiki**) awa.
1SG PFV drink ART.INDF bit water

(20b) 私は（コップの）水を全部飲んだ。 【部分的に及ぶ動作と全体に及ぶ動作】

Mi a bebe (**tur**) e awa.
1SG PFV drink all ART.DEF water

(20a) と (20b) の「全体に及ぶ行為」と「部分に及ぶ行為」の違いの決め手は定冠詞の有無である。

³ テンス・アスペクト・モダリティのカテゴリを表す標識である。特定の有標な文脈がない限り基本的に必須である。なお、状態動詞のうち、一部の TAM 標識を取ることができないものがある。

定冠詞が用いられていない (20a) は部分を表すと解釈される。定冠詞が用いられている (20b) は全体を表すと解釈される。J.C.氏によると、「一部」や「全部」を表す副詞は任意であるという。

(21) 彼は肉を食べない。 【恒常的な否定文】

E no ta kome karne.
3SG NEG IPFV eat meat

(21) では未完了の標識 **ta** が用いられている。**ta** は後続する動詞の語彙アスペクトにより「継続」、「習慣」、「未実現の動作」を表しうる。否定要素である **no** の統語位置は決まっているため、恒常的な動作とそうでない動作の否定は同じ統語構造となる。

(22a) 今日は寒い。 【感覚述語・非人称文／感覚主体の存在が感じられない、より客観的な表現】

Awe ta friu.
today COP cold

(22a') Awe ta hasi friu.

today IPFV do cold

(22b) 私は（何だか）寒い（私には寒く感じる）。 【感覚述語・非人称文／斜格主語】

Mi ta sinti friu.
1SG IPFV feel cold

(22b') Mi tin friu.

1SG have cold

(22a) コピュラ **ta** を用いた文になっており、主語の位置に **awe** 「今日」が用いられている。(22a') のように **hasi** 「する」も用いることができ、J.C.氏によると「話者が寒さを感じている」という意味合いが含まれるという。(22b) と (22b') では1人称代名詞 **mi** が用いられ、状態が **tin** 「もつ」と **sinti** 「感じる」に後続する名詞によって表されている。

(23) 人がとても多かったことに私は驚いた。 【(感情主体が受動的である) 感情述語】

Mi tabata sorprendi ku taba=tin tantu hende.
1SG COP.PST surprised that IPFV.PST=have much people

(23) では形容詞 **sorprendi** 「驚いている」が用いられ、驚きを引き起こしたものが補文で表され、**tin** 「もつ、ある、いる」によって導入されている。

(24) 雨が降り始めた。 【現象文・現場での直接体験】

Awa a kuminsá kai.
water PFV start fall

(24) では「雨(水)」という名詞が主語の位置に立ち、開始相を表す動詞 **kuminsá** 「始める、始まる」

が語彙動詞の kai「降る」に先行する。このように2つ以上の動詞が無標の形で連続する構造がパピアメント語に多く見られる。

(25) この本はよく売れる。 【中間構文】

E buki aki ta bende bon.
ART.DEF book here IPFV sell good

(25) では売られるもの (e buki aki「この本」) が主題として文頭に現れている。

略号一覧

1,2,3	1,2,3 人称	PASS	受身
ART	冠詞	PFV	完了
COP	コピュラ	PL	複数
DEF	定	POSS	所有
INDF	不定	PST	過去
IPFV	未完了	PTCP	完了
IRR	非現実	SG	単数
NEG	否定		

参考文献

Kouwenberg, Silvia and Eric Murray. 1994. *Papiamentu (Languages of the world/Materials 68)*. München: Lincom Europa.

執筆者連絡先 : varela.almiron.patricio.o0@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2021 年 1 月 13 日

<特集「他動性」>

パピアメント語における他動性 Transitivity in Papiamentu

パトリシオ・バレラ・アルミロン
Patricio Varela Almiron

東京外国語大学大学院総合国際学研究科
Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨：本稿の目的は、特集「他動性」(『語学研究所論集』第19号, 東京外国語大学)における20個のアンケート項目に対するパピアメント語のデータを与えることである。

Abstract: This report aims to provide the Papiamentu data which answers the 20 survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 19, which focuses on the cross-linguistic study of ‘transitivity’.

キーワード：パピアメント語, 他動性, クレオール言語, 動詞連続, 前置詞句

Keywords: Papiamentu, transitivity, creole, serial verbs construction, prepositional phrase

1. はじめに

パピアメント語は主にアルバ島, ボネール島, キュラソー島(3つの島の頭文字を取り「ABC諸島」とも呼ばれる)で話されているクレオール言語である。基本語順はSVOであり, 修飾語と被修飾語の語順は品詞(場合には語彙)によって異なる。本稿における表記はキュラソー島の正書法を採用している。

本稿の作成にあたり, J.C.氏(キュラソー島出身, 1990年生まれ, 男性)の協力をいただいた。

2. 言語データ

(1a) 彼はそのハエを殺した。

El a **mata** e muskita.
3SG PFV kill ART.DEF fly

(1b) 彼はその箱を壊した。

El a **kibra** e kaha.
3SG PFV break ART.DEF box



本稿の著作権は著者が保持し, クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

(1c) 彼はそのスープを温めた.

El a **keinta** e sopi.
3SG PFV heat ART.DEF soup

(1a)-(1c) のように「直接影響・変化」を与える動作を表す動詞の対象は動詞の直後に直接目的語として現れる.

(1d) 彼はそのハエを殺したが、死ななかった.

El a **purba mata** e muskita pero no a muri.
3SG PFV try kill ART.DEF fly but NEG PFV die

(1d) は **purba** 「~してみる」を用いなければ非文となる. つまり, パピアメント語においては **mata** 「殺す」が結果を含意するため, その結果を否定することができない.

(2a) 彼はそのボールを蹴った.

El a **skòp** e bala.
3SG PFV kick ART.DEF ball

(2b) 彼女は彼の足を蹴った.

El a **skòp** su pia.
3SG PFV kill 3SG.POSS leg

(2a)-(2b) の動詞は「直接影響・変化」と同じく, 対象が動詞に後続する目的語として現れる.

(2c) 彼はその人にぶつかった (故意に).

El a **kana dal den** e hende ei.
3SG PFV walk hit in ART.DEF people there

(2d) 彼はその人とぶつかった (うっかり).

El a **kana dal den** e hende ei sin sa.
3SG PFV walk hit in ART.DEF people there without know

(2c)-(2d) はどれも動詞連続 **kana dal** 「歩く・打つ」を用い, 前置詞 **den** で対象を示す. Velasquez et al. (2016: 6-7) によると, **den** は位置関係および時間関係を表すことができる. J.C.氏によると, (2c) は基本的に「故意に」行われたと考えられるが, 文脈によっては「うっかり」行われたと解釈できるかもしれないという. (2d) では副詞表現を用い, 動作が「うっかり」行われたことを明示している.

(3a) あそこに人が数人見える.

Mi ta **mira tin** hende ei banda.
1SG IPFV see have people there side

(3b) 私はその家を見た.

Mi a **wak** e kas.
1SG PFV watch ART.DEF house

(3a) と (3b) では語彙の違いが見られる. (3a) の動詞は *mira* であるのに対し, (3b) の動詞は *wak* である. これらの動詞の違いに意志性の違いがある. J.C.氏によると, *wak* は「意図して観る」という意味を表すのに対し, *mira* は「意図していなくても目に入る」という意味を表す. さらに, (3a) の場合は存在を表す動詞 *tin* が用いられている. これは動作の対象が不定であることに起因しているであろう.

(3c) 誰かが叫んだのが聞こえた.

Mi a **tende** un hende grita.
1SG PFV hear ART.INDF people scream

(3d) 彼はその音を聞いた.

El a **skucha** e sonido ei.
3SG PFV listen ART.DEF sound there

(3c) と (3d) では語彙の違いが見られる. (3a) の動詞は *tende* であるのに対し, (3b) の動詞は *skucha* である. (3c) の場合は「人が叫ぶ」という表現が動詞 *tende* の目的語になっている. J.C.氏によると, *tende* は「意図して聴く」という意味を表すのに対し, *skucha* は「意図していなくても耳に入る」という意味を表す.

(4a) 彼は (なくした) カギを見つけた.

El a **haña** e yabi.
3SG PFV find ART.DEF key

(4b) 彼は椅子を作った.

El a **traha** un stul.
3SG PFV make ART.DEF chair

(4a)-(4b) の動詞は「直接影響・変化」と同じく, 対象が動詞に後続する目的語として現れる.

(5a) 彼はバスを待っている.

E ta **warda** e bús.
ART.DEF IPFV wait ART.DEF bus

(5b) 私は彼が来るのを待っていた.

Mi tabata **warda-ndo (riba dje)** pa e yega.
1SG IPFV.PST wait-GER on 3SG.OBL for 3SG arrive

(5c) 彼は財布を探している。

E ta buska su pòtmòni.
3SG IPFV seach 3SG.POSS wallet

(5a) と (5c) の動詞は「直接影響・変化」と同じく、対象が動詞に後続する目的語として現れる。それに対し、(5b) では「彼が来る」ということが補文標識 *pa* に導入されている。J.C.氏によると、「彼を待っている」ことを強調したい場合は *riba dje* という表現を用いる。*riba* は、位置関係および様態関係を表す前置詞である (Velasquez et al. 2016: 21-22)。

(6a) 彼はいろんなことをよく知っている。

E sa hopi kos hopi bon.
3SG know many thing many good

(6b) 私はあの人を知っている。

Mi konosé e hende ei.
1SG know ART.DEF people there

(6c) 彼はロシア語ができる。

E sa e idioma ruso.
3SG know ART.DEF language Russian

(6c') E por papia ruso.

3SG can speak Russian

(6a)-(6c) では状態動詞 *konosé* 「(人) 知っている」と *sa* 「(こと) 知っている」が用いられる。対象となるものは動詞の直後の目的語として現れている。(6c) に関してはほかに (6c') のように表されうる。この場合は補助動詞の *por* 「できる」を用いているため *papia* 「話す」などの語彙動詞が要求される。J.C.氏によると、(6c) で *sa* が用いられているため、*idioma* 「言語」という語を用いないと解釈できないのに対し、(6c') では *papia* 「話す」という動詞が用いられているため、*ruso* 「ロシアの (もの・人)」だけでも「ロシア語」を指していると解釈できる。

(7a) あなたはきのう私が言ったことを覚えていますか？

Bo ta kòrda kiko mi a bisa=bu ayera?
2SG IPFV remember what 1SG PFV tell=2SG yesterday

(7b) 私は彼の電話番号を忘れてしまった。

Mi a lubida su number.
1SG PFV forget 3SG.POSS number

(7a) では、目的語となる節の頭に疑問詞 *kiko* が来ている。この節の語順は疑問詞疑問文の基本的な語順と同じである。

(8a) 母は子供たちを深く愛していた.

E mama **stima** su yu=nan profundamente.
ART.DEF mother love 3SG.POSS child=PL deeply

(8b) 私はバナナが好きだ.

Mi **gusta** banana.
1SG like banana

(8c) 私はあの人が嫌いだ.

Mi **odia** e persona ei.
1SG hate ART.DEF person there

(8c') Mi **tin** **rabia** **riba** dje.

1SG have fury on 3SG.OBL

(8a)-(8c) はどれも状態動詞を用い、それらの対象は動詞に後続する目的語として現れている。(8b) の *gusta* に名詞 *banana* が後続しているため他動詞としてしか解釈できず、*mi* が動詞に先行する位置にあらわれているため主語としてしか解釈できない。屈折が比較的乏しく、主題化を除きパピアメント語の語順がかなり固定されているため、文法役割が統語環境しかから判断できないことが多い。J.C.氏によると、(8c) は翻訳として可能であるが、(8c') の表現のほうが自然であるという。(8c') では *tin rabia* 「怒りをもつ」という表現が用いられ、対象は前置詞 *riba* によって導入されている。

(9a) 私は靴が欲しい.

Mi **ke** sapatu.
1SG want shoes

(9b) 今、彼にはお金が要る.

Awor e **tin** **mester** di sèn.
now 3SG have need of money

(9a) では対象が動詞に後続する目的語として現れている。*ke* 「欲しい」は語彙動詞としても補助動詞としても用いられうる。補助動詞として用いられる場合は、語彙動詞に先行し「～たい」のように願望を表す。(9b) の *mester* は語彙動詞として用いられないため、名詞として用いられ、対象は所有関係で表されている¹。*mester* にはほかに補助動詞機能があり、その場合は後続する語彙動詞を要求する。

(10a) (私の) 母は (私の) 弟がうそをついたのに怒っている.

Mi mama ta **rabia** ku mi ruman pasombra el a gaña.
1SG mother IPFV anger with 1SG sibling because 3SG PFV cheat

¹ *di* には所有のほかにも前置詞用法もある (Velasquez et al. 2016: 21-22).

(10b) 彼は犬が怖い.

E **tin miedu di** kachó.
3SG have fear of dog

(10a) の場合は、怒られる人物と理由が別々で示されている。怒られる人物は前置詞 **ku**²によって導入されるのに対し、理由が従属節で示される。(10b) では **tin miedu**「恐怖をもつ」という表現が用いられ、恐怖を起こすもの (**kachó**「犬」) は所有関係で表される。

(11a) 彼は父親に似ている.

E **parse** su tata.
3SG look_like 3SG.POSS father

(11a') E **ta meskos ku** su tata.

3SG COP same that 3SG.POSS father

(11b) 海水は塩分を含んでいる.

Awa di laman **tin** salu (**den dje**).
water of sea have salt in 3SG.OBL

(11a) では状態動詞が用いられ、似ている人物が動詞の直後の位置に現れている。J.C.氏によると、**meskos**「同じ」を用いた (11a') という表現も可能である。後者の場合は似ている人物が前置詞 **ku** によって導入されている。この表現は (11a) とは異なり、基本的に「性格が似ている」という意味合いを持つ。(11b) では **tin**「もつ」の直後の位置に含まれる対象がくる。J.C.氏によると、「含む」という用語により近い意味を表すのに **den dje**「その中に」を加えることができる。

(12a) 私の弟は医者だ.

Mi ruman **ta** (un) dòkter.
1SG sibling COP ART.INDF doctor

(12b) 私の弟は医者になった.

Mi ruman a **bira** dòkter.
1SG sibling PFV become doctor

(12a) ではコピュラ動詞の **ta** が用いられ、後続する名詞は不定冠詞を伴っても伴わなくてもよい。(12b) では **bira**「なる」が用いられ、後続する名詞は不定冠詞なしで用いられる。

(13a) 彼は車の運転ができる.

E **por kore** outo.
3SG can run car

² **ku** は「同伴」、「特徴」、「様態」、「状況」、「手段」などの意味を表す (Velasquez et al. 2016: 4-6).

(13b) 彼は泳げる.

E **por landa.**
3SG can swim

(13a)-(13b) ではどれも補助動詞 **por** 「できる」が用いられ、語彙的な意味を担う動詞句がこれに後続する.

(14a) 彼は話をするのが上手だ.

E **por papia bon.**
3SG can speak good

(14b) 彼は走るのが苦手だ.

E **no por kore bon.**
3SG NEG can run good

(14b') E **ta kore malu.**

3SG IPFV run bad

(14a)-(14b) でも補助動詞 **por** 「できる」が用いられ、それに先行する否定小詞 **no** の有無と語彙動詞の後続する副詞 **bon** とによって「上手・苦手」という意味が表される. J.C.氏によると, (14b') のように、語彙動詞のみを用い、副詞によって「上手・苦手」を表すことも可能であるという.

(15a) 彼は学校に着いた.

El a **yega skol.**
3SG PFV arrive school

(15b) 彼は道を渡った／横切った.

El a **kruza kaya.**
3SG PFV cross road

(15c) 彼はこの道を通った.

El a **pasa den e kaya aki.**
3SG PFV pass in ART.DEF street here

(15a)-(15b) では到着点・通過点が動詞の直後に現れる. (15c) では通過点が前置詞 **den** によって導入される.

(16a) 彼はお腹を空かしている.

E **tin hamber.**
3SG have hunger

(16a') E ta **sinti hamber**.
3SG IPFV feel hunger

(16b) 彼は喉が渴いている.
E **tin set**.
3SG have thirst

(16b') E ta **sinti set**.
3SG IPFV feel thirst

(16a)-(16b) では「お腹がすいている状態」「のどが渴いている状態」を表す名詞が用いられ、**tin**「もつ」の後に現れている。J.C.氏によると、**tin**「もつ」ほど頻繁に用いられないが、代わりに **sinti**「感じる」という動詞を用いることもできるという。

(17a) 私は寒い.
Mi ta **sinti friu**.
1SG IPFV feel cold

(17a') Mi **tin friu**.
1SG have cold

(17b) 今日は寒い.
Awe ta **friu**.
today COP cold

(17b') Awe ta **hasi friu**.
today IPFV do cold

(17a) と (17a') では1人称代名詞 **mi** が用いられ、(16a)-(16b)、(16a')-(16b') のように、状態が **tin**「もつ」と **sinti**「感じる」に後続する名詞によって表されている。(17b) コピュラ **ta** を用いた文になっており、主語の位置に **awe**「今日」が用いられている。(17b') のように **hasi**「する」も用いることができ、J.C.氏によると「話者が寒さを感じている」という意味合いが含まれるという。

(18a) 私は彼を手伝った／助けた.
Mi a **yud=e**.
1SG PFV help=3SG

(18a') Mi a **salb=e**.
1SG PFV save=3SG

(18b) 私は彼がそれを運ぶのを手伝った.

Mi a **yud=e karg=e**.
 1SG PFV help=3SG carry=3SG

(18a) と (18a') では手伝ってもらう人物は動詞の直後に現れている. 目的語となる代名詞は基本的に前接語として動詞につく. (18b) では1つ目の e「彼」が yuda「手伝う」の目的語となり, 2つ目の e「それ」は karga「運ぶ」の目的語となっている. 1つ目の e「彼」は karga「運ぶ」の主語という機能も有していると考えられる.

(19a) 私はその理由を彼に聞いた.

Mi a **pidi=e e motibu**.
 1SG PFV ask=3SG ART.DEF reason

(19b) 私はそのことを彼に話した.

Mi a **papia kun=e tokante di dje**.
 1SG PFV speak with=3SG about of 3SG.OBL

パピアメント語の目的語は [動詞 間接目的語 直接目的語] という語順になっている (Kouwenberg and Murray 1994: 35). そのため, (19a) では e「彼」が動詞の直後に現れ, e motibu「その理由」がそれに後続している. (19b) では e「彼」が前置詞 ku によって導入されており, dje「そのこと」は前置詞 tokante と所有関係を表す di によって導入されている.

(20a) 私は彼と会った.

Mi a **topa kun=e**.
 1SG PFV meet with=3SG

(20a) では e「彼」が前置詞 ku によって導入されている. J.C.氏によると, 「意図して会った」場合にも, 「偶然に会った」場合にも用いられうるという.

略号一覧

1, 2, 3	1, 2, 3 人称	NEG	否定
ART	冠詞	OBL	斜格
COP	コピュラ	PFV	完了
DEF	定	PL	複数
GER	動名詞	POSS	所有
INDF	不定	SG	単数
IPFV	未完了		

参考文献

Kouwenberg, Silvia and Eric Murray. 1994. *Papiamentu (Languages of the world/Materials 68)*. München: Lincom Europa.

Velasquez, Pedro, Etley Lasten, Juan Maduro, Magriet Pourrier, Filomena Schwengle and Ramon Todd Dandaré. 2016. *Preposicion y Interheccion di Papiamento*. Aruba: Proyecto Idioma den Enseñansa.

執筆者連絡先 : varela.almiron.patricio.o0@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2021 年 1 月 13 日

《執筆者一覧》

佐藤大和	東京外国語大学大学院総合国際学研究院
モハンマド・ファトヒー	東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Hiroko Saito	東京外国語大学大学院総合国際学研究院
風間伸次郎	東京外国語大学大学院総合国際学研究院
野元裕樹	東京外国語大学大学院総合国際学研究院
スニサー ウィッタヤーパンヤーン(齋藤)	東京外国語大学世界言語社会教育センター
岡野賢二	東京外国語大学大学院総合国際学研究院
トゥザ ライン	東京外国語大学世界言語社会教育センター
南 潤珍	東京外国語大学大学院総合国際学研究院
スリ・ブディ・レスタリ	立命館アジア太平洋大学言語教育センター
大久保 弥	東京外国語大学大学院総合国際学研究科
成田 節	東京外国語大学大学院総合国際学研究院
森田耕司	東京外国語大学大学院総合国際学研究院
浅岡健志朗	東京大学大学院, 日本学術振興会特別研究員
萬宮健策	東京外国語大学大学院総合国際学研究院
長渡陽一	東京外国語大学大学院総合国際学研究院
山田洋平	東京外国語大学世界言語社会教育センター
佐近優太	東京外国語大学大学院総合国際学研究科
林 真衣	東京外国語大学言語文化学部
細羽洗希	東京外国語大学言語文化学部
岡本 進	東京外国語大学大学院総合国際学研究科
加藤幹治	東京外国語大学大学院総合国際学研究科
大野仁美	麗澤大学外国語学部
中川 裕	東京外国語大学大学院総合国際学研究院
木村公彦	東京外国語大学大学院総合国際学研究科
パトリシオ・バレラ・アルミロン	東京外国語大学大学院総合国際学研究科

(掲載順)

語学研究所論集 第 25 号
Journal of the Institute of Language Research No.25

2021 年 3 月 31 日発行

《編集スタッフ》

秋廣尚恵 風間伸次郎(特集担当) 加藤晴子
鈴木玲子 趙義成 箕浦信勝 森田耕司

発行 東京外国語大学 語学研究所

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

電話 042-330-5407

Web <http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/index.html>

e-mail ilr419@tufs.ac.jp

Journal of the Institute of Language Research, No. 25 (March 31, 2021)

The Institute of Language Research

Tokyo University of Foreign Studies

3-11-1 Asahicho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534, Japan

Copyright by The Institute of Language Research,

Tokyo University of Foreign Studies

Printed in Japan

Journal
of
the Institute of Language Research

25

2020

The Institute of Language Research
Tokyo University of Foreign Studies

Journal
of
the Institute of Language Research

25

2020

The Institute of Language Research
Tokyo University of Foreign Studies